傑殺し - The repetition of the wand of the ruler 4 -

止流うず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大人になれない英傑殺し　－　Ｔｈｅ　ｒｅｐｅｔｉｔｉｏｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｒｕｌｅｒ　４　－

【Ｎコード】
Ｎ５３４８Ｖ

【作者名】
止流うず

【あらすじ】
かつて政財界の裏に隠れ、日本国を支配していた連理貴久は、ある日、機械帝国人と名乗る異世界の住民に召喚される。
だが、召喚されたのは貴久だけではなかった。１０００人。それが貴久と同じように召喚された人々の数である。
そして機械帝国人によって、貴久たちは「覇王の塔」と呼ばれる、かつて機械帝国を崩壊させかけた魔王の将が封じられた塔への攻略を命じられることになるのである。

命じられるままに戦う者、召喚された者を集めて組織を作る者、ただただ愚直に人に従う者。
連理貴久は……

知略型異世界攻略小説。大人になれない英傑殺し　－　Ｔｈｅｒｅｐｅｔｉｔｉｏｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅｒｕｌｅｒ　４　－

はじまりの話。一参〜一壱

一参／

「お前は死ぬべきなんだ。生きてちゃいけないんだ」

辿り着いた男はそんなことを言った。

「誰も殺していないし、誰も死んでいない。怪我人は病院に運んで治す。家を失った者や職を失った者には社会保障も受けさせよう。何が不満なんだ？」

「これだけの事をやっていて、何を言ってるんだお前はッ！　恥というものを知らないのかッ！」

「京都焼失の事なら理由がある。あれは滅ぼすべき敵だった。日本に禍根を残す気か？　お前は？」

「手段がおかしいんだよ！　なんで、なんで人間一人を殺すのにッ、都市を丸ごと燃やす必要があった！　そして、そんなことをしながらもお前には一切の罪悪感がないッ！　最悪だッ！　お前こそが死ぬべきだったんだッ！」

「焼失した文化財の事を言ってるのか？　なるべくは持ち出したが、確かに残念だったな。それに復興には金を出してやる。人も動かす。国会も機能させよう。そもそも、殺すべき敵以外に、誰も死んでいない。そして、敵は人間ではない」

男は、俺を見て、信じられないような顔をした。

「人間じゃない、だと。お前は何を言ってるんだ？　お前は、おかしい。正気じゃない」

だから俺は言うのだ。分かっていない人間に。

「あれは魔王、第四世代人類殺戮型魔王【アグル・ティアコラス】。お前の幼なじみの樋上涼子ちゃんはとっくに意識なくして、乗っ取られてた。配慮してるんだ。殺す前にちゃんと検査してやったんだぜ？　つーか、勇者様。お前が倒すべき魔王を代わりに倒してやったんだから、少しは感謝したらどうだ？　放って置いたら、日本ごと炎上して終わってたんだぞ？」

「許せるものか……。……許せるもんか。許せる、もんかぁああ！」

「蜜美、やってくれ」

俺が指を鳴らし、そうして終わる。三年前の出来事だ。

―弐／

――死ぬべき人間は、誰だったのか。

その日は、飼っている猫たちに餌を与え、テレビとパソコンの電源を落とすとベッドに向かった。

観光街の多い、片田舎の地方都市。温泉で有名なその土地の片隅に構えたアパートで、俺は眠りについた。

夢は見なかった。

―壱／

【全てが終わった後の話】

【誰もが終わったと確信した後の話】

彼は帰ってこなかった。会長も帰ってこなかった。タカぼんさん、いや、連理貴久はあの時、私が彼を憎悪し、対決し、逃げ帰ったときが最後の、あの事件から出会えた、最後の機会だった。

そうだ。彼を真正面から殺害できた最後の機会だったはずなのに。私は失敗したのだ。

そして私が罠に嵌められ、強制的に元の世界に帰らされた後。彼女はひっそりと私の魂の奥へと帰って行った。

それから一週間ほどで、あちらの世界で知り合った多くの人も帰ってきた。

世間的には大事件だったけれど、彼女彼らと出会って事の経緯を聞く気にはなれず。私は誰にも会ってはいない。

きっと彼らは何も知らないから。

真相を知っているはずの人間は帰ってこなくて。

一番真実に近かった彼は、既に彼ではなくなっていて。

そもそも、私が信じていたかったあの人は、嘘をついていた。

……、ごめんなさいと言うべきだったのか。

すみませんと謝るべきだったのか。

どうでも良いと振り切るべきだったのか。

私には、何も思いつかない。

ただ願わくば。あの人が死んでいるようにと。あの人が殺されているようにと。あの人が、憎くて、憎くて、憎くて、愛おしくてしょうがないあの人が。

きっと彼に殺されたことを。深く深く祈っている。

二度と会えない、あの人。

連理、貴久。

私は、彼を裏切るべきではなかった?

一階層【堕王の天槌】？

零／

前提の話。

機械文明ソシエトは終わりの危機を迎えていた。異世界からやってきた魔王により――略――で――中略――なため、――略――が、必要であると悟ったのである。

そして機械文明ソシエトは劣勢からの挽回を期し、――略――。こうして文明を破壊することが望みの魔王ウェンディサークを倒したのであった。

本題。

俺が受けた説明は長かったのでいくつか省略させてもらうが。

俺たちが連れてこられたのが魔王の残した最後の軍基地。通称覇王の塔、知能を有する高度な機械の侵入を拒む呪術的な結界の張られた塔らしい。

そしてこの星を支配している種族が、地球での人類に当たる連中、機械文明人だ。

機械文明ソシエトの人間は機械文明人であるため当然ながら、身体が機械であるらしい。故にあちこちで突っ返した魔王軍の拠点の中、覇王の塔だけ攻略ができなかった。

別に彼らも一個ぐらいなら拠点を放っておいてもよかったけれど、魔王の連中むかつくから残党もぶっ殺しときたい。なんか他の軍基地の情報からすると将軍クラスの将官が挽回を期すために冷凍睡眠されてるっぽいし。自分たちの世界をぐちゃぐちゃにされたので、どうせなら最後まで始末しておきたい。

そういうわけで肉の身体を持つ人類を他所から持ってきて、攻略に当たらせることにする。

これ決定。お前らには拒否権ねーよ。拒否したら銃殺な。うまくいったら土産つきで返してやるよ。ついでに塔周辺の施設は自由に使え、お前らでも使えるようにしてあるから。

ということを言われて、まぁ、そういうわけであるのだ。

『ほら、こいつがお前の支給品だ』

「あ、ああ、……支給品、ねぇ」

最初に俺たちが召喚されたのが巨大なモニターの備え付けられた、大きいスタジアムほどの広さのある無機質な大広間だった。そこからぞろぞろと出てきた先にあった廊下や部屋。そこからまたいくつか歩いた先にあったこの施設の出口に近い、無人のカウンターにぽっかりと開いた穴の前に立つと、無機質な機械音声が無愛想に言葉を伝え、穴からずっしりと重いリュックサックのようなものをはき出してきたので受け取った。

受け取ったリュックサックは重い。果てしなく重い。俺が運動不足気味なのを排除するとしても、５キロから１０キロぐらいはあると思う。正直な感想は、こんなもん持ちながら行動なんかできるかよ、というものだ。

しかし不満顔をしつつもその場からすぐに離れた。俺の後ろにも大量の人間がいたからだ。そう、大量の。

別に俺一人がここに誘拐されたわけではない。老若男女、流石に赤ん坊はいないが、小学生や中年のおばさんなんかも混じっている。皆、不安そうな顔で日本人らしくカウンターに並んでいた。俺の前に支給品を貰った連中も支給品を抱えながら不安そうな顔で目の前をうろうろしている。

支給品を貰った後は個人の裁量で自由にしていいと言われているが、たった一人で行動することもできない人間が多いのだろう。そりゃそうだ。これはゲームや漫画などでよくあるデスゲームなんかとは違う。ゲームではないのだから攻略法なんかはないし、そもそ

もゲームっぽく考えられる人間なんかが都合よく身体を鍛えているわけがない。さっさと行動するより人間同士で集まって集団を作るのが一番なんだろう。

「だがなぁ」

こんなぱっとしない連中と群れて時間を潰すわけにもいかない。リュックを漁り、案の定この塔周辺の簡単なガイドを見つけ出す。俺の行動を見ていた連中が慌てて自分の荷物からガイドを取り出しているのが見えた。

荷物を確認する。こんな簡単なことも思いつかなかったらしいが、当然か。攫われて、説明を受けて、心の整理もできていないんだから。それに、そもそもなんでこんな場所にいるのかもわからんのだ。

建物から出て、あちこちを見る。建物の出口の前には、広い空きスペースと建物を外から囲む柵が見える。それと、遠くをみればよくわからない素材でできた真っ白なビルが建ち並び、整備された道路らしきものが見えた。ふと、今出てきた施設を振り返ればわざわざご丁寧に日本語で『軍司令部』と看板がある。

あまりの達筆に呆れながら手元のガイドを見、意外にこの都市が広いことを知る。

……歩くのは、嫌だな。

周囲を確認してみれば、出口の辺りに支給品を受け取り、中で群れずに外に出た人間が何人か見えた。もうグループを作ったのだろうか？　剣らしきものや銃らしきものを持ったそいつらがバス亭らしき場所に向かっていくのが見えた。

……剣に銃ねぇ。支給品なんだろうか？

というか、これだけ文明が発達しながら支給された武器は剣？兵器関係はよくわからないが、どうなってるんだろう。

首を傾げながらも施設の隣へと歩いていく。ガイドには大きく駐車場と書かれている場所だ。頼めばバイクぐらい借りれるだろうと

思ったんだが。

『車は一台レンタルで一日１０００クレジット。バイクは一台レンタルで一日５００クレジットになります』

「金を取るのかよ」

無人のカウンターから聞こえる無機質な声の姿の見えない誰かに突っ込みを入れる。が、当然反応は返ってこない。そういえば、説明をした奴もそんな感じだったな。大量の怒声やたくさんの泣き声になんにも反応を返さなかった。

諦め、ため息をつく。

しかし、レンタル制か……。

クレジットというものは、たぶんここの貨幣なんだろうが。

「ったく」

一応、リュックの中身を漁ってみると、あった。財布らしきものだ。ただ、財布の形をしているが開いてみるとまったく違う形状だったが。

札入れも小銭入れもない。ただ単純に３００００クレジットと表示されている液晶に似た画面だ。

「ちなみに、借りたものはレンタル時間が切れたらどうなるんだ？」

『超過一時間ごとに所持金から自動的に１００クレジット徴収させていただきます』

質問に返ってきた音声に少しだけびっくりしながらさっさと聞きたいことだけを聞くことにする。

「……そりゃそうか。で、クレジットの稼ぎ方は？」

『月に一度、３００００クレジットの支給があります。また、塔内部で敵を倒した証や回収した情報などを軍司令部に提出することで報奨金を得ることもできます』
「……こういう情報はどうすれば手に入るんだ？」
『施設の人工知能に聞いていただければたいていの質問にはお答えできますが』
なるほどね。なら、とりあえず。
「車を三日貸してくれ。それとレンタルの延長はどうすればいい？　またここに来る必要があるのか？」
『いえ、それでしたら宿舎からも手続きが可能です』
「宿舎？　それは、聞いてないんだが」
『ガイドに鍵が挟んでありますよ』
確かに、道路で寝るわけにもいかないだろうが、部屋が支給されているのか。こんなの言われなきゃ気づかない、ことでもないのか。
ガイドのページを捲ってみれば、確かにカードキーらしきものが挟まっていた。ついでにカードの挟まっていたページに宿舎らしき場所の地点がある。
しかしなんでガイドは紙製なんだろうか？
時間もかからないだろうし、聞くだけ聞いてみるか。
「また聞くがなんでガイドは紙製なんだ？　随分発達した文明みたいなんだが、ところどころアナクロだよな？」
車やらバイクやらは、まぁ、体の構造が違うだろう俺たちに合わせているんだろうが。どうせ外見だけそれっぽくて中身は違う気もするし。
というか、ガイドは別にパソコンやカーナビの地図みたいに液晶

っぽいので表示されていてもいい気がするが。

『……あらあら、これは』

「どうした？」

『あ、いえ』

「……？　（故障か？）」

『そうですね。クリスタル製の地図でしたら施設内のしかるべき場所で購入できますよ』

「……？　買えってことか？」

『はい』

「ならいいか。地図だけなら必要じゃなさそうだしな」

『地図だけ？』

「……、」

『……』

「車、貸してくれるか？」

『え、ええ、はい』

……なんだか未熟な奴だな。

声の出ていた場所からごろりと転がってきたキーをとり、ずらりと並ぶ２０台ばかりの車の中の一台に入る。……しかし、参加者に対して車の数が圧倒的に不足しているような気もするが。ガキやらジジババを抜かしても５００台は欲しいだろうに、でも、それにしてはさっきのバス待ちの連中は借りなかった。って、ああ、誰が金を出すか、誰がキーを持っているかでもめるのを避けたんだろうな。それに車の数が減ってきたら管理者のほうで足すだろう。たぶん。

「車の運転なんか久しぶりだな」

大学入学時の暇なときに免許をとって以来だから、二年ぶりか？

キーを入れて、ブレーキ踏みながらドライブにギアを動かして、

と。恐る恐るブレーキを離せばするすると進んでいくタイヤ。

「おー。すげー」

動いてる動いてる。やっぱ別の文明でも動くんだなぁ。とりあえず、向かうなら宿舎だろう。店に行く前に俺が買わなくちゃいけないものを知らなくてはならない。

ああ、財布を見たら３０００クレジット減っていた。ううむ、まぁ、車の供給が確認されるまではずっとレンタルしとく予定だから問題ないか。

供給について聞けばいいことに気づいたのは、市街らしき場所に出てからだった。

壱／

生命の果実、活力の果実、強腕の果実、頑健の果実、俊敏の果実、知識の果実、豪運の果実、傷薬、ポーション、ダガー、浄水器、道具図鑑……等々、ずらずらとリュックの中身を並べていく。

さて、宿舎とやらについて、大量にある部屋の中から、カードキーに刻印されていた自分の部屋の番号を見つけ、鍵を開けて中に入っていろいろ見て特に生活用品を買って来る必要がないことを知り（備え付けので十分に事足りるようだったから）、改めてリュックの中身を空けて見て、中に入っていたものをまとめてみたところ、薬だの武器だの探索用品だのが入っていた。

他にも水筒やらたいまつっぽい電灯やら回収したアイテムの解析をする装置やらなんかもあったりして、重量に見合った効果を期待させてくれそうである。

流石に重いだけはあったようだ。

さて、道具図鑑によるところの果実とやらは放っておいて、ダガーとやらを見る。

ダガー。別に小さな刃物というわけではない。少なくともナイフよりはでかいし、これで斬ったら人間ぐらいは楽に殺せるだろう。しかし、その、魔王軍とやらの兵隊はそんなに弱いのだろうか？職業軍人でも傭兵でもアスリートでもプロレスラーでもない、ただの学生だった俺がこんな刃物一本もって挑んで倒せる程度の生き物なんだろうか？　そもそも相手は、普通の生きものなのだろうか？

首を傾げながらガイドを見て、さらに首を傾げる。ううん、ああ、ただのダガーじゃなくて、刃が高速振動するから相手の鎧着てようがきちんと傷をつけたりできるわけね。……ふーん。ま、俺がそんな危険なもの持ってても扱いを間違えて自分を切りつけて死ぬだけだ。とりあえず俺自身が戦う案は却下と。

で、と。えーっと。後は、傷薬にポーション。これは使い方を覚えておこう。図鑑から傷薬、ポーションの項を開き、熟読しておく。なるほど、傷薬は傷に塗る軟膏タイプで、血止めや肉の代わりになる外傷に対する万能薬。ポーションは飲むだけで失われた体力を回復してくれる内側の万能薬なわけだ。内臓が損傷した場合も飲めば超科学（ポーション、傷薬に含まれている治療用のナノマシン）でなんとかなるらしい。（なんか機械生命体用ではなく、もともと野生動物用の薬とか来歴に書いてあるが、まぁ、奴らにとっちゃ人間なんか猿の亜種なんだろう。胸くその悪い話であるが）

で、と。次はこれか。果実（りんごやバナナ）の形をした、変な機械。食べれば人間の体を強化してくれるらしい。

ＮＡＭＥ：連理貴久
ＨＰ　１０／１０
ＳＰ　１６／１６
腕力　４
硬度　４

俊敏　3
知能　7　3
運勢　3
能力　【暴君の目】機械式五十三層封印
【暴虐の腕】機械式四十一層封印
【支配者の杖】限定解除一部使用不能
【魅了の魔眼】レベル3　種族：人間　種族：下等機械人種族：魔族　にのみ有効
【いつか見た景色】機械式八十八層封印
【レベル制限】稼働中
【経験値非効率】稼働中
【■■■■■■■】機械式≪絶招≫封印

ちなみにこれがガイドに挟まっていた俺のデータだ。果実を食えばデータにある数字部分の値が上がるらしい。なんというか、元の世界にあったゲームみたいな奴で全く機械文明らしい、現実味のないスペック表示である（とはいえ、このデータもいろいろはしょってる。もっといろいろ数値があったが、到底俺に理解できるデータじゃなかった）。

あと、こっちの能力とやらは、なんか、封印が多すぎる。しかも中学生が考えたような名前の能力が多すぎるし。……使い方がわからない以上放っておくしかないが、経験値非効率とか、レベル制限とか、これは俺だけなんだろうか。先を想像すると憂鬱になる能力名だ。更に黒字で塗りつぶされてるのを見ると沈むしかない。

使える奴は練習すりゃ、武器になるんだろうかね？　種族：魔族ってのは今から向かうだろう塔の中で有効になるのか。首を傾げつつ、とりあえず果実を一個食ってみることにする。

当然、豪運の果実だ。

ＨＰやらＳＰやらは戦わないと決めた俺には関係ない。身体の硬さや俊敏、知恵だの腕力だのも、関係はないだろう。もちろん、喰

えば有利になるだろう代物だし、たぶんこれは、俺たち人間がまともに戦えるようにするために調整するための品だ。恐らく、喰わなければ今後死ぬような目に遭うんだろう。
しかし、だからこそ、今は喰わない。

「まずくは、ない、な」

むぎゅむぎゅと生で食ってみるものの。豪運、というわりには味はしょぼい。美味くない。不味くもない。

「身体に、変化は。ないな」

尻尾が生えたり耳がでかくなったり鼻が取れたりする様子はないようである。目に見える変化がないことに不安と安心を同時に感じる。支給品ってことは多分効果はあったんだろうが、運とやらはこれであがったんだろうか？
残りの果物はリュックに仕舞い、武器屋やら道具屋やらに向かうことにした。そういえばどうして、軍施設なのに武器屋に道具屋なんだろうか？
なんとなく釈然としないものを感じながらもリュックを持って車に向かうことにした。
それと周りを見てみたが宿舎を利用しているのは俺だけらしい。他の連中は何をしてるんだ？

弐／

施設の中でも武器や道具を扱っている部類の店に入る。恐らく探さなければ見つからない名店とやらもあるような気がしないでもな

いが今はガイドに記された店に向かって進むことにした。俺の予想通りならガイドに載っている店に、今しか買えないものがあるからだ。

それがどのようなものかはだいたいわかる。だからこそ、時間が惜しい。

あとは、それがあるならばきっと俺が薄々抱きかけている想像は、的外れじゃないことの保証にもなる。

車を運転しながら道具屋に向かって進む。回りを見てみるが人がいない。どういうことだ?

ガイドに載っている、塔攻略の為に利用が推奨される装備と消耗品の販売店。【道具屋】と【武器屋】。

ガイドには、この店が推奨されているのだから殺到するとまではいかないが、数人、数十人は押しかけていてもおかしくはないはずなのに。

疑問を抱きながら、バックに失敗しながら車を駐車場に停め、道具屋の看板を掲げている店に入っていく。

「また、カウンターだけ……。機械文明人はいないのか?」

別に爆弾の入った首輪を嵌められているわけではないが、これだけの施設を用意した連中だ。塔を攻略しなければ開放してくれることはないだろう。もしかしたら一生このまま、なんて可能性を考えて鬱な気分になる。

努力。友情。勝利。諸事情から友情は抜かすことにして、小細工でいけるところは小細工していくべきだった。

『いらっしゃいませ。何をお求めでしょうか?』

店に並ぶ、見本品の入った指紋ひとつないガラスケースっぽい何かや、壁際に並ぶ自動販売機などを流し見て、六つあるカウンター

のひとつに向かい、腰かけた。ここに来るまでに何回かあったように、カウンターにはスピーカーと、物の受け渡し用に四角い穴があるだけだ。

座るとすぐ、スピーカーから音声が流れてくる。

人工知能？　それとも機械文明人だろうか？　聞いても素直に答えてくれるとは思わないが、好奇心には逆らえない。

「人工知能か？」

『はい。ワタクシはこの道具屋【リフレッシュ】の店長を勤めますＤＸＹ－０９３５と申します。どうぞよろしくお願いいたします』

「うん。連理だ。タカぼんとでも呼んでくれ」

『はい。タカぼん様』

「早速で悪いが、カタログを見せて貰うぞ」

『はい。こちらになります』

カウンターにある穴からばさりと落ちてきた本を手に取る。

「結構、多いな」

『そうでございますね。１０５，３６３種類の探索用アイテムが当店にはございます』

カタログはそこそこの分厚さがあった。

傷薬をざっと見てみただけでも。

傷薬（軟膏）　１，０００クレジット
傷薬（錠剤）　１，０００クレジット
高級傷薬　１２，０００クレジット
傷薬@ハイエンド　２６，０００クレジット
傷薬≪始まりの庭≫　３８，０００クレジット
傷薬≪骨拾い≫　３８，０００クレジット

傷薬≪世界の終焉≫　３８，０００クレジット

ポーションなんかも。

ポーション　６，８００クレジット
アップルポーション　１２，０００クレジット
オレンジポーション　１５，０００クレジット
パインポーション　２０，０００クレジット
ネクター　３０，０００クレジット
マジックポーション　５０，０００クレジット
ポーション≪終焉の理≫　１５０，０００クレジット
ポーション≪断絶の使命≫　１５０，０００クレジット
ポーション≪炎上せし宇宙≫　１５０，０００クレジット
ポーション≪融合する世界≫　１５０，０００クレジット

というか、高いな。高価すぎる。

「これは、購入できる品なのか？」
『どういった意味でございましょうか？』
「俺たちは、これを購入できるだけ金を稼げるのかって意味だ」
『購入資金に不安があるようでしたら軍司令部で特別任務を受けてみたら如何でございましょう？』
「特別任務？」

任務？　ますますゲームじみてきてる。何故任務なんだ？　ノルマや労働と言ってしまえばいいものを。

『未だ到達階層のない段階ですから任務数は少ないでしょうが、ただ敵軍の情報や物資を回収するよりかは報酬が得られるでしょう。それに特別任務の受注は先着順ですが、今は誰も受注している様子

はないのでタカぼん様がお好きな任務を選べると思いますよ』
「……まだ？」
どうしてか、相変わらず店に人が入ってくる様子はない。何か俺が見落としていることがあるのだろうか？
「他の人間は何をやってるんだ？」
『他の方、ですか？　少々お待ちください』
カタログを眺めながら応答を待てば、店長ＡＩは得心したように映像を壁に映し出した。
「軍司令部に人が集まってるな。バスにも乗らないで何をやってるんだ？」
『そうでございますね。声を大きくいたしましょうか？』
「頼む」
なんだ。もう集団ができてるのか？　見れば、さっきのバス待ちの連中が見えた。結局、乗らないで他の人間の推移を見ることにしたらしい。
俺も宿舎に向かわないで軍司令部に戻ればよかったのか？

参／

糞ッ。なんなんだこいつら。俺は隣にいる幼馴染と顔を見合わせ、うめき声を小さくあげた。
「よし、全員の支給品を集めるぞ。隠すな！　隠すとためにならんからな」

剣を持ったおっさん連中が、集まっていた参加者連中からリュックを奪っていく姿が見える。軍司令部の入り口はおっさんたちが並んで封鎖している。バス亭らしき場所にいた連中も追い立てられ軍司令部の塀の内側に入れられてしまっている。

「機械文明人は俺たちが塔とやらを攻略すれば開放すると約束した。しかし、だ。よく考えてくれ。

私たちのような大人の男や運動能力の高い若者を除いた女子供や老人が、武器を手に持ち、敵を倒すことができると思うか」

横暴だが、その通りの言葉を聞かされ、ざわざわと困惑したような表情があちらこちらにうろついている。

何が言いたいんだ。この人は。

「現実は遊戯ではない。現実に剣やらナイフを持って戦うことができる人間など一握りに過ぎない。君たち、武器を持ったことがあるか。生き物を殺したことは？

ないだろう？　君たち民間人がそんなことができるわけがない。戦闘は兵士や武将が行ってきた。当然、持ってた武器もこんなちゃちな、安っぽい刃物ではない。大ぶりの刀に鍛え上げた拳だ。

そして、機械帝国人は、非道にも君たちにこんなガラクタを持たせて戦え、と命令してきた。

拉致をし、説明は不十分、脅しに脅しを重ねた上の驕慢！！

このような屈辱を許しておけるものかッ！　このような侮辱に耐えられるものかッ！

ああ、我々がッ、君たちがッ、無慈悲な機械文明人に従う謂われなどない！！」

ざわざわと響いていく声。広がっていく理解。中には同意の声を

上げている奴もいる。
ああ、そう。そうだ。そうだよ。俺たちが武器持って戦うなんておかしいよな。絶対におかしい。
肩に担いでいた支給品の重さを思いながら言葉に頷く。そうだ。そんなの、絶対におかしい。俺は、こんなものもっていたくない。家に、帰りたい。
見上げれば、演説をしている細身だが、頼れそうな雰囲気の男は、更なる言葉を続けていく。

「だが、だ。従わないことは私たちの命がなくなるということだ。家族のいるものがいるだろう。友人のいるものがいるだろう。家に、帰りたいだろう？
ここで従わずに反乱を起こしたとしたら、無事私たちは帰れないだろう。少なくとも、多くの戦えない人々は死ぬ。
最悪、全滅するかもしれない」

悲観的な内容。悲観的な空気。演説を聞いていた周りの人たちも沈んでいく。そうだった。この異世界に連れて来られて暴れなかったのは、抵抗しなかったのは、支給品を受け取ってしまったのもすべてはそのせいだ。最初の説明のときを思い出す。機械の声によって造られた硬質な、冷たい空気。弱者の本能が感じた、逆らえない気配。
やつらには逆らえない。
そうして、みんなが感じている無力感や絶望で、空気が澱む中、演説していたおっさんが小さく頷いた。

「だから、全滅を、死ぬことを避けるためにも塔を攻略しなければならない」

そして、大きく声を張り上げた。

「だからだ！　私たちは戦える男を集めた。ここにいて剣を持っている連中だ。女子供に戦わせられないと立ち上がった兵（ツワモノ）だ。

……私たちには、命の危険があるだろう。腕や脚を失う不具の人生が待っているだろう。それでもだ。女子供には戦わせられん！　私たちが戦う。そうしてお前たちを日本に返してやる！！　約束しよう！！　お前たちの代わりに戦う人間がいることを！！！」

ああ、と言葉が漏れる。心の底から信頼できる人間に対する感謝の念があふれていく。

尊敬できる人がいる。尊敬するべき大人がいる。大人が、大人としての義務を果たしている。

俺は、自然とリュックに手を伸ばしていた。

隣の幼馴染にも手を差し出す。あの人たちに余計な手間をかけさせるわけにはいかない。

「ひ、ひぃくん？」

「茜。支給品、渡しに行こうぜ」

「え、と」

「鈍いなぁ。あのおっさんたちは支給品を渡せば代わりに戦ってくれるって言ってるんだよ。いい人たちだよな。尊敬できる大人だ」

「え、っと。ひぃくん。あの、」

「支給品、渡しにいこうぜ。ほら、他の人たちも行ってるし」

周りを見ればリュックを持っておっさんたちのほうに向かっていく人がぞろぞろいる。主婦っぽい人や、そいつらに連れられたガキどもだ。老人連中も中にはいる。少な目に見ても、五百人を超えていた。中には周囲の支給品を集めて、代表して持っていく人たちもいる。

俺の想像を裏付けるように周囲の人々も動き出していた。

すごい行動力のある大人がいるものだと感動していれば、幼馴染が隣でごそごそとやっていた。
あきれた声が出てしまう。何をやってるんだこいつは。

「茜？　何出してんだ？」
「え、あ、うん。ちょっと私物入れてたから、取り出してたの」
「何をしてるッ！　支給品は皆のものだぞ！！」
「え、ああッ。す、すいません」

ごそごそとやっている茜を黙って見ていれば武器を持ち、支給品を回収しながら歩いていたおっさんが怒鳴ってきたので茜に先んじて慌てて謝罪する。ごそごそやっていた茜と一緒に、私物を入れていたことを説明したらその人もなんとか怒りを納めてくれた。

「まったく、しょうがないな。私が君たちの支給品を持っていってやろう」
「あ、本当ですか。ほら、茜。お願いしようぜ」
「え、あ、う、うん……」

その人は気にするな、と笑顔で言うとほら、と手を差し出してくる。俺は自分の支給品を。茜はゆっくりと、まるで抗うかのように、支給品を胸に抱えかけて――

「どうしたんだ？」
「なん、でもないよ？」

俺の疑問には答えず、ゆっくりと差し出した。
おっさんはふん、と鼻を鳴らし。俺は、手間をかけさせてしまったことに、自然と頭を下げていた。

「ありがとうございます。ほら、茜も」
「あ、ありがとうございます」
「いい、いい。だが、今後は不審な行動を取るなよ。こんな状況で俺たちも気が立ってるんだからな」
「はいッ。すみませんでした！！」
「す、すいませんでした！！」

再び、いい、いい、と言いながらおっさんは回りの人たちからも回収した支給品を重そうに持って、演説してるおっさんのほうに向かっていった。

「ど、どうしよぅ」
「茜？　どうした？」
「……な、なんでもない」
「私たちは団結してことに当たる。戦えないものが戦えるものの世話をし、戦えるものが優先して戦う。子供老人ではなく、俺たちが戦う。君たちはそのサポートをしてくれるだけでいい。
まずは支給品を有効活用するために集め、食糧衣服住居も全体に配給するよう組織を作ろう。規則なども決めていく予定だ。当面は不自由をかけるだろうが、皆よろしく頼むぞ」

最後に、おっさんが俺たちに頭を下げる。そうして、自然とぱちぱちとあちこちから音が聞こえ始めた。拍手の音だ。俺も手を合わせて、叫ぶ。

「頼んだぞぉおおおおお！！！！」
「おおおお。武満将軍！　万歳ッ。ばんざいぃいいいいい！！」
「任せたよッ！！」
「みんなのためにもねッ！！！」

拍手の音があちこちから聞こえ、大きな大きな歓声がいっぱいに広がった。

皆の顔に笑顔が戻る。こんなところに急に放り込まれて不安だったけど、なんとかなるかもしれないって希望が溢れてくる。

歓声や笑顔が周りに満ち、未来に展望が開けてくるのが理解でき、人間は絶対に負けないのだと。

そう、信じられた。

肆／

「あ、あはは、あっはははっはははははははっはははははは。ば、馬鹿だ、馬鹿が大量にいる。く、く、くくくくく。あはははははは」

ダンダン、と音を立ててカウンターを叩く。腹が、よじれ、よじれ、あはははははははは。

すげー。あの演説してるおっさん連中すげー。支給品一気に全部奪いやがった。３０人ぐらいの集まりで。だいたい９００人ぐらいから。

で、そいつらの支給品を３０人で均等にわければ。

「一人支給品３０セットか。うわぁ、うまいことやるなぁ」

しかも同時に反抗しそうな連中から戦力を一気に奪っている。

笑うしかない状況だ。

「いやぁ。どうすっかねぇ」

こりゃ、まともな手段じゃ対抗できないだろう。争う必要はないが、あれの組織に入る必要も認められないからだ。

それは単純な話で。

（食いつぶされるのは御免だな）

誰かの下は性に合わないのだ。

「うん。店長」

『はい。如何なさいましたか？』

「護衛って雇えないのか？」

『護衛、ですか？』

「ああ。俺の代わりに塔内部で戦える奴だ。ここのカタログにはないが、施設内には何かしらそういうものがあるんだろう？」

『……そう、ですね。ございますが』

やはり、な。予想通りだったことに頬が緩む。同時に、ひとつの考えが浮かんだがそれについては置いておく。

「うん。どこで雇えるんだ？」

『ここでございます。正確には護衛や傭兵ではなく、ＡＩ搭載型の肉人形でございますが』

「量産できない。命令を聞かないと複雑な行動ができない。そういう奴か？」

『ッ……？！』

「うん？　それとも実験の結果たまたまできた実験兵器ってところか？」

『これは、驚きましたね。そうです。三体しか生産できなかった肉人形が当店に一体ございます。それと、隣の武器屋にももう一体』

何に驚いたのかはわからないが、頷いておく。問題は値段だが。

「残りの一体は？」
『軍司令部の特別任務の報酬に』
「そうか。で、値段は？」
『７，５００，０００クレジットになります』
「……高いな」
『とはいえ、性能は折り紙付きでございます。一階層だけならなんら改造をしなくても一体もあれば進めるでしょう』
「なる、ほどな。つまり買われるとまずいわけだ」
『は、はぁ？　それでもワタクシに質問された方にしか売れない仕様となっていますが？』
「聞かないわけがないだろ。誰だって傷は受けたくないからな。よし、買った」

あっちの集団だったら高いが、買えない値段じゃない、という奴だろうしな。それに三体しかないなら買うだろう。確実に。

『はぁ？　タカぼん様の所持金では足りませんが』
「果実類をここで売る」

ちなみに、果実類は購入できる。糞高いが。
店にあるリストを覗くと。

生命の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
生命体の結晶　５，０００，０００クレジット【残０１】
活力の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
技能力の魂魄　５，０００，０００クレジット【残０１】
強腕の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
豪腕の熱血　５，０００，０００クレジット【残０１】
頑健の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
鋼鉄の魂　５，０００，０００クレジット【残０１】

俊敏の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
神速の瓶薬　５，０００，０００クレジット【残０１】
知識の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
深遠の紙片　５，０００，０００クレジット【残０１】
強運の果実　１，０００，０００クレジット【残１０】
豪運の果実　５，０００，０００クレジット【残０１】

これだけが現在購入可能なステータスアイテムらしい。
そして、【残】があるということはつまりこれも生産できないアイテム類か、それともこれを作るのに費用が馬鹿みたいにかかったということなんだろう。確かに、生命を無理やり強化するんだ、それなりに手間が掛かるはずだ。
それとも制限したい何かがあるのだろうか……。

「売値はいくらだ？」

売値も今までのシステムやアイテムの形から予想はつくが。

『パラメーター上昇系アイテムの売値は買値の半額になりますが……。もしかしますと、もしかしますか？』

やはり、な。

「うん。知識の果実を一つ残して残りは全売りだ」

鞄からごろごろと色とりどりの果実を取り出していく。全部で３１個だ。

『１５，５００，０００クレジットになりますが？　よろしいのでございますか？　一度売ったら恐らく当分は買い戻しできませんが

？』

「うん？　そのためにわざわざパラメーターのアップをこちらが判断して行えるようにしたんじゃないのか？　その、肉人形たちも同様だろう。クレジットを稼げる人間に効率的に稼げるようにするための代物じゃないのか？　もちろん、俺みたいな人間がいることを予想して、初期の支給品を売り払えば買えるように調整してある。……あと、果実類は時間が経てば補給されるってことも予想済みだ。それともここにつれてこられた人間が死ねば補給される仕組みになってるのか……」

最後は独り言になってしまったが、人工知能らしき店長は納得したようだった。

『そうですか。そこまでお考えになったのならこちらからはもう言いません。もちろん、その考えの成否はタカぼん様に実感していただくしか回答を提示できませんが。

果実類の補給については週に１度、果実が１０個、その上位アイテムが１個補給される仕組みとなっております。もちろん、人もそのときに１００人ずつ補給する予定でございます。

では、こちらが１５，５００，０００クレジットとなります。肉人形を買われますか？』

「ああ。頼む。あと、これも」

『ええ、この様子では必要でしょうね。承りました。少々お待ちください』

あの集団のせいで面倒なことになった。宿舎が使いにくくなったな。

うん、宿舎ならば飯が出るんだが、どうすべきか。

考えていると、ガタリ、とカウンターに人間大の穴が開き、そこから静々と人間らしきものが現われる。肉人形、その言葉の正しい

ゲテモノのような生物兵器。その物体は俺が頼んだもう一つの品を俺に向かって掲げ、歩いてくる。

「肉人形とは、言ったものだな……」

『造型用のチェーンキットは別売りになってますので。お値段、お聞きになりますか？』

「あ、ああ。……いや、まだいい」

金もないんだから。しかし、何も言わない人の形をした肉の塊を見て、俺は首を傾げるしかなかった。一体、何を考えて機械文明人はこれを作ったんだろうか、と。

一応の説明書きを見てみれば、なるほど、こいつらの構造は俺たちとほぼ同じらしい。機械ではなく、肉の脳を搭載している。ああ、だからこそ、そこそこの知能を持ちながらも塔に入れるんだろうな。

【連理貴久　は　肉人形　を手に入れた！】

ＮＡＭＥ：肉人形二号

ＨＰ　２００／２００
ＳＰ　１００／１００
腕力　３０
硬度　３０
俊敏　３０
知能　１０
運勢　０
能力　【自己再生】
　　【進化型人工知能】

「よし、手に持ってるものを寄越せ」

「……」

無言で差し出してくる肉人形。うん、言葉も覚えていないようである。というより発声器官がないんだろう。

それでも知能はあるのか、手を差し出せば肉人形は俺に携帯電話に似た機械を手渡してくれる。

指で画面を触ってみれば反応するらしく、ぽちぽちとアイコンを押して操作を確かめ、慣れたところで操作を始める。

アクセス、軍司令部、特別任務閲覧。

これは３００，０００クレジットと高めだったが、この都市のいくつかの施設に遠隔でアクセスできる携帯端末だ。今の軍司令部には近づけない。あの施設の探索ができなかったのが残念だが、恐らくあいつらは当面、あそこを拠点にするに違いなかった。今行ったら捕獲されて財産没収されるだろう。

多少の待ち時間と共に特別任務が表示される。

任務名　塔内部探索一階層
依頼者　機械軍団総司令
詳細　塔内部の探索を頼む。
しかし、貴様らの義務じゃな。わしが依頼すべきことではない。
つまりこの依頼を受けられたものは幸運だということじゃのぅ。
ワッハッハ。
報酬　１０，０００クレジット
傷薬３個
特記事項【先着一名まで】

任務名　塔内部機密文書回収
依頼者　機械帝国諜報部部長

詳細　塔内部にある機密文書の回収をお願いします。
とりあえず現段階ではなんでもいいです。
地図や作戦の書かれた文書など発見できればボーナスをつけます。
報酬　２４，０００クレジット
エーテル１個
特記事項【先着一名まで】

任務名　塔内部モンスター討伐
依頼者　機械軍団第一軍団長
詳細　塔内部の敵軍の討伐を頼む。
そうだな。一番弱いゴブリン連中を３０体ばっか倒してきてくれ。討伐の証拠は連中の階級章を提出してくれればいい。
異世界の戦士よ。期待しているぞ！！
報酬　３０，０００クレジット
筋力増強剤１個
特記事項【先着一名まで】

任務名　貴重素材を入手してほしい
依頼者　機械軍団第二軍団長
詳細　……コボルトの脊髄に稀にできる、……輝石の回収をお願い。
報酬　４５，０００クレジット
魔力増強剤１個
特記事項【先着一名まで】

「これで、いいのか？」

とりあえず四つあったので全部の依頼を受けておくことにする。

「……ん？」

俺が依頼した後に、依頼の部分に受注者有りとロックがかけられた。どういうものなのかと思い、操作してみるが、これ以上の受注ができないようになっている。

なるほど、これも目端の利く人間に優先的にクレジットを回すための仕組みか。

『タカぼん様』

「うん？　どうした店長」

『肉人形のユーザー登録をしておいたほうがよいかと存じます。無登録では盗難にあうでしょう』

「盗難……」

黙って静止している肉の塊を見て首を傾げた。こんな大きなものを持っていく人間がいるのか？　と考える前に結論。

まぁ、いるわな。連中、車だって盗む時代から来てるんだ。

「どうすればいいんだ？」

『タカぼんさんのＤＮＡを与えればそれで所有者と認めますでございますよ』

「店長って時々変な喋り方するよな。というか、……こんな肉の塊じゃなきゃどっかのゲームみたいな設定方法だな」

ゲームと言って、ふと、辺りにあるものを眺める。

ゲーム……？　何に似てると思えば、そうか、……。

とはいえ、こんな肉の塊にキスやらエロエロなことをする気にもならないので手に唾液を吐き出して顔面に擦り付けてやった。

『本人登録が確認されました』
「ああ、ありがとう。じゃあ武器屋にも向かってみるわ」
『はい。ありがとうございました。またお越しください。タカぼんさん』
「うん。またな」

武器屋でも同じやり取りをして肉人形を一体入手する。ついでに武器をいくつかとそこそこの防具を買っておく。全財産をはたけばそれなりのものが買えただろうが、初日で素寒貧はまずい。安めのを見繕う。ついでに肉人形にも買って、装備させておく。

【連理貴久　は　肉人形　を手に入れた！】
【連理貴久　は　装備　を整えた！】

ＮＡＭＥ：連理貴久
ＨＰ　１０／１０
ＳＰ　１６／１６
腕力　４
硬度　４
俊敏　３
知能　７
運勢　１３
能力　【暴君の目】機械式五十三層封印
【暴虐の腕】機械式四十一層封印
【支配者の杖】限定解除一部使用不能
【魅了の魔眼】レベル３　種族：人間
種族：下等機械人　種族：魔族　にのみ有効

【いつか見た景色】機械式八十八層封印
【レベル制限】稼働中
【経験値非効率】稼働中
【■■■■■■】機械式≪絶招≫封印

装備
右手武器：バッククラー
左手武器：ボウガン
頭装備　：レンジャーゴーグル
胴装備　：レンジャースーツ（上）
腰装備　：レンジャーベルト（予備ボウガン有り）
足装備　：レンジャースーツ（下）
アクセサリー１：携帯端末
アクセサリー２：強運の指輪

ＮＡＭＥ：肉人形二号

ＨＰ　２００／２００
ＳＰ　１００／１００
腕力　　３０
硬度　　３０
俊敏　　３０
知能　　１０
運勢　　０
能力　【自己再生】
　　【進化型人工知能】

装備
右手武器：ロングソード

左手武器：ヒーターシールド
頭装備　：ナイトヘルム
胴装備　：ナイトアーマー（上）
腰装備　：ナイトアーマー（下）
足装備　：ナイトアーマー（下）
アクセサリー１：強撃の指輪
アクセサリー２：強撃の指輪

ＮＡＭＥ：肉人形三号

ＨＰ　２００／２００
ＳＰ　１００／１００
腕力　３０
硬度　３０
俊敏　３０
知能　１０
運勢　０
能力　【自己再生】
　　【進化型人工知能】

装備
右手武器：ロングボウ
左手武器：バックラー
頭装備　：弓師の帽子
胴装備　：弓師の服（上）
腰装備　：ツールキット
足装備　：弓師の服（下）
アクセサリー１：命中の指輪
アクセサリー２：回避の指輪

伍／

さて、まず向かうべきは塔か。

依頼はさっさとやった方がいい。待っているのは軍団長であるし、受けてから時間が経ちすぎれば違約金以上のものを取られそうだからだ。

（そもそも違約金など発生せず、ばっさりとやられるか。次から依頼を受けられないか。どちらかだよな）

施設内を車で移動しているが人通りは全く見えない。二人か三人はあの集団から逃れられたと思ったが、そうでもないのか？　流石に独力で組織立った人間達と争う気力はないぞ。

「……お」

車道に隣接すると歩道を、とぼとぼとリュックを背負った女子が歩いているのが見える。

一目見て、だいたいの年齢を把握する。高校生ぐらいだろうか。雰囲気や容姿から卑しさは見受けられない。顔は、１０人いれば１０人ぐらい振り返りそうな、美少女らしい美少女だ。

速度を落とし、歩道に車を寄せようとするとあちらも気づいたのだろう。まるで人間に初めてあったかのようにぱぁっと表情が明るくなった。

片手にガイドを持っていることと方角から推測するに、どうやら武器屋と道具屋を目指しているようだった。

なぜわかるのかと言えば、ガイドに載っているのは、武器屋と道具屋だけだからだ。

ちなみに、軍司令部のある地区と武器屋のある地区の間には宿舎やホール、倉庫などの施設が並んでいる。恐らく規模から言ってこの都市全体で１０，０００人程度の人間が生活できるようになっているはずである。

しかし、なんでバスを使わなかったんだろう。車を運転できる年齢には見えないが、それでも歩くより早いだろうに。

疑問に思うが、それで少女が組織に入らないならまぁ、それはそれでいいだろうと思われた。

「お、支給品持ちか」
「？　……あ、あの」
「うん？」
「武器屋ってこっちで道あってますよね？」
「あってるよ。真っ直ぐ進めば着くな」
「そうですか」

ほっと息をついた少女がよし、と両手を握って真っ直ぐ前を見て歩いていこうとする。とはいえ、車で道なりに進んできたから徒歩だったら二十分はかかるかもしれない。

「まぁ、待て待て。歩いたらそれなりに時間がかかるぞ」
「えっと」
「送ってやるよ。乗ってけ」
「はぁ。あの……」
「ていうか、送ってやるからちょっと俺の話を聞いてくれ。まずいことになってるんだよ」
「……えっと、」
「お前さんにも関係のある話だから。聞いたほうがいいぞ」

送ってやるとか、話があるという俺の言葉で警戒心を露にしてい

た少女が、最後の言葉でちょっと興味を惹かれたようだ。

「ついでに周りに人がいない理由も教えてやるよ。気になってるだろ？」

「そういえば……」

きょろきょろと辺りを見回した少女は自身が歩いてきた道を見て、誰もいないことを確認して、首をかしげた。

手元を操作して助手席を空けてやる。

この車は四人乗りで、形状は軍用車両というよりは軽自動車で、一般的なマイカーだ。理由は恐らく電灯がたいまつっぽい形をしていたのと同じ理由だろう。それと、後ろの席に肉人形が二体乗っている。

さて、肉人形は入手できたが、とにかく俺が戦わなくていい状況を作らなくてはならない。

こういう形でほかの人間を上手く取り込む必要があるのだが、うまく説得できるだろうか？

「あの、その後部座席のその、気持ち悪いのって」

「ん、ああ、気にしなくていい。武器屋で買った俺の武器だから」

「はぁ……。武器、ですか？」

「自動で動く肉の塊だ。武器を人間より上手く扱ってくれる」

そこまで言って、ようやく納得したらしい。たぶん元の世界にあったゲームか何かを想像したんだろう。学生なら、そういった面で理解は早い。

「あの、それじゃ、その、よろしくお願いします」

「はいよ。まぁ、乗ってけ。で、話を聞いてけ」

「……はぁ。はい」

周りを見ても人通りは少ないというより、存在しない。不気味さえ感じるが理由がわかってる以上、不気味さより俺の中では不安が沸いた。

しかし少女にしてみれば、理由がわからない以上、不安と不気味さが同時にわいてくるものだったのだろう。こんな怪しい状況で、怪しい人物についていく。現実の世界ではありえないことだった。

俺がそう仕向けたとはいえ、異常な事態の持つ異常な力は、侮りがたい。

しかし、だからこそ、あのおっさん連中はああもたやすく人々を掌握できたのだろう。

陸／

「と、そういうわけだ」

車を運転しながら先程の軍司令部での件を教えると少女は眉をしかめ、唸る。

「戻ったほうがよかったかな……」

「支給品取られるぞ？」

「それでも守って貰えるんですよね？」

「奴らが善人だった場合はな。それでも一ヶ月ぐらいが限度だろうが……」

「疑ってるんですか？　同じ日本人なのに」

「疑問一。奴らは最初、力を使って支給品を回収した」

「……それは。でも、必要だったからじゃ？　最後は言葉だったんですよね」

頷いておく。嘘をつく必要はないからだ。
代わりに言葉だけ続けておく。

「疑問二。この都市では管理側が既に存在している」
「……？　それが何か？」
「あいつらが組織作っても組織内のルールが外部になんら意味がない場合が出てくる。折衝して余地を作れるかもしれないが、作れない可能性もある。その状態で支給品を、財布も含めて預けるのはリスクが高い。管理側が組織の存在を認めずに、個人個人にノルマを規定した場合、最悪丸裸で組織から放り出される可能性がある」
「あッ。そうですね。でも、個人個人にノルマを与えるんでしょうか？」
「成績が悪ければ殺されても文句は言えない気がするけどな」
「……？　理由を聞いても」
「週に一度人間の補給があるらしい。１００人ずつ」
「だから人間が極端に減る事態が起きても不思議では、ない？」
「ああ、それに」
「それに？」

少女は首を傾げて俺の言葉を待っている。いまどきのくせに素直な娘だなぁ。

「疑問の三だ。やつらは善人に見えなかった」
「人を見る目、あるんですか？」
「ないが、手口がどうにも強引すぎてな。善人はもう少しもたつくもんだし。九割九分の人間から支給品を回収した様子を見るに、下手に抵抗するとまずい人種のような気がしてならん」
「つまり、……何が言いたいんです？」
「職種はわからんが、連中、たぶん人から物やら金を日常的に奪っ

てる人種だろう。推測だが、支給品を奪う動きに迷いがなかったしな。……強引に事を進めずに演説を混ぜたのは労働力も同時に欲したからだとも思う。そんな中に今更のこのこ入るのは嫌な予感しかしない」

二人、しばし無言になる。想像力というのは嫌なものである。

「……、続けてください。なんとなく貴方の言いたいことがわかってきました」

「で、だ。宿舎に戻るのはちょっと危険だ。車も今更手放せんしな。幸い、もたつかなかったおかげで最初に道具屋と武器屋を使えるって特典も得られた」

「はい。後ろの肉人形って武器を見れば、なんとなくわかります。こんなものが最初からあるなら全員に配ってるはず。つまり、個数が限定されてるんですよね」

「ああ、施設内じゃ三つしかないらしい。組織には、抗う必要があるだろうな。少なくともあの組織は信用できない。もちろん、君が俺を信用する必要もない」

「……、だけど」

「が、だ。ちょっと当分一緒に行動してほしい。少なくとも俺たち両方が組織に単独で対抗できる程度に管理側の知名度を上げられるぐらいにな」

「信用できるんですか？」

「信用するしかないだろう。というより、ちょっとな。いろいろと推測できることがあった」

俺は、携帯端末をポケットから取り出して少女に渡す。

「……そういえば、いろいろ道具持ってますね。どうしたんです？支給品に含まれてたんですか？」

「いや、買った。おかげでパラメーターを上げそこなったが。幸い肉人形を買えたからな。当分は上げなくても大丈夫だろう」
「パラメーター？」
「リュックの中に果物が大量に入ってるだろう。それを食べるとパラメーター、っていうとゲームっぽいが、身体の性能があがるらしい。っと、これの軍司令部特別任務の欄を見てくれ」
「えっと、操作は？」
「操作方法は携帯みたいなもんだ。画面に触ればいい」
「あ、はい。軍司令部、特別任務……できました」
「ゲームやったことあるか？　ＲＰＧとかアクションとか」
「まぁ、人並みには」
「まだ実感わかないだろうがな。アイテム、武器、道具類がな。そのゲームっぽい。パラメーターなんかもその一端だが」
「どういうことですか？　結論をお願いします。よくわかりません」

俺も推測でしかないし、確証も物証もないんだが。この推測をぶちまければ少なくともこの少女を取り込めるかもしれん。
不安にさせて、希望を見せれば飛びついてくれる、とは思わんが。助けてくれといえば助けてくれそうな雰囲気はある。単純な言葉遊びだが、こんな状態ならプライドなんぞ安売りしとくに限る。
運転中なので少女の方を見ずに言葉を続ける。

「つまり、遊びが多すぎるってことだ。別に今俺たちが、昔の映画にあったみたいに、なんかよくわからん電脳世界に取り込まれたってわけじゃないぞ。機械文明は本当に存在していて俺たちは本当に拉致られたっていうほうがちょっと現実味ないが、機械文明は本当にあるっていうほうが、俺たちには都合がよくなる。いや、どっちでもいいのか。とにかく、この環境は遊びが多すぎるってことだけ理解してくれればいい」
「はぁ。って、言われてもちょっとわからないんですけど」

「手元に支給品の武器あるか？」
「ええ、あります」

そろそろ着くか。
見れば駐車場が見える。車の駐車スペースと実際に存在している車の量があってないが。やはり後から増えるのだろうか？
考えながら駐車場に車を停めるべくギアをバックに入れた。
ふと隣を見れば少女が俺の言葉を待っている。思い出したように言葉を続けた。

「それを見てどう思う」
「えっと、剣、ですよね」
「そんなもんでどうやって戦えって思わないか？　機械文明でどうして支給品に銃がない？　どうして剣なのか。ちなみに、ただの剣じゃなくて超科学でできてるっぽいぞ。それ」
「言われて見ればそんな気もしますけど。でも、そこまで考えることですか？　なんか、妄想に妄想を重ねてる気がしますけど」

確かにその通りだ。蒙昧な妄想に無知な幻想を重ね合わせた結果が俺の論なのかもしれない。
そういえば、最初に見た連中の中に銃を持っている人間がいたが。あれの威力はたぶん制限されているものだと思われた。一人が有利すぎるのも考え物だからである。それとも支給品にも当たり外れがあったのか。
呆れた表情の少女に俺も、わざと呆れた顔を作って説明を続けた。自嘲は、あまり含めない。

「そんな妄想に縋らなきゃいけない状態なんだよなぁ。正直。君さ。むさいおっさんにレイプされたいと思うか？」
「ッ？！　いきなりナニ言ってるんですかッ！　嫌に決まってます

よ！！」

「君はそういう状況なわけ。俺は、まぁ、たぶん労役程度で済むと思うけど、それでも管理側が切ろうと思ったら終わるからな」

「さきほどの話ですか？」

「そうそう。さっきの話」

「組織に捕まったらってことですよね。嫌な話ですけど。……それで、ゲームっぽい。遊びがあることにどんな意味があるんです？」

「君はどう思う？」

バック駐車に失敗したけれど、構わず停車する。ギアをパーキングに入れてキーを抜く。そうしてから少女のほうにやっとまともに振り向いた。少女は首を傾げながらも考えを口にしていく。

「そう、ですね。遊んでるんじゃないですか。って、そのままですけど」

「うん。正解」

「ハァ？　説明をお願いします」

「ああ。不快な話になるが。たぶん俺たちはギャンブルの対象にされてる。効率が悪い仕掛けがちょっと多すぎるからな」

「話が飛びすぎてませんか。それに、ギャンブル、ですか？」

「効率が悪いってことは優劣がでるってこと。要領のいい奴。優秀な奴。人を扱うのが上手い奴。そういう連中しか生き残れないってこと。で、さっきの端末見てみろ」

「特別任務の？」

頷く。少女が端末をじっと見て、それが全部受注済みになっていることを確認してから俺に向き合った。

「これが、何か？」

「遊びが多すぎるって話の裏付け。で、俺たちからもコンタクトを

取れる人物がいるって証明」
「確かに遊んでるといえば遊んでますけど。それで、この人たちがお金を賭けてるってことですか？」
「ああ。そうだと思う。話は戻るけどゲームでさ。特定の人物の話を進めるとその人物との好感度が上がるってあるだろう。それと同じで、たぶん、この特別任務って奴を受け続けてればそういう連中から連絡が入るようになると思う。そして評価があがれば」
「お金を賭けてくれると？」
「そう。そうすれば、くだらないことで俺たちを失うのが嫌になってくる。金を賭けてるからな」
「だんだんわかってきました。つまり塔とやらの攻略が進めば進むほど私たちの生存率が施設の外の力で進んでいくってわけですね」
「そうそう。で、ここで本題が出てくるわけだ」

少女がそのちょっと可愛らしい顔を俺に向け、真剣なまなざしで見つめてくる。
二重まぶた。強い意志を秘めた瞳に、少し、ぞくりと何か妙な感覚に陥る。

――俺は、この瞳を知っている？

「どうかしましたか？」
「あ？　い、いや。なんでもない」

気のせいだと思うことにし、話を戻す。まさか、出会って最初の人物に限ってそんなわけがないだろう。
気を取り直して言葉を続ける。

「で、少なくとも俺と組めば、一人で攻略するよりマシだと思うが」
「貴方は今一番進んでる？」

「たぶんな。俺は今日からでも塔の攻略ができるが、少なくとも組織の連中は当分は動けない」
「当分、ですか？」
「パラメーターアップアイテムを食ってみろ」
「大丈夫なんですか？　これ」
「食わなきゃ生きてけないぞ？」

俺の言葉に、ごそごそとリュックから果実を取り出して口に入れる少女。そうしてうっ、と顔を顰める。

「腹に溜まるだろ？　なぁ？」
「確かに太りそうですね。うぇッ。しかもマズイ」
「肉体を強引に改変するからな。続けて食べられないようになってるんだろう」

例えるならバリウム飲むみたいな。いや、ちょっと違うか。

「あいつらは、たぶん最低でも１５０個は『違いますよ』……ん？」
「幹部に全て振り分けたとして、一人当たりたぶん６００～９００だと思います。９００人割る３０人かける果実の個数ですから、私に支給されたパラメーターアップアイテムが２８個、貴方は？」
「３３個、だったな。武器と同じく個人差はあるようだが」
「それでも、１０個以下という数字はないでしょう。でしたらやはり、６００～９００個ですね。大人の男の人ですし、消費が一日五個と見積もっても、パラメーターアップアイテムを全部消費するまでに１２０日ですか？」
「いや、流石にパラメーターを上昇させて、奴らが塔の探索で安全マージン、つまり敵より優位な状況だな。それを取ろうと考えていても、そこまで探索に人間を動かさないなんてのはないと思う。ただし、値として、探索にどれだけ数値が必要かわからないだろうし、

上昇したパラメーターで、現実にどれだけ動けるようになるのかも不可解だ。

だから、パラメーターアップアイテムを使用し、効果を確かめるまでに五日から八日は余裕があると思っていいだろう。そもそも、集めた人間の振り分けや組織の編成がある」

「そう考えると、後ろの肉人形ですか。それを使って今すぐ動ける貴方は、実はすごいんですよね？」

「長期的に考えると奴らのほうが上手なわけだが。それに、毎日攻略にいけるかもわからないしな」

「そのために、ですか？」

「ああ。そのためにな。二人か三人は人間が欲しい。欲を言えばこっちも組織を作りたい気分だが、今の状況だと信用できる人間も少ないしな。そういうわけで君に声かけたわけだ」

少女の目には疑惑らしきものが見えた。とはいえ、相手も俺を手放す気にはまだなっていないようである。

もう少し声をかけてみる必要があるが。

「私は信用できるんですか？」

「初日、状況、人物、こんなところだろう。どこまで信用できるかなんて俺の判断次第だが、裏切るような人間とも思えなかったしな」

というのは嘘である。少なくとも俺に人を見る目はない。こいつが裏切るかはわからないが、今更背に腹は変えられない。最悪、あちらの組織に行ってしまう、なんてのも考えられるが……。いや、それはないか。あちらの組織にそこそこ、かなり、結構、いやいや、すごく見栄えのする女子学生が一人で行ったところで食い物にされるだけだろう。あの人相。恫喝しなれた様子。剣はともかく刃物の扱い方を見ればまともな人種でないことは明らかだ。

あの組織の幹部連中はこの賭けの有望株といったところか？　し

かし、初期装備のダガーでこれだけの殺傷力が必要な敵、ねぇ。俺のボウガンもただのボウガンじゃないっぽいし。
思考を現実に戻して少女の顔をじっと見つめ続ける。少女は、プイっと顔を背けてしまう。ちょっと顔に赤みが見えるが……。照れたか。
小さく笑って外に出ることにする。

「とりあえず武器屋に向かうか。ちなみに言うまでもないが、クレジット全部使うなよ」
「使いませんよ。あと、その、よろしくお願いします。私も、信用しますから」
「ああ、今更だが、俺は連理貴久。田舎の三流大学生だ。タカぼんって呼んでくれればいい」
「タカぼん、ですか」
「うん、渾名だ。気軽に呼んでくれよ。で、君は？」
「な、ない、内藤、三咲です」
「よし、内藤だな。よろしく」
「はい。よろしくおねがいします」

内藤は、車内で小さく頭を俺に下げた。
綺麗な金の混じった白色の髪が、俺の前に晒される。プラチナブロンド。その色を見て、少しだけ疑念がもう一度膨らんだ。
どうして、こいつの髪は根本から白色なのだろうか？　ハーフにすら見えない、完全な日本人顔なのに。

【内藤三咲　が　パーティーに加入した】

ＮＡＭＥ：内藤三咲
ＨＰ　６／６

ＳＰ　１０／１０
腕力　５
硬度　２
俊敏　７
知能　４
運勢　６
能力　なし

装備
右手武器：ショートソード
左手武器：バックラー
頭装備　：ヘアピン
胴装備　：私服（上）
腰装備　：私服（下）
足装備　：スポーツシューズ
アクセサリー１：シルヴァーアクセサリー
アクセサリー２：

それと、内藤を説得する際にひとつだけ俺は嘘をついた。軍司令部の連中はおそらく、女を強姦するような余裕のない人種ではなく。もっと酷い、女に自分から股を開かせる力を持つ人種だと思えたことだ。それも、女が自分から望んで股を開くようなそんな状況を作れる。強く、大きく、巧みな人種だということを。

なぜ嘘をついたのかというと、そちらの方がスムーズに説得できると予想したからだった。

もちろん、たかが印象の話なのでバレようが間違っていようが問題などない。

漆／

ＮＡＭＥ：内藤三咲

ＨＰ　６／６
ＳＰ　１０／１０
腕力　５
硬度　２
俊敏　７
知能　４
運勢　６
能力　なし

装備
右手武器：ショートソード
左手武器：バックラー
頭装備　：ヘアピン
胴装備　：銅の鎧
腰装備　：足軽下鎧
足装備　：足軽脛当
アクセサリー１：シルヴァーアクセサリー
アクセサリー２：命中の指輪

内藤が武器屋で武器をそろえてる間に俺も今後の行動方針を定めておく。車の中でガイドを広げ、道具屋と武器屋にチェックを入れる。そうしてから、あるべきものを探すと。

「……数は、あるみたいだな」

ラブホテルなんたら、ってのは、性交目的用か？　市販のゲームでもいちいち冗句にあったから、機械文明人が入れたんだろう。
もちろん俺たちの趣味嗜好に気を使ってなんて理由じゃないことは確かだ。
先ほどから言っている遊びの部分がそれだ。素材は銅じゃないだろうに、銅に似せて、銅の鎧なんて作ったぐらいなのだから。

「タカぼんさん。どうしたんですか？」
「ん、もういいのか？」
「ええ、まぁ。もういいというより。選びようがなかったわけですけど……」

ドアを開けて内藤が車内に入ってくる。見れば、布の服より一ランク上だろう、銅の鎧に、武士風の和風の装備だ。
車についているミラーを見ながら、髪をかきあげたり、まつげの様子を見る内藤。女だなぁ。

「装備ひとつがすごい高いですね。防具を四つ買ったんですけど、クレジットこれで１４０００ぐらい使っちゃいました……」

はぁ、という表情で新品の防具を見下ろす内藤。
……。防具の値段と、残数の決まっているアイテムの値段を考えてみるが。つまり、集めた人間の半数は死ぬ予定だったのか？
肉人形以外にも生き残る手段ってのがいくつかあるんだろうが。それでも施設に集められた人間全員が生き残るには、遊びの要素が足りない。
そう考えるとあの組織。本音の部分はともかく、人死にから人間を救う分には上手く機能しているようだった。
無意味では、ないか。俺の好みの問題があるだけで。あれの組織を潰すなんて馬鹿な真似はできそうにないな。できるかできないか

も別として。

「それで、どうするんです？」

「そうだな。案は二つだ。最初は別行動。最初から一緒に行動。その二つだ」

「どんなメリットがあるんです？」

エンジンを動かし、するすると進んでいく。塔に向かうべきか、宿屋に向かうべきか、どちらかだが。いいや、塔にしよう。

「別行動は、まず俺が塔を攻略する。そして内藤が施設を探索する。そうすることでお前みたいに単独行動してる連中を発見して俺たちの陣営に取り込めるよう話をつけられ、組織に先んじて塔も攻略できる。あとは、ガイドに乗ってない店関連を見つけられるって利点だな。

デメリットは、単独行動の俺が死ぬ確率が高いことと、内藤がおっさん連中に発見されたときに上手いことやらないと誘拐ぐらいされてもおかしくないこと。あとガイドに乗ってない店は別に今見つけなくてもいいってのもある」

「デメリット多いじゃないですかッ。えっと、それじゃあ一緒に攻略か探索で決まりなんですか？」

「ああ、探索より攻略が優先だな。ただ、これだとお前みたいに単独で行動している連中につなぎが取れなくなるって可能性がひとつ。まぁ、一日も耐えられなかった人間なんか入れても意味ねぇかなぁとか思うけど、相手は組織だからな。……いや、初日は大丈夫か」

「……？　他にはなにかあるんですか？」

「そう、だな。宿屋ってガイドにあるだろ。あっちの連中も利用する宿舎は流石に使えないんで、そこを今後の拠点にしたい。金を稼げるってわかったらどっか空きのあるでかい施設を借りるつもりだが」

「えっと、話飛んでますよね？」
「話が飛んだのは、あー、気にするな。で、展望としてはこっちも組織を作っておきたい。機械文明人のバックがつけば万々歳ってところだが、まだまだ俺たちは試されてすらいないからな。それで、組織にとられる前に宿屋のひとつでも確保しておきたいんだが」
「じゃあ、やっときますね。端末貸してくれますか。って、あ、話が飛んだんじゃなくてデメリットの話してたんですか？」
「そうだが。面倒だったんで。……、で、端末って？　もしかして端末から予約できるのか？」
「できるんじゃないですか？　というか、そういうことのためのものなんじゃ」

呆れたように言われる。いや、俺って基本どっか抜けてる性格だからそういう顔で見られてもなぁ。
言われて気づいたので腰の端末を内藤に渡した。宿屋の予約は任せておこう。

「だいたいいくらぐらいだ？」
「ちょっと待ってください。施設利用からいけるみたいですね。一覧、ソートを安い順に並べて。……そう、ですね。一番安いところで一晩一日１０００クレジットです。高いなぁ」
「いや、安いと思うが。何部屋の宿屋だ？」
「１６部屋ですね。食事も出るみたいですよ」
「そうか。……よし、全部屋三日予約しといてくれ。金は俺のクレジットで」
「全部屋ッ！？　って、いいんですか？」
「それで安全な宿になるはずだ。少なくとも、組織の連中が借りれなくなるからな」
「はぁ、でもタカぼんさん残りクレジット１００になっちゃいますけど……」

「構わん。やらなきゃならんことだしな。いや、そうだな。なら二日にしといてくれるか」
「……無駄金なんじゃ」
「ああ、無駄金になるのが一番だ」
「……？」

俺の予想じゃ組織の幹部連中は初日から宿舎とは違う場所に寝る場所をつくるだろうからな。それが安く済むならってことで安宿を使う場合もある。バス待ちしてた連中と違って、誰が何を所有するかでもめるなんて間抜けはしないだろうし。あちらは容赦なんかしないんだろう。

だから、中途半端に借りたら舐められるだろう。最悪嫌がらせとして、同じ宿に泊まってきて人数で囲まれる、なんてこともあるかもしれんし。

「それで、だ。話を戻すぞ。塔攻略最大のメリットは特別任務を進められるって事だ」
「でも任務のことは軍司令部でも確認できるんですよね？」
「ああ。だが、奴らも三日は動けない。動いても意味はない」
「えっと。パラメーター、ですか？」
「そう、動いても死ぬからな。これだけパラメーターアイテムがあって、更に武器屋に金で買えるアイテムが充実してるってことは、これはゲームでいうところの糞ゲーだからな。バランスは悪いだろう」
「……随分確信があるんですね」
「誰でもクリアできる内容ならわざわざ俺たちを呼びつける必要はない。恐らく、パラメーターアップして、肉人形があって、それっぽい伝説的な設定のついた武器をもってやっと塔を攻略できるんだろうが。……ああ、そうだよな。でないと、賭けにする理由がないからな。誰が勝つかわからない状況になってないと、人が大量に死

ぬ状況にならないと……」
「ちょっと、やめてくださいよ。なんか不安になるじゃないですか……」

袖を引かれたので内藤を見るとちょっと涙目である。こんな状況で、ねぇ。ラブコメってるわけじゃないが、少女の仕草に少しおかしくなってしまう。

「な、なに笑ってるんですか？」
「いや、お前。安心してたのか？」
「……ぅ、ちょ、ちょっとだけですよ」
「そう、だな。まぁ、そういうもんだろうが。ああ、とりあえず安心しとけ」
「……はい？」
「当分は守ってやれるだろう。一階の中盤までだろうが」
「あの、いえ、いいです。自分の身は自分で守ります」

決心するように言う内藤に頷いてやる。
そう、それでいい。安心なんて阿呆な感情。少なくとも、状況が改善されるまで持つべきではないんだ。

一階層【堕王の天槌】？

捌／

ガイドで塔らしき場所が示されている場所まで車で行き、駐車場に停めてから肉人形と共にゲートへと向かう。

鉄柵や鉄条網で囲まれたらしいその場所。しばらく歩いていると入り口らしきゲートが見えたので内藤と共にくぐった。

『入場料お一人１０００クレジットになります』

「え、お金、とるんですか？」

「……、そう来るか」

「攻略しなきゃいけないのにお金は取るんですか、変ですよね？」

金を使いまくっている今の俺には痛い。だが、なるほど、そういう手で来るのか。ますます賭け事じみて来たな。

「１０００クレジット。３００００クレジットから武器だの防具だの買った後の初期資金からすれば痛いものだが、払えない額じゃない。それでも払えない連中は、今、９００人はいるよな」

「あッ。でも、それって不味くないですか？　人が来なくて塔の攻略が進まなくなるとか」

「別に不味くないだろう。つまり管理側は払えない連中、というより支給品を捨てた連中を切ったんだよ。この機能は後付けっぽいしな」

「切った、ですか」

「終わった連中から上がってくることを期待するにしても条件を厳しくすれば誰に賭ければいいかわかりやすくなるしな。推測だがおっさん連中に既に賭けてる連中がいて、その横車か。なぁ、元々は

施設利用費か何かだったんだろう？　１０００クレジットってのは」
『…、――ッ』
「人工知能、お前に言ってるんだ。そうなんだろう？」
『入場料です』

俺の言葉に暫く黙っていた機械だが、渋々と言葉を返してくる。
その返答には困惑した風情が感じられた。

「で、だ。中にあるだろう医務室やら休憩所やらは無料で利用できるんだよな？」
『……制限はありますが。ほぼ無料になります』
「と、いうわけだ。軽い怪我程度の治療ならしてくれるみたいだし。薬代程度に考えておけばいい。損はしていない」
「あの、いいんですか？　その、話しても」

一瞬、何のことかと思う。内藤の視線を辿れば、カウンターに向いていた。なるほど、真相を知ったら殺されるとでも思ったのか。

「賭けのことか？　俺の妄言かもしれんし、そもそも確証のあることでもないだろう。第一、知ってても知らなくてもどっちでもいいことじゃないか？　あちらさんには」
「そういうものなんですか？」

物証がない以上そういうものだろう。それに、本当のことだとしたら、俺が気づいているってことを知らせるってのには意味がある。少なくとも知らない人間と知ってる人間がいたなら知ってる人間に賭けた方が知られた際の反発がない以上、支援もしやすいだろう。そう考えれば後々スムーズに事を動かすためにも俺が気づいたことが真実ならば管理側に知らせておく必要があった。

「ほれ、１０００クレジット」
「あ、はい。１０００クレジットお願いします」

カウンターに財布を出し、１０００クレジットを徴収してもらう。
しばらくするとカウンターから腕章らしきものが出てきたのでそれを腕に通す。ちなみに肉人形は武器扱いなので金は払わなくて良いようだった。
ちなみに、騎士鎧姿の肉人形は全身鎧で顔も見えないので見た目アンデッドっぽい。弓師姿の奴は、なんかどっかのゾンビゲームに出てくる敵っぽいな。まだスケルトンのほうが白くて可愛げがあるだろう。

「あ、施設内で腕章にクレジットをチャージしておけば次からいちいち払わなくてもいいみたいですよ。これ」
「へぇ。便利だな。しかし、いろいろ気付くな内藤」
「はい。えへへ」

微笑む内藤に腕章と財布を渡すと、操作をしてくれる。

「なら三日分頼む」
「そうですね。あ、塔前にも施設がいろいろとあるみたいですよ」

こっちにも武器屋や道具屋がある。それと予想した通り、そこそこでかい病院だ。収容人数は、ベッド数を見ると４００人ちょうどだった。ガイドを開いてみるとゲート外にも病院がある。こっちにも隠し要素があるのだろう。いつか見に行く必要があった。
そういえば、マップを見てわかったが、塔を中心として、四方に広がって建設されている施設群には、いくつか仕掛けが用意されている場所がある。各地に散らばっている【聖剣の丘】【魔王陵墓】【聖天極母の箱舟】等々。たぶん名前からして、まだ俺たちには入

れないようになっているか、入れても何も手に入らないようになっているか、それとも入った瞬間に後悔するだろう難易度の施設だ。

……金で買える肉人形はたぶん隠し要素の中では低いランクなのだろうか。背後に立つ二つの巨体を見上げ、考える。

何が必要で、何が不必要かは未だはっきりとはしないが、隠し要素の入手は特別任務でコネを作ってからでも遅くはない。

それには、目に見える成果。特別任務の達成が不可欠だろう。やはり塔を攻略するのが確実か。

「どうします。武器屋とか見て行きますか？」

「そうだな。品揃えだけ見ていこう。残数の限られてるアイテムは確認しておくべきだ」

確認しておけば俺たちが買えなくても、なくなればわかるようになる。組織と本格的に対立するとは思いたくないが、相手が何を手札にできるかを知らないのは問題だった。

玖／

「茜、どうするか決まったか？　俺はとりあえず明日から施設でバイトしてくるけど」

「バイト？」

幼馴染のひぃくんの言葉に私は慌てたように振り返った。ポケットに隠したのは小さな革財布の形をしたクレジット入れとガイドブック。

今現在の生命線だ。同時に、これを持っているのがバレたら、絶対まずいことになる。

ポケットに隠した革財布とガイドブックを心持ち深く押し込む。

くしゃりとガイドブックの潰れる乾いた音がした。

「ああ。おっさんたちが軍司令部を調べたらそういうのがあったんだって。倉庫のアイテム整理とか、武器屋の在庫整理とか」

「へ、へぇ。それでお金貰えるの？」

「いや、金は攻略組の資金になるから。代わりに嗜好品とか、服とかその辺を優先してもらえるとさ。あ、給料には映画のチケットとかあったぜ。バイト代でたら休日に映画見に行くか？」

「う、うん。そうだね。あ、私たち、服の換えもないけど」

「服とか下着だったらおばちゃん連中が買ってくるらしいから行けばもらえるぞ。で、そっちは何か収穫あったのか？」

ひぃくんに聞かれて頬が引きつる。えっと、マズい。トイレに篭もってガイドブックを読んでいたから何もしていない。

「え、っと。その、ごめんね、収穫はない、かな……」

「おいおい、何にもないのか？」

「ごめんね。ちょっと気分悪くて篭もってたから」

「あー。確かにいろいろあったからな。わかるよ。

そうだ。先に宿舎行ってるか？　あっちで部屋割りとグループ決めやってるからみたいだぜ？」

冷や汗が流れかける。もう、そんなことまでしてるの？

「グループ？」

「男女と年齢別でグループ作ってるんだよ。あと名簿も作ってるから名前書きに行ってこいよ。俺はもうやってきたし」

「そ、そうなの。うん、えっとッ！　じゃあ……、あの、行ってくるね」

着いていこうか、と言ってくれるひぃくんに断って、とぼとぼと歩き出す。途中まで心配そうに私を見ていたひぃくんも誰か知らない男の人に声を掛けられてどこかに行ってしまった。

どうしようどうしようどうしようどうしようッ？！　グループに入っちゃったら抜けられなくなるよねガイドブックに宿舎の鍵が挟まってたけどたぶんそこは使えないだろうしこの集団の人たちが周りに住むんだから使ってることがばれたら制裁を受けるかもしれない。

苦悩の混じったため息を出かける。その間にもぐるぐると頭が回っていく。ただし考えはまとまらず良い方法も思いつかない。

今、ひぃくんはともかく私の状況は最悪だ。こんなよくわからない状況に入れられて、その上、よくわからない状況でできたよくわからないグループに取り込まれてしまっている。

下手に抜け出せばよくない目に遭うだろう。既に集団は動き始めてるんだ。支給品を奪われる前ならともかく、今わがままを言ったところで意味はない。

そもそも、さっきの支給品をとられたときだって抵抗した人がいたけど、その人たちは「こんな状況なんだから皆で力を合わせて」「こんな状況で勝手な行動をする奴はろくなやつじゃない」っていう空気に押されて支給品を差し出してしまっていた。

かくいう私も同じ口だ。あそこでただ演説をされただけだったら誰も支給品を渡さなかった。でもあいつらは既に武力で支給品のいくつかを奪い、奪われた人間が、自分も取られたのだからお前らも取られるべきという空気を無意識に作ってしまったあとに演説を始めたのだ。

それに、今の状況だってそうだけど。この空気は悪くないのだ。皆が、頑張っている。皆が力を合わせようとしている。良い空気だ。良い雰囲気だ。熱意が篭もってる。前に進んでいる。

理不尽から逃れようと頑張っている。

指針が示されている。私たちは助かるっていう希望が見えている。

しかし、しかし、だ。

（一週間後も同じ空気でいられるかっていうと。きっと違う……）

軍司令部の出入り口を見る。どこから持ってきたのか、あちこちに机やテントが並べられ、人々が並んでいる。彼らはさっきひぃくんが言ったように、グループに所属し、仕事を見つけ、部屋を割り当てられているのだろう。

管理、され始めている。

それ自体は別に、悪いことじゃない。それが健全な目的で作られたって信じられれば私だって、喜々として馴染もうと努力するんだろうけど。

ため息を押し殺す。あまり暗い顔をしていても怪しまれる。

（武器を持ってる人が出入り口に二人。見回りに五人。司令部内に、何人だろ。あとは、街にも行った人がいるんだろうなぁ）

支給品の山の前にも何人か、武器を持った見張りがいる。にやにやと同僚と話しながらも周囲を見渡している大人たちは、どう見ても暴力を振るいなれている気配がしていて、近づきたくなかった。

ひぃくんはあれに頼もしさを感じたんだろうけど、私は不安のほうを感じてしまう。

改めて見れば今更支給品を返してもらおうとしたんだろう男の人たちが追い散らされていた。彼らを見る周囲の目は良いものではない。自分勝手を許さない空気が蔓延しているからだ。

（あの時、ひぃくん待たないでさっさと武器屋とかに行ってればよかったかな……）

思わず、そんなことを思ってしまう。幼馴染とこんな状況で一緒

にいられた自分は幸福なほうなんだろうけれど、今考えると、大事な時間をロスしてしまったことに後悔の念が湧く。支給品をもらえたのは結構前のほうだったのだ。

そういえば、バスを待たないでさっさと行ってしまった同年代くらいの気持ち悪いぐらい美人の女の子がいたことを思い出す。

（あの子がうらやましいなぁ）

こんな状況に巻き込まれないで、異世界生活をエンジョイし始めてるんだろうか。自分ひとりの力で、新しい世界を切り開こうとしているのだろうか。

ああ、でも、彼女もいずれは軍司令部にやってくるのだろうし。そう考えると、私と同じ状況に巻き込まれるんだろうなぁ。しかも後からだからグループわけとか仕事とかもろくなものがないんだろうし。

そう思えば、ここで頑張れないことが逆に可哀想にも思えてしまう。

（そうだ。私はまだいい方なんだ……）

ここに連れてこられた全員を敵に回せるはずがないのだから。

内心の卑屈さを笑みに替える。

「名前は？」

「し、敷条茜です」

とぼとぼとたどり着いた長机の前に立って、自分の名前を言う。

名簿を作っていたらしいおじさんが私の顔をじろじろと見たあと、胸と腰あたりに視線を動かして、そうしてから名前を名簿に書いて、チェックを入れる。

（あぁ、やっぱり）

「茜ちゃんはAグループな。グループは、あー、あっちにいるから、混ぜてもらえ。仕事はリーダーに伝えてるからそっちで聞いてくれ。あとこれ宿舎の鍵な」

粘着質な視線を受けて、必要以上に手を触られてから、たぶん私に割り当てられた宿舎の鍵を受け取る。

ため息をつく。こういうことだと予想していたのだ。だから、最悪なのだ。

そうして、とぼとぼと歩いた先にいるAグループとやらに向かえば贔屓目に見ないでも可愛い、美人といえる女の人が勢ぞろいしている。私の顔を見た女の人から一人が進み出て、わかっていることをわざわざ教えてくれる。

「ようこそ。Aグループへ」

「敷条茜です。よろしくおねがいします」

ちなみに、リーダーさんが教えてくれた。私の仕事はお茶汲みだってさ。はぁ。

不安を、思考にして形にする。

状況が最悪だって思うのは、トップがろくな人間じゃないってわかってること。

現状が最悪だって思うのは、自分でも、自分の顔が見れる程度には整ってるって理解しているから。

両方をイコールで結ぶと、私の貞操が一ヵ月後には見事になくなっているだろう推測が簡単に浮かぶ。

もちろん相手はひぃくんじゃなくて、武器を持った誰かなのだろう。

知らず知らずのうちにため息が出た。

壱拾／

内藤、肉人形二体を連れ、塔内部へと入る。
巨人が日常的に使ってるのかと見間違うほどの巨大な両開きの扉、その傍にあった人間サイズ用の通用扉からだ。
中の第一印象は、

（広い、な。というか外観からして東京にごろごろ立ってる高層ビル並にでかいわけなんだが）

支給品にあった自動マッピング装置を起動する。手のひらサイズのソレはゲート内の道具屋に売っていたレーダーを組み込んだため敵やら味方やらに反応してくれるようになっている。さらに、登録した人物や一度確認した生物の分類が表示されるようになるらしい。
マップを眺めながら周囲を確認していると内藤がぽつりとつぶやいた。

「もっと、こう、ダンジョンっぽいのを予想してたんですけど……」
「ああ。なんというか、内装からしてどこぞの企業用のビルに入ったみたいだな」

塔の内部、その受付らしき場所を見渡す。ボウガンを片手に警戒しながらだ。
天井はかなり高く、壁は綺麗なものだった。外側を見ると壁際には窓もついていて、日差しも入ってきている。だが、当然ながら、外側には鉄格子が嵌っていた。敵の侵入を警戒するためだろう。
二人でさらに周囲を確認する。
唯一の出入り口傍、扉の正面にカウンターがあり、その背後には

内部の者が上層へ向かうのに使うのだろう機械が用意してあった。

「まさか、あれは、エレベーターか？」

二人でそれに近づく、背後には肉人形が遅れず付いてきている。

「こんなものまであるんですか？」

内藤が開閉すると思われるガラス部分に触れる。円筒形のエレベーターの内部には操作盤が見えた。

階数は、数字らしきものを見る限り、ここからは五階までしかいけない仕様のようだ。

扉は、こじ開けようとしてもつなぎ目ひとつないため中には入れそうにない。ダガーの柄でガラス部分をガンガンと叩いてみても輝すら入る様子はなかった。まぁ壊してもなんだし、刃を向けるのはやめておこう。

さて、攻略するなら、まずはこれを起動するために電源を入れるべきなんだろう。よくよく見ればカードキーらしきものを挿すスリットもあった。

「階段らしきものがあったんだろうが、封鎖されてるな」

コンクリートだろうか、エレベーターの隣にあっただろう空間には元々粘性があっただろう硬化した何かでそのほとんどが封鎖されていた。

一応、触ってみて調べてみるが。破壊するにはきちんとした装備が必要だろう。それと時間も。

確認のために足元を見れば、階段の一段目らしきものが見えた。

やはり階段か。

完全に停止した施設を見て、内藤が困惑した表情を浮かべている。

「執拗ですね。それに、トップが冷凍睡眠してるんでしたっけ」
「そうらしいが。どこまで信じていいものか。とりあえず二階への道を探そう。それと依頼目標のゴブリンとやらとコボルトやらも探すぞ。そいつらがここの住人なら、その中でも偉そうな奴がいる場所に機密文書があるだろうしな」

それと、受け付けらしきテーブルの裏を漁って白紙の業務記録やシフト表っぽいものを回収しておく。弓師の肉人形に、買っておいた車輪のついた橇（ソリ）を持たせているのでそこにがさごそと放り込んでいく。ちなみに俺のクレジット残金は現在0だ。橇を買うのに足りなかった分は内藤にいくらか出してもらっていた。

生きて帰れれば返せるだろう。

「これ、全部持っていくんですか？」
「今日は様子見だからな。行けるところまでにあるものは全部回収しとくことにする。そもそも俺は軍事には関心がなかったから、何が価値あるかわからないしな」
「ああ、確かに。それに入り口にあるものだったら全部取られちゃいますよね。それだったら」
「俺たちの利益にしたほうがいいだろう。幸い、荷物持ちがいるんだしな」
「そういえば、私たちが最初なんでしょうか？」
「ここに入ったのがか？」
「はい。誰か入ったなら全部手付かずなんて、おかしいですし」
「そういえば、そうだな。もしかしたら、整えたか？」

内藤の言っている意味とは別のことを考える。機械帝国の人間は、本当にここを放っておいたのだろうか？　そうして俺たちがこうやって冒険気分で初めてここを荒らす優越感に浸らせるつもりだった？

考えるも、流石にそれはないな。なら本当に手付かずだったんだろう。……だったら、きっと。

「内藤」
「なんですか？」
「電灯出しとけ」
「はい？」
「落ちるぞ」

リュックからたいまつ型の電灯を取り出した瞬間、音を立てて周囲の電気が落ちる。暗闇。だが、瞬時に赤色のランプがあちこちに灯り、警告の音がう盛大にわめき声を上げだした。

「えッ！？　あッ！？　な、何が起こったんです！？」
「将軍が冷凍睡眠だって言ってただろう。電灯急げッ。壁越しに敵がうじゃうじゃいるぞッ！！　肉人形！！　戦闘態勢ッ！　三号は敵を発見次第に射撃。二号は三号の攻撃を抜けてきた奴を斬り裂け。内藤、お前は俺の後ろにいろ。まだ戦わなくていい」

リュックから同じくたいまつ型の電灯を取り出した内藤がこくこくと頷く。

よし、いい子だ。攻略に際しての問題もある以上、内藤はまだ前には出せないだろう。パラメーターが上がっていないとか、敵を殺す技術がないとか、そういう問題の前にあるひとつの問題だ。

マップ機能を見ると受付横にある扉向こうが詰め所か何かだったらしく、モンスターが扉周辺に集まっている。俺の視線を見てか内藤もそちらに目を移す。

先ほど前無反応だったのは、きっとそいつらが冷凍睡眠状態だったからだろう。

「敵、出てくるんですよね……」
「たぶん、な。機械文明人がこの施設に踏み込まなかったのは敵の活動を止まったままにするつもりだったんだろう」
「敵が塔から出てくることはあるんでしょうか？　その、施設に雪崩れ込んでくるとか……」
「そのためのゲートだろう。塔の全周を囲んでたしな。それに対する対抗策もあるんだと思うが……」
例えば機銃とか、電撃とか、地雷とか、そういうのが――
「あ、」
内藤の声に振り向けば、ガシャリ、と扉が開き始めていた。隙間からは暗くてわからないが何か人影が見える。
先手必勝だ。
「三号ッ！　今だッ！！」
声に反応してぱしゅん、と弓師の形をした肉の人形が弓を放つ。弓と言っているが、現実には弓の形をしたレーザーガンとも言うべき代物だ。正確にはレーザーではないが、そういうものだと思っておいたほうがいいだろう。難しいことは俺の専門じゃない。
弓の先端から発射された光の塊が人の形をした影の頭部に突き立ち、そのまま壁に突き刺さって消滅した。命中の指輪と呼ばれる自動照準装置によって見事に敵の急所を貫いた三号は弓を引き、次の矢を装填し始める。
三号は矢筒を持っているわけではない。三号に与えたロングボウはバッテリー式だからだ。バッテリーは使い捨て形式、一個８０発まで撃てる。今回は三つほどストックがあるので半分使い切ったら帰還する予定だ。

ただ、内藤の様子如何ではその前に帰ることも想定しているが。

「ひ、人ッ！？　ちょ、タカぼんさん、あれ、人間じゃッ」
「なわけあるか。人間だったらもう少し形が綺麗だ」
「え、き、綺麗？」

三号が次々と射倒していく人影を見て内藤が青い顔をするが、俺にはあれが人間には見えない。

肉人形より人間に似ているとは思うが、人間ではなかった。

たいまつ型の電灯はそれなりに光をばらまいている。だからここからでもこちらに突っ込んでくる連中の姿がはっきりと見える。やつらには腕と足がある。軍服らしいものを着て、剣や盾を身につけている。いるが、人間の肌は汚らしい緑色ではないし、顔に石みたいなできものが大量にできてはいない。少なくとも俺はあんな人間に似ているが人間ではない生きものをＣＧや映画以外で見たことはなかった。

第一、浮かべる狂相には人間らしさが微塵も感じられない。それだけで攻撃するには理由には充分だ。

「で、でも……。あ、あの、「盾構えとけ。嫌なものが見えた」

内藤の顔は蒼白なまま、なんら反応を示さない。状況の変化が唐突すぎて戦闘中だということがわかっていないのだ。変化が急激だったのに心がついてきていないのだろう。わかってはいたが、大きく舌打ちが漏れる。

「あ、あのッ！！　は、話あ「ッ、馬鹿野郎！！」

ぐだぐだ言っている内藤を胸の中に引きずり込んで背後へ下がった。

三号の後ろに回りバックラーを構える。

「ちょッ。ちょ、ちょっと!?」

「黙ってろ!!」

轟、と爆炎が視界を遮った。パクパクと内藤が胸の中で口を開いたり閉じたりしている。ッ、熱いな。充分下がったはずなのに盾では庇いきれなかった部分に炎の飛沫が掛かる。幸い防火性能は悪くないらしく服に火はついていないが。

むき出しの顔面が燃えるように熱い。

「火炎放射器かッ！　ったく、素人相手にそんなもの持ち込むかねッ!!」

腰のボウガンを取り出して構え、炎で相手の姿が見えないので適当に撃ち込んだ。

強運故にか放った後に遠くで獣の悲鳴が聞こえたように思う。

このボウガンも弓と同じくレーザーのようなものだ。ボウガンの形をしているためにボウガンと同じように扱う必要があるが、弾丸の代わりにバッテリーがあり、矢をセットしないで、弦を引き、引き金を引けば撃てるようになっている。たぶん無駄な機構を外せば弦を引かずとも銃のように撃てるかもしれないが。それはきっと多大な労力を要するのだろう。技術者も道具も未だ手元にはない。機械帝国の用意した遊びの部分を破壊するには圧倒的に手札が足りない。

「弦引いとけ!」

胸の中でいまだに目を白黒させている内藤にボウガンを放る。ガシャンと内藤の鎧とぶつかったボウガンが音を立てた。

「えッ、えッ、だ、だって、火、火、ですよ。そ、それに、か、火炎放射器ッ！？」
「そう言ってるだろう。いいから弦引け！！　二号、突っ込め！！　三号、できればでいい。火ぃ放ってる馬鹿を優先して撃て！！」

二丁買ってあったボウガンをさらに腰から引き抜く。もともと戦う気のない俺が弓術やら剣術を極めても無駄。だから機構で撃てるボウガンを選んだのだ。

二号が突っ込んだ場所から横にずらして炎の壁に向かってボウガンを放つ。悲鳴と倒れる音。炎の壁が薄くなる。

ボウガンを胸元の内藤に投げればッ。って、糞。コイツ！！

「何を呆けてる！！　敵がいるんだぞッ！！」
「あ、は、はいッ」

糞ッ！！！

胸元から内藤をどけ、ボウガンを奪い、弦を機械を使って引っ張りあげる。入る前に少しやり方を練習したがなかなかうまくいかない。

「――ッ、完了ッ！！」

敵の方に向けてボウガンを構えればッ！？　く、糞ッ。緑色の人影が薄くなった炎の隙間から突っ込んでくるところだった。

速い。盾を頭の上に掲げ、前傾姿勢で突っ走ってくるその勢いは猛牛にも比するだろう。なるほど、パラメーターアップアイテムがあれだけ気前良く支給品に入っていた意味がよくわかった。何の強化もされていない人間なら即座にミンチにされてもおかしくない。

しかも敵は火炎放射なんて非人道的な武器を容赦なく使い、自軍

の攻撃の隙間から敵へと何の躊躇もなく突っ込んでくる糞度胸を持っている。
玩具みたいな形をした超兵器が俺たちに提供された意味や機械文明が劣勢になった理由がよく理解できる。
敵は、人類を優越した戦闘民族だ。

「三号ッ！　体を張って止めろ！！」

三号が突っ込んできた緑人間に矢を発射するも、緑人間が構えた盾によって見事に防がれる。ガィン、とかゴィン、と音がなるものの、ダメージを与えたようには見えていない。どうやら予想していた通り、敵の武器も超兵器だ。
そしてことごとく攻撃を防がれた三号が敵と俺の間に体を割り込ませる。しきりに声を上げていたため、俺が指揮官だと気づかれたのだ。死の気配に冷や汗が流れる。

「あ、ッ。ちょッ」
「いいから弦引いとけッ！！」

俺を庇っている三号の前に踏み込んで、三号と取っ組み合いになっている緑人間の顔面に強引にボウガンを押し付ける。致死の気配に気づいたのか、緑人間の持っていた剣が俺の体のところどころにあたるも気にせずに、撃つ！！

「ヨベッ？！　……カヘッ」

レーザーっぽい矢が頭蓋を貫き、脳を貫通したことを確認し、敵集団に目を向ければッ。糞ッ。

「三号ッ！　二号の援護だ！！」

二号が緑人間三人にリンチにあっていた。糞、何が一階層だけならなんら改造をしなくても一体だけで進めるでしょう、だ。ナイトメイル装備してなかったら速攻スクラップだぞ。

二号はヒーターシールドを構え、正面の手ごわそうな緑人間と戦っているが、同時に背後から二人の緑人間に鎧の隙間から剣をつきたてられている。幸い、二号は突っ込んでから火炎放射を扱う緑人間を即座に排除したんだろう。火炎攻撃を受けてはいない。いないが、背後の二匹から喰らうダメージが多いのか、二号の動きには精彩というものが見えなくなっている。

「内藤、ボウガンは」

息を荒げながら問いかける。

「は、はい。ここに」

期待していなかったが、なるほど、少しは役に立つようだった。

「よくやった」素直に礼の言葉が出た。

気合を入れ、恐る恐る内藤の差し出してきたボウガンを受け取り、撃ってしまったボウガンを握らせる。

「内藤、もう一本頼むぞ。三号ッ」

振り向けば内藤とのやり取りの間に体勢を整えた三号が矢を放った瞬間だった。二号を背後から攻撃していた一体の脳天に矢が突き立つ。

賞賛は内心のみであげ、俺もボウガンに備わっているレーザーサイト機能を使い、二号の後ろに剣を突き立てていた緑人間に引き金を引く。

先に三号が一体仕留めてくれていたのが幸を奏したのか、呆然と緑人間の屍骸を見ていた緑人間の脳天にバツン、と矢が直撃した。

「ッ、ふぅ。よし、後一匹」

思わず匹と呼んでしまうものの。思い直す。それでいい。わざわざ一人、とか一体、とかじゃなくて、あれは匹、でいい。

決意すると、俺は内藤が差し出してきたボウガンを構え、二号と戦っていた立派な軍装の緑人間に矢を打ち込んだ。

壱拾壱／

「内藤。大丈夫か？」

「は、はい」

二号と三号が周囲を警戒する中。俺は床にへたり込んでいる内藤に手を差し出す。辺りは火炎放射器が放っていた熱気で少し暑いぐらいだった。

「大丈夫か？」

「……はい。大丈夫です」

端正な顔を蒼白にし、膝に手をつきながら息をしている内藤。……、まぁ、いい。

「肉人形共は大丈夫か、ってああ。お前らは喋れないんだよな」

仕方ないので携帯端末を開く。確か肉人形には所持者が現在の体調（ステータス）を確認できる機能があったはずだ。

ＮＡＭＥ：肉人形二号
ＨＰ　０５３／２００
ＳＰ　１００／１００
状態：火傷／裂傷／再生中

ＮＡＭＥ：肉人形三号
ＨＰ　１８０／２００
ＳＰ　１００／１００
状態：再生中

見る限りは再生中で大丈夫なようだ。しかしこれでは同じ規模の襲撃にあったときに不味い。そのため二号の鎧を外し、傷口に傷薬を塗っていく。二号の素材は肉だから傷薬で回復するだろう。余りは自分の傷に塗っておく。

「三号。後ろ塗ってくれ」

届かない部分は三号に任せた。内藤が動ければやってもらったんだが。あの様子なら当分は放っておくのがいいだろう。最後に二号に包帯をぐるぐると巻き、鎧をかぶせ、俺も服を着なおす。

さっさと死体を確認しにいくべきだな。まさか本当にゲームのように、金とアイテムを残して消え去るとは思わないが、敵が集まってくる可能性があった。

「三号。橇もってそっちの死体持ってきてくれ。二号、そっちの死体を並べてくれ」

マッピングの機械を開き、周囲に動体反応がないことを確認してから死体連中の下にいく。後ろを見れば、額を押さえた内藤が壁に寄りかかっていた。

放っておくべきか。声をかけるべきか。

最悪見捨てなければいけないが、最初の協力者で一応の実戦を乗り越えた人間は貴重だ。しかし、ここを自力で乗り越えてもらわないと後が続かないだろう。それなら黙って立ち直るのを待つしかない。

（それでも必要なら、小細工をしなきゃならないが）

想像し、首を振る。可能か不可能かの問題ではなかった。今の俺が人の心を支配し、意のままに動かすことは流石に悪趣味にすぎる。交渉で有利に働くように振る舞えても、偽りを用いてまで、心の問題に踏み込もうとは思えなかった。

それに俺はもう、そういったことをしないと決めていた。

考えを振り払ってたいまつ片手に死体の前に立つ。吐き気と後味の悪さはあるが、飲み下す。俺は生きていくつもりだ。今ここには俺しか頼れる人間がいないのだ。ここで俺が俺を裏切る真似をするわけにはいかなかった。

だからこそ、心に澱を溜めておいては面倒だった。苛立ちを胸から搾り出して拳を握る。そうしてから背後を見、内藤がいないことを確かめてから比較的まともな死体の顔面に叩きつけた。

拳に若干の痛みが走る。苛立ちが綺麗に拳から死体へとぶち込まれた。拳の向こう側では敵の鼻骨らしいものが砕けた感触がした。うん？　装備がおかしいだけで敵連中の肉の強度はまともなのか。

「発散終わり、と。で、こいつがゴブリンか？」

端末を開いて敵軍の項目を開く。ずらずらと並ぶ敵情報を見なが

らあることに気づいた。もしかして道具屋にあった魔王軍に関する分厚い本かこういった高性能端末を買わなきゃ依頼は果たせないってことか？　確かに、俺たち普通の日本人が、敵の詳細を知ってるわけがないんだから。

前情報の重要さを確認し、端末を操作しながら二号が並べた死体を数えていく。それで、ああ、こいつらはゴブリンだな。軍装の胸の部分に階級を確認。魔王軍警備兵？　階級なのかこれ、階級ってのは伍長とか少尉とかじゃないのか。

その、警備兵が、ひのふのみー、九匹。更に警備兵長が一匹。階級章の部分は引きちぎって、小さい袋に入れていく。ついでに軍装はいらないが武器も回収しておくことにする。たぶん武器屋で売れるだろう。ついでに火炎放射器を確認。

「なんだ、こりゃ？」

あの時はこちらになにやら筒先っぽいのを向けたから危険だと判断したが。杖、か。これ。

金属に赤い色の宝石の嵌められた長い杖。手にとって上から下から眺めてみる。どこからどう見ても杖、だな。

火炎放射器の正体は杖だった。それが、四本。

確認のために初期アイテムにあった鑑定機を向け、しばらく待てば。

ＮＡＭＥ：魔王軍正式採用下級魔杖≪炎の舌≫

簡素に名前だけが出てくる。敵軍装備のせいか、スペックデータはないらしい。

ふむ。ファンタジーＶＳ超科学か。またくだらないことだが。しかし、ファンタジーねぇ。

嘆息しながらゴブリンのデータを眺める。魔王軍の兵ゴブリンの

心臓、精巣、脳が薬の材料。骨も安いが道具や建材につかえるらしい。

「二号、三号、解体しろ。データを送るから使える部分を切り分けろ」

自分でやれる自信がなかったので命令を送れば、命令を受けた肉人形どもが動き出す。敵の落としたナイフ片手に死体を切り分けていく肉人形二号。三号はツールキットの中に入っていた解体用のでかいナイフ片手だ。

解体をどういった作業工程で行っているのか、端末で確認。肉人形に出した命令のチェックボックスが表示されているので荷物になりそうな肉関係は命令から外しておく。現金が少ないため、買っておかなかったが今度はクーラーボックスを買っておくべきだろう。一応、コボルトの任務で予想していたから少々大きめだが、冷蔵機能のある袋を買ってある。だが今後の探索にはもっと大きめなものが必要だな。

さて、やっておくべきことの指示を出したので内藤の様子を見に行くことにした。

濃密な血の臭いと少々臭うゴブリンの異臭に少し立ちくらみを覚えながら内藤の所へと戻る。あいつも時間が経って落ち着いただろうかと思えば。

内藤の様子を見て、ため息が口からこぼれた。

（吐いたか。血の臭いや、内臓のせいではない、か）

ゴブリンの解体のおかげで、それほどきついとは思えないが、酸っぱい臭いが鼻につく。

膝をついて荒く息をついている内藤の下を見てみれば盛大に胃の内容物をぶちまけていた。マジマジと見るわけにはいかないので横

目で観察を終える。
　吐瀉物に地球の食い物が見える？　ってことは、転送自体に時間は掛からないのか？　あとは、破片にパラメーターアップアイテムの姿がないことが気になったが今は材料が足りない。思考の脇に置いておく。
　内藤が吐いたのは、戦闘の緊張からだろう。俺自身については、過去の経験か。
　ろくな経験じゃないことにうんざりする。
　顔を下に向ける。端正だった顔をくしゃくしゃにゆがめながら、口の端に吐瀉物の破片をつけた内藤がこちらを見上げてきた。

「大丈夫か？」
「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。……うっぷ」

　まだ吐きそうなのか、口を押さえ、床を向く。

「ほら、使え」

　腰に下げていたポーチから空の袋を取り出し内藤に差し出す。内藤はよろよろと力なく受け取って再度吐き始めた。
　目の前の少女はまだ学生で子供だ。俺が引き込んだとはいえ境遇に同情をする。気づけば、腰をおろして内藤の背中をゆっくりとさすっていた。
　横目で端末のマップを確認する。周囲に敵の姿はない。しかし、ここからは感知できない範囲では、俺たちの侵入を感知したこの塔の住民達が動き始めているはずだった。
　しかし、この様子では内藤は使えないか。しかし、内藤以外の使えそうな人物を今から探せるか？　いや、内藤以外は全部取り込まれたと判断して動かなくてはならないか。その上でこれからの行動と最終的に勝てるか、方策を考える。

現時点でとれる行動は二つか。

軍司令部の組織に合流せずに塔を攻略するか。組織と合流して組織の指示を受けて動くか。

前者は内藤がいるといないとでは格段に勝率が違うだろう。いくつか制限のある俺では、このような状況で、多くの人々を導くことはできない。そもそも俺が俺である限り、俺の全てを知ってまで俺を盲信するような人間は、奇特な馬鹿以外はいないだろう。脳裏に浮かぶ黒髪の女を思い出しながら過去を回想する。

忠実で、完全な、黒霧蜜美。俺の部下だった女だ。

ああ、ならば人を集めるなら、――。

即座に脳裏からその方法を排除した。それは、今の俺がやっていいことではないはずだ。

続ける。内藤が戦えない状態になった場合は、最後まで単独で動かざるを得なくなるだろう。補給の１００人が来た場合を考えても、一人で行動するのと二人で行動するのとでは他者に与える信頼がずいぶんと違う。だからここで一人になったなら、最後まで一人だ。馬鹿か間抜けを調達できる可能性もあるだろうが、そんなものは戦力には数えられない。だからここで内藤を復帰させない限り、組織と合流しない案は失敗する。人員の確保も、内藤で失敗したなら次があるとは考えない方がいい。

それに、集団に一人で抗してもなんら成果は上がらない。

げーげーと、目元に涙を溜めながら吐いている少女を見、考える。内藤を見捨てない理由。内藤でなければならない理由。

内藤は付き合いの短い俺にすら手放すのを惜しいと思わせる価値を見せていた。

察しは余りよくないだろう。想像力が足りないと思わせる部分もある。最近の女子にしては人品卑しからずといったものを感じさせるがそれだけでは好印象を与えるには薄い。実戦では戦闘力を期待

させることもなかった。
しかし、しかし、だ。
ある意味他者に警戒させてしまうような普通の人相の俺と違い。内藤は美少女だった。前にも言ったが１０人中１０人は振り返るぐらいの面をしている。美形だ。美人だ。美少女だ。男と二人きりになって甘い言葉を囁けば必ず陥落させる程度の力がある。嘔吐をしていてもどことなく気品が感じられる。嫌悪を一切他者に感じさせていない。守ってやりたい、と他者に思わせる雰囲気を滲ませている。

（組織に付かず、組織を出し抜き、トップに立とうと思うなら、こちらも人の集団を作る必要がある）

だからこそ、看板が必要だった。異世界で奮闘する美少女剣士。有象無象を騙す広告塔には都合が良い。話した感じでは中々に善良であるし、何かをするときに俺ではなくこいつに説明させた方がほかの連中に飲み込ませるのには楽だ。
何より、弱い。精神面での貧弱さ。これを利用しない手は……。そこまで考えて少しだけ行動を柔らかくする。あまり、道具に見ない方が俺の精神衛生上にいい。昔のようなことをしすぎると、人が離れていく。
思考を戻す。
さて、だからこそ内藤を必要だと判断し、わざわざ確証のない妄想に近い内容を貴重な時間を使って説明してやったりと手間を掛けたわけなのだが、この様子では復帰は難しい。
内藤は捨てるには惜しい。だが捨てざるを得ない状況だ。嫌がる婦女子に剣を持たせ盾を構えさせ悪鬼羅刹の集団に放り込む。下劣外道の仕業といわれても否定できはしないが。
俺が生き残るには必要な行為だった。それでなくてもこの世界で主導権を握るには内藤を俺の支配下に――

そこまで考えて、思考が以前の俺に戻りかけていることに気づく。首を振り考えを散らす。

そうして、内藤自身に意識を戻す。

「辛いか？　ほら、ゆすげ」

背中をさする俺を見上げてくる内藤に、腰に下げていた金属製の水筒の蓋を開けて差し出した。

「あ、あり、が、とう」

内藤は水筒に手を伸ばしてこくこくと口に含むと口の中をゆすぎ、水を吐き出した。目の端の涙を指でぬぐってやるとくすぐったそうに顔を動かす。

「すいません。……すぐ、動けるようになりますから」

「ゆっくりでいい。まだ危険はないしな。で、だ」

「はい？」

辛そうな顔の内藤。目を閉じる。内心の全てを放棄して、善良でなくとも、正しくなくとも、ただ悪徳を起こさない道を模索する。

「やめるか？　探索」

第二案を考える。組織に向かい、すべてを放り出す。

肉人形を、塔内部の情報を手土産に。買ったアイテム、手に入れた情報、すべてを引き渡して、組織と合流する。おそらく塔の中身を味わった俺は塔内部探索チームに加えられると思うし、うまく立ち回れば幹部陣に食い込むことができるだろう。内藤は容姿が容姿だ。体と心は知らないが命だけは助かるに違いない。貞操を捨てて、

女としての能力を駆使すれば組織でも高い地位と財が得られるだろう。

しかし、だ。

思考を進めようとしたが、俺の内心を知らない内藤が縋るような目つきで見上げてくる。

歪にゆがみそうになる口元を押さえて、穏やかに微笑んでやる。

「やめ……、て、いいんですか？」

「いいよ。それで組織と合流すればいい。パラメーターアップアイテムもほとんど手付かずだしな。塔の情報を持っていけば歓迎してくれるだろう」

「か、んげい？　あ、あの、かんげいって、たか」

言葉に、他者を気遣う色を見る。

台詞に困惑。善良な証拠が見え、口元が盛大に歪む。

内藤には、笑みの形に見えただろう。

言葉を、重ねた。

「組織に合流しろ。それで守ってもらえ。

よく考えてみたらさ。内藤、ついさっきまで平和な日本にいたんだもんな。戦えるわけがない。

俺の考えが浅かった。ごめんな」

「あの、タカぼんさん、あなたは、」

ケホケホと喉が痛んだのだろう。咳をする内藤の背中をさすってやる。

あなたは？　この期に及んで俺の心配か？　なるほど、善良すぎるぞ内藤。良すぎる容姿に、他者への気遣いを忘れない心。うん、漫画かアニメのヒロインっぽいなぁ内藤。恐らくそれに対する主人公は俺ではないんだろうが。

何かに引っかかったものの、浮かんだ思考は切り、今度はきちんと微笑みを浮かべる。知り合いが見れば薄ら寒くなると言うだろうが、俺と内藤は初対面のようなものだ。騙されてくれるだろう。

「今は内藤の話だろう」

内藤が息を吸い込んだ。彼女は痛みを我慢して言葉を放つ。

「答えてくださいッ！！」

「どうしたんだ。調子悪いのか、だった「はぐらかさないでくださいッ。私が組織に行ったら、タカぼんさんはどうするんですか？」

「そりゃ、一人で塔の攻略に決まってる。さっきの妄想のこともあるし。そもそも、他人に命を預けるのは性に合わない」

「それだけ、なんですか？」

「それだけだよ。でも、それで十分だろう」

演技を混ぜて本音を語る。そうだ、偽りなき本音だ。

俺は、組織には合流できない。だから、単独行動をする。

敗北が決まっていようと、それはやらなければならないことだった。

「タカぼん、さん？」

「――」

組織に入ったとしたらさっきの考えのまま行動をすればいいと思うが。絶対に確実に破ってはならない約束があった。更に、ひとつの問題があった。

問題とは、既にあちらの幹部連中の間で勝利の後に得られるものの配当が決まっていた場合やあちらの結束が俺の想像以上だった場合だ。つまり新入りの俺が参入することができない場合について。

そのときは、最悪、人間を殺さなきゃならなくなる。絶対にそれは避けたい。人間モドキならいくらでもぶっ殺せるが、人間はだめだ。

あちらの組織に入ったら俺の主導で動くことができなくなるだろう。そして、自慢じゃないが俺は人から人望を得られるタイプの人間じゃない。だからこそ後から入れば排除されやすくなる。そしてそれを防ぐために暗躍すれば自分の手で人を殺さなければならないときがくる。

俺が拒んでも、状況が許さなくなるときがくる。それは絶対だった。

そして、人を殺してはいけない。傷つけることや貶めることはできても、絶対に殺してはならなかった。

『約束ですよ。もう、誰も殺さないって。貴方はもう、そんなことをしなくても大丈夫です。だから、お願いします』

黒髪の女の、蜜美の顔を思い出し、小さく首を振った。ああ、わかってるよ。わかってるさ。

今の俺は冴えない三流大学生だ。ただの、人間だ。

それでも――

想像をする。組織に入ってしまった後のことを想像する。

そこで己が生きていくために何かを行うなら、

「なにか、いってくださいよ……」

――きっと俺は、望んで誰かを殺してしまうのだろう。

「……」

脳裏に浮かぶ最後の絵図を振り払う。

人を殺すこと。

それは、そういうやり方でしか俺が自分の我の通し方を知らないから思いついてしまう方法だ。そうやって生きてきた。そうやって何もかもを手に入れてきた。そうして、敗北した。

だから、内藤が欲しかった。善良な何かが傍にいて欲しかった。俺を信奉しない人間が、俺を盲信しない人間が欲しかった。

だからだませないし、感情を操作しようとも思わない。俺に逆らえるなら、その余地を十分以上に残す必要があった。

俺は、俺が、他人に他人を殺させて悦に入って利益を得られる屑だと既に知っているのだ。だからこそ、人間を殺すような展開にならないことを望む。だから、殺さなくてもいい状況が転がってるならそちらに向かうのが最良だった。

約束を、行ってきた全てを、そして、今から残せる者を守るためにも。

付け加えるならば。

組織に入らない。その選択こそが俺が勝利できる方法の中で一番勝率が高いのだ。

（ということを内藤に言うつもりはまったくないわけだが）

思考の操作ではない。語ることで騙ることを封じるためでもない。俺だけが理解していれば良いことだ。話す必要はない。

俺が言葉を返さなかったためか、内藤は黙っていた。

甘えか、強情か、それとも、なんだろう？

思いついた考えに、内心を出さずに、自然と笑みが零れる。なんて善良な奴なんだろうコイツは。足手まといでありながら、俺の心配を一丁前にしたがってやがる。

「仕方ないな。そんなに言うなら命令してやろうか。大人から子供に」
「……ッ。馬鹿にッ」
「しちゃいない。戦えない人間を尊重してるんだ。命を永らえるのが人間一番だと思うからな」
「だったらッ。タカぼんさんだって、組織に入るのが」
「できるかよ。他者の軍門に下ってのうのうと生きることになんの意味があるんだ。それに俺はもう命を奪ってる。だったら筋を通さないといけないだろう」
「命？　それに軍門って……」
「ゴブリン」
「あ……」
「忘れたとは言わせないぞ。俺は、俺が、俺だけが、さっきの警備兵連中を殺した。だったら最後までやらなきゃあいつらは俺の戯れで死んだことになる。大量に、無意味にだ。そんなことが許されちゃあいけないだろう」
「……。でも、そしたら、タカぼんさんはずっと一人に」
「ああ。だけど、何度も言うようだが他人の、それも見知らぬ人間に命を預けられないのが俺の性分だ。だったら死のうが生きようが自分を貫かなきゃ楽しく生きられないだろう」
「だったらッ。だったら私だってッ！！」

拳を握り立ち上がろうとする内藤。それを、少しばかり信じられないような気持ちで見てしまう。これは、根性があるの、か？
否、内藤は膝に手を突きながらも立ち上がり、俺に視線を合わせてくる。既視感。どこかで感じたような、強い目。白の混じった金色の髪の少女は、自身をけして曲げることのない強い意志で俺を見ている。
少女の、口の端に吐瀉物の破片が混じった顔に、神々しさすら感

じ、内心に疑問が湧く。
これは、この瞳は、この強さは……。
直感した。
間違いない。こいつは、アレの仲間だ。

（【勇者】……）

世界の守り手。善の体現者。秩序側の住人。
不正を糾し、その世界に属する者たちの代表者。
俺が、かつて制し、利用し、殺し、支配し、飼い殺した連中だ。

（ああ、なんて、ことだ……）

思わず内心で漏れた悲鳴を噛み殺す。無理矢理笑みを浮かべようとし――

「私だって、戦えます。タカぼんさん一人に戦わせられません。私だってッ。私、だって。やれるんですッ！！」

（なん、だ。それは）

内藤の提案に、螺旋のように螺旋曲がった発言に、浮かべた笑みが引き攣った。
順序を飛ばしている。精神の再構成の仕方が、おかしい。
思考しながらも、内藤が不思議そうに俺を見てくるのに気づく。
長考を渋っているととられたのか。少し、その視線には拗ねた様な雰囲気が感じられ。内心が恐怖に傾きかけた。
拗ねる。なんて、場にそぐわない反応。

（まさか、こんなところで?！　いや、こんなところだからこそか。

だけれど、なんで俺が、俺と出会うんだコレがッ？！！）

内心で額を抑えながら。考えをはずさないように。しかしそれに恐怖しすぎて忘れないように。しっかりと思考を働かせ続ける。

そうして、やっと、外からは渋々とに見えるように。内心ではどうにか精神を建て直し、言葉を吐き出した。

「そう、か。……わかった。そこまで言うんならついてこい。行動するぞ」

「はいッ！」

元気の良い挨拶。一瞬前までは惨めな人間の筆頭といった印象だった少女の精神が、たった少しの、中身の何もない、俺にとっては本質を暴き出すための牽制のような言葉で、自力で回復した。

くらり、と意味のわからない生物を前にした気分を放り、あることについて考える。これがここにいるということの意味。

そんな馬鹿なと思い。首を振った。あり得ない。あり得てはいけない。

否定の言葉を内心で並べていく。そうだ。そんなことはあってはいけないのだ。

そうして、内藤が”アレ”であることの可能性を感情で否定する。

そして、傍らになんとか歩き出そうとする内藤に手を差し出し。その姿にため息をついた。

（ああ、あれらがこんな無様な筈はない。そうだ。その筈だ。こんなところまで来て、そんな筈があるわけがない）

思考の結果を感情に否定させつつ、一部ゲロまみれの少女に、清潔な水と布を用意してやった。

壱拾弐／

解体作業の終わった二号に入り口を任せ、三号とゴブリンの出てきた部屋に入る。電灯の光は十分に辺りを照らし、隅々まで視界を巡らせられた。

遅れてきた内藤が、部屋の入り口に積みあがった肉や内臓しかないゴブリンを見て顔を青い顔をする。だが無理やり自分を納得させたのだろう。血や死体を多少の情らしきものの篭った目で見て部屋に入ってくる。

「壁にカプセルらしきもの。後は机にロッカー。私物が転がってるな」

「ゴブリン、でしたっけ。もっとファンタジーなのを想像してたんですけど」

「現実は往々にしてこんなもんだろ」

多少の埃は積もっているが、生活臭のありすぎる空間を見て内藤が顔をしかめた。あの殺したゴブリンにも親や兄弟、守るべき恋人や子供、妻がいるかもしれないことを思ってしまったのだろう。

（機械文明人め。何を考えてるんだ）

内藤もそうだが、装備品に遊びが多すぎるくせに、こういう部分が妙に現実めいている。死体は宙に解けず、金は散らばず、経験値も入らない。その程度の仕掛けは施すとも思ったが、これでは、精神的に強い人間か、我欲に満ちた人間しか生き残れはしない。

……日本人の大部分は他人から物を奪うことを忘れてしまっているのだから。

安穏とした日常でなら美徳と思えるものも、こんな状況では邪魔

な美意識になってしまう。

（しかし、９００人を早々に排除したのは、そのせいもあるのか。なるほど、早速上下関係を作らせて、強者に特権と、弱者に嫌がらせか。急かしてるのか、単純に弱い生き物が嫌なのか。やはり早期に塔を攻略させたいのか？）

他者に支配されている。そんな現実が不愉快だった。なんとはなしに埃のつもったテーブルを蹴飛ばすと埃の下にあったであろうトランプらしきものが床に散らばる。

「考えても無駄か。内藤」

「あ、はい」

「俺は壁のカプセルを調べてるから、ロッカーのほうを頼む。装備、道具、書類を優先して回収してくれ。三号、内藤の指示に従え」

どうせ全回収だ。仕分けは後ですればいい。

テーブルから転がったトランプ。その間に先ほど殺したゴブリンどもが集合した写真らしきものがあったものの、気にせずトランプとともに踏みにじり、壁際のカプセルへと向かっていった。

壱拾参／

「ロッカーと辺りの机の中の物の回収が終わりました。そちらはどうですか？」

「さっぱりだな。わかったのはゴブリンが入ってたってことぐらいだ。たぶん、冷凍睡眠装置って奴だと思うが」

付着していたゴブリンの毛髪や中にあったチューブなどを引き抜

いたりして解った結果を伝えると内藤は納得したように頷いた。想像を物証で補強した程度だ。しかし、魔王軍の施設って割にはファンタジーというより超科学関係ばかりで滅入ってくる。

単純に魔法です。と言われればどれだけ気が楽なのだろうか。

「内藤。どう思う」

「はぁ、何をですか？」

「いや、なんでもない」

推測を伝えるのはまだいいだろう。首を傾げ、俺を見る内藤に改めてなんでもないというように手を振る。こっちは妄想ではなく物証が欲しい。それまでは内藤に説明する意味はないだろう。

それに、内藤が”どちら側”というのもある。それがはっきりするまでは全てを伝えるのは早すぎる気がしたのだ。ああ、先ほど感情で否定したが、それでも確証のないうちには戸惑われたのだ。

冷凍睡眠装置の脇にあるプレートを撫でる。読解不可能な言語の羅列を見ながら思う。いずれ、この世界の生き物が使っている文字を翻訳する機械を購入する必要があるだろう。だがあれは、１００，０００クレジットぐらいしたはずだった。

入手は当分は先か。

「とりあえず部屋を出るか。ああ、内藤」

「なんですか？」

「敵が来てる」

黙って俺を見ていた内藤に見えるようマッピング装置を差し出した。光点が二つ。表示は正体不明（Ｕｎｋｎｏｗｎ）。装置は一度登録すれば反応が出るので、ゴブリンではない。

ちなみに内藤も初期支給品のマッピング装置は持っているが、レーダーは購入していないため索敵と警戒は俺の役目だ。

「敵、……ですか」

逡巡。何に対してか。恐らくは敵を殺害することに対する忌避感だろうが。

俺は内藤に対して、首を振る。そうして前に出た。

「俺が戦おう。内藤は、下がってろ」

同情か。哀れみか。自分でもよくわかっていない感情を持て余すことなくボウガンの調子を確かめる。

残弾は十分にある。敵は二匹。ゴブリンより弱いなら勝てるな。

二号と三号に表に出るように伝える。物が転がり足場の悪い部屋の中では戦いづらい。障害物のない廊下に出る。ただし飛び道具に注意するため三号を前に立たせる。

ボウガンを利手に、反対の手にレーダーを持ち、こちらに迫ってくる敵の反応を見ていると、部屋の中の内藤がなにやら何か決心したような表情をしていた。

「タカぼんさん。私に戦わせてもらえませんか？」

「な、に？」

「戦わせてください。私は、守られてるだけじゃ、駄目なんです」

内藤の目に映るもの。それを見て、怖気を伴う感覚が背筋を走る。

まただ。感じる奇妙な神々しさ。有無を言わさず凡人共をひきつける光のようなもの。

俺が持つ、利己的な感情とは別のそれは、まさしく”アレ”らが持つ神性だ。

「お願いします。私も、戦いたいんです」

確信が、疑念が、全てが確定していく。再三内心で否定していた思考が覆せなくなっていく。

かつて出会った”アレ”らを思い出していく。

黙っている俺を見て、何か勘違いした内藤が言葉を被せてくる。

俺を見つめ続ける目には、恋慕や親愛とは違う、何かに突き動かされたような熱。内藤が自身に対して掛けている何がしかの影響だろうもの。奴の全身からあふれる熱意に動かされそうになる。

英雄幻想（ヒロイン）、ふと浮かんだそれを無視し、疑念を無理やり浮上させる。

これが戦闘に耐えられるか？　先ほどまでの、使えなかった少女が戦えるのか？

思想に支えられた一念が、現実に襲い来る驚異を凌駕できるのか？！

否、必ず凌駕する。絶対的な確信と共に俺の脳裏にかつての情景が――

「あの、タカぼんさん？」

引きつりそうになる唇を無理矢理押さえ、

「……やってみろ。ただし、俺も後ろから援護するからな」

今、ここで水を差しても意味はない。既にこれがただの才色兼備ではないとするのなら、最終確認が必要だった。

それでもさすがに剣戦闘は無理だろうということでボウガンを手渡す。

「使い方はわかるか？」

「はい。見てましたから」

「そうか。不安ならレーザーポインター使え。このボタンだ。あと……」
「はい？」
「なぜ、俺の手を握る」

掴むならボウガンだろう。普通。
暖かさと滑らかさを感じるすべすべとした女子の手。それを引き剥がし、ボウガンのほうを押し付ける。

「すッ、すいません」
「しっかりしてくれよ。任せるからな」
「はいッ！！」

ボウガンを両手で抱える内藤を見る。敵を殺すことを決意しただろう目だ。それは、今現在の内藤にはあり得てはならない目だった。決意があふれているのだろう、興奮したように紅潮したような表情。元々の素材とそれらが合い混じり、画家か何かにこの姿を描かせれば名画にも匹敵するだろう一シーンになったはずだ。
凡人ならばただ惹かれてしまう光。
この世界をひとつの物語と仮定した場合。その中の登場人物が持つかのような異常性（カリスマ）。それを浴びて、正常な思考を保てるのは一体、どれだけいるのか。
過去のいくつかの事象を思い出す。それを苦い嘆息と共に吐き出した。

「内藤」
「はい？　どうしました」
「いや、なんでもない」

はい？　と俺を見て疑問が浮かんだんだろうが、俺が何も言わな

いのを悟ると内藤は外を警戒しながら扉へ向かう。

（お前は最初から、そうだったのか？）

言おうとした言葉をかみ締める。あんなまぶしい生き物が傍にいて、正常な思考を保てる人間が一体何人いる？　あいつがただ生活するだけでもその威光は周囲を圧するのだ。

苦笑が浮かんだ。あり得ない。あり得てはならない。ならば最初の戦闘をどう説明する？　そもそも俺と出会った時点で俺に対して魅了を発揮していなければおかしいはずだ。

なら、内藤がもともと見目だけがよくて、さっきのあれはこっちに来てから得た性質だとするならば。

内藤を見ていると自然に浮かぶ単語を弄ぶ。

英雄。ヒロイン。ストーリー。

（挫けたから内藤は得たのか？　なら、いるのか？　来るのか？　あれが、主人公が）

ふと、先の思考を思い出した。俺は、確かに、内藤を見て、漫画かアニメだのと、主人公は俺ではないと、自然と考えていたのだ。

やはり、俺の知らない裏側があるのか？

思考を再編成する。俺の目的を設定しなおす。機械文明に与えられたものではなく、個人的な欲求に基づくそれ。自然と頬が吊り上ってきた。

「タカぼん、さん？」

「うん？　どうした。準備できたか？」

「あ、はい。でもどうしたんですか？」

「何が？」

いい加減、動かないことが不思議なんだろう。不安顔で俺を見ている内藤。その足は二号と三号がいるだろう方向に向いているが、意識は俺に向いていた。

「いえ、何か楽しそうに笑っているようでしたから」
「たのし、そうだったか？」

そう見えるのなら、お前の目は節穴だ。
楽しそう？　事ここに及んで楽しいわけがあるものか。

「いや、そんなことはない。ああ、そんなわけがない」
「そう、ですか？」

そうだよ。
予備のボウガンを腰からはずし、視線を扉の先に向けると内藤が歩き出す。
その華奢な筈の背中を見つめながら小さく呟いた。

「楽しいわけが、あるものかよ」

俺は英雄なんて大嫌いだ。神も天使も勇者も大嫌いだ。
奴らの正義は暴力（タダシ）すぎる。奴らの行為は真っ直ぐすぎる。
暴君は殺され、魔王は犯され、悪魔は潰され、支配者は降ろされる。そして、嘘は明るみになる。
連理貴久のような敗北者が相手にできるような存在じゃあないのに。
ここには、主人公（ヒーロー）の実在を証明する姫騎士（ヒロイン）がいる。

――きっとくるのだ。きてしまうのだ。

物証はない。しかし確証はあった。

内藤(ソレ)が”いる”のだ。状況がそれを、環境がそれを、あちこちに散らばった要素がそれを補足する。

地獄のような環境に、弱者の為の聖剣が降りる瞬間。それを予感させる登場人物!!

そして、脳髄と背筋を先ほどから刺激し続けている予感で、確信する。本能的なものだ。俺が、俺のために信じるべき予感。同類以外には決して口外できない愚昧な妄想。

聖剣の切っ先は俺に向けられ、俺に終焉は訪れるという事実。

その予感を全身で味わいなおし、反芻してから嫌々と否定したものを掘り起こす。

約束を破ってしまうかもしれない。誓いを嘘にしてしまうからもしれない。

それでも、かつて日常的に行っていた。人を殺す感覚を思い出す。陥れる覚悟、奪う覚悟、手足をもいで動けなくする覚悟。

他者を害する幻想に身を浸し、そうしてからそれを、飴を舐めるようにじっくりと確認する。

吐き気を催す想像だ。それでも、いつか躊躇しないためにしておく必要があった。

命を奪う覚悟を。

覚悟を決めて、息をつき、そうしてからこちらに振り向いた内藤に微笑みを、無理やり浮かべた微笑を見せる。

幸い、先ほどのそれと同じ微笑に見えたのか。内藤も俺にほほえんで見せた。

まるで花が咲いたような可憐な笑み。力強さ、強い意志を感じさ

せる人の顔。
思わず、言い訳のように付け足した。
「そう、だな。きっと内藤が頼もしく見えたからだろう。顔に出たんだな」
「そうですか！　あの、頼もしく見えましたか？」
「ああ。頼りにしてるよ」
力強く肩を叩いてやるとまるで子供のように破顔する内藤。
まるでゲームイベントの一シーンのように他者を魅了する表情。
それを見て心中に一個、確固としたものが転がる音がしたような気がした。
俺を殺す者（ヒーロー）は、必ず来る。

壱拾肆／

私のお茶汲みの初仕事は、奇妙な四人、いえ、二人組に対してだった。
もう夜になるという時間、配属されたAグループの人たちと一緒に帰ろうという時に軍司令部に現れた二人組。
「トップの人間と話がしたい」
そのとき話掛けられたのは私ではなく、作業のために残っていた主婦の人だったのだけれど。血まみれの武器や防具に身を固めた二人と、皮膚のない、肉をむき出しにした人型の生き物みたいなものが二つ。そんな変な集団に話掛けられた人は脅え、戸惑っているようだった。

大きな弓を持った肉の塊が引きずっている橇なんかは、すごい異臭を放っていたし。

そういったわけで、どう対処すればいいのかわからなかった主婦の人たちが顔を合わせていたところに、武器を持って見回りをしていた幹部の人がやってきて、二つ、三つ、言葉を交わして女の人と橇を引っ張っている肉の塊だけが別の方向に向かっていった。

思えば、幹部の人も少しおびえているみたいだった。それに既に実戦を経験している人がいることに困惑しているみたいだったのだ。

そうして、ついでのようにお茶を入れてくれとまた走ってきた幹部の人に言われて、私はみんなから離れて軍司令部の奥にあるこの組織の一番のトップが待つ一室に行くように言われたのだ。

壱拾伍／

塔を探索した俺は軍司令部へと来ていた。

先ほど内藤と三号を特別任務清算のために向かわせ、その間にここの一番上と共に内藤がいると話し難い話をすることにする。内藤には渋ったが、俺が戻るまでロビーで時間を潰しているように言い含めておいたので、ここのトップとの話し合いを聞かれる恐れはない。安全については三号が護衛についている。

不安はなかった。

俺は、二号と共に案内役のおっさんに連れられて長い廊下を歩いていく。軍司令部という割りには機械文明人の姿はない。恐らくは参加者が使えるように開放されている施設のひとつなのだ。

「……」

「何か？」

「い、いや。なんでもない」

先ほどから案内役のおっさんがちらちらとこちらを見ていた。
騎士甲冑姿の二号とところどころ傷を負った俺に対して案内役のおっさんがビビッているようにも見える。いや、実際にビビッているんだろう。
それでも好奇心は抑えられないようでチラチラと俺の顔色を伺っているのだ。外見を見る限りは荒事に慣れていそうな人間だが、上に立つような人間にも見えない。人数合わせのために使われている人間か？

「……」
「……」

俺たち以外誰もいない、無人の廊下に靴音だけが響いていた。長い、長い道だ。それなりの人数が働けるように設計されている施設なのだろう。
おっさんが話しかけてこないので、無言で歩いていく。こちらから話かける意味は薄かった。情報を持っているようには見えなかったからだ。
しばらくすると道の先に明かりのついている部屋が見えてくる。周囲にも空き部屋らしきものはあるが、人の気配はしない。もちろん鈍い俺のことだ。相手が隠れているならきっと発見することはできないだろう。
明らかな敵地。危険じゃないかとも思うが、二号がいる以上、不意を撃たれ、攻撃を受けたとしても。俺が一撃で死亡しない限りは逆襲は可能だ。

「この奥だ」

チラチラと俺を伺いながら、おっさんはなんと声をかけたら良いのかわからない顔でそう言った。

そのおっさんも、ドアから離れた位置で止まっている。内密な話には呼ばれない。そういった立場と思われた。

「アンタは来ないのか？」

「鹿島さんからは入るな、と言われてるんだ。なぁ、君は、まだ学生みたいな歳だろ」

「三流大学の学生だよ」

へぇ、と感心した顔になるおっさん。たぶん、年齢を聞いて予想以上に若いと思ったのか、それとも俺が年下だと確信を得られたために心持、精神的な優位を得られたのか。途端に口のすべりがよくなった。

「実戦、どうだったんだ。やっぱ怖かったか？」

「あー、火炎放射器持った本職の軍人と殺し合いするようなもんだと思えば。と、立ち話してる暇ないんだ。案内ありがとう」

なめられたことに苛立ったのか、正直に答えてしまった。顔色を青くしたおっさんに大人気ないと内心で謝罪をしつつ、奥へと進む。

あのおっさんも、きっと不安だったんだろう。

同時に、支配する側も統制が取れているわけではないと確信が取れた。あれも一応は幹部らしいのだから。そのくせ少しばかり情けない部分が多いようにも見えたが、使い捨てか…？　それとも俺が油断するように仕向けてるのか？

息をつき、扉の前でノックをする。

「入ってくれ」

間髪入れずに横柄な言葉が聞こえた。扉の向こう側にいる人物からの声だが。

（ふん、入ってくれ、ね。……ノックしなきゃよかったか。それはそれで喧嘩を売ってるように思われても仕方ないわけだが。不快だな）

果たして、許しを受けて開いた扉の向こう側には、壁際に立つ五人の、本職にしか見えないヤクザっぽい……。いや、ヤクザじゃない。ヤクザ以上の暴力の匂いと、礼儀を学んだ者特有の、硬い雰囲気の男たち。そして来客用らしきソファーに座る、細い体つきの男が一人。

歳は３０～４０ぐらいだろう。切れ長の目には俺のような素人には察せられない殺気が込められているんだろう。

部屋は敵意と疑念で満ち、友好的な空気は感じ取れなかった。

「出入り口で突っ立ってられても困る。入ってくれ。お連れの肉人形ともね」

「へぇ、こいつを知ってるってことは、いろいろと調べたみたいだな」

「車とバイクが一台ずつ。道具屋と武器屋からは肉人形と呼ばれる兵器が買われていたからね。来ると思っていたよ」

「バイクは俺じゃないな」

「ああ、知っている」

冷たい視線で眼鏡をくぃ、と上げた男はこちらを見ずに答えた。

男に誘われるままにソファーに座る。対面に座っている男と相対するように視線を向けると男はゆるゆるとこちらに視線を向けた。

駆け引きをしている暇はないが、相手を計る意味でも情報を小出しにして、攻めてみる。

「まず本題に入る前に、お互いがどこまで気づいてるかについて話

そうか」
「もちろん、私に用があるらしい君からだろう？」
「まぁ、な」

解っていたことだが、下に見られすぎている事実に、口元が引きつるのがわかった。
主導権は相手か、俺か。悩む必要もなく理解できた。相手側だ。
俺は、相手に提案を了承させるために来たんだ。まずは下の立場から対等な立場へと上がらなければならない。そうでなくては提案すら聞いてももらえないだろう。
それはそれとして、俺の話し方はかなり礼を失している筈だが、壁の連中が動く様子を見せていない。確かに肉人形は敵対したならば怖気を催す程度の迫力はあるが、それだけだ。あのゴブリン連中のような本物の戦士なら抗う程度の気概は見せてくる筈だ。
トップが俺のような若造に虚仮にされている筈なのに動かないということは、それだけトップが敬われていないか。それとも――
面倒な気分になる。
それに気づいたのか、正面の男が壁の男たちを見て頷いたように口を開いた。

「彼らは私の元々の部下でね。安心してくれ、今は壁の花だ」
「うまく統制されているようで何よりだ。それで、俺が妙な真似をしたら種を吐き出すわけだ」
「そうとも。それが役割だ。犬よりも忠実だよ」
「花は主人を噛まないからな」

ご明察だ、と男が肩を竦める。

「自己紹介は必要かい？」
「結構だ。まずは本題から行こう。そっちもくだらない人間の名前

を覚える気はないだろ」
「賢明な判断だ。さて、私から話して欲しいか？　うん？」
視線を交わす。小さく俺のほうで頷いた。俺から話した方が話が早い。
「俺から行こう。真摯な態度で行きたいし、何より時間が押している。守る面子もないしな」
「そうか。それでそちらが私に直接伝えるように言った」
「ああ。〝塔の攻略は賭けになっている〟。これは、そちらも了解してもらえたと思っていいのか？」
言葉に対する返答は、頷きだった。
そうだ。組織のトップと、ただ何かをわめいた程度でこうやってサシで話せるわけがない。会談をするために、幹部の一人に伝えるように言った内容は一語も違わずこの男の耳に入っていた。
そして、頷く男。やはり俺以外にもそこに想像の及ぶ人間はいる。この組織が最初の演説の時点で、戦闘に投入する人数を絞っていたのはそれが理由か。
俺は、俺以外にも確信を持っている人間がいることに安心を覚えていた。俺一人の妄想ではないことがわかれば、他の推測の補強もしやすくなる。
事実が、今まで踏み込めなかった部分の推測を可能にする。
「それで君は、どの時点で君は気づいた？」
「肉人形と特別任務。この二つだ。そっちは？」
「支給品と特別任務。この二つだ。君には先を越されたみたいだが」
先を越されたというのは特別任務のことだろう。足を組み、挑発するように笑みを向ける。

「あの時はお前と対立するつもりだったからな」
「対立。つまり後援者を使って私たちを潰すつもりだったのか」
「ああ。最終的な目的を達成できないようにしてお前らを内部分裂させるつもりだった」
内部分裂、との言葉に男が挑発的な笑みを向けてくる。
「内部分裂ね。できると思ったのか？」
「３０人も幹部がいて、９００人も雑多な人間がいれば引き抜きや買収で内部崩壊はともかく、分裂程度なら誘えるだろう？　俺はそこを楔に次の手を打つつもりだった」
「ふむ。絵に描いた餅、とは一概に言えないな。私たちのこれは、未だ足元すら定まっていないからね」
頷く。未だ雰囲気でしか人を縛っていないこの組織は潰そうと思うなら潰せないこともない。
「それで、どんな心境の変化があったのかね。少なくとも今日の昼間まではこちらと正面から戦うつもりだったみたいだが」
「敵を見つけたんだよ」
「敵？　というと」
「管理側じゃないさ。あれは敵じゃない。むしろ現状では味方に近いが、潜在的な敵でもないもんだろう。
木に例えれば、そうだな。枝にも実にも届いてない連中は管理側を理不尽を押し付けてくる連中だと思ってるが、成っているリンゴのとり方を知ってる俺たちにとってはそうじゃない。むしろ元の世界よりも居心地の良い空間を作れる可能性がある。
もともと、そっちだってあれと喧嘩しようなんて考えちゃいないだろう」

「ああ。敵対するには馬鹿馬鹿しい連中だ。直接的な命の危機がない限りは逆らおうなどとは考えたくない。
君は木に例えたが、うまくやればその枝から果実をとるだけでなく、枝や幹を作って家を建てることも可能になる。その程度の利益は相手も見せている。ならば今は従っておくのが吉だ」

同意だった。異世界だのファンタジーだのSFだのと、逆らうには馬鹿馬鹿しすぎる。俺たちに気づかれずに体内に小型爆弾ぐらいは埋め込んでいてもおかしくないのだ。
そもそも、この施設のどこかに俺たちを施設ごと焼却するための装置があっても、おかしくないのが現状だ。
ただ、それでも隙を見せたら俺も目の前の男も管理側を噛み殺すために動くだろう。その程度には恨みも持っている。

「と、考えると、私たちだけでなく君をも危険に晒す人物がいたわけか」

言葉の鋭さに、一瞬、冷や汗を覚えた。
唐突すぎる内容の展開？　違う、推測する材料は与えてなかったが、話題の並びは俺が予定していたものだ。
目を向ければ、男は口元に笑みを浮かべている。お互い、浪費する時間はないわけだ。
それでも俺は、周りに解りやすいように言葉に困惑を込めてやる。

「どうしてそう思う？　そちらが危険になるなんて、まだ言っちゃいないが？　俺がトチ狂って塔には危険な生き物がいるから一緒に倒しましょう、ってお願いにきただけかもしれないぞ？」
「それはない。塔の内容なら秘すべきことだ。特に危険な生物がいたならばそんなものは余計に隠しておくべきものだよ。
私が、君の立場ならね」

細身の男の確信したような口調。唇が自然と釣り上がり笑みを形成した。どうやら俺の見立て違いではなかったらしい。

「どうしてそう思う？」

「君はそういう人間じゃないだろう。先ほどから賢しらに手札を次々と晒しているのは私たちに君の頭の悪さを伝えるためではなく、私を試しているだけだ。今現在、君が無防備に私たちに存在を知らせ、手札を晒し、目的を暴露するのは無意味だ」

「正解。話した甲斐がある」

敵対するならば初日から軍司令部には訪れない。依頼の清算は軍司令部でしか行えないが、それなら組織の下っ端でも買収してからにすればいい。俺と内藤の存在を知らせる必要もない。未だ組織に入っていない連中の中に組織より先んじている連中がいる。まずはそれだけでいいのだから。もちろん、そんな連中がいることすら知らせないのが最上だが。こんな閉鎖空間で完全に姿を消すのは不可能だ。

それでも知らせないことの意味がある、時間稼ぎ、戦力増強、狙われる前に狙う時間。そして埋伏させる毒の存在。

しかし先にも言ったとおり。俺が自身の天敵の出現を悟ったならば。遊んでいる時間はなかった。

悠長に組織を潰している時間などない。

むしろ、手を取り合うべきは目の前の男なのだ。

男は、俺を見て、吊り上げた唇をかすかに開いた。

囁きには、欲求が隠されていた。

「それで、君と私の共通の敵とは一体なんだ？」

わかっていたことだが。質問に、胸が高鳴る。回答を吐き出す唇

が痙攣したように震えた。言葉に渾身の殺意を込め、未来に出現するだろう敵に想いを馳せる。
そうすれば。
言葉はするりと唇から零れ落ちる。

「英雄」
「えい、ゆう」
「英雄だ」

その一瞬で、部屋の空気が変わった。変化は、細身の男が眉を顰め、俺が唇を吊り上げただけ。壁際の男たちは話の流れについていけず、眉を顰め、首を傾げるだけだ。
それでも、ピリピリとしたものを細身の男から感じるのだろう。困惑だけが止まらない。
そして、俺の全身からも男と同じものが垂れ流されていた。お互いに対するそれではない。可能性に対するものだ。
それは、殺意だった。純然たる。己の利益を侵害しに来るものへの。

「英雄。英雄ね。英雄か。なるほど」

お互い、笑みが零れた。お互い自分の性質を知っているからこそその脅威を理解することができる。
英雄。ヒーロー。主人公。
それは正義である。それは善良である。それは集団の意思の体現者である。
彼は、悪党の天敵である。
お互いが口を閉じ、黙考。
それでも先に口を開いたのは、目の前の男だった。

「質問1だ。ここは物語の中か？」
「肯定。ここは物語の中だ。少なくとも倒されるべき悪がここにある」
「質問2だ。どうやって実在を確認した？」
「連れが英雄の幻想（ヒロイン）だった。善良な、美少女剣士。そういう存在だった」
「それだけ、か？」

拍子抜けしたような表情で細身の男がこちらを見る。俺を馬鹿にしたような表情を見せるが、その言葉は英雄の存在を否定したいだけのただの戯言だろう。お互い、言いたいことはわかっている。
念押しするように事実を吐き出す。

「ただの女子学生が、２０分前には実戦の緊張に耐え切れずにゲロ吐き出してた女子学生が、だ。馬鹿にしただけで克己して精神を再構築する。その後の実戦で、魔王軍とかいうおかしな連中の実戦慣れした戦士を、パラメーターをろくに上げずに、初めて使う武器を持って」

あの一室のあとで起きた出来事を回想する。
余りの異質さに吐き気を催しながらも、言葉を吐き出す。

「苦戦はしたが叩き殺した。それも遠距離用のボウガンじゃない。近接武器を持って打倒した。ただの女子学生がだ。武器の扱いも知らない小娘がだッ！！
これを英雄（ヒロイン）と言わず何を幻想（ヒロイン）だっていうんだ？　しかも面は特上だ。確固たるもののない人間なら惹きつけられずにはいられないぐらいに」

言葉だけでは足りないだろう。目の前の男の表情には疑念がある。

だが、確証は、確かにあった。
懐から端末を取り出して内藤の情報を引き出し、机の上に叩き付ける。

ＮＡＭＥ：内藤三咲
ＨＰ　６／６
ＳＰ　１０／１０
腕力　５
硬度　２
俊敏　７
知能　４
運勢　６
能力　【戦乙女≪ブリュンヒルデ≫】レベル１

装備
右手武器：ショートソード
左手武器：バックラー
頭装備　：ヘアピン
胴装備　：銅の鎧
腰装備　：足軽下鎧
足装備　：足軽脛当
アクセサリー１：シルヴァーアクセサリー
アクセサリー２：命中の指輪

「塔に入る前までこいつに能力はなかった。【なし】、なんてご丁寧に書いてあった。それがたった一度の戦闘で能力持ちだ。どう考えてもこいつは主要人物だ。誰か（エイユウ）の物語のな」

「そういう人間だった、ということは？」
「だから、そういう人間なんだろう。それで、……どうしてそこまで認めようとしない。煮え湯でも飲まされたことがあるのか？」
「ふん。逆にそこまで簡単に認められる方が信じられないがね。本命（ロー）の姿は確認したのか？」

していたら既に殺している。苦虫を噛み潰したような俺の表情で悟ったのだろう。相手も、納得したように頷いた。

「こちら、にか。施設の中、そうだな、市街で出会っては？」
「いない。英雄は組織のほうが可能性は高いとは思うがな。まだ覚醒してないんだろう。参加者で取り逃がした人数は？」
「精確な人数はわからない。が、バイクを借りた人間以外に数人だ。そいつらは嬉々として我々の行動範囲外の施設を探索しているか。周到に隠れている。こちらも施設の把握や組織構築で忙しくな。誰も姿を確認していない。
幸い、英雄の覚醒には、悲劇が足りていない。わかりやすい虐殺もなかったしな」
「アレがお前の組織にいて。なおかつ、覚醒を防ぐなら、幹部以外は戦闘に投入しない。女子供が涙を流すような悲劇を起こさない。それで十分なんだろうがな」

「だが――」
「ああ――」

お互い、息を吐き出す。

「俺たちは悪党だからな」
「私たちは悪党だからな」

悪事をなさずにはいられないのだ。悪事をなさずに何物をも手に入れることはできないのだ。

「せっかく異世界とやらに来て、大量の善良な人間を使役できる立場に立てたんだ。暴虐するべきだろう」

「せっかく異世界とやらに来て、美少女を傍においてダンジョンを探索できるんだ。自侭に生きるべきだろう」

お互い、心にもないことを口にしながら嘲笑しあう。ああ、こんな安っぽい目的が俺たちの願いなわけがない。

暴虐も、自侭も、元の世界で好きにやってこれた。それだけの力が俺たちにはあったのだ。

だから、願うならば――

細身の男が唇をゆがめた。そうして脚を組み、俺を馬鹿にしたように嗤う。

「情報提供に感謝する。それで、それだけかね。英雄とやらはこちらで始末しておこう。そちらの女学生とやらもこちらで引き取ってやってもいい」

「ふん、遠慮しておく。英雄は、まだ手を出さなくても良い。それで、こっちが本題だ」

言ってみろ、とあごで示される。自然と唇がつりあがる。舐めやがって。

「同盟を組もう」

「何に対する？」

「英雄を殺すこと。この塔を攻略すること。その両方だ。協力しあう仲になりたいって意味だ」

「却下だな。こちらにメリットがない」
「拒否するなら」
「どうする？　暴力に訴えるか？」

挑発的な笑みを浮かべる細身の男に嘲笑を返してやる。お互い、わかってやっている。

「ああ。訴えよう。二号。壁の花を死なない程度に痛めつけろ」

その言葉に反応できるものはなく、惨劇は始まりと終わりまでが一瞬だった。

壱拾陸／

壁の花となっていた男たちが驚愕の声を上げた。
俺の言葉に反応して武器に手をかけようとしたときには既に、目の前に二号がいたからだ。
振り上げられるのは金属の篭手に包まれた腕。中の肉の塊はただの肉ではなく、膨大なエネルギーを秘める筋肉の塊だ。それが振り上げられ、壁に立っていた中年の男に叩きつけられる。
骨の破壊される音が響く。宙を飛ぶ人。砕け散った肉の袋が壁に叩きつけられる。命令を二号が律儀に守ったためか、それでもそれは生きている。男の口からはうめき声と血液が濁、と漏れ始める。
まず、一人。
味方が受けた衝撃によって、ようやく現実に復帰した残りの四人。各々が、それぞれ持っている武器に手をかけるもすべてが遅い。
二号の踏み込みによって一人の足の甲が砕かれる。「あぐぅッ？！」そのまま駆け抜けるようにして残り三人の足の甲を、「ぐぁッ」「ぐぅッ」「げぇッ」二号が器用に走り抜ける。「て、てめッ」「

ぬぁッ」直後に宙を回転するようにして跳ね、膝を、最後に踏み抜いた男の肩に叩きつけた。

ぱきり、というよりバキゴキグキと盛大に骨の折れる音が室内に響いた。そうして間髪入れずにロングソードを引き抜くと足の甲を抑えていた三人の男の首にぴたりと、皮膚に触れるようにして剣を振り下ろす。地面に団子のように並んでいる首に、ぴたりと。荒事を主にした人間を超える力量に思わず、仕掛けた側の俺の口元が引きつりかけるほどだ。

四人のうち、一人は砕けた骨を押さえてうずくまり、三人の男は足を押さえながらも首筋の感触があるため起き上がることさえできていない。最初のひとりなど口から血を吐き出しながら痙攣するだけだった。

幸い死んではいないようだったが、死んでいないだけなのだろう。今すぐにでも治療しなければ命がなくなってもおかしくはない。

五人が五人とも忙しくてパラメーターアップアイテムを口にする暇さえなかったのだ。どノーマルの人間が、塔でまともに戦える肉人形にかなうわけがない。

「なるほど。メリットはあるようだ」

「断るとデメリットになるがな」

細身の男は腰の剣に手を伸ばし、俺はボウガンの引き金に指を引っ掛け男に向けている。

「それでも断ると言ったら？」

「内藤も含めて参加者全員を殺害する。いったん状況を白紙に戻す」

「狂人か……」

「時間稼ぎにしちゃ上等だろう？」

剣の柄から指を離し、ため息をつく男。英雄（テキ）の出現を封殺する根

本の手段。それの提示。今の時点での人間側の状況を思えば、肉人形二体で可能な行動のひとつだ。

殺害後の塔の攻略についてはゆるりと時間を掛ければ済むことだ。都市内のリソースを全て掌握し、俺と肉人形に注ぎ込めば不可能ではないだろう。問題は、人間を殺すことになるため、俺がその手段をとれないことだったが。それでもハッタリとしては上等だった。

相手には俺が暴力の行使に躊躇しない人間だと思わせている。そして、俺が人間を殺せないことは知らないのだ。

男は、頷きを俺に返した。

「わかった。同盟を組もう。対等な同盟関係でいいな？」

「ああ、それでいい。付け足すなら、英雄を確認した時点で俺は塔の攻略を諦める。覚醒、非覚醒も含めてな」

「理由を聞いても？」

「英雄が俺の天敵だからだ。あれに捕捉されたら俺もお前も終わりだ。だから先手を打つ」

「殺害に成功した場合は？」

「正直、まともに戦って殺せるとは思わないが、そのときも攻略の最優先はそちらに譲ろう。俺は次点でいい」

「嫌に気前がいいな。何を考えている」

「言葉通りだ。英雄さえ殺せればいい。言っただろう。敵がいるってな。魔王軍は敵じゃない。ならそちらに栄光はくれてやるさ」

「なるほどな。我々を生贄に捧げるわけか」

「バレたか」

鼻で嗤う。そうだよ。誰が好き好んで英雄の前に立ちたがるってんだ。

塔の攻略進度は恐らく英雄の攻撃の的にされる確率の高さになる。だから英雄の姿を確認した時点で諦めなければ敵の標的にされるだろう。ヒロインを手の内に持っている以上、それは避けねばならな

かった。敵であっても味方であってもうかつに英雄に手持ちの主要人物を接触させるわけにはいかないのだ。

そんな俺の内心を知ってか知らずか。細身の男は納得したように頷く。

「わかった。こちらで英雄は引き受けよう。これも私の天命だろうからな」

「嫌に気前がいいな。自覚した英雄が相手なら十中十で死ぬぞ？」

「わかっている。が、暴虐を行うものが暴虐を相手にして保身を選ぶわけにはいかないだろう」

悪党ゆえに。正義との対面を避けるわけにはいかないのだ。それを行っては暴虐を行うことができなくなる。

笑みが浮かぶ。悪党のジレンマ。

お互いの覚悟が確認できたためか、するりと言葉を吐き出せた。

「この同盟は俺、連理貴久を頂点とする組織とのみ有効とする。で、いいか？」

「わかった。私、武満法行（タケミツホウギョウ）を頂点とする≪法の剣≫は貴様、連理貴久を頂点とする組織とのみ同盟を結ぶ。それでいいな」

頷き、くるりとボウガンを逆さにして腰に戻す。相手もわかっているのだろう。俺は、ボウガンの引き金に指をかけてはいたが、ボウガンの安全装置はかけたままだったのだ。

それでも地面に寝転がっている連中には狂人が我を通したと目に映ったはずだった。

頭の悪い男が舐めた態度で馴れ合いをしに来たのではないのだ、と。

いずれ下の連中にも俺の脅威度は伝わることになるだろう。

「今から細かい部分を詰めるぞ」
「ああ。わかっている。時間は有限なのだからな。だが、少し待て」
立ち上がった武満を目で追えば、奴はうめき声をあげる男たちを治療するために、重症を負った男の一人に向かっているところだった。

一階層【堕王の天槌】？

壱拾漆／

書面契約。これは二通あり、武満と連理の両名が持つことになる。立会人はいないものの、俺は武力を、武満は組織力を背景に契約を成立させた。契約が守られなければお互いが相応の手段で報復することになる。

そして、以降は各施設を組織≪法の剣≫が独占したとしても、俺を頂点とする組織も使えるようになり、特別任務の報酬を渡す際に苦労することはなくなる。

もちろん、≪法の剣≫と連理貴久を頂点とする組織以外は軍施設は使えなくする。後に新たな勢力が現れたとしても≪法の剣≫の組織力によって排除する。これは伝えてないことだが、厄介な勢力相手なら俺も陰ながら手伝うだろう。便利遣いされないようにバレない程度にだろうが。

武満には一週間後に新たな人間が投入されることを俺から伝えておいた。当然そいつらも≪法の剣≫か連理貴久に所属しなければ軍司令部の施設を使うことはできなくなる。もちろん、強攻策にでないよう自然と≪法の剣≫に入るように仕向けるのだろうが。

「さて、大体のことは決まったようだな」

「ああ、なら次だ。頼む」

武満は契約書の書面を重ね、カーボン紙のようなもので今から決めることを書き連ねていく。

「特別任務についてだが」

「特別任務については。初期の四人はもらっておく。新たに発生し

た人物についてはそちらに譲ろう」
「虫が良すぎるな。発生しなかったらどうする？」
「その場合は初期の四人のうちから好きな人物を三人くれてやる。こちらで任務を進めて、実際の利益はそちらが願うものを優先できるようにしよう」
「わかった。ただ、それだけではそちらに有利すぎる。何か寄越してもらおうか」
「なら、こいつをくれてやる」

こういうこともあろうかと、腰にぶら下げていた魔王軍正式採用下級魔杖≪炎の舌≫を放り投げる。

「これは、杖か？」
「戦利品だ。塔の内部で使用されている兵器のひとつ。効果は火炎放射器みたいなものだ。ただ使い方がわからん。施設の道具屋にマニュアルがあったが、俺は買わなかったからな」
「こちらは入手済みだ。川村」

杖をじっと眺めていた武満が誰かの名前をあげる。誰のことかと思えば「お呼びでしょうか」と壁の花だった一人が俺たちの傍に寄ってきていた。
ガタイのいい、黒い服を着た男だ。二号に足の甲を貫かれただけの人間。
腕や肩の骨を砕かれた二人はさすがに重症だったのか、治療のために退室したが、構わず部屋に残っていた足の甲を砕かれた三人のうちの一人だ。一時、治療のために、退室し。傷薬とポーションで即座に体を戻したのだろう。交渉の場に戻ってきていた。
頭を下げ、武満から杖を受け取った川村は俺や二号に怯えることはない。へたれを晒して武満の面子を潰さないためだろう。大した忠誠心だ。

ちなみに二号であるが、”悪魔の騎士”と、そう呼ばれてもおかしくない威圧感を撒き散らし、俺の後ろに控えている。

「塔攻略班に持っていってやれ。タカぼん、戦闘の際に何か注意することはあるかね？」

「万金の価値を持つ情報をくれてやるわけにはいかんな、と言いたいところだがサービスだ。敵は一兵卒まで戦闘のプロ。そう覚えておいたほうがいい。少なくともアマチュアじゃあなかった」

「川村」

「はい。伝えておきます」

「頼む」

川村と呼ばれた男が出て行き、会話は再開される。

「他に組織ができたときの対処はどうする？」

「タカぼんはどうしたい？　こちらとしては組織が作られる前に潰すか取り込むかするだけだが」

と、いっても組織力のない俺には組織に対処することができない。できても他がおざなりになる。

「その件はそちらに従おう。ここは明確にしておくが、そちらと敵対する人物を連理貴久の組織は護らない、匿わない、援助しない、その方針で対応する。もし問題が発生したら俺が直々に≪法の剣≫の責任者と話をつける。異論は？」

「ない、な。念のためタカぼんの顔を幹部全員が記憶しておくように命令しておく」

「助かる。あと、だ。主要人物に対しての方針だが……」

「そう、だな。それが問題か。タカぼんは何人いると思う」

「４人から６人。もしくは１０人以上だな。内訳は男が２人以下。

女が2人以上。10人以上の場合は男が多少は多めになるだろう。
判断の理由としては、塔の内部での戦闘は大人数が展開しにくいことが上げられる。もちろん戦闘しやすい場所がないこともないが、基本は4人から6人が攻略側の人数としては効率が良い。これがたった1人の英雄の物語である以上は、出てくるのはそれほど多くはないはずだ。そう考えて問題ないと思う」
「何故女が多い？」
「以前接触した奴がそういうタイプだった」
「なるほど。それで、取り込めるか？」
”取り込めるか”と言われ、考える。内藤を思い出す。あれの自我を思えば、……。操るには苦労しそうだが、できないことはないだろう。
いかに才能があるとはいえ、あれは一個の人間でしかない。地の利と天の時、人の和が味方している英雄以外ならばどうにでもできる。当然、そうなるように時間を掛けなければならないが。
未だ人間である奴の心を支配するような己の真似に、吐き気がするほどの苦痛を感じたが、相手が英雄ならば心情を曲げてでもやらなければならないだろう。
俺は、英雄にだけは敗北するわけにはいかないのだ。
「主人公以外なら。取り込めるだろう」
「それなら見つけ次第臨機応変に対処する、ということでいいかね？　そして、始末はしない。するとしたらお互いで十重二十重に策を組んでから。それで構わないね？」
「ああ、それでいい。逃げられたら天運が味方について手に負えなくなるからな。それと、主要人物を勝手に処分した場合もお互い連絡をしあう。それでいいな」
「ああ、それでいい」

ふん、と鼻を鳴らし、ソファーに背を預ける。
謀議なんぞ柄じゃないが、そうも言ってられないのだ。
知恵を振り絞り、今後の展開について考える。

「次にお互いの戦力派遣についてだが」
「却下だ。お互い問題が起きた場合は独自の戦力で事を片付ける。アンタが死のうが俺が死のうがお互いこの密議については死んでも口にしない。俺たちはあくまで対等の同盟相手として敵とコトを構える。それでいいな」
「ああ、言ってくれて感謝する。こちらから言おうと思っていたことだ」
「よく言うな。どうせそちらの大事にはこちらから戦力を引き出させるつもりだったくせに」
「そんなわけがあるものか。英雄には私たちが連携していないと思わせなければならないだろう。表面上は休戦協定を結んでいる敵同士ぐらいの付き合いをしていきたいものだが。ともかく、問題解決は独自の戦力で始末をつける。それでいいかな？」
「いいさ。次は――」

こうして、俺と武満は幾十もの条項について話し合うのだった。
内容はこの場にいたものだけが知り、お互い契約書を交わすも、その契約書は表向き、ないものとし。≪法の剣≫の人間が連理貴久に”一目を置く”という形で融通を利かせることになった。

壱拾捌／

幹部の人に案内されてお茶を盆に載せ、向かった先にいた人。その人を見て、息を呑む。
止まっていたからだろう。背中を押されて、前に出てしまう。

背後を見れば、さっさとしろ、というように幹部の人の目が語っていた。
ため息をつき、盆を持って、その人へと近づく。

「あの、お茶です」
「えぇ、ああ。ありがとうございます。でも、今はいいですよ」

その人は服を着た肉の塊を背後におき、どこかを睨むように見ていた。油断していない、そういう空気を辺りに発散させていた。
それに、近くで見てもすごい美人だ。私の差し出したお茶を受け取ったものの、何かの清算を行う場所らしきところのカウンターに置いたきり、手をつけようともしていない。
それにしても、この人を近くで見て気づいたことがある。

（……どこかで、見たような？）

なんとなく見覚えのあるような人だ。こんな美人絶対に忘れないはずなんだけど……。

「あの、何をそんなに警戒してるんですか？」
「何、って。別に、警戒してるわけじゃないですよ。遅いな、なんて思ってるわけでもありませんし」
「そういえば、連れの人は？」

あのとき別れた男の人がいなかった。騎士姿の肉の塊をつれていた男の人が。
とんとん、と苛立ちを示すように彼女の指はカウンターを叩いていた。心配、なんだろうな。

「タカぼんさんがどこに行ったかわかりませんか？」

「タカぼん、さん？　いえ、私はその、下っ端ですから」

この人を監視するために幹部の人がそばにいるけど、こういうのは聞けば教えてくれるというものでもないだろう。いつのまにか、私をここに連れてきた人はどこかに行っているし。

緊張してきたせいか、喉が渇いてくる。

「あの、お茶、飲みませんか？」

「のど、渇いてないので」

「はぁ」

そもそも私はお茶を出したのだし、仕事は終えている。Ａグループの人たちも気が利く人は残ってるかもしれないし、このまま帰ればいいのだが。私はこの人に聞きたいことがあった。

既に塔の攻略を始めている人。恐らく私が連れ込まれた組織の誰よりも強いだろう個人。壁に背を預け、何かを睨むようにしてあちこちを見ている。

この組織がどうやって作られたかを知っているための警戒なんだろうか？　それとも仲間がどうなっているかわからないための態度なんだろうか？

その様子に悲しさを覚える。その態度に自分の惨めさを知る。

この人は、抗えている。私は、降伏してしまっているのに。

「貴女は強いんですね」

ふと、言葉が漏れていた。弱音だった。

幼馴染のひぃくんにも言えなかったことを、この人に言ってしまっていた。

それでも、漏らした本音に恥ずかしくて下を向いてしまう。

「私は、戦えてなどいません」

床には何も落ちていない。希望も、絶望も、何も落ちていない。立ち上がりたいなら顔を上げなくてはならないのに。

「貴女が羨む私だって」

言葉を掛けられ、顔を上げる。そこには私を見つめる彼女の姿がある。

「私だって何もできてません。それでも、気持ちだけでも追いつこうって。気持ちだけでも負けないようにって、頑張っているんです。あなたにはないんですか？」

「気持ち、ですか？」

「負けられない理由です。私はあります。最初はこんな、酷い世界でもすごい人がいるんだって知って、だから、負けたくないと思っただけでした」

「連れの人、ですか？」

「あの人は、すごい人で。何もかも自分でできる人です。そんな人の傍に、何もできない私がいても意味がないって思いました。子供だ、戦わなくていい、なんて言われもしました。だけど」

「だけど？」

言葉に声を、つぶやきを重ねた。

「あの人が言ったんです。筋を通すべきだって。死のうが生きようが自分を貫くべきだって」

だから、弱くても、立ち上がらなきゃいけないときは立ち上がらなくちゃいけない。そう彼女は言った。

「勘違いしているようでしたが、私も弱いんです。それでも、まだまだあの人には及ばないけど、きっとあの人の力になってみせようって。そう自分に誓ったんです」

見返したいだけなんですけどね。とそう言って微笑みを一瞬だけ見せてくれたその人に、私は、見惚れてしまった。

「だから」

そうして言葉を続ける彼女を私は見上げている。身長はそう変わらないはずなのに、私は自分が小さい人間だと、そう思い知らされてしまう。

「あなたも頑張ろう。弱いからって全部あきらめてたらきっと後悔するから」

肩に置かれた手。それに私の手を重ねると、ほんの少しだけど勇気が湧いてくる。

「は、はい。私も、その、頑張ってみようと思います」
「ごめんね。生意気言っちゃって」
「いえ、そんなことないです。あの、」

私が気を使ったと思ったのだろう。彼女はカウンターの上のお茶を指差し。

「ちょうど、喋って喉渇きました。お茶、貰いますね」
「あ、は、はい」

慌てて、カウンターの上においた盆から湯のみを渡す。ちょうどよく冷めたのだろう。こくこくと彼女はお茶を半分ほど飲んだようだった。

「それで、今、何か言いましたか？」

「あ、はい。あの、どこかで会ったことありませんでしたか？」

こんな美人、一度会ったら忘れないと思うのに。どうしてか思い出せないのは、きっと、見た記憶が、遠目に見ただけだからか。それとも私がこの人に対してそのときに関心を持ってなかったからか。

彼女は、私をじっと見て首を傾げた。その様子だけであちらは私に見覚えがないことを理解した。

「いえ。会ったことはないと思いますけど」

「そう、ですか」

喋ってみて、話し方とか、声に聞き覚えがあって。その上、容姿にも、見覚えらしきものがあるのに……。

「名前は？」

「え、」

「ですから名前です。そういえば自己紹介もしてませんでしたし」

「あ、はい。銀稜台学園二年の敷条茜です」

「銀稜台？　銀稜台の方ですか？」

「は、はい。銀稜台学園の二年ですけど」

「なら、敷条さんが私に見覚えがあるのもわかる気がします」

「えっと、その、どういうことですか？」

「銀稜台学園の生徒会副会長ですから、私」

「え、副、会長？」

そういえば、学園の選挙活動で何度か見たことがあった。それに、ひぃくんが会長さんと、目の前の副会長さんの後援に頑張っていたから、遠目に何度か見たことがあった。どうして気づかなかったのかわからないほどに、彼女のことを思い出す。

「副会長、さん？　副会長ッ？！　え、嘘ッ。なんで」

「どうぞ。よろしくお願いします」

「あ、はい。よろしくお願いします。じゃなくてッ。副会長までここに、ってことは会長も！？」

「幸いと言っていいのか、連れてこられてはないようです」

それに、会長がいたらこの組織に対抗して自分で組織を作ってたでしょうから、といわれて、頷いてしまう。思い出すだけでも恐ろしい。カリスマっていうのはああいう人のことを言うのだ。

「でも敷条さんは銀稜台の学生だったんですね。なんて、偶然」

言われて、思う。本当にそうだ。Ａグループの人たちと自己紹介をしあった時は、凍狂からは遠く離れた県の人が多かった。同じ地区の人がいることに驚きと共に喜びを覚える。それに、そうだ。

「あの、ひぃくんもこっちに連れてこられてるんです」

「ひぃくん、私の知り合いですか？」

「あ、ごめんなさい。神崎秀人（カンザキヒデヒト）。私と同じ二年生で、選挙のときに副会長の応援を手伝ってた男子なんですけど」

「神崎君ッ。神崎君がいるんですか！？」

同じ銀稜台から三人も、これを考えるともっと銀稜台の人がいる可能性がきっとあった。

「どういうことですか？　銀稜台から三人も。タカぼんさんはぜんぜん違う土地の人だったし。あの、敷条さん」
「はい？」
「他にも銀稜台の人は、いるんですか？」
「いえ、私は知りません。でも、もしかしたら」
他にも来ているかもしれない。そう思うと、少しだけ体に勇気が溢れてくる。
知り合いがいる。自分を知っている人がいる。自分が知っている人がいる。可能性だったとしてもそれはとても心強いことだった。
「そうですね。こんな奇跡があったなら、この組織にも感謝しなくてはいけませんね」
「え、あの？」
どういう、意味。視線で問いかけるものの、副会長は視線に優しいものを込めて軍司令部を見わたす。その視線の先には、まだ働いている人たちやソファーに座って休憩している人たちが見える。
私の視線に気づいたのだろう。副会長は、慌てて私に向き直る。
「あ、ええ、その、できた経緯などを人伝に聞いたものですから。あまり好印象を持ってなかったんですけど。この組織がなかったら今日一日で何人、いえ、何十人もの人が死んだかもしれないって思って」
「え？　それは一体？」
何の話？　疑問を瞳に込め、じっと見つめると、副会長は、苦笑を浮かべ、辺りを見回した。それを見てふと気づく。副会長が副会長であることに気づけなかった理由。遠目に見た最初はともかくも、私がこの人とここまで近づいても思い出せなかった理由。

血の臭い。戦うものの空気。そういうものが、副会長から発散されていたからだ。今日だって、凶器や武器などをたくさん見た。ごたついて、暴力が振るわれる場面だって見てないわけじゃない。

それでも、副会長ほど暴力を発散している人を見たことはなかった。この組織の幹部の人たちだって、彼女に比べればもっと穏やかだった。

さっき、私がこの人に見惚れてしまったのは、これが同じ理由かもしれない。

「きっとここの人たちがたくさんの人を纏めなかったら、塔に挑んでたくさんの人が死んでいた。そう思うと、この組織が悪いものだとは思えなくなる。今ならあの人が、タカぼんさんがあのとき戦わなくていい。そう言ってくれた意味がわかる気がします」

「それで、プライドが奪われるとしてもですか？」

「あえて上から言うなら、他の命を奪ってでも生きる理由がないならここが一番だと思います。生きて帰れますから」

胸を張られて言われる。自身に満ちた声。

ああ、これは勝手な言い分。勝手な理屈。そう言いたい。言いたいけれど。それでも、私はこの人の言葉が否定できないし。その言葉を否定させる理屈も感情も持っていない。

目の前の人は余りにも強い人間だ。この人は決して折れない。あの演説の場にいたならば反対派の人を纏めてこの組織と対立する組織を作るぐらいの力があったと思わせるほどに。

どうしてこの人があのときあの場にいなかったんだろう。

どうして、演説が終わった後ででもいいから戻ってこなかったんだろう。

理不尽と解っていても、そう思ってしまう。

だけど、

（なら、他の命を奪ってでも塔に挑みたいんですか）

意地の悪い質問を、口の中で押し殺す。黙ってしまった私の様子が気にかかったんだろう。副会長が困ったような表情を浮かべ、直後に顔を上げた。

（なに？　なんなの？）

視線は後ろを見ている。明らかな、喜びの表情。心根の優しい副会長が、自分の言葉で傷つけたと思ってるだろう人間を忘れる程の出来事。

その姿を見て。ふと、蔑ろにされたと思った。

いや、と心の中で首を振る。もともと私は彼女の眼中になかったんだろう。銀稜台という共通項が私たちをつなげていた。そうして、それ以上のつながりのある人間が副会長にはもうできている。

（どうして、――私は）

何かに対する悔しさのようなものが、胸のうちに湧いていた。それを、吐き出すこともできず振り返る。

そこには果たして。

あの時演説をしていたこの組織のトップと、その背後にいる三人の武器を持った幹部たち。

周りの人が自然と道を開けていく集団。そして、その隣にいるのは、副会長と共にきた青年だ。騎士姿で、隙間から肉の塊が見える妙な生き物らしきものを連れた男はトップと話をしていたが、副会長の熱い視線を受け、やっとこちらに目を向ける。

「ああ、内藤。清算は終わったか？」

その、余りにも普通の、普遍の、日常の一場面にも見えるその人の視線を見て、私は奇妙に吸い込まれるようなものを感じ――

壱拾玖／

「タカぼんさんッ」

湯のみ片手に小走りで駆けてくる少女。その表情は喜ばしいものに染まっている。尊敬や憧れの感情を感じ、照れはしないが、うまく事が運んでいると感じる。

多様な感情を表に出す。自然と頬が吊り上がった。

「内藤。どうだった？　わからないところはあったか？」
「大丈夫です。きちんとできました」
「そうか。よくやってくれた」

ぽんぽんと思わず、癖で頭をなでてしまう。ああ、これは大学のときについた悪癖だったか。

「なッ。なッッ？！」
「っと、悪い」
「あ、いえ、その」
「うん。家で猫飼っててな。そのせいで時々、自分より背が低い奴の頭なでる癖がついてるんだ。ごめんな」
「あ、その、はい。大丈夫です。でも、猫扱いですか」

子供、という言葉で家にいるペットを思い出す。まぁ、俺が大学に出なかったら友人が気づいて、どうにか世話をするだろう。賢いのが一匹いるし、餌の位置は理解しているだろう。餓死はしない、

と思いたい。
　そんなことを考えていたせいか、内藤が赤い顔で撫でられた頭を手で整えながら、ぼそぼそと何かつぶやいたが、聞き取れなかった。まぁいい。たぶんすごく怒ってはいないだろうし。とはいえこの癖は気をつけたほうがいい。年下とはいえ、レディに恥を欠かせないようにしなくては。

「それで、こっちだがうまく交渉したぞ。ああ、こいつは武満。この組織、≪法の剣≫のリーダーだ」
「≪法の剣≫の代表者を務める武満法行だ。よろしく」
「あ、はい。タカぼんさんの仲間の内藤美咲です。よろしくお願いします」
「ああ、よろしく。それではタカぼん。話し合いの通りに進むことを期待するよ」
「ああ。こっちも話し合いの通りに進むことを期待する」

　武満がやんわりと差し出してきた手をこちらもそこそこの強さで握り返す。人は少ないが衆人の前で俺たちが何か契約を交わしたとするポーズだ。きちんと内藤が俺の身内だということも知られたので今後ここに内藤一人で来たときも大丈夫だろう。

「そちらも組織名が決まったら教えてくれ」
「ああ、何か印になるものも作って送る。今後はそれを組織の人間に身に付けさせるよ」
「頼んだ。それでは」

　去っていく武満とその護衛。奴らも奴らで忙しいのだ。主要人物の疑いのある内藤の顔を確認した以上、もうここに用はない。

「あの、タカぼんさん」

「ん、どうした？」
「いえ、≪法の剣≫って、」
「この組織の名前だよ。さっき決まった」
「そう、ですか。それで話し合いの内容って」

どこまで話すべきかは考えもせずに決まる。英雄の話以外は話していい。

「施設の使用権と特別依頼の領分だ。あとはもろもろ、こちらとあちらの間でのルールになる。後で文章を見せよう」
「すごい、ですね。こんな大きな組織のトップと即決で決めるなんて。もっと時間がかかるものと思ってました」
「俺もあいつらも時間が少ないしな。それに、今なら構造が複雑になってない分、上だけの判断で条約を結べる」
「はぁ。そうなんですか」
「そうなんですよ。そろそろ俺らも宿屋に戻るか。ああ、話し合いで領分が決まったから今後は部屋数だけ借りれば済むようになったぞ」
「良かったじゃないですか。って、一万近く無駄になりましたよね。今日の分だけでも……」
「無駄で済んでよかったと思うしかないな」
「あー、タカぼんさんって、変なところで浪費家ですよね」

失礼な、と内藤に返そうとしたところで、それに気づく。こちらをなにやら恨めしそうな顔で見る少女らしきもの。カウンターの横にいる彼女は俺と内藤のやりとりを粘着質な視線でじぃっと見つめている。声も出さずに。

急に会話を止めた俺を不思議そうに見て、内藤が振り返った。そうして、今更、その存在に気づいたように声を上げた。

「どうしたの？　敷条さん」
「いいえ、なんでも」
「内藤、知り合いか？」
「あ、はい。元の世界の知り合いで。同じ学校の同級生なんですよ。彼女」
「へぇ。すごい偶然もあったもんだな」

改めて、向き合う。彫像のような美しさを持つ内藤とは方向性が違うものの、十分主要人物と見えるレベルの容姿を持つ少女へ。もちろん、ただの美人ということもあり得たが。内藤と知り合いという時点でなんらかの役割を持っているんだろう。

「連理貴久だ。内藤とは今日知り合って、一緒に行動をしている。得意分野は交渉とだらける事だ。気軽にタカぼんって呼んでくれ」
「だらけるって、適当なこと言わないでくださいよ。あ、敷条さん。タカぼんさんは戦闘もすごいんですよ。今日は私を守りながら塔の一階を探索してですね」
「余りほめるな。こそばゆい」
「大丈夫です。事実しか言ってませんから。それでですね。敷条さん？」
「あ、は、はい。よろしくお願いします。敷条、茜です」

内藤が首をかしげて敷条を見る。恐らく、俺たちが来る前に何か話しをして、内藤は軽い内容だと思ってしまっているが、敷条には耐えられない話があったのか。少し自失している表情の敷条は、ありていにいえば、魂が抜けていた。
表情を見、予想する。こいつは嫉妬、と、苛立ち、かね？　なるほどな。状況はなんとなく理解できた。
内藤は首をかしげながらも話を止めようとは思わないのか口を開き始める。

「それでですね『内藤』あ、はい？」
「そろそろ俺たちも引き上げるぞ。今日は疲れただろう」
「そう、ですね。ちょっと疲れてるかもしれません。あ、敷条さん、お茶ありがとう。湯飲みここに置いときますね」
持っていた湯のみをカウンターの盆の上に置いた内藤。それをぼうっとした顔で見る敷条。反応はできているがどうにも鈍い。
少し、活を入れてやるか。
「敷条とやら、≪法の剣≫から出たいなら。そうだな。一週間以内、塔攻略班が行動を開始する前に俺に言え。それまでならなんとかしてやれる」
「た、タカぼんさんッ！？」
「あの、いったいなんの」
「定員は、一名だ。誰も連れて行けないし、お前以外の為には交渉しない。今はそれだけ覚えとけ、内藤。行くぞ。二号、三号、車まで行け」
「あ、あの。どういう？」
それだけ言って振り返らずに進む。囁きは一度だけでいい。あの娘が聞き逃したなら俺の見立て違いだし、俺の言葉に揺さぶられなかったら、既に誰かに心を向けている証だ。
英雄。
その存在を思う。
奪ってやるぞ。誰だかわからないが、俺を手前の物語に巻き込みやがって。
殺してやるぞ。誰だか知らないが、いつかきっと俺を殺す存在になるそれを。
胸に殺意を、頭に氷を、冷えた頭でなにやらわめいて俺を追いか

けてくる内藤を適当にあしらいながら。先ほどの甘言にあれが乗るか考える。
きっとあいつも主要人物だ。なぜだかわからない核心のままに、俺は歩を進めるのだった。

「内、藤……？」

遠くで先ほどの少女のつぶやきが聞こえた気がした。

弐拾／

それは、圧倒的な光景だった。
魔王が玉座とするかつての機械帝国首都、クトゥンズハヴザス。帝国屈指の大首都の奥の奥、皇帝とその一族しか入れぬ最奥の座。機械皇帝がかつて座していた席に魔王は一人、君臨していた。
魔王の足元には第９９９代皇帝アルザス・ソシエトの姿がある。皇帝装甲『覇王天鎧』に包まれた体は上半身がまるごと削られ、機能の大部分を停止していた。それでも生存装置が働いているのか、顔のない皇帝の体、その下半身はかすかに動いている。
しかし、かつての威容を示すものは何もない。
これを為したのは、皇帝の末子にして、稀代の英雄、【勇者】アーク・ソシエト。

「くッ。魔王ぉおおおおおおお！！！」

皇帝の隠し子だったアークは、辺境の村出身のただの兵士だった。機械帝国が四海に覇を唱え、幾世紀。初期はその強大な軍事力ゆえ

に常に侵略戦争を仕掛けなければ経済的に破綻してしまいかねなかった帝国も、軍事的にどの国よりも優位に立ったこと（むしろ抗えるほどの大国が存在しなくなったこと）により、最終的に侵略しつつ、軍事力を抑えていく方針へと移っていく。大国は常に兵馬を動かさなくとも属国から金を搾り取ることで生きていけるようになっていた。

そうして年月が何年も、何十年も、何百年も経ち、帝国はその強大さを安定させていったのだ。

アークはそんな帝国のみが平和だったころに、平民の女と皇帝の間にできた息子として生まれ、赤子のうちに辺境へと追いやられた。

成人してからも、自らの生まれを知らず、退屈な辺境の国境警備に駆り出される毎日。それでも、幼馴染の少女との将来を思い、国のために働くアークは幸せだった。

このままずっと世界が続いていけばいい。優しく、穏やかな気風を持つアークはそう想いながら、空を見上げ――

世界は崩壊した。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。ハヴィスの月。ユラの日。魔王軍侵攻。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。ラルディスの月。オウラルの日。魔機大戦。神聖ソシエト帝国軍壊滅。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。ダンフィスの月。ユグドラシルの日。神聖ソシエト軍総大将。剣聖ダン・ウィーリカムス敗死。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。バルディスの月。カナリアの日。神聖帝国首都クトゥンズハヴザス陥落。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。コーネルディスの月。ランドルフの日。神聖帝国属国二百五十九ヶ国が一斉蜂起。

神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。ダンドグィスの月。ロ

ーマリアの日。神聖帝国元属国二百五十九ヶ国が魔王軍に降伏。
神聖ソシエト帝国暦１０８万７６６６年。ダルディスの月。ラッシィラルの日。魔王軍の大虐殺が開始。降伏した帝国領土、属国の機械文明人約四百億人が魔王軍により陵辱されながら虐殺される。

そうして、悲劇の中、アーク・ロンドは母の素性を死に逝く母から。自身の生まれを、戦いに赴く父親役だった兵士に聞き、英雄としての素質を、幼馴染の死によって覚醒させる。
勇者アーク・ソシエトの誕生である。
そして辺境軍が敗北し、民衆の大虐殺の最中に、村の祠に安置されていた【聖剣】グラールカリベルを手に入れ、後のライバルである【魔皇将軍】ヴェクサリオスを退け、ヴェクサリオス討伐へと現れた、【新たなる剣聖】ユン・ウィーリカムスによって魔王軍に対抗するためのゲリラ組織『最後の希望』へと入団し、そこで部隊を任され、副官に元神聖帝国軍第零部隊隊長【戦乙女】コーネリア・ライトをつけられ――

激動の人生だった。
【大賢者】カース・ラルドウスとの出会い。
【聖女】ノエルとの出会い。
【宿敵】シルダとの激闘。
【聖剣】の覚醒。
【聖魔融合】――打ち倒した【魔皇将軍】ヴェクサリオスとの共闘。
【覚醒逆行】――自身の過去を知り、過去との対決。英雄としての代価。更なる悲劇が力を呼び覚まし。
そして、最後の戦いが始まったのだ。
そして、不敵に笑う魔王の姿が――

弐拾壱／

「くどい」

自然と漏れた台詞と共に俺は夢を追い出し、覚醒した。面倒な夢を見た、いや、見させられた。

頭痛を抑えるため、頭を抱えるようにして布団から起き上がり、いらだたしげに鼻を鳴らす。

「つまらん夢だ。こんな、どうでもいいものをッ」

吐き気のする夢。勇者の誕生から魔王殺害までの記録。その中には治安悪化によって生まれた盗賊や山賊などを正義の名の元や自衛によって殺害する勇者の姿もあり――

機械でできた生物がばらばらに破壊される姿を思いだし、口元を押さえる。殺された悪党たちの顔に自分の顔を重ねてしまいかけたのだ。殺されることではなく、敗北することに恐怖を感じる。

敗北したものが、更に敗北したならば、最初の勝者の名誉はどこに行く？

「うまく、やるさ。やってみせるさ」

うまく、やらなければならない。

この世界にとっての大悪がある。数多の世界にとっての邪悪の残滓をこの施設は囲んでいる。

悪があるなら、正義は必ず現れる。そして正義が現れるなら、悪の運命は決まっている。

嫌な想像を首を振って追い散らす。

宿屋にある一室の窓から外を見れば、何に使うのかもわからないビルの隙間から目指すべき頂を持つ塔が見えた。

覇王の塔。最上階にいるのは魔王軍に残された最後の将。
彼か彼女か、異世界の生物は今何を思っているのだろうか。未だ眠っているのか、それとも既に起きているのだろうか。
殺されることが宿命づけられている最後の邪悪。異世界から呼び寄せられた何者かによって殺されるべき運命の敵。

「いや、まだ、確証は、ないか」

先ほど見た夢。それから生み出される推測は脳の奥底に押しやる。
大きなため息が漏れた。二日目にしてようやく目的は得られたが、それを達成するための道筋が未だにわからない。
いや、大きな道筋はわかっている。それでも、それを行うための要素が集まっていないのだ。

「三号、着替えを」

思考を進めながらベッドの横で待機していた三号に着替えを用意させる。元の世界の元の家で自分でやっていたことを誰かにさせるのは、俺が敗北者としての責を忘れているからか。
小さく首を振る。命令することの難しさ。他者を思い通りに動かすことの苦痛。結果を受け入れるための覚悟。

「かつての自分なら」

備わっていたものを思い出すのが容易なことなら、それを捨てたときの苦痛を思い出すこともまた簡単なことだ。
それでも大学に入ってからの平和すぎる生活のほうが恋しいと思うのは、俺が負けたことを快く思っているからだろう。
大学に入る前の、東京や数多の地方での生活。

（元の世界に帰ったら、訪ねてみるか……。
恨まれてるかもしれんが）

そういえば。と、昨日宿屋に帰ってからの話を思い出す。内藤に、昨日出会った少女の話を聞いたのだ。あれだけの輝きを持つ内藤が副会長をしていた学園での友人。いや、話しぶりでは知り合い程度の関係らしかったが。

そいつがやってきてて、そいつの幼馴染も来ている。１０００人。全員が銀稜台？　確かに、武満も部下を連れてきていた。同じ都市から１０００人？　いや、だが俺は九州の田舎町だ。住んでる場所も銀稜台なんて名前でもないし。

老若男女、ランダムで選ばれてるとも思ったがそうでもないのか？　ここは、考えてもまだわからない。

（そう、だな）

次の報告会のときにでも武満に聞いてみるのもいいだろう。

しかし、銀稜台ってどこにあるんだ。そんな地名、聞いたこともなかったが。

どの県だ？　田舎か？　それとも創作上の土地か何かか？

そもそも、かつて日本全土を支配した俺が知らない土地など、ある筈がないのに。

弐拾弐／

食事は借りた部屋で取ることもできたが、今日の話をするということで内藤の部屋の扉を叩いてみる。

「おーい。起きてるか？　朝飯の時間だぞ」

ノックをし、待ってみるものの反応はない。寝てるのだろうかと不思議に思って扉の傍を見てみればインターフォンらしきものがあった。

外にこんなものがついていて中から物音が聞こえないということは、この扉、防音か。確かに部屋の中にいるときは外の音は聞こえなかった。

呼び出しボタンらしきものを押してみれば、チャイムらしき音が聞こえ、更にはＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ　と大仰な黒文字のウィンドウが目の前に出されている。

『うぅ、んん。音？　何？』

「俺だ。貴久だ。起きてるか？」

『あ、は、はい。今起きました。どうしました？』

「うん、食事にしようと思うんだが。ついでに今日の予定も話しておきたい」

『もうそんな時間だったんですか。支度をするので待っててください』

「ああ、急かすつもりはないが早めにな」

今は時間にして、まだ朝の八時ぐらいだ。これをもう、とするのか、まだ、とするのかは個人の感覚だが、あまりゆっくりしている暇もない以上はこんなものだろう。

内藤が生徒会だったならもっと早い時間に学校に行ってたりしたんじゃないかとも思ったが、疲れてるのかもしれない。俺は結局昨日は指示を出すだけだったが、内藤は戦っていた。

扉の前で待っているとごそごそと動き出す音が聞こえ始めた。何をしているか想像するのは簡単だが、必要もないのに女の子が何かをしているのを正確に推測するのは下劣な行為だろう。想像は捨て、待つだけにする。ついでに繋がったままのインターフォンを切り、

あちらからの音が聞こえないようにしておく。

「……今日は、とりあえず何をすべきか」

護衛の二号と三号を見上げる。俺よりもはるかに背の高い肉の塊は何も答えない。肉人形は知恵を借りるに足るものではない。

その点では、扉の向こうにいる協力者は肉人形よりも信用ができないものだったが。

遠くにいるだろう組織を束ねる協力者も、敵ではないが、味方でもない。

この施設を束ねている存在とは未だ邂逅すらしていない。

自分で知恵を搾り出すしかなかった。

（……ま、いいさ。目的は定まっているんだからな）

顔すら知らない者を殺害する。自分の中では決まりきったことだが、改めて考えるととても酷いことだと思う。

勇者、英雄、正しい正義。善意の体現者。人々の願いの塊。

理由もなく確信できる敵の存在。これは、いくつかの経験から来るものでもあったが。

数々の、善なる要素を纏うだろう、この物語とも言える要素の詰まった空間での主人公を殺すのだ。その夢想を妄想のように味わう。

人を殺すこと。その、苦い、推測をだ。

（内藤じゃ、ないんだよな……）

昨夕、軍司令部で俺を信頼の篭った視線で見上げてきた少女を思い出す。

あれだけ油断している相手ならば魔王軍に突っ込ませ、援護すると見せかけたところで三号辺りの弓で射抜けば確実に殺せるだろう。

いや、今壁をぶっ壊して二号と三号で攻め殺せば終わることだ。
だが、アレは、主人公（ヒーロー）などではない。主要人物の一人であることは確実だったが、主人公、というほど俺の危機感を煽らなかったのだ。
それは、内藤が女とかそういうことではない。まず感覚的なものとして、内藤は”主人公”ではない。かつて相対した英雄、俺の部下だった【魔王】の一人が言うところの、【勇者】と【魔王】。それのうちの勇者側であるのはわかる。しかし、役割がわからない。

（聖剣ではない。そこまで攻撃的な要素を持っていない……）

聖剣は、意思を持った神造精霊。歩く武器庫。勇者のお供だ。かつて相手にしたことがある。ただ、内藤にそこまでの暴力性は見られない。
なら、何だろうか。考える。とりあえずは内藤がどうして勇者側なのかを考える。そして、勇者本人でないことも、だ。
内藤が勇者でない理由。まずは、あれの属性が他者を押し潰してまで自身の意思を通すようなものではないということ。
副会長、という言葉もあるし、改めて考えなくても、あれは従うタイプの人間だ。
さしずめ勇者に従う従者の位置か。ライバルではなく、共に成長する者か、叱咤激励し、鼓舞させる役割か。それとも甲斐甲斐しく尽くし、勇者の力を増幅させる役割か。
それとも、知恵を貸す者か、守られる者か、共にあることだけを望む者か。
いろいろと考えが湧くものの、結論として内藤は、付属品という考えが残った。
思考を進めようとすると、目の前の扉が横滑りして開く。

「あ、お待たせしました」

「ああ。おはよう、内藤」

目の前には、防具ではなく、宿屋に備え付けてあった簡素な衣服を着た少女が立っている。

そして今日初めて聞く内藤の肉声。

その声質は凛然とし、人をひきつける色に満ちていた。俺を見上げ、照れたように髪を掻き上げる何気ない動作の中にも人間としての魅力が――、

落ち着くために息を深く吸う。空気の中には、内藤が近くにいるためか、奇妙な甘さの混じったものが含まれている。

（――ッ。まずい、な）

精神的な不覚から生じる苦味を舌の上に乗せ。甘みを打ち消す。くらりとする頭脳を抑え、心を強く持つ。

一体なにが?!　それに、俺が魅了されている?!

唾棄すべき症状に内心だけで呆れ、先ほど練り上げた勇者への殺意を脳の奥底から引きずり出す。

常にこんなものを抱いていられるほど俺も異常（アブノーマル）ではない。それでも、内藤が無意識に発しているだろう奇妙な引力に逆らうにはこんなものが必要だった。

そう、それだけで、先ほどまで惹かれていた心の部分が腐臭と汚濁で腐り落ちていく。俺のまともな部分が知っている、殺人計画を練るなんて、という恥じ入るべき行為が、他者へと惹かれる心を殺す。

一切己と関わりのない他者を殺す殺人は、女を愛するような情愛と相容れることは決してない。だからこそ、魅力的な人物に引かれる心を殺すための特効薬として最適だった。

「はい、おはようございます。タカぼんさん」

笑顔。他者を惹きつけてやまない人間の笑顔。
それにめまいを起こしそうになる。
しかし、だ。昨日の今日でこれはおかしい。異常を覚え、指先のみで端末を操作し、内藤のステータスを隠れて見れば――

ＮＡＭＥ：内藤三咲
ＨＰ　６／６
ＳＰ　１０／１０
腕力　５
硬度　２
俊敏　７
知能　４
運勢　６
能力　【戦乙女≪ブリュンヒルデ≫】レベル２

ッ、思った通りだ。能力が強化されている。
【戦乙女】なる特殊能力のレベル２。それが内藤から発散される奇妙な引力に関係しているのか。それとも、それとは関係なく魅力的になっているのか。俺の頭が悪くなっているだけなのか。
それでも、昨日の夜から今日の朝の間に何かがあったことは確かだった。少なくとも、俺は、内藤自身に俺が惹かれるような魅力的なものを感覚ではともかく、理性では感じていない。
そして、内藤にも心理的な変化は起きていない。そのはずだった。少なくとも、昨夜、部屋の前で別れたときには何も変化らしきものは見えなかった。ベッドに入る前に、星でも見ながら何かを誓ったとかそういうことはあったかもしれないが、たった一晩でこんな劇的な変化を起こすような誓いでもしたんだろうか。
それならば、俺は内藤を見誤っていることになる。

そして、この馬鹿のような推測を除けば。
ただひとつ。変化を呼び起こすものについて、俺は知っているはずだった。

（……あの、夢、か？）

あの奇妙な夢。見たこともない景色と、まるで知識のように注がれる確かな歴史。もしそれが、俺以外にも見せられた夢だったとしたら？

「タカぼんさん？」
「ん、ああ。悪いな。少しボーっとしてた」

頭を振り、歩き出す。

「よし、飯食いに行くか」
「はいッ。そういえば、昨日の食事ですけど」
「ああ」

内藤の話に相槌を打ちながら、考える。
内藤は、良い人間だ。その性質は善人であるし、真面目で、道徳的な面が多い。顔の美醜も万人が万人、美だと思うものに違いない。普通に知り合ってもここまで親しくなることはなかったに違いないだろう。
しかし……、しかし、だ。
くらりとするような魅力を放ち続けている内藤に俺は恐怖を内心で抱いてしまう。心を、感情を改変する毒。それを無自覚に放っている内藤。
俺が抗えているのは、そもそも内藤に好意的な感情を抱かないようにしているためと。

心の天秤をしっかりと保っているからだ。
そして、そもそもの話。

（殺害計画を練っている人間が、誰かに好意を寄せるなんて心を持てるわけがないからか……）

怒りでも、恨みでもないただの危機感から作られた殺害計画。それを望んでいる俺は愚かだろうか。愚かなんだろう。愚かでなくてはいけない。ただの被害妄想から人を殺すことを選択する。決めた今も心の浅い場所で悩んでいる。
心の奥底では既に覆しようもなく決めているというのに。

「こっちの食事もあんまりあっちと変わりな――、タカぼんさん、どうしたんですか？」
「ん？　なんでもない。そうだな、こっちの食事も俺たちの世界のとあまり変わりないよな。むしろ下手なレストランよりも美味いかもしれんが」
「え、あ、はい。そう、ですよね」
「ん、何か変なこと言ったか？」
「いえ、なんでもないです」

そうか？　と会話を切り、食堂へと入る。
２０ほどの、並んだテーブルやその倍は用意されている椅子。
その中の一卓に、湯気の立った食事が用意されている。ご丁寧にタカぼん様、内藤様と名札までついていた。
芋類を潰して作ったようなスープ、籠に入れられた大量のパンとその脇のジャムやバターらしきもの、鶏卵に似た風情のある卵を焼いただろう目玉焼き、レタスやトマトによく似た風情のある野菜で作られたサラダ、そして空のグラスに各種揃えられた果実のジュース。望めばコーヒーに似た飲み物も頼めるんだろう。

「昨晩も思ったが、やっぱり俺たちの食生活は研究されてたみたいだな」
「そう、ですね。その、毒、とかは」
「ないない。昨日も言ったがそんなもの考えるだけ無駄だ。それより、早く食っちまおう。今日のことを話し合いたい」
「あ、はい」

そうして、俺たちは席について食事を取った。
食事の感想だが、美味かったとだけ言っておく。

弐拾参／

話し合いといっても決めていたことをただ伝えるだけだった。
「今日は別行動だ。俺が塔。内藤が施設内の探索。≪法の剣≫とは同盟を組んでるからな。あいつらを警戒する必要はない」
「……えっと。あの、なんで私も塔じゃ」

困惑した風情の内藤がおずおずと要求を述べるものの。

「パラメーターが低いから。昨日の感触から今の段階でも俺ひとりで十分なことがわかったから。後はそうだな。そろそろ動き出そうと考える連中も出てくるだろうしな」
「はぁ……」
「昨日、≪法の剣≫が取り逃がした連中がいるはずだ。探してみてくれ。あとはガイドにかかれていない店や施設を重点的に。一人で行動している奴らがいたら勧誘も頼む」

並べられる事実と要求に納得できなさそうな顔の内藤。確かに、それならば役割を変えて内藤が塔。俺が施設探索でも良いような気もするし。そもそもどうして俺が内藤の行動まで決めるのかという問題もある。

「あくまで肉人形は俺の武器だ。それを忘れるなよ」

「ッ。は、はい。そうですよね……。あの、それはわかってるんです。でも、その、ですね」

媚びる様な表情。意識しているわけではないのだろう。甘えたような空気を自然と放ちながら内藤は口を開く。

「あの、私も、駄目ですか？」

「何がだ？」

「塔の探索です。その、お願いします」

表情と言動になんだか違和感が。昨日今日会った人物に向けるにしては妙な視線を感じ、内心のみで疑問を感じる。なんだ？

「理由を言ってみろ。施設の探索は荷が重いか？」

「あ、いえ。そういうわけじゃないんですけど」

「だったらなんだ。施設の探索も急務だぞ。確保できるかできないかにかまわず情報だけは把握しておくべきこと、やらなければならないことだ。人材の確保もさっさとやらないと誰も集まってこないしな。塔の探索は昨日の感触でも俺だけでできること。そりゃ内藤ができるならいいが、あらためて言うぞ。肉人形は俺の武器だ。そこは勘違いするな」

そもそも内藤は、昨日の時点での疲労を考えれば今日は命のやり取りをさせない必要を感じていた。二日連続で強烈なストレスを与

えても人格だの人間的だのと、精神によくないだろう。
あとは、俺以外の人間と接触させれば今も無駄に振りまいているカリスマが収まるかという打算もあったが。

「だから勘違いしてません。その、だったら、その、タカぼんさんも施設の探索とか……」
「……。昨日も言っただろ。≪法の剣≫が探索を始める前にアドバンテージを稼ぐ必要があると。どうした、できないなら今日は宿で休んでてもかまわんぞ？　そっちに関しては痛いが後手に回してもかまわないが」
「あ、だったらその、塔に私も「が、だ。動けるなら動いてもらう。そして動いてもらうなら塔ではなく施設探索だ。正直、塔の探索は俺一人で十分だからな。そして施設探索というより人間の探索は俺よりも内藤にやってもらいたい。理屈はこれでいいか？　何度も言わせるなよ」
「あ……。はい。わかりました」

……、なんだ。落胆したような顔をして。俺と無理にでも行動して欲しいような空気を感じたが。
一人で行動予定を決めたのは、俺が指針を持ってるからしょうがないとはいえ、横暴すぎたか？
いやいや、ならそっちの利点を伝えてくれれば考えないでもないが、要求だけ言われても考えは変えたくない。
少し考えて、慰めのようなものを口にしてみる。

「そんな顔をするな。大丈夫だ。人が集まったらそいつらと一緒に塔に行けばいい」
「あ、……はいッ」

喜んだ。やっぱり探索、冒険、そういうものがしたい年頃なのだ

ろうか？

「うん。ならそのときは俺が施設の探索をしてみよう。そうだよな、たまには視点を変えないとな」

「あ……ちがッ……」

「ん、何か言ったか？」

「い、いえ。なんでもないです」

何か言いたいような顔をしているが。

とはいえ雑談するのもいいが、やらなければならないことは山積みなのだ。

それと最後に伝えておくべきことが二つ。

「と、じゃあ俺はそろそろ行く。今日中に戻らなければ死んだものとして以後は≪法の剣≫に保護を求めること」

「も、戻らなければ、ですか……」

「ああ。交渉してあるからな。内藤が奴らの不利になるようなことをしなければ悪いようにはしないはずだ。で、こっちは遺書。内藤が無事に帰れたら郵便ポストに突っ込んでくれればいい。俺からはそれだけだ」

「……嫌なものを渡しますね」

「必要だからな」

立ち上がり、白い封筒を渡す俺を見上げる内藤の表情は苦しげなものだった。そして封筒に向いた視線が一瞬だけ妙なものを見たような表情になるも、首を振ってから封筒を震える指で受け取った。

弐拾肆／

車を動かし、塔へと向かう。内藤は留守番であり、俺も気楽に向かうことができた。

一人になって思うが、やはり英雄殺しなど諦め、――思い直す。

……そんなことできるわけがない。英雄が生まれないように、もしくは生まれた後に殺せるか。それを考え続けなければならない。

どうしてもだ。そうしなければ、いつかきっとここで俺は殺される。武満もそうだろう。≪法の剣≫なんてあまりにもわかりやすい悪。それをあれが、正義が放っておくわけがない。

英雄なのだから。

――英雄は、そういうものなのだから。

ハンドルを強く握る。行き先は塔だ。今から向かってアレの場所にいけるわけでもない。未だ場所はわからない。

とはいえ、見つかったところで現状すぐに抹殺できるかどうか。

（勝てるか？　正面から……）

思考を続けながらもゲート傍の駐車場に車を停める。

「ん……？」

バイクだ。軍司令部横で借りられたはずのひとつ。

「誰か来てるのか。勇気のある」

一人だろうか？　一応、シートを触り確かめる。座席は冷たく、誰かは既に塔の中に向かっているようだった。

「……。まぁ、いいさ」

生きていれば中で遭うこともあるだろう。しかし、たった一人で、か？

（いや、主要人物の一人なら。もしくは……）

あの内藤だって俺のサポートがなくとも、きっと一人でなんとかしたに違いない。あの戦乙女とやらはそのための能力に違いない。戦闘向けの世界での主要人物ならその程度の力はあるはずだ。

（だからこそ人間のうちに俺と向き合わせ、屈服させる必要が……）

先日、武満に大言をきったコントロールなどという虫の良いことも、あの魅力を見れば通用しない。それにそんな真似をすればいつのまにか俺自身が奴に操作されていたなんてこともありうる。だからこそ実力で屈服させ、我が傀儡と……。

思考を振り払う。俺は巨悪ではない。小悪党になったのだ。だから――

思考と過去の記憶を振り払い。思考を再開する。

予想外だったのは、内藤が発揮している無自覚の魅力だ。あれは、人間の身からあふれるものではない。力の源泉が別に用意されてるように感じたが。

俺の、気のせいだろうか？　俺が直面しているものの本質を考え直す。

内藤や武満にはここでの推測の論拠をゲームにして説明した。そう、この場の本質はそれでよいはず。ここはあくまでゲームのよう

に作られた盤上だ。それに俺たち人間が、現実の性能を持って盤上の敵を攻略する。これで認識はいいはず。

最初から豊富にあるアイテムも、盤上の世界観に人間の体をあわせるためのアイテムに過ぎない。

しかし、それにしては内藤の能力が規格外すぎるような気がする。戦闘に際しても、強力な補助を得られ、圧倒的な魅了による他者を無自覚に支配する能力。

余りに眩し過ぎて忘れていたが。主要人物だからといって、最初からそこまでの能力を持っているはずはない。あれは覚醒するまではただの人であるはず。あくまで英雄とは、なった後でそれが英雄だと気づかれるものだったんだが。

（あれではまるで完成品を相手にしているような……）

だから、一人でも内藤なら塔の攻略は可能だなんてさっき考えてしまったのか？

……違う。現に可能だ。昨日もサポートありでなんとかやっていたはずだ。仮定として、内藤が俺以外と組んだ場合なら、まず複数人で挑み、犠牲を出しつつも内藤だけは生き残り、素質を開花させていただろう。先ほどの仮定でも推測したが、戦闘が主な世界での英雄ならば、完成する前であろうともそれなりの力を持つはずだ。

――現に、俺が相対した正義（モノ）の力は、あんなものではなかった。

それに完成品だったなら、最初に俺に丸め込まれるなんてミスをするはずもない。

（なら、演技をしているという可能性は？）

それもあり得ない。俺は無力だ。それに対してあんなに従順に振

舞う必要はないだろう。

（やはり覚醒前の主要人物に違いないが）

それでも、あそこまでの影響力を持っているものだろうか。覚醒前の英雄の魅力なんてものは、例えるなら開始早々街の人間に話しかけたときに怪しまれずに情報を入手できる程度や、民家などに不法に侵入しても咎められずにその家庭にあるものを強奪できる程度の力だ。

あんな、人間の本性を屈服させる光のようなものではなかったはず。

（……強化、されてるのか？）

そんな、はずは。いや、強化しなければならないのか？　まさか、機械人どもは塔の攻略に英雄を扱うつもりか。そこまでしたら賭けなんて前提が崩れてしまう。

俺の推測が、外れているのか。

（情報が足りない。この物語の、この狭い世界の全貌を見るには、時間を進める必要があるのか？）

最悪、誰か主要人物を覚醒させる必要があるかもしれない。

（そのときは、俺か武満が死ぬかもしれないが……）

武満は、……主人公にぶつけたい。ならば……。

（……いや、今考えることじゃないか。増員分に必ず俺たちのような連中が混じっているはずだ。それを拾い、ぶつければ……）

肉人形を連れ、ゲートを通る。
そして俺は死体を見た。

弐拾伍／

塔内部に侵入すると、入り口に人間の死体が転がっていた。
非常灯に照らされた、薄暗い視界の中。肉片が四つ。上下に分かれたそれは、支給品の入ったリュックと衣服から人間の死体だと理解した。
背広姿でないことと俺よりも若さの見える顔から≪法の剣≫の人間でないことがわかる。

（……これは。剣がぶつかる音か？）

耳を澄ませば剣と剣がぶつかる音が聞こえてくる。金属同士がぶつかる音。昨日聞いたばかりの原始音。
これはバイクの人物とは別の集団だろうか？　それとも拠点を決めずにバラバラに夜を明かし、朝一番にここに集まって、その上でこの場に入り込んだ人間か？

「三号。死体の確認を。衣服はいい。まだ使用できるアイテムがあれば回収を。支給品を忘れるなよ。二号はついてこい」

背後に立っていた三号に命じる。俺の前で警戒をしていた二号は背後に下がらせる。レーダーを確認すれば昨日見た警備兵の詰め所から反応が見えた。
反応は三つ。ひとつはコボルト。もう二つは俺と同じような反応。人間だ。

「るるるるるぅぅぅぉぉぉおおおッッッ！！！！」
「くそ、くそ、くそ、くそッ。話が違うッッッ。普通、こんな、強いわけがッッ……！！」

開きっぱなしの扉からひょいと頭を出し、見てみれば犬の頭を持つ二足歩行のケダモノが両の手に剣を持ち、一人の男を追い詰めていた。

それは無視して部屋を見回す。昨日と変わったところは……。うん、ああ、あれか。床に転がっている人間らしきものを見つける。背後に位置の変わった金属机があるところを見ると吹っ飛ばされて机にぶつかった挙句、気絶したんだろう。

姿は、女性で、ライダースーツ。遠目からもそこそこの胸が上下に呼吸しているところを見ると生きてはいるようだ。顔からして童顔なのかはわからないが、俺よりも歳は若い。内藤と、同じくらいだろうか？

（内藤と同じ……。それに、あれから漂ってくる雰囲気は……）

主要、人物だ……。魅了の性能は内藤よりも低いが、内藤の感覚が残る今なら確実にわかる。

見殺しに、するか？

このまま放っておけばあの男は死に、あの女も殺されるかモンスターの母体にされるかするだろう。

（モンスターの母体……。英雄の矛先を逸らせるか？　いや、結局のところ悪は一掃されるわけだから俺が目溢しされるわけもないな。ならば、助けるべきか。恩を売っておくか。それとも今後を考えて助けないべきか……）

そして最悪、あれが俺の手を借りずに助かった場合。なんらかの情報から俺が見殺しにしたことを知られれば……。

手は、それしかないか。少なくとも、明確な殺意を用意して望まなければ主要人物の命なんてものはたやすく助かるわけなのだし。

「お、おッ、おいッ。あ、あんたッ、助ッ！！」

「ん、ああ、やっと気づいたか」

顔を出してうんうん唸っていた俺を見て、犬頭の亜人（コボルト）に現在進行形で襲われている男が何か言ってきた。

しかし、見れば見るほど凄まじい戦闘の腕だな。この男、武道経験者だろうか？　二日目ってことはあまりパラメーターを強化できてないはずなんだが。コボルトと互角とは言い難いが、まともに戦えている。

「助けッ。助けてくれッ。お、俺は、死、死にたくッ」

「るるるるるぅぅッッおおおおおおおおおッッッッ！！！」

「ど、どわぁッ。た、助けて。お、おおおお、あ、あぶッッ」

コボルトの手繰る二刀から身を捻らせ、手にもった剣で弾き、男は息をつかせぬ怒涛の連撃をなんとか裁いている。

「……面倒だな」

「ちょ、おまッ。お、おいッ。ひッ。あッ。た、助けてくれたら、ア、アイテムやるッ。パラメーターアップは必要だろッ！！　欲しいだろ！！　なッ。つ、ついでにここの情報も……。おわッ？！」

く、くくく。面白い奴だ。何も言わないうちからこっちに交渉をかけてきてる。

ちょっと脅してみるか。

「ってもな。アイテムは死体から貰えばいいし。情報も間に合ってるしな」
「ッッッ……。こ、この人でなしッ！！」
「正直な奴だな。俺だってそこのモンスターの標的にはなりたくないんだぜ。少なくとも俺が殺される可能性もあるんだからな」
「ッッッ。そ、それでも。っと、わッ？！　人の心があったらッッッ」

人の心。
言われて少しカチンと来る。そんなもの……。

（――あったら。あったらモンスターなんか狩らねぇよ。人間と同じ知能を持って、人間と同じ感情があって、人間と同じように生きている生命を、他者から言われた程度で狩ろうなんて思いはしねぇよ。そうじゃねぇのか……）

乱暴な思考を排除する。

（男の性質を見抜く。その上で、判断を――……）

――そう、だな。
今回は生かす。武満以外にも真面目に塔攻略をしている連中は今後重宝するだろう。敵対しつつも助けたという印象があれば相手もこちらを舐めてかかってくれるだろうし。
一応、吹っかけておくが。

「正直な奴だな。くくくカカ、それで、どうするんだ？」
「ど、どうするって。う、うわッ？！」

コボルトの剣が奴の剣を跳ね上げていた。そして続く二刀目が男の腹に吸い込まれ「ぉぉおおおおおおお！！！！」ギリギリで避ける。

（使えそうな奴だな。主要人物の気配はしないが……）

そもそも主要人物が二人そろってれば大抵の困難は自力で排除するだろう。

「ど、どうすりゃいいんだッ！？　おッ。あッ。ひッ……」

男に振り下ろされる刃、刃、刃。悠長に会話している暇ではない。男には死の危険が迫っている。いつ死んでもおかしくないものだ。俺も、男の生存にはこだわっていなかった。死んでもいいとすら思っていた。

――人でなし。連理貴久ッ！！　貴様に人の心があったなら……

過去の言葉を思い出す。

そうだ。悪を真っ向から弾劾する貴様らの感情は正しい。しかし、しかしだ。それを行う貴様ら自身の性質は――

思考を殺す。感情を殺す。そんなものを取り出しても意味はない。悪は悪で、正義は正義なのだ。

振り下ろされる剣を避け、こちらを憎悪の篭った視線で見る男に対して、俺は――

「そうだな。助けてやってもいい」

「ほ、本当かッッ？！　は、早く」

「じゃあお前、パシリ決定な。今後、ずっと」

「うッ……。あああああッッ？！！！！」

男の鼻先を剣が掠める。運が良かったな。あと一センチでも近かったら鼻がもげてたぞ。

しかし、これはあのコボルトがヘボ、なのか？　男の身体能力が高いのか？

「ぱ、パシリだって。ああ、く、糞ッ」

「ルルルォォオ。オオォォルルル」

「ひぃぁッ。あ、ああ、糞、糞ッ」

……ああ、そうか。あのコボルト、遊んでるのか。あの男の身体能力の高さも加えて。剣の動きを見ればなるほど、理解ができた。そして俺を無視しているのも俺を殺せると確信しているからか。しかもあの男はいつでも殺せるから俺が手を出したら俺を殺して、その上であの男を殺し。最後に残った女を連れ。なるほどなるほど。

「ぱ、パシリでもなんでもするッ。するからッ！！　このままじゃ死ぬッ。死んでしまうッッ！！」

でもまぁ、その性質に今回は助けられた。

「そうか。なら――

腰のボウガンを引き抜いて、コボルトに向けて引き金を引く。が、背中に眼でもついているかというぐらいの精度で避けられる。遊んでいたとはいえこちらを警戒しているのは確かなんだから当然だ。

奴は地面にへたれこんでいる男から矛先を外し、こちらへ向けてくるコボルトは扉の隙間から顔だけ出している俺へと一直線に飛び込んでくる。そしてそのまま扉と俺の顔面ごと裁断するような一撃を俺へと――

ひょい、と体を引っ込めた。そうして刃だけが扉の隙間から現れるも。

「はい。二発目」

もう一丁のボウガンで奴に狙いを定め、放たれたそれも避けられてしまう。同時に、扉を蹴り開けて奴が突っ込んでくるが――

「ご苦労さん」

刃を携えたコボルトの両腕が扉から現れ、踏み込みと共に跳躍。同時に刃は俺に向けられ、一瞬後には俺の体に致命傷を与えるに十分な加速と勢いがつけられた双剣が突っ込んでくる。しかし、ひょい、と俺も背をブリッジでもするようにして避け、

――二号

小さなつぶやきに金属の刃が応える。

俺が何を言う間もなく扉の影に石像のように気配を消していた二号の持つ剣が俺と、未だ空中のコボルトの間に差し込まれ、膂力のみで引き上げられた。

目を閉じる。

暗闇だけの視界の中、血袋が裂けるような音。肉の塊が骨ごと両断される鈍い音。それが聞こえる。

どぼどぼどぼ、と勢いよく俺の体にかかる音が聞こえる。顔面に生暖かい何かがかかっている気がする。

同時に、俺の背後にべちゃっ、がちゃん、と金属質のものを握った何かが勢いよく地面にぶつかる音が響いた。

「二号。死体を解体。有用なものを全て奪え」

体を起こし、手で顔面を拭ってから指示を出す。
獣臭さが全身に広がっている。口の中にまで血が入ってきて気持ちが悪くなるが、体と意識を切り離して対処する。
さて、パシリの様子でも見てみるかと扉をくぐろうとすれば背後からくぃくぃと引っ張られた。

「なんだ三号。なにかあったか？」

肉の塊で、皮すらない指が俺の服の裾を引っ張っている。見上げれば色のない目が俺を見下ろしてきた。
片手は俺の服の裾をつかみ、もう片方の手には白いタオルが握られている。
三号は無言で、タオルを差し出してきたのだ。

「……」

その姿に思い浮かぶものを押し殺し、受け取る。
白いタオル。
……健気な誰かの姿。
ここに来てから、度々昔のことを思い出してしまう。
いや、昔なんてものじゃない。たった二年前のことだ。
富と権力とを持っていた俺が――
思考を止め、黙って顔と髪を拭う。奇妙な材質のそれはみるみると顔面についていた赤色を吸って重くなっていく。
手鏡を取り出してみてみれば顔や髪にはなにも残っていない。便利な性能のタオルだ。

「で、だ」

タオルを放り投げ、三号を背後に部屋の中へと入る。そうして床に座り込んでいる男の前に立った。
気が抜けているだろう男は俺を見上げながらずるずると気の抜けた腕で剣を持ち上げようとするも。

「あー、なんだちょっとは休ませろ。パシリでもなんでもやってやるからよ」

あー、しょっぱなからケチつけやがってチクショー、とつぶやきながらだれている。
蹴飛ばして立ち上がらせてもよかったが別に見るものもあった。
視線を、倒れている少女に向ける。
……内藤と同じぐらいの年齢だろうか？
蹴飛ばして仰向けにさせる。ついでに足で首の位置もまともにしてやる。呼吸困難で死なれてもナンであるし。

「おい、あんたロリコンか？」
「命の恩人になんて言い草だ。で、コイツは？」

主要人物。それは間違いない。倒れていても臭うその魅力。覚えのあるそれは人を惑わす英雄の毒だ。
しかし、意識を失っているためか内藤ほどの魅力は感じない。意識して抵抗せずとも抗える程度のもの。
それでも天敵がこんなにゴロゴロしているのは気分が悪い。しかも女ばかり。
これでは俺が女に餓えているだけなのではないかと思いたい気分にもなってくる。
ただ、性欲を感じない以上はその可能性も潰えているわけなんだが。

「あー、一応聞くがソイツはパシリにはならんよな？　俺が約束したのは――」
「ああ、庇わなくてもソイツをパシリにしようなんて思わんよ。で、コイツはなんだ？　お前のツレか？」
「い、いや。昨日初めて会っただけの他人だ」
……なんで嘘を吐くんだコイツ。その反応は身内か知り合い相手に行うものだろう。突っ込みをいれる気も起きない。
しかしまた、見事な汚染だ。実状は友人以下知り合い以上の仲だろうに、それをこんなに庇っている。自分を蔑ろにしてでもだ。
ここでこの転がってるのを俺に差し出して自分の負担を減らすか、女を生贄に逃れてもいい場面でもあるんだぞ？　そもそも、脅迫まがいに成立させた関係をそこまでして守るものでもないだろうに。
愚直すぎる。
「まぁ、いい。……ん」
気配を感じて振り返れば血まみれの騎士鎧を纏った二号が突っ立っている。
「解体は終わったのか。で、なんだそれは？」
白い石。てらてらと髄液に塗れたそれはきっと。
輝石とやらか。念のため機械で確認してみればそれは確かに依頼の品のひとつにあった輝石だった。
「でかした。それは大事に保管しておけ」
散々探しても見つからなかった輝石がここでこんな簡単に手に入る。それの効果はまさしく。

（…・なるほど、これが音に聞こえた【イベント】か。素敵だな。なるほど素敵な機能だな。主要人物。顔面の性能とあふれるカリスマでそこの２０代後半っぽい男を惚れ込ませることに成功。ここでコボルトを撃破できていれば上の機械文明人とのパイプもできる。なるほど、なるほど、成功率はともかくとしても内容の充実した戦闘だな）

内藤よりも運気は高いのか？　人物としての性能はともかくにしても主要人物としての役割はこいつの方が重い？

こいつは確保するかそれとも過酷な状況に放り込んで主要人物の生存能力を確かめてみるか？

「なんなんだよ。いきなり黙ったと思えばニヤニヤしやがって。あー、失敗した失敗した失敗したッ。なんなんだよこの兄ちゃんはよぉ！！」

「よし、二号、三号、行くぞ。パシリ、お前も早く立て。時間は有限だぞ」

「あ、ああ。って、そのガキは？」

「置いてくよ。手を出す気はないって言っただろ」

「……えっと。え？」

ぽけっと俺を見るパシリ。何を言ってるんだこいつ。自分でさっきコイツは自分のツレじゃないって言ったばかりじゃないか。

「放って、いくのか？　こ、こんな糞危険な場所に？　しょ、正気か？」

「お前とはなんでもないんだろ？　だったら助ける義理もない。放って行くぞ」

「おいおい、こんな危険な場所に置いて行けるかよッ！」

「危険？　危険って何言ってるんだ。入り口から１００メートルもない場所で何が危険だって言う。これからこの中をしらみつぶしにするんだぞ。なんでこんな入り口で死に掛けるなんて言う。って、おっと、もう死体が転がってるんだったか。悪い悪い。はっはっは」
「わ、笑いごとじゃねぇッ。糞ッ。やっぱてめぇは人でなしだ」

無言でにらみつけてくるパシリを感情のない目で見つめてやる。
それに対して奴は鼻を鳴らすと。

「……約束破るぜ。そこのガキを俺は入り口まで連れて行く。じゃあな」
「ついてやってもいいぞ。当然、対価はいただくが」

床に転がっている中身の入ったライダースーツを背負う男。端正な顔をしたその中身は男の背中で静かな呼吸をしている。誰にとっての幸福かはわからないが、そいつはきちんと生きているようだった。

「いらねぇよ。約束破りの代価は転がってる荷物でも持っていきな。パラＵＰアイテムも中に入ってるぜ」

持って行け、って。どうせそのままじゃ背負えないだけだろうに。
……ふらふらと、武器すらも置いていってこれからどうすんだアイツ。
などという考えが浮かぶが、あいつらはいつだってそんなこと考えてないんだろう。もらえるというならアイテムはありがたくいただくがやはり、主要人物の周りの人間は考えることが寄っている。
装備も道具もなくどうやって敵と戦って勝利するのか。そんなことを奴らは考えない。勝利しなければならない戦いには必ず現れる。勝利条件を満たす何がしかの手段も用意する。それがあれに惹かれ、

あれに汚染された人間どもが考える思考だ。

……殺すべきは男の方だったか？

削りすぎれば覚醒させることはできない。削らなければ俺の敵を生み出すことになる。……最終的に殺すのはたった一人と考えていたが、ここで奴らは見殺しにしておくべきではなかったのか。

方針が定まっていない。殺すべき敵が見えているのにそれが誰かがわからない。

もどかしさに心が苦しくなってくる。

ごろごろと転がっている主要人物。あいつらは殺すべき人員で、しかしあいつらは結局のところ、換えの効く人材だ。たった一人の、この誰かの物語の主役に用意されたであろう要素だ。

要素は殺さず、中心を探し出し、それだけを仕留めなければならない。無闇矢鱈と殺すべきではない。殺してはいけない。連理貴久が殺すべきはただ一人であるべきだ。

そうでなければならない。けして、目につく輩を片端から殺して回るように殺人鬼にはなってはならないのだ。

その上で、英雄に殺される悪役に堕ちてもならない。それは、そのときに与えられる死は今度こそ俺の息の根を止めるだろうからだ。

何のために内藤を手元においている。

何のために武満と手を組んだ。

俺は、小悪党でなければならない。殺すべき相手は核心だけでなければならない。そうでなければ、そうでなければきっと。

手の感触を思い出す。小さな生き物の頭を撫でた思い出。部屋で飼っている二匹の小動物。小さな片田舎のアパートの一室。心地よい、ぬるま湯のような大学生活。

かつていた場所から転落した先での生活を思い出す。

そして、かつて交わした約束を思い出す。けして、誰も殺さないという約束を。

弐拾陸／

「帰るには戦果は十分だが……。もうひとつくらい依頼をこなしておくか」

四人分のバックパックを詰め込んだ橇。その中には一体分のコボルトを処理したクーラーボックスも入っている。

このまま帰ってもよさそうなものだったが、言った通り、来て早々帰るのも楽しくはない。

昨日倒したゴブリンは12体であるし、慣れてきたところで今日は18体ぐらいは処理してみよう。

ついでに、この階の電力を復旧させておく必要もある。できなくとも明日までに手がかりぐらいは掴んでおきたかった。

昨日と違い、松明型の電灯を使わずとも多少は先の見える周囲を見る。警備員の詰め所らしきここは先ほどの戦闘の結果もあってか物が散らばっていた。

「片付ける必要はないが、……ん？」

あのライダースーツの女がぶつかったためにへこんでいる机のそばに何か光るものを見つけた。

机の脇から覗き込めば、鍵だ。おそらく、バイクのキー。

「……おい」

「ッ？！」

「なにびくついてんだよ。忘れもんだって、あ、俺らのアイテム全部マジで回収してやがるし」

「なんだよ。返さんぞ」

ポケットにさっさとバイクのキーを入れてしまう。いまさら返せ

といわれても返す気はさらさらないアイテムを先ほどの男は一瞥もせず、俺へと目を向ける。
その視線の中には真摯さのほかにはかすかな軽蔑しか見て取ることができない。

「名前だ」
「あ？」
「アンタの名前を聞き忘れた。だから戻ってきた」

……ああ、こういう奴らだった。ああ、ああ、思い出してくる。
これは、こういうものなんだと、過去の記憶が蘇ってくる。

「タカぼんだ。そう呼べばいい」
「タカぼん、ね。偽名か？」
「いや、渾名だ。なんなら連理とでも呼んでおけばいい」
「ふぅん。ちなみに俺は銀稜台学園大学部の三年。剣道部で主将もやってる海雲（カイウン）光利（コウリ）だ」
「そうか。で、それだけか？」

ああ、とうなずいた海雲は、今度こそ背を向けて去っていく。耳を澄ませば足音はどんどん遠ざかっていった。

（また、銀稜台。……一体そいつはどこにある？　銀稜台学園？　大学部？　そんなとこ俺は知らないぞ。……まさか、異世界とやらが複数あって、そういう世界から好き勝手に誘拐してるんじゃ……）

背筋が寒くなる感覚を覚えながらも平静を取り戻す。
武満に調べさせておくものがひとつ増えた。
俺はバイクのキーを三号へと放り投げると小さなため息をつくのだった。

弐拾漆／

「二号は手早く解体しろ。三号、周囲を警戒だ」

こちらに気づいていなかったモンスターを奇襲で三体仕留め、二号に突っ込ませた後、弓とボウガンの遠距離からの援護射撃で圧殺した五体のゴブリンの死体を前に指示を出す。

相も変わらず重労働のそれはいまだ俺に足りないものがあることを実感させる。

「……肉人形の強化は必須だが」

それとは別に解体やアイテム探索専用の人材が必要だ。

解体中に戦闘に入ったら肉人形では対応に難が出てきそうだった。

それに、塔探索には何かしら目星をつけて望まなければならないだろう。単調な探索をまさか管理側が望んでいるわけでもあるまいし。

……とりあえず、今は依頼をこなしていき、なんとか管理側との会話を都合しなければなるまい。

「三号、お前は……」

言葉に即座に振り返る肉人形に対して、俺は掛ける言葉を失う。

発声器官のない道具に対して何を言おうと意味はない。手を横に振ると意図を察したのだろう警戒に戻る。

（肉人形は、強化された人間よりも強くなれるのか？）

武器屋や道具屋に売っているアイテム類を思い出しながら、二号が解体を済ませる間にそちらの考えの整理を終える。
肉人形の強化に対して必要なもの……。武器や道具以外に何が必要なのか。それに対してはやってみなければなんともならないが、発想を転換するだけで、なんとか都合がつきそうではあった。
そうこうするうちに血のしたたるナイフを持った騎士人形が作業の終了を身振りで伝えてくる。

「よし。行くぞ」

そうして二号を先に立たせ、警戒しながら歩いていくうちに俺は目的のものを発見したのだった。

弐拾捌／

「……次の階への入り口か。それに順ずるものか……」

つぶやく。それを見た感想を、つぶやく。
ただの扉でしかないそれ。
ただのものと異なるものがあるそれ。
声だ。
声が聞こえる。人でないものの声。誰かの囁くような歌うような声が。
わざわざ日本語（ニンゲンノコトバ）でこちらに語りかけてくる声が、だ。

「夜道歩けや。歩けや夜道。狂い咲くのは桜か人か。恋の行方に、死の行方。駆ける雲間に蛆が泣くぅぅぅぅぅっぅぅぅぅぅぅぅう！！！！　さぁさぁさぁさぁ、異界の戦士ぃぃぃぃいいいいいいいッッッ！！！！　扉を開き、入っておくれ。共に干戈を奏で合おう。歌っ

ておくれ。さえずりを聞かせておくれ。夜は淋しく、昼は辛い。目覚めの朝こそ私の愉悦ッ！！！！！

――扉の前にいるのは、

――わかってるんだよぉおおおおぉおおおおッッッッ！！！！！！」

羽音のような音と共に、内側から扉がバキボコベコッッッッとまるで、巨大な拳で殴りつけられたかのように膨れ上がる。

ぶわっ、と脂汗が溢れた。溢れる殺意と狂気に体が反応を返したのだ。

……逃げるか？　浮かび上がったその判断を即座に棄却する。

逃げればおそらく今後、これと、こんなものと通路でエンカウントしてしまうことになる。こんな危険な雰囲気の奴と遭遇戦だなんて想像することさえも不快すぎた。

さらに、今逃げれば追いかけてくる、そういった手合いの雰囲気をひしひしと扉越しに感じる。

「……二号、敵を確認次第、最大出力で即座に殺れ。三号は二号の援護。及び、俺の盾だ。敵の攻撃が俺に届かないように死守しろ」

肉人形からは言葉も仕草も返ってこない。ただ端末に、出した命令が最優先のチェックつきで表示されるだけだ。

粛々とすべてを行っていくそのさまに、感じるもの。思う。俺が真に信頼すべきは人ではなく……。

考えを振り払い、俺は扉を蹴り開ける。

弐拾玖／

薄暗さ、それでも微かにある光を反射してその部屋の全貌が微か

に読み取れた。
俺を出迎えたのはゴブリン、コボルトなどの骸の残骸。骨と腐肉の丘だ。複数の円柱に支えられた巨大な広間にそれらが積み重なり、山を形成している。
非現実的な光景。墓標すらない獣たちの腐れていく形跡。

「……」
「ヒハッ。ヒャハハッ。ヒハハハハハハハハハッッッッ！！！」

それは積み重ねられた骨の上に腰掛けていた。
肉人形を無視し、俺へと向けられた無機質な視線へと視線を返し、
――ブゥゥゥ、ァァァァァンンンンン、と羽音と共にそれは滑るように舞い降りた。

「二号ッ、やれ！！」

腐肉の腐れた臭いの充満する室内で、即座に指示を出す。
直感として、目の前の相手から情報を引き出すことは不可能だと断ずる。日本語を話せ、理解できていたとしても、目の前のあれと会話は不可能。
目の前のあれは、あれは、緑色の甲殻につつまれた体を持ち、大量の眼球の集まった複眼を持ち、薄く鋭利な刃のような羽を持った、人間サイズのバッタに、拗れ、凶り（マガ）、おかしくなったような手足が六つもある生物。
外見が明らかに人とは異なっている。だが、そんなものは理由にはならない。俺が何より交渉を棄却した理由はただ一点。
俺を見る目。大量の眼球で作られた一対の目が、奴の内面の狂気を溢れんばかりに押し出してくるからだッ！！

「ギャハッ。カハッ。キャハハハハハハハハハッッッ。飛び散れッ！　飛び散れッッ！！　狂気恐怖雲散霧消ッ。悲しきかな我が命ッ。悪しきかな汝が命ッ。ギャハハハハハハハハッッッ」

第一、ガチャガチャと押し開かれた口から黄色の体液を撒き散らし、俺へと狂言を向けてくるそいつからどんな情報を吸い出せと？

ああ、わざわざ情報を吸い出すならもっと素直でか弱い生物の方が良いに決まってる。こちとら言葉の通じる個体だからって、こんな奴に聞きたいことなど一切何も全く存在しない。

飛び掛ってきたそいつに向かい、無言のまま二号が踏み込んでいく。それに対して、ギュゥルリ、となにやらヴァイオリンに似た楽器をそいつは背中から取り出した。

二足歩行するバッタかキリギリスにも似たその生物がそれを弾くのか、との想像は裏切られる。おもむろにヴァイオリンの頭の部分を掴むと、目にも留まらぬ速さで剣と盾を持った二号へとヴァイオリンで殴りかかっていく。

相対していたために、用意していたために、既に命令を下していたがために、二号は奴より先に剣を突き出していた。

金属を打ち据える音が響く。

人間以外による超速度の攻撃による相打ち。しかし、現実は俺の予測を軽々と上回っていた。

二号の剣は届いていなかった。

剣を抜き、奴よりよほど早く突き出していたはずの二号が、負けていた。

微かに見えた一瞬。盾の隙間を縫って二号の鎧へとヴァイオリンが叩きつけられ、逆に先手を取ったはずの二号の剣は届いていなかったのだ。

舌に苦い味が感じられた。あの、歴戦の勇士であるゴブリンやコボルトを一対一で戦えば必ず仕留められた二号が真正面から戦って敗れたのだ。

「この階の責任者、か……」

弾き飛ばされ、床へと転がっている二号を視界の端に置きながらつぶやく。二号の鎧には穴が開き、中の肉にもダメージが入っているようだった。糞重い全身鎧の二号を弾き飛ばしたことと、金属の鎧に穴を開けたことといい、あのヴァイオリンもただのヴァイオリンではない。

思考は刹那で済ませる。かつての勘を取り戻すように一瞥するだけですべての確認を終えた俺は急いでバックステップで奴から距離をとる。背後は扉だが問題ない。俺の前には盾がある。弓を構えた三号だ。

構え、放つ。

光を固めたような矢の形をしたものが虫人間へと突き進む。四本の腕の一本にヴァイオリンを持ち、二号へと突き出した奴の背中に、光の矢は直撃した。

驚愕は、喰らった奴ではなく、放ったこちら側に訪れる。

確実に、不意を撃ち、攻撃直後の硬直した姿勢の敵。それに訪れた光の鏃。数多のゴブリン、コボルトに致命傷を与えてきたそれが、突き刺さっていない。

光の矢は奴が背中の羽を動かした瞬間に光の粒子となって吹き散らされてしまっていた。

体力１８０／２００

状態：再生機能を展開しようとしています。

矢には見切りをつける。それがかき消された瞬間、即座に手元の機械を動かして二号のステータスを確認する。ただの状態と体力だけが表示されたそれを見て、まだ二号が戦闘に出られることを確認する。

命運は、尽きているのか、尽き掛けているのか、それとも未だ十分に残っているのか。
疑問の答えは、諦めない側にこそある。

「キャハハハハハハッッッ。優雅なり愚かなりいいいい！！　わたしぇは、ワタシハハハハハハハハ。エエエエルゥゥルルルルル。我は、ヒゥゥィィィ、ハッヒャァァァァァァ！！！！！！！！！！」

倒れた二号へと飛び掛った奴が二号へと楽器の連打を浴びせていく。倒れたまま構えたヒーターシールドで防御するも、盾は殴られるたびに形を変え、遠からず鉄クズへと変えられる。
未だ、二号も三号も装備以外に大きな差異はない。それでも近接系重武装の二号が壊されたなら、後方援護仕様の三号では二号ほどの時間もかけずに破壊されてしまう。
当然、肉人形以下の俺では、三号を犠牲にここから逃げ出せたとしても、帰りの道中でゴブリンやコボルトに遭遇して殺されるに決まっていた。
この瞬間、二号や三号が何らかの力に目覚めて、あれを殺してくれるなんて幻想を抱けるはずもない。
確定事項として、二号単体ではあれには勝てない。
三号の援護は援護になっていない。
もちろん、俺に秘められた力なんてないし、あっても覚醒させる方法はない。そもそもステータスの能力がギャグ以外の何かだという保証もない。
結論として、

「三号、アレを取り押さえて二号から引き剥がせ。二号、三号が抑えたら力づくで仕留めろ」

人形どもに無理をさせるしかなかった。

参拾／

敵に、結果として勝利した。

強敵は強敵だったが、それが一匹だったから始末はできた。

二号を殴りつけていたそれは、三号に取り押さえられた。

狂的な言葉を発し、脳髄が犯されるような言葉を吐き出すそれは、三号の拘束を力尽くで破る前に、二号に生きたまま解体された。

暴れる六本の手足は一本一本破壊され、うるさく羽音を奏でる羽は根元から引きちぎられた。

うるさい口は切除され、複眼らしきものは取り外される。そうして達磨になったそいつは腹を割かれ、有用なものと無用なものとに生きたまま分けられ、解体されたのだ。

屠殺場の肉のように。

そうして二号が残りを丁寧に解体をしている間に俺は壊滅的に破壊されかけている三号を治療していく。

右腕は半ばから引きちぎられ、左の足は羽によって切り刻まれ、腹の中にヴァイオリンを根元から叩き込まれた三号。パラメータを見れば、残ＨＰがあるだけで状態は機能停止に近かった。

とはいえ、完全にぶっ壊れたわけではない。俺は楽器を引き抜き、ポーションの蓋を開けるとドバドバと腹の穴に突っ込んでいく。そうしてから止血剤をこれでもかとぶっかけ、傷薬を塗った包帯を巻いていく。正直、それぐらいしかしようがないのだが、特にカスタマイズしていない肉人形はそれで十分らしかった。

取扱説明書（トリセツ）にも書いてある。

そうして三号を放置し、二号の元へと戻る。

「どうだ、何か見つかったか？」

並べた部品を次々と保存用のケースに入れていく二号は無言でそれらを差し出してくる。
体液にぬれた階級章と、鍵束。そして、ＵＳＢメモリにも似た外部保存用の機器。
メモリを受け取り、端子の部分を見てから、手元の端末に突き刺して見る。
挿入（ハイ）った。
……読み込める、のか？
用意していたのか、用意されていたのか。これが後者だとまた何かわけのわからない想像がつきそうでいやになってくるので、考えを一端、どこかに棚上げて端末画面を覗き込む。
画面には日本語に変換中の文字。そして、出てきたのは。

［魔王軍侵攻地リスト］［機械文明人虐殺史］［夢と現実］［闇夜文書１項～３４項］［銀中唐］……～……［覇王の塔地上一階層全図］……

これら重要機密と思われるデータ群。そして、他のモンスターと隔絶した戦闘力。やはり責任者か。
そうして広間を見渡す。薄暗い中でも、目が慣れきっている今なら、大体のところに何があるのかぐらいは見て取れた。
解体された昆虫に、部屋の片隅に立てかけてある楽器がいくつか、それとあちこちに散らばっている骨や腐肉らしきもの。
……あれは、ブレーカーか？
奥の部分にある機械のようなものを見る。ブレーカー？　ちょっと大きくてゴツくて危険っぽさそうなものだが、確かにブレーカーに見えなくもなかった。そばに小さなカードリーダーらしきものと鍵穴もついていた。
端末をいじると、［配電システムについて］というファイルがち

ょうどある。

題名：配電の復旧方法　送信先：システム担当

本文：上からの命令だから、イカレ虫野郎のてめぇにも理解できるように説明してやる。機密だし、本来なら口頭だが、てめぇとは会話あわねぇからよ。メール読んだらちゃんと消せよな。いいか、削除しろよ。保存して外部メモリに取り込んだとか言ったら今度こそ轢き潰してキタねぇ口と脳みそぶっ飛ばしてやるからな。

で、だ。まず侵入者が入ってきたら電力が勝手に落ちる。そうしたら作戦通りに警備が動く。そこはてめぇも理解してると思う。

で、侵入者を排除後に電力を復旧しなけりゃならん。ていうかしろよ復旧、大事だからな。一日以上経つと、一階全体の冬眠装置が停止しちまって、一階の各エリアに寝ぼけ面の警備兵がいつまでも警戒態勢で歩き回るからよ。ちなみに冬眠装置の復旧方法は二階にあるマニュアルを読むか、二階警備担当に直接聞け。

で、これが本題だ。電力の復旧方法は、鍵穴に鍵突き刺して、メールに添付してあるパスワードをてめぇも持ってるカードキーを使って端末に入力。それでブレーカーを上げればめでたく完了だ。簡単だろう。

そんじゃお姫さまの眠りを妨げる奴儕（ヤツバラ）の排除よろしくな。

ちゃんと削除しろよ。以上！！

外部端末に入っていたそのデータを見ながら鍵束の中にカードキーを見つける。反対側に外部メモリと同じ規格の端子が見えた。

「……、あげちまうか。ブレーカー」

無言で三号がうなずいた気がしたが、気のせいということにして電力を復旧するのだった。

参拾壱／

「……確か、炎の杖があったよな」

倒したゴブリンが持っていたはずだ。電力が復旧し、明かりのついた部屋の中で目を慣れさせる。薄暗い世界から明るい世界へと変化を遂げた視界の中。はっきりと見えるようになった天井を見上げて俺は呟いた。

部屋の中は乱雑だ。あちこちに散らばる骸の山。解体され、有用な部品を持っていかれたため、青い血と微かな部品だけが散らばる床。そして日用品らしきものが乱雑に散らばっている机。

「燃やしたら、どうなる？」

嫌な気分になりながら天井を再度見上げる。

天井に、びっしりと隙間なく植えつけられた、巨大な蟷螂の卵にも似た白い塊。

無数にある卵がさらに集まって白い塊となっている。さらにそれ

が大量に、それこそ天井に隙間なく、びっしりと、むしろそれが天井だと言わんばかりに産み付けられていた。
おぞましいのは、それらは命の鼓動ともいうべき、力強さすら感じるほどの無音の胎動を繰り返していること。
おぞましいのは、あまりに白く、あまりにそれが薄いためか、卵の内側にある、奇妙に成長しきった複眼が一斉にこちらを見下ろしていること。
内藤がいたら発狂していたよな、などと考えながら、炎の杖の使い方もわからないのに、上へと向け、……気づく。
炎の熱でふ化したら？　と。
それとも弓矢を無効化したように、炎すらも効かないのか？
そしてあれらが一斉に、降り注いでくる？
戦力は――、見回す。
二号はなんとか動く。三号もあと少し休憩し、無理をすれば動けるだろう。
しかし、おそらく、ここのボスだったあれの幼生を、生まれたてとはいえ、相手にする力があるかといえば、否、だ。
……凍らせる、か？　炎があるなら氷の杖とやらもあるはずだ。
それを使って部屋ごと処分する。いや、ブレーカーはどうする？
しかし、これは、放置するにはおぞまし過ぎる。
武満に相談するべきだろう。≪法の剣≫の総員と連携して、生まれた端から殺していくしかない。
少しの休憩をとったあと、この部屋にあった日用品、楽器、書類などを纏めて回収し、そうして、見下ろす複眼を背に俺は部屋を出て行く。
粘りつくような狂気の篭った視線が俺の背を追い続けていた。

参拾弐／

「そういうわけで、今回の戦利品だ」

果実を含めたパラメーターアップが四人分、それの使っていた武器といくつかの防具、あとはバイクが一台。

そして特別任務をすべて終えられる分の成果。あと楽器。

一日の戦果としてはまだまだだが、十分及第点に入るのではないだろうか。

それでも希望としては、≪法の剣≫が加入員から奪った程度の収入が欲しいものだった。

（俺も頭の軽い薄ら馬鹿共でも騙してカツアゲでもしてみるかねぇ）

「ちょッ。って、えええええ。た、タカぼんさん、早すぎです。もう一階の攻略が終わっちゃったんですか？」

「普通だ普通。少し頭を働かせればこれぐらい誰だってできる。ああ、ＭＡＰが手に入って一階の構造がわかったからな。明日からは物や情報の回収に移るぞ」

ああ、手に入った依頼の品は帰りがけに提出していた。

そして新しい依頼が間髪入れずに追加されたことから考えて、最初の分を含めた複数回の依頼はすでに用意してあるのだろう。

任務名　塔内部探索一階層・弐
依頼者　機械軍団総司令
詳細　塔内部の探索を頼む。
その上で、何か敵軍の情報を探してくるべし。
破壊工作や警備の殺害でもよしだ。
期待しているぞ。
報酬　３０，０００クレジット
ポーション３個

特記事項【先着二名まで】

任務名　塔内部機密文書回収・弐
依頼者　機械帝国諜報部部長
詳細　塔内部にある機密文書の回収をお願いします。
とりあえず今回もなんでもいいです。
地図や作戦の書かれた文書など発見できればボーナスをつけます。
報酬　３６，０００クレジット
エーテル３個
特記事項【先着二名まで】

任務名　塔内部モンスター討伐
依頼者　機械軍団第一軍団長
詳細　今回も塔内部の敵軍の討伐を頼む。
そうだな。次はコボルト連中を２０体ばっか倒してきてくれ。討伐の証拠は連中の階級章を提出してくれればいい。
異世界の戦士よ。今回も期待しているぞ！！
報酬　６０，０００クレジット
筋力増強剤・改　２個
特記事項【先着二名まで】

任務名　貴重素材を入手してほしい・弐
依頼者　機械軍団第二軍団長
詳細　……狂乱の蟲人の心筋の回収をお願い。
報酬　１００，０００クレジット
肉人形開発用素材
特記事項【先着一名まで】
【報酬はカタログから選んでおいて】

ちなみに、総司令と諜報部部長、第二軍団長の依頼はその場で終わらせた。総司令と諜報部部長のは伍まであったが、なんとか終わっている。現在は二階から始まる依頼を受けてある。

第二軍団長のは、貴重素材・参の他に、魔力を用いて作動する武器の入手というのも出たからそちらは炎の杖を納品して終わらせてきた。貴重素材の参は俺がまだ出会ったことのないモンスターの素材らしい。擬似相似鳥の尾羽などというものだ。……なんなんだろうな。

さて、アイテムと金が大分入ってきている。肉人形開発用素材は一番貴重そう、かつ高いのを貰ったので、いずれ使える工具が手に入ったら使ってしまう予定だ。

「もう少し探索をがんばったら、俺らもどこかに事務所でも構えるが、どう思う？」

「え、あ、はい。いいと思いますけど……」

「なんだよ。歯切れが悪いな」

「あ、いえ、なんだか現実味が薄くて。タカぼんさん。塔の探索って、そんなに簡単なんですか？　それに、機械文明人は、私たちを使う必要があったんですか？」

「……何を？」

言ってるんだお前は？　塔の探索が簡単？　俺たちを使う必要がある？

何をそんな、当たり前のことを当たり前に聞いてくるんだ？

「一人で潜ってみるか？　塔」

「え、？」

「一人で殺して回ってくるか？　奴らを殺すのは簡単だと息巻きながら、暴れてみるか？」

「……、あ、その、すいません。でもそういうわけじゃなくって」
「じゃあどういうわけなんだ？」
「……、タカぼんさんって、こういうことの経験があるんですか？」
「ないな」
「即答、ですか」
「悩む必要がない。初体験だよ。こういうのは」
「それにしては……」

手際が良すぎます。そう、小さく内藤は呟いている。
手際が良いわけないだろうに。本当に手際が良かったらすでに二階に足を掛けていなくてはならない。人数も二人と、最低必要な人数すら割り切っているし、何をするにも非効率的な人数だけしか用意できていない。
本当に手際が良いのは、武満みたいな連中を指している。そのことに、目の前のガキは気づいていないらしい。
道理に無理を通して手に入れた戦果を、まるでそれが俺の当たり前だと思っているようだった。
しかし、それを訂正する気はない。

「まぁいい。それで、そっちの成果は？　何かわかったか？」
「あ、いえ、そんなには……」
「俺と比べなくていい。わかってることだけ教えてくれ。あと財布貸せ、活動用の資金入れといてやる」

肩身が狭そうに財布を差し出してくる内藤。それにかまわずクレジットを入れながら報告に耳を傾ける。
内藤が調べられたことは、そう多くはない。しかし一人の人間が調べたならば十分に納得できる量と質だった。
そもそも、確定した一個の情報だけ報告してくれれば俺にとっては十分ではあったのだし。

まず内藤が報告したのは予想していた施設の変化である。ああ、施設という名前も、≪法の剣≫の連中の中では街、都市という言い方に変わっているらしい。

また、その街で活動している人間が増えていること。これはそのほぼすべてが≪法の剣≫の人間。さらに、≪法の剣≫の人間が活動しはじめた施設からＡＩが退去しているということ。内藤がＡＩと話した結果、重要施設以外の保全は人間にやらせるつもりらしいことがわかった、とのこと。

そして最後に重要なのが、≪法の剣≫を抜け出した人間と昨日の≪法の剣≫の勧誘から逃げ出した少数の人間が集まったチームができている、という情報である。

「名前が確認できたのだけ先に報告しますね。えっと、≪喪男浪漫の会≫と≪ダンジョン教国・覇王の塔支部≫の二つです。あちこちで人の勧誘に回ってて、それで勧誘されてる人もいました。聞いたら明日には探索を開始するみたいですけど。止めた方がいいでしょうか？」

「止めても聞かないだろ。探索したくて作ったんだから。それで、何グループぐらいいそうだ？」

「はい。えっと、名前が確認できなかった、というか未だ決めかねていたグループが三つありましたから、五グループだと思います。拠点は街にある空き物件を占拠してるみたいです。お金を払ってないから電気もガスも水道も来てないって愚痴ってましたから。それと私たちにメンバーにならないかと」

「断っとけ。それなら≪法の剣≫に入るぞ」

「ですよね。それで、こっちの人集めの方は……」

「わかってる。めぼしい人材がいなかったんだろう。だがよくやったな。こういった街の様子を確かめるのは内藤が適役みたいだ。今後も頼りにする。頼むぞ」

自然と頭を撫でかけてしまうのを抑える。悪癖が極まっているが、気にしたそぶりを見せずによくやった、ともう一度言った。
内藤の目が俺の手の方を向いていたが。
「ああ、手は気にするな。……よし、今回はこんなところだな。それで、俺たちのチーム名かギルド名かパーティー名、どうする？コンビ名でもいいが……」
「コンビ名ですか？」
「ああ、武満にもないと不便だと言われたからな。確かに、一人で名を売っても覚えてもらえるか不安ではあったし」
それに、どこかの勢力の代表者や、所属だと名乗った方がこういった閉鎖された空間では箔や信用がつく。
「そうですね。確かに、あった方が信用されやすいと思います。外を歩いても勧誘されなくなりますし」
「だろう。で、だ。名前だが、タカぼん＋1とか、連理貴久と愉快な仲間とかそういうのでいいならすぐに決められるが」
「って、それじゃ私が全部おまけじゃないですか！！」
「あはは、ま、そういうのが嫌ならオサレな名前でも考えといてくれ。別にタナトスとか、貴人白騎団とか、そういうのでも文句はいわんから」
「……、はぁ、考えて見ます。その、タナトスとかそういうのはタカぼんさんが考えたんですか？」
「地元の暴走族がそんな感じの名前つけてたんだが？　今時の連中はそんな感じのが好きじゃないのか？」
「いえ、私もそこまではちょっと……。しかもそういう名前を無意味につけるのも」
確かに、そうかもしれんが。団名と実情が乖離することなどそう

珍しくもない。だから別に、外れた名前がつけられようと問題はない。
　などということを大きな声で言うのもなんであるから黙っておくとして。

「ちなみに期限は≪法の剣≫が探索始めるまでな。その前に俺もちょっとは考えてみるが、あまり期待はしないでくれ」

　はい、と頷く内藤。さて、ほかに伝え忘れたことはないかと考えてみれば……。

「ああ、忘れてた」
「はい、なんですか？」

　オレンジジュースの大瓶に手を伸ばしていた内藤が振り返る。ああ、そのままでいい、と手振りで示すと内藤もグラスにオレンジジュースを注ぐ作業に移る。俺も忘れてた忘れてたとつぶやきながらそれを伝えるのだった。

「ボウガン撃っても効かない敵が出た。以上、解散、俺は寝る」
「はい！？　って、何ですかそれ、まずくないですか！！　ちょ、部屋に戻らないでくださいッ！！　武器屋！！　武器屋に行きましょうすぐッ！　今すぐッ！！」

　そういうわけでずるずると内藤に引きずられる形で武器屋に向かったのだった。

参拾参／

「本当、勘弁してくれよ」
『がっはっは。あまり気にするな。重要なことじゃねぇよ。要は気合だ気合ッ。がっはっは』
「でも、本当よかったですね。武器屋に来て」
「ああ、その判断は正しかった。内藤には感謝してる」
「あ、……はいッ！」

意識せずに頬を染め、上目遣いに見遣る内藤を放り、それを見る。
ＭＡＰ情報のＩＤ＋鍵束のＩＤを用いることで武器屋のカタログが更新される。それに気付いたのは内藤だった。
カタログの片隅にあったＩＤやらなにやらについて疑問に思った内藤がそれについて問いただした結果、ＡＩが応えたのだ。
俺が以前問いかけたときは応えなかったのに、と理不尽を込めて誰もいない台を見る。
武器屋の親父型ＡＩは俺の視線に気付いているのかいないのか、反応はない。

「属性情報が追加、ですか」
「ああ、今までは武器の情報も全て見せてくれてたわけじゃなかったわけだ。やられたな」

ＡＩは無言だ。同時にわかっていたことだと二人で深いため息をつく。これじゃ、また仕掛けがごろごろ出てくるだろうし、ほかに客のいない夜でよかった。こんな情報を抱えていると知られたら、是が非にでも聞き出そうと付きまとわれることは必死だっただろう。

「見ろよこれ。今まで光輝属性しか売ってなかったんだぜ。テラワロス。マジキチ」
「テラワロ……？　マジ、キチ？」

ぽかんとしてる内藤。未だ絶望的なほど今までのカタログが終わっていたということに気付いているのかいないのか。彼女は呆けた顔で俺を見たあとに、呟いた。

「つまり、一階攻略の時点で光輝属性に対するばりあーとか、しーるど、とかそんな感じのものが出てきてたら。その、詰んでたってことじゃ」

「正解。なんだ、わかってたわけだ」

さぁ、っと青い顔になる内藤。そう、確かにあの虫に対して、光輝属性で挑むことは死を意味していた。かき消されたボウガンの矢。解体の途中に気付いたが、切断力の明らかに落ちていた二号の剣。最後には、ゴブリン解体用のナイフまで投入せざるを得なかった、あの状況。

ナイフの方がなぜかよく切れ。剣は刃こぼれでぼろぼろになってしまったあの状況。

もし三号が組み伏せていなかったら。もし人間だけで挑んでいたとしたならば。

もし、唯一の攻撃手段になるであろう炎の杖の仕組みを理解してそれを使用していたならば……。

（炎によって、データは消失し、カタログから属性情報は開放されなかった？　それに、あの虫から取れた希少素材も燃え尽きていたはずだ。……そもそもなぜ、塔のモンスターがこの施設の情報を開示させるためのＩＤなんぞ所有してるんだ？）

ＡＩは、無言である。嫌な想像を振り切る。まさか、そんなことのために呼ばれたなど、今の段階でも想像のつく出来事とはいえ、考えたくもない。

「……こりゃ、出るな二階から」
「タカぼんさん？」
「毒、麻痺、眠りの状態異常だ」
「……ああ、ですよね。三、四階でも？」
「出るかもな。お得情報、というよりはなくてはならない必須情報が」

内藤が俯き、苦々しげに呟く。

「なんのために、こんなことを？」

そうしてお互い、ため息をつく。先ほどまで考えていた、塔の攻略の真意は今は置いておく。検証するにも要素が揃っていない以上はただ己の不快をかき混ぜるだけの行為だからだ。

「どうします？」
「金も入ったし、無属性の弓とボウガン、それと新品の剣を買って仕舞いだ。それ以上は金がねーよ。薬も買わなきゃならんし。ああ、内藤の武器も買わなきゃな」
「ありがとうございます。……私たちも後援してくれる人集めます？」
「欲しいは欲しい、欲しいもんだが……」
「欲しいもんだが？」
「そう都合よくは見つからないだろう」
「そうですよね」

髪を掻きあげながら言う、気怠げな内藤の声。それが実情を示していた。

それに、昼間の勧誘の成果を思い出しているのだろう。言葉は軽くとも表情は重い。

「明日は、内藤も探索だからな。後援は必須だが、まだだ」
「わかりました」
「それで、……あー、そうだな」
「はい？」
「≪法の剣≫にこの情報は知らせる」

ぴくり、と内藤の眉が寄る。内藤は未だ≪法の剣≫に良い感情を持っているとは言い難かった。
それが他者を抑圧しながら成長を続ける巨大になっていく組織に対する危機感か、それとも俺が煽った不安が成長しているためかはわからない。

「もちろん無料じゃあないぞ」
「はぁ……」

不満そうな声。俺はがりがりと頭を掻く。まるで言い訳のように言うが、これもひとつの本音だ。

「序盤で大量脱落とかは考えたくない」
「……ッ、そう、ですね」
「不満か？」
「あ、その、……」

問いかけには、か細い声で、はい、と返ってくる。声量は確かに聞こえ難いものだったが、確かに、意思の込められた声で、はい、と答えていた。
自然と眉が寄る。

「どうしてだ。人助けだぞ、一応は」

もちろん情報料はせびるつもりだ。それに内藤に知らせていない同盟内容からしてもここで≪法の剣≫の強化は必須である。譲るつもりはなかった。それに、果たして内藤はなんと答えるつもりなのだろうか？　名目だとしても、人助けは人助けなのだ。

「あの、その、なんというか、その情報は、必要なんでしょうか？」

「≪法の剣≫にとってか？　必須だろう。現に俺じゃなきゃ死んでたからな」

あの虫の狂気なんてものは相対したものにしか理解できないだろうが、それでなくても戦闘で武器の効かない敵が出てきたならば、現在の≪法の剣≫では対処できないに違いない。

貴重な戦力をモンスターとの戦闘ですり減らすなど俺には考えもつかないことであったが。

「でも、その、それじゃあ万全の状態になるんじゃないですか？≪法の剣≫が、……その、私たちがお金とか人とかで苦労してるのに。なんだか情報まで譲るのは、≪法の剣≫が有利になりすぎませんか？　……、これは、私が、卑しいだけなんでしょうか？　……人より優位な状態でありたいと思うのは、貴方が、タカぼんさんがトップに立ってるのに、それを易々と≪法の剣≫に譲ることはないんじゃないかと思うんです、けど」

か細い声で、しかしながら決して聞き逃せない力の篭った声が俺の耳に届く。

ぽつり、ぽつりと語られるそれは、確かに俺の目的が塔の攻略であるというならば見逃せないことであった。

この狭い空間で得られるリソースを俺たちだけに集約するのならば、確実に序盤で≪法の剣≫の勢力を削っておく必要はあるのだ。

俺が今、この一瞬で考えた三十通り以上の≪法の剣≫に対する嫌がらせほどに悪辣なことを目の前の少女が考えているかはともかくとして。

消極的な妨害を行うことは正しいことである。

それが塔の攻略に目的とするのであれば。

「秘匿してもいずればれるだろう。そのときはどうする？」

「関係ありません。積極的に情報を与える、なんて契約は結んでないですよね？」

「ああ。そんなものは結んでない。俺が情報を与えるのは全て好意からだ」

「だったらッ！　だったら、今、このときに塔の探索でできるだけ優位に立って、……その上で情報を与えることは、駄目なんですか？」

≪法の剣≫は重要な戦力だ。一人だろうと二人だろうと、戦力が削れては困る。最悪を考えれば、丸ごと全滅してもおかしくないのが塔の探索なのだ。それを目の前の少女は理解しているのだろうか。

（いや、理解はしていないか。とはいえ、正論ではある。塔の攻略はどちらにせよ、時間をかけて身体を強化すれば確実に成功する類の行為ではないんだ。質と量が共に揃っていないといけない。それでも）

すりつぶされた戦力は次の週には補給される。ならば、時間をかければいい。だから、自分たちの安全以外の何を心配する必要がある。

と、やがて来る名状しがたき恐ろしきものがやってこなければ俺も考えただろう。

だからこそ武満の勢力はなるべく磐石の状態で、本命にぶつける

必要があった。だから下手に散られても困るところであるし、その暴力性が人間相手なら俺よりも手馴れている連中が損耗するのは望むところではない。そして塔の攻略で楽をさせることは、後の展開を考えれば望むものであった。

武満はともかくとして、奴の配下には傲慢になってもらう必要がいくらでもあった。苦戦はするかもしれない。しかし、致命的な傷を負うことはない。そういった経験を奴らが積んで行けば、いかな統制の利いた組織であれ膿が出だすだろう。

わかりやすい主人公（アレ）の好む展開になることは間違いがないのだ。

そういったことを無視して理屈を捻り出す。

「序盤で厭戦感情が蔓延するのは困る。特に、こんな狭い空間だしな。こちらのメリットデメリットはともかくとして」

「どうして、ですか？　私たちが私たちだけの得を考えちゃいけないってことですよね」

「その通りだ。簡単に人間が死ぬような状況で俺たちだけが得をすることを考えたらどうなる？　特に≪法の剣≫に対しては、積極的に情報提供するべきだ。奴らが誰の目から見ても磐石だと信じられるぐらい成長するまではな」

「ッ。……わかりませんッ。どうして私たちの首を絞めるようなことを自分からやんなきゃいけないんですかッ！！」

そんなのお前の本来のパートナーをぶっ殺すためだよ。

なんて言えるわけもない。既に考えていたこいつ好みの言葉を吐き捨てるようにぶつけてやる。

「難民が生まれても困る。今更な」

「……なん、民？」

「だから、≪法の剣≫が万が一壊滅したらクレジットすら持たない連中がぞろぞろうじゃうじゃ街にあふれるだろう？　それは避けた

い。非戦闘員から死人が出るような事態だけは、切実に」
「……そう、ですか。そういう、ことを考えてたんですか」
こくり、と頷く。打って変わって内藤は顔を下げ、俺を見ようとはしない。
罪の臭いを小さく嗅ぎ取るが、それを攻め立てたところで意味はない。代わりに内藤が≪法の剣≫を攻めないようにするための言葉を重ねていく。
「≪法の剣≫の役割は、あいつらが本音でどう考えてももう決まってる。非戦闘員の統制と治安の維持だ。なんだかんだで、今、この街で喧嘩のひとつも起きちゃいないのはあいつらがいるからだし、悲壮感が出てないのもあいつらが希望だからだ。だから、こんなところで死なれても躓かれても困るんだよ。俺たちと奴らの戦力のバランス云々の前に、ある程度の目処がつくまではあいつらには磐石でいてもらわないといけないんだ」
そして、予(カネ)てよりの約定通り、敵の第一目標となるべし。巨悪はないにしろ、明確に傲慢な存在として君臨するべし。
そういった内心も胸中もさらけ出さずに、わかってくれ、と慰めるように肩を叩く。
果たして内藤は、困惑に納得を含めた奇妙な表情で俺を見上げてきた。そう、理性では納得できるのだ。戦えない人間を守らなくてはならないのだと。しかし、本当に自分たちがするべき仕事なのかと迷っているのだろう。内藤。
相手が≪法の剣≫と無関係な民間人であるならばお前も心から行動できただろう。しかしそれがお前が敵と内心で認定してしまっている≪法の剣≫が庇護している人間だとするならば。
こちらが不利益を負ってまで助ける必要はないのでは、と考える。
それはお前が現実をよく理解しているからだ。塔の攻略が目的な

らばそれこそがお前の優れた資質を現していたのだろうが。

「情報提供は、戦えない人たちのためですか……」

「ああ。戦えない人間のためだ。だが、不満そうだな」

「いえ、正しいとは思います。でも、彼らは私たちのために働いてはくれてないんですよ」

「は？」

「だから、私たちが守る必要は……」

少しだけ呆然とする。

……、ああ、いや、そういう理由か？　俺たちが不利になるからだけじゃなくて。見返りがないから、か。彼らを積極的に害する理由はないが、積極的に守る必要もない、と。

罪悪感の篭った、それでも譲れないといった目が俺を覗き込む。まるで叱られることを恐れる子どもの目だ。いや、そうだ。子どもだったこいつは。未だ、大人になっていない人間の目。

利己的であることを怒りはしないが、予想していた価値観と違うことに少しだけ考えを修正する。

（あいつは、そう、利己的だったが、俗物的ではなかったな……）

かつて相対した敵対者の一人を思い出す。

俺を敗北に追い込んだ唯一の存在だ。

恐ろしいまでにただただ”善”を体現したその姿に俺は……。

考えをふるい落とす。

そう、全てが、かつて対峙したものと同じ程度に強大ではないとするならば、

（俺も、生き残れるのか……？）

軌道修正した目で見下ろせば、件の少女は俺の反論を恐れるようにして、見上げてくる。

「ある」

「……はい？」

「守る必要はある。もちろん、あの連中を守るためじゃない。俺たちのためにだ」

「ある、んですか。理由が」

「ああ。ある」

ほっとしたような。それでも残念そうな顔。俺が利己のために動き、内藤の価値観と外れたことを考えているわけではないという安心。

それを見つけたためだろう。

……内藤の安堵と共に、多少の失望が俺の中から覗いていた。それでも構わずに続ける。

「≪法の剣≫がつぶれれば、道具とクレジットを失った連中は庇護者を求めて動き出すだろう。男連中はともかくおばさん、爺さん婆さんにガキんちょまでいるんだ。確実だろう。そういった連中は必ず塔を攻略しようとする連中を頼る。これは確実だ」

庇護などいらない、と言い出す連中もいるにはいるだろうが、やはり、一度組織に属してしまえばその安心感は心を犯す。特に、生きるために生きるなんてことができる環境ではないんだ。結局のところ、何かの役に立っているという実感がなければストレスで心を病むことになる。

それから逃れるためにも攻略組にすがろうとする人間は必ず出てくるはずだった。

先の説明に加え、これを付け加えて説明すれば、なるほどと内藤

は頷いてくれたようだった。

「……ちなみに、難民を受け入れる方針でいくことは、できないんでしょうか？」

「信頼できる人間以外は、俺は受け入れたくはないな」

「……信頼、してくれてるんですか？　私を……」

じとりと見つめてくる湿度のある視線。それを真正面から見つめ返す。自然と手が内藤の頭に伸びる。

俺の手をくすぐったそうに受け入れるその表情は、まるできまぐれな猫のような、それにも似て、

「お前はッ、何のためにッ、一々ッ、たくらみをッ、俺が話してると思ってるんだッ、と」

「～～～～～～～～ッ？！　はッ、はいッ。でも、あの……」

「なんだよ？　まだ何かあるのか？」

呆れたように頭を強く撫でると、内藤は、ぐにゅ～ッ、と唸る。多少可愛げのある仕草に苦笑を浮かべ、改めて利の出そうな説得材料を頭の中で並べていると。

「その、……、えっと。わ、わかりました。私もよくわからない人が増えるのも嫌ですし。その、≪法の剣≫に情報を売ることに、賛成します」

どんな心境の変化だろうか。あれだけ渋っていたのに内藤は賛成してくれていた。

「……待て待て？　一応、内藤が納得するまでは話し合ってもいいんだぞ」

強行したところで後々の不満になりそうなことだから、ここで納得させる必要はあったんだ。

「いえ、渋ってたのは感情の面ですから。私がタカぼんさんの基本方針を理解できたなら、反対する理由はなくなりました」

なら、もっと早くに納得してくれても……。いや、ここで俺が渋ってもどうにもならないか。

「まぁ、いいが。なんだかな。……じゃあ、武満の野郎を呼ぶぞ。内藤は宿屋に戻っててていい。ついでに俺は酒でも飲んでくるわ」

「えっと、私は戻るんですか？」

「べろんべろんに酔った俺が内藤にセクハラしてもいいならついてきてもいいぞ」

困った顔で見上げてくる少女の頭をぽんぽん、と叩く。

小さく、子ども扱いしないでくださいよ、と文句を言うが、構わず撫で続けるのだった。

「あ、最後にひとつ」

「なんだ？」

「≪法の剣≫以外には情報を売らないんですか？」

「ああ、売らないよ。意味がないからな」

俺と≪法の剣≫以外は好きなところで死ねばいい。

参拾肆／

悲鳴。地獄のような世界に舞い降りた勇者の声。
苦鳴。苦界に降り立った聖女の差し出す、救いの御手。

声が聞こえる。いくつもの声が。かつて遠くにあったものが近くにあるそのときにも似たかつてない世界から届く声が。
頭の中で響く。世界を救うんだとかつて叫んでいた青い声が。

――復活だ。復活するんだ。蘇生の日は近い。僕は世界に躍り出る。そうして聖剣を握り、今度こそ魔王を打ち倒し……

「ッ、ッ――あたま、いたッ」

声が聞こえる。
遠くから、迫り来るように、俺の頭に響いて……

【勇者　レベル１が解放されました】
【開放に伴い【支配者の杖】【魔王】に対する抵抗力が付与されます】
【聖剣を装備できるようになりました】

眠りは深く、彼の意識は落ちていく。

参拾伍／

「で、だ。急な呼び出しだな。今回もそれに値するものなんだろうね？」
「まーな。とりあえず豪運の果実１０個だ。これで売ってやる」
「高いな。３個だ」
「……ボリすぎだ。お前らの生存に不可欠な情報だぞ。８個」

「4個だな。アレの買値がいくらだと思ってる？」
「7個だ。さすがにこれ以上は譲りたくないな」

無言。話し合いの場として選んだ街のバー。小洒落たカウンターに隣同士に座りながらも、顔を一切合わせずに正面だけ見る俺たち。片手に頬を預けた結果、顔がぐにゃぁと不細工になるが気にせず仏頂面で返事を待つ。

果たして、武満法行は渋々を言葉に含めてそれを口にした。

「5個だ。ついでに街で燻ってる連中の情報をつけよう。≪法の剣≫からの脱会組と昨日のうちに街中に散ってた連中についてだ」
「……6個だ。これ以上は譲らん。ついでに主要人物の情報とその仲間の情報もだ。あとは、そうだな。塔の中の危険地域の情報も譲ろう」
「……5個と、情報、それと都市内で利用できる通信端末。これで手を打て」
「あー、それと適当な安い方のパラUPアイテム3個つけろ」
「わかった。豪運5個、体力3個、通信端末2個だ」
「交渉成立だな。払いは後でいい。ちゃきちゃき行こうや」

俺の言葉にため息をつく音がしたが無視する。そうしてやっと、お互い手元のグラスを引き寄せる。

カチャン、と杯を重ね合わせた後に口をつける。

甘さのあるオレンジジュース。お互いノンアルコールを口にしていた。

そもそもこんな糞忙しい中、お互い酒を飲もうなんて考えるわけがない。

バーというのも雰囲気作りや邪魔が入らないためだ。また、利用にそれほどクレジットを使わないというのがある。

「それで、何の情報を手に入れたのだね」
「端末だせ。街で買い物ができる奴」

武満が背後に控えていた背広姿の男に目配せする。俺も護衛に連れてきていた三号を呼び寄せる。
背広の男は手元の鞄から俺が使っているものより一回り大きい端末を、三号は鞄から俺が使っている端末を。

「出したが、これでどうするんだ？」
「武器屋のカタログを開いてくれ」

操作する音がし、「開いたぞ」と声がかかる。

「武器屋情報……ここに、だ」

一応、カタログを見てみるが情報が開放されている様子はない。やはりＩＤを打ち込んだものにしか見えないのだろう。

「ああ、ここは我々も気付いていたが、情報が手に入らなかった。……なるほど」
「ああ、ＩＤとパスワードの部分に、だ」

カタカタと先ほど判明した番号を打ち込んでいく。そうして画面を戻し、情報の増えたカタログを見た瞬間に眉をしかめる武満。

「悪辣、だな」
「ああ、とびっきりだ。悪意が透けて見える」

お互い、手元のグラスに口をつけ、唇を湿らせる。
そうして、あの虫野郎と戦ったときの状況を話してやる。

「……攻撃の効かない敵、か」
「しかもそいつがこういう情報を持ってたわけだ。炎の杖で燃やしてたら情報ごとお釈迦になってたかもわからんような、な」
「しかも近接戦闘での勝利が難しい、と」
ため息をつく。肉人形を持っていない武満は恨めしそうに俺を見ると端末を折り畳み、背後の黒背広に返す。俺も三号に端末を渡し、つまみのビーフジャーキーらしきものを小さく齧った。

参拾陸／

「情報料はすぐに用意しよう。おい」
命令に応じ、黒背広の一人が外に出て行く。それを見送ることもなくお互い話を進めていく。
「次は、情報だな」
「詳細は紙で頼む。そちらが纏めたものでいい。今回はとりあえずの概要だけ頼む」
さすがに構成員の一人一人の詳細を説明をさせたり、聞く気にはなれない。
あちらも同じだろう。頷くとグラスに少しだけ口をつけ、話し始める。
「確認できたのは、≪喪男浪漫の会≫、≪ダンジョン教国・覇王の塔支部≫、それと≪カラミティ・ブルータス≫」
「他の二つは聞いてる。後は、名称不明の集団が二つあるみたいだ

が？」
「そいつらは分散して、先ほどの三つの集団と合流した。その結果生まれたのが≪カラミティ・ブルータス≫といったところだね」
「危険か？」
首を振る武満。奴はグラスに口をつけ、言葉を続ける。
「所詮はうちから逃げた連中と、昨日の時点で塔にアタックできなかった有象無象だ」
「そうか。じゃあ次はこっちの情報だ。バイクに乗っていたのは女、そいつは銀稜台大学とかいうところの大学三年、剣道部主将♂と行動中。ちなみに女が主要人物だ。男は主要人物じゃないが、戦闘の面では使えそうな感じだな。あと、ここでは初だと思うが、死人を二人確認した。死体は塔に放置してきたから、今頃は消えてるんじゃないか？　明日確認してみるつもりだが……」
それでも放置は流石にないと思う。ああいう塔なんだから、死体処理用の道具ぐらいは用意していてもおかしくはないはずだ。
「死人に、主要人物か。タカぼん、君は重要な情報しか持ってこないな」
「ふん。……ああ、恥を忍んで聞くんだが銀稜台ってのはどこにあるんだ？　青森辺りの市町村か？」
そうしてグラスに口をつける。ちびちびと飲んでいたせいか、ようやく一杯目がなくなったようで、追加を求めればＡＩ制御の機械らしきものが新しいグラスを運んでくる。受け取り、グラスを返す。どこかへと消えて行く機械。
そうして隣を見れば、初めて武満が困惑を顔に載せていた。

「……いや、私も知らないが。闘卿（トウキョウ）とは違うんだろう？」
「東京は、流石にないと思うがな。そういや、出身どこなんだ？」
「出身は、金我和（カナガワ）だが、そちらは？」
「九州の片田舎だ。温泉で有名なところだな」
「ほう。朽兎洲（キュウシュウ）か。しかし、なぜ、出身を聞くのかね？」
「主要人物は、銀稜台出身だ。内藤と、バイクの女、この奇妙な場所に同じ場所、土地から人を呼び寄せ、それがたまたま主要人物だったなどとは考えたくもないが。逆に銀稜台という土地にいる主要人物を呼び寄せていると考えればつじつまは合う」
「そして、その中に私たちのような人間が混じってもおかしくはない、と？」

隣に座る男の目を覗き込む。まるで夜闇のような目の奥には、確かに黒い、粘性の伴ったドロリとした闇が混ざっている。
先に視線をそらしたのは俺だった。勇者の相手を譲ったように、俺にはそこまでの覚悟はない。
――諸共に、などと、考えることはできなかった。

「ああ。かつて、英雄、勇者、なんでもいい。正義に出会った人間だ。武満、……お前は、勝てたのか？」

沈黙が、落ちる。そうして微かに首を振る音が聞こえ。

「負けたよ。そして、殺されるはずが奴らの慈悲によって生き恥を晒すことになった。情けない話だが……」

――タカぼん、君は？

そう問われ。かつての自分を思い出す。
全てが眼下で頭を垂れていたときのことを。目の前に権力と金と

人の命が無造作に並べられていたときのことを。
そして、俺の目の前にやってきた女のことを。
比翼心（ヒヨクココロ）と名乗った、女のことを、だ。
口の中に満ちるのは、あのときの屈辱だ。苦い、苦い、致命の一撃によって生み出された汗と血と恥の味だ。

「相打ちにもならなかった。俺は、命以外の全てを失った。そして、奴は死んでいった。俺の【支配】は届かなかった……」

支配？　支配……。
自分で言った言葉に自分で困惑する。
そうだ。俺はかつて日本という国の中枢に君臨したことがある。
メディアに顔を出すことも、人の口に昇ることもない、深い、深い闇の中から全てを操っていたときがある。
右から左から金と人と物と情報と権力が流れ、大量の人間の運命を一声かけるだけで決めることができていた。
俺は、かつてそういう立場にいた人間だった。

「タカぼん？」

手のひらを見る。あの小さな、せまっ苦しいアパートの一室を思い出す。そこで飼っている小さな生き物を思い出す。
全てを失った代わりに得たもの。暖かな心象を思い起こさせるそれら。
天秤の片方に乗せるそれと、かつての自分が支配していたものを載せる。
結論は、迷うことなく出る。比べようがないことだった。
俺は、連理貴久は、
――既に敗北しているのだから。

約定に従い、敗者の務めを為さなければならない。
無様であろうと、何であろうと、形骸として生きなければならない。
そして勝者を嘲るために生きなければならない。
そのためには帰還しなければならないのだ。
あの、片田舎のアパートに。
思い出を流すように、オレンジジュースに口をつける。
かつて味わったことのあるそれとは違う、嫌に機械的な甘さが口をついた。

そしてこれより五日の後。
俺と内藤は三階層へと侵入を果たす。

【支配者の杖の能力が開放されました】
【支配下の魂に【寄生】に対する抵抗力を付与します】

三階層【王者の凱旋】？

参拾漆／

どこかの路地裏。誰かの記憶。かつての夢。
思い出すことなく失われていくいつか。しかして鮮烈に記録される記憶。

「……」

少女の前に少年がいる。少年は、路地裏で震える少女に手を差し出していた。
清潔な衣服に身を包む少年と、襤褸を着て、両腕で身体を抱きしめていた少女。
少年は、少女に手を突き出すようにして差し出していた。

「拾ってやろう」

無造作に言われる言葉。それに少女は首をふるふると振り、逃げるようにして駆け出そうとして、地面に倒れる。

「拾ってやろう。名前は？」

少年が歩みを進め、髪を掴み顔を上げさせる。抵抗しようとする少女に対して、踏みにじるようにして少年の言葉が続けられる。

「名前は？」
「……」

少年は少女の髪を掴んで諮うように告げる。

「俺は、連理貴久だ。気軽に貴久様とでも呼べ。貴様のような小汚いゴミを拾って、磨いて使ってやろうってんだ。さぁ、名前を言ってみろよ」

「……みつ、み」

「あ？」

少女は、抗しきれず、黒霧、蜜美、とそう名乗った。

これは過去の残照。連理貴久が未だ全てを得、全てを失う前の記憶だ。

参拾捌／

「敷条さん、タカぼんさんたちにお茶出してくれる？」

≪法の剣≫に入ってから五日が経った。その中での私の役割は書類のコピーをとることと、お茶を淹れること。想像した夜の仕事なんてものがあるかとも思ったのだけれど、そんなものはひとつもなかった。

ちょっと拍子抜けしたけれど、やはり想像は想像だったのかもしれない。

「はーい。わかりましたー」

軽く返事をしてお茶を淹れに給湯室に向かう。銘柄は一番良い物だ。相手は舌が肥えてるから下手な物を入れるなとわざわざ言われていた。普段、皆に入れるのとは違うそれを出涸らしで一杯飲んでみたけど、その味の濃厚さというか、口いっぱいに広がった芳香に

驚いたのを覚えている。こんな高級品、元の世界でだって飲んだことはなかった。

たぶん、本物の玉露とかいう奴なんだろうけど……。

現在の≪法の剣≫の食糧事情でそんなものを淹れることに抵抗を覚えなくもないが、やらなければ私の配給を減らされる。

気分は乗らないが教育された通りの淹れ方で（お湯の温度ひとつすら指示された）それを淹れていく。

そして想像する。これを飲むだろう、お客とやらを。

それは、あの二人。未だ名前のないグループの二人だ。連理貴久と、自称・内藤の副会長。今、この都市の中で最も進んでいる到達者。血の臭いのする二人組。

正直、好きになれない二人組だ。内藤副会長はともかくとして、連理、あの人には、あの囁かれた甘言を別として、何か嫌な、嫌悪すべき臭いがするのだ。

とはいえ、変なお茶を出して機嫌を損ねるわけにもいかず。きちんと淹れてリーダーの部屋へと向かうのだった。

参拾玖／

「三階層に到達したようだが……」

「ああ、やばいなあいつら。マジやってられねぇ。毒ガスに麻痺攻撃だよ麻痺攻撃。肉人形がなかったら全滅するところだった。あと、二階層でも一階と同じ蟲蔵に似たようなもん見つけた。鳥の卵だと思うが。いずれ処分しなくちゃならんだろうな」

「ご苦労。今回の情報料だ」

ゴトリ、と幹部の鹿島さんの手によって、連理貴久の前に置かれるそこそこの大きさの黒いケース。中身はどういったものなのか。外から見た限りではわからない。

「まいど。で、新しいＩＤだ。状態異常が解禁したぞ。あと……――」

次々とお互いの用件を伝え合っていく二人。その様は同盟者というよりもむしろ……。

そんなことを考えていたせいか、武満法行がこちらを冷徹な目で見つめていることにも気づけなかった。

「なんの用で来たんだ敷条。その茶は飾りか？」

「え、あ……」

「借りますね」

「あッ」

呆けてる間に内藤副会長に手に持っていたお盆をとられてしまう。そうして、副会長は取られた私が小気味良いと思ってしまうぐらいの速度と丁寧さでお茶とお菓子をテーブルに並べてしまう。

「どうぞ。タカぼんさん」

「ん、ああ。ありがとう」

ありがとう。あの不吉な男の告げた感謝の言葉に副会長の頬がだらしなく緩んでいる。

媚を売った視線に不思議と虫唾の走る思いをし、そこまであの人に嫌悪を抱いていただろうかと自分に疑問を抱いてしまう。

――あの男は敵。勇者様の敵。武満にも気を許してはなりませんよ。

（……、今、声が？）

あちらこちらを見る私を同席していた幹部の人が不審そうに見ていることにも気付かないまま。そして、そんな私を気にかけることなく中心の話は進んでいく。

「良い茶を使ってるな。嗜好品はどうなってるんだ？」
「この部屋だけであれば贅沢は可能といったところだ。タカぼんもわかっているとおり、他に回す余裕はとてもとても」
「ふぅん。まぁ、自業自得といったとこだが。不必要な人間まで抱えるからそうなるんだ」

話に目を向ければ、悪態を吐きながらも優しい目で武満リーダーを見る連理貴久。彼の言葉にリーダーは何も言わずにふん、と鼻を鳴らすだけだ。

……なんだ、この茶番は。

気分の悪さはそんな連理貴久に尊敬の目を向ける副会長を見ることで大きいものになる。

実際、味気ない食事や閉塞された状況に泣くばかりの子供たち。必死で調理し、なんとか毎日支給されるレーションを食べられる味に整えるおばさんたち。支給される食事が日本人の舌とはまるっきり会わなかったことで起きている不都合は、変えられない現実として確かにここにある。

私たち秘書課や戦闘課などはリーダーから支給されるクレジットを用いることで食堂を利用してまともでおいしいご飯を食べることもできるが……。

「で、だ。とりあえず今回のＩＤの対価は、運、速度、力の＋１０ステアイテム計８個と技能、体力の＋１ステアップアイテム各四個づつってとこだな」
「妥当だ。それと、そろそろ人が入ってくるがどうする？」
「当初の予定通りだな。それとも優秀な人間をこっちに回せるか？」

「……、そうだな。こちらからは応とは言えないが。街に散った連中からなら構うまい」

……既にこの街を支配している二人の会話は、まるで人々を支配している何者かのように響き、それが私に更なる反発を抱かせた。

そう、私が彼らによって生かされていると知ってても。

――本当に生かされているのですか？

本当に？　職を与えられ、戦闘に参加せずともよくなり、塔の探索を免除され。

それは本当に生かされているといえるのか？　私が、私がひぃくんが活躍することを助けることもしないでここでぬくぬくと暮らしていることが……。

ッ。どうして、どうしてひぃくんのことが今ここで浮かんだんだろうか。

「……そういや、カラミティ以外は全滅らしいが？」

「ああ、街に散った連中はカラミティ以外全滅だ。非戦闘員、戦闘に参加するには力の足りない為に、拠点に居残っていた人間はカラミティで受け入れたようだな」

「なら食い扶持を稼ぐだけで精一杯か。トップは誰なんだ？」

「バイクの、……元バイクの女だ。名前は龍村勝香（タツムラショウカ）、銀稜台出身者」

「やはり、か。それで、どれくらいで崩壊する？」

銀稜台、というところで二人はにやりと哂いあう。

それに、龍村、……龍村、勝香？

その名前は……。

ひぃくんと仲の良かった、とある不良を思い出しかけたところで、リーダーの声が思考を遮った。

「心にもないことを、……あれは大きくなるな。敗者を集めて、束ねて。だが、そこまでだろう」
「了解した。手を出す必要はないな」
「……あ、あの」

わけのわからない確信の篭った会話をしているあの二人。会話の内容のわからない私とは対照的に、ある程度事情を知っていたのか、内藤、副会長が声をあげる。

「何だ？　内藤」
「あ、はい。その龍村さんって、」
「≪カラミティ・ブルータス≫のリーダー。未だ塔の一階のうろうろしている弱者だ」
「逆に、生き残っていることに俺は驚きだが」
「その、弱いとか、生き残ってるとか。どういう、意味なんですか？」

副会長の当然の疑問に、連理もリーダーも、普通のことと言うように顔を見合わせて、その事実を告げた。

「そういう組織なんだよ。あそこは」
「それしかできない組織だからだ。あそこは」
「わかりません……」

副会長の当然の答えに、私も内心で頷く。

「それで、内藤君。彼女がどうしたのかね？」
「あ、はい。その知っている人の名前だったので」

私が知っているくらいの有名人だから、副会長の彼女が知っていてもおかしくはないけれど。

「そりゃそうだろ。龍村は銀稜台出身だ。知り合いでも不思議じゃない。で、友人なのか？」

「あ、そういうわけじゃないんです。彼女は学内でも有名な、その、不良で――」

副会長の龍村さんを紹介する声にあわせて私も考えこんでしまう。

龍村勝香、あの人まで……。ひぃくん。ひぃくんの知り合いはどんどん強くなっていくよ。

みんな、がんばっているのに。私たちは……、こんなところで止まってる。

私たちは、私と、ひぃくんは……

――私に魂を委ねれば良いのです。勇者様を私が支え、この塔の頂点へと、そして

「さて、ここからが本題なわけだが。――敷条ッ！　いつまでいるつもりだ！！」

「ハ、ハイッ！　し、失礼しましたッ！！」

ここ最近、頭を悩ます声が、魂の蕩けるような声を発した瞬間、リーダーの怒鳴り声が私を現実へと返す。

慌ててお盆を持って部屋から出ようとする私の後ろから、くつくつ、と嗤う声が追いかけてくる。

惨めな気分でそっと振り返った先で、

連理貴久が嗤っていた。

肆拾／

「可愛らしい娘じゃないか。追い出さなくてもいいだろ」
「冗談を言うな。顔だけよくて困る典型だ。お茶汲みすらできないようじゃ、これから先どう使って良いやら」
「有能すぎるよりマシだろう。うちで貰ってやろうか？」
「ハーレムでも作るつもりか？　タカぼん。まぁいい、本題に入ろう」

お互い、ソファーに預けていた背を持ち上げる。会話の変わる気配を察した武満の護衛が緊張するのがわかる。ちなみに内藤は理解していないのか、いつものままだ。
息をつく。
全盛期以下とはいえ、少しばかり感覚を取り戻した今、この部屋の中にあるものは、花瓶ひとつ、書類ひとつにせよ、気配は目で見ずとも手に取るように理解できている。
あの娘が淹れた茶で唇を湿らせると俺は正面の武満を促した。

「本題。……本題ね。とりあえず報告を頼む」
「ああ、まずはこれだ」

武満の部下である黒背広が差し出してきた書類を受け取り、眺める。

「なんですか、これ？」

興味津々に覗き込んできた内藤には内容がわからないようである。
まぁ、当然だが。

「ああ、この都市への物資の搬入ルートと、司令部の地下にある自

爆装置の情報だ」
「……はい？」
ポカン、とした顔の内藤は放り、武満に問う。
「どうなんだ？」
「元の世界で技師をやっていた連中が言うには解除は無理なようだ。そこでタカぼんに頼みたい」
「ああ、キーだな」
常識で考えるなら塔の中より施設の中にありそうなもんだが。ここまで意地が悪いと塔の中にあってもおかしくはないだろう。
そんなことを考えていると隣にいる内藤に襟首をつかまれ、ガクガクと揺らされる。
「って、なんでそんなに落ち着いているんですかッ？！　じ、自爆装置って。自爆装置なんですよ！！」
「なんでだ？　ない方がおかしいだろ？　機械で帝国で塔で司令部なんだぞ」
「ああ。浪漫だな。タカぼん」
内藤をしがみつかせたまま、テーブルの前に乗り出し。がッ、がッ、と肩を叩きあい、ぐっと拳を押し付けあう俺たち。ポカン、とした顔の内藤は書類を指差して叫ぶように言った。
耳元で叫ぶな。おい。
「それに、なんなんですかその文字は？　ただの数字の羅列じゃないですかッ！」
「ん、暗号だ。暗号。ないと不便だからな。といってもそんなに複雑なもんでもない。数字を英語と日本語のひらがなに当てはめてる

だけだな。数字も別の数字に当ててる」
「えっと……暗号、ですか？　その、対応表は」
呆然としたような内藤に武満が補足を入れる。
「ないよ。正確にはすぐ見れる場所にない、だがね。君たちの勢力はタカぼんだけが把握してればまず間違いはないから、君が知らなくても問題ないだろう」
「そういうことだ」
……沈黙。内藤はそうして、信じられないように俺を見て。
「手元に対応表がなくても理解できるって……。その、何者なんですか。タカぼんさんって……」
「なに、昔に悪の組織の総帥をやっていたことがある。冴えない三流大学生だ」
よくわからないような顔をする少女に俺は、ほんの少しの真実を告げた。

肆拾壱／

その後もいくつかの頼み事と、頼まれ事を交わした二人は、連理貴久と武満法行の二人は、まるで長年付き合ってきた親友同士のように見えてしまう。
本人たちに聞けば「協力者以下だ」とでも返ってきそうなものだったが、お互いがお互いを頼りにする様はやはり親友、戦友と称しても良いのではないだろうか。
「聞いたとおり≪法の剣≫全体の食料事情は良好では無いようです。

会う人はみんな、不満を言ってます」
「潤沢な資金は全て武器、アイテム、施設に回してるんだ。とはいえ、そうだな。奴らが塔の攻略に着手すれば資金集め専門のチームが作られるかして、そのあたりも改善されるだろう。さすがに全体の不満だ。すぐに対処されるさ」
「……信用に足るんですか？」
「……してはない。が、奴も馬鹿じゃない。考えてるだろう」

比べる己の卑小さを呪う。
武満法行と違い、力を持たず、知恵を持たず、タカぼんさんが相談すらしてくれない私は……。
それは、そもそも私が信頼していないからでは、

（違う。私は、この人のことを……）

ならばなぜ、今も彼を欺いているのか……。

「内藤？」

向けられる訝しげな顔。この人ならば私が彼を欺いていることを知っていてもおかしくはない。むしろ、知っていて普通に接しているのならば……。
当然、今の今までの言葉に、疑問が――

「内藤ッ！！」
「あ、はッ、はいッ！！」

ぼぅっとしていた私に伸びてきたのは、タカぼんさんの両手だ。躊躇すらなく、伸ばされる男の人の手。この都市に連れてこられてから驚異的に、成長というよりも進化と言ってしまえる速度で強化

された私が集中すれば、容易に避けられるも程度のもの。
それでも私は、それを避けようとは考えない。タカぼんさんになら、何をされても――

「熱はないか？　体の調子は大丈夫か？」

ぺたり、と手のひらは私の額に触れていた。片手は前髪をかきあげられ、露になった私の額に、タカぼんさんのひんやりとした、それでも温かみのある手のひらが触れていた。

「はい。そんなことをしなくても、大丈夫です。その、すいません」

うれしいはずなのに、タカぼんさんに気に掛けてもらえて、喜びの感情すらあるというのに、私は……。
それに先ほども、タカぼんさんの手を見たときに、どうして害されるなんて考えが浮かんでしまったのだろう。
どうして、タカぼんさんに――

強い嫌悪と、強い愛情を同時に抱くのか。

「何を謝ってる？」
「その、ぼぅっとしてて」
「俺のことでも考えていたか？」

見透かしたような目で見下ろされる。タカぼんさんは額にあった手を私の頭にのせると、まるで、少しの悪意を込めれば死んでしまう生き物を扱うかのように、ぐりぐりと優しく、しかし無造作に手を動かした。

「……、タカ、ぼんさん」

相談したかった。この奇妙な感覚を。
解決したかった。自分のものではない感情のような気持ち悪さを。
どうして私が、こんな、わけのわからない衝動に襲われなければいけないのか。
どうして、タカぼんさんに強い悪意を持たなければならないのか……。
頭では尊敬できる人だと、感情ではきっと信じられる人だろうと思えるのに。
どうして私が、この人を、害したいと、思ってしまうのかを――ッ！！
夜毎見る夢、それが原因なのだろうか。
知らない歴史。知らない人物。知らない世界。そして、知っている知識。
機械帝国の興亡。今は亡き勇者の副官として仕えていた誰かが、その使命に殉じるまでの記憶が――

「どうした？　本当に、って、ああ、また頭を撫でるなんて、悪癖だな」
「いえ、続けてください。お願いします」

不安が消えていくから。私の体に満ちる、悪意が溶けるようになくなっていくから。
だから、続けてください。
見上げながらお願いすると、タカぼんさんは困ったように私の頭を撫で続けてくれる。
うれしさと大きい気持ち悪さは続いていく。
このまま、胸のうちの不快感が消えてしまえばいいのに。

「俺のことは、あまり考えなくてもいいぞ」

「どうして、ですか？」
「人のためにならないことをしてるからな。お前が気にする必要はなにも「そんなことはないですッ」

この人ほど、この都市にいる人間のことを考えている人はいない。それは確信できる。それだけは真実だ。
撫でられる手が止まる。強い視線で見上げれば、困ったような顔でタカぼんさんが私に告げる。

「そんなことはないんだがな。いや、俺のわがままか。
それでも内藤のことは悪いようにはしないさ。だから、俺をあまり信用するなよ」

どうして、そんな顔で私を見るのだろうか？　どうして、そんな目で私を見つめるのだろうか？　どうして、そんなことを言うのだろうか？
私を、私を拾ったのは貴方なのにッ。貴方のような人に必要とされれば……ッ！！

（私が、タカぼんさんをこんなにも想うのは、きっと――）

特別なことは、なにもなく。
この人が、私を子供扱いしてくれるから。だから、私はッ……。

肆拾弐／

私は、内藤美咲ではない。本名は、南雲・アーリアライト・美咲。
銀稜台の半分を統治する企業である南雲財閥の一人娘だ。
私が生まれたころから両親は不仲で、私を自身の子供として扱う

こともなく、従順な『子供』の役を持ったなんでもないものとして扱った。

そして成長するにつれ、勉学、武道、運動、音楽、経済、芸術、……。全てにおいて英才教育を施され、従順に、しかし惰性で生きることは許されず。思考することを許されぬ道具としての人生を歩まされたのだ。

それは、とても苦痛に満ちた道のりだった。家人からは無視され、使用人からは煙たがられ、友人は作れず、ただ、南雲の道具として私は生きてきた。

乳母だった老婆が一人だけ私を哀れんでくれたが、その人も私が中等部にあがることには老衰でなくなり。

そうして、私の孤独は加速していった。

転機が訪れたのは私が銀稜台学園の高等部に上がってからだ。

時の総理大臣の娘である学生会長と出会い、親友となり、二学年にあがり、選挙を行い。

そうして、私を私として扱ってくれる男の子と出会い。

――美咲さん。俺を頼ってください。俺なら、美咲さんに

神崎秀人君。

選挙活動のときに私が頼ったあの同級生。普段は頼りない癖に、困ったときはすごく頼りになった男の子。

ここにも来ているのだという彼。彼と一緒にいられたならば、あの途方に暮れてた時に道を指し示してくれたのが彼であったなら、迷いながらも手を取り合っていけたんだろうと思う。

そんな”もしも”を思い浮かべるぐらいに魅力的なその想像を退けて。

私は、私を、きちんと”考えさせて”くれる人に向き合いたかった。

私の嫌悪する南雲の教育は、しっかりと私の嗜好にも影響を与え

ていたのだと、内心で苦笑する。
そして私の心に目を向ける。何度確認しようとも、体のどこかで奇妙な嫌悪感を抱こうとも、私自身が連理貴久に惹かれているという事実は覆しようがないものだから。
だから、タカぼんさんに私が最初に偽名を名乗ってしまった理由であるところの、私が日本有数の企業である南雲財閥の一人娘である事実を伝えるべく、私の本当の名前を告げようと、口を開き、音を発そうと……

「内藤？」
「ッ、？！　……ッ、ッ？？！！」

声が、出ない。
信用して欲しいのに。全てを見透かすような目で私を見る、私を、支配してくれるだろう人に。きちんと道を指し示して、導いてくれるだろう人に、話したいのに……。
声が、出ない。
私を、私が好きな人に預けようとする行為の一番最初が、私が、タカぼんさんに認めてもらうための第一歩が踏み出せない。

（どうしてッ？！　私はッ。それでなくてもッ。私は、ただ、名前で、私の名前でッッ！！）

偽名はもう嫌なのに。
瞬間、奇妙な声が私の心の奥底から、まるで私の意志に反発するように響いてくる。

――勇者様。勇者様だけが私の隊長です。だから、それ以外など必要ないッッ！！

「頭、痛ッ……」
「……、おい」

手が離れていく。行か、ないで。私を置いていかないで……。

――忌々しい男。連理貴久ッ！！

どうして私の中からそんな声が聞こえるのか。
私は、私の理解できない不快感をタカぼんさんから感じながら、身体の平衡を失った。
意識が消えていく前に感じたのは、倒れる前に、誰かに受け止められる感触。

肆拾参／

漣のように夢の残滓が漂っていく。
腕の中で眠る少女を見下ろす。確かに、今、この少女が普段放っている魅了の気配の源泉を感覚が捕えていた。

「これは、内藤……か？」

少女を見る。最後に、明確に、誰でもない俺を睨んだあの目は、あの憎悪の篭った目は、かつて俺が見下していたあらゆる敵の目にそっくりだった。
俺は、俺の支配に、屈服に、抗うその様こそを喜悦と共に迎え、片端から踏み潰していくのが楽しくて、愉しくて、たのしくて、本当に楽しくて。
口の端が歪んでいくのが理解できる。俺が見下ろす内藤、それが最後に見せたものこそがかつて喰い散らかしてきた好物に違いない

のだと確信できたのだ。
敵はいる。英雄はいる。英傑は生まれている。勇者は必ず現れる。
今の今までただの妄想だと思っていたその想像こそが正しいのだと。確信以上の核心に触れる。

「内藤。いや、なぁ、南雲・アーリアライト・美咲ちゃん。お前は腹に何を飼っている？」

≪法の剣≫に所属している銀稜台出身者。俺が少し優しくしてやっているためか、偽名を使う内藤から隠れ、囁くように教えてくれた内藤の本名。それを舐めるように発音した。
答える声はない。意識を失った内藤が最後に俺に対して向けてきた、一瞬の重圧。
そして今の今まで漂っていた、意識を持っていかれそうな魅了の臭いは、王ですら屈服せしめる英雄の毒だ。
一般人ならば正常を失い、人格を改変され、内藤に永遠の忠誠を誓わずにはいられないそれをどっぷりと浴びせかけられた俺は。

（はは、ははは。元気なことだ）

全身を、否応無く血が滾っていく。

「はは、ははは。クカカカカッ！！」

ああ、滾ってきた漲ってきた心が充実していく。
目的も本心も約束も覚えているし忘れていない。俺は誰も殺してはいけないし、誰かを支配するような真似も極力控えたいと思っている。
だが、しかし、だ。唇を舐める。腕の中で横たわるそれを見下す。
敵意に反応したのか、即座に俺を配下にしようと、人格をなくした

傀儡にしようと、無駄な芳香が昇ってくる。同時に三号が腕を伸ばしてきたが、手で遮った。
芳香を胸中に吸い込み、内心のみで告げてやる。

（いずれだ。いずれ、蹂躙してやる。組み強いてやる。奪ってやる。支配してやるぞ！！　なぁ？　お前は俺を支配したいと思ってるだろう？　排除したいと願っているんだろう？）

ならば、だ。
俺を支配したいと願うのならばお前を支配してやろう。俺を排除したいと祈るのならばお前を排除してやろう。そして、俺を害したいと誓うのならば、お前を害してやろう。
内藤を見下ろす。
やわらかな体、スラリとした手足、髪はサラサラと流れ、顔の造詣は男心を刺激するに違いない。
しかし、そんな男心をくすぐる魅力的なものよりも俺の食欲を刺激するのは。

「ああ、本当に美味そうだ……」

支配。支配だ。俺を支配しようとするその無駄な足掻きこそが愛おしい。
言葉ではなく、魂より薫るカリスマ。ただの性質で俺を支配しようとする健気さこそが、俺を強烈に刺激してくるのだ。
ああ、内藤。お前は良い女だよ。
今の今まで食指が向かなかったのが不思議なくらいだ。
しかし、今になってようやく、だ。
お前が、お前が敵だと本心から感じてようやくだ。
お前が欲しくなってきたんだよ。よくよく考えてみればお前を俺は、毛の一本さえ、魂の欠片さえ支配していないのだ。

過去の俺ならばあり得ないぐらいの緩さ、弱さだよ。
ああ、だからこそ今は丁重に扱ってやろう。
なぁ、内藤？

「クハッ。クカッ。ははははははッ！！」

空を見上げた。日本と変わらず月が存在する空を。
そうして狂気の夜は過ぎ、
不屈の朝はやってくる。

肆拾肆／

ゴブリンの集団に出会ったとき、必ず一名の死者が出る。
コボルトの集団に出会ったならば全滅すら覚悟しなければならない。それがアタシたちの常識だ。
塔に入れば死者が出る。だから見つからないように、隠れながら探索を行い、塔や敵の情報を得る。運がよければ開いたままの武器庫などを発見し、装備、道具、消耗品を入手する。そして、底をつきかけているパラメーターアイテムを消費しながら力を蓄える。

「姐さん。前方からゴブリンが来ます。巡回に鉢合わせたっぽいっスね」
「……伊藤、どうだ？」

ゴブリンとの遭遇があることを教えてくれた伊藤に問いかければ、伊藤は武器を片手に笑みを作ってくれる。

「大丈夫っス。覚悟はできてるっスよ」
「よし、行けッ！！」

「はいッ！！」

≪法の剣≫より逃れ来た連中、塔の攻略に失敗した連中を集めて≪カラミティ・ブルータス≫は作られた。≪法の剣≫の統治主義、幹部以外の意見の反映されないという性質に反抗し、支給品を奪われたものや、奪われる前に逃げてきたもの、運よく支給品を貰ってすぐに街へ向かった者たちなどによって作られたこの組織は、塔に入ってから現実を思い知らされることになった。

敵と出会うたびに人数が減っていくのだ。ゴブリンの戦士たちはまさしく日本という国で平和に生きてきた私たちには想像もつかない存在だった。

躊躇無く振るわれる武器。敵を殺すために考え込まれた陣形。火炎放射器などは使われた瞬間に撤退を考えねばならず。それにしたって殿を用意しなければならない。

塔は、人間に攻略できるものではなかったのだ。

それでも≪法の剣≫から逃げ出した者たちには塔に挑む以外に選択肢はなくなっていたのだけれど。もちろん、そもそも≪法の剣≫と接触していないアタシには奴らの下に行くという選択肢があったが、生来の性質からかそれを選ぶ気にはなれなかった。

――いいか。最下等の兵士であるゴブリンに対するには……

ここに連れてこられてから頭に響くようになった、不思議と不快ではない声に耳を傾ける。敵と遭遇するとアタシたちでもできる戦術を教えてくれる声。

そして、アタシの周りにいる、≪法の剣≫の統治から、いや、この塔を自分たちで攻略しようと集まった者たち。当初２０名はいたチームは最終的に非戦闘員すら駆り出し、それも全て殺され、最終的には５名となっていた。

最初から行動を共にしている海雲、アタシに忠実な伊藤、計算高

い山県、理解し難い台詞の多い多聞。
そしてアタシ、龍村勝香。
元々、複数の組織の集合だった≪カラミティ・ブルータス≫の元々のリーダーたちも次々と死んでいき、とうとうアタシだけになったのだ。
これが、たった6日。いや、初日は活動してなかったことを考えればたったの5日のこと。
たったの5日で、たくさんの人が死んでしまった。

肆拾伍／

そして、また一人死んだ。

「た、龍村、傷を治療してくれ」
「大丈夫か？　山県、治療を頼む。……多聞。伊藤はッ」
「彼は死者の園へと旅立ったよ。あぁ、勇敢な戦士の魂よ。夢の中でも闘争剣戟の果てと散れ」
「……そうか。伊藤」

未だ一階の探索で、四人になってしまった。アタシたちは半死半生なんてものではなく、既に終わっていた。今も山県が海雲の腕に刻まれた深い刀傷に回復薬を使い、治療を行っていくものの。

（回復薬も、あと少し……）

クレジットは残り少ない、武器のエネルギーは、帰りを考えると心許ないが、ある。パラメーターアップアイテムは、買い戻す当てや入手する方法がない以上は売ることはできない。

「リーダー、どうするんだい？　伊藤君が死んだ以上はもう……。やはり塔の探索より市街で金を稼ぎ、装備類を充実させてからにすべきだったのでは？」

海雲の治療を行いながら山県が意見を出してくる。正論ではある、時間があって、私たちがまともに施設を利用できるならばその意見を採用してもよかったが。

アタシが言う前に海雲が口を出していた。

「馬鹿が。≪法の剣≫に睨まれてる俺たちが街の施設をまともに使えると思うか？　バイトなんか割りの良い奴は根こそぎ取られてる。飯をただで食うにも宿舎の出入り口には四六時中人が張り付いてる。だから、ノーマークな宿を使うしかねぇ。おかげで飯代も馬鹿にならねぇ」

「ああ、だがそれがわからない。奴らの思惑はなんなんだ。第一、アタシたちをあんなに堂々と監視してなんになる？　武器屋の買い物も見張られてたけど」

脅威にすらならないアタシたちを見張る敵。……それに、不快を感じながら山県を見る。メガネをかけた商社マン風の男性である彼は、アタシたちに対して失望を窺わせる目を向けていた。

「何だよ。言ってみろ」

「なら言わせて貰う。伊藤君を殺さずに済む方法はいくらでもあったはずだ。どうしてッ、どうしてここまで塔に拘るんだ。僕たちが≪法の剣≫に睨まれていることはわかってる。だが、それでもッ……」

山県が最後まで言うことはできなかった。海雲が怪我をしていないほうの腕で山県の胸倉を掴んでいたからだ。

「アンタ、ちっと俺たちより年上だからって、変なものの見方しやがってッ。伊藤が死ぬ必要はなかっただとッ！！　俺がゴブリン連中と戦ってる間、アンタは何やってたッ。弓構えて、後ろでビクついてただけじゃねぇかッ。てめぇがなッ、もっと戦えてりゃ伊藤だってそもそも生き残れたかもしれねぇだろうがよ！！」

「ぐッ……ッ、だ、だがッ……」

「やめな。海雲」

アタシの声に海雲は舌打ちしながら山県から手を離す。確かに、まともに敵と戦える人物が海雲ぐらいなのも問題だった。我関せずと視界の端で手元の剣を見ている多聞に目をやり、離す。一応は山県より戦えるとはいえ、アタシも多聞も山県よりほんの少しマシ、といったところだったからだ。

伊藤が速度で敵の戦列をかき乱し、アタシと多聞が敵を拘束し、海雲が一体一体を始末する。そして余裕があれば山県が弓で射倒す。聞こえた声が教えてくれた戦術に従い、戦ったものの。伊藤は敵に囲まれ、逃げ切れず死んでしまった。

山県が言うとおり、街で戦力を充実させるのもひとつの手ではあった。あったのだが。

「インテリ。アンタが言うように街で戦力を充実させるのが一番だ。俺だってそれは認めてやるよ。アンタが言ってることは正しい。正しいがな」

海雲は、悔しげに喉を押さえる山県に指を突きつけた。

「そんなもんは時間があったらできることなんだよッ！！　明日か明後日か知らんが、≪法の剣≫は着々と準備を整えてる。近いうちに塔の探索に乗り出す。対して俺たちがバイトして武器を購入し、

薬を購入し、そうしてどうなる？　戦力は整った。さぁ、次はどうなる？　塔に入れないんだよッ！！　武器屋を見ろ！　昼間は俺たちが入る余地なんかまったくなかっただろッ。今じゃバイト連中のいない夜中にこそこそ入ってだ。それでも監視みてぇなもんがいる。見張られてるんだよッ！！」

「そんなことは僕だってわかっているッ！　だが、だがッ。このままでは犬死以下ッ。なんの意味もなく屍を晒すだけだッ！！　僕たちは上にたどり着けず「いける。頂上には着く」

「龍村？」

「リーダー？」

わかっている。そんなことは、状況は八方塞がり。本来は≪法の剣≫に頭を下げてでも保護を請うのが正しい道なのだと。

だが、それだけはできなかった。私たちが越えてきた仲間の数を思えば、私たちが倒してきた敵のことを思えば。

≪法の剣≫の統治に従うこと。それを思い。さらに、ひとつの感情が自分にあるのを知っていれば……。

――進め。塔を、塔を攻略し、天辺にいるお方に出会わねばならぬ

（ああ、そうだ。アンタに言われなくてもわかってるよ。前の世界じゃ味わえなかったこのリアルな感情。胸の奥がどきどきするんだ。生きてる実感がある。こんなに虚しくならない戦いがあるなんてアタシは知らなかった）

それに、アタシについてきた仲間は嫌々死んだんじゃない。望んだ死闘の末に胸を張って逝って行ったんだ。だから、それを否定する山県に反発が湧きかけるものの――

「ん？」

「あ、お、おまッ」
「あー、何やってんだ？　お前ら」
「……？」

現れたのは、不気味な生き物らしきものを二体連れた、妙に小奇麗な男だった。
そいつはまず伊藤の死体を見た。そして、アタシたちを見て、海雲を見て、山県を見て、多聞を見たのだ。
まるで全てを見透かすようなその目にイラッとしたので、睨みつけてみるものの、堪えた様子もない。
しかし、こんな奴、この塔で初めて会った。それにどうして綺麗なんだ。コボルトやゴブリンには遭遇してないのか？
アタシは突然出てきたソイツに釘付けだった。
だから山県が、無言で、値踏みをするようにその男を見ていたことにアタシは、そのとき気付かなかった。

肆拾陸／

出会ったのは、以前、助けてくれた胸糞の悪い男だった。
その背後には以前と装備の変わった不気味な人形のようなものが二体。寄り添うように立っている。

「海雲、知り合いか？」
「前に助けてくれた奴だ。話したろ」
「ああ、アイテムをとられたっていう」

ついでにパシリにされかけた。

「リーダー、この方は？」

「連理貴久、タカぼんと呼んでくれ。よろしく」
俺が説明する前に他の連中に自己紹介してやがるし。
「で、アタシたちに何の用なんだ。そういやアンタ、≪法の剣≫なのか？」
≪法の剣≫。その単語に反応し、身構えてしまう俺たち。
奴らには現在、多くの嫌がらせを受けているからだ。
「だとしたらどうするんだ？」
対する奴はにやにやと嗤っている。四人の人間の敵意に囲まれて、なんら緊張もしていない。
襲ってみるか？　龍村と≪法の剣≫に対する人質にする算段をつけようとアイコンタクトを交わした瞬間、鎧や服の合間合間から赤い肉のようなものが見える人の形をした塊が連理の前に出てくる。
「ああ、三号、お前は下がってろ」
「んだ、てめぇ、ずいぶん余裕だな。ここでアタシらにフクロにされても」
連理はにやにやと嗤うだけ。……冷静になろうと試みる。この反応は、ああ、覚えがある。高校時代に全国で優勝し、有頂天になった俺が試合を吹っかけたときの親父の顔に似ているからだ。
散々挑発して、やっと試合を了承した親父は、
――ほれ、打ちかかって来い
（あのとき俺は、そうだ。負けたんだ。そのときの親父に奴は似て

る）

にやにやと、まるで見透かすような目で見てくる連理。そう、奴としてはどちらでもいいのだ。襲われようが、襲われなかろうが。

「龍村。こいつは、違う。≪法の剣≫じゃない。第一、よく考えりゃ、俺らがここで身包み剥がされてもおかしくねぇんだ」

俺がそれを言った瞬間の連理を、俺は一生忘れない。そして、こいつに会う度に必ず思い出す。そう確信した。

その心底残念そうな、つまらないものを見たような顔。

一瞬、ほんの一瞬だけ見えた表情。しかし、それがこの男の本性なのだ。

「冗談だ。冗談。俺は≪法の剣≫じゃない。しかし、」

俺らを見ながらそいつは、呆れたような顔をして言う。

「急がば回れって言葉を知らんのか。あーあー、人間の死体なんぞ散らかしやがって」

「てめッ、「てめぇ、ケンカ売ってんのか！！」

「売ってないって。ほら、可愛い顔が台無しだぞ。お嬢さん」

「うるせぇ。アタシに触んな」

振りほどかれるも、龍村の顔の汚れをハンカチで拭って、満足そうな連理。

そして、連理に触れられた部分を乱暴に袖で拭い、再び顔に汚れを付ける龍村。

それを見て、連理は満足そうに頷くのだった。

（このやろぉ……。確信犯かッ！！）

文句を言おうと声を張り上げようとすれば、龍村が連理に鬱陶しそうに話しかけるところだった。

「連理、だったか？　さっさとどっかいけよ。アタシらも暇じゃないんだ」

「奇遇だな。俺も暇じゃない。それに、ここに用があるんだ」

「……連理さん、だったかい？　それ、もう少しくわし「山県ッ、こいつは敵だぞッ。話すなッ」

一斉に四人の間に緊張が走った。龍村、多聞は武器を握り、山県は迷っている。俺は、……刀の柄に手を這わせる。

連理の前に先ほど三号と呼ばれていた、肉でできた人形に服を着せたようなものが立ちはだかる。

「どういうことだ？　海雲？　こいつは≪法の剣≫じゃないんだろ？」

「思い出したんだ。こいつが≪法の剣≫と仲良くしてんのを見たことあんだよ」

咄嗟に思いついたでまかせを言う。否定されても押し切る気だった。だいたい荷物も取られたし、こいつが何より気に食わない。

その、なんでもできると思ってやがる目が。見透かしたように俺たちを見る目が気にくわねぇんだよ。

「そりゃ同盟組んでんだから仲良くもする。しかし、敵か。お前らの敵は、人間、か……」

敵、という言葉にぶるり、と震えが来た。さっきの連理を思い出

す。残念そうな、つまらなそうな顔が、思案にくれている顔が、その暴力性を開放したくて堪らない獣のように見え――

しかし、連理が動く前に龍村が動いていた。

「違うッ！！　あたしたちの敵はこの塔の連中と機械人共だ。そのためにアタシらはッ」

「ぅ……」

思わず声が漏れかける。気に食わないという理由だけで戦端を開きかけている自分に突き刺さる言葉だった。

そうだ。連理に戦闘を仕掛けるのは自殺行為だと知っていたはずなのに。自分の軽率な言葉で全員を今、危険に晒している。

対する連理は、当たり前のものを見たような、何かに感心したような表情で龍村を見、そうしてからつまらなそうに言う。

「ふーん。まぁいいけどな。二号、蹴散らして来い」

思わず身構えた俺たちの横をガシャガシャと音を立てて駆け抜けていく、鎧を着た人間のような物体。

それが、走っていく。話かける切欠もつかめず、武器を掴んだり離したりしてしまう俺たち。そして、遠くで響き始める、悲鳴と何かが轢き潰される音。

「響くは悲鳴。殺すは肉の塊なり。優雅さに欠ける」

多聞が何かまた妙な事を言うが、耳には入らなかった。

「で、何だっけか？　ああ、俺はここに用事があるわけだから……」

床に腰を下ろす連理。俺たちが囲んで見下ろしている状況なのに、

その表情から余裕は消えず。
雁首揃えて連理を見る俺たちに連理は首を傾げた。
「あん？　さっきのか？　コボルトが接近してるようだったからな。ついでだ」
……なんのついでなのかは聞かなくてもわかった。連理貴久は、たった一体でコボルトやゴブリンの集団を蹴散らすことのできる戦力を二体有している。考えたくもないが、連理貴久自身も同等の戦力を有しているに違いがなかった。
思えば、塔に入っているというのに、この男は汚れひとつなかった。返り血すら浴びず、ここまで来ているのだ。俺たちが全員包帯まみれで血まみれなのに、涼しげな顔で戯言を放つ余裕すらある。
言葉が詰まる。今、俺たちは間違いなくとんでもない生き物と相対していることに、今更ながら気づかされる。
「連理さん、話を聞かせてもらってもいいかい？」
「ん、いいぞ。ああ、そんな堅苦しくしないでもいい。気軽にタカぼんと「山県ッ！！　コイツと話すことなんかねぇッ。龍村、移動だ！　多聞も突っ立ってねぇで荷物拾えッ」
「……」
無言でこちらを見る多聞。なんだよ、と多聞を見れば奴は、荷物を拾い。
「風のように逃げねば、きっと奴らに追いつかれるだろう」
確かに、集中すればざわざわと肌に響く感覚がある。ゴブリンやコボルトが接近するとき特有の悪寒に似たものだった。
山県のような青瓢箪にはできねぇが、戦闘に慣れれば感じるよう

になるものだ。

「ん、本当だ。なんだ、耳が良いんだなお前ら」

ふい、と連理から顔を背けた多聞は先に安全そうな道へと歩いていく。そうだ、それでいい。

龍村は、伊藤の死体の目を伏せているところだった。

俺たちには遺体を持ち帰る余裕がない。今まで死者は例外なく塔に置いて来ていた。

「よく闘ってくれたな。ありがとう」

龍村の祈り。

その光景は見慣れたものでありながら、いつまでも見ていたいと思わせる厳粛さがあった。その一瞬は切り取られ、俺の記憶に永劫残るだろう。そう、感じさせるものが龍村からは溢れている。

先ほどの連理との争いの気配を鎮めたのも、塔に対する姿勢も全てが敬意を抱かずにはいられない、勇気に満ちたものだった。

時折見せる意思の強さも含めて、俺は、こいつに……。

「アタシ達はぜってー、てめぇらには屈しねぇからな」

龍村は龍村を見る連理にそう言うと、伊藤の傍から立ち上がり、荷物を取ってから多聞と同じ方向にスタスタと歩いていく。しかし、途中で顔を怪訝そうに歪めた。

視線の先には、荷物も拾わず突っ立っている山県がいる。

「山県？　なんだ、早く準備しろ」

俺がそういっても山県は動かない。慌てて龍村を見れば、彼女は

苦虫を噛み潰したような顔で連理を睨み付けている。

「やりやがったなッ」

「なんのことだ？　ほら、山県、だったか？　早くしないと置いてかれるぞ」

からかうような連理の口調にも反応せず、山県は俺達を見、そして口を開く。

「僕はここで抜けさせてもらうよ。残念だけど、君たちにはついていけない」

「ッ、……好きにしな」

宣言に呆然とする俺とは違い、予想していたのか龍村は即座に決断を下した。

俺は、俺は……。裏切られた気分で山県を見れば、奴は俺を見ても罪悪感ひとつ浮かべず、連理の方へと歩いていく。

舌打ちが自然と漏れた。

「てめぇみたいな腰抜けはこっちから願い下げだったんだよ！！糞がッ。ぐだぐだしてたら押し潰されちまうぜ。てめぇはそこで連理と死んでろッ！！」

逃走経路を改めて確認する。一方だけ開けてあるように気配が手薄な方面へと。

しかし、迫るゴブリンの気配は四方から来ている。こんなざわついた気配初めてだ。まるでモンスターに囲まれているような、こんなのは。

振り返る、なんの緊張もしていない連理と、こちらを睨むように残る、山県がいる。

「ッ。だが言っておくぞ。山県、そいつといると絶対に後悔すんぞ！！　そいつは感情のないただの外道だッ！！」

我慢できずにそれだけを裏切り者に告げ、俺も荷物を持って即座に駆け出すのだった。

肆拾漆／

「三号、銃を降ろせ。あれは、ああいうものなんだ」

海雲の捨て台詞になぜか反応した三号に銃を降ろさせる。しかし、あいつも大分荒んだな。最初に感じた体育会系の男臭さがただの乱暴さに変わってしまっていた。

「で、何が聞きたいんだ？」

目を転じれば、こちらへと申し訳なさそうな、それでも何かを必死に見極めようとしている男がいる。商社マン風の背広を着た、メガネの青年だ。ちなみに俺より年上。たぶん２４，５歳だと思う。

「まずは自己紹介を。僕は、山県義純（ヤマガタ　ヨシズミ）。元の世界では南雲財閥系列の企業に勤めている」

「連理貴久。さえない三流大学生だ。タカぼんと呼んでくれるとうれしいな」

「あ、はい。タカぼん、さん……」

腰が低いのか敬意を持ってくれてるのかわからなかった。それに、南雲か。

微かな疑問を無視し、問う。

「それで山県、聞きたいことは？」
「はい。まず、貴方はここで何を？」
「ここで、か。……三号ッ。二号の手伝いに回れ！！　肉は回収しなくていい！！」

ガンマンスタイルの肉人形を時間のかかっている二号の援護に回らせ、俺たちは……あそこがちょうどいいか。

「そこの部屋に隠れるぞ」
「隠れって、いや、そこは開きっぱなしだから隠れても」
「いいから。塔の仕組みのわかってない奴だな」

はい、と力ない声で男はついてくる。しかし顔が悔しげだった。どうにも自尊心というか、上昇志向だか、我が強いのかもしれんな。こいつは。

それはともかくとして、しばらく待つ必要もなく、二号と三号は戻ってくる。

ガシャガシャと金属を合わせた鎧を着ているために音の激しい二号に、音を立てずに流れるように移動している三号。

……内藤に櫂を持たせて帰らせたが、二号も同時においていくべきだったかもしれんな。しかし、今回はイレギュラーだ。最大戦力で挑む必要があった。

それに、今回は山県もいる。目的なんぞわかりきっていたから見殺しにするわけにもいかん。

仕方なしに二号と三号に背負わせている背嚢から布の塊を出す。櫂から持ち出したアイテムだ。

「おい。手伝え」

「う、うん」
「腰低いな、アンタ。年上なんだし堂々としていいんだぞ。あと、布は鎧の金属があたる部分に噛ませてくれ」
稼動域が狭まるが、音もガチャガチャ言わなくなるはずである。ぐいぐいとつめていくと苦しげな音が二号の口から漏れた。
兜をぱかん、と叩き。黙らせる。
今は速度より、見つからないことが優先なのだ。
肉人形用の追加スキル【忍び足】を購入しとけばよかったとも思うが、っても、口のパーツとパラメーターアップアイテムで強化できるシステムを搭載するだけでもずいぶん金がかかったし。それに装備の分だけでも随分と金が飛んだ。
金、金、金か。どこでも世知辛いもんだ。A・I・連中を騙くらかすわけにもいかんし。
「それで、何をしようとしてるんだい？」
「ん、ああ。ちょっと待ってろ。ああ、布はそのまま続けてくれ」
忘れていた作業を行う。外の遺体に細工を仕掛け、ドアに端末を押し当て、ドアを閉める。同時に鍵も閉めた。一階層の部屋のコードを入手しているので開閉と施錠は自由に行える。
「……やはり」
「ん？　なんだ？」
「貴方は、僕達より進んでる」
探索をほぼ放棄してるお前らと一緒にするな、と言ってみたかったが、反発を抱かれても嫌なので黙っておく。そうしてから、言葉を選んで外からの意見を言ってみた。

「例えば、お前らのとるべきだった道としてだ。一人か二人、人物を選び、そいつにパラメーターアップアイテムを集中すればよかったはずだ」
「それは、夢物語だ。みんな、みんなだッ。そんなことは絶対に選ばなかった。彼らは物語の主役に成りたがっていた」
そりゃそうだ。だから俺たちも放置した。そして予想していたとおりになった。≪カラミティ・ブルータス≫を除いて、全てが壊滅した。
「僕達のことはどうでもいい。タカぼんさんは、どうやって「考えたんだよ。山県ァ。お前、俺がただ、なんの考えもなしに幸運だけで進んでるとか思ってねぇか？」
っと、っと、っと、言葉言葉。俺が苦労してないみたいに言われたからって、言葉まで全盛期に戻してどうするんだよ。
肩を縮めてしまった山県に無理やり笑顔を作ってみせる。
「ふ、雰囲気あるな。それが君の素かい？」
「いや、俺はただの三流大学生だ。それで、なんだ。考えたことあるか？」
「例えば？」
「この塔の仕組み。この施設の仕組み。どうしてこんなに遊びが多いのか、とか。そういったことをだよ」
「……いや、思えば、目の前のことに精一杯で、そういったことには」
「だろ。もう簡単に手に入るものは残っちゃいないが、そういったものが最初にはごろごろ転がってたんだよ。ここには」
「それが二号とか、三号とかいうものなのかい？」
「含めて。いろいろとな」

例えば、後でわかったことだが、俺と武満の使っている端末では、能力項目の表示や登録した個人の情報の閲覧など違う点がいくつかある。他の端末は俺の物ほど詳細には表示ができないようだった。

今後は改造も含めて端末の解析を行う必要があるだろう。うまくいけばカタログの部分などにも手を入れられるかもしれない。

また武満たちの根城にしている司令部の傍には複数の使われていない工場のようなものがあったりとか。

既に≪法の剣≫が金で買えるものや動かせるものなどは人をやって入手に動いてしまっているが、このような施設やアイテムがこの街には大量にあったのだ。

それを、こいつらは怠った。塔に行けばなんでも手に入ると思っていたのだ。

一番簡単な切欠である肉人形を最初に確認できていればおそらくそういった考えもできたんだろうが、いや、そこを含めての怠慢か。

「……、耳に痛いな。それで、ここでは何を？」

「死体。人間の死体についてだ」

「……？　死体、かい？」

「この塔で死んだ人間の死体は、どこに行く？　モンスターの腹の中か？　それとも専門の焼却施設があるのか？　どう思う？」

「……焼却施設、かな？　モンスターの死体も消えていたし」

「モンスターの死体はほとんどは俺が回収してる。金になるからな。人間のは道具が残ってれば身ぐるみ剥いで放置だ。

そして、人間を焼くような焼却施設については一階層にはなかった。食堂に併設された調理場があったが、人間が調理された形跡もなかったしな」

補足として、モンスターの死体は奴らの共同墓地とも言うべきか、専用の死体置き場があるようだった。俺が残した骨や臓物、解体し

なかった死体などはそこで処理がなされているようだった。
死体置き場。入ることはできるようだったが、侵入は身の危険からできなかった。体の芯から勝てないと思わされた敵がいたからだ。それでも、発見した一階のコントロールルームで、監視カメラの映像を見ることで得られた情報を思い出す。
荘厳な、巨大な黄金の十字架の掲げられた室内。そこには祭壇と無数の壷が用意されていた。
そこには不気味な死肉喰い専門のモンスターがいる。しかし、人間を食べているかは確信が持てなかった。死肉喰いに対する扱いはペットや仲間というよりも、信仰の対象として見られているようだったからだ。
丁寧に磨かれた祭壇とその前に鎮座していた巨大な蛇のような生き物。黄金の冠を被ったその蛇は朗々と詠うように唸りを上げ、ゴブリンの死体を丸呑みにし、骨だけを小さな壷に吐き出していた。
それを黒い神官服を着たモンスターが持ち去っていく。
初めて見る宗教色の強い、モンスターの行動だった。
しかし、人間に、敵に対してそれをモンスターが行わせるのだろうか？
疑問だった。奴らにそれを行う情緒があるかは別として、確かめねばならなかった。輩（トモガラ）の死体を解体し、売り叩いている敵の同族を奴らが許すのだろうか？　そんな厳かな場所で葬るのだろうか？
また、奴らの食事についてだが、食堂らしき場所にレーションの販売機が設置されており。奴らはそこを主に利用しているようで頻繁に使われている様子が見えている。調理場には埃が積もっていたし。調理場は使われていないんだろう。
レーション販売機は壊して凶暴化されても困るので手はつけていないが……。
思考を中断し、山県に対する説明を続けることにする。
「もしもだが、調理せずにその場で食べたとする。それに肉をその

場で食ったとして、骨はどこにだ？　放置されている形跡がなかった。ダストシュートに入れられてる可能性もないわけでもないが……」

そこでいくつか推測が出てくる。

以前武満に調べさせたこの都市の物資搬入経路。あれは都市の外部から輸送されているのではなく、この都市内の各工場と地下でつながっていた。また、工場からは材料の生産の為の施設（あいにくとまだ中に侵入することはできなかった。一応、窓からのぞいたら鶏に似た生物や植物のようなものが大量に栽培されていたらしいが）へと繋がっていた。そこから先は未だ調査中だ。生産施設のキーが見つからない以上、調査は当分先になるだろうが。

ちなみに言い忘れていたが、この都市の外は茫漠たる砂漠である。周囲には砂しかない。

そもそも俺たちはどうやってここに連れてこられたのか。テレポートかワープか知らんがそういった技術が使われているのか。

そして、他に外につながるものが、都市内で見つからない以上は。だからこそ、目的だけはわからないが、死体の行き先が気になるのだ。

ただ処理されていたり、粉々に破壊されているだけならいい。しかし……俺の推測通りなら。

「……今日は、三階層に立ち入るつもりだった。が、ここの様子を見て対応を替えることにした。今日は、少し騒がしい」

「騒がしい？　そういえば、確かに。いつもより少し、悪寒が酷いかな」

目を閉じる。閉めた扉の向こう側を想像する。きっと、先ほど龍村たちが感知していた敵がうじゃうじゃいるんだろう。目を開いてレーダーを見れば光点で扉の外は真っ赤に染まっていた。

今日の死体が特別なのだろうか？

「大丈夫なのかい？　本当に……？」

小さな声。扉の外に聞こえないように振舞っているのだろう。俺も山県と同じように口を閉じ、傍の二号と三号を見る。

彼らは動かずじっとしていた。鎧にも布を噛ませているので音を立てる心配はない。正直ここまでやる必要はなかったとは思うが。念には念を入れるべきだった。今更一階層のモンスターに殺される心配などないが、警戒されたらこれからの調べ物が捗らない。

「大丈夫だ。今回は戦うことが目的じゃないからな」

レーダーを見る。赤い光点が死体を持って移動していくのが確認できる。死体に仕掛けた発信機からの情報だ。一個１０００クレジット、内藤の装備に密かに仕込んでいるものと同じものだ。武器の機構に仕込んであるから、今の内藤ならば一生気付くまい。

「映像を出すぞ」

三号がいそいそと発信機と同じく、死体に仕掛けた隠しカメラの映像を受信する装置とそれを出力するためのプロジェクターを、二号がそれを映す白幕を壁にセットした所で俺は部屋の電灯を落とした。ちなみにどうしてプロジェクターなのかと言えば司令部の会議室にあったものを、武満の許可を貰って持ってきたからである。

どうしてこんなに準備が良いかといえば、それは単純なことで、≪カラミティ・ブルータス≫で死人の出ていない日はないからでもあった。

それでも今日の死体は反応がおかしかった。初日に、俺が帰るまで入り口に放置されていた死体と違い回収が早いし、俺が感知でき

るほどにモンスターどものざわめきが強かった。

肆拾捌／

「ポップコーン食う？　コーラもあるけど」
「よく用意できたね。……うん、ありがたくいただくよ」

丁度、パイプ椅子があるわけなく、そこそこ頑丈そうな椅子に座る。白幕には移動中の映像が流れていた。

「ゆれるな」
「死体袋はないみたいだね」

両手と両足を掴まれてるんだろうか？　予算の都合からひとつしかつけられなかったカメラからは揺れる天井が主に見えていた。それと、時々ゴブリンやコボルトの手足だ。相当ぞんざいに扱われているようだ。

クーラーボックスから取り出したコーラに似た何かをちゅるちゅるストローですすり、ポップコーンに酷似した何かをむしゃむしゃと食べる。隣では三号が印刷した一階層の地図に、映像を元にして移動ルートを記入している。当然その様子もプロジェクターに映してあった。

移動中のカメラ画像の横にある三号記入中の地図は、死体が順調に移動していることの証明だった。

「……随分奥まで進むな。確かあそこは」

探索しても何も成果の無かった辺りだ。確か、居住区だったか。冷凍睡眠中なのか住民はいなかったが。

「やはり、食うのか？」
「ポップコーンとはいえ、食べてるときにその話題は……」
「あそこは居住区だ。肉を住居に持ち込む理由なんぞ一つだけだろうが。ん？」

居住区を、外れた？　隣の地図を見れば、壁？　いや、地図上では壁の中だ。もちろん俺も実際に見て確認した場所である。壁だったはずだ。

「天井との距離ッ。どうなってるッ？」
「距離？　あ、あぁッ。下がってるよ」
「階段だ。そういや、画面がさっきより揺れてるしな」

……地下なのか？

「三号、距離が下がった辺り……いや、いい」

明らかに地下に下ったと核心できたあたりで映像は途切れてしまう。

「切れた。電波が遮断されたのかな？」
「だろう、な……」

地下が、あるのか。つまり……確定、したか。
しかし死体なんぞ何に使うのか。武満に、”人間の死体”については回収と解剖の指示を出しておかなければ。
早速、三号に隠し階段の位置を記入させておく。カメラ映像も録画してあるから説得材料も問題ないだろう。武満相手ならば説明は不要だが、あれば探索の足しにはなる。

「なるほど、……な。やはり……」
「やはり？」
「なんでもない。帰るわ。送ってってやるよ」
「あ、あのッ」

何だよ、と見る青年の顔は予想していたものと同じだった。圧倒的な力の差、大いなる知的探求の機会、自らの力が如何様にも発揮できるだろう場所を持っている人物にめぐり合えたことの歓喜、そして、それを惜しげもなく見せた俺への敬意。

そういうものが混じり、こそばゆいものすら感じる視線と共に放たれた言葉は――

三階層【王者の凱旋】？

肆拾玖／

宿屋に帰り、先に戻っていた内藤と合流する。
執務室兼客室兼会議室兼遊技場及び倉庫としている少し広い部屋。
そこにあるソファーに座っていた内藤はぽかんと、俺と俺の隣に立つ男を見上げていた。

「このメガネ。新しいメンバーだから」
「……って、え？　この人って、あの……」

ありゃ、情報収集のときに面識でもあったかな。困惑した表情の内藤にかまわず、山県は自己紹介を始めていた。

「山県義純だよ。よろしくお願いするよ。えっと……」
「そこの白髪娘は内藤だ」
「白髪じゃないです！　プラチナブロンドですってば、ちょっと金入ってるじゃないですかッ」

きらきらと目にまぶしい、自称プラチナブロンドの髪を指差す内藤を無視し。

「いちいちうるさいが理のないことは言わないやつだ。構ってやると懐くから仲良くしてやれ」
「な、なッ？！　もうッ！！」
「あ、――はッ、はははは。楽しいところだね。内藤さん、よろしくお願いするよ。改めて、山県義純です」

「あ、はい。な、内藤、美咲です。でも、山県さんって」
「お察しの通り、元≪カラミティ・ブルータス≫だね」
困惑した表情の内藤が俺を見てくる。なんだ、言いたいことはわかる。
「やっぱり……あの、タカぼんさん」
「話は通してある。カラミティはな、出るも入るも自由みたいだからな」
「……そう、なんですか？」
「そうなんだ。そもそも元々がいくつかのクランやチームの連合だからね。僕も純粋に≪カラミティ・ブルータス≫の一員だったというわけではなかったし」
「死人が多すぎたんだ。今残ってるのは……確か、リーダー、使える剣士、使えない剣士の三人だったか。総資産は８０００クレジット。パラ１ＵＰが３つ。武器は剣が３つに、ボウガンはなし、残りの初期武具は売却済み、防具は破損しながらもそれを使用中。……こんなもんか？」
絶句した表情の山県。それと、信じられない表情をしている内藤。
「な、な、なんでそんな詳しくッ。武器だけならともかくクレジットにアイテムのことまでッ！！」
山県メガネが詰め寄ってくるのを手で押さえる。
「いや、割と当たってるもんだな。≪法の剣≫の情報収集能力も馬鹿にならんもんだ。うちも気をつけないとな。はっはっは」
「ほ、法の剣……。……ッ！！　ああッ、あああッッ！！　やっぱり、全部見られてッ！！」

声を上げる山県を冷たい視線で見てやる。内心は別に軽蔑も呆れもしていないが、それだけで奴も頭が冷えるだろう。

「馬鹿が。お前らみたいな迂闊な連中が対人暴力専門の集団から本気で逃れられてるとでも思ってたのか？」

「く、ぅ、ぅ、理解はしていたはずでも、事実を突きつけられるのはきつい、ね」

「タカぼんさん、そ、そんなに責めなくても」

「責めちゃいないよ。しかし、引き抜いた後で聞くのもなんだが、どうしてあそこに残ってたんだ？　正直、あの二人以外は生き残れないはずなんだが……」

「まるで予定調和のように言うね。タカぼんさんは……。

うん、全てを見通してる貴方の言うとおりだよ、タカぼんさん。それでも、≪法の剣≫から逃げ出した人間が、この街でたった一人で生きてけると思うのかい？」

「思わないな。そのように≪法の剣≫は動いている」

「うん、施設も使えず仕事もない。だから僕達は塔に挑み続けた。死ぬとわかっていてもそれしか道がなかったんだ。正直、自殺にも似ていたかもしれない」

その指示には俺も関わっていたはずだった。しかし、心は動かない。

「終わったことだがな。よし、まずは契約を交わそうか。お前もその方が安心だろ？」

「貴方は……」

納得できない表情で見てくる男は、目を閉じ、深呼吸をしてから頷いた。

「……うん。よろしくお願いするよ」

そうして、俺は呆然とこちらを見ている少女に振り向く。

「内藤、悪いが食堂で飲み物を貰ってきてくれ。山県、何飲みたい？」

伍拾／

「天才とは彼のような人間のことを言うんだろうね」

「はい？」

山県義純さん。高身長で高学歴、高収入の商社マンだったという人は、対面に座り、メガネをクイ、と上げると。

「日本にいたころは当たり前すぎて忘れていたけど。衣食住、それとこれは塔外部に限るけど、安全。この状況下でそれを不完全とはいえ提供できるのはなかなか、いや、まったくいないよ」

「はぁ……？」

「≪法の剣≫は食に関しては不自由しているんだっけ？

あとは、君に対しては、していないようだけど。そうだね、彼の気持ちもわかるかな？　”内藤”、だっけ？」

「あなたはッ……」

薄らと笑みを浮かべた山県さんの眼鏡が怪しく光っている。いや、あれはただ電灯の光を反射しただけに違いない。

それでも、私には不気味に見えてしまう。自然と拳を握りかけるも、山県さんが牽制するように言葉を放っていた。

「そう警戒しなくてもいい。僕は君の事を知っているけど、興味は欠片もないよ。ただ、タカぼんさんの立場で考えれば偽名を名乗ってる人間とは契約したくはない、と考えられるだけでね」
「な、んで……。それ、を」
「わかるよ。君、有名だからね。【銀稜台の天使】だったかい？　くくく、学生とはいえ偉く面白い通り名だね。それに、言い忘れてたけど、僕は南雲証券の社員だからさ」
「ッ……」

南雲財閥の傘下企業の中でも大きいものだ。しかも、そこには父の仕事の手伝いで入社式に一度だけ顔を出した覚えがある。それが、この男の時だったとすれば……。
しかし、目の前の男はその事実を持って脅すことも問い質すこともしない。
ただ手の中にある紙を楽しそうに、うれしそうに眺めている。まるで日常の欠片をそこに見出したかのように。よく見れば、小さく目元に涙が滲んですらいるようだった。
それは、”雇用契約書”だ。連理貴久が山県義純と交わした条項がそれには書かれている。

「本当に、すばらしい。こんなこと、普通の人間なら当然に考える事がここでは考えられていなかった。≪カラミティ・ブルータス≫のリーダーを知っているかい？　君と同じ学生の少女だ。
そう、彼女が考えられないのならば僕達が考えなくてはならなかったのに。未だ考えるべきではないと言い訳をしていた。その結果が彼女と僕達のなぁなぁの関係。戦闘時に連携は取れていても日常での不協和が結局は一方的な関係を生み、彼女のために人間が死んでいく歪な構造を生み出した。
だからこそ、連理さんは、タカぼんさんはすごい」

「タカぼん、さん？　あの、本気で？」

渾名にさん付けなんて歪なもの。私や≪法の剣≫の幹部たちのように既に逆らえないと思っている人間だけだと思っていたのに。

すんなりと、山県さんはそれをしていた。

「ん、ああ、入るって決めてから自然と敬語で話してしまう、んだよね。年下で、まだ学生らしいのに……。なんだか敵わないな」

「でも、その契約が守られるとは……」

そう、ただの紙なのだ。山県さんには悪いが、なんの力もない。タカぼんさんに契約書を守らせる力を山県さんは持っていないのだ。

「守られるよ。というより、タカぼんさんがこの紙を使う限り、守らざるを得ない」

何故？　断言した山県さんは契約書の隅にあるものを私に示す。

「こんなものまで用意してみせるんだよ≪法の剣≫は。≪カラミティ・ブルータス≫が取り残された理由がわかるね」

それは、≪法の剣≫がこの契約を執り行わせることを保証する記述だった。

よくよく見れば紙自体にも仕掛けがなされている。透かしてみると、≪法の剣≫のエンブレムが浮かび上がるのだ。

いつの間にこんなものを用意していたのか、呆然とそれを見てしまう。

「さっきもちらっと言ったと思うけど、≪カラミティ・ブルータス≫は昼間は施設のほとんどに立ち入れないんだよ。≪法の剣≫の武

力によって」

それが意味することをそれを想像する。都市の法を≪法の剣≫が自ら作り、守らせることの意味を。

「そして、軍施設に至っては昼だろうが夜だろうが立ち入ることすら許されない。例外はあの塔だけ。それの意味するところを君は理解できるかい。”内藤”さん？」

彼らは塔に入るしかなかった。そういう状況に≪法の剣≫は追い込むことができた。

考える。考える。考える。そして、山県さんは構わず語り続けている。

「しかし、驚くべきはタカぼんさんだ。彼は、そんな巨大に強大に成長した≪法の剣≫と対等に、同等に行動している。今日も驚いたよ。この僕が、白昼から堂々と街を歩けたんだから。タカぼんさんが隣にいるというだけで」

その様は簡単に想像できた。おっかなびっくり歩く彼を堂々と連れまわす様など、いつかの私に彼を重ねてしまうだけでいい。

そのタカぼんさんは≪法の剣≫に山県さんが正式に加入したことを伝えに行っていた。これでブラックリスト化を解き、≪法の剣≫によって、立ち入りを規制されていた施設を利用可能にするのだとか。

私が思っていたよりも≪法の剣≫はこの街を熟知しているようだった。それに、それを占有するための手法までも。

「それにしても、一体どうやってここまで影響力をタカぼんさんは持ったのか。それにそれを維持することも」

それは――

「情報を、塔に関する情報を売りつけてるんだと思います」

たぶん、それ以外にも何らかの取引があるはずだけど、それはわからなかった。考えてみるとタカぼんさんについて、私は何も知らない。相手が自分を知る以上に、私は何も知らないのだ。

「それは例えば？」

「敵の情報。売却できるもの。武器、戦術、敵の拠点の種類、施設の利用方法に、あとは、ＩＤ」

「ＩＤ？」

タカぼんさんから仲間になることを直接聞いているなら話しても構わないだろう。

端末を取り出して武器屋のカタログを表示する。そして二階ボス、≪雌雄の区別のない巨大鳥≫から手に入れたＩＤで開放された情報を見せた。

状態異常武器、状態異常耐性防具。その、今後の探索は必須になるだろうカタログを。

山県さんは最初それを珍しそうな顔で見ていた。けど、次第に顔色が変わっていく。

焦りにも似た怒りの表情。

それは、私がＩＤについて知ったときのものと一緒だった。

「ば、馬鹿なッ？！　な、なんでこんなッ！！　こんな落とし穴がッ！！　属性？！　状態？！　……機械人はッ、僕達をなんだとッ！！　いや、そうか、だからタカぼんさんは……」

山県さんの言葉に疑問を覚えながらも、入手の仕方すら悪意に満ちていたものだったのだと話していく。例えば、二階層のボスについては、やはり弱点属性を突かずに倒さなければ、炎上するか凍結するかしてＩＤの保管されていたメモリーが破壊されたであろうことを。もちろん電撃や暗黒など使ってはいけない。確実になんの属性もついていない武器で殺害しなければならなかったのだ。

……時々、思う。どうしてあの人は、あんな土壇場でそれを達成できたのか。ほとんど全ての武器を使うなといわれているときに、どうしてあんなことを可能にしたのか。

私は、とんでもない人物の下にいるのではないかと――

私の説明を聞いていた山県さんがため息をつきながら小さくつぶやいた。呆然としているから、私に向けていった言葉ではないと思うけれど。

「これでは、僕は、僕達は、ただ遊び場を与えられて喜んでいただけの子供じゃないか。何も考えずに、確かに、この組織が何故≪法の剣≫と同盟を組めているのは疑問だったけど。この、圧倒的なまでの大差はッ……。リーダーの差だけじゃなくて、そもそもが次元の違う――」

そう。こんな、まるで答えをはじめから知ってるように動く人間が存在すること自体が――

考えてはいけないことを考えかけ、思考に蓋をする。それは、その考えだけはいけない気がした。

それに、そもそもがどうして私だったのだろうか。

どうして、神崎君や、武満法行や、山県義純ではなく、どうして、南雲・アーリアライト・美咲をあの人は選んだのか。私以外ならば、上に行く手段などいくらでももっと効率よく得られたのではないだろうか。

いえ、そもそもがあの人に他の人間など必要はない。私がいなく

てもあの人はそれだけのことができていた。むしろ私がいることで行動が遅くなっているという現実もある。私を納得させること。納得させなくてはいけないということ、あの人が拘っているそれがなければ、他人にどう思われるかは別としても、もっともっとたくさんのことをあの人はできたはずだった。

そして、その想像が正しくなくとも実行されていれば、

――連理貴久、忌々しい敵。勇者様の最大の……〝敵〟……

きっと、この都市に君臨していたのは、武満法行ではなくあの人だったのではないかと、そう思うのだ。

伍拾壱／

「何だ何だ、揃って仏頂面並べやがって」

手に紙袋を持ち、その中に入っている何かを食べながら入ってきたのはタカぼんさんだった。彼はもはや彼の付属品と化している二号と三号を伴い、室内へと入ってくる。

相も変わらず外見の変わらない肉の人形。武装で隠れているとはいえ、よくよく見れば不恰好な口に似た口と同じ機能を持つものがついているが、二階層を踏破した際の報奨金で購入したとされるそれから言葉が出てくることはない。あれは単純にパラメーターアップアイテムを食べさせるための口だからだ。

言葉を話させるには、言語を放つためのプログラムが必要だった。

「山県のブラックリストを解除してきたやったぞっと。で、喜べ。支給品をくれてやろう」

「支給品、ですか？」

支給品？

……今、この人は何を言ったのだろうか？

二日目に奪ってきたあれのことだろうか。考えるも、既にいくつかアイテムを使っていたはずだと思い直す。

そんなことを考える私には目もくれず、タカぼんさんは二号に持たせていた箱を私たちの前にある広いテーブルの上に置かせていた。

見れば山県さんも疑問を隠しきれていない様子だ。ポーションひとつすら高価すぎてまともに買えないこの都市で、武具、薬品、探索道具などのアイテムを他人に支給できるということの意味を、クレジットを稼ぐことすらできなかった彼は、きっと私より知っているに違いないのだから。

「そう、支給品。支給品だよ。揃えたんだよわざわざ。

まず、ＩＤ入力済みの端末だろ。次に武器。剣と銃だが、武器に好みがあるなら言ってくれ。それと防具に、もともとの支給品とは別に探索用の道具。こいつは、戦闘に不慣れな山県には必要ないとは思うがな。

後は、ほら、これ」

ごとり、と置かれた透明なケース。

それを見た山県さんの表情が変わる。……私も、ここまでタカぼんさんがするとは思わなかった。

今日知り合ったばかりの彼にここまで？

透明なケースを見る。

それに入っているものは、果物のように見えるドーピングアイテムの詰め合わせだ。

「パラメーターアップアイテムッ？！　た、タカぼんさん？！」

「……い、いやいや、タカぼんさん。しょ、正気かいッ？！　自分

で言うのもなんだけど、どうして新参にここまでできるッ?!」

言われたタカぼんさんはきょとんとした顔でそれを見る。別に不思議でもなんでもないみたいな顔をしながら。

気付く、本当に惜しくないのだ。この人からしてみれば。

「出し渋るものでもないだろ。第一、これ1UPアイテムだぞ。＋10は流石に多くは用意できなかったからな。すまんな」

「と、とんでもないッ。お願いして入れてもらった僕にここまでしてくださってありがとうございますッ!!」

「それと、希望があれば＋10もひとつだけ用意しよう。上げたいパラメーターの希望もあれば言ってくれ。1UPを一日二個ずつ支給する予定だからな」

あまりの待遇に絶句する山県さん。私も眩暈を感じるくらいだった。

そう、タカぼんさんは、連理貴久は別にこの闘争の主催者というわけではない。アイテムを生産しているわけでも、大量に購入できるだけの資金を有しているわけでもない。

タカぼんさんも集められた被害者側であるはずだったのに。たったの六日でここまで他と差をつけている。他の参加者を雇い、彼らの衣食住を保証し、給料を渡し、武器を持たせ、指示をする側に回っている。

気付く。先ほどの書類を思い出す。

ああ、山県義純と連理貴久は協力関係なのではない。

雇用関係なのだった。

山県さんがタカぼんさんに敬語を使うのもなんとなくわかってきた。彼は、連理貴久に解雇されることを恐れている。彼の機嫌を損なうことを酷く恐れている。≪法の剣≫に反逆していた彼が、従っている。

形容のできない、凄まじい力を持つタカぼんさんには普段の行いから好感を持つと同時に、今回のことで、胸の奥から奇妙な怖気が溢れてくる。

これは、いつものそれではなく、私が父に感じたものと同じものだった。

圧倒的な、支配を常とする者を見るときに感じる感情。

ああ、でも――

保護すると称し、搾取する側に回っている≪法の剣≫。彼らはこの都市に暴力を持って法律を作り、タカぼんさんは彼らを利用しながら財を作った。そして、彼ら≪法の剣≫と覇王の塔に追い詰められた参加者を、参加者本人から頼まれる形で雇用するに至っている。

気付く。

まるで、≪法の剣≫とタカぼんさんは連携でもしているかのように……。いや、事実連携しているのだ。

恋心や憎悪ではもはや誤魔化せない事実に気付き、私は愕然とする。

怖気の正体はこれだったのだ。

そもそもが、タカぼんさんは≪法の剣≫を嫌っていた筈では？

いや、違う、当初は信頼できないから別に行動を取れるようにしようと言っていたはずだ。それが≪法の剣≫の作り出した書類を使うようになり、彼らから情報を代価にパラメーターアップアイテムを大量に手に入れている。

この人は、何を考えているのか？

≪法の剣≫の思うとおりに動いているわけではない。タカぼんさんは、自由に動いているはずだった。いや、そもそもがどうして私たちが≪法の剣≫に攻撃目標にされていないのかも疑問なのだ。

タカぼんさんがやり手というだけでは誤魔化せない事実。≪法の剣≫が本気で動けば、タカぼんさんと同じ成果を得られた？　それ

はない。ＩＤについては確実にタカぼんさんでなければ手に入らなかった。あんな罠に気付ける人間はそういない。しかし、直面して初めて得られるその評価を≪法の剣≫が最初から持つことができただろうか？

そう、そうなると同盟関係というのはただの表向きで、実は私たちは≪法の剣≫の目的のために動かされているのではないのかとすら――

「あの、タカぼんさん」

疑念が口を動かしていた。彼は相変わらずの見透かしたような目で私を見る。彼から何かを聞きだそうとすると、そんな感覚に囚われる事があるのだ。彼に心を読む力があるわけでもないのに。

「なんだ？　なにか疑問でもあるのか？　どうして俺が支給する側に回っているのか、なんて」

「それもありますが。その……、私たちは≪法の剣≫とは別の組織、……チームですよね？」

きょとん、とした目をするタカぼんさん。山県さんも、いや、山県さんは私を不思議そうに見ていた。どうしてそんなことを急に言い出すのかという目だった。

タカぼんさんは少しだけ考え込む仕草を見せると、納得したように頷いた。

「ああ、なるほどな。山県との契約書を見たのか。うん、なるほどなるほど。確かに≪法の剣≫と連携しているように内藤にも見えるんだろうな」

それは、連携していないという意味だろうか。

言外の否定を期待してみるものの、私の期待にやはり気付いてたタカぼんさんは、ここではっきりとそれを口にした。

「悪いが、連携はしている。それが今は最も効率が良いし、そうしないといけない理由があるからな」

「……ッ。なんで、」

「黙っていたか、か？」

先に言われるも頷くことで先を促せば、反省の色も見せない表情で彼はそれを口にした。

「言ったら、納得したか？　話そうが、話すまいが俺はやったぞ？」

「それでもッ。一緒に行動しているなら話すべきだったと思いますッ。私たちは仲間じゃなかったんですかッ！！」

私の怒声にきょとん、とした表情のタカぼんさんはくっく、と嗤っている。

「くく、悪い。今のはからかっただけだよ。それに、きちんと話してたぜ。内藤が気付いていなかっただけで、な。……しかし、十分以上に遅すぎる、か」

「……？」

話して、た？　そう、だ。確かに同盟を結んでいて連携を結んでいなかったわけがないのに、それに、タカぼんさんは交渉でアイテムを入手していることも私には隠していなかった。それ、なのに、私は……。

――……連理、貴久。気付いているの？　やっぱり、あなどれない男。

思考が、まとまらない。タカぼんさんが今、一瞬、冷たい目で私を見ていたようだったけど。気のせいなのか、すぐに明るい顔で私の頭を撫でてくれる。

「心配するな。≪法の剣≫と俺の組織は同じ目的を持ってるだけで、きちんと独立したそれぞれ別の組織だよ。ないと思うが、対立も可能だぞ。

……対立。対立、ねぇ。それも面白そうだが……」

「ちょ、ちょっと待つんだタカぼんさん。僕は反対だよ、≪法の剣≫と敵対するのは」

「あはは。山県、そう反応するな。冗談だよ冗談。なぁ、内藤。俺と≪法の剣≫は今までずっと親密だったよな？」

頭を撫でられていることで疑念に支配されていた思考が戻ってくる。そうして私は思い出したようにやっといえるのだ。

「あッ、はい。そう、ですね」

と。

伍拾弐／

「さて、話がずれたが、支給品に戻るぞ。内藤、お前にもこれは支給しとくから、平日は着とけよ。休日は着なくてもいいが」

机の上に出されたのは、見たことのないエンブレムの入った服一式だった。山県さんの支給品の中に入っていたものと同じ服のようで、これも二号が抱えてきたもののようだった。複数枚、いや、そ

れ以上にあるようで十数枚ぐらいはありそうである。

「昨日、≪法の剣≫とも話し合ったんだが。
明日から新しい連中が入ってくるようだし、お互いの所属をはっきりさせるべきだという意見が出てな。俺も同意して、それの手段として、様式を用意することになった」

「それで、制服、というわけかい？　短時間によく作ったね。
ああ、書類を書いた後に採寸したのはこのためかな？」

山県さんが自分の支給品の中に入っていた服を取り出し、サイズを見ている。
制服の山に目を向ければ確かに、いろいろサイズがあるようだった。
自分に合うサイズを探し、手にとって見る。

「用意できたのはインナーとシャツ、後は上衣だとか下衣だとかいろいろ、ああ、靴もあるし、ネクタイに、とりあえず一式作ったから。ほれ、帽子もあるぞ。
あとこれだな。制服は戦闘にまだ適さないから塔の中じゃ着れないが、これは身につけておくように。ほれ、内藤も」

「……バッジ、ですか？」

「うちのな。≪法の剣≫も自分とこのを持ってる。こいつが重要なのは、暗号化した信号を放つ発信機が仕込んであることだ。
その信号を受信して、俺たちと≪法の剣≫の使っているレーダーに所属が表示されるようになってる。敵に見つかる可能性も増えるが、そういった隠密行動の際はバッジの電源切ればいいし、とにかく同士討ちを防ぐための措置のひとつだ。誤解が発生してもこれを見せるだけで戦闘は収まるようになる」

「すごいな。しかし、これだけのアイテムをどうやって用意したんだい？」

「そればっか聞きたがるなぁ、メガネは」
「め、メガネって」

くく、と笑うタカぼんさんに困った顔をした山県さん。既に上下関係の作られてしまった二人。それでも山県さんは悪くなさそうな顔をしている。

暴言の許される人、か。

好意と嫌悪の天秤。確かに私も好意に大分傾いているのは自覚しているけれど。

「紡績工場だのなんだのと≪法の剣≫が俺たちにも使える施設を発見してな。試作品を作るってことでねじ込んできた。実質タダだな」

話の合間に机の上に置いた袋から何かを取り出して食べていたタカぼんさんは、三号が差し出したジャケットの包装を破くと、その中のそれを羽織った。

そうしてくるっと回ってみせる。その際に、ジャケットの背中に大きく刺繍されたものに目が移った。

さっき渡されたバッジにもあったエンブレム。龍の頭に振り下ろされるメイスの図。

「それじゃあ、私たちの組織名も決まったんですか？」
「ん……、ああ、せっつかれてたし。お前も意見出さなかったしな。適当なのねじ込んどいた」

どうでもよさそうに言われるものの。うッ、と気まずくなって顔を逸らしてしまった。

いえ、ちゃんと考えてたんですよ。考えてたんですけどね。

（趣味がばれるみたいで、は、恥ずかしかったし）

有名なＲＰＧの主人公チームの名前とか、そういうのばっかり浮かんだのだ。はぁ、いえ、きっとタカぼんさんは気にしないんだろうけど。

「それで、どんな名前なんだい？」

ぼけっとしてる間に山県さんが聞いちゃってるし。

「≪支配の杖≫。意味は悪心を打倒する知恵の杖って意味だな。ま、こっちでも元の世界でのモラルを忘れないようにがんばっていきましょー的な組織にしようってことで」

言われてエンブレムを見る。確か西洋だと龍はそういった悪いものの象徴として描かれることが多かったらしいけど。

杖は……。いや、考えすぎか。

「の、割には余りにも東洋的な竜ですよね。エンブレムの」

「ん、ああ、デザイン頼んだのが元暴走族の兄ちゃんでな。竜っていったらこれっしょ、ってやられてな。俺もこだわりなかったし、いいかなって」

「なんでもいいけど。それで、コレを貰えるのかい？」

「ああ。あ、そうだ。山県、当分お前内勤な。とりあえずでいいが、何かやりたい仕事あるか？　内勤で、だが」

「何、っていうと？」

「交渉、人事、経理は当分俺がやるから。そうだな、情報収集とスカウトだな。ああ、内藤、明日はお前も街でスカウトを頼む。俺もちょっと仕事あるしな」

「わかりました。けど、仕事ですか？」

「そ、仕事。≪法の剣≫の連中に稽古つけてやんの。ほぼ全部用意

させたからな。代価って奴だ」

そういってポリポリとお菓子らしきものを食べるタカぼんさんが示したのは山県さんの支給品だった。もちろんそれにはパラメータUPアイテムも含まれている。

……用意、させた？

「それに明日は新しく人間が入ってくるからな。多少は血の臭いが必要だ。だいたいの囲い込みは≪法の剣≫が行う。それから漏れた連中を狙え。多少はクズ石が混じっても構わんが、優秀な奴を狙えよ」

「その時点で協調性がなさそうだけどね」

「山県。どうして俺がここを会社みたいな形式にしたと思ってる？雑多な衣服より統一された制服。ないルールよりあるルール。お前の持ってる契約書もその一環だ。いいか、まずは型に嵌めろ。嵌らない奴は俺が追い出す」

「それで、かい。≪法の剣≫が今まで動かなかったのは」

……え、？

山県さんの言葉に疑問を覚える間もなく、タカぼんさんはうれしそうに手を叩いた。

「そうだ。よく気づいたな。そう、≪法の剣≫が今まで動かなかった理由はそれだよ。パラメーターを安全域にまであげたいなんて思惑もあったがな。一番はそっちだ。

次が来るまでに組織を磐石にする。契約書しかり、制服しかり。俺はその結果だけ貰ってきたわけだ」

初耳だった。いや、あのときはとりあえずの同盟だけが正式に決まっていて、段々とその骨子を練っていった？

その変異を私が見逃していた、だけ？
確かに、安全をとるためとはいえ、一週間も塔に行かないのはおかしいとは思ったけど。余りにも私たちに都合が良いとは考えられたけど。
裏が、あったんだ。
思えばタカぼんさんの行動には裏ばかりな気がする。
私に説明してくれたことと、その実態がかけ離れすぎて、失望のようなものをタカぼんさんに覚えてしまう。
今までのは全て嘘だったんですか、と。耳触りの良いことばかり言っていたんですか、と。
先ほどの疑問がぶり返してくる。

「さっきの仕事も、裏があるんですか？」

少しばかり拗ねた気持ちで言った言葉に対して、タカぼんさんは罪悪感など一切浮かんでいない、楽しそうな顔をする。

「んー？　裏か？　あると思うか？」

言われて、拗ねた気分を棚に上げて考えて見る。
タカぼんさんがわざわざ出なければならない理由。そう、スカウトならば私たちよりもタカぼんさんの方が上手くできるはずなのだ。
だったら、何を……？

「えっと、裏、ですよね？」
「ないかもしれないぞ。単純な話で本当に支給品の代価を払っているのかもしれないしな。
って、はは、そうむくれるな。そうだな。ヒントは、何も仕事だけを見れば俺だけが与えているわけではない、ということかな」

考える。ヒント、ヒント、ヒント……。あ、そういうことか。

でも、頭に浮かんだ考えを言う前に、山県さんが答えてしまっていた。

「集団戦のノウハウかな？　塔の敵に有効な」

うー、と山県さんをにらんで見るが、山県さんはこちらには一切注意を向けず、タカぼんさんはタカぼんさんで私を見ずに、山県さんを見て、うんうんとうなずいている。

「そう。戦闘のノウハウを与える代わりに集団戦のノウハウを引き出してくるわけだ。こっちでモンスター相手に戦術を練るにも、まずは士気と錬度の高い集団が戦術を使って、どれだけの効率を出せるかのデータが欲しいからな。

それに、あっちの戦闘班に顔と実績を売っておくことも悪いことじゃない。これぱっかりは風評や交渉でどうにかできるもんでもないし」

これらは俺じゃないと判断も行動もできないだろう、とタカぼんさんは言う。

確かに、戦闘指揮についてはタカぼんさんに任せるしかない部分もあった。私は戦えるけれど、それはあくまでタカぼんさんに指示されての結果だ。もし単独で塔の敵と戦えるかといわれれば首を傾げてしまう。いや、戦えることは戦えるけれど、ほかに人がいる状況で被害を抑えながら確実に敵を倒すとなるとまた別の能力が必要だ。

私にその能力があるかないかと聞かれれば、もちろん、”なかった”。

「そういうわけで今後は合同訓練の予定も立ててる。……それで、

話は戻すが、裏があると仮定した上で、この一週間はどんな意味を持っていたと思う？」
「意味、ですか？」
「ああ、内藤。ちょっと深く考えて見て見ろ」
考えてなかったかのように言われると腹も立つが、確かに今までが盲目的すぎたのかもしれない。
しかし、ただ考えてみろと言われても。少し頭を捻ってみるが出てくるのは益体もない想像ばかりだ。
タカぼんさんはその反応をわかっていたとばかりに苦笑している。
「少し範囲が広すぎたか。そうだな、内藤は司令部に自爆装置があることを知ってただろう。そのとき≪法の剣≫は何を調べていた？」
「確か、物資の流通についてでしたよね」
その言葉に黙って私たちの会話を聞いていた山県さんが反応する。
「流通？　そんなことを……。あ、≪法の剣≫はつまり」
「ま、待ってください。私が考えてるんですから」
「あ？　ああ、ごめんごめん」
山県さんが私を見て、苦笑しながら口にチャックを掛けるポーズをするが、一瞥して思考に入る。
物資……？　流通？　施設についてで。つまりは、……ああ、そういうことか。
「脱出の可能性ですか？」
「そう。それだ」
タカぼんさんは、ポンと手を叩き、正解だ、と言った。

「どうして直接、塔の探索に脱出の目を見るのか？　脅されて、餌をチラつかされて、追い込まれて、理由はさまざまだろう。だが、まずはここを、足元を探るべきではないのか？　それでから、しぶしぶ、仕方なく塔の探索をするべきではないのか？　とな。

組織力のある≪法の剣≫が街全体の探索を、肉人形なんて戦闘に特化した装備を持つ俺たちが最低限の塔の探索を。

現実にあるタイムリミットを刷り合わせた結果、≪法の剣≫単体なら三日程度だった猶予を一週間まで伸ばした」

嗚呼、さんざん≪法の剣≫への情報提供を行ってきた理由が、嫌に気前の良かった≪法の剣≫が重なっていく。

最初から、決まっていたんだ。

「どうして、話してくれなかったんですか？」

「内藤がどちらに適正があるか見たかっただけだ。別に気付こうが気付くまいが俺の内藤に対する姿勢は変わらないから安心しろ」

「……随分、呆気なくバラしてくれますね」

「そう怒るな。だから情報提供にせよ何にせよ。表向きの理屈を並べてやっただろう？　お前が納得するまで」

……そういう問題じゃない。

私が、いつもそうやって説明されて、信じて。でも、それは違った。

裏切り……。裏切りだと、思う。この人はこんなにも悪びれもなく言うから騙されそうになるが、やっていることは裏切りなのだ。

「内藤、お前には期待しているんだ」

ビクっと身体が震えた。

恐怖ではない、憎悪でもない、覇気と期待の篭った声だった。
多くの人間を従わせてきた人間が発する声だった。
そして、その言葉こそが――

「期待しているからこそ最初に騙すんだよ。試金石だ。ああ、山県ほどじゃないが、お前は賢い。1を聞いて10を理解しなくとも5は理解できる才能がある。
だがな、俺が買っているのはお前の頭脳じゃないんだ。
普通の人間ならば俺に不信感を抱いた時点で邪魔(ヨコシ)な考えを抱く。
そこにあるのは己の利益を目指す邪悪だ。
だがお前は違う。お前が今、抱いている考えは俺を糺(タダ)すことだけだ。俺が裏切ったから復讐してやろうとか奪ってやろうとかそういった考えなど微塵もない。
お前は、俺が正しくあることを望んでいる。騙されても恨むことなく、俺が正しく行動することを望んでいる。
その美しさこそが俺がお前を買ってる理由だ」

たまに傾きすぎて余人を蔑ろにすることもあるがな。とタカぼんさんは笑っている。
なぁ、と彼は言う。

「お前はこの組織の良心になれ」

真摯な目だった。本心から言っているのだと信じられるぐらいに。
そして、と彼は続ける。

「お前の心が俺の傍らにいる限り、俺が本当の意味でお前を裏切ることはないと約束してやる。
お前の目がある限り、俺はお前が思う非道だけは働かないと誓ってやろう。なぁ？　内藤。

満か？」

息を吸った。吐いた。不思議と困惑と緊張だけが流れていった。

自然と今の気持ちが出る。

「不満です」

タカぼんさんは笑っている。

「そうか」

気持ちを吐き出す。

「また、騙すんですよね」

「そうだな。騙すだろうな」

簡単に言われる。

「裏切るんですよね」

「結果的には」

ため息が出た。どうしてこんな人に好意を持ったのかわからなかった。それでも、この人の根本は変わっていない。

この人は私に考えさせてくれる。過程を私が選び取ることを許している。

それだけは変わっていないのだ。いや、元々そうだったことに今更私が気付いたのだ。

連理貴久は、私に考える余裕を、選択する余地を与えてくれていた。
その上で、また私に選択肢を与えていた。
私が彼を選ぶか選ばないかを。

「私は必要ですか？」
「大いに。人間にはブレーキが必要だ」
「ふふ。ブレーキですか」

笑みが零れる。きっとそんなことは関係ないだろうに。それでもきっと、この人は私が、私の定める良心に則っている限りは最後の決定的な部分を行わないのだと信じられた。
不思議と、それだけは本当なのだと。何故だか信じられたのだ。
だから。

「ついていきますよ。
ええ、きちんと裏の裏まで読んで、その上で貴方に納得すればいいんでしょう？
覚悟してくださいね。私はこれでも賢いんですから」

そういった瞬間に、胸の奥から言葉が溢れた。
いつもと違い、私を惑わせるような強い感情のない。ただただ情愛に満ちた声が。

——覚悟しておきなさい。目の前の男は決定的な場面で必ず貴方を裏切る。
それこそが最上だと信じるが故に。

選択肢。
いつかきっと思い出す場面。

私はそのときになって思い知るのだ。
連理貴久が南雲・アーリアライト・美咲に課した選択の意味を、

『観測結果によって箱の中の猫の生死が決定するのならば。
事実を知るものは猫の生死を決して語ってはならない』

いつか誰もに囁かれるその言葉と共に。

【【寄生】の持つスキル【疑心】が抑制されます。スキル【思考妨害】が抑制されます】

伍拾参／

「話は終わったかい？」

山県さんに遠慮したように話しかけられ、私とタカぼんさんの間になんともいえない間が……。
と思っていたのは私だけだったようで。タカぼんさんはなんでもないように手元の袋に手を突っ込んで何がしかを食べている。

「そういえば、さっきから何食べてるんですか？」
「ん、食うか？　≪法の剣≫の保育所の保育士の姉ちゃんに貰ったんだが、あそこの子供たちと三時のおやつに作ったんだとさ」
「はぁ、いただきます」
「僕も貰うよ」

頂けたのはよかったけれど、もそもそとしていて味がない。スナック菓子に似てはいるが、宿屋で手に入るお茶菓子とは雲泥の差だった。

「噂で聞いたけど、やっぱり≪法の剣≫は食糧の自給が出来ていないのかい？」

「そっちにクレジットを使ってる余裕はないだろうさ。塔の探索予定班や幹部、秘書課にはまともなものを食わせているらしいが、下はこんなものだ」

そうして目の前に置かれたスナック菓子の袋には『タカぼんさんがんばって』『タカ兄ちゃんガンバ』などとたくさんのメッセージが拙い字で書かれていた。

顔が広い……。いつ交流をしてるんだろう、この人は。

「話を戻すぞ。現実として都市からの脱出は出来ないことがわかった。この都市の周囲は砂漠だが１００キロほど行った辺りに都市を囲むように厳重な包囲が為されていたそうだ」

「包囲、ですか？」

情報を聞き出した時を思い出しているのだろうか、難しい顔でタカぼんさんは頷くと。

「こちらとあちらを分け隔てるように建っている切れ目の見えない透明な壁。それとその向こう側にある巨大なロボットの軍人、だそうだ。

壁は、上は果てが見えず横もまるで都市を覆うようにあり。巨人と称しても良いロボットの群れは機械文明人の兵士だな。それがズラっと、壁越しに揃っていたんだと」

想像力を働かせてその光景を頭に描いてみようとするが、どうにも想像がつかない。ロボットの軍人？　アニメとかで出てくる機械の兵士みたいなものだろうか？

それに、壁。都市を覆うよう？　私たちを逃がさないために……。

「壁越しに兵士。なんの冗談なんでしょうか？」

「さぁな。逃げないように、だろうが。いや、問題はこっちか……」

「まだ何かあるのかい？」

山県さんの声にも疲労感が漂っていた。一番最初の機械文明人による一方的な通告で、ここがそんな都合の良い世界ではないと理解できていたのだが。

「これで最後だよ。で、だ。問題というか、疑問というか、なんだが。

ここの天井は、絵、みたいなんだよな」

「絵？　映像だとか、そういうものではなく？」

「天井、ですか？」

私の疑問にはタカぼんさんではなく山県さんが答えてくれた。

彼は窓のカーテンを引いて、空が見えるようにすると、指を差す。

「内藤さん。ほら、窓からも見えるだろう。天井が」

「空？　……って、天井？！」

ドーム状と言えばいいだろうに、どうして天井などという狭く感じるような表現を使うのだろうか。この人たちは。

ていうか、空？　空が天井で絵？　言われて、よくよく見てみる。雲に、太陽に。あれ、普通の空じゃ、ない？

「雲、ぴくりとも動いてませんね」

「絵だからな」

思えば空なんかよく見ている暇がなかったけど、ところどころおかしかったような気もする。

「なるほど、それで絵ということかい」

「≪法の剣≫の調査では、大体上空３０００メートルあたりで絵にぶち当たったらしい。何か、ロケットのようなものにカメラをくくりつけたらわかったそうだが」

言われてみれば都市の調査でそんな集団を見かけたような覚えがあった。発射台のようなものを、軍司令部の駐車場でトラックに詰め込んでいた白衣の一団。彼らは結局、車に乗ってどこかに出かけていたが。

「≪法の剣≫には技術者がいるのかい？」

「まだ数十人程度だけどな。が、宇宙に行くのでもない、ただ真上に飛ばすだけのロケットなら資材と人手があれば作れるそうだ。クレジットさえあれば工場を動かす道具や工作機械も購入できるし、資材に不足もない」

それで、と続けていくタカぼんさん。今更だけどさらっとすごいことを言ってる気がする、この人。

「それで、上空の絵だが。午後三時、六時の間が夕日の絵。六時からが夜の絵だな。午前の……四時あたりから早朝の絵で九時ぐらいから昼の絵だそうだ」

「馬鹿にされてるんでしょうか？」

「さて、な。……本当に何を考えてるんだか」

やれやれとタカぼんさんはスナック菓子もどきの袋を手に取ると中身をぼりぼりと食べ始める。

「三号、食うか？　……二号も、食ってみ」

そうして口をあけた肉の塊へとポイポイと放り投げるタカぼんさん。

肉人形たちは口でキャッチするとぽりぽりと味わうように食べていく。

静かな時間が流れていく。報告は終わりなんだろうか。タカぼんさんを見るとリラックスしながらさきほどのように肉人形に餌を与えているし。ていうか、今更だけど肉人形の燃料って食事なんだろうか。まともに何かを食べているところは見なかったけど。

山県さんは……え？

「ちょ、ッ……何やってるんですか！！」

「はい？　制服に着替えようかと」

なんでもう半裸なのこの人？！

しかも下！！

「見えない見えてない見てない何も見てない！！」

「内藤は何言って？　ん、着替えか。ほれ、これ下着。一応」

「ありがとう。これは普通の物とは違いがあるのかな？」

「火炎攻撃で燃えない。仮に燃えても崩れ落ちるだけで肌に張り付かない。そういう仕様だ。ただの布や石油製品だと痛いぞ。ただれた皮膚に張り付くとな。はがす時に地獄の苦しみだ。の、前に普通なら死ぬけど。

ただパラメーターをアップしてると死ににくくなるからな」

「なるほど、隅々まで痛み入るね」

「良い良い、気にするな……で？」

うわぁん、と泣きながら私も制服と下着を手に部屋から出るのだった。
もうやだこの人達。

伍拾肆／

「それで何の話だ？　あの娘を追い出してまで」

制服のジャケットに袖を通している山県をじっと見る。
ちなみに俺も制服を着てみる。二人に渡した幹部用の制服とはまた違うデザインの、総帥服とでも言おうか。裾が長かったり、偉そうだったりする仕様だが。
デザインもそこそこ凝ってあって、≪法の剣≫にいたプロの服飾デザイナーに……。そういや、ある程度の人材は既にいるよなあそこ。千人も持ってくれば大体は揃うだろうが。
武満と見せ合いっこしたし。いや、興味ない振りしつつお互い自慢ばっかだったからあいつも同じ気質なんだろうが。自爆装置にも反応したし。

「通気性も中々、と。ああ、いや、一つだけだよ。
――機械帝国側は、もしかして塔を攻略しても僕達を外に出す気はないのでは」
「……よく理解したな。悉く俺以外の人間は無能だと思ってたが。
ああ、正解だ。どうにも塔内部とこの施設は協調が取れ過ぎている。そういうことも考えた方が良い程度にはな」
「ギャンブルは？」
「聞いたのか？　いや、これは確かだ。ギャンブルかどうかはわからなくなったが、我々、俺達に対して何か期待をしているのは確かだ。

ただ、金以外の物を賭けている可能性が……。まだ不確定だ。解ったら教えよう」

「感謝するよ。

それにしてもタカぼんさんは、何か起業経験とかあるのかい？」

言っても問題ないが、なんだ？　含みのあるような視線で見られてるような気がしないでもないが。

「んー、……悪の総帥を一時（イットキ）」

言ってみるが。結果、ぽかん、とした顔の山県を見ることになる。

忘れろ、と手を振り促す。

「悪の、総帥」

「ほら、そりゃいいから。それ着たら≪法の剣≫に挨拶に行くぞ。明日は俺も別行動だし、スカウト部隊の隊長に顔見せだ。

ついでに飲み会開かせるから飲んで来い」

「あ、うん。会費は？」

「払わなくていい。≪支配の杖≫から三十万クレジット分出しとくから。あと、内藤も連れて行くからな」

ちなみにこの宿屋は一日１０００クレジットで三食食える。稼げる身分になれば自分ひとり食べるのはそんなに高いものでもない。

「さ、三十万ッ？！　どこからそんなクレジットを？！」

「あーあー、気にするな。クレジットを直接払うわけじゃないから。というか、それじゃ相手も受け取らん。

だから食料品で直接ってこと。食料品は手に入りやすいんだよ」

「うん？　えっと、どういうことなのかな？」

「つまりだな――

普通に初日や二日目は気付かなかったが、ゴブリンの死体などの肉の交換方法である。

これは普通に”軍司令部”で売るよりもこういった宿屋やホテル、肉屋などの肉部位を扱っている施設で売ったほうが単純なレートが高いのだ。

謎な話であるが、別に肉料理にゴブリン肉が入っているわけでもないし。遊びのひとつなんだろうが。下手にここがゲームっぽい世界だと信じていると全て買値の半額で売れるなんていう変なルールに惑わされ、気付かないような仕様だった。

頭の痛い話であるが、≪法の剣≫が本格的に動き出したら、適当に言い含めてその辺りのレート表を作らせなければならないだろう。今のうちから対価を用意しなければならないが。ううむ、地下通路のネタや塔の内部で”絶対に踏み入れてはならない部屋”の情報。ああ、モンスターの墓場などのことである。あの大蛇も含め、レベルが圧倒的に違う生物がどうやら階層ごとに一体はいるようであるし。

二階にいた、黄金色に輝く巨大鳥を思い出す。塔内の監視カメラの制御室で確認しただけだが、おそらく、接触したら確実に死ぬ部類の敵だ。

探索して手に入れた情報から判明した名前を思い出す。

個体名”落葉の始祖鳥”、一階層の”骨を吐く蛇”と同じく、死体処理係と考えていいのだろうか？

モンスターの死体を回収していた鳥を思い出し、役割を考えるも、今はまだ何もわからない。

しかし、あれクラスよりも強力な存在が、塔の頂上の将軍と考えれば、……はてさて勇者どもが本格的に覚醒したらどんなものになるのだか。

今のところはそういった情報での交換でどうにでもなるだろうが。やはりこの程度の情報は自前で揃えたいもんだ。交換材料とてそれ

ほど余っているわけでもないのだし。
ただそこまで内藤も山県も便利使いできる状態じゃない。この情報収集も都市の規模を考えれば一日でできるわけでもない。カテゴリごとにアイテムを持っていき、売値を確かめるなんてガキでもできそうな仕事でも規模と店の数が違う。何よりガイドに載ってるような武器防具雑貨屋だけじゃない、居住区近くにある嗜好品類を売る店や、そもそもガイドに載っていない店も確認しなければならないんだ。車やバイクを貸しても山県や内藤一人で回りきれるような量ではない。
この糞忙しい時期にそれほど優先度の高くないことに少ない人員を回せるわけがなかった。
そう、優先度から考えれば山県にはやってもらうことは多いし、内藤からは、あまり目を離せるものでもないのだ。
ここまで考えればやはりここは≪法の剣≫の組織力に頼るしかないという結論に落ち着く。
ただ、ここでの売値なんてものはそれほど重要じゃない。確かに軍施設と宿屋での肉の売却額のレートは１０倍違うが。それにしたって宿屋では直接クレジットに換えられるわけではないのだ。
そう、宿屋などの施設の場合は、肉類を売却→ポイントに交換→そのポイントと食料品を交換→手元に来る、というプロセスになる。利点として食料品を直接クレジットで購入するより１０倍安く購入できるし、ポイントはどの食料品店でも扱えるが、食料や雑貨以外には交換できないのだ。そして、≪支配の杖≫はそこまで大量の食料や雑貨を必要とはしていない。
とはいえ必要としている勢力は確実にいるわけだし、ああ、この情報でいいや。生命線のひとつである以上は適当に値段を吊り上げて店マップとそのレートとの交換もできるだろう。湯水のように使っているとはいえ、わざわざアイテムを売却するほど連中はクレジットに困ってはいまい。だから食料品店のシステムを理解……。ああ、バイトを送ってるか。武満の性格を考えれば、既にいくらかの

調査は行っているだろうし。
溜息が出る。都市の情報で奴と張り合うべきではないな。とりあえず、……塔の情報でなんとかすべきだろう。
このアドバンテージはまだまだ譲れないか。

「タカぼんさん、どうしたんだい？」
「ああ、なんでもない。益体もないことを考えていただけだ。それで納得できたか？」

先ほどの思考の食料品部分だけを山県に聞かせていたのだ。

「うん。食料品は安く手に入るんだね。僕達はそれにも気付かなかったかな。
というより、そもそもがモンスターの所持品は奪っても肉まで獲ろうとは考えなかったからね」
「その辺りはデータが必要だ。端末かモンスターに関する情報がなきゃそもそも売却するなんて発想には至らんだろうさ」

そもそも前例やデータもなしにモンスターであろうと人型の生物を切り売りするという思想を日本人は持たないだろう。猿を食う文化圏の出身ならば違うんだろうが。日本じゃ猿食わんしな。

「しかし、店売りでも売却する場所で値段が違うってのはな。盲点ではあったんだよ、ここはいつでもどこでもなんでも店は買い取ってくれる。武器屋では肉を売れるし、道具屋じゃ軍事情報が売れる、が、だ。それがどこでも適正ってわけではないんだと、どうして最初に気付かなかったのかっていうのはあるな」
「それは、仕方がないとは思うけど。今の時点で気付いてる方がおかしいんじゃないかい？」

山県が言ってくれるが、いまさらながらに堕落した結果がここまで俺の能力を落としていたことを痛感させられるのだ。武満に独走を許したのもそうだが、如何にあれが英雄の一部とはいえ、内藤一人を完全に従属させられないことが全てを証明していた。

（主要とはいえ、もうちょっと上手くできないもんか。ガチガチに硬い壁を殴ってる気分だ）

表面上はどろどろに溶けているように見えても、その内奥をアレは俺に見せていなかった。

心は開いている。しかし、本当の本心を聞くことができていない。

そんな状態は、支配したとは言えないのだが。

支配。支配か。当初に思っていた自分と今の自分では乖離し過ぎてきたか？

否、そうでなければ生き残れないだろう。

（とりあえずは制服と制度で気構えを英雄から人間寄りにできりゃいいんだが……）

如何な強者とはいえ組織に組み込んでしまえば情実や利害に縛られる、絡め手も使い、落としていくのが確実だ。

「話を戻そう。武満には先のブラックリスト解除のときに話だけは通してある。用意してある食料は」

言おうとしたところで音を立ててドアが開かれる。

慌てたように駆け込んできたのは用意した制服に身を包んだ内藤だった。

「た、タカぼんさん！！　なんか≪法の剣≫の人たちがたくさん来

たんですけどッ？！」
「来たか、通してやれ」
窓の外をちらりと見れば眼下には数台のトラックとそこから出てくる人の姿が見えた。

伍拾伍／

「どうも連理さん。本日は食料の件、感謝致します」
黒背広二名を連れ、うちの執務室兼客室兼会議室兼遊技場及び倉庫に入ってきたのは精悍な顔つきをしたガタイの良い男で、何もしてなくても全身から剣呑な雰囲気を醸し出している。
確か、武満の部下で≪法の剣≫戦闘部隊の隊長を務める男だ。
それがゆっくりと俺の前で頭を下げている。

「ああ、いい、いい。そう畏まるな。うちの新人加入記念兼≪支配の杖≫結成記念パーティーをやろうってんだがな。目出度い出来事を自分達だけで独占するのはどうかと思うんだよな。
それにこっちもこれからは世話になることが多いだろう。仲良くやっていこうや。あと、タカぼんでいい」
「はい。タカぼんさん。ああ、この方が新人の方ですね。アタシは戦闘部隊のリーダーをやらせてもらってる鹿島というもんです。
よろしくお願い致します」
「は、はは。山県です。よ、よろしくお願いするよ」

ごついハンサムなオッサンに頭を下げられ、ビビってる山県を横目に、鹿島を見る。
胸の辺りにエンブレムの刺繍されているだけの黒背広とは違い、

幹部用の、工場で生産された白背広を着ている鹿島。
戦闘隊長兼武満の護衛であるこいつとはよく会っていたが……。
武満の前以外でも礼儀正しく俺と接せられとは。
最初の話し合いの際にぶちのめして骨まで叩き折ったってのに、
それでも俺に頭を下げられる忠誠心には恐れ入る。
武満が羨ましいな。こんな男が部下にいるなんて。

「山県さんは確かインテリさんでしたね。山県さん、タカぼんさん
をお願いしますよ。
この人というとうちの大将も機嫌が良いですからね」
「うん。僕も組織の大切さを身をもって知ったばかりだからね。受
け入れてくれたタカぼんさんを全身全霊を持って守り立てていくつ
もりだよ。
それで、鹿島さんも僕のこと知ってるんだね」
鹿島は挑発する山県を淡々とした目で見つめ。

「元気の良い方だ。
タカぼんさん、それじゃ表の荷物を運ばせて頂きます」
「ああ、渡したらそれっきりだが、ガキどもやら後方の連中の食事
に肉ぐらいつけてやってくれよ。
祝い事だ。戦闘部隊以外だけじゃ余る程度には量があるはずだ。
――っと、俺が言うべきことじゃなかったか。忘れてくれ」

口を出した途端に剣呑さを出してきた鹿島に慌てて付け加える。
どうもこいつには一定の距離感を越えての発言が通じない面がある。
頼もしくはあるんだが、融通が利かないのがやりにくい。

「そいつはうちの大将が決めることです。

しかし、タカぼんさんもマメですね。うちの保育所にまで頻繁に顔を出して。

そんなに子供たちが気になりますか？」

釘を刺すように言われるも。

「あそこの姉ちゃん美人だよな。何？　元秘書課？」

「そっちですかい。いや、あの娘っ子は普通に保育士やってたっていうんであっちに回した娘です。

プロフィールいりますかい？」

「ソラで言えるならお前をケーベツしてやるよ」

くくく、と嗤う。鹿島は呆れ顔をしながら、ついでにお前が言うなと訴える目をしていた。

心外だな。俺はいちいち他人の情報なんぞ覚えとらんぞ。

「話が逸れましたね。それでどうしますか？　軍司令部に向かうならうちの連中に送迎させますが？」

「いや、俺は飲まないから、うちはうちの車で行く。内藤、すぐに出かけられるか？」

「ッ？！　えッ、あッ、は、はい。だ、大丈夫です！！」

話を邪魔しないためにか、部屋の隅に立っていた内藤に問いかける。唐突だったのかはよくわからんが、びっくりしたようにこちらを見る内藤はすぐに返答を返してきた。頭はきちんと回っているな。よいことである。

山県は男だからすぐに支度できるだろう。

「そんな隅で何やってるんだい？　と、それにしても」

「……、これは、驚いた……」

「おぉ……」
「え、は、なにかおかしいですか？」
内藤を見る二人の目は大きく動揺が走っていた。
そう、内藤は現在、その奥に隠れている妙な魅力を振りまいていない。が、だ。
唇に多少、色をつけ。新品の制服を着ただけなのに。
「おお、制服着て来たんだな。うん、似合ってる似合ってる。可愛い可愛い。
で、聞いてたろ。今から≪法の剣≫のところに飯食いに行くから。制服着たまま、車までな」
「か、可愛い……。あの、ありがとうございます。それで、いつもの会談ですか？」
顔を赤くして、制服の裾をつまんでみせる内藤に首を振り、山県を指差す。
「いや、こいつの歓迎パーティーだ。祝い事だしな。ついでに≪法の剣≫にもおすそ分けだ。それで人数的にあっちで開いたほうが便利だから軍司令部まで出向くぞ」
「お裾分け、ですか。……また、随分と出したんでしょうねぇ」
「そうでもない。溜まってたポイント使っただけだし」
「ああ、あれを」
そうして会話が始まりそうだったところで、声が掛かる。
「…ッ、――内藤さん。に、似合ってます。その制服」
声を上げた鹿島をちらりと見た。奴らしくないと思えば、漂って

いた精悍なイメージが揺らいでいた。その揺らぎはきっと、アレが将来的な敵だという前提からなる揺らぎだ。

山県は単純に呆けているし。やはり、鹿島は飲み込まれまいと抵抗しているのか。

前提を敵としてみればわかる魔的な美しさ。何も知らずに見れば感心するしかない美だ。十中十が振り返る、魂を揺さぶるような輝き。いつも内藤の奥から醸し出す威圧にこそ俺は脅威を感じていたが、これはこいつの素に、魅了の効果が入ったせいだろう。

（待て、これが内藤の素ということは？）

奇妙な違和感。深く考えるには材料が足りないが、まさか、な……。

「ありがとうございます。鹿島さんでしたっけ？」

にこり、と内藤が無邪気な笑みを見せる。

初心な男なら失神確実だろうその表情。しかし鹿島もその程度なら耐えられる。

「ええ。頂いた食材はうちのもんが調理しますので、楽しみにしててください」

「はい。楽しみにしてます」

内藤も、先ほどの話で吹っ切ったのだろう。≪法の剣≫で食事を取ることにはそこまで嫌悪を抱いていないようだった。興味もそこまでないようだったが。

「あっちに行ったら好きにしていいぞ。敷条もいるだろうから一緒に飯でも食って来い。小遣いもやろう」

「ちょ、ちょっと、子供扱いしないでくださいって！！」
「いいから貰っとけ。ああ、先に車に向かってくれていいぞ」
「もうッ。１００００クレジットって、こんなにいらないのに」

端末で送ったクレジットを見て嫌な顔をする内藤だったが、行け行けと手を振ると諦めた顔で外へと出て行く。

「山県ッ」
「あ、は、はいッ？！」
「内藤についてけ、車の運転はできるな？　行きはお前が運転しろ。帰りは俺がやるから」
「う、うん。ごめん。キーは？」

ほら、とキーを投げる。キャッチした山県は首をしきりに傾げながら慌てて内藤を追いかけていこうとする、前に。

「あ、山県。ちょっと待て。あ、目瞑れ」
「うん？　内藤さんが行っちゃうから早くして。って、痛ッ！！なんで瞼越しに目を叩くんだい！！」

【山県義純の【眼球】の【支配権】が連理貴久へと移りました。山県義純の【眼球】を通して発動される全てのスキルの攻撃対象を連理貴久へと変更します。内藤美咲の【魅了】に対する【抵抗】が付与されました。以後、連理貴久がレジストに失敗しない限り【魅了】に対する抵抗力を永続的に付与します】

「子供に見惚れてたから罰だ。ほれ、行け行け」
「横暴ッ。って、ああ、待ってくれ内藤さん。僕は車の場所を知らないんだッ」

さて、かつてのように無様を晒した部下への制裁を加えたので室内へと顔を戻す。
静かに見ていた鹿島がつぶやいた。
「無様を見せました。しかし、よくあんなものと四六時中一緒にいられますね。ほとんど一緒にいるんでしょう？」
声に篭っているのは理解できないものに対する畏怖だ。それは、きっと、内藤に対するもののほかに、あんな化け物じみたカリスマを放つ生き物が傍にいる俺に対するものでもあるのだろう。
「耐えられないほどではないさ。それに抗う期間が長ければ長いほど、屈服させた後が楽しみになる」
「そう、ですか。
やはり貴方は……。いえ、なんでもないです」
そんな剣呑を振りまいて、なんでもないもないだろうに。
抜き身の刀のような気配を振りまいた鹿島を見ながら、内心だけにそれをとどめておいた。
「三号、二号、俺達も行こうか」
そうして鹿島を先に行かせながら、俺も奴らの後を追うのだった。
伍拾陸／
『タカ兄ぃ』
≪法の剣≫が保護している子供たちが後部座席から降りたタカぼんさんに向かってくる。

一応は五人乗りとはいえ、流石に肉人形二体に挟まれれば当然なのだろう、道中狭い狭いと文句を言っていたタカぼんさんは、ようやく外に出られたことに対する感想を口にする前に子供たちに囲まれていた。

「ほらほら、まとわりつくな」

助手席から降り、車をちらりと見た。今回の運転は山県さんだったけど、タカぼんさんと違い、きっちりと駐車場の白線の中に入れている。山県さんは普通に一発で入れていたのでやっぱりタカぼんさんが下手なだけなんだろうか。

ちなみに、≪法の剣≫が拠点にしている軍司令部の駐車場にはタカぼんさん用の駐車スペースがある。たまに何を考えてかタカぼんさんは駐車スペースに対して垂直に停めたりするのできっちり三台分のスペースを借りてたりするのだ。

「おい、坊ちゃん嬢ちゃんたち。タカぼんさんが歩けないだろう」

声に振り返れば≪法の剣≫の車で移動していた鹿島さんが歩いてくるところだった。タカぼんさんに纏わりついていた子供たちが「はーい！　鹿島のおじちゃん！！」と言いながらタカぼんさんから少し離れる。それでも、一メートルも離れていない。

「ねぇ、タカ兄。これってタカ兄がくれたんだよね！！」

そうして子供たちが見せたのは透明なプラスチックのようなパックに入った肉の塊だ。骨のついた鶏肉のようなそれはきちんと熱を通してあるらしく、パック内でほこほこと湯気を立てている。

見れば、軍司令部のそこかしこで≪法の剣≫に所属するおばさんやおじさんたちが笑顔で料理をしたり、できた料理を威勢良く配っ

ている。

「おー、なんだ、お前ら、俺の関与なんぞ黙ってて自分たちの手柄にしてもよかったんだぞ？」

「……そんな怖い真似できるわけないでしょうが」

「何か言ったか？」

「いえ、同盟を結んでいるんです。黙ってるなんてことはできませんよ」

「そうか？　ま、そんなもんか。よしよし、ほら抱っこしてやろう」

言いながら、やっぱりまとわりつき始めていた子供のひとりを抱き上げるタカぼんさん。腕力パラメーターを強化してないとはいえ、タカぼんさんも立派に男らしく抱き上げている。「わー！　俺も、俺もッ！！」「あたしも。あたしもー！！」と子供達がわっと声を上げ、タカぼんさんは片手で周りの子供たちの頭を撫でくりまわしながら歩いていってしまう。

「あ、」

声をかけようとするも、子供たちは、たぶん３０人くらい。それが壁のようになって近づけなくなってしまっていた。

見れば肉人形も近づけていない。タカぼんさんにぴったりと張り付いている肉人形にしては珍しいことだ。

肉人形は不気味だし、子供達が怖がるからタカぼんさんが下がらせたのかな、と思えばそんなことはなく鎧を着ている二号がかっこいいのかタカぼんさんに近づけなかった少年たちが群がっているし、三号といえばさびしそうにタカぼんさんを見ている女の子に狩人服の裾を握られていた。

「人気者だね」

「山県さん」

隣に立っていた山県さんが淡々と言う。

「普段からああいった感じなのかい？」

「そう、ですね。暇さえあれば何かしてるような人なので」

「あれの他にも何かある、と？」

「……たぶん」

実を言えば把握してないけれど、ほかにも何かしていておかしくない人だった。

「……何故」

「はい？」

「何故、タカぼんさんは≪法の剣≫に所属しないのかな。あれなら、あの様子なら」

「山県さん？」

ぼぅっと何か不穏なことを口にしていた山県さんが私の声にびくり、と身体を震わせ、「……なんでもないよ。忘れて」と言う。

なんでもないようには見えないんですけど。なんて口に出せるわけもなく。

「僕達も行きましょう。置いてかれてしまう」

「……はい。そうです「美咲さんッッ！！」」

振り返る。聞こえた懐かしい声。意図的に避けていたそれが……。

――勇者様ッッ！！

（ッ〝……！！！！！）

酷い、ノイズ……。思考の一部を抉り取るかのような声。何が聞こえたかわかっているのに、どんな意味かわからなくなる。

「美咲さん」

背後に人の立つ気配。山県さんが知り合いかい、と目で問いかけてきた。

頷き。呼吸を整える。胸の奥から砂糖菓子のような甘さの感情があふれ出していた。

「神崎君」

胸を押さえつけながら振り返った。先の声は、頭の中から消えていた。

それでも、自分をしっかり保つよう意識しながらその顔を見る。変わらない、精悍さの混じった幼さの残る顔立ち。好感しか感じられない男の子。

神埼秀人君。

「美咲さん。久しぶり、かな」

「そう、ですね。敷条さんから聞いたんですか？」

「うん。茜から聞いた。それで、先輩は……、その≪法の剣≫じゃなくて」

「うん。タカぼんさん、連理さんって人のところでお世話になってるんです」

「そっか。茜の言ってた通り、か」

少し沈黙する。わかっていて会いに来なかった私を責めるのかと

思えばそうでもなく。後輩の少年は小さく頭（カブリ）を振ると、改めて顔を上げ、何かを言おうとしたところで。

「神崎君は大丈夫でしたか？」

言葉を被せた。きっとその言葉を聴いてはいけないのだと解ってしまうから。遮ってしまう。無駄だと解っていても。

目をぱちくりさせた神崎君はそれでも真摯に応えてくれる。

「え、あ、はい。≪法の剣≫のお陰で」

――飛翔もできず、囚われている

ノイ、ズ……。ッ、いつもと違い、言葉が読み取れない。何か重要なことを言ってると思うのに、意味だけがわからない。

なぜかそれに安心しながらも表面上は平静を整える。

「それで、……美咲さんは、何をやってたんですか？」

「私、ですか？」

神崎君が言おうとしていること。私が聞いてはならない懇願へと繋がりかける言葉が放たれ、思わず目を逸らしかけ。

「あ」

見れば山県さんが私たちを……。いいえ、違う。

”私を”冷たい目で見ていた。

「ああ、どうぞ。僕には構いなく」

「美咲さん？」

「あ、この人は」
「彼女の同僚の山県だよ。どうぞ、よろしく」
「あ、はい。その」

神埼君のどこかに行って欲しそうな視線を浴びながらも山県さんは動かない。その目は冷たく私を見ているようだった。
タカぼんさんに向けていた尊敬の色などは一切含まれていない、全き無色の目。
だから必然。私は悟らざるを得ないのだ。山県さんは、私が神崎君の言いたいことを意図的に逸らしていることを知っていると。そして、私がそれに対してどう行動するのかを見ようとしているのだと。

「僕のことは木か何かだと思っててていいよ」

山県さんにむっとした表情を向ける神崎君だけれど、それでも私は少しだけほっとする。
なぜだかわからない。だけど神崎君と今、二人きりになることは私にとって致命的な気がするのだった。

「美咲さん?」
「あ、うん。私は――」

伍拾漆／

「そっか。俺、甘えてたのかな」

”内藤”美咲が都市に来てからの話を聞いた目の前の少年は、そう悔いるように言葉を吐き出した。

（違う。君らが≪法の剣≫に頼った決断は甘えではなく懸命だったから。むしろそれを言うならば僕達が甘えていたんだ）

命を繋ぐことに本気になっていなかった馬鹿者たちの集まり。ヤクザ然とした連中に支給品を奪われ、そこから抜け出したが故の結末、≪カラミティ・ブルータス≫を知らないからいえるセリフ。

先ほど、無視してくれと言ったのに思わず口を出してしまう。

「いいや。君は正しい。無意味な正義感、無価値な自立心で動くとこの世界では早死にするよ。いずれ状況も変わる。今はじっと≪法の剣≫のために働くべきだ」

「……アンタは」

少年の僕を見る目は強い。猜疑と疑念、そして倦厭の宿る目。僕の言葉がまったく望まれていないのだとわかる目だった。

茶化すための苦笑も浮かばない。それでも、事実だけは伝えたかった。

力のない自由ほど碌な物ではないのだと。

「アンタにはわからないさ。俺の気持ちなんて」

伝わるとは全く思っていなかったが、伝えたいことは一切伝わらず。やはり苦笑いさえも浮かばない。

そして少年は決意した表情を浮かべ、僕は天を仰いだ。

思い出す。ここに来る前、車に乗る寸前に掛けられた言葉を。

『内藤に気を掛けてやってくれ。あいつは危うい。特に友人と会ったりしたなら、妙な頼まれごとをされそうだしな』

『どうして僕に？　タカぼんさんがしてるんじゃないのかい？』

『俺は、忙しくなりそうだからな。とはいえ、俺も子守を最後まで押し付けんよ。
最初の一回だけでいいんだ。それで駄目なら……』

（それで駄目だったなら……。その後に何を言うつもりだったのかは知らないけど）

あの強烈な裏を持つ人間のことだ。碌でもないことを考えているのは確かだった。
そして、それはきっと知ってしまえば、今後正常に組織を運営することを躊躇させるような。
なぜか本能的に悟らざるを得なかった不気味な予測を頭から振り切り、少年を見る。
既に僕が眼中にない彼は。”内藤”美咲へと意思を込めた言葉を吐いているところだった。

「美咲さんッ！！　俺を、俺を貴女の組織に入れてくださいッ！！
俺は、俺はッ「ストップ」

止めの言葉を放ち、瞬時に少年ではなく内藤に目をやる。やはり、連理さんは、流石だ。
少年と話し始めてから次第にとろんとした目をし始めていた内藤は正直、信用ならない。
先ほどの連理さんと話し合いをしたときの凛とした表情など欠片もなく消え失せていた。
精神的な棒立ち状態だ。

「おいッ！　アンタいくら同僚だからって『黙ってて貰えるかな。糞餓鬼』ハァッ？！」
「内藤ッ！！」

張り上げた声に少年が奇妙な顔をした。この少年が南雲・アーリアライト・美咲の本名を知っているならば当然の反応。

そして、僕の存在などこの少年が熱意を込めた声を上げたあたりから消失していたであろう銀髪の少女は、男ならば魅了されずにはいられない表情をしながら相対した僕を睨みつけ――

【【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。【憎悪】の効果が発動しています。レジストしてください。】

【割り込みが発生しました】

【山県義純の【眼球】の【支配権】は連理貴久に移動しています】

【【眼球】を通る全てのスキルの攻撃対象を連理貴久に移します。レジストが成功しました。山県義純に対する【憎悪：魂の破壊】はレジストされました】

――、口を開いた。

「えっと、山県さん？　あの、神崎君。ちょっとごめんね」

手を握られ、神崎とやらから離される。少し前なら初心な少年のように胸を高鳴らせただろうが、疑念を持って接しているからだろ

うか。先ほどのように忘我するほどの魅力を内藤から感じなかった。

「ちょっと、どういうつもりですか？　神崎君は≪法の剣≫から抜けようとしているだけじゃないですか。それをどうして――「なるほど、タカぼんさんも不幸だ」

僕の言葉に一瞬、言葉を失った内藤が信じられないような目で僕を見る。その目には先ほどの憎悪のほかに、かすかな困惑が見て取れた。

（自覚がなかった？　それに、タカぼんさんもどうしてこの娘にそこまで……）

「ッ！　貴方が何をッ！！」

「……ん。客観的な評価だよ。それとも、〝連理さんを呼びますか？〟」

「ッ……。待って、待ってください。……ちょっと、考えます」

……言われ、一分も待てば、顔を青くした内藤が僕に自ら頭を下げてくる。

「うかつッ。どうしてここまで頭が悪くッ？！　ぅぅ、糞ッ。糞ぉッ……」

「で、彼氏なのかい？」

「違いますッ！」

ふぅん。見れば、僕に頭を下げる内藤を見て、少年が不安半分申し訳なさ半分といった表情だった。どうも自分の言葉で内藤が怒られているのは理解できたらしいが、そもそもの提案の馬鹿さ加減に気付いているとは思っていないようである。

「彼には僕から言っておこうか？」
「いや、私が言います。これ以上、恥を掻かせないでください」
「了解」

両手を広げ、おどけるように任せることを示すと、内藤は唇をかみ締めながら少年へと歩いていく。

『最初の一回だけでいいんだ。それで駄目なら……』

言葉を思い出す。刺す釘が一本で良いという理由。一本だけで十分だとわかっていた連理貴久。一体、内藤美咲にどれだけの価値があるというのだろうか。まさか南雲財閥が目的でもあるまいに。
そう、あの娘に連理貴久、タカぼんさんがあそこまで甘い理由。あれだけの器量を見せてくれたタカぼんさんに限って、女関係はないと思いたいが。
それとも、説明されていないことがまだあるのか？

（それでも、まさか本人が望んでいるとはいえ、≪法の剣≫からの引き抜きをあれだけ軽く承諾しようとするなんて……）

信じられないくらいの頭の軽さだった。いくら連理貴久とはいえ、そんなことをすれば両組織の間を取り持つのは不可能だろう。
一度くらいなら、それでもなんとかできてしまいそうだが、今の友好的な関係に戻すことは不可能に違いなかった。

『……対立。対立、ねぇ。それも面白そうだが……』

ふと、先の話し合いのセリフを思い出し、ぞくり、と背筋が寒くなる。≪法の剣≫と対立することを本気で楽しそうだと思っていた

あの言葉。一応、僕を使って彼はその対立を留めることに成功した。
しかし、僕が今日、≪支配の杖≫に入ることはわからなかったはずなのだ。だったら、本来は失敗していたかもしれず、ならば抗争は必至だったのか。
嫌な想像を振り切る。あの人に限ってそんなことはないとは思う。だけれど、もしそれでもよかったというならば……。
やめよう。これは考えるべきではない。首を振り、神崎少年と内藤を見る。
頭を下げ、神崎少年からの願いを断る内藤。それを見ながら思うことはやはり。

（本人は否定したが、やはり彼氏か。肉体関係ぐらいは持ってそうだけど）

未だ学生とはいえ、やはり女は女。……やはり、女は信用できない。≪支配の杖≫のトップがタカぼんさんでよかった。これで女だったら情で全てを決められかねなかった。
内藤への僕の中での評価を決め、頭を切り替える。もうあれらに関わる必要はないだろう。内藤がそれでもヘマをしたなら、タカぼんさんの器量を改めて確認するためにも処置を見せてもらうしかない。
少なくとも、女で身を崩すような人間には見えなかったが。
それでも、あの人には少しだけ警戒を忘れないようにする。
それに、僕にもすることはあった。タカぼんさんがわざわざ今日、宴会を開いた理由。表向きだけかもしれないけど、僕のために開いたという宴会。
今後の仕事のためにも、ここで思い切り人脈を作っておく必要がある。

伍拾捌／

宴会の終わり。駐車した車のドアに背を預け、キーを片手に空を見る。

星や月があるが、それらは全て偽者の空だ。

「二号、三号、お前らは楽にしていろ」

俺を護るように立つ肉人形に言うが、反応はない。当然とはいえ、苦笑のひとつも浮かぶ。

やはり、いざというとき、信頼に足るのは人間ではなく、浮かぶ想像に首を振る。いや、まだ諦めることもないだろう。

時間はまだ残っている。

「来たか」

宴に酔ったのか、ふらふらとした足取りの内藤と、渡した端末を既に自在に扱っている様子の山県。その背後を目を凝らし見る。駐車場脇からでも未だ騒いでいる軍司令部の様子はよく見えた。

（俺も身体を休める必要があるか。息抜きも必要だ）

少し動きすぎている。オーバーワークまでとはいかないが……。しかし、……。

（まだ、足りない）

何か根本的な勘違いをしているのだ。内藤、龍村、そして恐らくは敷条。未だ見ぬ敵の存在。

何かボタンを掛け違えているのはわかる。しかし、それがどの服

の、どのボタンなのかがわからないのだ。

「タカぼんさん、外でずっと待ってたんですか？」

「いや、子供達やらおばちゃんやらと話してたんだがな。子供達が眠くなってきてたから帰らせた」

俺を見た瞬間に、すたすたと行儀良く歩いてきた内藤が隣に立って聞いてくるので正直に答えておく。俺もこんな宴の席で密談をやるほど馬鹿でもない。だから、こういうときは一番下の人間の顔を見るに限る。

静かなので顔を向ければ、山県が何かを言いたそうに立っている。

「タカぼんさん」

「どうした山県？」

「うん。明日のことなんだけど」

「ＰＣとプリンターなら使えるぞ。頼んでおいた。好きにやっていいぞ」

ぽかん、とした表情の山県が直後に腹を押さえて笑い出す。

「はッ、ははははッッ！！　さ、流石だね。もし言い出さなかったら？」

「資料は俺が用意することになってたな。ま、≪法の剣≫に適当に代価を払って用意させただろうが」

こういう手回しは内藤相手にはやっていなかったことだった。

「あの……、その……、す、すみませんでした」

「どうした内藤？　何かミスでもしたか？」

唇をかみ締める内藤の視線が一瞬、山県に向く。うん？　本当にヘマでもしたのかね。

「不甲斐なくて、今日も大口を叩いたくせに、すぐに忘れてしまって。今日は、そうでもないんですけど。霧が掛かったように頭が悪くなるときがあってッ。でも、でもッ、大丈夫です。次からうまくやりますからッ！」

泣きそうに弱音を吐く内藤の頭に手を置いてやる。俺の隣に立つ少女はぐずぐずと鼻を鳴らしながら上目遣いで見つめてくる。

ぽんぽん、と撫でてやる。そうして安心するような言葉を掛けてやった。

「大丈夫だ。それは思考力が落ちてるんじゃなくて疲れてるだけ。それに今日は気が緩んだんだろう。明日で一週間だしな。慣れてくれば不調もとれるさ。さ、今日はもう休め」

「はい。……今日くらいは、夢もみないでゆっくり寝たいな……」

後部座席を開き、内藤を支えながら奥へと座らせる。内藤は相当気疲れしているのか、ドアを枕に目を閉じてしまった。

そして、目を閉じた内藤が聞こえるか聞こえないか程度の声で囁いたそれ。

夢？　……夢？　俺も毎日見ているあの不快な？

とりあえずそれは考えの隅に起き、後部座席のドアポケットに入れておいた資料を取り出し、山県へと向き直る。

「山県、これが資料だ」

「ありがとうございます。それでＰＣは？」

「ああ、軍司令部の受付で聞けばわかる。ああ、そうだ。変なことを聞くが――ここに来てから夢を見たか？」

伍拾玖／

――微睡みに落ちていきなさい。

声が聞こえる。【聖歌】。讃える歌。

『ノエル！　我らが姫！　我らが聖女！　おぉ、ノエル！　愛しきかな！　愛しきかな！』

どこか遠くからたくさんの人々が祝福の歌を奏でる。それは、戴冠式。

機械に人面を貼り付けた人々が歌い、騒ぎ、そして静粛の場へと移動していく。

機械王国の姫、聖女ノエル。彼女が冠を頂き、そして、大陸統一国家ソシエトへと捧げられる時の記憶。

――私は、クトゥンズハヴザスに捧げられる筈でした。機械帝国の属国たる我が祖国のために。

『おお、ノエル！　悲しき姫よ！　愛しき姫よ！　美しき姫よ！』

歌う近衛兵、楽団、市民たち。合成されたような金切り声が歌を唄う。

――だけれど、そんな日は来なかった。戴冠式が終わり、その日が来る前に……

空を覆う暗黒。機械帝国の終焉が始まった日。【魔王】ウェンデ

ィサーク襲来。
そうして、地獄の日々が幕を開け、彼女の祖国は破壊され、彼女は出会うのだ。

――ああ、早くお会いしたい。

現われる金属の身体を持つ、機械文明人。【勇者】アーク・ソシエトの姿。
彼は魔王の将に襲われる聖女を助け、そうして彼女の特異な能力を知ると、手を取り、共に魔族を倒すために力を合わせようと声を張り上げ、

――勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。勇者様。

声が、膨らんでいく。私の視界をアーク・ソシエトの姿が埋めていく。

――敷条茜。貴女の大切な人の為にも早く、早く、決めるのです。

言葉が重なっていく。視界が埋まっていく。

陸拾／

【【寄生】が進行しています。【勇者】【聖女】【戦乙女】の【寄生】深度が第二段階へと進行します】
【【戦乙女】の進行判定に失敗しました】
【【支配者】の【能力】により【戦乙女】の【寄生】進行度が低下します。第一段階で停止します】

【【支配】が成功したため、【戦乙女】の【支配者】に対する【憎悪】が強化されます】
【【魔皇将軍】が性向一致を経て第三段階へと進行します】

どこかでアナウンスの音が聞こえた気がした。
そうして、落ちていく。墜ちていく。堕ちていく。
どこかへと、地の底へと、天の頂へと堕ちていく。

――聞こえる。

雑音。ザァザァとまるで砂嵐だけが映っているテレビのような。
雑音、暗転、夢の中を堕ちていく。
そして見るものは歴史だ。機械帝国の、皇帝を至高とし、その配下に各地の諸侯、各貴族は一部の例外を除き、兵を取り上げられたために誰も武力を持てず、平民を登用した王軍が存在するそれを――暗転。
魔王について。
魔王とは……。
世界に存在する毒。否、それは否である。そのようなものではない。善も悪も世界に存在せず、どちらも事象に貼り付けられたラベルにすぎない。それを観測するユニットの心象、マインド、精神こそが観測結果を歪めるのである。その歪み、それを分類する。取り上げる。数多の世界に無量に存在するユニット、プレイヤー、デバイス、その心象をくみ上げ、事象につけられたラベルを分類し、善と悪に分断する。裁定する。決め付ける。
そして、世界に物語は与えられ――否定する。

『嘘つきめ』

――雑音。

創世の神話について――雑音――魔王と勇者について。第一世代魔王、勇者を頂点とする魔王及び勇者たちは複数世界に配置され、その世界の道徳において、善、悪と呼ばれるものを実行。――雑音――聖剣と魔剣、互いを滅ぼすために必要な神器――雑音――勇者について、勇者とは……、善、正義の体現者。配置された世界において生育され、その世界での道徳及び倫理を学習し、覚醒後にそれらを執行する。管理ユニットと同じく、その行動はプログラムされたものではなく、核となる魂に刻まれた性質によって行われる。――魔王と勇者は対応して存在し、複数世界にまたがって”ストーリー”が展開される場合においても、双方のどちらかが消滅しない限り、”観測”は続けられ――

陸拾壱／

「……また、か」

機械帝国の興亡から始まった夢はとうとう世界なんてものを飛び越え、もっと大きなものの流れについての話になっていた。

見ているのか、見せられているのか、それとも見ようと思って観ているのか。

「考えても仕方がないか。ただの妄想が夢の形になった、ということも否定しきれないしな」

……三号の差し出してきたコップから水を飲み、寝ぼけ眼の中、ボケっと宙を見る。

思考を整え、今日やることを確認する。そうこうしているうちに二号が水の入った桶を持ち、三号が鏡とタオルを差し出してくるの

で顔を洗い、髭を剃り、歯を磨き、口をゆすいで別にある空の桶に水を吐き、そうしてから差し出された豪運の果実を口にする。

何故運を上げるのかといえば、俺の趣味の問題だけではなく、実利の部分だ。

別に戦闘がなくてもパラメーターは大事なのだが。例えば、力が上がればアイテムを持って歩ける量が増えるし、耐久が増えれば死からそれだけ遠ざかることができる（即死は無理だが）。俊敏なんかも割と大事だ。速度が上がらなければ死んでしまうような場面も多いしな。

そういうわけで運だけ上げるのは割と馬鹿な行為なんだろうかと思わなくもないが、俺の持っている能力というか、スキルに問題があった。

【経験値非効率】である。解っている効果は凄い単純である。運以外のパラメーターの上昇が１０分の１。その上、１ＵＰ系は上昇範囲に入らないという悪夢的な効果までである。

だから運以外は食べても意味がないのだ。

……なんだかなぁ。食ってる間に二号が全身鏡を用意し、三号が糊のきいた総帥服を持ってくる。

服を脱ぎ、二号に体を拭かせ、髪を整えさせる。その間に三号がてきぱきと俺に服を着せていく。……しかしこいつらはこいつらで便利だな。仕込めば仕込むほど便利に物事を覚えていく。進化型人工知能だったか、便利なものだ。ただ、三号に限ってはなぜか最初からこういったことは覚えていたが、当初のコンセプトが違ったのだろうか？

二号が端末と銃を俺の腰に吊るし、三号が財布を通信端末を懐にそっと入れる。そうして朝の支度を終えた俺は二号の開いた扉から廊下へと出るのだった。

陸拾弐／

「おう、おはよう」

宿の廊下で内藤に出会った。奴はふらふらとこちらへと歩いてくるものの。

首を傾げた。なんだ、あいつ。顔色が悪いぞ。

「た、タカぼんさん」

「おぉ、どうした？　具合でも悪いのか？」

ふらつく内藤に近づいて、熱でも測ろうとすれば。

「……三号？」

腕を三号に押さえられていた。痛くはないが、これ以上は進むなという強固な意志を感じる。

とはいえ、進めないなら仕方なしに内藤を見るだけ見てみるものの。

「うん？　どうした内藤。そんな目をして」

悲哀を浮かべた少女が目だけに憎悪を込めて俺を見ていた。

「ッッ、ぅ……～～～ッッ。ぅう～～～ッッッ」

まともな言葉などしゃべらず、頭を抑えてしゃがみ込んでしまった。

見下ろしながら耳を澄ませば。

「憎くない。憎くない。憎くない。憎くない。憎くない。憎くない

……」

なんて、なんて心地の良い悲哀。っと、違うか。見下ろしながら端末を見る。

【内藤美咲が状態【憎悪】をレジスト失敗しました。自我消失の危険があります。知能の値を上げ、抵抗値を上昇させてください。知能の値を上げ、抵抗値を上昇させてください。知能の値を上げ――】

「ッッッ。憎くない。憎くないッ。憎くないいぃッッッ」

健気だった。その生き物はただただ健気に俺を憎まないようにしていた。どう見ても、折れたほうが楽なものなのに。ただただ健気に俺を憎まないと意思を振り絞っている。ああ、健気だ。大好きだよ。その意思が。やはり人間はいい。動物にないその意思こそが俺が人間に傾倒するに足る理由だ。侍らせるなら肉人形よりも人間だ。そう確信を抱かせる程度には、気高く、価値がある。

俺を見上げる内藤を見下ろす。目には憎悪。顔には苦痛と悲哀。そして諦観に支配されない意思。

放っておけば壊れていくだろうそれを、壊れさせてしまうこと。それを、面白く感じ。

（ああ、そうか。思考が”戻って”たか）

俺の全盛期に、人を人と思わなかった時に、戻っていた。

思い直す。内藤を見る。心が折れないように、健気に俺だけを思ってくれている少女の意思を汲み取ろうと努力する。

（そして、助ける手段か……。なくはない）

必死に俺を信じようとするその魂を掬い上げる手段があるのならばやってやるべきだろう。
これを放っておいて、内藤の自我が失われれば俺の敵が露になるのだとしても、だ。
最悪を少し考えてみた。ああ、大丈夫。内藤の身体能力から考えてみて、制圧は可能だ。監禁する部屋もある。

（尋問して口を割らせ……――『タカ、ぼんさん……？』

自重せず、楽しく妄想を始めようとしたところで内藤が俺を不思議そうな顔で見上げていた。涙の滲んだ目。よほど己に抵抗したのか、汗の飛沫となって踊る屍体。
今にも倒れそうな身体。
しかし、いかに弱さを振りまこうともその目だけが別人のように俺を見ている。睨みつけている。

（内藤を助ける助けないの前に。……興が乗ってきたな）

目に力を込め、言葉に意思を入れ、内藤の身体へと手を伸ばした。三号が制止の力を強くするものの、構わず内藤の顎に手をかけ、至近から囁くように問いかける。
言葉は、選ぶことなくするりと出た。

「内藤」
「に、げて、ください」

言葉は必死だ。目の端の涙を拭ってやる。

「内藤」
「タカ、ぼんさん。おねがい、します」

なぁ、と問う。内藤がわかってくださいと目で祈るも、俺は構わず声を掛けた。

「なぁ、お前の主は何だ？」

「あ、るじ？」

「お前の意思は誰のものだ？　お前の身体は？　お前の憎悪は誰の憎悪だ？」

「わ、たしの？　わたしの」

そっと力を込める。それを意識して使ったことはないが、恐らく【支配】と同じように俺にとって初めてというわけではないはずだった。

このスキルという力は、きっと俺が、元の世界で振るっていた力に名前を付けただけに過ぎない。だから、意識をして、俺は、初めてそれを使用する。

【スキル【魅了の魔眼】を発動しました】

眼球に激痛が走った。能力の出力に身体がついていけていないのだ。無意識に残滓を振りまくのではなく、その大元を使うのならば当然の負荷だった。

それを、まだ内藤には向けず、ただ発動させた状態で留めておく。

「そう。お前のものだ。お前の意思は、お前の魂は、お前の憎悪はお前だけのものでしかない」

そうして言葉をもぐりこませる。内藤の意思をつつくように刺激する。過去何千と行ってきた行為。だから、唆すこと自体には問題がない。

問題は、ギリギリと眼にかかる激痛と、

（すごい疲労だな。この能力とやらは……。　いや、スキルだったか？）

今更止めるわけにもいかんが。

そうして内藤の顎を持ち上げ、目を合わせる。憎悪の篭った目がギョロギョロと俺を見てくるが構わず【魅了の魔眼】の指向を決定する。

「タカぼんさん、わ、私はッ」

【【魅了の魔眼】がレジストされました】

（まだだッ）

それはわかっていたこと。こんな封印だらけのスキルに期待なんぞしていない。効果なんぞ発動するわけがないのだ。

が、それでも使いようはある。

内藤に立ち上がる時間を与えることができる。

俺の魅了をレジストするために眼の憎悪にゆらぎが走る。そこに声を差し入れる。内藤、と。

それで、内藤の意思は満ちる。

「私はッ、私はッッ……。私の心はッッ！！　私の身体はッッ！！私の、私のッッ！！」

そして、俺もタイミングを計る。

眼球の激痛は頂点に達していた。

【スキル【魅了の魔眼：抗えぬ瞳】が発動しました。レジストされました】

それはわかっている。しかし、だ。タダで俺の支配から逃れ得ると思うなよ？

【スキル【憎悪】に損傷を与えます】

【【憎悪】が損傷しました。【魅了の魔眼】が損傷しました。スキル【憎悪】、スキル【魅了の魔眼】は回復するまで使用不能となります】

「私のものだッッッ！！！！！」

（痛ぅッ……）

叫び。内藤に掴み掛かられ、抱きしめられ、耳元で己は己のものだと宣言が轟く。折れぬ意思の発言。それは、それでいい。

が、激痛に目に触れる。瞼の血管でも破裂したのか血が流れていた。

（これで、いい）

多少正面が見え難いが、問題はない。眼球の機能自体が損傷したわけでもない。

それよりも、と目前を見下ろせば興奮したのか、肩に寄りかかった内藤ががっしりと俺の身体を掴みつつ、気を失っていた。

「これだけやってやったんだ。次はもっと上手くやれよ」

膝立ちから立ち上がる。薬を差し出してくる三号に俺の手当てをさせながら、内藤の身体をきつく抱きしめてやった。しかし意識を

完全に失っているのか目覚める気配はない。
そうして、ふと遠くに光るものが見え、目を凝らす。
遠くの床に転がっているものがわかり、嗤いが漏れた。
抜き身の剣だ。その切っ先を誰に向けるつもりだったのか。そしてどういう事情からそれを投げ捨てたのか。

「可愛い奴だな、お前。割と本気でそう思うよ」

どうせ気絶してるんだからと、内藤の乳と尻を服越しにまさぐりながらそんなことを思った。
感触を楽しみながら思う。こいつを屈服させたらどれだけ楽しいんだろうな、と。
健気に尽くすのか、嫌々ながらも従うのか、それとも、全てをかなぐり捨ててでも従おうとはしないのか。
それを想像することは、とても楽しいことだった。
そんな妄想をしながら内藤を持ち上げ、俺は廊下に落ちている剣を拾いに歩いた。

三階層【王者の凱旋】？

陸拾参／

ＮＡＭＥ：連理貴久

ＨＰ　１２／１２
ＳＰ　１８／１８
腕力　５
硬度　５
俊敏　４
知能　８
運勢　１６５
能力　【暴君の目】機械式五十三層封印
【暴虐の腕】機械式四十一層封印
【支配者の杖】【寄生】抵抗力付与を開放中
【魅了の魔眼】レベル３　種族：人間
種族：下等機械人　種族：魔族　にのみ有効
【いつか見た景色】機械式八十八層封印
【レベル制限】稼働中
【経験値非効率】稼働中
【■■■■■■■】機械式≪絶招≫封印

装備
右手武器：法王の盾【必殺攻撃無効】
左手武器：極北銃【聖炎・創氷・塵雷／属性対応】
頭装備　：必中のモノクル
胴装備　：状態保護ジャケット
腰装備　：多機能ベルト

予備銃　破壊の銃【暗黒・地母・疾風／属性対応】
足装備　：防刃ジーンズ／泥除けの靴
アクセサリー１：携帯端末
アクセサリー２：確率必中の篭手／確率回避の篭手
アクセサリー３：確率必中の指輪／確率回避の指輪

※指輪類、腕輪類の複数装備は現在、最大が二つまでとなっている。
　また、発動効果は　腕輪＞指輪

ＮＡＭＥ：内藤三咲
ＨＰ　８６／８６
ＳＰ　９０／９０
腕力　５５
硬度　４２
俊敏　４７
知能　４４
運勢　２８
能力　【戦乙女≪ブリュンヒルデ≫】レベル５
（支配者の杖による【寄生】保護により、
本来の性能が封印されています）

装備
右手武器：堕王の剣【漆黒】／暗黒属性
左手武器：偉人の盾
頭装備　：届かずのフード
胴装備　：倭人の軽鎧
腰装備　：倭人の腰鎧
予備剣　『法王の剣【白蛇】／光輝属性』

足装備　：倭人の脛当／スリップ防止の靴
アクセサリー１：シルヴァーアクセサリー
アクセサリー２：強撃の腕輪（両腕）
アクセサリー３：状態防護の指輪／必殺無効の指輪

ＮＡＭＥ：肉人形二号

ＨＰ　３００／３００
ＳＰ　１００／１００
腕力　８０
硬度　８０
俊敏　８０
知能　１０
運勢　０
能力　【自己再生】
　　【進化型人工知能】
　　【選択：近接特化】

装備
右手武器：堕王の大剣【覇炎】／聖炎属性
左手武器：強盾【移動城砦】
頭装備　：アダマンヘルム
胴装備　：アダマンアーマー
腰装備　：アダマンアーマー／予備剣　『浮遊剣／疾風属性』
足装備　：アダマンアーマー
アクセサリー１：封呪の腕輪／防麻痺の腕輪
アクセサリー２：毒無効の指輪／必殺無効の指輪

ＮＡＭＥ：肉人形三号

ＨＰ　２５０／２５０
ＳＰ　２４０／２４０
腕力　１００
硬度　６０
俊敏　６０
知能　８０
運勢　３０
能力　【自己再生】
　　【進化型人工知能】
【選択：遠距離・中距離】

装備
右手武器：破壊の銃【暗黒・地母・疾風／属性対応】
左手武器：虐殺防護の盾【必殺攻撃無効】
頭装備　：必中防護の頭巾
胴装備　：世界最高の狩人服
腰装備　：高機能解体ツール
　　予備銃　極北銃【聖炎・創氷・塵雷／属性対応】
足装備　：世界最高の狩人服
アクセサリー１：治癒の腕輪／状態防護の腕輪
アクセサリー２：必中回避の指輪／先制無効の指輪

「戦闘の基本はまず間合いだ」

ぞろぞろと≪法の剣≫の戦闘部隊を連れて、塔の中を歩く。講釈を垂れ流しながらだ。
隣には武満とその護衛にだろうか、鹿島がいる。初回ぐらいは聞

いておきたいのだそうだが、どう考えても監視だろう。
レーダーに感知したとおり、目の前の角からゴブリンの集団が現れるも。
出会い頭に極北銃をぶっ放す。漫画かアニメのような音を立てて発射された弾丸はゴブリンの額に小指大の穴を開けた。
今度、サイレンサーでも買って、装着しておくべきだろう。

「だから、このように遠距離から狙えば一方的に殺害は可能になる。
――
べしゃ、と力なく倒れる体。先頭が即座に殺され、動揺が集団に伝わりきる、その前に。

――で、だ。二号」

俺の指示に従い、二号が敵集団に突っ込んでいた。二号が振り上げた巨大な金属板が三体のゴブリンの首から上を薙ぐ。
振られた斬撃は、薙いだ勢いを利用する。ぐん、と二号は回転する。回転し、一歩踏み込む。勢いそのままに振られた金属板が敵の後列に再度血の雨を作り出す。

――金属板。

金属板というが、実際は二階クリアの際に手に入れたコードでカタログに解禁された武器、堕王の大剣だ。炎の属性とやらのついたそれは刃についた血液を蒸発させながら微量の熱を放っている。金属板と俺が称するように、よく研がれた金属の板に柄がついただけの仕様だが、その無骨さこそがその兵器の凶暴性を如実に著していた。
ずん、と残る一匹に二号が剣を振り下ろそうとしたところで「二

号、ストップ。殺すな。武器だけ奪え」止めを入れた。

「さて、このように敵のステータスがこちらと隔絶し、武装の質も圧倒的に違う場合。奇襲を加えるだけで一方的に虐殺できる。これが元の世界と違う点だ。

逆も言えるわけだが、そのときは逃げるが吉だな。逃げ方についてはまた今度。

それで、なんだ。誰かやってみるか？　武器は俺らとそう変わらないだろう」

問いかけて見ると、武満がいるからだろうか。何人かが、「うぇえええっす！！」「あっしがやりやす！」「俺がやります！！」「私に！！」と戦意に満ちた声を上げてくる。

「うん。じゃあ、そこのやる気のなさそうな君。やってみようか」

戦意に満ちた連中が一斉に俺が声をあげた方向を見た。「ぁぁ、ワタシですか？」間延びした声と共にゆっくりと前に出てくる白背広を来た長身の男。細身に、高すぎる身長は針金のようだった。

髪も長い長髪だが、ところどころが編んであったり、シャギーが入っていたりと鬱陶しい髪型だ。

男は皺ひとつない白い背広をゆったりと着こなしながら、のんびりした口調で歩いていく。向かう先はビビリながらも退路を二号に封じられているために逃げられないゴブリンだ。その間合いぎりぎりに突っ立ったまま、男は首を傾げた。

「殺ォしても？」

「いいよ。ぜひやってくれ」

「では」

やはりのんびりした口調で言う男を見ながら俺は隣に立つ武満に問いかけた。

「あれが、リーダーか？　どうして鹿島じゃない？」

「雨宮はあれで使える。のんびりしてるが容赦だけはしないからな」

「ほぅ？　お」

話している間に状況が始まっていた。ゆったりと歩みでゴブリンの間合いに足を踏み入れた雨宮は、拳を構えるゴブリンの前で止まり。足を振り上げ。振り下ろした。

風切音。それだけだった。雨宮は足を振り下ろし、ポケットに手を突っ込んで突っ立っているだけ。

雨宮がこちらに振り返る。やる気のない顔をしたまま、これでェいいですカ？　と目で問いかけてくる。

ゴブリンは死んでいる。立ったまま、死んでいた。おびえた目には何が起こったか理解できていない色のついたまま。ただただ突っ立っていた。

目を凝らす。ゴブリンの頭にはそぎ落とされたように抉れた痕が残っている。そして目をぐるん、と回転させたゴブリンが膝から床に崩れ落ちていった。その頭部からはどろりと脳が零れ落ちていく。きっと死んだことを認識できなかったのだろう。

雨宮の足には最小限の血しかついておらず、白背広には返り血の一滴すらついていない。

足を振り上げ、振り下ろす。そうして踵で頭部を脳ごと抉ったのだ。

あまりに無造作すぎる行為に俺だけが唖然とする。周囲の反応はそんなに珍しいものを見たというわけではなさそうなのが一段と恐ろしい。

「うわぁ、怖ッ。なんだあいつ。あんなの飼ってんのか、武満」

「君の肉人形の方が余程怖いと思うが？　雨宮、よくやった。≪法の剣≫戦闘部隊は散開しろ。チームごとに分かれ、３０分の探索を行い、戦闘をこなしてこい」
「わかりましたぁ。ボスぅ」

ゆったりと歩いていく雨宮、それを追いかけていく五人の隊員。それと、白背広に率いられた五組のチームがそれぞれ別方向に走っていく。
白背広六人と、それらが統制する五人の黒背広。携帯端末とレーダー。潤沢なパラメーターアップアイテムで強化された肉体。それと二階層クリアで解禁された装備で武装した彼らならどんなヘマをしようとも一階層で脱落することはないだろう。

「肉人形の方が脅威、か。まぁいい、とりあえず一組ずつ見て回ろう。指導の必要があるとは思わないが」
「ぬかすなよタカぼん。塔での戦闘は我々とて初めてなのだ。それに、不和の種は極力減らす方針で行くのだろう？」

まぁ、な。武満の言葉に頷きながら、あの異様な戦闘能力に疑問を覚える俺だった。
踵で頭部を抉り慣れる？　一朝一夕にできるような行為ではないそれを自然に行っていたあれ。俺は今まで武満を、ヤクザ崩れか、現役の暴力団員か何かだと認識していたが、違うのか？
最初の印象を思い出す。そうだ。俺は武満たちに、暴力団員以上の何かを感じたのだ。しかし、兵士というほど愛国心や忠誠というものは見えなかった。逆に、そう、それに言葉を付けるなら野心。
そんなものを武満から感じたのだ。
俺は小さく息を吐き出し、武満が護衛に連れている白背広、鹿島を眺めた。
そうして今更ながらに気づく。

目線の運び方や立ち位置などは護衛としては二流程度だろう。専門的な訓練を受けていないことははっきりとわかる。

しかし、流麗な足運び、自身の身体を守るための振る舞いには隙が殆ど見えない。まるで、一流の武術家か何かに見える。

俺自身が武術なんてものを一切使えなくとも、それを行っている者をかつては日常として侍らしていたのだ。それぐらいは理解ができた。

（武術家崩れのヤクザ？　いや、そんな単純なものでもないだろう。傭兵上がりのヤクザ？　いや、なんでもヤクザと結びつければいいというものでもないか。しかし、ここまでの武力集団が日本国内にいたなんてな）

そして、武満を見た。今までこいつの政治的手腕や経営方法などにしか注目してこなかったが。血と死と戦闘がごろごろと転がっている場所に連れ出してきて、初めて理解できてきたことがある。

（こいつも化け物か）

武満法行の本質。周囲を圧する威圧感というよりも、傍に立っているだけで他を圧倒する戦意の塊。それが闘争の場に連れ出したことによって剥き出しになっていたのだ。

闘争の場が楽しいのだろう。普段は静かに引き結ばれている口元が緩んでいた。

俺の隣を歩きながら、隣に立つ鹿島へと茶化すように、強請る様に声を掛ける。

「なぁ鹿島。私も」

「自重してください。大将」

「しかし、な。雨宮は楽しそうだった。私も少しくらい」

「大将ッ。アナタに何かあったらコトです。アタシに任せて貰いやせんか」

不満そうな声が漏れていた。そうして、普段は見せない拗ねたような目で武満が俺を見た。説得してくれ、と目が語っている。

「むぅ。なぁ、タカぼんからも「大将ッ！！」」

護衛に連れてきている鹿島がどうしようもない、と言う目で俺を見た。そうして余計な事を言わないでください、と目だけで釘を刺される。

やれやれと仕方なく思いついたように話を振っていく。

「あー。なんだ、あの糞適当な交渉でお前が頷いた理由がわかったよ」

武満が部下を痛めつけられた最初の交渉の場。わかってはいたが、あのとき武満は俺に屈したのではなかったのだ。面子を守ったのでもない。

ただ、目の前で暴力を振るった俺が楽しくて楽しくて仕方がなかったのだろう。

武満の命を握った俺を、武満が気に入っただけだった。

自身の顔面を素手で抑える。表情がこぼれてしまいそうだった。

「はは、ははははははははッ」

「くはッ。くはははははははッ」

それでも抑えきれないものがある。

武満と俺、不思議とお互いに、同時に嗤い声が上がっていた。

今更気づいた屈辱。交渉で優位に立ち、相手を実際に圧倒してい

ながら、武満は心の奥底では、楽しんでいたという事実にようやく気づけたことによる屈辱の嗤いをあげる俺と、それに今更気づいたのかよ、と俺を嘲り嗤う武満。それにはあのときに武満が感じたであろう屈辱を払拭する喜悦が混ざっていた。

俺もふつふつと胸の奥に湧き上がる感情に任せ、「はははははッ」嗤い続ける。「ひひひひひッ」嗤い続ける。「くははははッ」嗤い続ける。「ひぃーッ。ひぃーッ。おかしッ、嗤える、あははははッ。あはッ。あひあははははッ」

そうして、嗤い声に誘われてきたゴブリンの集団を見つけ、俺は言うのだ。

「二号。撒き散らせ」

と。

――塔に臓物の華が咲いた。

陸拾肆／

『故に貴様らには覇王の塔を攻略し、その頂上に凍結されている敵将を殺害してもらう。報酬として元の世界への帰還を与えよう。願うならば貴様らの世界での通貨を好きなだけ与えてもやる。どうだ。奮起するに足る条件だろう？

んんー、意味は伝わっているかね？　いや、おのれらのような猿が私たち機械文明人の言葉を理解できるようこれだけ言葉を尽くしているのだ。意味は伝わっているだろう。もしかすると伝わっていない可能性が存在するだろうが、貴様らは実に運がいい。

貴様らより以前に来ている同類は優秀だ。下等な猿の割には、だがな。

驚くべきことに施設を利用できるだけの知恵を持ち、私たちの意図とは大いに異なるが、真実の一端を見つけ出してもいる。これは私たちにとって猿が銃を扱ったことに類する程度の驚愕だ。

話が逸れたな。つまり、だ。これから貴様ら類人猿がすべきことを理解できない低脳（クズ）どもは、貴様らの同類の作った組織≪法の剣≫に所属し、蟲のように働くが良い。

成果を上げよ。我々の望みを果たせ。それが貴様らの役目である。

カウンターに支給品を用意してある。受け取っていけ。最も、貴様らにとっては無駄なものだがな』

嗤い声と共に講堂らしき場所に設置されていた大画面モニターから光が消え、画面に映っていた機械仕掛けの生き物のようなものも消え去る。

「なんなんですの？」

呟きながら昨日のことを思い出す。

一週間前、親友やその他多くの友人、知り合いが行方不明になった。それから再発を防ぐために学園で義務化した集団下校を監視し、ゲームセンターなどの生徒が入り浸る場所を教師や風紀委員とともに見回って周り、そうして家に帰り着き、夕食を済ませ、お風呂に入り、授業の予習復習。そして将来に必要な知識を得るために勉強を行った。

忙しくて、普段より少しだけ寝る時間が遅くなったことを反省しながら布団に入って、眠りにつき。

ここで目が覚めたのだ。

なぜか寝巻きではなく、学生服でなおかつ靴も履いている違和感があるが、寝巻きで放り出されるよりマシだと思うことにする。

ざわめき。振り返れば重い金属音。今まで巨大な金属棒で閉じられていた扉のロックが外れていた。

そして扉が開き、薄暗い講堂らしき場所から通路への道が開かれる。

そこに背広の集団が立っていた。一番前の、白い背広を着た男性がにっこりとさわやかな笑顔を浮かべている。

ハンサムだと思う。だけれど、奇妙なほどに糸目の男だった。

「初めまして。私たちは≪法の剣≫という、機械文明人ではなく、人類が作った組織の者です。

≪法の剣≫とは、貴方たちの来る一週間前にここに連れてこられた、貴方たちと同じ境遇の人たちが生き残るために、お互いが協力しあうことによって生まれた組織です。

もちろん大人や子供、お年寄りや男女の区別なく所属することができます」

ぽかん、と皆がいきなりの口上に棒立ちになる。白い背広の男はにこにこと微笑んだまま。

「ああ、いきなりすぎましたね。それではまずは皆さんの支給品を受け取りにいきましょう。歩きながら私たちの組織がどういった活動をしているのかや、戦えない方がどういった形で組織の力になっているかを説明したいと思います。

≪法の剣≫は老若男女、有能無能、有象無象の区別なく、≪法の剣≫に参加する者全てを保護いたします。私たちの目的はただただ単純な、この世界からの帰還。その際に誰一人脱落することなく、皆々様と手と手を取り合って、進んでいくことを約束いたしましょう」

微笑のまま言う白背広に周囲の期待感が湧き上がり、ほぅ、と周囲の人間からため息が漏れた。よくよく見なくともその人の色男っぷりは秀でたものがあったからだ。

集団が誘惑されたかのようにぞろぞろと動き出す。その中で、どこかの誰かが「≪法の剣≫とやらに所属しなくてもいいんですかー？」と声を上げる。若い声で、おそらくは調子に乗った学生か何かだろうと思われた。

集団を先導して歩いていた白背広はにこり、と微笑んで振り返ると。

「ええ、もちろん皆さんが≪法の剣≫に所属しない、という選択肢を選ぶこともできますよ。

その際のメリットやデメリットなどは自己責任でお願いすることになりますが。

はい、ええ、そのときはどうぞ、軍司令部の正面入り口から都市へと繰り出されると良いでしょう。もちろん≪法の剣≫は皆さんの邪魔などは一切いたしません。ご存分に都市を見学して回って結構です」

では、皆さん行きましょうか、と男は歩き出す。先ほどの暖かなものと比べて、非常に突き放したニュアンスのそれ。

メリットデメリットがどういったものかすら教えず、都市とやらに繰り出した後に、何をすべきなのか教えない声。

白背広は微笑みながら次々と非戦闘員が何をしているのか、などと話しているが、私（ワタクシ）の頭にあったのは別のことだった。

先ほどの言葉から感じた冷たいもの。他の人たちが気づいていない静かな隔意。

ほんの少しの棘のようなそれを見極めようと、微笑みながら歩く男の顔を人を掻き分けながらよく見つめる。

「ええ、そうです。最初に断っておきますが、皆さんの支給品は本部で平等になるように分けられます。それ以降は、非戦闘員には二種類の道が――」

笑顔。

しかし、将来の日本を担うエリートを育てる銀稜台学園の、生徒会活動で多くの人と話し、触れ、議論し、多くの生の感情に触れてきた私には理解できる。

彼の立ち振る舞い、言葉、表情。それを見て、彼の言葉も、表情も、感情を伴わないものだと気づかされる。

だけれど人々は、暢気に、穏やかな顔をして彼の話を聞いていた。

このような得体のしれない人物の言葉を。

全面的な信頼をおくには先ほどの表情は胡散臭すぎた。

（だけれど……）

熟考して、決める。

熱弁をし、周囲の了解を得、私自身が周りの人々を率いていこうという選択肢は外す。こんな右も左もわからない状態で、既に随分と進んだ組織がいる中、愚鈍な人々を率いて新しい組織を作っていこうなんてことは考えない。

周囲の能力がわからない以上、余りにも無謀。

（そもそもこのような非現実的な状況にいることからしておかしいのですけれど）

だから、私は考える。≪法の剣≫に所属することのメリットとやらを。

それは、正しいものだろうか。

それは、明るいものだろうか。

それは、人々の、私のためになるものだろうか。

考える。この長い廊下が終わるまでに結論を出す必要があった。

先頭を歩く人の様子を見る限り、きっとここで断った人を改めて

≪法の剣≫とやらが率先して勧誘してくれるとは思えないから。
そして、街を見てから≪法の剣≫に所属できたとしても、その待遇は最初から≪法の剣≫に所属しようと決めた人より良いとは思えなかった。
彼らの態度には傲慢さが感じられた。
彼らの態度には欺瞞が感じられた。
彼らの態度には私たちを上から見下すものが感じられた。
だから、考える。
≪法の剣≫は衣食住の全てを保障してくれる。≪法の剣≫は弱者に戦闘を行わせようとは考えていない。≪法の剣≫は仕事やここでの過ごし方を穏やかなものにしてくれる。
そこに所属することで己の生命と、権利を守ることができるのだ。平日働き、休日は休めるなんて日常を過ごすこともできるらしい。
彼らの提示しているそれは、けして悪い条件ではない（約束が守られるかは別として）。
とはいえ、このような右も左もわからない状態ならば、極上の待遇ともいえるだろう。
彼らが今説明しているように、支給品を差し出し、日々の労働に従事するだけでいい。後は、彼らが覇王の塔とやらの探索を終えるまで、耐えていればいい。
それでも、だからこそ≪法の剣≫に入るか、入らないかを、たどり着くまでに決めなければいけなかった。
私の性質からもそれは確かなのだ。私は流されるままに決めた決断の中に正しいものがあるとは思えない人間だったから。
ただ一人でさまようことになってでも≪法の剣≫から離れることを。
支給品を受け取るまでに決断しなければならなかった。

陸拾伍／

「山県さん、寝てないんですか？」
「さすがに徹夜はしないよ。きちんと一時間寝た」
「一時間、ですか？」
「うん、でも≪法の剣≫の忙しい部門はこの一週間殆ど軍司令部に缶詰だったらしいよ。研究、調査、組織作り。この前、タカぼんさんが彼らのしていることを少しだけ説明しただろう？　一週間でできることなんて本当に微々たるものなんだ。だからこそ、昨日一日、しかも夜からしか時間がなかったのはとても痛いよ」

補足するなら、昨日のパーティーは食事を摂ってる暇なんて殆どないくらい人と会い続けた。白背広の幹部とも話した。塔の技術を解析している部門の責任者、街の仕事を非戦闘員に差配している人事の責任者。普通に考えればなんのアポも取ってなかった時点で如何にパーティーだろうとまともに話をすることは難しいだろうが、タカぼんさんが話をつけておいてくれたらしく、多くの人が会いに行くだけで僕の話を”真面目”に聞いてくれたのだ。

そこで≪支配の杖≫の人事担当として顔を売ることができた。

まだまだ≪法の剣≫との人材獲得合戦にはこちらが小さすぎて至らないだろうが。それでもこのつながりは今後の役に立っていくだろう。

「山県さん。大変だったんですね」
「いや、タカぼんさんに比べれば、そうでもないさ」
「タカぼんさんは普通に夜は寝てますよ？」
「それはそうだよ。さすがのタカぼんさんも一週間貫徹なんてできないだろうからね。そうじゃなくて、戦略、探索、交渉、人事、情報、営業、会計、諸々を一人でやってたんだよ？　≪法の剣≫が数百人体制でやってたことを考えれば、やっぱりすごい。というか、

普通に寝てるんだあの人」

「寝てますよ。夜には部屋に入って、朝七時には起きてきてますし」

言いながら目の前の少女は首をかしげている。僕の言ったことを理解はしているが、それを想像ができないようだった。もちろん僕にだってタカぼんさんが何を目的にして、何をどれだけ行っているかは理解できていない。それでも、たった一日でも、本人と接し、その結果を見れば彼が普段何をしているかは理解できるのだ。

それに昨晩貰い、今手元にあるパンフレットの元になった資料を見る限り、作る組織についての展望は既にできているようだった。完璧なものだ。口を挟む必要がないほどに。その上で、走り書きされている数字などを見る限りでも具体的に必要なものの試算なども終えているらしい。

問題点としては、用意すべき人材のあてがないぐらいだった。

「彼は、最終的に何が目的なんだろう」

「帰ることじゃないんですか？」

「そう、思う？」

つぶやきに帰ってきた返答に言葉を返せば、隣の娘は難しそうに悩んでしまう。これは≪支配の杖≫に所属すれば簡単にわかることだ。いや、所属しなくても、あの人に従ってみればすぐにわかる。

ただ勝利だけを望んでいるには、タカぼんさんはあちこちに手を回しすぎている。組織だった動きが塔を攻略するために必要かといわれれば否だ。塔はただあるだけ、それに対して資金や装備などを効率的に集める集団が必要だとしても、≪法の剣≫や、タカぼんさんの資料にある情報戦や技術開発に特化した部署が必要とは思えないのだ。

もちろん、なくて構わないというわけではない。それらはきっと今後の役に立つだろう。しかし、戦闘や探索に優先するものではな

いはずなのだ。

そう、これではまるで、……誰かと戦争でもするかのような――

いや、それでなくても≪法の剣≫と競うわけでもないのに、競争や争いを助長するような組織作りの予定だった。つまるところ競争がなければ成長しにくい組織作りだろうか。どうしても資本主義の世界で生きる企業のような、きちんとした戦略に沿って競争的に動く企業の形しか見えてこないのだ。

（何を敵として戦うつもりなんだろう……）

≪法の剣≫と？　いや、まさか、あそこまでべたべたに蜜月を築いている彼が、どうしてそんな組織作りをする必要があるのか。

悩みながらも今日使うパンフレットを用意した長机に並べていく。これを読んでもらえるのだろうか。

スペースは一応、タカぼんさんのコネで≪法の剣≫の人材受付の近くに用意することができた。宣伝自体は立て看板くらいしか用意できなかったが、声を張り上げれば済む話だ。

いや、内藤がそばにいるからにはその色香によってきた連中を雇えば……。首を振る。そんな連中、こちらからお断りだ。巨大な組織に成長したなら内部発生で防ぎようがないが。最初から色香で人材を得たとしても、それは健全な組織経営に必ず支障を来す。

だけれど、タカぼんさんはそのために制服や制度を用意したのだろうし、結果さえ出ればそんなものはどうとも思わないと思う。

それが上に立つ人間としての彼の性質だ。寛容なのではない。そもそも下の人間にはその程度の期待しかしていない。話せばわかる。彼に真に必要なのは人材としての人間ではなく、五体が満足にそろっていて、忠誠心のある、頭の出来などどうでもいい労働力だ。もちろん頭が良い事は悪いことではないのだろうが、ことさらにそれを望んでいるようには見えなかった。

内藤への対応から理解できたことだった。

彼は、頭の良い人材を殊更欲しがってはいない。
それに、色恋を目的とした連中ならば御すことのできる覇気や指導力を彼は持っている。だけれど、これから組織を運営していく身としてはそれは言語道断だった。
そんな浮ついた連中を仲間にしたくはない。仲間、そう、これから命を預けあうのにそんな真似をする人材が紛れ込んではこちらの命が危なくなる。十重二十重に延命策を持っているタカぼんさんと僕は違う。僕には大局を見るような視点がない。ならば周りに少しでも信用に足る人物を配置する必要があった。
金や名誉が目的の人物、恩義や惰性で生きる人物、それらならばまだ安心できる。しかし色恋だけは信用できなかった。
あの≪カラミティ・ブルータス≫の海雲を思い出す。
龍村勝香に骨抜きにされた、ただ彼女の言うことを聞くだけの人形。僕の隣にいる内藤の色香に誘われた人材を集めた結果、≪支配の杖≫が内藤の、内藤のための組織になっていった場合。
内藤を特に意識していない僕など早々に厄介払いされてしまうに違いない。
そのためには……。隣の内藤を見る。先の質問に対する答えは考えても仕方がないと思ったのか、これからくる人材を期待して、僕の作った資料を楽しそうに読んでいる女学生。
万人が惹かれるだけの魅力を持っている彼女は。不思議と、いつかタカぼんさんに対して牙を向くのだろうと思われた。
いや、タカぼんさんがときおり見せる邪悪さにも似た不敵さ。それと昨日の内藤の決意を照らし合わせれば、きっとそれは間違いではないのだろう。

（馬鹿馬鹿しい。人類同士で争う必要なんてないはずだ）

そんな夢想を浮かべた僕は、首を小さく振って遠くに見える塔を見た。そして、人の気配が溢れてきた軍司令部入り口。

僕らと同じ塔に捧げられる生贄たちがやってくる方向へ顔を向ける。

ふと、思う。

（もし、内藤が牙を剥くなら）

彼女が一人きりならばそれは防げるだろう。１０人程度ならば考えを変えられるだろう。しかし５０人や１００人もいたならば彼らの代表として内藤は決して止まらない筈だ。

僕がするのはその芽を潰す事。タカぼんさんに内藤をけして反逆させないこと。

平穏な生活を守りたい。けして僕が前線に出ることなく、生活の糧を得ていくこと。

タカぼんさんの命を守ることでそれが叶えられるなら、僕の仕事は、けして手を抜けることではない。

陸拾陸／

「戦争から逃れられたかと思ったら。こっちでもそれかよ……」

「へ、戦争ですの？」

隣に立っている男の人の言葉に首を傾げる。目の前には支給品を受け取っている長蛇の列、その中ごろにいる私たちはぼーっと突っ立って、列が消化されるのを待っている状態だった。

「戦争、知らないのかよ。あー、金髪縦ロールとか。外国の人か？」

「いえ、正真正銘日本人ですけれど？」

「ははは。馬鹿いうなよお嬢さん。戦争が起こってるのは日本。俺たちの国だぜ」

「はぁ？」

馬鹿にしたような笑いが自然と出る。日本で戦争など起きるわけがない。最近は政情も安定しているし、昨日のことならきちんと覚えている。戦争など起きていなかった。

国の要とも言える要人を幾人も輩出する土地、銀稜台は平穏だった。戦争が起こったのならまず間違いなくなんらかの標的になる銀稜台が平穏だったのだ。ニュースでは何も言っていなかったし、目の前の男は嘘つきか誇大妄想狂の類だろう。

「はいはい。そうやって周囲に不安をばら撒いて何をしたいのかはわかりませんが。そんなばればれの嘘に引っかかりませんわよ」

「おまえさん、ニュースも見てねぇのか？　一週間前、東京と別府に核を落とされて、三年前に焼かれた京都がもう一度焼かれた。九州には中国の兵隊がうじゃうじゃ上陸して、北海道はロシアのモン。連合軍が関東を占拠して、各地で各軍がにらみ合い。自衛隊なんて初日に善戦したはいいものの、後は連合にフルボッコだよ。この一週間、日本国民は身の休まる場所もなかったんだぞ？　おい、どこの田舎出身なんだてめぇは！」

「田舎、って。凍狂（トウキョウ）に次ぐ政治の要、銀稜台ですわ！　なんなんですのその状況。嘘を言うのも大概にしなさいな。もう。それにそんなに大量の戦力がこちらになんかこれるわけないでしょう。灸朱（キュウシュウ）や日本海にはわが国の優秀な兵が防備を固めているんですのよ」

「銀稜台、って。聞いたことねぇな。ったく、話にならねぇ。おいッ。日本が戦場になってること知ってる奴はいねぇのかッ！！　昨日今日のことだぞ！！」

ざわざわと周りがうるさくなる。黒い背広の男たちも困惑気味だ。そうだろう。この方たちがこちらに来たのは一週間前。そんな短時間で戦争などが起きるわけがないのだ。しかし、男の言葉に反応し

てかあちこちで声が上がる。

「おう、俺も戦争は知ってるぞ」「俺もだ」「私もよ。核が落とされる前の東京から逃げてきたの」「あっちはどうなってるのかしら」「政府が連理を見捨てなければ」「いや、連理が日本人を見捨てたらしい」

そんな会話がなされている。どうしてか戦争を知っている者たちで集まっているようだった。連理？　なんのことだろうか。

ざわざわと集まって声が満ちていく。あの集団に集まらなかった私たちからは困惑が漏れていく。戦争なんか、本当に知らないのだ。

「皆さん、どうされたんですか？」

喧騒を聞きつけてか、戦争戦争といっている集団が、纏まったのを確認してか、私たちをここに連れてきた糸目の白背広がやってくる。手近な黒背広が慌てて状況を説明しだすものの糸目はにこにこと微笑んでいるばかりだ。

「そうですね。そういうこともありえるかもしれませんが、とりあえずは支給品を受け取ってからにしましょうか」

「はぁ、それで、戦争、ですけど」

「大丈夫です。帝国はけして負けません。そんな状況になっていたとしても最後の一兵まで戦い抜くでしょう」

「ですね」

白背広と黒背広たちはそんな不安になるような会話を残し、私たちを機械的に整列させるのだった。

陸拾漆／

「あ、タカぼんさん。戻ってきたんですか？」
「ああ。何か問題が起きたらしくてな。って、お、縦ロールすげぇ。じゃなくて、初めましてか。で、誰だ？」
「初めまして。美咲。こちらの方は？」

軍司令部から新しく来た人員に関する重大な問題が発覚したという報告を≪法の剣≫から受け、ゴブリンの解体講習を切り上げ戻ってきたところ。≪法の剣≫の登録所のところで捨て犬のように意気消沈している二人組みと、その二人の傍にいる新規組らしき金髪縦ロールを発見し、話を聞いてみることにしたのだが。
内藤の隣にいる金髪縦ロールに声を掛け、他にも周りを見てみるものの。

「入ったのは一人、か？」
「あ、うん。その、すみません」
「なんで山県が謝る？　今回はほとんど準備なしだったからな。仕方ない。それで」
「うん。彼女は内藤君の知り合いらしくて、内藤君がいるならってことで入ってくれるらしいんだけど」

山県は小声で「まだ子供だよ。ごめんね」と一人入ったという新人を指差した。内藤はなぜか勧誘が芳しくないという理由以外にも顔色も悪くさせ、顔を俯けている。
新人に目を向ければ、確かに、内藤と同年代らしい１６，７の少女だ。そこそこ背は高く、大人びてはいるようだが、やはり使う使えない、という視点から見れば子供という印象は拭えない。

「龍郭院桐葉（リュウカクインキリハ）ですの。よろしくお願いしますわ」

「金髪縦ロール……」
「先ほどから何か問題でも？」

珍しいんだよ。そんな大仰な髪型、というのを堪える。カールしたのならまだしも、完璧に漫画やアニメの髪型だったからだ。

「いや。ない。ただ、手間のかかりそうな髪形だと思ってな」
「そんなこと貴方には関係ないでしょう。それで貴方は？」
「ああ、≪支配の杖≫のトップ、連理貴久だ。気軽にタカぼんとでも呼んでくれ。それで、どうしてうちに入ってくれたんだ？」

十人に九人は美貌で振り返り、残りの一人をカリスマで無理やり振り向かせる魅力を持っていそうな金髪縦ロールの少女はぶるん、と揺れそうな胸を張って、内藤を指し示す。

桐葉とやらは、根本から先まで完全に金髪の割には顔の造詣は日本人めいていた。どうにも外的印象がちぐはぐで奇妙な少女だ。銀髪日本人顔の内藤にも言えることだったが。

「”南雲”美咲がいるからですわ。彼女がいるなら悪いところではないのでしょう？」

さっと顔を青くした”内藤”に、俺は顔色をまったく変えず頷いた。

「そうだな。内藤がいるなら倫理面や道徳面ではなんの問題もない。ただ、≪法の剣≫より経済力、技術力では劣ってるぞ」
「結構。私が入る以上それらの面は必ず追い上げてみせますわ。それで、内藤？」
「こちらの話だ。それで、内藤？」
「は、はいッ。その、なんですか……？」

「びくびくするな。名前はそのうちお前から話せ。別に責めはしない」
「は、はい」

とはいえ、顔色は戻らない。罪悪感のこもった表情のまま、内藤は顔をうつむけ、そうして拾って欲しそうな野良犬のような仕草でこちらを見るのだ。

面倒になって頭を掻く。ため息をつきながら、内藤の頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜるようにして撫でた。

「落ち込むな。理由があるんだろ？　別に責めやしないよ」
「あの、……はい」

落ち着いたらしい内藤の頭を軽くぽんぽん、と叩くと。さて、と軍司令部の入り口へと顔を向ける。

武満を待たせないうちにさっさと行かねば、と思ったところ。遠くに鹿島の姿が見え、手をあげて向かおうとしたところで。

「連理！　連理じゃないか。お前もここにいたのか」

と別に懐かしくもなんともない、覚えのない音に声を掛けられた。

陸拾捌／

若い。

「久しぶりだな。お前は無事だったんだな。
って、なんだよその格好はッ。アニメのコスプレか？　あははッ。いや、懐かしいな！」

声を掛けてきた男を見た。無遠慮さと無思慮の入り混じった表情、汚く染めた茶髪に日本人的な顔。

思い出そうとするものの、思い浮かばない。だが、”懐かしい”？

（誰だ？　昔に会ったことのある有象無象か？）

しかし、俺を俺と知って声をかける奴？　頂点に立っていたころに顔を見せていたのは一部の、人種を問わず、高齢や中年の、金と礼儀を知ったおっさん連中が主だった。馴れ馴れしく声を掛けてくる、こんな若い年齢の奴などは一人もいない。いても敵ぐらいだった。

そして、俺と敵対できた個人は最終的に誰もいなくなった。だから、結論として、

「誰だ。お前」

思わず渋い声が出た。頂点から降りた後の”大学”の知り合い連中の中にこいつはいないし、そもそも俺を知っている人間ならばこんな安易に声を掛けてくるはずがなかったからだ。

俺の声にぽかん、とした顔の男は。呆れたような顔を見せ、直後に落ち込んだ顔をした。演技くさくとも多少は本心の感じられる行動。

「あー。俺だよ。俺。岩村だよ岩村。高校のときのさ」

「高校……？」

高校のときのクラスメイト……。ああ、こんな顔もあったかもしれない。

「それで、なんだ。高校のクラスメイトがなんのようだ？」

「え、いや、声かけるだろう普通。知り合いに会ったら」

俺は知り合いじゃない。なんて言ったら、しつこく食いついてきそうだったので黙る。

目の前の男は、それでも何か話したそうなのか、口を開いた。

「それで、お前はここで何してるんだ？　相変わらず……。おッ。すげぇ」

「タカぼんさん。お知り合いですか？」

「すげぇ美人。なに、連理、知り合いッ？　すげッ。うわ、モデルかなんかか？」

ぽーっと、一瞬で内藤の虜になった男は興奮して言葉を捲し立てる。

額に手を当てる。暇なときであったらいくらでも相手をしてやれたが、そんな暇はない。ため息をつきながら内藤にあちらへ行けと指示を出そうとしたら、

「あら、先ほど戦争男ですわね。ここへ何の用ですの？」

「チッ。なんだよ。田舎娘かよ。お前こそ、何の用だよ。いくら美人でもこう性格が悪くちゃな」

なんて言いながらも、目は胸や太ももなどに向いている岩村。余りにも露骨すぎる動きに俺もため息を付きながら二人の小娘にあちらへ行けと手を振る前に、岩村がくるりとこちらへ向いた。

好色そうな目と醜くゆがんだ唇。俗物の考えそうな、俗っぽい思考が透けて見えた。

「おぅ。なぁ、連理。こいつらお前の連れか？」

「ああ。うちの組織のモンだ」

「ぷッ。組織って、あー、えっと、なんだ」

きょろきょろと岩村はあちこちを見回して、山県の座っている机を見た。

机の上には山県の作ったパンフレットが、訪れた者が取りやすいように置いてある。岩村はそれを無遠慮に取り、

「は？　≪支配の杖≫って。アニメかなんかか？　あ、いや、俺も≪法の剣≫とか言う組織に入ったけどよ。俺、お前のその≪支配の杖≫だったか？　≪法の剣≫辞めて、お前のに入ってやってもいいぜ。もちろん、そこの娘つけてくれよ。どーせお前も毎晩楽しんでるんだろ？　へへへ」

見れば、確かに≪法の剣≫のエンブレムの入ったバッチを岩村は付けていた。黒背広をもらえなかったのは苛烈な指示に耐えられる適正がなかったからだろう。納得である。

「タカぼんさん」

内藤の言葉に振り返れば、下劣な視線と発言に、内藤と縦ロールがそろって身を引いていた。

流石に耐えられなかったのだろう。それでも俺の知り合いのためか、そろそろと俺の袖を引っ張りながら遠慮気味に内藤が口を開く。

「あの、知り合い、なんですか？」

「あー。らしい、な。俺は覚えてないが」

「だからひでぇな。クラスメイトだろう。岩村だっていーわーむーらー。お前、いい加減。あー、なんだ連理君。お前、あれがそうと堪えてたのかぁ？　ひひひ、いじめてやったもんな。お前のツレ」

「いじめって……。タカぼんさん？」

いじめ……？　いじ、ああ、あれか。

高校のときのよくわからない一時期を思い出す。結局、俺の高校生活側の友人が面倒に巻き込まれた件だ。

隣の内藤が不安そうな顔で見てくるのでとりあえず真実だけ教える。

「声を掛けられる価値もないのに無視したような気分になって、届きもしないのに不明瞭な噂を流した気になって、やったはずの嫌がらせが何も俺自身に届いてなかったからといって、俺の友人を集団で嬲ろうとする。

そんな考えなしの行動で無理やり届いていたような気になるなんてな。それはそれで有象無象が如き愚かな思考だぞ。岩村。

そうだ、僻地に飛ばされた父親は元気か。貴様のような家畜どもには親からの言葉がよく効いただろ？」

「はぁッ？！　親とか関係ねーじゃん。って、親父が急にやめろって言ったのはお前がチクったのかよ」

「チクる、ってやっぱ効かなかったか。給料下げて転勤させておいてよかった」

「はぁッ？！　何妄想ぶっこいてやがんだよ。ったく、たまたま俺らの親が同じ時期に面倒なことになったからって喜んでんじゃねーぞ。この残念イケメンがッ」

素っ頓狂な声を上げた岩村が睨み付けてくるが、余りにイタい昔の知り合い（だと思われる人物）に出会ったことでやる気が根こそぎそがれている俺には行動を起こそうとする気力が湧かないし、そもそもこんな小物の睨みなんぞ本気のゴブリンの殺意に比べたら蚊に刺されたほどにも痛痒を感じない。

「内藤、龍郭院。お前ら、勧誘に戻れ。これは、あー、≪法の剣≫

に引き取ってもらうから」
「引きとッ?!　ってめぇ。いい加減にしろよ！　お前のあの噂を流してもいいんだぜ。バレたらここにいられると思ってんのかよ」
「……だから」

なんの話なんだ、と岩村を見れば。岩村は岩村なりになにか奥の手があるようだった。俺についての不明瞭なうわさを高校の時分撒き散らしていたからなんだか自信過剰なのだと思っていたが、どうにもそれは根拠のある話だったようである。
それは、岩村にとってなんだろうが。

「へ、へへへ。そうだよな。あんな話が広まったらここにいられなくなるんだからな。それで、俺を」
「いや、何の話だよ」
「『比翼　心』だよ」

間。俺の沈黙が作った小さな間。しかし岩村の顔色を変えさせるには十分な間だったらしい。
俺の無言を真実と見て取ったのだろう。岩村の口は滑らかに動き始める。

「へ、へへ。そうだッ。やっぱりそうだった。お前、心の奴を犯ッたんだろ。ひ、ひへへ。な、なんだよ。やっぱりあの噂は本当だったんだな！　あ、あはは。お前、お前の取り巻きに叩き潰されたけどよ。あの噂は――『どれだ?』――は?」

気が、変わった。このような愚物の相手などほどほどにしておけばよいと思っていたが。ここまで調子付いた態度をとるのならば真面目に相手をしてやってもいい気になれる。
それに、比翼心についてここで聞くなんて、とてもとても不愉快

だ。

「どの、噂だ。岩村。ここで真贋を見極めてやる。どの噂なんだ。俺は寡聞にして知らんが。雀が如き貴様の軽率な口ならば囀ってくれるだろう？

噂ってのは心のどれで、なんの話なんだ？」

「あ、いや、お前。あんな噂が広まったら、ここにはいられなくなッ」

頭の悪さに辟易するも、そんなものは再会した瞬間にわかっていたことだ。こいつは壊滅的に頭が悪い。しかし、それを自覚していない。それだけである。

嘲りと共に、口を開いた。

「お前、俺を脅すつもりだったのか？　お前しか知らないような噂ひとつで俺を脅してどうするつもりだったんだ？　俺が強く否定するかお前が三流の詐欺師だったとでも言えば済む程度の問題で、何を得意ぶってるんだ？

それとも、その程度の問題で揺らぐようにお前には見えるのか？

高校だったか。そのときに俺の耳にすら届かなかった噂で、何をしようとしているんだ？」

「あ、あのときと状況はちげぇだろ。ここには、てめぇにはてめぇべったりだった野郎共はいねぇッ。つーかッ。てめぇが心の奴を犯して孕ましてぶち殺したんだろうがッ！！　この、殺人者がッ！！」

しん、と軍司令部のざわめきが収まった。直後にざわざわと、俺たちを取り囲むように小さな囁きが交わされる。殺人者、レイプ、殺人者、レイプ、殺人者、強姦、殺人、殺人、殺人……。

内藤がこちらを見ている。山県が見ている。龍郭院がこちらを見ている。そして肉人形は無言で立っている。

黙って聞いていた鹿島が岩村のエンブレムを確認して慌てて走ってくるのが見えた。そして、俺は、腹を押さえるようにして、嗤いを堪え。直後に――

「くッ。ははははははは

ぶぺぁッ？！」

俺の、笑みが凍る。

余りの対象の愚鈍さに、噂の拡散すらに面白く、目元が緩んでいた俺の前で岩村の身体が宙に浮いていた。その隣には、焦った顔で足を振り上げた鹿島がいる。

「あ、いや、ほっといてよか「すみませんでしたッ！」

ずるずると蹴り飛ばした岩村の頭を、コンクリートが砕けるほどに地面にたたきつけた鹿島が同じように地面に頭を並べて、謝罪の言葉を吐きだしていた。

余りの出来事に頭が一瞬にして、冷えた。周りを見ればざわざわと俺を見る視線。視線。視線。その多くが俺を不安そうに、俺に預けていた信頼がなくなることを恐れる目をしていた。傍らを見れば内藤や山県が疑念を向けてくる。

冷静に口を開く。

「あー。いや、気にしてないぜ。≪法の剣≫の下っ端が、お前らと、対等の立場にあるはずの≪支配の杖≫のトップに馴れ馴れしく声を掛けたあげく、いい加減で中傷的な内容の話を本人が否定する前で、周囲の人間に聞かせようとしたがな。

俺は気にしていない。そもそも、たかが強姦ひとつ、殺人ひとつ、広まったところでなんの問題もない」

岩村の背後に一個軍が控えてるのならともかく、一週間かけて築いた”連理貴久”はその程度の噂で揺らぐようなものではない。

落ち着いた俺の様子を見て、案の定遠くから相手をしてやっていた子供たちが走ってくる。何度も何度も話を聞き不安を取り除いてやっていたおばさんやおっさん連中がやってくる。相談に乗ってや

っていた黒背広を身に纏った人々がやってくる。それらの視線は頭を下げる鹿島ではなく俺の方を向いていた。

同じ組織の鹿島ではなく、俺の方を向いていたのだ。

手を上げた。それだけでざわつきがぴたっと収まり、俺の方をみんなが見る。

「おう。なんでもない。昔に相手をしてやらなかった馬鹿が拗ねて癇癪を起こしただけだよ。ほら、仕事に戻れ。俺が武満に文句を言われるだろう？」

満ちていた声に安堵が混じる。一時は不信の篭っていた視線に信頼が戻ってくる。

懐かしい感覚だった。かつて俺は、これ以上の信頼に満ちた視線を浴びながら歩いていたことがあった。

支配のなんたるかを思い出しかけるも、首を振って眼下にある頭二つに頭上から声を掛けてやる。

「頭を上げろよ。そっちの阿呆も持って帰れ。今回は貸しひとつにしてやるからさ」

見れば、鹿島の全身から怖気を催す殺気が溢れていた。

俺が、鹿島の予想以上に求心を≪法の剣≫の内部に得ていたことについて。否、老若男女問わず支持を得ていたことについて。

「あ、アンタはッ。いや、タカぼんさん。本当にすみませんでした」

武満に対して脅威になりそうな俺に対しての、殺意を堪えるようにして鹿島の頭が上がる。

武満に俺に手を出すな、と言われているのだろう。にこり、と渾身を込めて作られた、歪んだ笑みが内心を表していた。

そもそも、土下座なんぞいくらの価値もない。ないが、武満の腹心にこれだけさせたんだ。俺が怒ってしまえば示しがつかない。

もちろん、不当な言いがかりに対して怒りを湧かせる義務などないので何も問題はないが。

それでもこの事実だけで、交渉の際に、吹っかける理由にはなっただろうから、それをこうして潰そうと努力する鹿島はやはり得がたい人材だ。

本当に俺が怒っていないのを雰囲気で察したのだろう。鹿島が安心したように殺意を緩める。

「おらッ、てめぇも本当なら八つ裂きにしてやりてぇところだが、≪法の剣≫に入っちまってたんだ。

貴久さんに謝れ。土下座で、誠心誠意を込めて、だ。

適当なことしたら殺すぞ」

ごりごりと地面と顔面で熱烈なディープキスを演じていた岩村が顔を上げさせられる。それを見てぶはッ、と思わず噎いが漏れかけるも、傍にいる内藤を意識して鎮痛な顔を作ってやる。

見れば目の端に涙を浮かべた男は先ほどまでの生意気さと無知さの混在したふざけた笑みを浮かべる余裕もなく、ただただ困惑していた。

顔に張り付いた砂や小粒の石がぽろぽろと落ちる。血の混じった唾液がつぅっと、地面に垂れていた。

「あー。なんだ。キニシテナイヨ。だから、あまりちょっかいを出すな。

そもそも俺とお前って、交流あったのか？」

うん？　と見れば岩村の顔が困惑から憤怒に染まり、直後、がつん、と鹿島の手によって地面にたたきつけられていた。

「謝れ。これ以上、俺に恥掻かせるんじゃねぇよ。
いや、すみません。タカぼんさん。アタシの不手際です。
ほら、謝れ。謝れ。謝れ。謝れ。謝れ」

ごす、ごす、ごす、ごす、ごす、とコンクリートに叩きつけられる岩村の顔面。撒き散らされる血とぶちぶちと抜けていく髪の毛が≪支配の杖≫の勧誘スペースの前に散らばっていく。

このまま見ているのはそれはそれで面白いが、内藤と龍郭院、それと山県が怯えている。それに、このまま勧誘スペースの前を占拠されても今後の活動に支障が生じるだけだ。

「あー。鹿島。その辺りでいいわ。
制裁のつもりなんだろうがな。うちのスペースが血と恐怖で染まるのは。
ちょっと、困る」
「おッ。あ、いやいや、すみません。
ちょっと、熱心に過ぎましたね。――ほら、謝れよ。俺にばっかり謝罪させるつもりかオメェは」

がつん、と岩村の顔面が一際強くコンクリートにたたきつけられた。

「……ず、ずみまひぇん……」

コンクリートと顔面の隙間から血泡混じりの言葉が吐き出されたのはそれから10秒ほど待ってからだった。しぶしぶというよりもこれを言わなければ殺されるという切迫感のあるもので、なんとなく誠意というものが混じってるような気がしないでもない。

「はいはい。それでいいよ。だからそれ持って帰れ。あと、スペース掃除しろよ」

終わりの気配を察して、山県が血の飛んだパンフレットを撤去しようと指でつまんで持ち上げている。俺も顔を抑えるようにして笑みを殺し、困った風に振舞う。

「あと、なんだ。今後はあまりないようにな」
「”うち”からは出さないようにしますよ」
「はいはい。”それ以外”は俺がきちんと躾けるさ」
「はい。それじゃアタシは失礼させていただきます。おいッ。こっち見てるお前らッ、モップ持って来い！
それと、タカぼんさん。大将が早く来い、と」
「わかってる」

そも、俺を脅すなんて真似ができるなんて考えている阿呆がどれだけいるか。……いや、岩村のように高校時代の奴、か。
俺に勝利した唯一の人間、”比翼　心”を知る者。
ずるずると髪の毛を鷲掴みにされ、引きずられていく岩村を見ながらそんなことを思う。
豆腐屋の友人が余りにも無邪気に「一緒の高校に行こう」なんて言うから通っただけの高校だったが。

「あ、あの。タカぼんさん」

じーっと鹿島を見ていた俺に内藤がようやく、といった口調で話しかけてくる。

「うん？　ああ、何も問題ない。”比翼　心”に関してだけは、俺から奴を傷つけるようなことは”何も”できなかった。

それと、見てのとおりだから≪法の剣≫とあんまり問題起こすなよ。
俺がお前らに注意するだけならまだしも、あいつらにお前らを引き渡したくはないからな」
あれがデマだと教え、ほっとした顔をした内藤にすかさず適当な冗談を吹き込めば、即座に顔を青くする。
だから内藤やらににこりと安心させるように微笑むと付け足すように言ってやった。
「冗談だ。武満とはそれなりに仲はいいがな。
そこまで奴を信用しちゃいないよ。引き渡す、なんて外道な真似できるもんか」
さぁ、俺もさっさと行かなきゃな。
まだ怯えてる、というよりは周囲の血や肉を困ったような目で見ている三人に後を任せると、まだこちらを見てくる≪法の剣≫の下っ端どもが安心するように手を振りながら、さっさと軍司令部へと向かうのだった。
陸拾玖／
「で、問題ってのは？」
席についた俺の前で武満はつまらなそうな顔をしている。
「下の者の非礼を詫びよう。つまらないものだが受け取ってくれ」

黒背広の持ってきたものを見て、俺は顔を顰めた。桐の箱に入れられたいくつかのパラメーターアップアイテムだ。１０ＵＰも中には混じっている。

「いらんよ。俺とお前の仲だろう。貸しにしといてやるよ」

「いいから。――受け取らないか。連理貴久」

空気が凍る。先ほどの鹿島の蛮行や雨宮の姿が脳裏にちらついた。三号が少しだけ俺の傍に寄る。

「で、それはそれとして、何が起きてるんだ？　余り重大そうにも見えないが」

舌打ちが目の前の男から零れた。武満は手を振って桐の箱を持たせた部下を下がらせる。そうして足を組むと、テーブルの上にばさり、と名簿らしきものを広げた。

一枚ほど拾い、目を通す。

それは、≪法の剣≫に属する９００人余りの人間の個人情報ではなく、新たに参入した者たちのデータだろう。

紙に書き込まれた名前や情報に見覚えはなかった。

「今まで重要視してなかったから進んではいないが、突貫でまとめさせた。そいつは資料だ」

履歴書のような紙に付属したＡ４用紙に書かれたいくつかの質問。それのひとつに赤丸があった。そこを見ろということだろう。

数枚ほど捲くり、見て見ると。

Ｑ・あなたは元いた世界でどこに住んでいましたか？

Ａ・東京

Q・あなたは元いた世界でどこに住んでいましたか？
A・凍狂

Q・あなたは元いた世界でどこに住んでいましたか？
A・凍狂都銀稜台

Q・あなたは元いた世界でどこに住んでいましたか？
A・闘卿

「……？」

捲くってみる。凍狂凍狂饗徒那羅北海道銀稜台青森山梨銀稜台凍狂金我和東京朽兎洲銀稜台……

目頭を押さえた。出身。これが、出身？

「紙あるか？」
「ああ」
「書くものも」
「持って来い」

武満の指示で黒背広が慌てて部屋の外に出て行く。数分もすれば戻るだろう。そう思いながら資料に目を通す。

漆拾／

白い紙に日本列島を書いていく。北海道、本州、四国、九州、沖縄。後はあちこちの島などもだ、かつて”知覚”していた領域をペンでなぞっていく。

見ている武満の顔が難しくなっていくことも気にしていない。俺も、視界の端で黒背広が同じように書いているものが目に入っているからだ。

全く同じもの。日本列島と呼ばれるもの。しかし、俺が書き込んでいくそれは武満たちのとは中身が違う。地名が違うのだ。

闘卿ではなく、東京。金我和ではなく神奈川。饗徒ではなく京都。

「タカぼん。これが、私の世界の日本。そしてこちらが銀稜台出身者に書かせた日本だ」

そうして、お互いがお互いの地図を見、最後に銀稜台出身者に書かせた地図を全員で見た。

東京や千葉、山梨や埼玉、それらの端や真ん中を無遠慮に、無思慮に、抉るように存在するぽっかりと空いた、関東の巨大な空白。

そこに丸い、女の使う文字で書いてあるのだ。

”銀稜台”と。

漆拾壱／

銀稜台は始まりとして、神話の時代まで遡る。イザナギ、イザナミのクニ造り。そしてその後のイザナミが黄泉の国の女王になるまでの話。

そしてイザナミの死。それに続く黄泉返りの話。

銀稜台成立の話の裏にはそんなものがあるのだという。

そういう神話のような実話を下地として、その世界の日本は歴史を歩んで行った。そして、第二次世界大戦。イザナミの隠れていた黄泉の国の入り口が富士の樹海の中にあり、そこから漏れる瘴気が世界各所の霊脈に干渉し、いつかこの世に大災害を起こすだろう、というのが日本が戦争を吹っ掛けられた切欠だったのだそうだ。

何でイザナミイザナギで関東の霊峰が出てくるのかとか、樹海に入り口ってなんだそりゃ、とか千葉は関係ないだろう、なその辺りはまぁいい。いろいろとあったんだろう。

これは銀稜台の話である。

結末として大戦で日本は負け、富士樹海を中心とした関東地方に新型爆弾が落とされ、更地となった地域は封鎖され、ドサクサ紛れに消失した辺りの地域を巻き込んでかつての青木ヶ原樹海を中心とする円形の巨大都市が作られた。これが銀稜台の結末である。地図を見る限り、爆弾の余波で無関係な地域がかなりやられているが、それはそれとして銀稜台、ねぇ。

南雲財閥を始めとする戦前から有名だった企業が資本を投下し、作られていった学園都市。……はじめから教育機関を中心に？　いや、それはどうでもいい。問題は、

「三つの世界から、か」

「同じ地名の別の世界という線もあるが、その辺りは考えなくていいだろう。最低、三個以上の世界から来ているようだな。タカぼん、これはどう考えるべきだろうか。

”これは”、なんの意味があるんだ？」

一つの世界からじゃリスクが大きいから？　馬鹿な。そんなわけがあるか。それならそもそもこんな大規模に連れてこないだろう。少なくともひとつの世界から百人以上の人間を連れ去って――、否。そもそも、一人や複数など考える前に、この俺。”連理貴久”を連れてきた時点でリスクなど度外視していると考えている。

ここで使われている道具などを見る限り、下調べも万全だ。つまりは、俺たちの世界の常識などをきっちりと学んでいると考えていい。その上で世界のひとつやふたつ、相手にしても負けない自信があるからやっているのだ。

その推測は恐らく正しい。

かつて率いていた勢力と戦力を比較すれば、確かに機械帝国と正面切って戦ったとしても、俺の世界が勝ることはない。それは俺が”連理”を率いた場合でも同様だ。機械帝国と人類では科学力が余りにも隔絶し過ぎている。

話を戻そう。

「……意味。意味、か。順当に考えるならば俺たちは奴らの欲するなんらかの基準を満たしているから連れてこられたと考えていいんじゃないか？」

「”選ばれた”と考えるわけか？」

「貧乏くじを引かされたわけだ」

冷笑を交し合う。もちろん、それだけではないだろう。

基準値を満たしている奴がいるとしてもそれはごく一部だろう。

俺が発案者なら必ずそうする。

「機械帝国の本命がそいつらだとして。いや、もう率直に言おう。本命は銀稜台だ。内藤、龍村を始めとした勇者の卵どもだ。青いケツに殻のついた未熟者どもだが、あれが機械帝国のド本命だな」

「……そう、だろうな。それでタカぼん、俺たちはどう説明する？」

「単純に本命のための露払い、と考えてもいいが。それだと賭けの要素が浮くからな。それなら単純に本命に優秀な支給品を与えたほうが早い。そう考えると、奴らの側の問題だろう」

「なるほど。言いたいことがわかってきた。つまりは」

武満の口元が笑みの形に変わる。

「奴らも一枚岩ではないというわけだな。本命以外にも要素を投入し、場を混沌とさせている。それも本命が害されるかもしれないという可能性を孕んでまでだ」

「ああ、俺たちの生存の目もそこだな。今後出てくるであろう機械帝国の人間を如何に扱うかによって俺たちの今後も変わってくるだろう」
「願わくば、勇者を支援する勢力でなければいいが」
「なに、少なくとも現在依頼を出している側はそうではないだろうさ」
「どうしてそう思う？」
「報酬が安すぎる。本命に与えるならもっと重要なものだからな」
「違いない。たかが金だのアイテムだのよりももっと重要なものがあるだろう」

それは、施設の利用権や塔についての情報ではなく。

「ＩＤ。こいつを与えなくては如何に勇者だろうと死の危険に晒される」
「ああ、そうだろう。塔の中でしか手に入らないこいつこそが、塔探索において重要位置を占める。
それに、だ」

含みを込めて武満は俺を見る。

「こいつは私の予想だが。なぁ、タカぼん。
ＩＤに入ってる情報を利用することこそが、正道で塔の階層情報を取得するための方法なのではないのか？」
「何故そう思う？」
「二度も続けば偶然ではないだろう」

一度目は、あの狂気の蟲人を思い出す。
光輝属性しかない武具で光輝属性に耐性を持つ敵が相手だった。
二度目を思い出す。二階層のボス。

≪雌雄の区別のない巨大鳥≫、その姿は双首の巨大鳥だ。麻痺の息（ブレス）を吐きながら滑空してくる強大な敵。無属性の武器で戦い、勝利を収めるためにいくつもの道具と装備を消費した。そうして最終的に、麻痺ブレスの発生を補助する喉を潰し、そうして、勝利を収めた。

一度目の敵に対する正道の戦い方。それは、光輝属性以外の武器を入手すること。例えばそれは炎の杖だ。だが、それでは天井にずらりと産み付けてあった蟲人の卵を孵化させる可能性があり。

二度目の敵は、麻痺攻撃を防ぐために、麻痺耐性を持つ防具が必要だった。俺が今、付けているような、状態異常に対する耐性を付与する装備。

属性武器も、耐性防具も、その入手の方法は、そのフロアのボスともいうべき強大なモンスターの持つＩＤだ。

そして、そのＩＤは、ただボスを倒して入手するのではなく、手順を踏んで入手しなければならないのだ。

「やはり勇者支援の機械文明人は、ＩＤを直接渡すのか？」

「そうでなくては支援の意味がないと思う。正直、他のものに価値があるとは思えない。タカぼんにしろ、私にしろ、アイテムなどは全て代替できるだろう？」

「ああ。確かに、代替できる。他に手段が幾通りもあるなら、それは、なくても構わない程度に考えていい品だろう」

施設使用権、クレジット、回復剤やパラメーターアップアイテム、武器防具。全て余禄だ。

重要なのは、ＩＤだ。これだけは、代替がない。これがないと、機械帝国側と魔王軍側が内通しあっていることが分からなくなる。

魔王軍の施設である塔で入手したＩＤで、機械帝国側が用意しているショップのカタログが解放されるという情報だけは、他の施設や道具で知ることができない。

真に、機械帝国側が勇者を支援するなら、これを伝えないで何を伝えるというのか。
この情報がないと、勇者は支援者の中の敵対者に気づけない可能性が高まるというのに。
武満が手元の湯飲みを覗きながら推測を口にする。

「勇者が、元から知っているという可能性は？」
「それこそ意味がない。だったらそいつは動いていないとおかしい。≪法の剣≫所属の黒服に勇者がいるか？　俺は全員を確認した。誰も彼もが、ただびとだ。主要人物ですらない。
それとも≪カラミティ・ブルータス≫にいると思うか？　あの集団に入って何ができる？」
「そうだな。ああ、そうだ」

苦々しく頷く武満に、俺も頷きを返す。
そして、続けた。聞きたいことがあったのだ。

漆拾／

俺は湯飲みを片手に以前から思っていた疑問を口にした。後回しにしていたが、連れてこられた人間の話題にちょうど良い。

「そういえば、支給品は手つかずのまま没収してるんだったよな？」
「ああ、何か気になるものでもあるのかい？」
「支給品の中に、身体情報やスキルデータの載った資料は入ってなかったか？」

最初、俺の情報を見た紙だ。あれを調べればこの都市に呼ばれた人間の共通点などがわかるかもしれない。

だが武満は否定の言葉を吐く。

「なんだい、それは？　そんなものがあれば一々参加者から調書を取る必要がなくなるだろう」

そこまで言って武満が目を光らせる。

「まさか、あるのか？　またぞろＩＤを使うとか言い出さないだろうな」

「……ないのか？」

「ないが、なんだ。どこぞで見たような口ぶりだな」

「いや、待て。考える」

「いいだろう。三十秒待つ」

武満の様子を伺えば、奴はこちらを疑うようにして視線を向けてくる。

嘘を吐いている様子はない。この件に関しては隠していてはお互いが不利になる。何せ、没収した支給品を調べれば、勇者の位置がわかるかもしれないのだ。

しかし、武満は嘘を言っていない。そんな資料は元からないのだ。

ならば、俺の支給品だけが特別だとでも？

「言おう」

「まだ十秒残っているぞ」

口を開く。これは、信頼の話だ。隠しても、武満がこちらを警戒するだけになる。

「……俺の支給品には、最初に、俺の脳の中から足の先っぽまできっちり調べ上げたカルテ。それと端末で表示できる身体情報、スキル、それらが載っていた。俺の情報だから見せることはできないが、そういった資料が最初に支給品の中に入っていた」
「何故だ？」
「知らん。だから全員にあると思っていた。お前らがそれを収集し、保管していると思っていた」
「そんなものがあったら」
「俺に言うか？」

頷きを返してくる武満。……確かに、そんな情報を持っていることは隠すよりも開示して俺との交渉材料にすればいい。俺が今したように、中身を開示しなくてもそういった情報があるということは推理材料になる。
武満は何かを考え込んでいる様子だった。何かを言おうとして、迷い、しかし口を開く。

「タカぼん。おそらく君を支持している幹部がいる筈だ。それも、ここに拉致する前から」
「……何故だ？」
「その前に聞こう。君は」

武満はそこで言葉を切り、手元の資料に目を落とし、それを口にした。

「何人の【勇者】を殺したんだい？」

と。

漆拾壱／

「いきなり物騒な話だな」

≪法の剣≫の執務室。テーブルの上に読んでいた書類を放り投げながら対面の武満を睨み付ける。

背後の鹿島が俺の湯飲みが空になっているのを見て、背後に置いてある急須に、ポットのお湯を入れ始めた。

「いや、いちいち湧かせよ」

「きちんと温度を調節してますので」

言外に美味く入れろと文句を言うと鹿島は問題ないと言葉を返してくる。

さて、意識を戻せば目の前の武満は面白くもなさそうに言葉を続けた。

「私と君が見ている敵の定義。これをきちんと話しておこうと思ってな。

【勇者】、勇者か……。どこまで知っている？　私と君が恐怖する存在は同じものか？」

「勇者。善の体現者。出現世界のモラルや常識の上で善となる行為を行う者。生育環境によってその善悪の定義が変化する存在。

しかし、対立する【魔王】が活動を開始した時点でその対抗存在へと存在がシフトし、殺害の為に最善を尽くすようになる。

殺害終了後にその世界のモラルから大幅に逸脱した場合、魔王へと移行する場合もあり」

「それで、その話をどこで聞いたんだ？　それとも、君自身が魔王か？」

鹿島が急須を持ち上げ、蓋を抑えながらぐるぐると横に回しているのを眺める。

「その前にお互いのことを話さないか？　そういえば俺は、お前のことを何も知らない」

「構わないが、タカぼん、君のことは話してくれるのかい？」

「話すよ。とはいえ時間も少ない、最低限の要素だけになるが」

構わない、と武満が頷いた。そうして、お互いがお互いの事を話すことになる。

漆拾弐／

まず私から話そう、と武満は口を開いた。

鹿島が湯飲みにお茶を注いでいく。独特の渋みはたぶん玉露だろうと思うが美味いので余り品質や銘柄にはこだわらない。

「私の世界は、そうだな。歴史の差異。そこの始まりがどこからかはわからないが、銀稜台と比して、明確に歴史が変わったと言えるのは……。黒船襲来時か」

「黒船っていうと、ペリーか。浦和に来て、開国を迫ったって奴か」

ああ、と頷いた武満はその後なんでもないように言った。

「私のご先祖様達が全艦沈めたよ。そして、鹵獲した黒船から大陸の技術を回収し、我が祖国は他の大陸へと闘争を開始した」

「随分とアグレッシブだな」

「今、私の世界は、西欧列強と大日本帝国が互角に戦っている。そんな世界だ。君や銀稜台で日本が大敗した大戦はそもそも起こらな

かった。
新型爆弾も作成されなかったしな」
エネルギー問題とか起きてるのだろうかと疑問に思うものの、そこは聞くべきところではない。
「それで、武満。お前は何をしたんだ？」
「私は大日本帝国の関東を支配する立場にあった。金我和一県だけだが城、領民、部下がいた。そこで少し調子に乗ってな。
支配の強化のために、豪族を１００人程度殺し、神殿建設のために領民から土地を奪い、大量破壊神器たる古代神器【アメノハバキリ】を復活させたところで、出現した勇者に倒された。だが、勇者には見逃されたよ」
首を傾げる。それは、何故だ？　勇者には武満を生かしておく理由がないはずだ。
「改心したのか？」
「勇者の都合と、私が持つ魔王能力の問題だ。私にとって、支配の強化も神器の復活も大日本帝国が西欧連合に勝利するために必要だから為したことだ。だから、魔王としての意識は薄かった。西欧連合は騎士も王族も、民間人も奴隷も女子供老人若者赤子青年少年少女猫犬全て一切残らず殺してもよかったが、陛下の赤子たる大日本帝国の民を理由なく害そうなどとは思っていない」
「魔王能力。魔王が一つは持つという、人知を超えた能力とやらか」
「勇者に対抗するための能力だからね。しかし、私にとっては論外の能力だった。これからも使うことはないだろう」
お互いに息を吐く、武満は能力の詳細を話すことはないだろう。
俺もステータス情報を明かすことはなかった。お互い様だ。

「そういえば、【魔剣】は持っていないのか？」
「当然破壊された。私は【魔王】として活動するつもりがないから何も問題はないだろう」

【魔剣】は、魔王の所持能力を増幅する装置のようなものだ。魔王が勇者と殺し合うために必要なものの一つだが、破壊されたなら仕方ない。
それに、魔王として殺すのではなく、人類として殺すのなら、魔王能力も魔剣も必要はないはずだ。

「最後にいいか？」
「どうぞ」
「勇者の都合とは、なんだったんだ？」

武満を殺すことで得られる平穏と、殺さないでおくことで手に入る自己満足。それを、殺さないでおく方に傾ける利益とは何だったのだろうか。
問いかけに武満は馬鹿馬鹿しそうに鼻を鳴らす。

「勇者が妹だっただけだ。我が家は鉄血の家系でな。血族の絆は何よりも強い。だから私は、千回以上あった勇者殺害のチャンスを全て逃し、無防備に魔剣を破壊させ、アメノハバキリを破壊される直前ですら言葉による説得をし続けた。
そして、我が妹が全てを拳と【聖刀】で破壊し、一人の死者も出すことなく私の魔王を終わらせた」

勇者の仲間は妹につけた私の部下だったから殺すわけにもいかなかったしな、と武満は気軽に言う。
少し、それがうらやましかった。

漆拾参／

「さて、次は君だぞ？　君は魔王だったのか、タカぼん」

湯飲みに映る世界。森色の混沌。それを飲み干す。

「鹿島。おかわりだ」

「はい。タカぼんさん」

鹿島が急須を傾ける、流れる緑色の水を眺めながら、まずは世界のことを語った。

「俺の世界とお前らの世界の差異から話そう。俺の世界の歴史は、神話や超能力、魔法や精霊が物語上の世界として認知され、表向き、そういったものは存在していない世界だ。

科学技術万能の世界、とはいえ宇宙に行けるような技術はまだ獲得できてない。エネルギー問題も石油資源に依存したままだ。

世界は統一されておらず各国が争っている。そんな世界だ。日本は、第二次世界大戦で広島と長崎に核兵器を落とされ敗北し、戦後のバブル、って言ってもわからんか。

経済発展を行い、世界列強と経済力で肩を並べ、二十一世紀へと進んだ世界だ」

俺の説明に、武満は首を傾げる。眼鏡越しにも疑問が見える。

「表向きは存在しないということは、誰かが隠してるのかい？」

「強力な異能以外は特技の範疇で収まるから軍事利用もされなかった。それに、魔女狩りや異端狩りの歴史があるからな。能力者たち

が自発的に隠すようになったってのもある」
「強力な異能、ね」
「強力でない能力は、例えばこんなものだな。この程度なら技術で代用できるから、特技の範疇に収まる」
手元にある湯飲みの中身を飲み干す。動こうとした鹿島を手で制止し、器に手を翳(カザ)した。
そうして、手をどけた先に、
湯飲みには、湯気を立てる玉露が満ちていた。
「なんの手品だ？」
「だから手品なんだよ」
漆拾肆／
「能力という程、たいしたものじゃない。俺がかつて率いていた企業、連理の研究成果だ。世間には発表しなかったが、適正のあるものなら簡単に使えるようになる技術に過ぎない。
これは勇者の固有能力である魔王殺しでもないし、お前ら魔王が使うような世界殲滅系の能力でもない。
ただの手品に過ぎない。致命的な弱点もあるしな」
「致命的な弱点？」
玉露の満ちた湯飲みを見ていた武満が問うが、
「明かす必要はない。この能力は、この塔の世界じゃ積極的にも消極的にも使う理由がない。ただ、こういった事象を受け入れる余地が俺の世界にあった。表じゃ存在すらしてなかったがな。マスコミ

は騒いだかもしれん。ただ、世界全体が排斥に動くようなものでもない。

強力な異能である、勇者と魔王以外は、だ」

「どこで君は魔王や勇者の情報を手に入れたんだ？」

かつてを思い出す。全てを眼下に並べた時代。俺が頂点に立っていた期間。

戦績を、舌に乗せる。記憶を発言する。

「おそらく聞いていると思うが、俺の出身世界の日本をかつて連理という企業が支配していた。

その企業を運営していたのが俺だ。いや、支配者と言い換えてもいい。表に仮初めの代表を置き、裏から動かしていた。

今から話すのは、その時代の話だ」

武満が頷くのを見て、話を続ける。驚いてはいないようだった。

「連理を操っていた時代に、俺は勇者を三体、魔王を二体始末した。魔王についての知識はそのときに部下にいた魔王から聞いた情報だ」

「勇者を？　なんだって？　今聞き捨てならない話を」

俺は目の前の武満を無視するように続ける。

武満も動揺したことを隠すように沈黙する。

「最初の遭遇は、そう。連理が日本国内の企業を次々と買収していく過程で、知らないうちに始末していた。俺の部下だった魔王がそう語っていた。勇者のくせに自殺だったそうだ。金で圧殺したんだと気づいたのはその時だ。

勇者なんてものは信じなかった。妄言だと思っていた。魔王につ

いても同様だ」

あのときは、世界に幻想が存在する余地があるとは思っていなかった。部下の世界殲滅能力とやらは、対人戦闘手段や地域殲滅能力ですらなかったためだ。ただの技術だと思っていた。

「二度目の遭遇は三年前だ。京都で悪意が発生した。一人の少女が魔王へと変化し、世界を炎で覆い尽くそうとした。

魔王の世代は第四世代、タイプは人類殺戮型、個体名【アグル・ティアコラス】、能力は【炎王】」

「第四世代か。世代を経るごとに個体の戦闘能力は低下するはずだが、随分初代に近いな。それで被害はどうだったんだ？」

俺は命令しただけだ。だから少女の終わりの姿を俺は見ていない。ただ、俺の罪を糾弾した者の姿は思い出せる。

「とある理由と、日本全土の武力を動員できる俺にとって、魔王の殺害は容易だった。

ただ、【炎王】。この能力が問題でな。効果は対象が死亡する際に、生まれてから取り込んできた悪意を、炎として世界へと反映させる能力。

その際の被害で京都府が焼失した。悪意の量を見誤ったせいで貴重な文化財が数える単位を間違えたと疑う程度に燃えた。あのときは頭が痛くなった」

京都が燃えたという事実を武満が驚きもせずに受け入れる。奴にも同程度のことはできたということだろうか？

考えていると続きを促され、玉露で唇を湿らせる。

「その後に魔王を殺せなかった勇者が、日本の背後にいる俺を突き

止めてやってきた。魔王殺しは優秀な戦闘系能力だが、所詮は対応する魔王相手に特化した能力だ。聖剣も魔王以外と相対する場合には優秀な個人携帯兵器の分を超えることはできないしな。結局、部下に始末させた。そして」

そして、と武満が俺の表情に顔を顰めた。

「次の相手が、君が敗北した相手か」

「ああ。比翼、心。勇者でも魔王でもない相手。そして、俺の天敵だった生き物」

殺すことも支配することもできず。ただ敗北だけを見せられた相手。

漆拾伍／

「心は、日本のどこかで殺し合いをしていた、第二世代の勇者と魔王を配下にやってきた」

思い出す。寒気のする光景。勇者と魔王が手に手をとって、心の配下になっていた。

「奴は俺の前に立ち、俺に支配をやめるように言ってきた。だから俺は断った。奴の配下の勇者と魔王を手持ちの最大戦力で潰した。だが、奴は勇者と魔王を見せ札に、俺の最大戦力を引きずり出し、言葉で説得し、俺から奪い取った」

寒気がする。【支配からの解放（ディスペル・オブ・ルーラー）】、支配系能力に対する対抗能力。俺の支配を崩しながら、奴は笑ったのだ。

『貴久！　あ、貴久じゃ味気ないわね。うーん、ねぇタカぼん。タカぼんって呼ぶわね！
じゃ、私はこれで帰るけど、もう悪いことしちゃ駄目だからね』

奴を信じて死んだ勇者と魔王の亡骸に奴は祈りを捧げ、支配を解除され、愕然とする俺の頬を撫で、にこにこと笑い、最後にそう言って去っていった。

「……」

敗北した記憶を語る俺に気遣ってか、武満は無言だ。いつのまにか空になっていた湯飲みを見て、慌てて鹿島が急須を持ち上げる。
鹿島を手を上げ制止し、湯飲みに意識を向け、俺と武満の湯飲みを玉露で満たす。

「最初の接触、そのとき俺は、奴の慈悲で生き残った。いや、最初から奴は俺を殺す気などなかったんだ。俺には、奴がなんだったのか今でもわからない」

そもそも支配から解放されても俺の手駒だったものは俺を殺すことなどできなかった筈だ。ただ、比翼心に対する戦闘能力を失うだけ。

「魔王を殺せる人間を敵にできて、魔王でも勇者でもないと？」
「俺たちは、お前たちのように、外部に明確に発するような能力を持っていない。こっちに来てから多少はそんな能力を扱う素養も生まれたが、基本的に、ただの人間だ。空中から媒体もなしに炎を呼び出せないし、銃弾を受ければちゃんと死ぬ。
そもそも、世界や人類に対する憎悪や希望を、俺たち二人は持っ

ていなかった」

魔王が魔王と呼ばれる所以。それは世界に対する憎悪を、覚醒した瞬間に抱くということ。

勇者が勇者と呼ばれる所以。それは世界で生きる人々からの希望を背に、戦うということ。

「そして、奴は俺が通っていた学校に転校してきた」

「学校？　通っていた？　君がか？！」

その事実に今度こそ、武満は堪えきれぬように言葉を発した。

ん？

「俺が学校通っちゃいけないのかよ」

「いけないも何も、何をしに寺子屋ごときに通うんだ。君が」

「友人に誘われたからだ。ただ一人の友人に」

「……友に誘われた。そうか、いや、続けてくれ」

俺が何かも知らない豆腐屋の友人。彼が無邪気に誘うから通った高校生活。その中に比翼心は侵入してきたのだ。

「そして、俺は敗北した」

「過程が飛んでいる」

「奴は武力を使わずに、俺が、支配者たる理由を破壊した」

「何故殺さなかった？　勇者も魔王も殺せるのだろう？」

武満の言葉に苦笑する。脳裏には黒髪の秘書の姿。蜜美。

「俺は、日本の支配を完了した時点で、直接的な人間の殺害を、腹心の部下に”お願い”されて禁止されていた。

例外は人外である勇者と魔王のみだ。だから、人外に該当しない比翼心を殺すことができなかった」

「部下のお願い、か。ならば、仕方がない」

「そいつが自分から望んだ、ただ一つの願いだ。破るには少し、心苦しかった」

そも、殺害以外の手段でどうにもできなかった俺が無能なだけだ。結末として、比翼心は俺がどうにかする前に自分で自分をどうにかした。

それだけの話だった。

武満が諦めたようにつぶやいた。

「私たちは負け犬か」

否定もせずに、俺は湯飲みの表面に視線を落とす。

緑の水面には、軍司令部の天井が映るだけだった。

漆拾陸／

「勇者や、魔王。それらが単体で持つ性能は無敵というものではない。主要人物もだ」

言葉を続ける。近代兵器で武装した兵隊を三個旅団も用意すれば第二世代勇者や魔王といえど殺害は不可能ではない。

「都合の良い機会（イベント）、聖剣、彼らの持つ魔的な魅力。特に魅力に関しては優れた人物を周囲に寄せるが、同時に敵に対して無防備でもある。引き寄せるのは常に最良の人物とは限らない。彼らが彼らである限り、それらもチャンスとして取り込んでしまうが。やはりそれ

も問題ではない」

勇者に対して、俺と武満が恐怖する理由。

『問題は』

声を重ねる。俺と武満は、同時にそれを口にした。

『ここが、勇者の物語上だということだ』

殺害を自ら禁じていたとはいえ、勇者の行動を止めることのできなかった武満法行。

殺害を禁じられていたとはいえ、日本全土を支配しながら比翼心に敗北してしまった連理貴久。

そして、そもそもこの世界は俺たちのために用意されている世界ではなく、

「物語というのは厄介だ。全てが奴らの都合が良いように進む。殺せないという制約が問題なんじゃない。俺たちはそもそも、殺さなくても敵を無力化する手段はある程度有している」

「財力、武力、名声。言葉が通じる相手ならば当然だ。それだけの手段を私たちは有していた。しかし、負けた。敗北した。ならば今回、私たちが脇役であるこの盤上に於て、私たちが勝利できる道理は用意されておらず」

だから、必要なのは武力ではない。必要なのは名声ではない。必要なのは組織でもなく。

「この世界のルールを理解しなければならない。敵を理解して、敵の急所を一撃で穿ち、勝利しなければならない。

だから最優先で行わなければ、勇者の捜索ではなく」
「機械文明人に取り入り、誰の物語なのか知らなければならない」
「そして、私たちは物語を終わらせ、勝利する」

そうでなければ、俺たちは、奴らの踏み台にされるしかない。
結末。正義によって、添え物にされ、殺される。
それだけは避けなければならない。それだけを避けるしかない。

漆拾漆～漆拾玖

漆拾漆／

少年は少女に食事を与え、風呂に入れ、衣服を与えた。
次に住居を与え、教育を与え、運動をさせた。

「お前は優秀だな」
「はい。ありがとうございます。あの、貴久様」

通わせている学校から帰ってきた蜜美に、経営していた会社から帰ってきた貴久が勉強を見てやっている。
テーブルの上で参考書を片手に計算問題を解いている蜜美の横に貴久は立っていた。

「うん、なんだ？　ああ、そこの数式はこちらの方程式を使った方が良い。そっちの方が早く済む」

拾ってきた孤児の少女、黒霧蜜美。彼女に連理貴久は全てを与えていく。
未だ連理貴久は、日本を支配するような立場ではなく、今にもつぶれそうな小さな会社の経営を行い、十二人の強大な親族に命を狙われる、今にも殺されそうなか弱い存在だった。

「あ、はい。それで、その、……」

黒霧蜜美の掠れそうな声。それに、貴久は聞き返す。
少女は懇願するように、それを問うた。

「俺のことを聞きたい？　なんでまた」

拾われる前から伸ばしていた長い黒髪。身体に合っていない大きめのメイド服に身を包んだ少女は上目遣いに貴久を見上げる。

「駄目ですか？　私を拾ってくれた人のことを知りたいと思うのは？」

「……、まぁいいさ。教えてやるよ。蜜美が俺を取り巻く状況を知っておくのは悪いことじゃない」

それは、連理貴久の生家。尾張十二家にまつわる話。

それは、連理貴久が何故腹違いの兄や姉を殺さなければならなかったかの話。

どうして連理貴久が人を殺すようになったかの、そして、今は殺さなくなったときの話。

漆拾捌／

「ひ、ひぃッ？！　や、やめてください！　やめてください！！」

声が聞こえる。おびえる声。抵抗する声。

「ちょ、やめろって、あ、こら、顔舐めるな馬鹿！」

害意に抵抗しようとする声。

「タスケテタスケテってか？　ひゃはッ。黙って待ってろ。出して入れてですぐ終わる」

「そうそう、ま、とりあえず一発。そしたら適当なとこに連れてっ

て一発。後は飯食う前に一発。寝る前に一発。起き抜けに一発。出かける前に一発と、ははははは！　終わらねぇな！　ひゃはははは！！」

暴力的な声。弱者を嬲ることに慣れた声。

「ひぃいいッ。助けて！　助けて！　誰か……助けてッ！！」

そんな声が聞こえてきた。路地裏からだ。都市内から宿屋に帰る途中。武満と会議で予定や方策、情報交換、取引を済ませた帰りだった。

都市の様子を見るためにゆっくりと運転をしていたために、見逃せなかった事象だった。

「タカぼんさん」

隣の内藤の声は固い。こんなことが許せるかという視線を向けられる。今にも飛び出しそうだった。

自重しているのは、俺に何か考えがあるのかと問うているからだろう。

「ん、ああ。そうだな。とりあえず帰って荷物置いて、風呂入って、明日に備えて早く寝るか。山県と縦ロールも帰りを待ってるだ「タカぼんさんッ！！」

耳元で怒鳴られたために、慌てて耳を押さえる。

ただの強姦魔だろう？　何を動揺して、第一、なんで俺たちの帰路にちょうどよく……。と、そこまで考えて当たり前の事実に気づく。

ああ、内藤（コイツ）がいるからか。

「タカぼんさん」

急かすように言葉を重ねる内藤。仕方ない。

「制服は、ああ、勧誘の帰りだから着てるか。俺も総帥服のままか」

「服なんてどうでもッ」

「都市内で面倒事に関わるなら制服は着ておけ。≪法の剣≫ともめ事があるなら所属を最初に告げろ。口を出すな。首を突っ込むなとは言わない。ただし、所属ははっきりさせろ」

「は、はい？」

二号、三号、ついてこい、そう後部座席の肉人形に告げ、俺は車外へと出た。

漆拾玖／

忌々しいことに、服もはがれておらず、暴力の痕跡もない。二人の少女が二人の暴漢に組み敷かれているだけだった。

いっその事死んでいればよかったのに。少女二人を見て、俺はそう思った。面倒だとも。

「ギリギリだったじゃないですかッ！」

塔での戦闘と同じように突撃しようとする内藤を手で制し、

「ガタガタ言うな。あと殺すなよ？　手加減してやれ。三号、死なない程度に殴り倒せ。怪我させるなよ」

「へ、へぁ？」

「てめぇら、何モンだ？」
「塔攻略専門のチーム、≪支配の杖≫だ」

突如現れた俺と内藤に、口を半開きにして、こちらに来たばかりなのか、日本製のジーンズを膝まで下ろした強姦魔二人がぽかんとした表情で膝立ちのままこちらを見ていた。
瞬間、強姦魔の一人、手前側の男の顎を、顔面ごと内藤が蹴り抜いていた。
七日間。ただ戦闘にだけ特化できるように強化された身体は、既に人間の認識の外にある。トップスピードにさえ乗ってしまえば、俺でさえもう彼女を目で捉えることはできない。
同時に三号が動いていた。猫っぽい印象を与える婦女子を取り押さえていた強姦魔一人を、俺の意志を反映したのかやる気のない動きで引きはがし、殴りつけ、気絶させる。注文通り、怪我すらさせていない。穏やかなものだった。
少女が猫のような、好奇心に満ちた目で俺を見ている。視線を向ければ、にこりと微笑みを返された。

「別にうちの連中が襲われたわけじゃないんだ。見逃したってよかった」
「タカぼんさん！　どうしたんですか？　らしくないですよ」
「あー、はいはい。つか、こっちのガキ二人は≪法の剣≫に所属してないのか。本当に、助ける価値もない」
「タカぼんさん！！」

首を傾げる。そこそこ見られる容姿の眼鏡の少女。それともう一人。

「訂正。こっちは、へぇ、ああ、助ける必要がなかったみたいだ」

猫のような印象を持った少女を見下ろす。頬についた唾液を懐から取り出したハンカチでぬぐい、そのハンカチを丁寧に、倒れた男に投げ捨てた少女は、腰の後ろに手を回し、隣の少女を助け起こしていた。

その胸元は、強姦魔に裂かれたのか、素肌が見えている。

「ほい、もう一安心だね。って、ちょっと、そっちの兄さん、ジロジロ見ないでくれますかい？　って、ぎゃー。胸見えてし、ちょ、見るなよぅ！」

印象で理解する。主要人物ではない。しかし、賢い。

魅了はない。だが賢しい。

この都市で、一人で生きていくために必要な何かを持っている。

捨てるには惜しい。だから、欲しい。

「タカぼんさん！　あー、ちょ、ちょっとそっちの娘待っててね！　ちょっと、やる気がないのは許せませんけど。……その、あまり女性の胸をじろじろって、あの、何してるんですか……ッ？！」

「あ？　何って」

猫っぽい少女を小脇に抱えた俺を、内藤が呆然と見ていた。何って、見ての通りだろう。

「放せッ――。放せよぅ！　うわぁん。そっちのお姉さんタスケテー」

バタバタと腕の中で暴れる少女。だが、やる気がない。本気で抵抗していない。真実味が感じられない。

本性を隠していない。

目が嗤っていた。

ごしゃごしゃと暴れる少女の頭を撫でてやる。

「た、タカぼんさん！　ちょ、ちょっと何やってるんですか！！」

こちらに駆け寄ってくる内藤に呆れた顔を向ける。

「何って、保護だよ。こっちは使えそうだ。そっちは好きにさせとけ。確保する価値はない」

「は、い？　価値？　あの、何を言ってるのかわからないんですけど」

呆然と俺たちと成り行きを見るだけの黒髪眼鏡の少女。顔だけしか見るところのない少女は、〝誰か〟に縋るように、呆然と成り行きを見ていた。

だから俺は、アレを欲しがらない。拾いたくない。

「内藤、良い仕事をした。俺一人だったら見逃すところだった。お前がいてよかった」

だって襲われるのは弱者だ。しかし、こういうことが稀にある。きっと意図的ではなかったんだろう。初の環境で、≪法の剣≫によって軍司令部が統制されていたから勘違いもあったのかもしれない。

「はい？　えっと、仕事？　あの、あちらの娘は？」

内藤の頭を慈しむように撫でると、内藤は頬を赤くし、それでも誤魔化されないというように頬を膨らませた。

そして、未だに放置されている眼鏡の少女は、ぽかんとこちらを見ていた。猫っぽい方に手を貸され、立ち上がった姿のまま、棒立

ちのまま、目元の涙を拭うこともせず、ただただ困惑したように、誰かに助けを求めるように俺たちを見ている。
それだけだった。

「アレは駄目だ。使えない。わざわざ拾っていく価値もない。有り体に言えば、どうでもいい」
「そんな言い方……」

小脇に抱えた少女を見下ろす。だらーっと腕の中で脱力している少女は、たぶん女子高生程度の年齢だ。大人ではない。少女だ。しかし、

「襲われて、即座に精神を再構築できる強靱さ。いや、違うか。そもそも傷ついてすらいない。だから男に触れられても嫌悪を抱く素振りもない。頭の回転もなかなかだ。ここで俺たちに出会える強運も捨てがたい。だが、あっちは駄目だ。見るべき部分が何もない」
「だから、何を言ってるんですか。そっちの娘を保護するなら」
「言い換えよう。勧誘だこれは。人事だよ。面接してたんだ」

内藤が、今度こそ顔を凍らせる。

「二号、地面にのびている男どもを拾え。三号、ロープを用意だ。探索道具のでいい。二号の運んだ男どもを縛ってトランクにでも詰めとけ」
「タカぼんさん……」
「あー、うー、私の意志は無視っすかぁ」

少女を小脇に抱えて、車に向かって身体を戻す俺に、内藤が懇願するような視線と声を向ける。

「内藤、俺はな。無知で無能でも、健気な奴は拾ってやる。ただただ愚かでも俺を、俺だけを頼ってくるなら面倒も見てやるさ。出来が悪いのも可愛げに見てやる。手も掛けてやる。それが、俺の役目だからな。

だが、無知で無能で愚かな奴を俺を拾わない。目をかけない。救わない。目の前で強姦されようが、殺されようが知ったことか。

そこの小娘はな。救ってくれるなら、助けてくれるなら、誰でもいいんだ。武満だろうが、俺だろうが、それこそ、龍村だろうがな。

そんな奴を俺は欲しがらない。ここで好きなだけ、”誰か”に助けてもらえるまで座り込んでいればいい」

そして、願いの果てに朽ち果てればいい。

「タカぼんさんも、好き嫌いがあるんですね」

俺の言葉を聞いた内藤は、しかし、嬉しそうに微笑んでいた。

「初めて本心に触れた気がします」

「な……、おい」

少しだけ、心が苦鳴をあげた。その表情は、いつかどこかの黒髪の誰かのそれと同じで。

だから、思わず顔を顰めてしまう。

それを見て、内藤がやはり微笑む。

そんな俺たちを腕の中の少女が、脱力しながら興味もなさそうに、眺めている。

「ごめんなさい、タカぼんさん。要不要じゃないと思うんです、私は。

良い悪いの話です」

「……俺は、アレが何かをできるような生き物だとは思えない。価値が見えない」

内藤が苦笑する。駄々をこねる子供を見るような目で俺を見た。そして、俺の少女を抱える手とは逆の手をそっと握り、

「価値は、私が作ります。私が、彼女を保護します」

それは、内藤の持つ、奇妙な、引力を持つような魅了とはまた違う。内藤自身から引き出された、自然と他者を引きつける光だった。俺は、内藤が触れたままの手を持ち上げ、その頬を撫でる。本音を晒してしまった悔しさもあり、からかってやろうとしたのだが。

「えへへ。がんばりますね」

「お前がそこまで言うなら、面倒を見てみろ」

即座に待遇を考える。内藤はこう言うものの、価値は一切見えない。お茶汲みすらまともにできるとは思えなかった。

「だから、内藤、お前の部下扱いだ。当面は自由に使え。そいつの給料と支給品は、バイト見習い扱いで普通構成員の三分の一。一ヶ月で何でもいい。まともな支給品をくれてやれるレベルに仕立て上げろ」

ぱぁっと、顔を輝かせる内藤。頬に手を当てていた俺の手を、両手で握り、感激したような顔を見せてくる。

俺から譲歩が引き出せたことに感激したのか、それとも言葉を、お願いを聞いてもらえたことが嬉しかったのか。どちらかはわからない。

「絶対に期待に応えます！」

そうして、名残惜しむように俺から離れると、背後で黙って成り行きを見ていた少女へと向かっていく。

「だから、アレは駄目なんだ」

自分の処遇すら他人任せ。だから信用できない。だから使いたくない。だから無能。必死さのかけらすら見えない。

内藤が、天使のように甘く微笑み、少女に手を差し伸べる。

【【魅了】スキルが発動します。連理貴久が≪支配の杖≫構成員に対するレジストを拒否しました。【魅了】判定に成功します。甘利文香（アマリフミカ）に【盲信：妄信による絶対忠誠】を付与します】

眼鏡の少女が、感激したように内藤の手を取る。まるで救世主に出会った貧者のように、ありがとうございます、ありがとうございますと内藤の手を握り――

「おにーさん、失敗したね」

「何がだ？」

腕の中の少女が、悪い顔をしていた。

「あの娘、文香ちゃんって言うんだけどね。彼女、独立心はあっても自分勝手、展望はあっても想像力不足、行動力があるように見えて傲慢、そして――」

「土壇場にあって力を発揮できない。現実が襲いかかっても対処できない。できない、できない、つまりは価値がない。慰み者すら立場に余る」

「ひどいなぁ、おにーさん。でも、じゃあなんで私を拾ったのさ？」

腕の中の少女は、猫のように微笑む少女は、

「お前は――、弱いように見えて強か（シタタ）、気まぐれのように見えて計算高い、襲われたかのように見えて、狩りの最中。そして、悲鳴を上げず、笑い声を我慢する悪辣さ。

お前、襲われても余裕があっただろう？　勝利する手段があっただろう？」

腕の中の少女は、嗤っている。そう、例えば、

「お前、支給品にあった、豪腕の熱血あたりを喰ったな？」

少女は、にこりと微笑んだ。確信する。そうか、こいつはあの無能をわざと襲わせたのか。

「やはり、お前は使えるな。おい、うちに来いよ。使ってやる」

「うーん、いいけどさぁ。きちんとした待遇なんだよね？」

「ああ、少し割り増しでくれてやる。お前は、なかなか使えそうだ」

何より、これだけ接しながら、主要人物の臭いが一切しない。内藤の魅了を正面から喰らいながらも、なんら動揺していない。

稀にいるのだ。武器になるほどに、魅了に鈍感な人物が。

「お前の役割は、そうだな。塔の探索はしなくていい。それよりも重要なことを任せたい」

「重要？　塔より重要？　塔を攻略するんじゃないの、私ら？」

「お前は、塔を囲むこの施設群を調べろ。都市の、街の探索がお前の仕事だ」

少女はあたりを見回す。人間味のない街。膨大な量の施設群。
中には、入り方もわからない施設があるだろうそれらを見て、

「隠されている要素を暴き出せ。ルールの断片を見つけるんだ」
「隠されてる？　うんうん、わかってきたわかってきたよ！　うっひゃー、楽しそうだなー！！」
「俺の手駒は少ない。いいか、死ぬなよ？」

あ、やっぱり？　うげー、という呟きを隠さない少女に苦笑する。
この程度の可愛げが内藤にもあればいいのに、とも。
あいつは少し、必死すぎるから。

「はいはい、まぁいいや。イェッサーっと。で、お兄さん。貴方のお名前は？」
「連理貴久。タカぼんとでも貴久とでも、好きに呼べ」
「はいはい、おにーさん。私はみゃこ。幸村都子（ユキムラミヤコ）でみゃこなのさ」

猫のような少女はにゃー、と鳴いた。

捌拾～捌拾参

捌拾／

猫、甘利、内藤を連れ宿屋に戻り、顔合わせをし、

「んじゃ、俺らは軍司令部に行ってくる。内藤は甘利と龍郭院の教育を頼む。当分は塔もいい、使えるように仕込んでおけ」

「へ？」

部屋の隅にあるポットから急須にお湯を入れていた内藤がはい？と顔を向けてくる。

指示は下したので無視し、強姦魔をトランクに詰めたままの車に戻ろうとしたところで、

「ちょ、ちょっと待ちなさいな。その娘はどうなるのです？」

龍郭院が詰め寄ってくる。内藤と並ぶと銀と金で金銀コンビ……、はないか。ダサすぎる。

「なんだ？」

「だから、新人は皆いっしょなのでしょう？　そこの彼女はどうして別なのですか？　不公平ですわ」

額に手を当てた。

「世の中に公平なことが本気で一つでもあると思ってるのか？」

「へ？」

「甘ったれるな。お前らは一律凡人だ。教育をしなければ使い物に

ならない。だが、こいつは違う。使い物になる」
「いや、ちょっとおにーさん。私も教育受けたいんですけど」
ぶーぶー、と脇で文句を言う猫娘を頭を抑えて黙らせる。龍郭院は、
「ぼ、ぼぼぼ、凡人?!　私(ワタクシ)が?!　この龍郭院の桐葉がッ?!」
信じられ「猫、黙らせろ」
にゃー、と頭から手をどけた瞬間に、猫娘が拳を繰り出していた。内藤が反応しようとするも、反応が遅い、猫の打撃によって、龍郭院は壁までぶっ飛ばされていた。
やはり、猫娘は腕力パラメーターの強化か……。
「た、タカぼんさん?!　ちょ、何してるんですか!!」
「教育だ。教育だよ内藤。聞き分けの悪い犬は殴らないと理解しない」
「それにしたって、私の時は……」
詰め寄ってくる内藤に対して、穏やかに、説得するように言葉を重ねる。
「お前だからに決まっているだろう。お前は価値がある。猫にも価値がある。だが、その金髪も甘利も駄目だ。
≪支配の杖≫の先行きは暗いな。だが、仕方ない。山県には悪いが、俺が、働いてやる」
「へ?　働く、ですか?」
内藤は理解していない。だが、黙ってこちらを見ていた山県が、立ち上がる。

「タカぼんさん、その、それは」
「お前の仕事を奪って悪いが、今なら心当たりがある。ああ、お前は精一杯やってるよ。来週頑張れ。引き抜きはやめろよ」

唇を噛みしめるように俯く山県に、何が起きてるかやはり理解していない内藤と甘利、そして、壁際の龍郭院。
猫娘もよくわかっていないらしく、首を傾げ、

「何しにいくんだい？　おにーさん」
「勧誘だよ。勧誘。こう無能な女子供ばかり集まってもしょうがない。お遊戯会をやるんじゃないんだ。
ああ、山県が悪いと言ってるわけじゃない。次はもう少し、良い勧誘場所と機会をくれてやる。ついでに言えば時間と権限もな」

そもそも≪法の剣≫と勧誘合戦をしたところで勝ち目自体がない。
まぁ、あと一人か二人でも同じ立場の人間がいればあいつも楽ができるだろう。

「ちょっと出てくる。猫、ここで遊んでろ。物も人も壊すなよ」
「あいさーっていうか、おにーさんが言ったんじゃないか。黙らせろって」

無視をして外に出た。

捌拾壱／

出てってから、一時間も経っていなかった。みゃこちゃん以外の全員が唖然としていた。

半日だ。私と山県さんがスペースで勧誘を行っていた時間は、だけれどタカぼんさんは、それ以下の時間で、

「ワハハ、本当に可愛らしいお嬢さんばかりやな」

「ああ、頭が痛いだろ？　ああ、そこの隅のが山県だ。ここで俺以外の唯一の男。そこそこ使える人事担当だ」

ちょっと出てくる。本当にちょっとの時間だった。

そうして、恰幅の良い、似非関西弁のおじさんをタカぼんさんは連れてきたのだ。

私と桐葉は黙り込む。文香ちゃんは、たぶん理解できていない。軍司令部で、タカぼんさんが会議をしている間、勧誘をしていた桐葉なら、理解できている。

私たちに少ない時間でできたのは、私たちの容姿に吊られた若い男性を釣ることだけだった。

だけれど、山県さんを含め、仕事のできそうな大人の人を、私たちは誰一人勧誘することができなかった。話を聞いてもらうことができても、それだけだったのだ。

「白いのが内藤、戦闘部門の幹部だ。それと当面の間の新人教育を任せてる。そこの茶髪で猫っぽいのが幸村。都市探索の責任者だ。金髪のが龍郭院、眼鏡の女子が甘利、どちらも新人だ。まだ使えるレベルじゃない。それと先ほども言ったように眼鏡の男が山県。人事の責任者だ。

ああ、内藤、自己紹介は俺が出てから好きにやってくれ。物資も嗜好品程度なら使ってかまわん。歓迎会はまた今度開こう。少し俺は忙しいし」

「ええ、タカぼんさん。僕も仕事をしなければ」

とのことだ、と山県さんの言葉にタカぼんさんは肩をすくめた。

「あいあい。ワイな、馬場冬馬（ババトウマ）言いますん。よろしくなぁ」

似非関西弁を話すおじさんは、そういうと、ぺこりと禿げた頭を私たちに下ろした。

捌拾弐／

おにーさんは、機嫌良さそうに市街を、軍司令部に向かって運転していた。後部座席には、マスケット銃にも似た長銃を抱える不気味な肉の人形が一体。三号という奴だ。

大剣を背負っている二号とやらは、宿屋の警備とやらで置いてきている。犯罪者対策らしい。

「それで、どうやって勧誘したのさ。あのおじさん」

「うん？　ああ、山県も内藤も気づかなかったみたいだがな、今日ならそんなに難しいわけじゃないんだよ。明日もどうかな？　≪カラミティ・ブルータス≫に流れてるだろうから難しいだろうな。その次か、さらに次の日あたりなら逃げてきた弱者を拾えるかもしれないが」

おにーさんはそんなことを言いながら、軍司令部へと車を走らせていく。たまに≪法の剣≫のバッジをした人間が何か仕事をしているのか一生懸命走っていたり、建物の中にいるのが見えた。

「馬場だったか。アレは元々、社長か何からしくてな。≪法の剣≫だと人に顎でこき使われる。それはちょっと耐えられない。だから、街を回って個人で始められて拡大できることを探していた。そこをスカウトした」

条件があるはずだ。お兄さんの下で働くなら、それは≪法の剣≫と何も変わらない。

「何か聞きたそうだな。条件か？　ああ、それなら≪支配の杖≫で取得したアイテムをな、馬場が自由に捌いていい権利だな。それとな、それの売買で手に入れた分の利益を、通常利益以上に稼いだらその部分を馬場が懐にいれていい、と、そういう契約で雇った」

「ふーん、でもそれって店売りだけ？　あとポイントとかいうシステムがあるんだっけ？　それだけでそんなに儲けられるの？」

移動中に都市内のルールはいろいろと聞いていた。お兄さんは首を振ると、

「できるんじゃないか？　できなきゃ努力してどうにかするだろう。一応は、才覚らしきものの断片はあったようだが」

あの人は、お兄さんの求める最上とは遠いのだろうか？　それでも前を見ながらお兄さんは続ける。

「≪法の剣≫との取引も許可した。あれがそれなりに優秀なら利益を上げられるはずだ」

どんどん巨大化していくらしい≪法の剣≫。それに対して、きちんとアイテムを取引できるなら利益を上げることは可能なのかもしれない。

「というか、俺も忙しいんだ。いちいちアイテムを選別してどこどこの店に持ち込んで、なんて真似をしてる暇もないぐらいにな。

幸い、うちは少数だ。アイテムの売買で利益が出なくてもまだ俺が一人でどうにかできるレベルだ。失敗したら責任はとるさ」

こんな、先の見えない状況でこういうことを言い切れるところがこの人のすごいところだと思う。

「ふーん、まぁ私には興味のないことです」

そーかい、とお兄さんは黙って運転を続ける。

「でさぁ」
「何だよ？」
「あの縦ロールの娘ってそんなに駄目なの？」

お兄さんは思い出すように視線を動かし、ああ、と頷いた。

「内藤とどっこいどっこいじゃないか？　というか、学生に社会人レベルの期待なんぞしてないって。ははははは」

お兄さんの笑い声が車内に満ちる。ただ、

「なんで殴らせたぁーーッ！」
「うぉッ。い、いや、なんかむかついたし」
「気分か！　気分なのか！！」
「そーだよ」
「そっか、ていうかノリ悪いね。おにーさん」

うるせー、と荒くハンドルを切った先にあるのは軍司令部の駐車場だ。

わざわざタカぼん専用とペンキで書かれた部分に車を進めるおに

ーさんは、

「ま、そういうわけだし。お前にもそこまで期待は……、いや、しておこうか」

「はい？」

んな無茶な。

「お前は自由そうだ。面白いことしろよー。期待してるんだからよー」

「ま、またまたぁ。タカぼんさんがあっしのような小娘に対して」

おにーさんは聞かずに、

「よしよし、証拠を見せてやろう。ふふふふ、楽しみにしてろよ」

「いーやー」

そんなこんなで、私が最初に連れてこられた場所、軍司令部に到着したのだ。

捌拾参／

軍司令部を根城とする≪法の剣≫のトップの部屋。司令官が使うのだと思われる部屋に彼はいた。

（……うわぁ。武満法行だ。本物だぁ。大日本帝国最強の将、関東八将の筆頭将軍、【軍神】の名を与えられた帝都防衛の要）

なんでこんなところでこんなチンケな組織を直々に捌いてるんだ

ろう。【真武刀将】鹿島とか、【大河血雨】雨宮とかいるじゃん。普通に一人で一軍を統率できる人材がさぁ。

「どうした？　ボソボソと」

そんな武満の前で、足を組んで、楽しそうに笑う男が今の私のボスだ。かなりのイケメンな連理貴久。いろいろと鋭くて、いろいろと便利に使えそうだからついてみたけど……。

（おっさん二人と女子供で武満法行とよく張り合えるね、この人）

「なんでもないっす。無視していいっす。話しかけないでください。注目させないでください」

「そうかそうか、猫。こっちこい」

「いーやー」

ずるずると引きずられて、膝の上にうつぶせに乗せられる。私が小柄とはいえ、この扱いはないのではないだろうか？

「ほら、武満。これで悪の組織の首領っぽいだろう。もう少し、ペットが高貴な感じだといいんだがな」

ペット？　私がペット？　ホワイ？！　なんで？！

（ちょ、ちょ、マジあの武満の前でこんな真似ッ？！　大丈夫なの？！　殺されないの？！）

「まぁこれはどうでもいい。それでだ武満、犯罪者についてだが。どうする？」

あの武満の前で暴れる気になれず、震えながらじっとしてると頭を撫でられたり、顎の下を撫でられたりする。どうにも猫に対する

扱いを本気でされていた。
ちらりと対面の、眼鏡を掛けた、優男の風貌をしている、怪物を恐る恐る見ると。
私の素性を当然知っているらしく、鼻で嗤われる。

（ぐ、ぐぐぐ。ぐぐぐぐぐ、ゆ、許せん。許せんぞぉおおおお）
「その前に、君の膝の大きな猫については、何か言うことはないのかね？　正直、どう対処していいか困ってるんだが」
「猫は猫だよ。まぁ後で紹介するさ。それと通しておきたい話もある。この前話した件についてだが」
「この前のというと」
「流通についてだ」

ああ、あれか。と頷く武満。……、あれ？　うちのボス、かなり対等に扱ってもらってる？　というか、尊重されている？

「あのー、おにーさん？」
「にゃー、って鳴いたら話聞いてやるよ」

瞬間、ぶほッ、という何かを噴き出すような音が聞こえ振り返れば、壁際の鹿島が口元を抑えていた。
おい、と睨み付けると素知らぬ顔で、顔を逸らされる。畜生、後で見てろよ。

「にゃ、にゃー……」

爆笑が聞こえる。背後に突っ立っている白背広の集団が全員嗤っていた。【真武刀将】の鹿島、【大河血雨】の雨宮、【戦塵眼下】の豪徳寺、【関東八神弓】の与一、……他にもいくつか、誰もが、大日本帝国に所属し、戦場に出れば西欧連合を恐怖と死と血に沈め

てきた最強の将達だ。
しかし、

「う、うぐぐぐ。お、おにーさん？」
「で、なんだよ？」
「タカぼん。ああ、話し合いは後でいい。まずはそちらの愉快な家畜を紹介してもらえないか？」

嗤いを堪えているのか、口元を抑えた武満が、嘲りを隠さずに私を見下ろしてくる。
正直、なんだろう。こんな敵の巣にいなければ連理貴久は殺しておいた方がいい気がする。
でもソファー越しに、おにーさんの背後に突っ立ってる肉の塊が許してくれなさそうだし、たぶん連理貴久殺したら、ここの全員が私を殺すような気がするし、いや、逆に褒められるかもしれないけど、その後、絶対に殺されるだろうけど。

「た、武満法行とどうしてそんなに仲がいいのかなぁー、なんて」

なんだそんなことか、と連理貴久は私の顎を撫でながら、口元に冷たい笑みを浮かべ、私を見下しながら言うのだ。口元に敵意と嘲りとほんの若干の愉悦を含めて、

「敵だからだよ」

その言葉に、武満法行が、私を見ながら、気づかなかったのか、と嗤う。顎に手を当てて、私を見下す。
背後の白服たちが目に殺意を、口元に敵意を忍ばせながら、こちらを見ていた。

「ああ、私たちは敵だよ。なぁ、タカぼん」
「ああ、敵だな。敵だよ、武満。俺たちは敵以外の何者でもない」
「それで、満足したか？　【甲斐の人食い虎】幸村都子。なぁ、大陸で英国騎士十人を一撃で斬り殺した八魔（ヤマナシ）無師の将」

へぇ、と武満の言葉に、拾ってきた雑種の猫が血統書付きだったという事実を聞かされた飼い主の表情になるお兄さん。しかし、その飼い主は直後に、それだけかとその事実を切り捨てていた。表情で語っている。本気でどうでもいいと思っていた。
ちくしょー、なんなんだこいつらぁ。武田十六将の一人だぞ私。あと、無造作に顎の下を撫でるなよぉ。

「……、なるほど」
「どうしたタカぼん？」
「いや、これ、お前らの世界でもなかなか、優秀な奴なんだ」
「そうだな。今の時点で、ここに来た当初の私の部下と同じ程度には働けるはずだ」

へぇ、と連理貴久は私の頭を優しく撫でながら何かを考え込む。や、優しくされたって靡かないんだからな。

「武満。お前の世界が選ばれた理由は、戦闘力だな。個人が持っている武力の上限がお前達の世界は、他の世界のそれより高い」
「だが、それならば剣と魔法の世界でもいいはずだぞ。無限に広がる平行世界にはあるはずだ。初代魔王の出身は、そういった世界だったらしいしな」
「【甲斐の人食い虎】なんて大層な通り名を与えられた将と同質の部下を大量に持っているお前、それらが召喚された理由は、武力以外に何があると思う？　指揮能力か？　軍なんて体裁すらないこの場所で、更に千人規模じゃない、五人や六人での探索が一番効率が

良い塔攻略に際して、どうしてトレジャーハンターみたいな人種が呼ばれない」

武満は考え込む。世界？　えっと、私は機械帝国の世界に呼ばれて？　私の世界があって？　ってーと、つまり、他にも世界がいっぱいあって、連理貴久はそのどっかで偉い人だった？　のかな？　たぶん。武満と渡り合えるってことはそういう人間なんだろうし。

「軍団の運営は？」

「武満ー、私さー、経営とかその辺は部下に任せてたんだけど。というか、ぶっちゃけ脳筋なんだけど私」

「だとさ」

連理貴久と武満法行の会話に強引に混じる。背後から殺気がくるが、知ったことか。直感する。連理貴久を、白背広の武将どもは害せない。武満が、まだ連理貴久を敵に回すことを望んでいないからだ。

そう考えるとこの位置はちょうどいい。おにーさんの膝の上は、おにーさんの身体が盾になって、私を殺すには、必然おにーさんを攻撃しなくてはならないからだ。

見上げる。今も現在進行形で私の背中を撫でたり、顎を撫でたり、髪を撫でたりするこの男は、私が会話に混ざることで、武満法行の部下に殺されるかもしれなくなるということを予想していたのだろうか？

尻を撫でようとした手をはたく。全く表情を変えずにおにーさんは話を続けていく。

「だが、武力。この点は、放っておけない線だな」

「では何故、武力に固執する？」

「他の二つの世界との差異。銀稜台も俺の世界も、個人が携行する

武器は進化していっているが、個人が持っている武技の類は、護身やスポーツ化し、殺人や積極的な闘争からは離れていっている。だが、お前らの世界は」

「黒船来航以来、個人の戦闘力特化は国策だよおにーさん。国民皆兵士。いつ本土が戦場になってもいいように、女子供すら殺人術がひとつは極められるように鋭意努力中なのさ」

「そういえば、私たち以外の世界の出身者は、刀剣類を操るのが妙に下手だな。いや、銃もそうだったか、反動にひどく驚いていた。……だが、支給されている武器は」

「最初から、刀剣主体だな。遠距離武器にしろ、銃以上に扱いの難しい、弓矢やボウガンを初期に支給される方が多い」

この世界についての話というのは……。なんの意味があるんだろうか？

おにーさんも武満も、組織運営の話より、こちらの方が重要とでも言うかのように言葉を重ねていく。

背後の白服。あの鹿島ですら、この会話を止めようとはしていない。

「……、武力。これが私たちの世界の役割か。だが、それならば君たちの世界はどうなのだ？　タカぼん。君の世界の人間は、銀稜台の人間と比べると劣っている。いや、言ってしまおう。タカぼん、君以外はいらないぐらいだ。君だけいれば良い程度には、全てが銀稜台以下だ」

「武満のところほど、特異な歴史は辿っていないからな。差異といっても関東を更地にされた連中と、俺が適度に支配してきた連中だ。そんなもの、正直……、思いつかないな」

捌拾肆～捌拾陸

捌拾肆／

結論として、お兄さんの出身世界についての話はなくなってしまった。

私としては、唯一の差異であるのはお兄さんのやっていた会社とやらが、日本全土を支配していた歴史というのがキーポイントではないかと思ったのだけれど、それを言っても二人に鼻で嗤われると思ったので、口にするのは躊躇われた。

「犯罪者については、ならば≪法の剣≫に引き渡すということで良いか？」

「人体実験が必要な項目もある。とはいえ、犯罪者全てというわけにもいかないが」

「殺さないってんなら街で見つけた犯罪者連中を持ってきてやるがな」

っていうか、武満がいらない人間を殺さないわけないと思うんだけど……。目で訴えると、連理貴久は面白そうに笑っているだけだ。

「まぁ、簡単な刑法でいいだろう。苛烈にしすぎるとクーデターが起きかねんしな。恐怖政治はお前も柄じゃないだろう？」

「ははは、その通りだよ。タカぼん。それに人体実験などする意味がない。ゴブリンでも拉致してくれば済む話だ」

ははははは、とお互い嗤い合っている。

なんだこいつら、怪しすぎる。武満なんか元の世界で政敵殺しまくったりしてるじゃん。

「幸いこの軍司令部には、牢屋や尋問用の部屋も一通りあるしな。刑罰を決めずにいて、私刑が横行されても面倒だ」
「ふむ、そんなものもあるのか。便利だな。貸してくれ、この猫躾けるのにちょうどよさそうだ」
「こらぁ！」

尻と胸に伸ばされた手を高速で叩く。連理貴久は痛がりもせずに、武満に向けて言葉を続けていく。

「さて、冗談はここまでにして、憲兵隊は用意すべきだ。そのあたりどうする？」
「そうだな。≪法の剣≫、うちの適当に優秀な白服にやらせるさ。鹿島、リスト作っておけ」

はい、と頷く背後の鹿島。武満とお兄さんは決まっていたようにさらさらと紙に刑罰を書き記していく、強盗、強姦、殺人、傷害、窃盗、詐欺、等々。そうして二言三言、罪の軽重について話すとそれで作成を終了してしまう。

「えっと、これだけ？」
「何がだ？」
「いや、こんな簡単に決めていーの？」

何を馬鹿なことを、と目の前の武満が私を見ている。

「刑法など適当でかまわん。そもそも、私たちは組織を長く持たせる気はないのだから」
「え？」
「それより流通だ、武満。とりあえずな、責任者に馬場という奴を

用意した。≪法の剣≫の人員を借りていいか？　アルバイト程度でかまわんから二、三人都合してくれ。それと車を二台ほど。代価はクレジットをそうだな、その日その日で払おう」

「かまわないさ。ほら、所属員のリストだ。男でも女でも持って行け」

それなら、とリストを取り出す武満にお兄さんがあれこれと注文をつけていく。商店のリストやその場所の相場、そして倉庫をいつでも借りられるようにしたりと、

「猫娘、倉庫の位置を覚えておけよ。お前も利用すべき場所だ。ああ、武満。

物資の集積所な。地下にいくつか用意させる。こいつ使え」

そして、私は、彼に指を指されたのだ。

「へ？」

「だから、≪法の剣≫と≪支配の杖≫の隠し財産だよ。絶対に使うから、隠しというか、独立部隊用の資材だが。ああ、≪法の剣≫の正規会計と物資担当にわからないように馬場と猫使うからな。それと武満、裏帳簿を用意するなんて馬鹿な真似すんなよ。するなら人間帳簿に直接記憶させろ。紙の記録は残すな」

「それぐらいは承知しているさ。ああ、家畜（ユキムラ）。お前が八魔無師に帰還したいならな。私かタカぼんには協力しておけ。

まぁ、今の段階で理解しているとは思うが、忠告はしたぞ」

……、この二人は、本当に、何を言っているのだろうか。

捌拾伍／

鹿島に犯罪者を引き渡し、宿へと帰る道すがら、連理貴久はハンドルを軽快に切りながら、先ほど決まったことを含めるように繰り返す。

武満がいたために、私がいろいろと質問できなかったからだろう。

「いいか、猫。お前の役目は都市内の施設の発見だ。そして利用できるかの検証もな。

とりあえず、だ。絶対とは言わん。ただ、周囲に紛れていて、なおかつ知っている者でなければ発見も容易ではない施設を見つけろ。地下がいいな。下水道系の施設をなるべく探索しろ、っと。これは指示しない方がいいか。その辺りはお前に任せる。

倉庫に使えそうで、水と電気、いや、エネルギーが利用できる場所だ。なるべく軍司令部から離れていれば最良だが、これを都市内で最低5つか6つ。見つけておけ」

「……、あのー。なんで正規の施設の前にそんなものを？　第一、おにーさんのとこって、そういう隠しを作る以前に、宿屋借りてるだけって言ってなかったっけ？」

既に移動の際に、≪支配の杖≫の簡単な構造は教わっていた。

「うん？　ああ、そっちは馬場からの収益でどうにかする。馬場が失敗しても俺がどうにかする。それよりもな、現時点で使える施設を確保しておく方が重要だ。避難場所になるしな」

「避難って、≪法の剣≫からじゃないよね、その≪法の剣≫と共同なんだし」

「ああ、まぁその辺りは考えなくていいぞ」

「というか誰が避難するのさ？」

連理貴久は、当然というように言ってくる。

「お前と馬場と、そうだな。山県あたりか」

事実に、自然と背筋が震える。ああ、とそのとき直感が働いた。やはり、武満と渡り合っているだけある。既に切り捨てる人材を、この人は決めている。

「女の子たちは？」

非道とは思わなかった。二手三手先を思い描けない人物が、勝利を掴めるはずがない。私が仕える人も、そういう人だった。

それでも、仲間の筈だ。助けてあげられないのかと、視線を向ければ、

「内藤は、俺が助けるべき人材じゃない。っと、この言い方だと勘違いをするか。まぁいい。

隠しを使う時期は、俺からお前に連絡をする。そのときにはな、なるべく最適の人材に、選んだ人材を率いらせ、根こそぎにする。

この意味をお前はまだわからなくていい。ただ、内藤は、生き残らせるさ。

そして内藤が生き残るなら、小娘どもは内藤についていく。

内藤は俺の切り札だ。猫にやってもらう役割を最初は担わせるつもりだったが、お前の方が才能がありそうだしな。

それに、内藤ならばどちらに転んでも最善の結果になる」

連理貴久はそう言うと、ハンドルの上を小さく指で叩く。

……？

膝の上に目を向ければ、そこには宿を出るときに貰った≪支配の杖≫の制服の裾が、水に濡れていた。

えっと？

「理解できるか？」
「何？　これ？」
「そうか。理解できたか」

うんうん、と頷く連理貴久は、私の前でもう一度指を振る。
それは、感覚でしかわからないけれど、何かの技術で、何かの能力で、そして、私にもそれができるかもしれないということで、つまりは、

「だから、私を選んだの？」

その人は、私を見ている。正面を見て、軍司令部から続く、大きな道路を見ている。
だけれど、私を見ている。それは、その人の視線は、その人の――

【【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。】

【スキル【暴き、転がす。屍を晒すように（ワールド）（アナライズ）【過剰劣化版】】を発動しています。このスキルはパッシブです。ＳＰは消費しません】

「俺はな、初対面の人間の本性も、才能もな、全て見抜いてきたわけだ。全盛期の俺の目の、余技にすぎんがな」

私自身すら知らない何かを、この人は見ていた。

――かくして猫の気まぐれように、彼は彼の賽子を手に入れるのだ。

捌拾陸／

世界の理についての考察。

第一世代、初代魔王ヘイルズヘイブから端を発した魔王と勇者の歴史は、その世界の収束によって終わる。

【ライルカート】、そう呼ばれた十三層からなる塔の世界は、記録と記憶の蓄積と共に終結した。

そして、この世界、否、無限に世界を内包し、そしてなお膨らみ続ける膨大な世界群が誕生した。球体世界【ジェン・レィス】。

各々の、宇宙すら内包し、その世界の中では果てがないとされる小世界は、この球体世界を点のように漂流している。球体世界自体も、無限の広さを誇りながら、なお広がり続ける矛盾概念の怪物だ。

かつてライルカート世界に分散配置された魔王と勇者は魂の複製と改竄を繰り返され、世代を経、小世界へ分散配置され、また【デバイス】と呼称される世界管理の為の道具が各世界群管理のために配置された。

観測と収拾は続けられる。勇者と魔王の物語は進んでいく。

そして、三種の世界、【銀稜台】【大日本帝国】【第百二十八番倉庫】から、観測途中のその世界の住民を【機械文明】は召喚し――

「意味があるのか？　この話は」

「ないのぅ。世界の全容を知ることは知的探求行為以外に必要はないのじゃ。そもそも知覚することすらできないものを知覚する意味はないと思うしの」

「それで、お前は誰だ？」

角の生えた、奇妙な威圧感と共にある幼女は、カカカと嗤う。
お前がそれを言うのかと、お前こそ何者なのかと。連理貴久に、俺に。

「そも何故、我が寄生すらできずにおるのかわからぬ」
「……、なんの話だ？　それに、連日つまらん夢を見せているのはお前か？」

幼女は何もない空間に向けて指を振ると、真っ白い背景の、ただ広いだけの空間に、背丈に合わない、豪奢な椅子を創り出す。
それにならい、俺も適当に指を振ってみる。既にある、技術の応用だった。

「それな、失敗するぞよ」
「知っている。だから内藤を使う」
「ならよしじゃ。寄生先に死なれても困るしのぅ」

お互いが創った椅子に座る。えいしょ、っと幼女は背の届きそうにない椅子に、苦労して座っていたが、手伝いはしなかった。
その上で幼女は更に手を振るう。現れるのは、白いテーブルと、ショートケーキ、それと紅茶だ。

「万能なのか？」
「夢じゃし、腹も膨れぬ。貴様のそれの方がまだ作れるじゃろう？　主観に左右されるとはいえな」
「そうでもない。主観など必要はない。客観すらもな。そも、全体観測のひとつだ。あるものはある」

ショートケーキをフォークで切り、口にする。そうして疑問を口

にした。

「それで、俺の意識の断片にくっついているお前はなんだ？」

「なんだとは、なんじゃ？　問うておるのは名前か職業か？　それとも目的かぇ？」

「役割（ロール）に決まってるだろう？」

紅茶を一口。血のように赤く、薔薇のように薫り高いそれを口にして、角の生えた小さな少女は言う。

「我は、魔王ウェンディサークである」

と。

捌拾漆～玖拾

捌拾漆／

ＮＡＭＥ：連理貴久

ＨＰ　１２／１２
ＳＰ　１８／１８
腕力　５
硬度　５
俊敏　４
知能　８
運勢　１９５

出身世界【第百二十八番倉庫】

■■【非解放】
魔王ウェンディサーク　に【寄生】されていない。

能力　【暴君の目】機械式五十三層封印
【暴虐の腕】機械式四十一層封印
【支配者の杖】【寄生】抵抗力付与を開放中
【魅了の魔眼】レベル３　種族：人間
　　種族：下等機械人　種族：魔族　にのみ有効
【いつか見た景色】機械式八十八層封印
【レベル制限】稼働中
【経験値非効率】稼働中
【■■■■■■■】機械式≪絶招≫封印

ＮＡＭＥ：幸村都子

ＨＰ　２２／２２
ＳＰ　２２／２２
腕力　２０
硬度　１０
俊敏　２０
知能　１０
運勢　２０

能力　【超直感】
　　【甲斐の人食い虎】

「予想はしてたが無様だな」

朝起きると、幸村都子が三号に取り押さえられていた。

「うるさいやい。くそぅ、マジでこいつら強いし。というか、死なないと思ったから突っ込んだのになんで捕まってるんだよぅ」

「だから、不法侵入ぐらいじゃ殺しはしないし、反逆とも思わない。その程度の技術（スキル）があることは予想している」

わざわざ与えた≪支配の杖≫の制服を脱いで、というか、甘利文香が着ていた衣服を着ていた。用意周到だな。当然だが。

それに、バッジはともかく制服にまで細工はしていない。

「それで、なんの情報が欲しかったんだ？　一枚一枚服脱がせて尋問してみるのも面白いが、素直に吐けば許してやるぞ」

猫娘はうにー、と諦めた顔をしている。普通に死を覚悟していた。武満と出身世界が同じならば、当然の反応だろう。

それに、と破り捨てられた覆面や体臭を消した痕跡や、宿屋の備品で作ったのだろう。様々な道具を用意してあるのを見る。面白い奴だ。

将と聞かされたが、武術だけではなく、工作員の技術も持っている。得難い人材だ。少なくとも、俺の手駒では一番の性能かもしれない。

それに、ここの防犯レベルの度合いが知れたのがもっとも良い。適度に腹を蹴り飛ばすと猫娘はしぶしぶ答えた。

「殺せるか試してみようと思って」

足で、感触の悪い腹を踏んだまま、無造作に髪の毛に手を突っ込んだ。茶髪の中に針と糸を見つける。取り除き、床にばらまいた。猫は特に気にしていない。

「そうか。それでどうだった？」

三号を諦めたように猫が指差す。俺は苦笑しながらその指をへし折った。

ぐぐぐ、と言った顔の猫が次に何をされるのか緊張しながら裁定を待っている。

（さて、精神をへし折るのも楽しいが……。そんな無駄なことをしている暇もないしな）

侵入した時に戦ったのだろう。二号に腹を真一文字に裂かれ、床に溢れていた臓物を腹に戻してやる。その上でポーションをぶっかけ、傷薬を塗りたくった包帯で縛ってやった。

「あのー、私、どうするわけ？」
「家畜が戯れただけだろう。許す」

そうして腹の上に腰を下ろす。

「なんだ？　所々重傷だなお前」
「な、なら座るなよぅ」
「治療してやる。脱げ」

いーやー、と普通に嫌がられたので強引にひんむいた。

捌拾捌／

ノックする。その部屋は、≪支配の杖≫が拠点にしている宿屋の中で一番奥にあった。

「タカぼんさん、起きてます？」

朝食に来なかったために、起こしに来たのだ。馬場さんや山県さんも今日の活動について指示を欲しがっていた。
特に馬場さんは≪法の剣≫と繋ぎをつけて欲しがっていた。タカぼんさんの仲介が必要だろう。

「タカぼんさん、起きてますか？」

インターフォンを押す。反応はない。寝ているのだろうか？　タカぼんさんに限って寝坊はないと思うのだけれど。
預かっている鍵を差し込む。鍵を預けられているのは信頼されているのか、無防備なのか。疑問に思いながらその部屋の扉を開ける。

「タカぼんさん？　あの、既に皆、揃ってて……」

室内には、未だ寝間着のタカぼんさんと、えっと、裸の、あれ？
えっと、都子さんが？
赤く染まった、シーツらしきものとか、その、えっと、強引に破かれた服とか、その、えっと、

「タカ、ぼん、さ？　え？　あれ？」

タカぼんさんに限って、その、あの、女性を強引に手を掛けることはないと思うけど、なら、

「み、都子さん?!　あ、貴女ッ」
「ちょ、なんで私ー。ミー被害者！　ボス加害者!!」
「正確には三号と二号だな。俺は見てただけだし。しかし、ほんとしょーもないなぁお前。もうちょっと考えて忍び込んで来いよ」
「ヘルプー！　みさきっちゃんヘルプー！　ほら、ほらほら!!
この人、私を襲ってー!!」

えっと、えっと、えと、こ、こういうときはッ

「タカぼんさん！　信じていいんですよね!!」
「おぅ、俺を信じれば間違いない」
「全面的了解です！　都子さん！　なんでこんなところにいるんですか!!」

捌拾玖／

「あの、そろそろ突っ込んでいいかな？」

ぽりぽりと頭をかく。周囲には飛び散った私の血。破瓜とかそういうのじゃなくて、バケツいっぱいぐらいぶちまけた私の血。

で、ぷりぷりと怒った顔をしている内藤美咲。えっと、南雲・アーリアライト・美咲だっけ、お兄さんが言うには。

腹の上におにーさんを乗せたまま、床から美咲ちゃんを見上げると、彼女ははい？　という顔で見下ろしてくる。この異世界生活で感性がぶっ飛んでるか、元々の感性がそうだったのかわからないけど、ああ、混乱してるのか、目があちこち泳いでる。普通に混乱してるだけだった。

「えっとね、私がお兄さんを殺すために忍び込んだら三号と二号に迎撃されてね。直感で大丈夫だと思ったんだけど失敗しちゃってさ。ま、そんなわけで腹かっさばかれたり、指折られたり頭蹴られたりそんな感じだったわけ。おーけー？」

「……へ？」

「ほら、俺を信じておいてよかっただろう？　俺は真実しか言わないからな」

にやにやと裂けた私のお腹に座ってるお兄さんは、普通に真実で人を惑わせるのが得意だから信じるのはやめた方がいいと思うのだけれど、たぶん指摘したら、お腹に思いっきり拳ぐらい入れてきそうだからやめておこう。

「え、えっと、こ、殺すって？」

美咲ちゃんは普通に混乱している。説明するのも面倒なのか、お兄さんは床の掃除をしている二号や、未だにこちらを警戒している三号に手を振ると、服などを用意させていく。

実に命令しなれた姿である。本当に暗殺が成功できるとは思わなかったけど、失敗してもこちらを殺さない程度の余裕は持っていることを理解できた。

器が広いのか、ただ単に間抜けなのか、それとも人を殺す度胸がないのか、とはいえ、武満と付き合えている以上は、殺人を辞さない人間である筈だ。それが選択肢にないのでは、武満法行と連理貴久の価値観がずれる。対等の取引相手とは認められなくなる。

結果として、私がこういった行為をすると予想していたのだろう、三号と二号の予想外の強さにはびっくり以上のものを感じてしまったが、これも良い収穫だ。何より、生きていたのが一番良い。

「それよりお兄さん。本当に私を許すの？」

見上げれば、私の、未だ血をじくじくと滲ませるお腹の上に座ったお兄さんは楽しそうに私の髪を撫でていた。恐れている様子などない。

ああ、直感する。致命的な失敗はしないだろうと思っていた私の直感は、実のところ、失敗しようが成功しようが、どちらでも結果は変わらないから死なないと直感させたのだ。

「許すよ。なぁ、幸村。お前が成功したなら本当に俺を殺すつもりだったとしてもな」

「……」

敗北感に似たようなものが全身を襲ってくる。私は、この人には一生敵わないだろうと思わせる目だ。

だけれど、けして屈してはならないと思わせる目でもあった。
この人についていけば、命を保ったまま、元の世界に帰還するということができるという、直感が働いていても、けして望むがままに平伏してはいけないと、直感の働かない、人間の本能が確信しているのだ。
けして、支配されてはいけないのだと。
そして、初めて名前で呼ばれたことに気づく。

「そう、それでいい。俺の予想を外れないで俺のところに来たお前は、俺の予想を外れて優秀だった。
やはり、人間は面白い。肉人形ではできないな。こういったことは」

腹の傷から降りたお兄さんは、私を立たせると、血を濡れたタオルで拭っていく。
そうして、丁寧に全身を拭うと、真新しいシャツや下着、シャツを着せてきた。

「後でブラッシングもしておくか。三号、適当に用意しておけ」
「あの、本当にペット扱いなわけ？」
「あはは、家畜（オマエ）は本当に面白いなぁ。ペットじゃなかったら、反逆を許すわけがないだろう」

そうして、お兄さんは、私にたやすく後ろを向けると無防備に歩き出すのだった。
簡単に殺せる位置。絞り出した殺意を、向けようと思えば、

「あはは、まぁ、そんな甘くないだろうね」

三号が、私の肩と頭に手を置いていた。感じる圧力は、下手な真

似をすれば簡単に首をねじ切れる程度には強い。

「あの、結局、なんなんですかこれ……」

困惑した美咲ちゃんが、わかってないように私に問いかけてきた。

玖拾／

未だに困惑顔の内藤と、制服姿の猫を連れて食堂へと入り、食事をとりながら簡単な会話を行い、各人に指示を出していく。

内藤は新人教育、馬場は調達した人員と共に物資の売却や購入、山県は勧誘するなり、≪法の剣≫に行って打ち合わせをするなり、自由に、猫は昨日の通りだ。

もそもそと、個別に指示を出されない龍郭院がふて腐れたように食事をとり、甘利は内藤を熱っぽい目で見ている。

「質問はあるか？　ないなら解散。俺は三層にいるから、何か問題が起きたら、そうだな。内藤か猫に指示を仰げ」

「あ、連理さん、ちょい良いか？」

「なんだ？　馬場」

「ワイは連理さんが塔から帰ってくる辺りで車回せばええんやろか？」

「ああ、物資のことか。そうだな。そうしてくれ」

了解や、と頷いた馬場が立ち上がった瞬間、食堂のドアが音を立てて、蹴り破られる。

「≪支配の杖≫ね。その権利、掌握させてもらうわよ！！」

【小山田麗子のスキル【感情：配下への欲求】が発動します。レジストしてください。内藤美咲の【戦乙女≪ブリュンヒルデ≫】レベル6が発動しています。内藤美咲は【感情：配下への欲求】をオートでレジストしました】

「……。へぇ、面白い」

「アンタ達、私の部下になりなさい！　私が支配し、私に従え！　私がこの世界の女王になるのよ！　ふふ、さぁ、先行者気取って偉そうに≪法の剣≫なんかと同盟組んだバカをどうやって苛めてやろうかしら。アハハ」

【連理貴久は【支配者の杖】を発動します。【感情：配下への欲求】をレジストします。以後、自動設定で≪支配の杖≫構成員は、【感情：配下への欲求】への抵抗を連理貴久に移動し、抵抗判定を行います】

「お嬢。制圧終わりましたか？」

「ちょっと、待ちなさい。ほら、えっと、≪支配の杖≫とかいう奴らは、」

食堂の扉を蹴り開けた、黒髪黒瞳の少女の背後に、ずらずらと男や女が入ってくる。一部は狂信するようにお嬢とかいうのを崇めるように見ていて、

「ん、内藤。制圧しろ」

「了解です」

内藤に一分もかからず全員叩きのめされた。

玖拾壱～玖拾参

玖拾壱／

「で、こいつら何なんですか？」

内藤の問いに首を傾げる。なんだろうか、首謀者は眼力鋭い女子高生って感じだが。

「出来心だったんです。だから解放しなさい。解放してください。解放するべき。解放しなきゃいけない。そして私に従いなさい」

【小山田麗子のスキル【感情：配下への欲求】が発動します。【支配の杖】が発動しました。抵抗判定に成功。【感情：配下への欲求】をレジストしました】

捕らえたのは、探索道具あるロープで手足を縛られた男と女が、十人ぐらい。全員が支給品持ちだった。拠点はないらしい。ここを奪おうと考えたのだろうか？

（主要人物って感じじゃないんだよな。それに、）

「従いなさいッ！　従えッ！　従えってんだよ!!　おらッ！　従えよッ！」

【【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。】

なんだこの意味不明の言動は？　従えだと？　この程度の奴に理由もなく従うわけがないだろう。馬鹿め。

「≪法の剣≫に突き出しますか？　でもなぁ、この嬢ちゃんら、悪いことしたわけでもあらへんし」

「街に放逐でいいんじゃありませんの？　子供の戯れ言でしょうし」

【【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。【感情：配下への欲求】をレジストしました。抵抗数が上限を超えました。バックグラウンド処理へと移動します】

「というか、この人たちは本当にどこから。≪カラミティ・ブルータス≫というわけでもないですし」

山県の問いには、たぶん、でいいが、推測をすることはできる。こいつらは、昨日の勧誘の際の漏れだろう。≪法の剣≫に所属しなかった人間が、１０人もいることには驚くがな。

「なー。小山田、アタシ、あんたんとこ抜けていいか？」

「はぁ？！　原ッ、何言ってんのよアンタ」

「いや、ほんと、アタシさぁ。アンタが研究させてくれるっていう

から着いていったわけだし。捕まってるんじゃさぁ」

少女に文句を言っていた白衣の女性が、あくびをしながら俺を見上げた。

「ねぇ、アンタんとこで雇ってよ。一番偉そうな服着てるし、アンタが一番偉いんでしょ？」

「ちょ、タカぼんさん。こんな非常識な連中雇うことないですよ。≪法の剣≫に突き出すなり、放り出すなりいろいろやり方はあるんですから」

「そうだよ。タカぼんさん。僕も反対だ。こんな連中を雇っても、すぐに怠けたり、反抗したりするんじゃないか？」

山県と内藤の強い反対の言葉。

原と名乗った白衣の女はあくびをしながらこちらを見ている。二人に興味はないようだった。

「馬場」

「なんでっしゃろ？」

「そこの白衣が欲しがってるものを調達してやれ」

「はぁ？　いや、まぁ、ええですけど。利益分から買いますよ？」

「ああ、それでいい」

立ち上がった原が顎で自身を縛るロープを示す、手を振ると二号が解きにかかる。

「他には、いないか？」

「お嬢、どうします？」

ひげ面の親父が少女に丁寧に問いかける。少女は何が起きている

のかもわからず声を荒げる。

「どういうこと！　ねぇどういうことなの？！　私の力が失われたの？！　ここで！　この都市で目覚めた私の超能力がッ？！　私が念じる私の好きなように私が私を頂点に導くための能力が？！」

「さ、さぁ。それよりどうしますお嬢。ほんとに、このままじゃ」

少女の狼狽えようを見ていたロープで縛られた８人の男女が恐る恐る手を上げる。それに対して、親父と少女だけが、ただただアクションを動かさず、

「ああ、山県。そいつらは適当に仕事を割り振っていいぞ。猫は指示した通りだ。そいつらは連れて行くな。馬場は好みの奴がいたら仕事を割り振れ。そうだな、内藤、機会があったら戦闘できるか試しに一階に連れて行っといてくれ、集団戦闘のマニュアルは後日寄越してやる」

「あの、本当に……」

「いいんだよ。反抗だの、怠惰だのなんだのを考えて人を率いることなんざできないんだから」

そうして、少女と親父だけが残っていた。

玖拾弐／

愛というものがあるならば、私をこの世に産み落としたことこそが愛そのものだった。そして、全てに愛された才能を持つ私が唯一手に入らなかったのが支配を伴った魅力だ。

他者を従わせる魅力。他者を平伏させる魅力。

言語、音声、舞踊、知識、有望、将来、生まれ。

これら全てを従え、生まれてきた私にとって、他者を魅了し、何者かになることは簡単だった。

中学生になる前に、天才子供アーティストとして有名になり、新曲や既存の曲は全てその月のランキングの上位を独占し、人々を魅了させた。

高校に入ったときには、私に価値を見いだした連理グループの後押しを受け、私は業界でも有数のアーティストに。曲は世界へと発信され、世界中で私が有名になった。

みんなが私に屈従した。みんなが私の魅力に平伏した。

しかし、私は気づくのだ。みんなは私に平伏したわけではない。みんなは私に魅了されているのではない。

私の容姿に魅了され、私の音楽に魅了され、私の美声に魅了され、私の生み出す富と熱狂と、そして価値に魅了されたとしても、私には、私自身というものに心服し、私に支配されたがっている人たちが誰もいないことに。

恐怖が私を覆う。価値が途切れた瞬間に私に誰も従わなくなることに。

想像力が私を殺す。きっとそんな未来がないとしても、もしかしたらを想像できるが故に。

だから、そして、私は見上げるのだ。

噂で聞く。何者かの姿を。

日本を、経済界を、政治の世界を裏から操っている何者かがいる噂を聞くたびに、見るのだ。

その席に座っている自分の姿を。

想像するのだ。その席を実力で奪い去り、私がその席に座っている姿を。

だからこそ、

（何故なの？　何故、私の超能力がなくなってしまったの？）

この都市に来てから、ずっとずっとそばにあった力が掻き消された。

そして、気づく。なくなったのではない、通じていないのだ。

目の前の≪支配の杖≫の代表と、私たちを即座に取り押さえた女の子に。

（う、ううう、うぐぅぅぅぅ）

苦しくなる。そばにいる人々が離れていく。私の価値が消えていく。何もかもが消えていく。

（うううぅうううううう）

見上げる。憎い、憎いと思う。殺してやりたい。目の前の男を殺し、この力を掻き消す全てが消え去ってしまえばいいと願う。

「さて、お前だが」

髪をつかまれ、顔を上げさせられる。お嬢、と諏訪の動揺する声が隣からかかるが、無視だ。

憎い、憎い、憎い、憎い、殺してやる絶対に殺してやる、奪ってやる、この組織を奪ってやる。

「うちで働くか？」

べしゃり、と唾を吐きかけた。

「よろしくお願いしろよ。バーカ！　死ね！！」

殴りたおされた。糞がッ。

そうして、殴られた私の傷を見る諏訪と共に、私は≪支配の杖≫への加入を決意する。
きっと殺してやるし、憎み続けてやる。
連理貴久と名乗る男を。

玖拾参／

新しく参入した連中に、食事と制服と支給品を与え、書面での契約を済ませてしまう。
一日この都市で過ごしたなら、まともな飯が無料で食える喜びと、定期的に給料が入る幸福と、安全が保証されることがどれだけ幸せか理解できるだろう。いや、一日ならば理解できないか、きっとできていないに違いない。何より誰かに従っていただけなのだから、自身で考える苦しみなど知るよしもなかっただろう。
とはいえ、平和だった分、交わした契約が持つ、不可解な拘束力は覚えているはずだった。交わした契約を反故にすることへの無意識の忌避感を。
故に、こいつらが即日、明確に反乱を企てることはない。そういったことを考えた上で、俺は山県と内藤に大量に流入した新人の世話を任せることにした。中には面倒そうな、小山田と名乗った少女や、そのお付きである諏訪という名の親父も含まれている。
原は、新人どもと同じ部屋にいるが、誰とも絡まず部屋の隅で支給品に含まれている道具類を観察している。
そうして、彼らを押し込めた部屋の隣に設置した、施錠のできる倉庫用の小部屋に俺と内藤と山県が揃っていた。

「あの、塔に行くんですか？」
「行くよ。行かないでどうする。それとも残って欲しいか？」

隣の食堂で制服や支給品をがやがやといじったり、サイズを合わせたりしている連中を、扉の隙間から伺いながら、山県と内藤が問うてくる。

俺はこの倉庫代わりに使っている部屋で今日の探索準備だ。

「ええ、まぁ、僕としてはすごい残って欲しいわけですが」

「私も、タカぼんさんに残っていただかないと」

俺が苦い顔を見せると、山県辺りが恥じ入るように口を閉じた。

内藤は分かっていないのか、こちらを頼る目だ。

「お前ら、できないって言ったよな今」

「……、えっと、その、できればでいいので」

山県は、恐る恐る口にする。できれば？　できればって言ったかこいつ。

「どっちだよ。できるのか？　できないのか？　ちなみに、今日一日俺に新人教育や仕事の割り当て指示をさせる行為が何を意味するかわかって言ってるんだよな？」

「……。ッ」

唾を飲む山県。内藤は、山県が叱責されたことで、ようやく頭を働かせ、考え始めるがそんな暇などくれてやるものか。

「いいか。既に≪法の剣≫は探索に入った。パラメーターも武器も十分にある。

その上で言ってやろうか？　今日一日を無駄にする意味を。たかが新人に都市での生活を教えることや、仕事を割り振る程度のことを優先する意味を」

「ですが、その彼らに割り振る仕事を教えていただけないと、僕としてはどのような教育を行えばいいか」
「内藤。お前、甘利に何をさせるつもりだった？」
「え、あの、まだ考えては……。その、彼女が何をできるかもわかっていませんし」
額を抑える。ったく、そうだ。こいつはあれが、何もできないし、何者にもなれないということをわかっていないのだ。
一番できない甘利を中心に教育法を組み立てさせる作戦は中止にする。できない奴に合わせるなんてアホなことはする必要はないが、内藤が自主的に考えられるならそれが一番よかったんだ。
しかし、できないならもう、俺が指示をするしかない。
「簡単な指示でいいか」
山県が頷く。内藤も渋々頷いた。
「山県、お前。今すぐ≪法の剣≫でな、人事担当に仕事貰ってこい。≪支配の杖≫枠で確保してるバイトがいくつかある。お前が選んで、お前が割り振れ。いいな。
内藤。お前は山県が仕事取ってる間に、都市内のルールを連中に仕込んで、その後に≪支配の杖≫のルールを教え込め。ああ、そうだ。面倒だが龍郭院は俺が躾けてやる。三層に持って行くぞ。いいな。
馬場と幸村については口は出さなくていい。これでいいか？」
最善は、ここで山県と内藤がなんらかの仕事を自ら提案して、人員を持って行くことを俺に言い出すことだったが。
そこまで頭は回らないらしい。そういう性質の人材だからだろう。

「了解しました」

答えたと同時に山県が走り出しているところを見ると、無能というわけでもないのだし。

「指示、ありがとうございます。それと、今後のマニュアルを、時間のあるときに作成しておきます。すみませんでした」

「いや、いい。俺が指示すべきだったな」

「いえ」

顔を俯けた内藤が、いきなり自身の頬を叩き、「よし」と声を出すと部屋から出て行った。

ため息をつく、武満のように、俺も自分の部下を召喚されていればよかったのに、と。

全体指示だけで全てが動いた過去を思い出し、少し憂鬱になった。

倉庫から龍郭院用のガスマスクと塔探索用の装備を用意し、俺も倉庫から外へと出るのだった。

玖拾肆～玖拾漆

玖拾肆／

ＮＡＭＥ：龍郭院　桐葉

ＨＰ　８／８
ＳＰ　３４／３４
腕力　１６
硬度　３
俊敏　５
知能　１６
運勢　４
能力　【カリスマ（小）】

装備

右手武器：九王の槍【光輝】
左手武器：九王聖盾【必殺攻撃無効】
頭装備　：白蛇の髪留め【状態異常攻撃無効】
胴装備　：和式巫女服【無垢】
腰装備　：和式巫女服【無垢】
足装備　：高機動ニトロエンジン搭載草履【参式】
アクセサリー１：生存の札／生存の札
アクセサリー２：生存の札／生存の札

「なんですの？　これ」

生存の札と呼ばれるアイテムを摘みながら巫女服の龍郭院が縦ロ

ールをゆらゆら揺らし、問いかけてくる。
ここは塔を囲うように建設された、基地に併設されている駐車場だ。

「生存の札だ。１００００００クレジット程度で購入できる生存用のアイテムだ。装備しておけ」

購入額はそこそこ高いが、俺は使わないし、それなりにデメリットもある。恐らく、特定の人間以外には使いこなせない類のアイテムだ。
俺も購入したんじゃなくて、軍司令部の依頼報酬で手に入れたものだしな。

「はぁ。でもこれってどういった効果なんですの？」
「致死に至る攻撃をな。呪術だか魔法だかで逸らして他人におっ被せることができる」

そうして、三号の腰に、キーキーと鳴き声を上げる生物の入った籠を括り付ける。こんなこともあろうかと≪法の剣≫に卸しておく数を減らして良かった。

「……えっと、なんですの？　小人？　妖精？」

籠の中には、小さな人間の形をした生き物が入っている。少女の姿形に、蝶のような羽のついた蟲の一種だ。主に魔法を使ってくる。
人間程度なら軽く殺せる程度には戦闘力がある。

「フェアリー。三階層で出てくる妖精だな。≪法の剣≫への生物実験用のモルモットに昨日捕獲してきたんだが、まぁ、気にするな。その札をそいつに逸らすように設定してやるから。お前はなるべく

攻撃を避けて、俺の動きを見ていろ」
「了解ですわ。籠にたくさん入っていますね。可愛らしい生き物ですこと」

【【支配者の杖】が発動しています。支配状態にある生物を自領内へと編入しています。フェアリーA～Hを支配下に組み込みました。フェアリーは支配者の杖の構成員です。生存の札の優先消費対象へと変更されます】

第三層のモンスターだから普通にやばい生き物なんだが、注意はしない。脊髄にナイフを入れ、脳の結構重要な部分に針を刺しているから、言語は喋れないし、抵抗もできないようになっている。
八匹のフェアリーは、龍郭院の残りライフだ。生存の札一枚に対し、フェアリー一匹。龍郭院に装備させた四枚以外にストックで四枚あるから、合計八回の攻撃に耐えられるだろう。
ゴブリン程度の攻撃でも龍郭院はたぶん即死するだろうから、本当に八回しか余裕がない。

「なら、その生存の札とこのフェアリーという生き物さえいれば、どんどんこの塔が攻略できるというわけですの？」
「んなわけないだろう？」

呆れた表情で睨み付ける。生存の札を示す。優先効果対象、フェアリーとなっているが、

「フェアリー自体は俺が拘束して設定しないと仲間認定されない。普通の発動は人間相手にしか効果は発揮されないんだ。それに、生存の札は入手できる枚数やこちらの手持ちクレジットが限られている。無限じゃないんだ。ついでに言えば、お前程度のステータスなら一撃で即死級の攻撃を連続で放ってくる敵も存在する。この塔に

はな」
「そ、そうなんですの？」
「ま、今回は後ろでおとなしく見学してろ。ダメージ喰らったら死にものぐるいで逃げろよ。お前程度なら守ってやれるから」
は、はいですわ、と龍郭院はうなずき、そうして俺たちは塔の一階層へと侵入するのだった。

玖拾伍／

≪法の剣≫から与えられた仕事は、荷物運びだった。倉庫群の荷物を別の倉庫に運んだり、数を数えたり、店や研究棟に持っていく仕事だ。
「おう、神崎。お疲れさん」
「あ、イワさん。ありがとうございます」
仕事仲間のイワさんに貰ったスポーツドリンクを一気に飲み干す。
「しかし、最初はどうなるかと思ったけど、お前さんもかなり筋肉ついてきたよな。仕事も随分慣れてきたし」
「あはは。ええ、サボるわけにはいかないですからね」
「そうかい？　ちっとぐらい他の連中みたいに手ぇ抜いてもいいんだぜ」
苦笑されて言われるが、とんでもない、と手を振った。
そりゃ、仕事に手を抜いてる連中がいるのは知っているが、俺はそんな連中と同じことをするつもりはなかった。

「命を賭けて塔に潜ってる人たちがいるんですよ？　どうして仕事がサボれるんです」
「そ、そうだな。いや、本当にそうだ。ああ、悪かった」
イワさんがうんうんと頷く。
「お前さんはほんと、ただのバイト連中にしとくには惜しいぜ。なぁ、黒服手に入る試験があるんだが、お前、参加してみねぇか？」
「黒服、ですか？」
聞くとイワさんはうんうん、と笑顔で頷く。
「ちっと年齢制限に引っかかりそうだが、なんだ。お前、優秀だしな。俺からいろいろ口聞いてやるよ。うまくすれば好きな部署に行けるようになるぜ？　あの、なんだ、お前さんの彼女のいる秘書課にだって近づけるかもしれねぇしよ」
「……、好きな部署」
お？　やる気か、わはは、やっぱ彼女と一緒の方がいいか？　と言われ、肯定も否定もせずにただ聞く。
そうか。≪法の剣≫で上に上がって、塔へといけるようになれば……。
俺はイワさんに試験を受けられるように頼むと、次の仕事をこなすために腕まくりをした。
休憩は終わりだ。ああ、今は目の前の仕事と、未来の事を思いながらやっていこう。
そう、決心した。
【【勇者】の寄生進度が第三段階へと進行しています。【運命】の訪れと【決意】に因っていつでも【自我の逆転】が可能です】

玖拾陸／

塔一階層は【堕王の天槌】という名前らしい。

「其れはいかなる悪魔の所行か。堕ちた王は塔の天辺より巨大な鉄槌を振り下ろし、地上世界は断裂した。
断裂した世界は英雄によって統合され、人々は歌いながら夜を歩いて行く」

連理貴久は楽しそうに語っていく。各階層にはこのような逸話がそれぞれあるらしい。

「それはいいのですけれど、ちゃんと周囲を警戒しなくてよろしいんですの？」

二号とやらが前を歩き、三号が背後を固めている。一階層を探索するのは、私に危険な場所を覚えさせておくためなのだとか。
企業ビルの内装のような通路や、映画などで見るような近未来的な部屋などを横目にしつつ歩いて行く。

「龍郭院に戦闘を経験させられないのが少し残念だが、一階層で少し暴れすぎてな。俺へと近づいてくるようなモンスターはいないんだよ」

時々、レーダーのようなものを確認しながら気軽に歩いて行く。
連理貴久は、ああ、と振り返ると

「そうだ。さっきの話あっただろう？　あれはこっちじゃ表向きに

手に入る話でな、実はこっち来たときに最初に説明された魔王が攻めてきて、機械帝国が滅ぼされ、それを勇者が救ったって話なんだよ。少しばかり背景がわかって、推理すればわかるんだが、まぁ、お前にはまだ早いか」

「はぁ？　その、なんで私にその話しを？」

雑談だろうか？　いえ、そんなことを話すような関係でもありませんし……。私に彼が心を開こうとしているのだろうか……。

あとは、見つからないような位置にあった罠らしきワイヤーを、引っかかることなく解除する連理貴久を、私もタカぼん、と呼んだ方がいいのかしら？

なんてことを思いながら、ついていく。

彼は相変わらずよくわからない話を続けていく。

「うん？　なんでお前に話すのか。なんでお前に話しておくべきなのか。お前はきっと生き残る。お前は絶対に生き残る。だから話しておくべきだと思うし、いずれ必要になる事柄でもある。理解できるか？　理解できないだろうそうだろう。終わってしまってから気づくことがたくさんあるからな。だから終わらせるためにも終わらないためにもお前はそれを理解しておくべきだしいずれ伝えなければならない」

「あ？　え？　えっと？」

「いずれお前にそれの意味を問う者が現れる。だから話しておく。きっと必要になる。お前はそれを伝えるだけでいい。そいつが困ったら言ってやればいい。俺からの言葉と告げてな。

塔に、登れと」

意味不明な言葉を告げて、連理貴久はとある扉の前に立った。一階層の奥の奥にある。何かに殴られたかのようにヘコみのある、扉。

「さぁ、一階層最悪の危険地帯の一つだ。いいか。声を上げるなよ。お前が次来るときは、きっともっと酷いことになっている」

連理貴久は気軽にその扉を開け、

「あ、……」

そこにあるものを理解した瞬間、私は、

「いやぁぁあああああああああああああああああああッッッ！！」

絶叫をあげていた。悲鳴。悲鳴。悲鳴。ガンガンと頭の中で鳴るそれらを耳にしつつ、私は抜けた腰に力を入れるようにして、その部屋から出て行こうとする。

大量の泡のような膜に包まれた、未成熟の複眼の群れ、それらが私を、憎悪するように見下ろしている。

「ほい、っと。そういうわけだ。危険地帯だ。特に火や水やそれらは使うなよ。孵化するからな」

腰ごと抱えられ、私は連れ去られる。最後に見た部屋の風景は、ぎょろりと私を追いかけて動く、天井に張り付いた無数の目玉たちだった。

玖拾漆／

「と、まぁいろいろとな。怖いものがこの塔の中には多い」

ステータスが上がればその限りじゃないんだが、と連理貴久は付け加える。

「一階層はもうひとつ危険地帯があるからな。そっちを説明したら次は二階層だ」

私は貰った槍に身体を預け、息を整える。

「きゅ、休憩する暇も与えられませんの？」

「なんだ？　疲れたのか？」

「せ、精神的にですわ。あ、あんな部屋、お、おかしいですわよ！！」

入った瞬間に理解できた憎悪と狂気。あれが孵化していない状態ってことは、孵化したらきっと酷い世界が広がるに違いなかった。二度と見たくない、出会いたくない目だった。それがあんなにもたくさんいる。卵の状態で世界への孵化を待っている。

「しょ、処分はできませんの？」

「下手に手を出すとな。たぶん孵化する」

「ひッ」

淡々と言う彼の言葉に、想像力が悲鳴を漏らさせた。下手に手を出せば孵化する？　でも時間が経てば、

「あれな。ずっとあの状態なんだわ。たぶん、手を出さなければ孵化しない」

「なんでそんな事が言えるんですの？」

「塔の仕掛けの一部だろう、という俺の推測だが、まぁ気にするな。そろそろ塔攻略の参加者も増える頃合いだからな。

今度、≪法の剣≫がここ塞ぐことにしたそうだ」

……、何故そんな情報を知っているのか聞き出そうという気にはならなかった。

（≪法の剣≫とこの方は一体、どういう関係性なのだろうか？）

疑問に思う。が、口に出して良いものなのか。戸惑われた。

≪法の剣≫は巨大だ。私が含まれていた、今度の召喚分とやらが加入し、１０００名近くまで人員を揃えた、この都市最大の人類組織。

既に≪法の剣≫で公表され、≪支配の杖≫で伝え聞いた話によるところの、三つある異世界のうちのひとつで、多くの都市を統治していたとされる権力者にして将軍、武満法行を頭に据え、その部下が幹部を務め、人々のもっとも得意な分野を率先してやらせている。

その、組織の拡張速度は≪支配の杖≫など及ぶところではない。

そもそも、”相手にすら”なっていない。比較する対象ですらないのだ。

「タカぼんさん、でよろしくて？」

「ああ？　なんだ？」

私が、息を吸い込み、彼に、声を掛けようとした瞬間、

「げ、連理貴久」

どこかで見たような少女に率いられた、数人の人々が私たちの前に現れたのだ。

玖拾捌～壱百

玖拾捌／

刀を腰に差した男が、その少女の前に出ようとするのを、彼女は手で制する。

「いい、海雲。お前は周辺の警戒してろ」

「別に、警戒する必要はないぞ。俺がいる限り、敵は攻撃を仕掛けてこないからな」

肉人形を侍らせたタカぼんさんは、楽しそうに彼らを見るが、彼らの顔は苦い。

唯一、若さというか、まだ塔内の探索に慣れてなさそうな、支給品装備に身を包んだ少年と少女の二人が首を傾げていた。

「信用できるかよ。おら、海雲、二人を下がらせて周囲の警戒だ。連理はアタシが相手する。それと、お前も来たのか。生徒会長」

「え、ええ。龍村さんもこちらに来ていたことは驚きましたが、その、ご機嫌よろしく、というわけではないみたいですわね」

「あたりめーだよ、お前は。うちはそこの無駄に偉そうな悪人面に人間引き抜かれてるんだ」

引き抜き……。えっと、山県さんかしら？　美咲はタカぼんさんにべったりだったし。

タカぼんさんを振り向くと、楽しそうに嗤っているだけだ。言い訳も説明もしないらしい。

「ったく、で、何してんだお前ら？」

龍村勝香は、手にしていた刀を床に突き刺し、体重を預けるようにしてこちらを伺ってくる。
タカぼんさんは三号が差し出したコップからスポーツドリンクか何かを受け取っていたらしく、口元からコップを離すと、
「そういうお前らは、そこの部屋の中身は知ってるか？」
「……、なんだよ。そこに用があるのかよ？」
苦い顔をした龍村さんは部屋を背にする形に移動しようとするが、
「ああ、違う違う。俺は何もしないよ。お前らが下手なことしたら止める気ではいたがな」
「しねぇし。アタシもさせねぇよ」
どうやら龍村さんたちも部屋には入室済みだったらしい。タカぼんさんはコップの中身を飲み干し、言葉を続ける。
「まぁ、俺たちも≪法の剣≫もな、中の卵のことは熟知してる。だが、孵化させないような仕掛けは作れないからな。いずれ、ここの扉を崩して封じ込めるつもりだ」
「……、ま、その辺りは信用してやるよ。それより、てめぇにも恐れるモンがあったんだな。アタシとしちゃそっちの方がびっくりだぜ」
対するタカぼんさんは肩を竦めるだけだ。その様子は、恐れるというような感じではないが、龍村さんはそう思っていないらしい。
「そういうわけだからお前もこの中にはちょっかい出すなよ。龍郭院、お前もだ」

「わ、私はそもそも塔の中にはって、なんでそんな微妙そうな顔を？」
「いや、お前に新人連中率いて貰うつもりだぞ？　そもそもお前をここに連れてきた時点でそのことは念頭に置いてると思ってたが」
「はぁ？！」
何を考えてますの？！　この男。
「私は、その、人は率いることができますが。その、戦闘指揮とかは無理ですわよ？　そもそも貸していただいたこの槍だって、満足に振れませんし」
「槍はリーチが長いから持たせてるだけだ。それにその穂先、自動追尾だからな、相手がガードしなきゃ勝手に当たって殺してくれる。拠点に戻ったら適当に他の武器も試してみろ」
「……。無能じゃなかったんですの？」
「悪いが俺は、お前を無能だと思ったことはないよ。龍郭院、上に立つ者が、相手の言葉をそのまま受け入れるな」
そういって、頭をぐしぐしと撫でられる。
連理貴久、……タカぼん。
私を悪く見てるだけではない？
美咲も、悪いだけの男に引っかかったわけではなさそうですわね。ちゃんと、人を試している。
試されているのなら、働かなければならない。そして、価値を証明しなければならない。
それは、私がいつも生徒会でやっていたこと同じだった。
「相手の言葉をそのままねぇ。連理、アンタ、そこの中身をちゃんと封じてくれるんだろうね？」
「そのつもりだが、なんだ？　俺が悪巧みでもするかのような口調

だな」
「ちッ。≪法の剣≫もてめぇも信用できねぇだけだよ」
唾を床に吐いた龍村さんは、私の方に視線を向ける。
「生徒会長、あと、南雲だったか。あいつにも言っとけ。連理貴久には注意しろってな。ほら、アタシは行くぜ」
そうして、捨て台詞を吐いて背中を向けた龍村さんに対して、タカぼんさんは、
「まぁ待て。お前にいい話を持ってきてやった」
そう声を掛けたのだった。

玖拾玖／

龍村勝香の反応は烈火のようだった。
「はぁ?!　いい話だと、ふっざけんなボケが！　また誰か引き抜くつもりかよ!!」
「そも、あれは山県から言い出した話だろう。非戦闘員まで戦闘に引きずり出して、お前がトップとしての信用を失った結果に過ぎん」
「だが、それを受けるてめぇだって問題だろうが！」
そうか、そうか、と頷いたタカぼんさんは、笑顔を保ったまま、
「見苦しいぞッ！　組織のトップが己の失点を他者に押しつけるんじゃない！　奪われたから悪いだと、奪った人間が悪いだとッ!!」

う、あ、っと、いきなりの剣幕に驚いた龍村さんに対して、威圧もそのままにタカぼんさんは告げていく。

「そんなに言うならば奪ってやろうか。貴様が気づく間もなく全てを奪ってやろうか?!　人、組織、物資、権利、貴様の全てを奪ってやろうか?!」

「う……う、ぁ」

「た、タカぼん、さん?」

タカぼんさんの剣幕に、龍村さんは動けない。じりじりと、空間を焼くような威圧に私も龍村さんも声を出すことができない。そして、聞こえてきた怒声に反応したのか、海雲と呼ばれた人間がこちらに走ってくる。

硬直する龍村さんを見て勘違いしたのか、

「連理!　てめぇ!!」

引き抜かれる剣。言葉で制することはできない相手だ。それに対して、

「武力のないものは黙っていろッ!」

タカぼんさんの叫びに、指示もないのに二号が反応する。音も立てずに大剣を抜刀、目にもとまらぬ早さで海雲さんの首筋に突きつける。

「う、た、龍村ッ……」

勢いは静止する。海雲さんは動けない。一歩でも前に進めば二号

がその剣を引き、首筋からは血が噴き出すに違いない。

「下がってろ。海雲」

顔を俯けたままの龍村さんは、タカぼんさんと向き合うと、じろりと上目遣いで睨み付ける。タカぼんさんの方が身長が大きいため、どうしてもそういう形になる。

そして、海雲さんは、指示通りにじりじりと下がると、それでも手に持った剣を構え、タカぼんさんを睨み付ける。

「連理。お前が言う、いい話ってのを聞かせてみろよ。それと海雲！」

「お、おぅ……」

龍村さんは、じろりと海雲さんを睨み付けるように問う。

「新人二人はどうしたッ？！」

「え、あ、す、すまん」

「馬鹿野郎！　塔の中で新人を放置するんじゃねぇよ！！」

「だ、だが、お前の方が」

「いいから戻れ！　敵が来たら、即座に殺されるぞ！！」

またタカぼんにトップとしての隙を見せてしまったことよりも、新人さんとやらが心配なのだろう、龍村さんの怒号は早かった。

海雲さんも、今度は口答えすることなく、慌てて元の通路へと走っていく。

「ちッ。で、話ってのはなんだよ」

「……、ああ、やはり死んだのか。この前の剣士は」

舌打ち。タカぼんさんの言葉に龍村さんは苦い顔を隠せない。

「多聞は死んだよ。山県離脱後の撤退途中でな。で、いいから話せよ。これ以上はアタシも我慢しねぇぞ」

「そうか、なら雑談は終わりにして、商談と行こうか」

壱百／

「で、商談ってのはどういう意味だ？」

ヘコみだけが中にある異常を唯一伝えてくれる、孵化を待つ卵を内包した部屋。その前で顔をつきあわせた≪支配の杖≫のトップと≪カラミティ・ブルータス≫のトップは三号が用意した折り畳み式の椅子に腰を下ろしている。

長い槍を片手に持った私はタカぼんさんの背後に立っているだけだ。扉の側には何かがあったらすぐに動けるようにだろう、鎧姿の二号が大剣を片手に立っている。

三号は持ってきていた櫃の中から、紅茶やケーキを取り出していた。いつの間にか、ポットや小型の冷蔵庫が用意されている。

「てめぇは、用意がいいんだな」

その様子を見た、諦めた仕草の龍村さんがむしろ哀れに見える。生徒会活動で、都市の高官との折衝になれた私ですら、この光景には苦笑してしまう。

少なくとも、生徒会長だったときの私は、移動中にもこんなことができるように、物事を整えたことはない。

「アタシと会うことも予想済みだったってことか？　お偉いさんお

得意の新人教育とやらをするとは思わなかったのか？」
「お前にそんな余裕はない」

一言で切って捨てられる。舌打ちが龍村さんから漏れた。

「……それに、これはもう少し違う目的で用意していた。お前に使うのは俺も予想外だった、というより、アクシデント、イレギュラーだな」
「なんだそれ？」
「龍郭院がいなかったら、お前に商談を持ちかけようとは思わなかったってことだ」
「あん？」

じろりと、龍村さんに睨み付けられ、慌てて手を振る。

「私（ワタクシ）は何もしてませんわよ？！」
「そうだな。連理がお前の提案程度で動くとも思ったりしねぇよ」
「はぁッ？！」

私の叫びに、耳を押さえる仕草をする龍村さん。

「ったく、アタシらもな。≪法の剣≫にはいろいろとコナ掛けてみたが、奴ら交渉の窓口すら作ろうとしねぇ。規模としちゃ同じ程度の≪カラミティ・ブルータス≫と、なんだっけ、連理、お前んとこ？」
「≪支配の杖≫だ。今後はよろしく頼む」
「まだ商談とやらに頷くつもりはねーよ。で、前のリーダーとかが存命中の時にな。アタシもいろいろ≪法の剣≫とは話し合いをしようとしたんだが、ダメだった。≪法の剣≫のトップは武満法行だったか、アイツと会うこともできなかった。≪カラミティ・ブルータ

ス≫と≪支配の杖≫は同規模。いや、昔は≪カラミティ・ブルータス≫の方が大きかったんだ。
だから、お前が従ってるこいつは、その程度にはできる奴ってことなんだ」

行儀の悪い仕草で、三号のいれた紅茶を啜る龍村さんは、

「生徒会長、お前もついてく奴は決めた方がいいぞ。アタシたちがお前の予想以上にできないんじゃなくて、こいつがお前の予想を越えて、できすぎる奴だってことは覚えとけ。絶対にな、コイツは口にした言葉以上のことをするつもりだ。きっと邪悪な方面にな」

にやりと嗤う龍村さんは、楽しそうに言葉を続ける。

「上に立つ者が、相手の言葉をそのまま受け入れるな、だったか？」
「とはいえ、私が龍村さんについていく理由にはなりませんわ」
「そっか。残念だ」

ちっとも残念そうでない様子で、遠慮なく、目の前のケーキを切り分けていく龍村さん。

「お、美味いな。連理、これ、帰りに包んでくれよ。新人連中や海雲に喰わせてぇ」
「好きなだけ持って帰れ。この程度、出費にもならん。紅茶もつけてやる」
「へいへい、景気の良いことで」

で、と龍村さんがタカぼんさんを睨む。

「で、商談ってのはどんな悪巧みなんだ？」

「そのままだ。俺が道具や薬を用意する。≪カラミティ・ブルータス≫は代価を持ってくるだけでいい」

苦い顔をする龍村さん。急所を突かれたような顔だった。

「……、ま、店関連をまともに使えないアタシらにゃ、喉から手が出るほどありがたい話だが、どういった心境の変化だよ。てめぇらが封鎖してるんじゃないのか？」

「素直にはとらんか」

「第一、対価ってのはなんだ？　割高でクレジット奪おうってか？　白状するが、そんな余裕はアタシらにゃねぇよ。残念ながらな」

「そんなもの、こちらも期待していない」

私も気になるところでしたが、質問は控え、考える。口を出したらまた無能扱いされそうだった。

そもそも、と龍村さんは告げた。

「てめぇらはそんなことして≪法の剣≫に睨まれねぇのか？」

「その程度なら、どうとでもなる」

「てめぇが≪法の剣≫に指示されてるってのは？　アタシらを嵌めようとしてるとか」

「それもない。と言っても信じられないか。根拠をいくつか提示してやる。お前が恐れていることは大概わかってるからな」

また舌打ち。見透かされたような言葉に龍村さんは嫌そうな顔をした。

「≪カラミティ・ブルータス≫のトップ、龍村勝香、お前が恐れているのはな。≪法の剣≫にこれ以上のいちゃもんをつけられて組織を潰されることだろう。その際に配下が無用に傷つけられることも

だな。

部下を大事にする。それだけがお前の持つ唯一の美点だ」

そりゃどうも、と龍村さんは舌打ちをして紅茶を飲み干した。さりげなく、三号がおかわりを入れている。

「で、てめぇの利点ってのはなんだ？」

「まずは対価の話をしよう。それを聞けばお前も少しはこちらを信用するだろう」

そうして、タカぼんさんは無表情に口を開いた。

壱百壱～壱百参

壱百壱／

「さて、俺たちがここに連れてこられて八日目に突入したわけだが、その中で先日から今日にかけて変化した状況を教えよう」

優雅に紅茶を口にするタカぼんさんは、表情を変えずに言葉を続けていく。

「まず、人員。各組織に人員が加入した。≪法の剣≫≪支配の杖≫≪カラミティ・ブルータス≫、そのどれにも一名以上」

「アタシんとこには二名来てる」

「先ほどの奴らだな」

頷く龍村さんの顔に不満はない。二名という数字にこだわりはないようだった。

「で、≪法の剣≫には五十人以上だな。言わなくてもわかっているだろうが、これでまた組織の規模としては差をつけられたことになる」

「そういうてめぇは、そうは思ってなさそうだが」

「顔に出していないだけだ。内心では苦く思っているさ」

言ったタカぼんさんは、手元のショートケーキを切り分けに口に運ぶ。すっとフォークを入れて、上品に口に運ぶ。嫌に綺麗な食べ方だ。

（育ちは良いみたいですわね）

雑に食べる龍村さんと比較するのはちょっと可哀想なのでやめておく。
対する龍村さんは、胡散臭そうな顔でタカぼんさんを眺めるだけだ。

「ま、いいや。話を続けろよ」
「ああ、それで変化した状況その2。今日から≪法の剣≫の探索部隊が本格稼動する」
「ああ、やっとか」
「ああ、やっとだよ」

龍村さんがため息をつく。そうして難しい顔をしながら、タカぼんさんを見つめる。彼女の手元の飲み干された紅茶のカップに三号が新たにおかわりを注いでいた。切り分けられたショートケーキが新しい皿と共に配られる。

「人員云々はともかく、てめぇが言いたいのは、≪法の剣≫の本格稼動か……」
「ああ。俺が稼げるアドバンテージが消失するわけだ。流石に、質を伴った人海戦術まで使われると俺でも対処は難しい」

手を広げ、やれやれと仕草でどうにもならなさを表したタカぼんさんは、

「で、ここで本題に入るわけだ」
「本題、ねぇ。アタシらと同盟か合併でもしようってか？」
「それは断る」

むぐ、と思わず紅茶に鼻を浸してしまった龍村さんは、服の袖で

鼻を拭い。眉を寄せながらも口調を荒げかけ、慌てて口を押さえた。
見れば、冷たい視線でタカぼんさんが龍村さんを見ていた。

「商談と行こう」
「クレジットも武器も何もないアタシらと何をする交換しようってんだ？　まさか人員か？」
「海雲はお前を信仰しているし、二人の新人は引き抜いてまで育てようと思わせる魅力がない。
それよりも、お前に俺が欲する代価は」

そこで、タカぼんさんは言葉を区切り、龍村さんにも理解できるように簡潔に言うのだった。

「情報だ」

壱百弐／

「情報ねぇ。っても、てめぇの方がそこは長じてるはずだ。たまにアタシらの知らない方法で扉を開けたりしてるだろ。その辺り、見てるぞ」
「有用か不要かはお前が持ってくる情報で判断してやる。俺は、俺以外の視点からの情報が欲しい。後は、まぁ、≪法の剣≫で手に入れた情報の裏を取ったりしたいしな」
「ってもな。アタシらは塔の中を歩くのさえおっかなびっくりな状態だ。それに、」
「それに？」

一瞬、すごく遠い目をした龍村さんは、

「アタシは、寄り道したくない」

そう言って、上を見上げる。

タカぼんさんはそんな彼女に優しく声を掛けた。

「部下が死ぬぞ」

「ッ……。どういう、意味だよ」

私と龍村さんが声を失う中、軽々しくタカぼんさんは事実だけを告げていく。声は楽しげなのに、笑みは浮かべていない。

「だから、死ぬんだよ。≪法の剣≫が侵入可能になった今、普通の攻略でお前たちが先に進めるわけがない。お前たちは必ず無理をするだろうし、その際に死人が必ず出るだろう。

海雲さえも危ういだろうな。お前はどうだろう？　新人のパラメーターアップアイテムを全て、お前に使えば助かるかもしれないが」

「それは、しない。できない」

パラメーターアップアイテム、支給品に入っていた果実のような物体。タカぼんさんから毎日頂くことになっているもの。

美咲曰く、すごく貴重らしいそれ。

「だろうな。お前はそんな恥知らずなことはできない。目的を掲げた大将が、自身の生存に全力をかけるような真似をするなど言語道断だ」

何がおかしかったのか苦笑を浮かべ、タカぼんさんは続けていく。

「とはいえ、大目的を曲げることを強制しているわけではない。塔の探索だけに全力を尽くすお前の存在は貴重だ。俺も失いたいと思

っているわけではない」
「……？　まるで塔の攻略が目的じゃないような口ぶりだな」
「死ねば面倒がなくなると思っているのは確かだが、それでも選択肢のひとつとして残していいとは思っている。龍村、お前には何を言ってるか理解はできないだろうが」
首を傾げる私と、鼻を鳴らす龍村さん。
「へッ。どうせ悪巧みだろ」
「内藤がな。いや、南雲・アーリアライト・美咲がお前を訪ねてきたら、今の言葉を教えてやれ。ああ、もちろん対価は後で先払いしてやる。先に商談を始めようか」
「は？　っていうか、今の言葉を伝えるって？　なんでだよ？　直接言えばいいじゃねぇか」
「タイミングというものがある。今は忘れていいぞ。どうせ素直に伝えようとは思わないだろうしな」
「と、当然だ」
困惑を残したまま、龍村さんはタカぼんさんを見た。
「何考えてるんだ連理、南雲の奴を裏切るのか？」
「裏切る裏切らないじゃない。布石を打っているだけだ。お前もいずれ、わかるだろうが……」
目を閉じたタカぼんさんは、少しだけ沈黙する。先ほど私も告げられた言葉を思い出し、同時に、タカぼんさんの次の言葉を私たちが待っていると、
「わかるだろうが？　なんだよ」

龍村さんが堪えきれなくなったのか、問いを放つ。

「いや、なんでもない」

「なんだよ」

「なんでもない。いずれ意味はわかる」

そうしてタカぼんさんは紅茶のカップに手を伸ばし、口をつけるのだった。

壱百参／

タカぼんさんが打ち切ったことにより、先ほどの何が何やらわからない空気は消失していた。

龍村さんはよくわからなそうな、しかし、何かを確信したような表情で立っている。

「それより、商談だ。情報についてはまずいくらか買い取ってやる」

「って、おい。アタシはまだ受けるとは」

「受けるしかないだろう。意地を張るな。それとも、受けられない理由でもあるのか？」

信用できない、とは口が裂けても言えないのだろう。龍村さんは口をへの字に曲げ、見目の良い顔を苦渋に歪ませる。

まるで、大人が子供をあやすようにタカぼんさんはその様子を眺めていた。きっと龍村さんは臍を曲げるだろうから、私は口には出せないけれど。

「……わかってるよ。受けなきゃいけないってことは。だが、感情で納得できない」

「山県か」
「そうだよ。お前が引き抜いた山県だ。アタシが許したら、お前はきっとまた同じ事をするだろ。だからそれがアタシは許せない」
「許さなくていい」
「は？」

思わず漏れた声に対して、龍村さんとタカぼんさんの視線がこちらに向けられる。慌てて、腕を振ってなんでもないと表した。

（許さなくていい？　どういうことですの？）

疑問に対して答えはでない。商談をするのに、お互いが遺恨を残したままなんてあり得ない。そんな私の思考など見透かしていると言わんばかりにタカぼんさんが言葉を続ける。

「許さなくて良いし、警戒したままでいい。むしろお前はしておいた方がいいぞ。≪カラミティ・ブルータス≫がこのまま生き残れば、いずれ≪法の剣≫もなんらかの接触をしてくるだろうしな。そのときに、尻の毛までむしられてもいいなら、安心するだけすればいい。
それに、忠告してやるが、お前らは情報をただ売るだけじゃない。出し渋ってこちらから対価を思いっきり引き出せ。その方がアイツの勉強になる」

そう言って、タカぼんさんがフォークを向けたのは、私にだった。

「へ？」

間抜けな声を出す私に、タカぼんさんがずけずけと告げていく。

「アイツが窓口になる。龍郭院が、元の世界の感情に絆されたこと

にして≪法の剣≫には言い訳を通す。≪法の剣≫とは同盟を組んでるが、完全に味方というわけでもないしな。この程度の小細工はあっちも承諾するさ。しないなら、させるしな。
それより、何か売れる情報は持ってないのか？　龍村」
「……、ま、いいけどよ」

ぶつぶつとこちらを胡散臭そうに見る龍村さんと、商談成立とばかりにケーキを口にするタカぼんさんに対して、

「じょ、冗談ではありませんわッ！　な、なんでこんな勝手な」

反抗ができたのはそこまでだった。

（目が……、タカぼんさんの目が）

私を見るタカぼんさんの目は、冷たい。極限にまで冷え切っている。幸村さんに殴り飛ばさせた時と同じ、無能を見る目だった。

「龍郭院」

……、この言葉を覚えている。かつて美咲の父親が、反抗しようとした美咲に対して掛けた言葉と同じだ。
”お前の代わりなどいくらでもいる”、そういう意味の籠もった言葉だ。
まさか、私自身が掛けられるとは思わなかった言葉に、身が震えかけて、直後に、

「できないか？」

優しく、まるで温度の違う言葉を掛けられる。固まっていた心が

溶けていくようだった。

「い、いえ、できますわ。龍村さんと、交渉をすればいいのですわね？」

「そうか。やってくれるか」

当たり前の事を、当たり前のように決めた、大人の顔だった。龍村さんに対しては、宥め賺し、優しい言葉や利益をちらつかせ、時には恫喝し、暴力も見せたというのに、私に対しては、言葉と視線だけだった。

銀稜台の生徒会長を務めていた私が、人物の格というものを、味あわされたのだ。

悔しさに、涙がこぼれかけるのをそっと手で隠し、もう私ではなく、龍村さんと話を再開している彼を、しっかりと見つめた。

連理貴久。≪支配の杖≫のトップ。この都市に君臨する組織と一人で比肩する男。

そして、私の”上司”。

「タカぼん様……」

自然と、呼称を変えていたことに気づくのは、龍村さんと別れてからだった。

壱百肆～壱百漆

壱百肆／

「タカぼん様。どうされました？」

龍郭院の嫌に好意的な視線にため息が漏れかけた。如何に俺が人物の才能や傾向まではわかっても、どうすれば尊敬を得られるかまで方法を熟知しているわけではない。

だからこれは、不可抗力だ。

巫女服を着た、日本人顔の金髪縦ロール娘は、心なしか今までより、俺との距離を詰めつつ、隣を歩いている。

「近すぎる。奇襲を受けた際に動き難いぞ。少し距離を開けろ」

そう言うとむしろ厳しく当たられることが嬉しいように「はい、タカぼん様」返してくる。距離は、近すぎず、遠すぎず、話すに易く、動くに易い距離だ。

ああ、と思った。扱いやすくなっただけ今までよりマシだと考えればいい。

だから好意を向けられようとも、龍郭院に対して、好意的に接してやる必要はない。今まで通りでいいだろう。

「それより覚えたか？　先ほどまでの順路が大体、安全に移動や行動ができる道だ。他の道は今のお前たちには、罠の解除が難しいだろう。探索技能がスキルアップしてからだな」

「罠は解除していないんですの？」

「大体、一日程度でモンスターの手によって罠は張り直される。それに、位置も変わっていたりするしな。罠の位置を記憶することや

罠の位置を移動して利用するなどの手段は自らの首を絞めるだけだろう。それより、何故この順路が安全なのかわかるか？」

あのボス部屋と続く扉のある通路で、何故この通路が比較的安全なのか、龍郭院が自力で答えを出せるか問えば、

「そうですわね。地図は」

「見て一発でわからなかったら間抜けだな」

地図は渡していなかった。一応、ここに来る際の車の中で記憶させたが、現地では地図なしで行動できるようにと、渡していなかったのだ。

しかし龍郭院は小さく笑みを浮かべ、俺に対して楽しそうに微笑む。

「私、記憶能力などには、自信がありまして。一度、行ったことのある街などで迷ったことはありませんの」

その手元には地図はない。しかし、龍郭院が少し考え込む仕草をすれば、

「なるほど、理解しましたわ。というより、単純すぎて謎とも言えませんわね。どういうことですの？

二層への通路への道が一番安全？」

龍郭院には、あの部屋の中身やブレーカーのことは既に告げてあった。

「つまり、稚拙な探索者でも最低限、戦闘力さえ伴っていれば次の階層へは突入できるんだよ。

これはモンスター側で誘導してるのかもしれんな」
「なんのために？」
単純にわからない、と首を振る。これぱかりは直接聞くより他にない。龍郭院は納得し、俺は話を進める。
「先ほど話したとおり、あの部屋にたどり着かなければエレベーターは動かなかった。それに」
「それに？　なんですの？」
「あそこにある端末でな。エレベーターに制限が設定できるんだわ」
今は設定していないが、どこかの勢力がパスコードなどを入力すれば、エレベーターを使えるのは一部の勢力になる。その後に端末を破壊すれば、扱えるのはそのコードを持っている人間だけになるだろう。
「もちろん二層も同じだ。独自にコードを設定できる端末もあるしな」
「何のために……？」
「一部の勢力が手に入れば塔内の探索は自由になる。しかし、その勢力が上の階層で全滅すれば解除できない他の連中は探索ができなくなるだろう」
俺の言葉に龍郭院は一度悩みかけ、しかし、と首を振った。
「建物の構造的に、その考えはあり得ませんわ。上に行けるのは受付のエレベーターだけですの？」
「他の手段か？　階段が物理的に封鎖されているから、今は他に見つかっていないな。外壁を物理的に抜けるなら、上の階層に外から入れるだろうが、そんなズルを許すほど機械帝国の連中は寛容じゃ

ないだろうしな」
「何故そこで機械帝国の名前が？」
「ああ、すまん。魔王軍の連中だったな」
「そういうことを言ってるわけでは、……いえ、今はこちらの話を進めましょう」

何故、塔探索について機械帝国の名前を出したのかについて、龍郭院は問いたかったのだろうが。
俺の態度から何も思考材料は与えられない、と判断した龍郭院は今は置き、先ほどの話を進めようとする。
……、なるほど。内藤より頭は回る娘だ。何より、

（龍郭院は自分で動き、考えるタイプか）

きっと、機械帝国についても独自に情報を集めてくれるだろう。自らが納得するために。
俺は、その人間が持っている才能や素質を無意識に大体、把握できるが、それを実際に行えるレベルにまで成長しているかは実地で見聞するしかないのだ。
その上で判断するなら、龍郭院は組織を運営するのなら、手札に一人はいなくてはならないタイプの人間だ。

「……、ええ、大体わかりましたわ。つまり、エレベーターにパスコードを設定することができる。けれど、エレベーターを使用するに当たって、そのパスコードは絶対に必要なわけではない、ということですわ」
「具体的には？」
「エレベーター利用に、コードを必要としないマスターキーの存在があるか。もしくはエレベーターを塞ぐ扉は物理的に破壊することが可能であり、円筒内は何らかの手段で進むことができる」

「正解だ」

あの狂乱した蟲から手に入れた、施設を利用するコードの入った端末とは別に、俺は鍵束を取り出した。

あの蟲人を殺した際に手に入れたものだ。

「こいつはな。この塔のいくつかの施設を動かすことのできる鍵だ」

壱百伍／

艶めいた不気味な意匠が象られた鍵。銀色の古ぼけた鍵。くすんだ鉛色の鍵。空色の優しげな鍵。

鍵束には四本の鍵がぶら下がっている。蟲人から手に入れられたのはこれだけだ。

未だに、使い方のわからない鍵がいくつかあるが、きっとどこかの施設の鍵なのだろう。モンスターの使う言語でそれらにはそれぞれ名前がついている。

【生死のわからぬ小箱に詰められた子猫の鍵】【永久不変の水桶の鍵】【破裂した豚の鍵】【尾を噛み回る犬の鍵】

塔のエレベーターは【永久不変の水桶の鍵】を使用することによって、コードなしで扱うことができるのだ。

「ただし、二階層までだがな。そこから先はまた手に入れた、こっちの【落下する鬼の首の鍵】を扱う」

「……、妙な名前ですのね？」

「意味はわからんが、意図のわからない、古ぼけた鍵穴があったら、横にある名前を確かめてみると良い」

龍郭院はうなずき、懐からメモを取り出した。

「メモ、とるのか？」
「あ、いえ、そのモンスターの文字はわからないので、メモだけ取らせていただけるとありがたいのですが。一致する鍵穴を見つけないとも限りませんし」
考える。まぁ、使用用途のわからない鍵の名前が流出したところで痛い情報ではないだろう。それに流出したらしたで、それを欲した連中を締め上げればこちらにも得になるかもしれない。
それより、
「先ほどの話はメモるなよ？」
「わかっておりますわ。もしメモを落として、龍村さん辺りに拾われたら大損ですもの」
「わかってるならいいさ」
龍郭院が理解していたことに気をよくしたのか、話しているうちに傍らに立っていた龍郭院の頭を自然と撫でていた。
（また、悪癖か）
気づけば、子供扱いされたことが応えたのか、顔を赤く染めた龍郭院が俺を見上げている。
「悪い、忘れてくれ」
「れ、レディに失礼ですわッ」
「ああ、悪い」
「もうッ」
と、頬を染めた龍郭院が四本の鍵の象形文字のような言語を紙に

書き記し、そうして俺に対して催促するように目を向けてくる。

「ああ、二階層の方だな」

≪雌雄の区別のない巨大鳥≫から入手した鍵束を見せる。こちらも、ＩＤの入ったＵＳＢのようなメモリと一緒に手に入れたものだ。

その中の一本である【落下する鬼の首の鍵】が三階層へのエレベーターのマスターキーであること。それ以外の鍵の用途を、俺は未だに知ることができていない。

「他には、【雷龍≪インドラ≫の鍵】【探索騎士≪コヴォラス≫の鍵】【惰性王≪モーガン≫の鍵】ですの？　王に騎士、それに龍。もう片方は猫に犬に豚……？　生き物関係ですの？」

「養豚場やペットショップの利用キーかもしれないな」

実のところ、鍵の存在は≪法の剣≫には話していなかった。まだ何に使えるかわかったものではない以上。あちらから切り出してくるまでは黙っているつもりでいる。

「そういえば、≪法の剣≫はエレベーターコードについて知っているんですの？」

「ああ、知っている。ああ、設定されたらどうするつもりだ、と思ってるんだろう？」

「え、ええ。そうですけれど。その辺りは？」

「大丈夫だ。信頼ではなく、利害の部分で奴らはそれができない」

首を傾げる龍郭院は、俺が続きを話さないのを悟ると目を閉じ、思考をする。

「まぁ、こちらがコードの代替手段を持っていた場合。二層以上で

コードを設定され、≪法の剣≫はエレベーター以外の階層移動手段を入手しなくてはならなくなる、と。大体はわかりますけれど、それでも賭けの部分が大きいのでは？　それに≪カラミティ・ブルータス≫が行った場合は？」

「コードの設定にはコンピューター技能と魔物の言語に特化した人間が必要だから、奴らには実質不可能だ。それに、」

「それに？」

「≪カラミティ・ブルータス≫はそういった手段だけはとれないんだよ。やったら≪法の剣≫にコードを知ってるだろう人員を引き抜かれるからな。拉致され、拷問を受ける可能性もあるだろう」

犯罪的な手段に嫌な顔をした龍郭院が他に頭を巡らすように首を振る。

「そもそも、どうしてこんな面倒なものが？　ただエレベーターコードがあるだけならともかく、こちらで設定できるようになっている意味がわかりませんわ」

「それは……」

それはきっと、

「恐らく。コードを必要としない人物以外が塔探索をできないようにするためだろう。そして、それはきっと都市内部にいる人物たちの手によって行われる行為だ」

「人間側での仲間割れ。今、現実に派閥があるとはいえ、それは実に悪夢的な発想ですわね。でも、」

「でも？」

俺の反駁に、龍郭院はやはり納得できないという顔でそれを言った。

「そんなに簡単にその手段を行えるということに、納得できませんの」

俺は答えを返すことができなかった。

そう、今まで悪魔的に設置されていた、個人や組織の独走を許す道具や施設のうち、そのシステムだけが、嫌に稚拙に設置されていた。

壱百陸／

第二層へはエレベーターを用いて、侵入するしかない。

二層へはすぐに着くらしく、タカぼん様は腰の武器を取り出しながら、

「ああ、そうだ。わかってると思うが、ライフ1ぐらいは覚悟しておくんだな」

そう、悪魔的な嗤いを浮かべたタカぼん様が言い、問い返そうとした瞬間。エレベーターの扉が開いたのだ。

「構えろよ。運が良ければお前でも生き残れるからな」

「へ？」

眼前を一瞬にして、紫電の網が埋め尽くし、網に触れた指先が、じゅっと音を立て――

壱百漆／

目を見開いたら、タカぼん様が私を見下ろしていた。
そうして、冷徹な声で言う。

「エレベーター突破にライフ1消費ってところだな」

何かを切り分ける音に目を向ければ、積み上がった人型の豚や、人型の犬のような生き物を二号や三号が切り分け、持ち込んでいた櫃に詰め込んでいた。

「な、なななな」

「エレベーターが開いた瞬間を待ってた連中に襲撃されたんだ。で、お前はコボルトが撃ってきた放電銃の直撃喰らって死んだ、というか死に至る攻撃を受けた。
ダメージは生存の札がそれを他におっ被らせた。
うん、やっぱお前は主要人物の器じゃないみたいだ。思ったより、簡単に死の状況に陥る」

何故か、他の個体は無事なのに、焦げて死亡した形のフェアリーが三号の腰の籠から取り出されていた。
そして、私の腰に下げていた、生存の札なるアイテムが……

「焼け焦げて……？」

「だからライフ1消費な。こうやってエレベーターで移動する際や、閉じきった個室や、通路途中の大部屋は気をつけろよ」

「ひ、ひぃッ」

連理貴久は、タカぼん様は、生存の札についてなんと説明しただろうか。
確か、

『致死に至る攻撃をな。呪術だか魔法だかで逸らして他人におっ被せることができる』

意味が蘇ってくる。言葉の意味が、今までの冷たい言葉が、蘇ってくる。

見れば、私の腰で朽ちた生存の札を取り外し、タカぼん様は、新しい札をつけていた。

「俺はお前をな、今、内藤に指導を受けている新人連中を率いらせて、塔探索に送り込もうと思っている」

下手をしなくても死んでいた、という事実に停止した脳を、タカぼん様の言葉が通り抜けていく。反論の言葉も思い浮かばない。

「だが、強制させる気はない。お前が断りたいなら、きちんと考えてから断ればいい。その言葉の意味を、自身を、死地で人を率いるに値しない人物だと断ずることができるなら、だがな」

混み上がっていた吐き気や、困惑が、その言葉で完全に停止していた。

その言葉は、私の心をたやすく、深く抉る呪文だ。

私が、私を無能と断ずることは、日本という国を率いるべく育てられた今までの生が許さない。

私は私を育んだ両親や環境、そして周囲の人間を裏切れるような薄情な人物ではないし、今まで培ってきた努力を切り捨てられるような人間ではない。

「……酷い、人ですのね。タカぼん様は」

何を今更、という顔で彼は私を見下ろしていた。
そうして、楽しそうに告げるのだ。まるで極限状態の人物を育てるのは楽しい、というような表情で、

「残機7だぞ？　さぁ、立ち上がろうか。お前の成熟具合が良ければ、それが尽きても帰還しないかもな。ははは。
さぁ、立ち上がれ、龍郭院。命令だ」

そうして、横になっていた私にタカぼん様は手を差し出すこともせず、一人で立ち上がる事を、私に強制した。

「それでこそ」

ええ、それでこそ。

「私の上司ですわ」

私は、私の妥協を許さない。
で、あるならば、この塔探索で、心がすり切れるまで私は試されるべきなのだ。
そうして、第二層の探索は、私の残機を減らす形で始まった。

壱百捌～壱百壱拾

壱百捌／

一階層に出現する敵が、コボルトとゴブリンなら、二階層に出現するのはオークと強化コボルトだ。

豚の頭を持ち、二足で歩き、兵器を、熟練した戦士のように操る豚鬼（オーク）。

同じく、犬の頭を持ちながら、二足で歩ける身体を持ち、ベテランの兵士と同じように戦える犬鬼（コボルト）。

彼らは集団戦闘をより効率よく発揮できる戦術を携えながら、俺たちの元の世界の技術よりも、優れた技術で製造された武器を手に迫ってくる。

「残機、また減ったな」

二階層の通路で俺は、目覚めた龍郭院を前に言った。巫女服の金髪縦ロールの少女は、床に直接寝かされていた。

また死んだのだ。否、死んではいないが、死の状況に陥った。

「覚えていますわ。私の首が斬り落とされたのを」

細い、折れてしまいそうな首を撫でる龍郭院。金色の髪はモンスターの血に濡れているが、それでも美しさを損なうことはない。

龍郭院が死なないように、俺が全力を尽くせば彼女が死ぬことはないだろう。だが、それでは塔の恐怖を学ぶことはない。油断を助長させてしまう結果になる。

だから、余裕があるなら適度に殺して、適度に守るのが一番良いと判断していた。

「……、また死にましたわ」

沈痛という言葉では表現しきれない口惜しさを唇に乗せ、龍郭院はよろよろと立ち上がった。二階層の案内を半分ほどしたところで、龍郭院の残機は４まで減っていたのだ。

「折り返し地点だぞ」

フェアリーの死体を籠から取り出し、通路に放り投げる。今回は、接近してきたコボルトの剣士に首を”刎ね飛ばされ”、龍郭院は殺された。

もちろんその死の事実は、生存の札によって消失している。首は飛ばされたが、その事実はフェアリーが受けたことになり、龍郭院には傷一つない。

この生存の札というものには、事象を操作する力があるようだった。思考する。四回の発動でだいたいの理論は理解できている。

どういった製法で作られているのかわからないが、これは、死の概念を完全に、誤差なく他者に移動させることができるらしい。

「呪術に、魔術か……。完全に未知の技術だな」

「どうされました？」

とりあえず立ち直れたらしい、龍郭院が話しかけてくる。

「いや、なんでもない。お前の生は確定しているしな。揺らぎがなくて結構だ」

「不気味な事を言わないでくださいまし。それより、」

「ああ、残機４だが、まだ進むか？」

唇を引き結んだ龍郭院が俯く。銀稜台の生徒会長も、四回も死ねば流石に堪えるらしかった。

「やめるか？　別に無能とは断じないぞ。むしろよくそのパラメーターで二層を歩けると感心しているぐらいだ」

これは本音だ。龍郭院桐葉は流石に、将来大人物になる程度の性能を肉体に秘めていた。

運動系一本で進めば、世界へと通用する人材に育つ程度の才能も持っている。銀稜台がどうだか知らないが、俺の世界でなら、世界でも新記録ぐらいは出せそうなポテンシャルは秘めているようだった。

才能の段階ではあったが。

「……、私がもし帰りたいと言ったなら」

「帰還しよう。約束する。お前は生きて帰らせてやる」

唇を引き結ぶ龍郭院は、背後の、俺たちの背後を自動で付いてくる、エンジン付きの高性能な櫃に目を移した。その容量はだいたい半分程度戦利品で埋まっている。攻めてきたオークやコボルトの死体から肉や内臓の回収を行ってはいたが、それでも捨てる部位はあるし、何より、肉だけで櫃の容量を埋めてしまっては、俺がここに来た意味がない。

せめて、何かしらの機械や書類も回収しておきたいところではあった。

「……、帰りたくないと言ったら」

「命の保証はできなくなる。守るが、それも絶対じゃない」

龍郭院は俯いた。そうして、悩み、やがて、顔を上げる。

そこには、凡人なら十人が十人は惹きつけられる、未熟ながらも王者の資質が垣間見える。
金髪を靡かせた、美しい少女がそこにいる。

「もちろん、進みますわよ。タカぼん様、私に妥協は許されません。タカぼん様が望む戦果が得られるまで、帰還という選択は選びませんわ」

内藤と違う、健全な人物の魅力を見、俺も頬が綻んだ。
こういった、人物の成長は純粋に好ましい。

「そうか。なら進もう。とはいえ、龍郭院、少し汚れているな。待っていろ」
「あ、はい」

きょとんとしたような龍郭院の様子に、笑みがそのまま苦笑に変わる。俺が優しく話しかけたことが理解できなかったらしい。
少し厳しすぎたようだった。
俺の考えを察した三号が差し出してきた、熱く濡れたタオルを受け取り、血に濡れた龍郭院の顔や腕を拭っていく。

「注意1だ。リーダーを志すなら、常に身だしなみに気をつけること。いつ何時も部下が見ていることを意識して過ごせ。
例え、傍に誰もいなくとも、だ。
俺を見てみろ。事ここに至っても塵一つないだろう？」

塔探索用の装備の上から羽織っている、≪支配の杖≫の総帥服には返り血ひとつ付いていない。
俺に接近する敵を片端から三号が殺していれば、それも当然だったが、龍郭院は、感心したように頷いていた。

「なるほど、わかりましたわ。それで、その……」

美しい少女は、頬をタオルで拭っていた俺を見上げ、頬を染めた。

「その、私は、自分でできますので、タオルと鏡を渡していただければ……」

「好意だ。素直に受け取っておけ」

これが親しくない仲ならセクハラで訴えられもするだろうが、既に確信している。

犬が主人に向ける愛情らしきものを向けてくる龍郭院は、この行為を喜びはしても、怒りはしない。

人前ですれば恥を掻かされた思いもするだろうが、ここにいるのは感情表現に関しては木偶同然の肉人形。故に、優れた猟犬の頭たる資質を持つ龍郭院は、二人きりならば、毛並みを整えられることに喜色を表す。

俺からタオルを強奪しようとする素振りを見せない時点で止める理由はなくなっていた。

「タカぼん様、あの、その、は、はい」

ぽーっとした顔をする龍郭院の汚れを、俺は熱心に拭ってやるのだった。

壱百玖／

「さて、二層の危険についても教えておこう」

残機４だと流石に調子に乗れないので、龍郭院への致死への状況の訪れを、先ほどより少しだけ注意してやりつつ、先へと進んでいく。

床や壁を執拗に確認し、そしてかすかに漂う空気の臭いを嗅ぎ、俺はとりあえず、固定された危険地帯を目指すことにした。

「危険地帯ですの？」

「ああ、気になるか？」

「ええ、それは流石に、コード入力端末もあるのでしょう？」

ああ、と頷くと、やはり、といったように龍郭院が顔を暗くする。会話をしているので、距離は近かった。

手を伸ばして、髪を撫でてやると、龍郭院が抗議するように形だけの怒りを見せる。

「な、馴れ馴れしく触らないでくださいまし！」

「悪い悪い。だが、な。安心しろ。俺がいる限り、コードを悪用されることはない」

そもそもマスターキーを持っている俺たちがエレベーターコードで悩まされることがないのだがな。

龍郭院も気づいているだろう事実を指摘したりはしない。それとは別に、この娘は、コードを悪用されるような隙を見せることを嫌っているようだった。

確かに、コードを使われたら、俺たちが脅迫されるのと同じ状況となる。彼女はそのような行為が行える端末そのものを危険視しているのだった。

「コードを設定せずに破壊することはできませんの？」

「怖いか？」

「いえ、恐怖ではなく、可能性として、使われる状況そのものの発生を危険視してますの。私は」
「確かに、宣戦布告と同意義だからな。それは」
人間同士の争いの余地を残す端末だった。確かに、得られる情報は全て吸い出してあるし、恐らく、端末を構成する部品は売り飛ばせば金にもなる。個人的には破壊しても問題がないのだが、
「却下だ。壊すことは許さない」
「何故ですの？　私たちが使用するとでも」
「使いはしないよ。俺たちが争いを呼んでも仕方がないだろう？」
そう、俺に使用する気はない。そんなことをすれば、人間同士で争う羽目になる。そんな状況は望まない。
望むのは、人間対人外の戦いだけだ。
「それなら安心ですけれど、その、理由を伺っても？」
さて、ここで嘘をついて言いくるめることは簡単だろう。龍郭院からの信頼は、その程度の誤情報では揺らがないと確信できている。言葉巧みに翻弄してやってもいい。龍郭院なら信じてくれるだろう。
だが、ここで敢えて嘘をつく理由も、翻弄する理由もなかった。
俺が言えばいいのは、ただ一言だ。
「俺を信じておけ。端末は残す理由がある。今は言えないがな」
そうして、隣に立っていた龍郭院は、一度目を閉じると、深く熟考し、俺なりに考えがあるのだろうと推測すると仕方なしに頷いた。

「わかりましたわ。タカぼん様を信じます」

騙す必要も説得する必要もない。俺は、その程度には信頼を勝ち取っている。

壱百壱拾／

「一層のは蟲倉だったが、こっちは鳥だな。でかいだろう？」

タカぼん様に連れられてきたのは、二階層の奥の奥にある、巨大な藁束によって作られた、巨大な鳥の巣だった。

その巨大な広間には、あちこちに藁束で編まれた鳥の巣のようなものがあり、その中にはいつかテレビで見たダチョウの卵よりも巨大な卵が入っている。

通路を通ってくる途中でも鼻を利かせて、何かの臭いをかいでいたタカぼん様が眉をしかめた。

「まずいな。やはりここは臭いがきつい。龍郭院、てっとり早くこの説明をするから質問は後にしろ」

「え、ええ、わかりましたわ」

いつになく、というより、初めてタカぼん様の焦った顔を見た私も動揺しながら言葉を返す。

素直な私の反応に、タカぼん様の目が綻ぶ。視線で良い娘だ、と語っていた。

私は、喜色は顔に表さず、言葉だけを聞き漏らさないように集中する。

「ここは二層のボス部屋でな。一層と同じく、ＩＤと鍵を守ってい

る巨大な鳥のモンスターがいた。名称は≪雌雄の区別のない巨大鳥≫。口からスタンブレス、麻痺の吐息だな。これを吐きかけてくる厄介な敵だったが、道具と兵器で沈黙させた。

さて、それとは別に、やはりボス部屋には罠が仕掛けてある仕様になっている」

そういうタカぼん様が手で指し示すのは、やはり並んだ卵だ。

「恐らく、この層で鹵獲できる放電銃か、下の層の炎の杖などの、ボスに有効な攻撃を仕掛けると周囲の卵が孵化する仕掛けになっているはずだ。ついでに属性攻撃を行えば、ＩＤも失われる、と思われる」

「思われる、ですの？」

「確認するような危険な真似はできなかった。まぁ、確実だろう。一層がそうだった。二層がそうでないなんて保証はない」

当然ですわね、と頷いておく。タカぼん様は周囲の卵を無視し、奥にあったレバーと端末を見せる。

「こっちのレバーが一階層のゴブリン、コボルトの発生を操作できる冷凍睡眠装置のレバーだな。危険だから触るなよ。たぶん、これを動かしたら、強力なモンスターが出る”かも”しれない。

こっちが端末だな。先の話の通り、破壊は禁止する」

「……、かもしれない？」

「ああ、ＩＤの入っていた端末にそういう危険性を並べるメールが入っていた、というのが真実でな。

というか、さっきの動かしたら云々はもう遅くてなぁ。

実は、本当に危険かどうかわからないんで試しにレバーを下ろした結果、そのモンスターを目覚めさせちまった。

まぁ、なんだ。その、スマン」

全く謝意を感じない言葉でタカぼん様が謝った後、意味を理解した脳髄が悲鳴のような怒りのような言葉を発しそうになり、済んでのところで口をタカぼん様に抑えられる。

私の頭を片腕でロックし、口を余った手で塞ぎ、しきりに周囲の臭いを嗅いだタカぼん様は、

「やはりここは臭いがきつい。説明も終わったし出るぞ。ああ、ゴブリンやらコボルトの発生をオフにしない理由はな。単純にゴブリンが途絶えると、≪カラミティ・ブルータス≫が本格的に干上がるからオンにしてるだけだ。あいつら、たまたま運良く勝てたゴブリン相手に装備を略奪しないとやっていけない程度には終わってるんだぜ？　とはいえ、最近は勝率も良いみたいだがな」

なんてことを言っていた。

タカぼん様が恐れるモンスター。コボルトやオークを軽々一蹴し、三層のモンスターであるフェアリーを捕獲するようなタカぼん様が、先ほどから、いえ、二層に入ってからずっと警戒している相手。

初めて、そう、塔に入ってから、緊張や恐怖はしても、絶対に感じていなかったモンスターに対する不安を、私はここで初めて感じていた。

壱百壱拾壱～壱百壱拾伍

壱百壱拾壱／

立ちふさがるオークを二号の大剣が斬り飛ばす。宙を跳ねるように駆けてきたコボルトの額を三号の放った弾丸が撃ち貫く。
血飛沫と共に地面に転がった死体の上を、鬼気迫った表情で駆けてくるモンスターたちに向けて、タカぼん様は踊るように弾丸を放っていく。
極北銃という名前の拳銃は、安っぽいおもちゃのような音を立てて、オーロラ色の弾丸を空中にばらまく。
銃口から発射方向を予測しているのだろう、狙われたコボルトの剣士は軽快なステップを奏で、射線から身を翻すものの、

「残念。こっちにゃ、【必中のモノクル】ってのがある」

タカぼん様がそう呟いた瞬間に、オーロラ色の弾丸の群れが、弾丸を避けるために、体勢を変えていたコボルトの全身を貫いていた。

「龍郭院。来てるぞ」

わざと通したのだろう、私の方に向かってくる、一体のオーク。
刺々しいガントレッドを腕に嵌めた豚顔の亜人は、大口を開けて迫ってくる。

「グルルゥウァアアアッ！！」
「見え見えですわよッ！！」

身体能力が倍以上もある相手とはいえ、こちらはリーチの長い、

槍を持っている。更に、踵に強く意識を持つ、

（ニトロ、点火ッ！！）

槍を構えたまま、身体が空気を切り裂くようにして加速する。ニトロエンジン搭載草履という馬鹿げた装備の能力により、瞬時にオークの背後へと移動した私は、滅魔の能力を秘めた【九王の槍】をオークの腹へと突き刺していた。

「ブォオオオッ！！」

強力な光輝属性が、モンスターの身体を内側から焼いていく。

しかし生命力が強いのだろう。腹を槍で貫かれ、光輝の属性で焼かれているにもかかわらず、豚頭のモンスターは槍に手を掛け、引き抜こうと力を入れる。その顔は苦痛によって歪み、昨日まで生き物を意識的に殺したことのなかった私の心を苛もうとする。

しかし、だ。

（リーダーになろうとするものが、率先して敵を殺せず何を為せばいいんですの！！）

私の心にある、強い責任感と義務の精神が、感傷を瞬く間に打ち破った。

「ニトロッ！　点火ッ！！」

私の思考と声を読み取った草履が、壁に向かって加速する。豚顔のモンスター、オークを貫いたままの槍が、腕に強力な負荷を掛けてくるものの、腕力パラメーターを強化してある私の腕は屈することなく、槍を支え、九王の槍を壁に突き刺した！

「光輝に焼かれて死になさい」

壁に突き刺さった槍が、衝撃でオークの身体に深く突き立つ。オークは暴れるものの、光輝に焼かれ生命力を喪失していった。

壱百壱拾弐／

「龍郭院、上出来だ。装備のおかげとはいえ、ほぼ素のステータスでオークを倒せるとはな」

タカぼん様が差し出してきたタオルで汗と返り血を拭う。壁に突き立った槍を二号が引き抜き、絶命したオークを素早く解体していった。

「ありがとうございます。ですが、一対一での状況を用意してくださったタカぼん様のおかげですわ」

タカぼん様にお礼を言い、三号が差し出してきた槍を受け取る。タカぼん様はレーダーを取り出し、周囲を警戒している。

「さて、龍郭院。この先の通路を行ったところから注意な。ああ、今回は臭いを嗅がせたかっただけだから先には進まないが」

「先ほどからこの辺りに漂う臭いに関係する事柄ですの？」

臭いの元にかなり近いのだろうか、鼻を利かせなくても、強い金属のような臭いが辺りには満ちている。

「ぐだぐだ言うより雰囲気を感じた方が早いだろう。何が起こるか

わからないから、本当のところは近づくのも嫌なんだが。
二階層はな、この臭いに注意して探索を進めることになる」

先ほどの部屋での会話を思い出す。タカぼん様が興味本位で目覚めさせたというモンスター。

「個体名を【落葉の始祖鳥】という。俺も直接視認したことはないが、二層を自由に歩き回る強力な個体だ。二層に入ったことがあるのは俺たちぐらいだから、人間に敵対的かはわからないが、進行ルートには接触しないのが一番だろう」
「強さのほどは？」
「わからん。が、恐らく俺たちでは勝てないだろう。瞬殺されてもおかしくないかもしれん」

何が楽しいのかくつくつと嗤うタカぼん様は、肉人形を指差し、

「現状は肉人形でも無理だな。生存の札が大量にあっても」
「……、何故ですの？」
「今のままなら、生存の札が何枚あっても足りないだろうし、恐らく、」
「恐らく？」

うん、と気軽に彼は言うのだ。

「確保しているフェアリーごと殺される可能性が一番高い。だから、装備するだけ無意味だ」
「……？」

言葉の意味が分からずに首を傾げる私に彼は言うのだ。

「炎の杖を見たことがないお前には、放電銃が一番概念としては近いか。
あれは、俺たち全体に、攻撃して来ていただろう？」

エレベーターへ入ったときにいきなり現れた紫電の網を思い出す。あとは、ここへ来てからの戦闘で、オークやコボルトが装備していた放電銃とやらは肉人形やタカぼん様を含めた私たち全体へと襲いかかってきた。

タカぼん様は三号に守られ、傷ひとつないが、私などは接敵する距離が近すぎた場合、放電銃に必殺と言っていいほどに死に至らしめられていた。

それらは全て、フェアリーが肩代わりしたが。

「恐らく、落葉の始祖鳥はブレス攻撃を使ってくるだろう。ここのフロアボスも同じ鳥類でな。そいつもブレス攻撃。ブレス、つまり吐息だな。

攻撃能力を伴う麻痺の吐息をしてきた。だから、捕らえたフェアリーは、範囲攻撃で即座に殺される可能性が高い。故に、生存の札は使えない」

三層のモンスターであるフェアリーは放電銃では死なないが、タカぼん様が言う落葉の始祖鳥は、そのモンスターよりももっと強いのだから、当然だろう。

ならば、もっと体力の高いモンスターを捕らえれば、と進言しようとして、止める。フェアリーだから籠に入るのだ。これがオークやコボルトのような大きさならば、自由を奪い、移動させるだけでも一苦労だろう。

「さて、臭いと感覚は記憶したな？　この臭いが微かにでもしたら、即座に逃げろ。檞など置いていっても構わん。

命の方が大事だからな」

そう言って、タカぼん様は一枚の写真を見せてくれた。

それは、巨大な黄金色のダチョウのようなモンスターが、モンスターの死肉を貪る姿だった。

壱百壱拾参／

「さて、一階層と二階層で遭遇してはならないモンスターや場所の説明はおわったが、質問はあるか？」

「いえ、ありませんわ」

強い金属臭のする通路から、階層間を繋ぐエレベーター前まで移動し、タカぼん様は、櫂を背に私を振り返った。

櫂の背には、大量の肉や内臓が中型の冷蔵庫に詰められ、載っていた。流石にオークやコボルトの全身全てというわけではない。高価な部位だけを切り分けているらしい。他にも、オークやコボルトから奪った武器や、途中で立ち寄った武器庫や調剤室などで手に入れた兵器、機械、書類の類が整然と積まれていた。中には薬のレシピや料理本のようなものまでが見え、どうやって処分するのかわからないぐらいだ。

「少し、詰め込みすぎたか。一端、塔の入り口まで戻ろう。貸倉庫を借りてるんだ。案内しよう」

「ええ、わかりましたわ。≪支配の杖≫名義ですの？」

当然だろう、と頷くタカぼん様。これだけの成果を個人で上げられるのに、全く懐に収める様子を見せない姿に尊敬の念が湧く。

支給された制服やアイテムを思い出す。組織運営に必要な膨大な

量の資産を実質、一人で稼いでいるのだ。
美咲はどうなのだろうかと思う。タカぼん様のために働けているのだろうか。いえ、新人教育を任されているのだ。無能ではないと思われているに違いない。
少しだけ、嫉妬に唇を噛んだ。

「内藤の新人教育が終了し次第、龍郭院にはそいつらを率いて、一階層の探索を命じるぞ。二階層は自分の判断で行け。
できれば一階層での戦闘を経験させたかったが、そうだな、次は内藤と二人で行ってこい。あいつならお前を殺さずに帰還させることもできるだろう。≪法の剣≫も探索をしてるだろうから、トラブルを起こさずにな」
「え、ええ。はい」
「どうした？」

嫉妬を、見破られただろうか。少し不安に思い、見上げるが、タカぼん様は気づいていないようだった。
安心して、共にエレベーターに入る。
背後を守っていた肉人形と橇が付いてくる。
そうして、筒のような形のエレベーターは一階層へと動き出す。

「帰還の際に、襲ってきたりはしませんの？」
「いや、襲ってはこないだろう。この時間なら、」

なら、と言葉を続けようとしたタカぼん様の前でエレベーターの扉が開き、

「どゥも。タカぼんさァん」

白背広を着た、針金のような男がそこに立っていた。

壱百壱拾肆／

「雨宮か」
「えェ。まァ、陣地の死守を申しつけられましてねェ」

針金のような体躯の男の周囲には、頭を抉られたゴブリンやコボルトの死骸が転がっている。エレベーターのあるロビーに繋がる通路には黒服が各自、立っていた。
背後の龍郭院が、驚いたように彼らを見ていた。俺たちは、朝早くに来たため遭遇しなかったが、予定なら昼にはここに来ていたはずである。
間延びした声で雨宮が訪ねてきた。

「お帰りですかァ？」
「いや、倉庫に戦利品を置いたら三層に向かうつもりだ。そっちは何人で来てるんだ？」

えー、まァ、と口を濁すように雨宮は答えようとしない。鹿島辺りに釘を刺されてるんだろう。

「なんにせよ、うっかり死ぬなよ？」
「えェ、それはもう」
「ああ、俺の後ろの金髪娘とは今後会うことになるだろう。龍郭院だ」
「雨宮です。西洋の方ですかァ？」
「龍郭院と申しますわ。正真正銘、日本人ですの」

馬鹿にするように、鼻を鳴らした雨宮が龍郭院から離れ、こちら

へ向く。最低限の挨拶は交わした、という顔だった。

「なんだ、また来る」

「えェ。夕方までは維持しておりますので、どぅぞ、タカぼんさんも気軽に通って下さァい」

肉人形を背後に連れ、塔の入り口から出る一瞬、龍郭院がぼそりと呟いた。

「苦手ですわ。雨宮さんのあの視線」

まぁ、西洋人と世紀単位で戦争をしているんだ。金髪を憎みもするんじゃないか？

と正直に述べるのは控えておいた。

部下にどうしようもないことをどうしようもないように語るのは趣味じゃない。

壱百壱拾伍／

施設外にある倉庫に荷物を置き、空にした櫓や補充したアイテム、フェアリーと共に再び塔へと侵入する。

エレベーターの傍に立ったタカぼん様は、ごそごそと櫓に積んである袋を漁り、

「三層には、一度内藤と入ったんだがな」

何やら、黒いマスクを投げ渡される。

「ガスマスクだ。装備しておけ。機械帝国の技術で造られてるから

な。視界をそれほど圧迫しないぞ」

言われ、とりあえず渡されたそれを手に持っておくことにする。

「本来なら防毒服が必要なんだが、まぁ、環境毒なら、渡した髪留めの能力で無効化できるだろう。たぶん」

（た、たぶんって言ったッ！　この人たぶんって言いましたわッ！）

抗議の視線で見ると苦笑される。それと、髪留めは、白蛇の髪留めの事だろう。状態異常攻撃無効、という能力があるらしいのだが。

タカぼん様は、

「お前、放電銃喰らったら一撃で死んでたからな。本来なら、放電銃には身体を麻痺させる副次効果があったんだが。いや、話が逸れたな。三層の説明だ」

ガスマスクを手に、タカぼん様の話を聞く。遠くに白背広を着た雨宮さんの姿が見えた。こちらに近寄るつもりはないらしい。

「三層の説明からしておこう。まず、パッシブ。スキルだのを恒常的に発動している装備関連だな。これの持つ状態異常耐性で防げるのは、周辺の毒ガスや毒の鱗粉までだ。直接、毒を放射する銃などで撃たれると装備の持つ状態異常耐性を毒が上回る。カタログスペックは無効化だが、たぶん無効化できない毒だのなんだので攻撃してるんだろう。たぶん」

気軽に言っているタカぼん様だが、それは、機械帝国の武器カタログが信用できる性能のアイテムを配布しているわけではないと言っているようなものだった。

「まぁ、絶対無敵の兵器だのなんだのはな、存在するわけないから当たり前なんだが。まぁカタログスペックは信用しない方がいいだろう。
必中とか言いつつ、モノクルのスキルたまに外れるしな」
「ぐだぐだじゃないですか」
「で、対策として≪法の剣≫で造らせたんだが」

そう言ってタカぼん様が見せてきたのはガスマスクだった。

「ここにアンプルが入ってるだろ。１０回分の解毒剤が入ってる」
「……、えっと」
「毒を喰らったら自動で毒を解析して、精製した解毒剤を体内に注入するように設定してある」

まぁ、お前、ＨＰ少ないから、毒喰らったら一分持たないだろうし、毒銃で撃たれたらそもそも死ぬだろうけど、と言うと私の手からガスマスクをもぎ取り、被せてきたのだった。

壱百壱拾陸～壱百壱拾捌

壱百壱拾陸／

軍司令部や、一階層にあったような近未来的な壁と、自然物であるかのような岩肌と洞窟で構成された二階層と違い、三階層は全くの未知の空間だった。

ガスマスク越しで視界は悪いが、遠目にも紫色の毒霧や、視認できるほどに濃く何かの花粉が舞っているのを見ると、準備の良い、タカぼん様には感謝するより他にない。

「森林？　いえ、ジャングル、みたいですわね」

「森の所々にフェアリーが暮らしてるからな。気を抜くなよ」

ガスマスク越しだが、しっかりと聞こえるタカぼん様の忠告に頷く。彼はレーダーを手に周囲を見回していた。

「三階層まで行くとな、レーダーの感知能力もだいぶ下がってくる。だから感覚が強くて、奇襲に強い人間を最低一名は連れてきた方がいいんだが」

そう言ってタカぼん様は首を振る。

「えっと、先ほど龍村さんたちから購入した情報ですわよね。塔内では感覚で敵の位置が探れるとか」

「なんとなくの領域らしいがな。うちじゃ内藤ぐらいか。いや、まぁ、俺と内藤しか≪支配の杖≫で塔に来たことはないんだが。

ほら、肉人形はこの通りだし。一応、待機中なら警戒させておけば奇襲に対する備え程度はできるが、移動中はほぼ動く的だからな」

二号や三号を見る。敵が目の前にいれば、一騎当千の戦士となる肉人形たちも、人間が持つような超感覚は持っていないようだった。

「ま、いずれお前や新人連中から見つけるよ。≪カラミティ・ブルータス≫の様子を見れば、それほど希少な才能というわけではないみたいだし。最悪、猫だが……。あいつには他に仕事させてるからな。塔の探索まではさせたくない」

タカぼん様の言葉に頷く。私に備わっているかはわからないが、そういうものがあると覚えておいて損はないだろう。

槍を手に、周囲を警戒しながら会話を続ける。タカぼん様は地図を取り出し、回っていく順路を確認しているのだろう。

のぞき込めば、未だ地図は全てが埋まっているわけでもないらしい。

（そういえば、一度来たきりと言っていましたわね）

ふと、気がついたことを聞いてみることにする。

「その、第六感みたいなものでしょうか？」

「俺の寝込みを襲った猫の奴が言っていたが、こちらに来てからそういった直感みたいなものが強化されているらしい。なぜだかはわからんがな」

「寝込み……。えっと、」

ああ？　と聞き返されるので真っ赤になってしまう。女の方が寝込みを襲うというのは、その、破廉恥な用途ですわよね。それに、その、美咲が言うには、今日は普段より起床が遅いとの話でしたし。

「何を動揺しているのか知らんが……。ああ、龍郭院。これを見ろ」
「え、あ、はい？」
タカぼん様が歩いて行く方向についていく。
「これだ、これ。見てみろ」
指を差された場所。エレベーターから数歩ほど歩いた壁に、プレートらしきものが埋め込まれていた。
モンスターの文字で何かが書かれている。私には生憎読むことができないが、
「『そうして王者たちは悪魔が術か、天使が祝福か、魂だけで国へと帰還し、災いと共に凱歌を奏でた』、三階層についての記述だ。ついでに上の方に、ああ、『王者の凱旋』と書いてある。ここの階層名だろう」
「あ、タカぼん様は読めますのね」
「まぁな。各階の記述を覚えておけ、損はないぞ」
どういった意味で言っているのかわからないが、メモをしておくことにした。帰ったら、モンスターの言語の辞書があるか聞いてみよう。
しかし、とガスマスクで顔が覆われているタカぼん様の顔を見上げる。
「どうした？」
「いえ、まだここに来てから8日目ですのよね？　タカぼん様は」
「そうだが、何か聞きたいことでもあるのか？」
「いえ、もうここの言葉を覚えたんですのね」

ああ、とどうでも良さそうに彼は言った。

「普通に、単語さえ覚えれば文字を読むことはできるだろ。ただし、モンスターの言葉を話すことはできないがな」

「えっと？　ああ、つまり」

「ああ、声帯の構造が奴らと俺たちじゃ違う。奴らの叫び声にだって、ただの威嚇じゃなくて意味がある。翻訳機売ってるから、そのうちくれてやるよ。たぶん、勉強になるだろ。さて、」

雑談は終わりだ、とタカぼん様が言い。

私たちは三階層へと侵入を開始するのだった。

壱百壱拾漆／

「ゥキェエエイ！！」

二号が、樹林の間から飛び出してきたフェアリーを即座に捕まえる。槍を片手に、龍郭院が驚いたように巫女服の上から心臓を抑えていた。

ガスマスク越しなので驚いた顔が見られないのが少し惜しい。そのうちバングル型にできないか頼みたいが、三階層では普通に毒粉が空中に漂っているので、やはりマスク型が一番良いだろう。内藤と前回来たときは、毒粉が舞っていない地帯をわざわざ探して探索することになったために、ろくに情報や道具の回収ができなかったからな。

何も考えてなかったのだろう。一匹だけ出てきたフェアリーの背に二号がナイフを入れ、単分子カッターで頭蓋骨を開き、動けないように針を要所に刺していくのを見ながら端末を広げる。

任務名　塔内部機密文書回収？
依頼者　機械帝国諜報部部長
詳細　塔三階層にある貴重文書【神経毒概論】【生体毒全書】【機械生物に対する実験文書】の回収をお願いします。
報酬　５００，０００クレジット
ハイエリクサー×３
特記事項【連理貴久にお願いします】

任務名　部屋に置物が欲しいのだ。
依頼者　機械軍団第一軍団長
詳細　うむ、塔内部の敵軍の討伐を頼む。
あと、前衛のカリギュルラ。あれの頭を今、集めていてな。
報酬　部屋に飾って眺めたいのだ。立派な奴をひとつ頼む。
２００，０００クレジット
生命体の結晶×２
豪腕の熱血×２
特記事項【連理貴久に依頼する】

任務名　貴重素材の入手？
依頼者　機械軍団第二軍団長
詳細　フェアリーの脳髄にできる……輝石の回収をお願い。
報酬　３００，０００クレジット
肉人形用のパーツ三点（カタログから選んで……）
特記事項【連理貴久……】

（三階層で急ぎはこれぐらいか。後は探索と、いつもの数量討伐、地図作成して提出、機密情報や文書の類はすぐに終わるしな。

≪法の剣≫にアイテムを根こそぎやられるまでには終わらせないと）

周囲を見る。三叉路が広がっていた。樹林の間に見える、壁らしきものを遠目に見、方向を決める。経験から、あちらに施設があると思われる。

「龍郭院、こっちだ」

「あ、はい。それにしても、どうしてフェアリーだけは捕まえてるんですの？　わざわざ籠まで持ってきて」

首を傾げる龍郭院に簡単なことだと教えてやる。

「≪法の剣≫が研究で使う、動物実験用の個体だ。コボルトやゴブリンでもいいんだが、やはり軽くて組成が人間に近い、フェアリーが最適だからな」

「……、えっと」

「酷い男だと思うか？」

木々の隙間に視線を感じ、手を突っ込む。覗いていたのは、こちらを興味深そうに見ていたフェアリーだった。少女の身体に、蝶の羽を持つ奇怪なモンスター。だが、人類にとっては驚異でもある。

優しく握ってやったためか、ほにゃりとこちらを見て、フェアリーが微笑む。

ただ周囲の仲間らしき個体がこちらに向けて、キーキーと怒鳴り、腕を上げて、何かしらをしようとするが、その前に銃を構えていた三号に因って、片端から胴体を消し飛ばされていく。

慌てて空中に飛んだ個体は、二号が投げた投げナイフによって頭を吹き飛ばされていた。

フェアリーは、それ単体ではそれほど強いモンスターではない。

「否定は、できませんわ。それに、そもそも何故動物実験など？」
「薬の開発に、装備の威力実験。武器に備わっている属性の検証と、用途は様々だ」

仲間が殺されたのを見て、今更ながらに手の中で抵抗を始めるフェアリーの背にナイフを入れ、頭蓋骨を切り開き、脳に針を刺していく。

これも動物実験の結果わかったことだ。フェアリーの無力化方法。最初の捕獲には、二階層のボスから手に入れた麻痺毒を使用するしかなかった。

三号の差し出してきた籠に入れる。

「何より、生きたモンスターは≪法の剣≫に高く売れる。≪支配の杖≫は常に金欠だしな」
「結局、お金ですのね」

苦笑と失望のない交ぜになった龍郭院の言葉に、おい、と険のある言葉を向けてしまう。

「金は大事だぞ。武器に防具に、薬に食事。今借りている宿も金使ってるんだ。
お前に部下を率いさせるつもりだがな。既に予算はある程度決めているし、お前は利益を出さなきゃならんのだぞ？」

うッ、と口をつぐむ彼女に、今度はこちらが苦笑を浮かべる番だった。

遙か昔に、金の問題で散々苦渋を飲まされたことが、苦い思い出になっていたらしい。

感情に任せた悪い説教をしたと、反省するのだった。

壱百壱拾捌／

樹林を囲まれた道を通る。最低限の通路はあるらしく、土が剥き出しになった、煉瓦敷のような道だ。

「……、龍郭院」

「あ、はい？　なんですの？」

タカぼん様の声が固い。何があるのかと樹林の隙間から、曲がりくねった通路の先を見れば、……旗？

旗を持ち、巨大なピエロのようなマスクを被った人型のモンスターが遠くに見えた。

（敵……？　モンスターですの）

相手がこちらに気づいているのかはわからない。

ただし、周囲には、屈強な肉体を持つモンスターが三体。それに何やら毒々しい色をした、嘴の巨大な鳥のようなモンスターが一体。

それと、それらの周辺を飛ぶ、軍服を着たフェアリー。

先ほどから戯れのようにタカぼん様が捕まえていたフェアリーとは違い、鋭い視線で辺りを見回している。

「基本的に、こちらの進入はばれている。エレベーターホールで待ち伏せがなかったのは、偶然だと考えておけ」

「どうしますの？」

「攻めるよ。それが侵略者の義務だ」

マスクの向こう側で舌なめずりでもしているのだろう。軽快に銃

をホルスターから取り出したタカぼん様は楽しそうに告げた。

「さぁ二号、攻めてこい。旗の個体を先に殺せ。
三号は俺を死守だ。
龍郭院、お前を今回は守ってやれん。せめて二回以上は死ぬな。
残機４だからな」

そうして、私は三階層、初めての戦闘へと突入するのだった。

壱百壱拾玖～壱百弐拾肆

壱百壱拾玖／

前衛のカリギュルラ。毒噴射銃を肩に背負った、蛮族風のモンスターだ。下半身に布だけを巻いた、蛮族風のコスチュームを着た男のようなモンスターだが、その戦闘力は下の階層にいるオークやコボルトの比ではない。

並の武器では傷も付かない鋼鉄以上の硬度を誇る外皮に、凶悪な膂力を誇る筋肉。そして、あらゆる兵器を熟練した兵士のように扱う技能に、その屈強な身体と同じように、鍛え抜かれた精神力。

捻れた角を持った、巌のような顔。その目蓋の奥の瞳には優しくも、理知的な光が宿っている。

「二号、頭は傷つけるなよ。提出用に取っておくからな」

敵から見つからず、こちらは見つけている状態だが、いつまでもそれが続くわけではない。

樹林に両脇を囲まれた道の先を、六体のモンスターが塞ぐようにして警戒している。

大剣をすらりと抜いた二号は、カリギュルラを警戒しながらも、奥の旗を持ったモンスターへと狙いをつけていた。

「あの、何故あのモンスターなんですの？」

傍らの龍郭院の問いかけに、顔が苦く歪む。それが自身への感情だと思った龍郭院が、遠慮するように身を引く。

「ああ、違う違う。なんというか、あのモンスターは厄介な能力を

持っていてな」

なんと、龍郭院に説明しようか悩む。あの現象は、本当になんて言っていいのかわからないが、

「モンスターの資料ではな。名前を右辺のバルヘロナというらしい」

サーカスのピエロのような形の頭に、奇怪な文様の巨大な旗を両手で持った人型のモンスター。

目を疑うような、モノクロの奇怪な衣装に身を包んだ、その身体は枯れ木のように細い。

「敵能力の詳細については後で説明してやる。運が悪ければ能力の一端を目で見ることができるはずだ」

あとは、毒色をした怪鳥、左辺のコンプトゥスに、軍服を来たフェアリーだ。

三階層に出現するモンスターたちは、個々の能力値は二層の敵を二倍した程度のものでしかないが、パーティー内での個体の組み合わせによっては破滅的な能力を持つに至ることもある。

「ああ、そうだ。忘れていた」

背後を静かについてきていた櫓から、鉄製の車輪付きバリケードを取り出し、組み立てる。ご丁寧に固定用の爪もついているから、戦闘の時に爪を立てれば固定壁として使えるようになる。

人間一人が身を隠すのに最適なそれはかなり大きいが、意図を察した三号が組み立てに参加し、即座に完成へと至る。

「お前はその裏に隠れてろ、龍郭院。銃眼があるから、外見たい時

はそこから覗けばいい」

バリケードを見た龍郭院が目を丸くする。こんなものがあるとは知らなかったという顔だ。

ちなみに、こういう物品は消耗品の類なので割と安価で購入できたりする。爪のついた車輪部分は高価だが。それでも壁として使える人間一人を、戦闘要員として育てるより十分安い。

「あの、二層の時に何故、これを出さなかったんですの？」

「お前は隠れていたかったのか？」

恥じ入るように首を振る龍郭院に説明してやる。

「三層を探索できるメンバーなら、二層の敵は敵にならない。そんな状態なら、お前がいくらヘマしようと本当に殺されるような事態は起こらない。

でも、だ。しかし、だ。

三層からはお前がカリギュルラ辺りにとっつかまって、死ぬまで殺される事態もないとは言えない。だから前には出せない」

生存の札は他者に死を移動させるだけなので、絶命に至る威力を秘めた攻撃を連続で身体に接触させられるとアウトだ。カリギュルラの牽制ジャブで死亡すると仮定した場合、接触してきたカリギュルラに連続して四回も打撃を貰えば龍郭院の残機は尽きることになる。

あとは撫でれば即死する。カリギュルラの俊敏と腕力ステータスは５０を突破しているので、値から考えて、あり得る事態だった。

ちなみにアスリートと呼ばれる人種でも俊敏の値は最高、１０～１５程度である。いろいろと限界突破している内藤は既に超人だ。

「即死、ですの？」
「まぁ、なんだ。わかるよ。俺たちが戦っているのを見れば嫌でも理解できる。
二層まではお遊びだ。遊技だよ。確実にクリアできるゲームでしかないんだ。
三層からが地獄だぞ。何せ、相手がこちらを殺せるように効率的に隊伍を組んでくるんだからな」

一層でも似たような事を言っていたな、と思いつつ、そんな、心にもないことを俺は言うのだった。

壱百弐拾／

戦闘の始まりは、敵側からすれば唐突だった。敵から見えないギリギリの位置から疾走を開始したタカぼん様と三号に続き、バリケードを肩で押しながら私が走り出す。
しかし、流石に接近戦の二号は早い。先に決めていた位置に私が到達する前に、敵陣にたどり着いている。
そのまま、鬼のような顔をした前衛のカリギュルラの脇を抜けようとするものの。

「そこまで甘くないか」

タカぼん様が当然のように言った。
小道から疾走してくる私たちが見えていたのだろう。二体のカリギュルラが腕を広げ、二号を抑えにかかる。

「三号ッ！」

言う端からタカぼん様は極北銃を放っていた。空中にばらまかれたオーロラ色の弾丸は旗を持ったバルヘロナに向かって殺到するものの、残っていた最後のカリギュルラが反応し、弾丸の群れを全身で受け止める。

そして敵の前衛を足止めした隙を狙って、三号がバルヘロナへ向けて、マスケット銃にも似た破壊の銃と呼ばれる銃を撃ち放っていた。

「ギュェエエエエエエエエエ！！！」

奇怪で奇妙で神経に障る怪鳥の絶叫。バルヘロナには当たっていない？！

「ちぃッ、やはり守るかッ！！　二号、バルヘロナはもういいッ！　カリギュルラを抑えろ。頭は壊すなよ。三号、フェアリーを仕留めろ！！」

タカぼん様が指示をする間に、背後から敵が迫ってきていないのを確認し、移動してきたバリケードの爪を立てる。

敵からの攻撃が届かない絶好の位置だ。そうしてから銃眼を見れば、

「バルヘロナをコンプトゥスが庇ったんですのね」

三号の放った破滅的な色をした闇色の弾丸を、嘴の巨大な毒色の怪鳥、左辺のコンプトゥスが身体で受け止めていたのだ。

大きく翼が抉れ、それでも飛行する怪鳥は口から奇怪な音程の絶叫を放っている。

「龍郭院、耳を塞いでろ！　怪鳥の絶叫は身体に影響するぞ。それ

と、体力も削ってくる。油断しなくても死ぬぞッ！！」

敵へと身体を晒しながら、おもちゃのような銃を必死に放つタカぼん様がご自身のガスマスクをはぎ取り、ポーションを口の端に咥えている。

毒よりもダメージの方を危険視している？　私も慌ててガスマスクを外し、腰のポーチからポーションを取りだそうとする寸前に、

「ギュェエエ！　ギョェエエエエエエエ！！」

コンプトゥスの悪意ある絶叫が、ぐわん、と身体の芯から私の身体を犯していた。

何かが焼け焦げる音。

慌てて、腰のポーチを見れば、焼け付きと共に生存の札が一枚消費されていた。

「ッ……？！」

慌てて銃眼をのぞき込む。三号の腰を注視。

（フェアリーが、一体。息絶えてますわ……）

少なくとも、タカぼん様が生存している以上は、モンスターであるフェアリーが今の絶叫で即死したなんてことはあり得ない。そして、檻の中の他の個体が生きていて、生存の札が焼け焦げている以上は、今の絶叫で私が即死するようなダメージを受けたことは確実だった。

青くなる。心が寒くなる。あと四回もあの絶叫を聞けば私は死ぬ。殺される。

槍を強く握り、私は座り込もうとする精神を夢中で叱咤する。

（タカぼん様を、仲間を信じますわ……）

祈りながら、視線を戦場へと向ける。

壱百弐拾壱／

横目で三号の腰の檻の中でフェアリーが死んだことを確認する。

コンプトゥスを生かしておけば龍郭院が死ぬが、バルヘロナの方が脅威度としては高い。

最悪、こちらが全滅させられる可能性もある。

「ギギュレェエエエ！　ギョェエエエエエ！！」

コンプトゥスの二回目の絶叫と同時にポーションを飲み干し、体力を回復する。俺もこれを二度喰らうと死亡するから必死にもなる。

次のパラメーターアップはＨＰの最大値を増やすアイテムを使用するべきだと考えながら、視線を三号の腰に一瞬だけやれば、龍郭院用のフェアリーが檻の中で死んでいた。

状況には気づいているだろう、だが龍郭院が俺を急かす声はない。俺を信じているのだ。

「ラー！　Ｌａー！　らー！」

軍服姿のフェアリーが何事か呪文らしきものを唱え、俺へと指を差した。

瞬時に、その指の先には奇妙に艶めかしい動きをする稲妻が発生する。【アクティブサンダー】、雷の【魔法】だ。対象に纏わり付いて、持続してダメージを与え続ける奇妙な雷である。

「止めろッ！」

声を掛ける前に三号が動いていた。破壊の銃を構え、カリギュルラの防御の隙を縫ってフェアリーの脳天を吹き飛ばす。可愛らしい少女の顔が一撃で消し飛んだ。しかし、雷撃は死亡の前に放たれている。

紫電の速度で迫るそれは、極北銃で打ち落とすには速すぎる。迎撃を断念し、極北銃をバルヘロナに向かって連射するものの、すかさず前に出てきたカリギュルラによって全て防がれる。

その肉体の一部を吹き飛ばされながらも、カリギュルラは後方のこちらへと毒噴射銃を構え、駆けだしてくる。二号は二体のカリギュルラと対峙しているのでこちらへ攻撃を裂く余裕はない。

同時に、俺へと着弾しようとしていたピクシーの雷が前へ出た三号によって防がれる。着弾したアクティブサンダーはその紫電の身体を三号の身体に巻き付かせ、内包する雷の力を解放し続ける。

焼かれる三号。その後方の動きを見て取った俺は即座に懐のポーションを口にくわえる。二瓶だ。

「三号、防げ！！」

轟音を立てて、カリギュルラの振りかぶった拳が、銃を構えた三号に着弾する。ばきりと破壊の銃に衝撃が走り、銃身が折れ曲がる。同時に背後で待機していたコンプトゥスが再度の絶叫を上げ、三号の腰のフェアリーが死亡する。龍郭院の残機残り1。俺はポーションの封を切り、絶叫によって激痛の走る体内を即座に癒す。直後に、

「来るぞ！　バルヘロナだ！！」

ピエロ頭のモンスターがばさばさと狂ったように巨大な旗を振り

回す。旗の動きに連動して、即座にコンプトゥスの叫びを上げる口元が異常な動き。絶叫を放った後の絶叫。今までの攻撃速度からは有り得ない絶叫の二重奏。

「ギュルェエエエエエエイイイイ！！！」

体内を掻き雀るような怪鳥の叫びだ。口に咥えたポーションを飲み干し、物理的に捻れそうになる腹を癒しに走る。そして、三号の腰のフェアリーが、背後でバリケード越し観戦していた龍郭院の死によって、死亡する。

残機は0だ。龍郭院の残機が消失したのだ。もう一度絶叫が来たら龍郭院は、今度こそ本当に死亡する。

そして、更にバルヘロナが旗をふる。狂気に急かされるように振り続ける。

三号と対峙していたカリギュルラの動きがおかしな速度を見せる。がくがくとコマ送りのような動きを見せ、急速に加速し、追加の打撃を、生体の構造ではあり得ない速度で三号に見舞う。

拳の間に差し込み、盾にせざるを得なかった破壊の銃が完全に破砕された。しかし、三号は腰から、おもちゃのような拳銃の形をした極北銃を引き抜き、カリギュルラの心臓があると思われる部分に突きつける。

「三号ッ、受け取れ！！」

俺は三号の破壊の銃が破壊される前に、背負っていた俺の破壊の銃を、三号に投げていた。

後ろ手で俺の破壊の銃を受け取った三号は、突きつけていた極北銃を連射。接敵していたカリギュルラの心臓部分を吹き飛ばすと、同時に、次の絶叫のために膨らみ始めたコンプトゥスの喉を、受け取った破壊の銃を器用に扱い吹き飛ばす。

更に、破壊の銃を投げた直後に、俺が放った極北銃の弾丸が、必中のモノクルの補助を受け、その翼を削ぎ落とす。

喉が完全に破砕され、床に墜落した奴にもう攻撃手段はない。とどめは後だ。

そして、邪魔な敵を始末した俺と、未だに紫電を身体に纏わり付かせ、ダメージを喰らい続けている三号がバルヘロナに狙いを定めるものの、後衛が攻撃を喰らい始めたことに気づいたのだろう。

二号の相手をしていたカリギュルラの一体がこちらへと毒噴射銃を構え、背後でバルヘロナが再度、旗を振り始める。

「毒噴射銃！　三号、破壊しろ！」

叫ぶが、三号の銃撃をカリギュルラは銃を握っていない腕で受け止める。腕が根本から吹き飛ぶが、カリギュルラは平静だ。

俺は足下のガスマスクを蹴り上げ、キャッチすると顔面に装着する。同時に極北銃を構え、カリギュルラに向けて放つ。

しかし優秀な兵士たるカリギュルラは全身に向かって飛んでくるオーロラ色の弾丸を見ても顔色すら変えない。構えた毒噴射銃のトリガーを引き絞り、内容物を全力で噴射してくる。再度銃撃を放った三号だが、間に合わない。

ゴゥ、と俺たちの全身へ毒の煙が襲来する。ジャケットの持っている【状態保護】のスキルが一瞬だけ毒を緩和するものの、毒噴射銃の浸食速度の方が強力だ。

装備で保護されていない皮膚から毒が侵入し、全身を冒していく。被っていたマスクが毒を解析し、解毒剤を体内に注入したが、解毒剤が効くまでの間に体内は焼かれていく。これだけでは足りない。

俺は左手に握っていた極北銃を足下に落とし、ガスマスクでは口が塞がれ使えないため、回復剤を詰め込んだ注射器を腰のポーチから取り出し、即座に腕に刺す。一発程度ならマスクの解毒で生を繋げられるが、回復しなければ次を耐えられない。既にバルヘロナが動

いている。
旗を振り回し、狂乱の宴を一人で行っているモンスターにより、毒噴射銃を放ったカリギュルラの動きが奇妙な停止と加速を見せた。
そして、毒噴射銃が機構的にあり得ない、再度の毒の噴射を繰り返す。
腕に注射器をぶっ刺したまま毒の激痛に歯を食いしばる。マスクが解毒剤を注入し、俺は注射器に入っている回復剤を最後まで注入する。更に追加の注射をポーチから取り出すと再度腕に突き刺した。

「三号ッ！！」

叫びと共に、破壊の銃を構えた三号がカリギュルラの毒噴射銃へと銃弾を放つ。漆黒の弾丸が毒噴射銃を貫き、沈黙させる。
そして、残骸を投げ捨てた片腕のカリギュルラが、拳を振り上げこちらへと走り出すものの、

「よくやった。二号」

相手をしていたカリギュルラを殲滅。背後のバルヘロナと地面に墜落したコンプトゥスを始末した二号が背後より、巨大な鉄の板のような大剣を、片腕のカリギュルラの腹に突き刺していた。

壱百弐拾弐／

「あー、やばいなお前」

眼前には、泣きそうな顔の龍郭院がいた。背後ではカリギュルラやコンプトゥスの解体を行っている二号がいる。三号は龍郭院が使っていたバリケードを櫓に戻している。

そうして、龍郭院の前には籠に入れられ、死亡したフェアリーたち。

「あの、私、死ぬのですか？」

接敵一度で残機を０まで減らされたからだろう。龍郭院が泣きそうな顔で俺を見上げてくる。一応のため、ポーションを飲ませた龍郭院は傍の樹林を落ち着かない顔で見ている。

「生存の札に頼ってたか？」

「た、頼りますわッ。というか一戦で四枚ッ？！　どういうことですの？」

「どうもこうも、俺も予想外だった。というか、前回は戦える内藤がいたからな。そりゃ想定外だ。まぁ、コンプトゥスにあれだけ減らされるとは思わなかったし」

「美咲は、戦えてるんですの？」

「戦えてるよ。戦力としては十分だ」

それに、俺一人で探索するよりも重要物の確保が進む。俺が理屈で探索位置を決めるのと、同等の成果を勘で弾き出す。

「それで、どうされますの？　まだ生存の札があるとか？」

「ないよ。というか一戦で四枚消費するんじゃ元とれないしな。カリギュルラどもの売却値はそれほど高くない。ただ売るだけなら、合計で３００００クレジットも稼げれば良い方か。まぁ物品換算するときもあるからもう少し上方計算できるが、生存の札一枚の方がまだ高いしな」

破壊の銃を壊されたのも痛かった。あれはあれで高いのだ。修理すればいけるかいけないか。≪法の剣≫が武器修理用の施設を持っ

ていたから貸して貰うか。

「それで、その、どうされますの？」

「俺頼りか？　お前は自分で何か案をひねり出せないのか？」

感情を込めずに見下ろすと、龍郭院は恥じ入るように俯いた。そうして、何事かを無理に考えだそうとするものの、犬の耳があったならへたり込むかのように、困った顔で俺を見上げてくる。

「冗談だ。ま、正直無策でここまで俺も来ないよ。三号」

視線を向ければ、頑丈なアタッシュケースを三号が抱えてくる。

「そうだな。三つでいい。俺は上昇値が低いしな」

ケースの中に厳重に納められ、絹の布に包まれたそれを三号が丁寧に摘み、俺へと差し出してくる。

「龍郭院。あーんだ」

「あ、あーん？」

何が何かわからず、小さく開いた龍郭院の口にそれを手ずから押し込める。微かに抵抗があったものの、片手で顎を押さえ、強引に喉まで押し込んだ。

「む、むぐぅッ？！」

「安心しろ。唾液で溶ける。ああ、今日のパラメーターアップアイテムの摂取を一つ減らしておけよ」

つぷん、と龍郭院の艶やかな唇から指を引き抜く、唾液で濡れた

指をふらふらさせると、ハンカチを取り出した三号が自然と拭ってくれた。

真っ赤にして、あわあわと何か動揺した少女を放り、手元にある残った二つの【生命体の結晶】を見る。透明な水晶のようなアイテムだ。これを初見で口にするのはかなり勇気がいるが、体力、つまり先ほどのコンプトゥスの絶叫や、毒のダメージを受けた時に減少する【何か】を増大させるステータスアップアイテムだから毒ではない。

通常、ステータスではＨＰと表記されるそれを、このアイテムは増大させてくれる。

他のパラメーターアップアイテムと同じく、腹に溜まるので一日に三つまでの摂取が限界である。

（そういえば、≪法の剣≫で、パラメーターアップアイテムを強引に四つフェアリーに食べさせたら内部から破裂したな……。俺も四つ目をどうしても摂取しようとは思わないし）

どういった原理で身体を強化するのかわからないが、まだそういうものだと思っていなければいけないだろう。

いずれこれも解明しなければならないが。

生命力の結晶を二つ飲み込む。これで、俺は今日はあと一つだ。

【【経験値非効率】が発動しています。取得したＨＰ上昇経験を低下させます。ＨＰが１０上昇しました】

どういう原理でか、俺や内藤のスキルの発生を感知して自動でコメントを表示する端末表示から無視し、龍郭院のＨＰだけを表示させる。

ＮＡＭＥ：龍郭院　桐葉

ＨＰ　５８／５８

と変化していた。俺も１０上昇しているが、どうにも不公平感が拭えない。というか、経験値非効率ってのはなんなんだ一体。

「タカぼん様ッ、一言ぐらい言ってくださいませッ！！」

顔を真っ赤にして、こちらに詰めより、文句を言ってくる龍郭院の額に手を当てる。

生存の札８枚消費というのは予想外だったが、これで龍郭院は、死への恐怖をきちんと覚えたことになる。

ＨＰの増大によって、直接カリギュルラに殴られでもしない限り、死なないだろうしな。

そうして思考を終え、目を向ければ二号が解体を終了していた。

俺はむぅー、と顔を真っ赤にし、頬を膨らませる龍郭院の頬をぺしり、と叩き、言う。

「休憩は終了だ。対策も取れたしな。行くぞ」

慌てた龍郭院が、櫂に立てかけた槍を取りに行くのを待ち、通れるようになった通路の先へと進む。

壱百弐拾参／

「うッ……。もしかしてここは……ボス部屋じゃ」

先の通路を進んだ先で見つけた大部屋。それに入った直後に龍郭院が口元を抑える。

「いや、少し違うみたいだな」

壁際にずらりと並んだ、前衛のカリギュルラ。百や二百以上に、大量のカプセルに入ったそれらの目は閉じている。

背後のチューブからは何かの液体が注がれ、カリギュルラ達の肉体は、カプセルの分厚いガラス越しにもわかるほどに力強く鼓動を繰り返している。

何度か見た、ゴブリンやコボルトの冷凍睡眠とは違うようだった。

全体を統制するコンピューターらしきものを発見したので、操作を試みてみるものの。

「ロックが掛かってるな」

「それは、壊しますの？」

「いや、壊してこれが出てくるとやばいだろう。普通に考えて」

専門の技術者がいればいいんだが、ここまで連れてこれても作業をさせるのは難しいだろう。それに、労力に見合うリターンが帰ってくるかはわからない。

やはり正規の手段で操作できるようにした方が早いのだが、

「やはりＩＤか？」

「ここの操作ですの？」

「ああ、開くにしろ、永久に停止させるにしろ、全て殺害を可能にするにせよ、な」

辺りを見回す。この部屋は本当にカリギュルラしか配置されていない。天井までをびっしりと埋めるカリギュルラの入ったカプセル。持ち帰るにも大きすぎるし、何より、意味があるとは思えない。

眠っている一体一体を倒して行くにも数が多すぎるし、破壊した際に警報か何かが鳴り、全部が出てくれば数で圧殺されるだろう。

「回収できるアイテムはなさそうだな。というか、書類もないのかこの部屋」

端末傍にマニュアルすらない。そもそもここで操作されることを前提にしていないのか、この施設は。

「それで、どうしますの？　タカぼん様」

「放置だ、放置。考える材料すらないぞ。これじゃ」

それでも、印象として、蟲蔵や孵卵所と同じものだと認識してしまったのはどうしてだろうか。

蟲も鳥も、未だ成体になっていないというのに……。あれらは卵だったのに、カリギュルラは成長した個体だ。

それに、ここはボス部屋ではない。ここにボスはいない。

思考をしながら、俺はカプセル室を出るのだった。

壱百弐拾肆／

「……、あの、えっと……」

困惑した龍郭院の顔すら気にならない。開いた口が塞がらないとはこのことだ。

「はは、は……。こんな馬鹿な話があるか」

乾いた笑いが浮かんできた。どうでもよくなる以前に、どうすればいいのかわからない笑いだった。

眼前には、軍服姿のフェアリーの入ったカプセル。カリギュルラ

のカプセルと違い、大きさがそもそも小さいためかその数は１００を越える。

飛行種族のためか、天井にまでをびっしりと埋め尽くしたカプセルは、俺と龍郭院を困惑させる以上に、恐怖に陥れようと威圧感を伴って静かに鎮座していた。

「えっと、その、四つ目ですわよね。ここで」

「……、四つでいいのか本当に……」

三層のフロア全体をぐるりと回ってきたところだった。壁際に繋がる通路を、時間を掛け、ぐるりと周り最後の角らしき部分で発見したのが、このフェアリーのカプセルの入った大部屋だ。

「ここに来るまでに、【前衛のカリギュルラ】【左辺のコンプトゥス】【右辺のバルヘロナ】たちが眠るカプセル部屋を見つけましたわよね。

そして、ここに来て【フェアリー】の入ったカプセル部屋……」

「わざわざ強調しなくていい。わかってる」

額を抑える。何のためだ。何のためにわざわざこんな部屋を用意している？

いや、意図を考える前に対策だ。触らなければ良いと言うようなものじゃない。違う。操作できる部屋を見つけなければならない。

ＩＤでなんとかできるんじゃないのか？　もしかしたら鍵があるとかか？　このフロアのボスがどうにかするとかか？

幾通りもの可能性を考えていくものの、こんな、遭遇するのが初の状況ではどうにもならない。そもそも判断材料が存在しない。

「一応、確認だ。鍵穴はあったか？」

「ありませんわ。……、その、どうにもなりませんの？」

「入り口を破壊して塞いだとしても、ここは連中の本拠地だ。外からでも中からでも、力尽くでこじ開けられるだろう。衝撃でカプセルが開閉しないとも限らない。そもそも俺たちが何もしなくても開くかもしれない。どうすればいいのかわからない」
「ど、どうすればいいのかわからないって、タカぼん様がですの？」
「俺をなんだと思ってる」

額を抑える。やはりボス部屋に行くしかないか。対話可能ならいいが、期待しない方がいいかもしれない。今回も動物か、そもそも、会話のできない種族だろうと想定する。
ＩＤか、鍵か。メモリに入ったメールか。情報を集めて、何のための施設か推測しなければいけない。そもそも一階層や二階層の卵についても俺はなんのためにあるのかわからないのだから。

「移動しよう。ボス部屋に行く」
「……、へ？　ボス、ですの？」
「殺して状況を見る。対話が可能な生物ならいいんだが……」
「あの、普通の敵にすら殺される可能性があるのですけれど。私」

龍郭院が諦めたように言うが、龍郭院がいようがいまいが、ボスなら殺す必要があるだろう。ステータスを上げて安全マージンをとる？　馬鹿な。
経験値非効率なんてスキルがある俺にとって、安全マージンを取るだのなんてのは妄想でしかない。
それよりも今やらなければ、いつやるのか。

「守ってやる。お前、今日はどれだけパラメーター上げた？」
「あ、いえ、先ほどのだけですけれど」
「なら、生命体の結晶を二つ寄越す。使え」

察した三号がパラメーターアップアイテムを取りに走る。俺は、上げなくていいか。俺がＨＰを上げたところで一撃貰ったら即死するようなレベルで終わる。先ほどのも、一回の絶叫で１０のＨＰを奪う、コンプトゥスの絶叫対策でしかないのだから。

「本当にボスに行くのですか……」

手元の結晶を見る龍郭院がごくりと唾を鳴らし、そうして結晶を飲み干した。

「守ってやるさ。守ってやるよ。お前が俺を信じてくれてるならな」

そうして、俺たちは探索を続けていく。

壱百弐拾伍～壱百弐拾漆

壱百弐拾伍／

「あの、本当に行くんですの？」
「行くよ。行かなくてどうする。何もせずに解決することなんてひとつもないぞ？」

まるで確信があるかのように、樹林を抜け、蔦や極彩色の花々に分け入り、微かに見える人工物の通路を抜け、三層フロアの奥の奥にある、人間が三人程度は一度に入れるサイズの金属質の扉の前に、距離を数メートル置き、タカぼん様は立っている。
二号が金属板のような形の大剣、堕王の大剣を鞘から引き抜くと、抜き身のまま、床に突き刺す。
強力な炎を内包した刃が、床を抉り、直立する。

「一応、ボス戦の用意はしてあったんだよな」

そうして、空の鞘を二号が櫃の中に丁寧に仕舞い。そして、巨大で、相当な重量のありそうな包みを櫃の奥から取り出してくる。
タカぼんさんが布を取り払うと、色とりどりの豪奢な鞘に包まれた大剣が入っていた。

「カリギュルラに効果のある属性とやらが、木属性とやらで、なんだ。その強化属性が聖樹属性の【樹林の王剣】だったか。二本あるぞ。用意しておけ、ああ、堕王の大剣ももう一本あるな。これも持って行け、あとは重力属性だったか？　重力の強化属性であるところの、地母属性の【星大剣ガイア】がある。これも二本だな。
あとは雷の上位の塵雷属性か。【創雷ゼウス】を二本と」

タカぼん様が選んだ大剣をすっと、鞘から出しては地面に突き刺していく二号。大剣の刃の表面には、傍目にもわかるほどに神秘的な力が込められており、突き刺さった床の周囲を溢れる余波で抉り、砕き、それでも刺されたままに直立している。

（というか、属性に、オンオフ機能はないんですのね）

そして、疑問がひとつ。これは聞いておくべきことだろう。

「えっと、ボスとの戦いに属性武器だとダメなのでは？　ＩＤがどうとかって仰ってましたわよね？」

「そうだが、準備というものはある。三層のボスが、部屋の中に、ただ一体だけ、無防備にいてくれる保証はない。だから注意は怠るべきじゃない。ああ、無属性武器はきちんと用意してあるぞ」

タカぼん様がそう仰った直後に、二号が余った大剣を櫓に仕舞い、また包みを取り出す。

二号の周囲には、選ばれた大剣がずらずらと床に刺さり、並んでいた。

何故、剣を床に刺すのか理由を聞いてみたく思ったが、タカぼん様は説明を続けてしまう。……、まぁ、きっと何か意味があるのでしょう。この人のことですし。

「無属性の武器だが、三種類用意した。【破綻槌（ハタンツイ）プロフェクト】【攻城大剣バルカ】【螺旋槍≪天≫】。どれも強力な、ただの武器だ」

タカぼん様が、二号に抱えられた包みを開き、三種類の艶のある凶器たちを私に見せる。

大剣、大槌、大槍、それらは既に武器ではなく、兵器の域にまで

達しているような威圧感を在るだけで放っている。剣に槍に槌は、近くに齎(モタラ)すであろう破壊を、その身を輝かせることで主張していた。

タカぼん様が手を振ると、二号がガチャガチャと包みを丁寧にヒモで縛り、属性武器とは違い、背に負った。金属鎧と包みの中身がぶつかり、音を立てる。

「さて、二号。以前に説明した通りだ。扉が開いたらやる。それでいいな」

無言の二号を前に、タカぼん様は「やはり発声器官は購入するべきか？　命令に従うのは解っていても、こういう時に反応がないと虚(ムナ)しいしな」などと言う。その身体に気負いはない。

既に覚悟を決めているのだ。

その姿に私は、小さく息を飲む。

私が、日本を背負う父の後を継ぎ、日本人全てを背負うべくして生きる人物になるために必要な姿勢がそこにあると思えたのだ。

行うべきを必ず行う人物。傍に立つ者に不安を抱かせない姿。人を教え導くに足る知性。そして、それが悪と知っていて尚、断行する意志。

まさしく王者の風格を、私はそこに感じるのだ。

「三号と俺は無属性銃だな。【始原の長銃】がいくつかあったな。俺が一本、三号が残りは持って行け。龍郭院」

「あ、は、はい」

「大丈夫か？　緊張してると思うが、頑張れ。俺が必ずなんとかしてやる」

頬をそっと撫でられ、タカぼん様を見上げる。視線から感じられるのは、慈愛も親愛も愛情も同情も憐憫も籠もっていない無機質な目。そして、具合の悪い道具や家畜を宥める手つきだった。

余りの無造作さに、感動以上の衝撃を受けながら私はそっとタカぼん様の手に手を添えた。

「ええ、大丈夫ですわ。タカぼん様を信頼してますもの」

「そうか。それはよかった」

初めての経験に、ようやく私は、先ほどから感じていた感情に心の中で整理をつける。

ああ、私は――

溢れる感情をそのままに表す。

「はい、タカぼん様」

遙かなる上位者から物のように扱われるのが、何故かとても嬉しくて、私はそっと微笑んだ。

壱百弐拾陸／

鉛色の金属質の扉は、俺たちの侵入を阻むということもなく、綺麗なものだった。蔦や樹林が入室を邪魔するような事もない。

まるで入ってこいと言わんばかりだ。その前には障害物は何もない。

ああ、ここがボスの部屋だと言うことは、入り口からのトラップの難易度、敵の配置、そして、あのカプセル室に向かうよりも比較的通り易かった道だということで、中を見ずとも、正確な地図情報がなくても、きっちり推測できている。

ここは十中八九、ボスの部屋だろう。そして、九割も当たっているのなら、警戒するに値していた。

心中の覚悟と、攻略準備が終了したことを確認し、俺は背後に声

を掛けた。

「龍郭院は部屋の外でバリケードに籠もってろ。背後から敵が来たら部屋の中に入って、俺のとこまで走ってこい。死ぬなよ」

「はい、わかりましたわ」

バリケードを四方に、二重に配置した龍郭院がこくりと素直に頷いた。生存の札で埋まっていたアクセサリー部分には防御系のスキルを発揮するアクセサリーを装着させている。ＨＰも上げているし、少なくとも一撃や二撃で死ぬことはないだろう。

「じゃ、行ってくるわ」

「お気をつけて」

そうして、周囲に大剣を刺し、扉から直線上の距離に立っている二号を背後に、俺は三号と共に扉の前に立った。

一層や二層と同じだ。扉の前に立つだけで中に籠もっているものの狂気を顕（アラワ）すような圧迫と威圧が感じられる。

背後の龍郭院からの視線を感じ、安心させるように手を振ると、最後の一歩を踏み込んだ。

ロックを外していたのだろう。空気の抜けたような音が、響く。

「三号。頼んだ」

軽快に、滑るように、侵入者の侵入を喜ぶように、扉が開く。扉の中には、毒霧と、何かの鱗粉のような銀色の粉が舞っている。

そして、

「はぁい。チャオ」

こちらへ向けて手を振る紫色のドレスを着た、毒々しい雰囲気の紫髪の美女と、

「カリギュルラ四体！　コンプトゥス三体！　フェアリー六体！　バルヘロナ二体だ！！　二号！！」

バッテリー動力の分際で、火縄銃のような形の始原の長銃を意識するより先に持ち上げ、部屋の中に打ち込んでいく。値段相応に、連射機能まで付属している。

「は、まるっきり外見を裏切る銃だな。おいッ！」

室内のモンスターたちが銃弾を避けるように瞬時に動いていくのを視認。その中でカリギュルラは銃弾から仲間を守るように前進する。美女はにやにやと笑いながらカリギュルラの壁の中へと籠もる。

奇襲に成功したとでも思ってるのかッ！

そして、フェアリーがこちらへ向けて「Ｌａ－」と声を上げ、「三号ッ！」俺の呼応に反応して、三号が扉の前で銃を撃っていた俺を横から掻っ攫う。

「二号ッ！！」

轟、と風が渦巻き、俺の眼前を、豪速で射出された、二本の巨大剣が空気を切り裂きながら飛翔していく。

直後に、部屋の内部で何かを貫く音と轟音、「わッ。ちょ、出鱈目ッ？！」叫ぶ女の声が聞こえたが無視だ。

視線を二号に向ければ、金属甲冑に包まれた両腕に大剣を持った二号が、両手に第二射目を構えている。

肉人形の人知を越えた膂力が、創雷ゼウスを両腕に持ち、振りかぶり、射出。同時に一本目を投げた勢いを利用して、回転するよう

に、次なる一投を放つ。
三本、四本、と大剣の弾丸が嵐のように叩き込まれていく。内部でモンスターの肉を砕き、斬り飛ばし、壁か何かに着弾する音が響いていく。同時に、モンスターの絶叫も聞こえた。
「反撃ー！　反撃よアンタら！！　一方的にやられるんじゃないッ！！」
女の慌てたような声が聞こえたが、やはり無視。会話可能かどうかだと、知ったことか。
「三号ッ！！」
二号が最後の大剣を腕力任せに部屋の中に叩き込んだのを確認する前に叫ぶ。抱えていた俺を離し、両腕に長銃を構えた三号は指示する前に部屋の前に位置取っていた。
「容赦ないわね！　人類どもッ！！」
室内からの罵声には銃弾が返される。三号が連射機能を持った長銃で銃弾を撃ち込み続ける。内部で何が起こっているかはわからない。
しかし、二号は背負った包みを空中にぶちまけると大槍と大槌を空中で掴む。そして、槍と槌は背負い、地面に落ちる前に大剣を足で蹴り上げ、右腕で掴み、室内へと突っ込んでいく。
二号の背後からバッテリーを使い果たした始原の長銃を放り投げ、背負っていた無数の長銃から二丁を引き抜き、連射しながら突っ込んでいく三号。
その背後から俺も続いていき、そうして、それと対峙するのだ。

壱百弐拾漆／

「ああッ、もうッ、一気に減らされた減らされた殺された畜生！！」

ドレスの美女が毒々しい長剣を片手に地団田を踏み、こちらを怜悧な目で睨み付けてくる。大剣に貫かれ死亡したカリギュルラの前だからだろう。先ほどあった笑みなどは彼方だ。

目を回せば、樹林のような室内には、射出された大剣によって、頭部や腹部を吹き飛ばされたコンプトゥスやバルヘロナの死骸が転がっている。二号が優秀な証拠だ。

大剣に巻き込まれたのか、三号の射撃で死んだのか、フェアリーの数も減っていた。

「残りはカリギュルラ1、コンプトゥス1、バルヘロナ1、フェアリー3かッ！　戦果は上々だな！！」

無属性大剣を振り回す二号が、カリギュルラと激突する。同時に二丁の長銃を器用に扱う三号が、バルヘロナに集中射撃し、蜂の巣を仕上げた。

俺も長銃を構え、フェアリーを狙っていく。

「あー、あー、ちょっとちょっとやめなさいよ。やーめーなーさーいーよ」

美女の言葉など完全に無視して掃討戦に走って行く。コンプトゥスを仕留め、二号が相手にしていたカリギュルラの腹を吹き飛ばし、三号がフェアリーを打ち落としていく。

そうして、

「やめろってんだろうがッ！　このクソ人類がッ！！」

床や壁に大剣が突き立ち、銃弾で貫かれたモンスターの死骸の中。紫色の美女は、顔に悲哀と悲痛を浮かべて俺たちを睨み付けていた。

「せっかく、お茶とお菓子まで用意したのにさぁッ！　酷くないッ！　ついでに私のペットまで殺しやがってファック！！」

「二号、三号。手を出すな。交渉に入るぞ」

ドレスの女は、手に持っていた長剣をドレスのベルトに下げていた鞘に収めると、女を庇うように死んでいたカリギュルラ二体の腹に埋まっていた大剣、【樹林の王剣】を人外の膂力で軽々と引き抜いた。

俺は、状況を知りながら声を掛ける。二号と三号が万全ならば、一体の人外が何をしようと制圧できる。

威圧を込めて勧告をした。

「おいッ！　お前の護衛どもは殺した。拷問されて殺されたくなければ交渉のテーブルに着け。今から交渉をして、やる……？」

「許さない。殺してやるからそこに居直れ！！」

「あ？」

理知的でない、感情を顔に込めた女が大剣二本を振りかぶる。

投擲する気か？　二号のように、その手の投擲に長じた技能でも持っているのか？

三号が俺の前に自然と立ち、二号が大剣を構え、女の大剣を打ち落とせる姿勢に移る。

しかし、女は口元を歪めると、

「腕力上等。大剣投げてペット殺すなんてマジでびっくりしたわ。

厳選して育てたカリギュルラまで殺されるし、アンタ歓迎しようと用意してたお茶やお菓子までぶっ壊されたら、やっていいわよね」

「あ？　何を言って……」

ペットだかなんだか知らないが、モンスターを殺したのは、コンプトゥス三体にバルヘロナが揃っていれば、交渉の席で俺を軽々殺せるからである。それに、俺たちの武力を示す必要があったからだ。交渉相手の相手の気まぐれで殺されるなんてまっぴらだ。隙があるなら殲滅しておくべきである。

しかし、そんなことを馬鹿正直に説明する気などない俺は、適当な言葉を紡ごうとして、

「ねぇ、いいわよね？」

――ぞくり、と女が発する言葉から感じた悪寒に、背後を振り向き、

「龍郭院、避けろッ！！」

二本の大剣を構えた女は、

「【樹林の王剣】、武技スキル発動」

片手に持った大剣を斜めに振るい、

【【樹林の王剣】搭載スキル【栄光の聖樹（グローリー・オブ・ユグドラシル）】を発動します】

「もういっちょ」

更に、もう一本の樹林の王剣を一閃し、

【【樹林の王剣】搭載スキル【栄光の聖樹（グローリー・オブ・ユグドラシル）】を発動します】

瞬間、部屋を轟音と、熱風と、眩い光が満たし、俺の頬を衝撃波が掠めていく。

何が起こったのかわからない。しかし、大剣から、光線のような物が発生し、俺の目を焼きかけたことだけはわかる。

そして、とっさに顔面を庇った手を動かし、目を見開けば、

「な、あ……？！」

「どーよ？　びっくりした？　びっくりしたでしょ？」

自慢げに笑う女。その両手の、二本の大剣は、柄や刀身の各所が解放され、内部の機構をさらけ出し、煙が噴き上がっていた。

しかし、そんな、見たことのない武器の機能について俺は驚愕などしていない。それよりも、

「嘘、だろ……」

抉れている。ぽっかりと、女が大剣を振り下ろした動きに沿って、有り得ない距離まで床が大幅に抉れている。剣が振り下ろされた軌跡に沿って、直線上のあらゆるものを巻き込んでの破壊が発現していた。

振り向けば、樹林の王剣から発射された謎のスキルの射線に入っていたのだろう。二号の右腕が鎧と共に消失している。

「わざわざ当てなかったんだから。感謝しなさいよー。あははッ」

使い捨てるように、大剣二本を地面に放り投げて女は笑う。

女の言うとおりだ。床を交差するように抉った光は、俺を射線に

は入れず、大雑把に室内を破壊して、部屋の出口へと収束している。
女は続ける、
「レーザービームみたいだったでしょ。【栄光の聖樹（グローリー・オブ・ユグドラシル）】って言うんだけどね。あ、二本だから、【栄光の双聖樹（ユグドラシル・クロス）】かしら？　すごくない？　かっけーでしょ！」
背後を確認し、感情が凍る。
「ッ……ぁ、な……」
確かめるようにして、身体ごと振り返る。
「龍、郭院ッ……」
「ね？　ほらほら、おとなしく降参してペットにでも……。んー？　その前に、生意気な人類をちょっと懲らしめてやろうかしら？　って、ちょっと聞いてる？　ねぇ、聞いてる？」
問い続ける女を無視して、俺は、愕然とした気持ちで背後へと、完全に振り返っていた。
「あ……ぐ、クソ……」
油断したことでなく、龍郭院を隣に置かなかったことを、後悔する。
龍郭院の隠れていたバリケードは、クロスした大剣からの光線の直撃を受け、跡形もなく消失していた。
ぐずぐずと、蒸発したバリケードの部品だけが、そこに誰かがいたことを、教えてくれた。

壱百弐拾捌～壱百参拾壱

壱百弐拾捌／

「随分と、やってくれたわねぇ。まぁ、どうでもいいのだけれど」

紫のドレスを着た人外の美貌を持つ女は、腰に手を当て、俺を見ている。

しかし俺は女から視線を外すと出口に向かって歩く。確認しなければならなかった。

「ちょっとぉ、逃げるの？　というか逃げられると思ってるの？」

「黙ってろ。二号、三号、俺を攻撃しようとしてくるなら遊んでやれ」

この部屋のあちらこちらに転がり突き刺さり散らばっている堕王の大剣や創雷ゼウスが、樹林の大剣と同様の機構を持っているなら、きっと二号たちでは防ぎきれないだろう。

しかし、俺は確認しなければならなかった。龍郭院の結末を。俺が指示したが故に、死んだであろう彼女の行く末を。

何が起こったか未だに把握できない、未だに熱を持つ、抉れた道を歩いて行く。

「……、生きてはいないか」

部下が死んだ。俺の部下が俺の失策で死んだ。悔やむことすら馬鹿馬鹿しい。

久しぶりの感情を素直に顔に表しつつ、俺は扉から外へと出る。ガスマスクを外し、しっかりとした視界で極地の地獄を見つめる。

そこには、樹林の大剣二本から放たれた巨大な熱線によって抉られた地面と、森と、そして後ろ半分を削られた橇が残っていた。
龍郭院がいた場所には、熱線の直撃を受けたために、溶け落ちたバリケードの欠片が転がっているだけだ。熱線の威力を示すように断面からは、溶けた金属が地面を犯すように垂れ落ちている。
俺の指示を受け、龍郭院が回避するには、樹林の王剣の攻撃範囲は広すぎた。彼女の脚力では回避は間に合わない。
俺の言葉を律儀に守り、バリケードに籠もっていたならば、助からないことは確実だ。
だから、彼女は死んだのだ。

「龍郭院」

頬を、冷たい水が伝っていく。無垢に、無防備に俺を慕ってくれた人間を殺してしまったことに涙が出る。
部下が死ぬことは初めてではない。俺が過去に底辺を這い回っていた頃には、情けないことに部下が死ぬことは、よくあった。
俺を慕う部下、俺を憎む部下、俺をなんとも思っていない部下、それでも、どんな部下でも、俺が責任を持っていた。俺がその死の原因だった。俺の命令で彼ら彼女らは死んだのだ。そして、その度に胸が張り裂けそうになった。
今も、俺は、恥知らずにも悲しんでいる。

「龍郭院桐葉」

呟いた。もう戻ってこないのだと、会うことはないのだと知りながら、龍郭院桐葉を回想する。
最初は才があるだけで、未だに開化させていない小娘だと思った。生意気だった。
それでも塔に連れて行き、次第に有能を見せ、何故か俺を慕い、

俺の言葉を聞き、自ら考える姿勢を見せるようになった。
逆説。俺が連れてこなければ死ななかった。そして、俺を慕わずに、俺の言葉に逆らっていれば、生き残る可能性はあったのだ。
しかし、どの選択も選ばす、龍郭院桐葉は俺を慕い、唯々俺の命令に従い死んだ。だから、俺は彼女の意志を尊重し、無かった可能性の事は考えないことにする。

「龍郭院桐葉……」

呟く。
涙を流す。振り払うこともせず、ただ流す。哀悼を示す。
龍郭院桐葉、生きていれば一億の人間ですら幸福に導ける可能性を持ったであろう金髪の少女を想い、ひとときだけ、涙を流し、

「は、はい。生きてます」

言葉に振り返った。

「あの？　タカぼん様？」

生きていた。熱線の範囲から外れた樹林から、がさがさと出てきた龍郭院桐葉は、片手に壊れたガスマスクを下げ、髪に葉や土をつけ、あちこちを擦り剥いていた。
そうして、俺を見ながらきょとんとし、

「あの、タカぼん様。泣いておられて」
「生きてたか。よかった」

俺は彼女を抱きしめた。

壱百弐拾玖／

「へ、あ？」

タカぼん様にきつく、強く抱きしめられる。ただただ無表情に涙を流していた彼は、私を真正面から抱きしめてくる。

「タカぼん様、ちょ、ちょっと」

「生きてたか。よくやった。俺の命令を無視したんだな。最良の判断だった」

「え、い、ちが」

心外な言葉に反論が出た。私は、タカぼん様の命令に背いていない。むしろ、タカぼん様が、戦闘中にも関わらず、私を気遣ってくれたからこそ生き残れたのだ。

守れないと判断したから言葉を与えてくれた。だから私は判断することができた。だから私は生き残った。

私の生存を本心から喜んでいるタカぼん様に真実を伝えたい。そう思い、言葉を吐こうとするものの、

「よくやった。本当によくやった」

「タカぼん様。その、痛いですわ」

「ああ、そうか。生きてるんだからな。ああ、よかった」

安堵の吐息が耳を擽（クスグ）った。

タカぼん様が、そこまで部下の生死に甘いことを意外に思う。この人はきっと部下を失っても、冷徹に、何も思わず、機械のようにやるべきことを果たす人なのだと思っていた。

それでも、その意外さをとても嬉しく感じながら、私は、私が生

存した理由を端的に示した。

「貴方が私に与えてくださった物を思い出してください。タカぼん様はきちんと私に生存の術を与えていてくれたのですわ」

そうして、私から一歩離れた彼に、私が履いていたものを見せる。

「高機動ニトロエンジン搭載草履……。そうか、だからあの一瞬で」

「タカぼん様が声を掛けてくださった直後に草履を連続起動し、私はバリケードから脱出しましたの」

そのせいで森まで吹っ飛んでしまったが、この惨状を見れば最善の判断だったろう。

あのとき、タカぼん様が声を掛けてくださったから私は生きている。タカぼん様が最高の装備を与えてくれたから私は生きている。

「何も、タカぼん様がご自身を責められることなどなかったのですわ。貴方の判断こそが、最善なのですから」

その言葉に、瞬時に喜色から難しい顔へと変わったタカぼん様が私を見た。そうして、少し悩んでから私の額に指を押しつけると、

「上の判断を疑え、疑問に思え」

ぱちん、とデコピンをしてくるのだった。

そうして快活に笑みを見せる。

「お前が生きていたことは嬉しいが、その幸運を生かさないでどうする。瞬時の判断が見事だった。生存に掛ける本能とお前の幸運が最高だった。

だが、その後はよくないな。
俺への信仰を深めようとするなら、俺への疑心を持つべきだろう」
尊敬しようとしている人が放つ言葉に、憤慨しながら反論の言葉を紡ごうとすれば、すかさず突き出された人差し指によって唇を押さえられる。
「ぅ……」
「今回は、お前を傍らに置かなかった俺のミスだ。俺の傍にいることが最善だった。お前は一つ間違えれば死ぬ位置にいた。
俺はそれを覚えている。お前もそれを忘れてはならない」
だから、と彼は言う。
「龍郭院。俺がお前を信じられるぐらいに成長してくれ。傍らに置いて、お前に全てを託しても構わないぐらいに、お前が成長してくれることが、俺の望むことだ」
「あ、はい」
素直な彼の言葉に、素直に返事をしてしまう。
そうして、タカぼん様は、優しく頭を撫でてくれた。髪から葉を取り、倒れた櫑からタオルを持ってきて土を拭い、そうして傷に薬を塗ってくれたのだ。
そんな彼の姿を見ながら、彼が信じられる私になろうと、私は私のために誓うのだ。
タカぼん様への尊敬を新たにしながら。
壱百参拾／

「いい話ね。感動的だわ。それで、私はいつまで待ってればいいのかしらねぇ」
「待たせたな。悪かった」
龍郭院を傍らに置き、室内へと戻る。紫の人外はカリギュルラの死体の上に座り、こちらを眺めている。
「さて、戦争再開する？　私はするわよ。とてもとても楽しそうだし。貴方の悲鳴はきっと嬉しいもの」
唇を手で押さえる。直接の武力で負けている現状、あらゆる手段を用いても、俺がこの女に勝てる確率は二割を切る。ＩＤの保護を加味すれば一割を切るか。
傍らの龍郭院が俺を心配そうに見つめていた。安心させるように頭を撫でてやると、安心したように後ろに下がる。
邪魔をする気はないということだ。
「いや、交渉に入ろう」
「……、よくそんな事が言えるわね。それで内容は何？　ＩＤ？　それとも四階層に通して欲しいの？　ああ、さっきの武器スキルについて知りたいとか」
「いや」
俺は首をゆるゆると振る。女は訝しげに俺を見て、問いかける。
「じゃあ何よ？」
「ああ、簡単だ。頼む、自殺してくれ」
空気が凍ったように、目の前の女が言葉を無くす。背後の龍郭院すら、小さく驚愕を口にしていた。肉人形たちは動かない。

唖然としていた女が、ぱくぱくと口を動かしながら、カリギュラの死体から身を乗り出す。

「こ、根拠ッ！　私がそれをしなければならない理由を説明しなさいよッ人類ッ！！」

「へぇ……」

「何よ？　言えないの？　言えないんだったらお前が死「じゃあ、考えてくれるのか」

あ、と女が口に手を当てた。俺は笑いながら前へと出る。

「さて、交渉開始と行こうか。龍郭院、前に出ろ」

「え、あ、わかりましたわ」

素直に俺の前に立った龍郭院の膝に膝をぶつけ、

「へ？　あ」

体勢を崩した少女を地面に押さえつけ、

「ちょ、な、何をなさって」

「さぁ、下から目線で悪いが、頼むぜ。自殺してくれよ。お姉ちゃん」

両の手の平と、膝で身体を支える龍郭院の背にどっかと座り、そうして、カリギュルラの背に座り、俺を見下ろす女と俺は対峙した。

壱百参拾壱／

「ほら、下がってるぞ下がってるぞ。お前は俺の立ち位置をこれ以上落とす気か？　さっき頼んだだろう。俺が信じるお前になってくれってよ」
「ちょ、ま、なんで私が椅子なんですのッ？！」

スナップを効かせて、龍郭院の張りのある、ふっくらとした尻を叩く。叩けば気合いが入るのか、下がっていた背が上がり、俺と女との視線が近づく。
失言に額を抑えた紫の女は俺を睨み付けながら、そうして口を開いた。

「それで、なんで私が死なないといけないわけ？」
「何でも何も、死ぬためにいるんだろう。この塔に」

断定口調の俺に、女が眉を顰め、問い返そうとする。それを龍郭院の、密やかな主張が遮った。
恐る恐るの声が、

「た、タカぼん様。大事なお話のところ、失礼いたしますわ。す、少しよろしいですの？」
「龍郭院。お前はとてもいい娘だからわかるだろう。今、俺はこのフロアのボスとすごい大事な話をしてるんだ。
後でゆっくりじっくりちゃんと聞いてやるから、今は大人しくしていような」
「あ、は、はいですわ」

頭を撫でると、頬を赤くしながら渋々と声を納め、人間椅子へと戻っていく龍郭院。それに気を良くしながら叩きがいのある良い尻にスナップを利かせた平手を与える。
パシン、と快音がした。

「ひ、ひぅッ」
「さぁ、気合い入れろよ龍郭院。正念場だぞ、割と。お前が頑張って姿勢維持してくれなきゃ交渉は難航するだろうな。うん」
「え、あ、は、はいッ！　が、頑張りますわッ！」
龍郭院に無駄な気合いを入れさせると、
「話、いいかしら？」
女が呆れた目で俺を見下ろしていた。顎でどうぞ、と促せば、
「真面目に話をしましょうよ。それで、何故私たちが死ぬ為に塔にいると思ったわけ？」
「何でも何も、入り口にコンプトゥス二十体ほどと、バルヘロナを置いておけば済む話だろう？　ここの侵略に来た人間を撃退するならその程度の戦力配分でいい。来た敵来た敵を絶叫で皆殺せば、攻略部隊なんぞ成立しない。ついでに護衛にカリギュルラも置けば完璧だな。
俺たちはここに入った瞬間に終わる」
「……、ま、それぐらいは当たり前よね。
塔を登るごとに強くなる敵。与えられていく強力な武器に、解禁していく諸要素。
思いつかない方が愚か。だけれど、どうしてそれが私が死ぬことに繋がる訳？　別に登るだけなら私を殺さなくてもできるでしょうに」
ああ、と俺は言う。
「ＩＤが手に入らないだろう？　それに、お前が死んでくれないと、

俺は機械帝国の人間の好感度を稼げない」

絶句した表情の女は、口元に手を当て、苦笑いした。

「私の臓器や肉が目当てってわけね。ああ、人類は正直ねぇ。貴方たちの種族は、みんなそうなわけ？」

「……そんなわけないですわ」

「あら？　可愛らしい貴女は椅子じゃなかったの？」

「違いますのッ！！　ひゃうッ」

口を挟んだ龍郭院の処罰の尻をスナップを利かせ強く叩く。恨めしげな視線が俺を見上げたが、無視をして女に問いかけた。

「さぁ、そろそろ自己紹介と行こうか。俺は≪支配の杖≫の連理貴久。タカぼんと呼んでくれ」

「りょーかいよ、人類。私はアーケルノの森を支配した【毒蛾の女王】ダリア・ヴェノムフィールド。ダリアでいいわ」

そう言って、紫の女は、ドレスから毒の粉をまき散らし、天井を指さした。

「ああ、あとね。上にいるのがこの階層の≪魂喰らい≫【銀蛾の群】ね。ほら、タカぼんも下の階層で、蛇や鳥を見たでしょう。あれの同類よ」

周囲を浮遊する銀の鱗粉の主たちは、強烈な悪意と憎悪の籠もった威圧感を振りまきながら、羽をゆらゆらと揺らし、天井にびっしりと張り付き、俺たちを見下ろしていた。

気づいて理解する圧倒的な殺意に、ちょろちょろと尻の下の龍郭院が尿を漏らし、直後にべしゃりと腰を抜かして潰れたが、構わず

に俺は尻に敷くのだった。

壱百参拾弐～壱百参拾陸

壱百参拾弐／

「さて、昔話だったか」

未だ少年の連理貴久が、自分よりも年上の少女、蜜美を前に寛いだ姿勢でソファーに凭(モタ)れている。

蜜美は貴久の対面のソファーに座り、緊張したように言葉を待っていた。

彼らの前のテーブルには黒々としたコーヒーが淹れられたカップがあり、貴久はカップを手に取ると、口をつけ、思い出すように話を始めた。

「始まりは、なんだったかな」

壱百参拾参／

連理貴久は、尾張と呼ばれる、古くから日本の政財界に根を張っていた血族の本家に産まれた子供だった。

しかし、その出生は恵まれた物ではなく、とある血だけは古い、中規模の企業の社長令嬢が、尾張の当主である尾張重三に賄賂の形で捧げられ、重三によって、嬲られ犯され孕まされ、たまたま産まれたのが貴久だった。

「俺に染みついた因縁の中で、思い出せる限り一番古い記憶は、目の前で首を吊る母親の姿だ」

ただじっと貴久の言葉を聞く蜜美を前に、無感動に貴久は事実だけを述べていく。

「犯された当時、未だ女学生だった母は、重三に犯された心の傷が癒えていなかった。心が病んだままだった。そうして狂したまま、首を吊った。

ちょうど俺の目の前で、俺を見下ろすようにして死んでいた。遺書へは重三と俺への恨み言だけを残していたよ」

苦笑を浮かべる貴久。コーヒーの黒い水面だけを見つめ、そうして、苦い記憶を思い出すように語る。

「それがどうしてか、父親であるところの奴の耳に入ってな。ああ、尾張重三のことだ。

ちなみに、血は貰っているが、本家だと俺は妾の子ですらない。家畜扱いだ。一応、家が古く、血だけは良いので末弟として認識はされているが、それだけだ。

それに末弟と言うが、俺にも、血縁上の妹や弟がきっとごろごろいるだろうしな。重三は今でも悪趣味な女遊びはやめていないらしいぞ」

これは蜜美には関係のないことか、と貴久は呟くと、記憶を頼りに言葉を続けていく。

「そうして、俺は母親が死んで、重三の元へと連れてこられた。

そこには、十二人の血縁上の姉や兄がいてな……。そいつらは、お前でも知ってるような有名企業やグループの会長や社長職についている。

全て、重三から譲り受けたものだ。こいつらを称して、尾張十二家という」

「貴久様も何か頂いたのですか？　重三様から」
「あれは、俺には何も、実体のある物は与えなかったよ。別に何も欲しくはなかったが。ああ、そうだよ。
与えないのなら、何も与えてくれなかったらよかったのにってな」
諦めたように天井を眺め、そうしてぽつぽつと彼は語っていく。
「重三の前に連れてこられた俺は、奴の靴を舐めさせられた。奴の飼ってる犬の糞をわざわざ俺の目の前で踏みつぶし、その上で舐めろと言った。でなければ母の家を潰し、経営している会社を潰すと脅された。だから奴の靴を舐めた。靴底まで綺麗にな。
そして、兄や姉の前で、髪をつかまれ、引きずり回され、忠誠を誓わされた。そうしなければ母の姉夫婦を屈辱の元に犯し殺すと言われたからだ」
貴久の口元が屈辱に歪む。光景を思い出しているのだろう。
「あんなにも呪った母親だったのにな。それでも、その家族が害されるなら従わなければならなかった」
「……、何故、そのようなことをなされたのですか？　その、重三様は」
「俺に屈辱を与えたかったんだろう。あれは、他者の尊厳を潰すことを快楽としているからな。
それで、奴に散々嬲られた後に、俺は与えられたんだ」
蜜美が首を傾げる。
「何を？」
「継承権。尾張を継ぐ継承権だ。番外の俺には、参戦しなければならない権利だけを。

十二家の兄や姉には、おまけで、豊富な資金力や暴力を背景に持つ、企業が与えられていた」

絶句する蜜美の前で、貴久は続ける。

「尾張重三の血を継ぐ子供は、尾張重三と、その血を継ぐ者を皆殺しにすれば、尾張家の当主の権利を得る」

暗く、どろりと濁った目を貴久はしていた。

「俺が、兄や姉と戦わなければならない問題だよ。そして、俺が数年先の未来も見えない状態に追い込まれてる原因だ」

連理貴久は、親殺しの、兄や姉を殺すレースに出場しなければならなかったのだ。

壱百参拾肆／

「……で、何が起こってるわけよ？　美咲」

「あ、小山田さん。いえ、私にもさっぱりで……」

≪支配の杖≫に不承不承従属して、翌日の朝だ。同じ世界出身で、私の熱烈な信奉者である諏訪のおっさんと一緒に、朝食の席である食堂に向かったのだが。

「ああ、内藤と小山田に諏訪か。どうした入り口で立ち止まって」

「お、おはよう御座います。美咲、小山田さん、諏訪さん」

「あ、お、おはようございます。えっと、龍郭院さん？　って、痛ぇッ。なにするんですか、お嬢」

「うっさいッ！　いいから席確保しろよ馬鹿」
「へ、へい」

素直に挨拶を返した諏訪が、私の信奉者だった連中が集まっている席を避けて、かつ連理貴久から離れた位置に席を確保する。
私の教育役の美咲は、親しげに挨拶をしてくる元信奉者どもに固まった顔で挨拶を返し、連理の傍へと寄っていった。
そうして、視線を足下付近に向け、困惑した声で言った。

「あの、なにしてるんです。会長」
「た、タカぼん様の椅子ですわ」

困ったように連理を見る美咲に、龍郭院が陶然とした顔で答える。
座っている、連理は平然とした顔だった。
ちなみにこいつは龍郭院の背に座っているために、他の連中よりも低いテーブルが前にある。
なお、鎧を着た肉人形、銃を背負った肉人形が朝食や書類を片手に佇み、連理の手の仕草で忙しなく動いていた。
また、当の連理は、肉人形に指示を出しつつ、手慰みのように、龍郭院の見事な金髪のロールを指でくるくるさせつつ、片手でパンを龍郭院の口元に運んでいる。
何故か嬉しそうに、不自然な体勢でもぐもぐと口にする龍郭院は咳き込みかけ、そうした仕草を龍郭院が見せる前に、連理は丁寧にコーヒーが入ったカップを口元に運んでいった。

「やけに手慣れている様子ねアイツ」
「お嬢、飯は何にしやす？　パンとご飯がありますけど」
「チョココロネと果汁１００％オレンジジュース」

龍郭院のくるくる髪を見ていたら食べたくなったのだ。

もちろん、口には出さなかったけれど。

壱百参拾伍／

「それで馬場。昨日の戦果はどうだった？」
「え、ええ。まぁ上々といったところですわ。しっかし、その、龍郭院の嬢ちゃんは、それでええんか？」
「はい。タカぼん様のなす事は最善ですもの」
「そっかぁ……。まぁ若い時はどんなプレイもやってみるもんやしなぁ」

正面の、腹の出た禿げ親父である馬場が、絶賛椅子状態の龍郭院にちらちらと視線を送りつつ、俺に先日の塔探索の利益を報告してきていた。

「それで原の姉ちゃんの要求したもんなんやけどな」
「足りないわよ、連理貴久。もっとちゃんとした設備はないの？」

色黒の、白衣を着た女が俺に向かって文句を言ってくる。
俺は龍郭院のくるくる髪を弄りながら馬場を見た。

「い、いやぁ。苦労したんですが。ワイもこの街、初めてやし」
「≪法の剣≫はどうなんだ？」
「アイツらボッてくるんであんまり頼りたくないんや」
「原価に一割足した程度だろう」
「その一割が大事なんや！！」
「値段なんかどうでもいいから、アンタなんとかしなさいよ。貴久」

原が生意気にも言ってくるが、それはもう馬場に任せた案件だ。

それよりも、

「昨日、帰り次第お前に言いつけたアレは解析できたか？」
「できるわけないじゃん。馬鹿？」

三階層で回収した樹林の王剣だ。それを研究者であるらしい原に渡したのだが、解析も何もできていないらしい。

「無能め」
「アンタさぁ。研究者を便利屋か何かと勘違いしてない？」
「してねぇよ。いいから早くやれ」
「機材寄越せよ。間抜けのトップ」
「ま、まぁまぁお二人さん。ここはケンカせんと仲良ぅな」

馬場が宥めようとしてくるが、俺たちは憎しみあってるわけではない。ただの言葉遊びだ。

「まぁいい、馬場。早急に機材を集めろ。というか、金は足りてるのか？」
「あー、ただ買うだけなら問題ないんやけど」
「やけど？　何よ馬場。アンタ、さっさと動きなさいよ。アタシに早く研究させなさい」
「ただ買うだけなら損やろが。そんなんあきまへん。大体、街のどこに何があるかわかったし、今度はＡＩ相手に交渉して仕入れてみますわ」
「馬場、その姿勢は買うが、ほどほどにな。解析そのものにはそれほど期待してなかったからいいが。研究施設は早く動かしたい」
「そらわかってまっせ。ただ、金は無限にして有限なんや。無駄に散らせるわけのはあかんわ」

頑迷な馬場の態度に原が舌打ちする。そうしてから不機嫌な目で俺に告げた。

「あと適当に頭の良い人間寄越しなさい。貴久」

「なんだ。仕事はできないのに、機材と人材は要求するんだな」

「研究に時間と準備と金と人手が要るのは当然でしょうが。それより小間使い欲しいのよ。寄越しなさい。さっさと」

「後で山県と内藤と話すから、そのときに同席しろ。さて、馬場の報告は以上だな。

なら馬場は行っていいぞ。今日も塔の前で、所定の時間に戦利品を受け取りに来い」

そうして、意気揚々と去っていく馬場を見送りながら、俺は龍郭院の柔らかな尻をなんとはなしに撫でるのだった。

「ちょ、タカぼん様ッ……」

壱百参拾陸／

「いやぁ、手懐けるの早いねぇ。お兄さん」

山県と内藤、原と話をし、人材の振り分けと新人教育などの細かい部分を指示した後だ。龍郭院と二号に三層攻略の準備を任せ、執務室代わりに使っている部屋に戻り、普通の椅子に座った。

目の前には、にやにやと笑う幸村都子がいる。俺の背後に自然と警戒態勢を取った三号が立った。

「手懐けるもなにも、勝手に懐いただけだ。それで、戦利品や使える施設はあったのか？」

「簡単なのは昨日報告した通り、戦利品は、≪法の剣≫と等分で分配して、こっちで確保した施設に入れたよ。つーかまさか、都市内にモンスターがいるとは思わなかったけどさー。というか、モンスターというか？　自動で動く絡繰（カラクリ）みたいな？」

「≪法の剣≫側の報告じゃあ、機械帝国製のガードロボットだったか。ああ、お前の目からの詳細な内容を頼む」

「っと、はいはい。えーっと、まずは倉庫が四つ。一つはちょっと目立つとこにあったから、中身だけ全部回収して、≪法の剣≫と分配。それとでかい方の倉庫はあっちに譲って、二つの中型の倉庫をこっちで貰った。戦利品は両方に等分にわけて納めてるよ。あと”がぁどろぼっと”は安全の為に全部壊したよ」

「よくやった。他には？」

指示していたことだが、この都市の中で、手付かずで残っていた施設の探索を、昨日猫には頼んでいた。

そうして、≪法の剣≫の中でも口の堅い者たちと一緒に探索を行った猫は、その成果を次々と報告していく。超直感とやらのおかげだろうか。中には≪法の剣≫が徹底的に探索した筈の地域からも新手の施設を発見していた。

「あとは、何に使うのかわからない大型の焼却施設とか、中型の発電施設とかそんな感じ。

ていうか、私が見つける施設って、武装して攻撃してくる機械が待ち受けてるんだけど。これってここの普通なわけ？」

「そんなわけないだろう。通常、この手の施設はそもそも入れなかったり、使用するには権利を購入する必要があるわけで、戦って手に入れる必要など……？」

首を傾げた。そもそもどうして好戦的な機械が入っているのだろうか。機械帝国の遊びのひとつか？

それに、猫が発見した施設は、クレジットを払わなくても機械を排除するだけで施設が使えるようになることにも違和感がある。普通の施設は壊そうが奪おうが、クレジットを払わなければ使えない仕様だからだ。

ふと、塔の地下と都市の地下でなんらかのつながりがあったことを思い出し、猫に問いかける。

「モンスターはいなかったのか？」

「機械だけだけどさ。っていうかモンスターまで出たら、うちらすげーパニックになっただろうし」

後ろ手を茶髪の後ろで組んだ幸村が怠惰そうに答え、ぶらぶらと身体を揺らしている。

「とにかく、お兄さんが言うように、私の直感が危険と感じた、見つかりにくい施設優先で探索したわけだけどさぁ。なんで危険な施設優先だったわけ？」

「そもそも、お前が危険だと思うような施設がないことを祈ってだ。なければただの探索で終わるからな。

危険な施設があるなら都市内ハザードマップを作れる意味もあった。今となっては、危険な施設に有用な道具や設備があるので、避ける意味はないが」

地図を見ながら考える。

猫が発見したのは、１０程度の施設だ。それでも一日の成果としては多すぎる。それも全てで敵対する機械が待ち受けていたなど、正気ではない。

召喚されたこの都市は、大量の人類を収容できる空間ではあるが、それにしても危険物や謎が多すぎる。

窓の外を見た。まるで絵に見えない、本物のような空が見える。

しかし、その空は、機械帝国に与えられた偽物の空だ。

「少し、探索を重視してみよう。地図から法則性も見えるかも知れないしな。猫、今度の直感はとびきりやばい施設を中心に頼む。やばくない施設以外は攻略をしなくていい。見つけたら、地図には位置情報だけ記載してくれ」

「……、わかったけどさ」

うん？　と首を向ければ、

「おにーさんは、あんまり桐葉ちゃんばっか相手にしてないで、美咲ちゃんとかも相手してあげなよー」

あとついでにごにょごにょ、と言う猫をじと目で見つめると、顔を真っ赤にした猫が「なんでもないッ」と叫び、部屋を出て行った。ため息をつく。

「女はいつでも姦しいな」

背後の三号は、黙って立っていた。

壱百参拾漆～壱百肆拾

壱百参拾漆／

龍郭院を背後に連れ、塔の入り口に到着する。

「あのタカぼん様。ひとつよろしいですか？」

「よろしいよ。なんだ龍郭院」

「私が履いているニトロエンジン搭載シューズはいいのですが。どうして、その、」

その、とスカートの裾を摘みながら龍郭院が困惑を露わにした。

「ブレザーと、スカートなんですの？　しかもこれ、銀稜台の制服ですし」

塔の入り口の前で、裾の短いミニスカートと、白いワイシャツ、ネクタイ、そして銀稜台学園のブレザーを着た龍郭院は、特徴的な縦ロールとかなりの美人顔で俺を見上げてくる。上目遣いだが、その視線に媚びた色は混ざっていない。

その龍郭院桐葉の外見は、九王の槍を片手に持ち、即死攻撃を防止する小盾を片腕にベルトで固定しているが、まさしく一目で女学生という姿だった。

また、肩や肘をガードするためのパッドや、腰のポーチを固定するための、身体の各所を結ぶ革の紐によって、たゆん、と乳が強調されている。

ひらひらと龍郭院の緊張感をあおる、裾の短いスカートと相まって、見る分には楽しい姿だ。

ちなみに、もともとは内藤用に作成していた装備である。多少大

きめに作っていたが、胸の部分がきついのだろう、胸部がぱつんぱつんであった。

「趣味だ」

「しゅ、趣味ですの？　そ、その、防具としては？」

長いすらりとした脚を覆う黒のニーソックスに、ニトロ搭載型の学生革靴を不安そうに見ながら龍郭院が呟く。ここに来る前に、多少ステータスを上げたが、戦闘力として未だ期待はできない。

「冗談だよ。まぁ、防具の効果としては、店売りの中位防具程度だろうな。特殊な機能もないし、防具効果としては昨日の巫女服の方が高い」

その言葉に、龍郭院は失望を顔に露わにはせず、俯くように顔を伏せる。俺に対する印象を変えるかと思えば、顔を上げ、

「つまりこの防具は何か事情があって私に着せているというわけですのね」

返答に、へぇ、と感心する。感情のままに動かないのは、優秀な人間である証拠だ。

「ああ、それは≪法の剣≫の防具工房で作らせた品でな。まぁ、モニターというところだ。

そういうわけだから、今日は二層でお前にも多少は戦わせるが、いいか？」

「はい。タカぼん様。それで、防具を作った、というのは何故？」

「一から十までこちらで用意できるならそちらの方がいいだろう。

それとも、龍郭院は昨日みたいに、こちらの把握していない武器の

機能を敵に利用されるようなことがあって良いと思うか？」
「それは、ええ、わかりましたわ」
「それに、楽しいこともわかったぞ。作り方次第ではその靴のように、【ニトロエンジン】の機構を仕込むことが可能でな」

足を上げ、靴の裏側を確認する龍郭院。スカートが浮き、黒い下着が見えていることに奴は気づいているのだろうか、と思うが指摘せず、言葉を続ける。

「ああ、そのシューズはバッテリー稼働だ。一つのバッテリーで五回程度の加速移動ができる。常にエネルギー状態は把握しておけよ」
「わかりましたわ。使い方は昨日の草履と同じでいいんですのね？」

頷く。靴のサイズがサイズなため、ボウガンや、銃に使っているのと同じバッテリーではなく、専用の小型バッテリーになってしまったが、しょうがないことだろう。ダース単位で小型バッテリーの詰まっているケースを龍郭院に渡すと、彼女は頷いて腰のポーチにしまう。

「制服の方は、防弾、防刃、耐衝撃機能だけだ。状態異常耐性はまだ再現できてなくてな。それは昨日渡した髪飾りで防止して欲しい」

頷いた龍郭院が、そういえば、と言うように口を開いた。

「あの、それはそれとして、どうして学生服なんですの？」
「ああ、そっちの方が、アニメっぽいだろ？」

異世界召喚された学生が学生服で戦うのは定番だろう？　と問えば、龍郭院は苦笑を深めるだけで何も言わなかった。

壱百参拾捌／

「お疲れ様ッ。お茶飲む？」

二層で龍郭院に戦闘をこなさせ、アイテムを回収して三層に向かえば、フロアボスのダリアがエレベーター前で待っていた。

「その毒々しい茶など飲むかよ。それに鱗粉が酷いからな。龍郭院、ここから先はガスマスク着用だ」

「あ、は、はいですわ。それで、その、ダリアさんは何故エレベーターホールに？　ボスの部屋にいなくていいんですの？」

「退屈なのよね。タカぼんが来てくれて助かったわ。ほらッ、ケーキもあるのよ？」

見事な装飾の為された陶器のカップに淹れられた毒々しい茶と、毒々しい色の黒いケーキらしき何かが見事な体躯を執事服に包んだカリギュルラの手にある変色した銀盆に載せられていた。女王の周囲には、年月を経た風格を見せる椅子や机があり、その周囲には、執事服を着たカリギュルラたちが邪魔にならないように静かに直立していた。

「童話で見た、幻想風景のようですわね」

背後の龍郭院の呟きに内心で頷く。

エレベーターホールを浸食する、毒々しくも鮮やかで、童話で見たような木々たちに、フロアの光を反射して眩しく輝く鱗粉たち。

ダリアが持ち込んだテーブルの上では、軍服姿のフェアリーや、可愛らしいドレスを着たフェアリーが楽しげにくすくすと笑いながら舞っており、周囲の樹林にはコンプトゥスが見え、遠くではバル

ヘロナが旗を持ってボス部屋への進路を確保している。
そうして、この樹林の女王である彼女は楽しげに俺たちへと手を伸ばし、歌うように誘いの言葉を告げる。

「さぁ、今日も楽しくお茶会よ。きっと必ず楽しいし、きっと絶対報われないわ。
ねぇ、タカぼん。今日も素敵にお話をしましょうね」

憧れた者の心を腐らせる人外の笑みで、女王は笑っている。
だから俺はその陶磁器のような美しさを持つ手を取る。そして、女王は軽やかにドレスの裾を翻し、楽しげに歩を進めていく。
渋々と、それでも悪くない気分で俺もその後ろをついていくのだった。

壱百参拾玖／

「さて、聞いていいか？」
「いいわよ。なんなりと聞いてみたら？　答えてあげるかは別だけど。というか、タカぼんもそこの椅子も、ガスマスク取ったらどう？」

樹木が室内にまで生えているボス部屋。天井には変わらず【銀蛾の群】がこちらを見下ろしている。その中で俺は、両手足をそこそこの高さに上げさせた龍郭院の背に腰を下ろしていた。
この椅子がとても素敵なのは、高さ調整が楽な点だ。手足を突っ張らせれば、俺の腰の高さ程度にまで座高を上げることができ、地面にへたり込ませれば、座布団のようにも扱える、すごい、一家に一脚は欲しいよね！　などと冗句を思い浮かべながら、ダリアの周囲に、ガスマスク越しに目を凝らす。

「お前の身体から出ている鱗粉で、お前のドレスの表面に毒粉の層ができてるぞ？　ちなみに、俺も龍郭院も肺呼吸する生物なので、お前の傍で呼吸すると割と軽く死ねるのだが」
「それじゃあ、お茶を楽しめないわ」
カチャリ、と毒々しい茶を飲み干すダリア。すぐに執事服のカリギュルラがカップに濃い紫色の液体を注いでいく。
「ああ、そうね。この階層に【完全毒無効】スキルを搭載した指輪があったから、ちょっと取りに行かせましょう」
ダリアがぱちり、と指を鳴らすと静かに消えていく一匹のカリギュルラ。武人のような趣のモンスターは、文句も言わずに歩いて行った。
「お前は、俺たちを支援するような真似をしてもいいのか？」
「本質として、私たちは塔の守備を任されているわけではないもの」
「……、どういう意味だ？」
「管理を任されているけれど、それは永続的ではなく。守備を任されているけれどそれは絶対ではない。
ついでに言えば、【勇者】に関係することなのだけれど。理解できるかしら？」
挑戦的に言うダリアに、俺はふと首を傾げる。
「なぁ、俺が勇者を警戒している事実を何故お前が知っているんだ？」
「あ」

またやっちゃったぁ私のばかばか、なんて顔をしているダリアに対して、俺は額を抑える。そうか、やはり……。

聞き慣れない言葉に龍郭院が首を上げたような気がするが、そのくるくる髪を弄るだけに留め、龍郭院を見下ろしはしない。

「≪法の剣≫の執務室映像」

「う」

「俺と武満の会話」

「げ」

「というか、お前。俺をストーキングしてたな。今日は三層入り口で待っていたし」

「や」

「ああ、わかってきたよ。やっぱりお前らモンスターは、機械帝国と繋がってる訳か」

やーらーれーたー、と巫山戯た様子で椅子ごと倒れるダリアを冷たい目で見るものの、ガスマスク越しでは届かない。

思い切って顔を覆うガスマスクを外す。尻の下の龍郭院が動揺に震えるが、構わず素顔でダリアと対峙する。

「あら？　チキン的なガスマスクはいいわけ？」

「いいも悪いも、視界が悪い、話難い、声が聞こえにくい、こんな状態で話などできるかよ。それよりもその様子じゃ図星のようだな」

「図星っていうかさぁ。私って基本脳筋なわけだから、こうやって会話からいろいろ言質取らないで欲しいんだけど」

頬を膨らませたダリアに嘲笑を向ける。口に入る毒の粉に辟易しながら、言葉を続けようとするが、ダリアの傍の毒の粉で俺の生命活動に支障が生じていた。めまいと吐き気がし、身体がものすごくだるくなってくる。

俺の様子を見て、自らの生態が持つ、死毒の効果にダリアが満足げな笑みを浮かべる。

「やーい、どうだー。効くでしょ？　すっごい効くでしょ？」

「うるさい。いいから続けるぞ」

三号がすぐさま、体力回復効果のある解毒剤の入った点滴を俺の腕に刺す。

「……、お前たちの存在と、この蟲蔵や鳥の巣は関係があるわけだな？」

あー、と諦めたようにダリアは額を抑える。

「タカぼん。貴方は、どういった人間なのかしら？」

「俺の人間性が問題か？」

俺を見る、先ほどの無邪気な様子と違い、ダリアの目には冷徹な、多くの人々を率いる指導者が持つ慈悲のない光が見えた。

唇を押さえる、ガスマスクをしていたなら見逃していた類の殺意だ。

その殺意は、俺に向けられたものではなく、

「同類に、どれだけの情を向けられる？」

「情が問題か。ならいい。話すな」

殺意を解き、意外そうな顔をするダリア、俺が微かに視線を下に向ける振りをすれば、納得したように顔を綻ばせる。

「ああ、貴方ではなく、椅子が問題なのね」

「そういう事を言うな。俺とて情は深いよ」
「私は貴方が≪法の剣≫で行っている会話を知っているのだけれど、それでもその戯れ言を続けられる？」

ダリアの呆れたような視線を躱すように龍郭院の縦ロールを指で弄ると、ダリアが顔を綻ばせ、俺の背後へと声を飛ばす。

「あ、来た来た。おーい、執事くん、早く早く。ワシは待ちくたびれたのじゃー」

振り返れば、小さなケースを手に持ったカリギュルラがこちらへと向かってくるところだった。

壱百肆拾／

受け取った指輪【ダリアの慈愛】を指に嵌めると、即座に体調が良くなっていく。【完全毒無効】というのは、解毒した端から身体を冒していく毒を、常に解毒し続けるのとは別の構造で毒を排除しているらしかった。

いや、そもそもモンスターや機械帝国の定義する、毒と言われる状態（ステータス）にならないのだ。

俺の様子がまともになったのを確認し、三号が点滴の針を引き抜く。

「どういう理屈なんだ。この完全毒無効効果ってのは？」
「理屈も何も、そういう概念だけど、何？　あれ使えてなんで知らないの？」

尻の下の龍郭院もマスクを外していた。その指には受け取った指

輪が嵌められている。

「あれ？」

「ほら、あのお茶を出現させたり、超直感娘の服に水出したり」

「おいおい、車の中まで見たのか」

俺の嘆息に、ダリアがだって暇なのだもの、と唇を尖らせ、紅茶と主張する毒々しい液体に口をつける。俺の前にもあるが、流石に毒が無効化されるとはいえ、ここの空気は粉っぽい。

飲食をしようとは思わなかった。

「あれが使えるなら、概念については理解していると思ったのだけれど」

「いや、理解していない。俺は俺が支配しているものだけにしか効果を及ぼせない。いや、そもそも」

改めて、俺はそれについて問うのだ。この都市に蔓延している、実体の定かならない、いくつかの単語の中のひとつ、

「【スキル】とは、なんなんだ？」

ダリアは首を傾げ、ああ、と頷いた。

「スキルのない世界から来た訳か」

「そうだよ。スキルなんてものを俺は知らない。龍郭院はどうだ？」

「へ、わ、私ですの？　もちろん知りませんわ。そのようなテレビゲームみたいなものは」

急に問われた龍郭院の言葉に、ダリアはうんうんと頷いた。

「そっかそっか。知らないのかぁ。教えてあげようかなぁ。でもタカぼんはなぁ。教えるにはちょっとなぁ」
「なんだ。俺の何が問題なわけだ？」

うん、とダリアは笑顔を見せる。

「貴方は鋭すぎる。九日目で三層のボスと対峙し、この都市の構造の一端に触れている。だから話していいものか私は迷う」
「何故迷う？」
「時計の針の速度に対して、イベントの進みが早すぎる。本来なら表に出ていてしかるべき人物が出てこなくなっている」
「それは問題なのか？」
「とても問題よ。このままでは私たちの勝利条件が満たせなくなる」

そうか、と俺は頷いた。だから言ってやるのだ。きっとダリアを満足させるにたる言葉を、

「安心しろ。勇者は俺が必ず殺す」

明確な殺意の込められた言葉に、尻の下の少女が微かに震える。
そうして、満足そうに、正面のダリアが頷いた。

「その解答では５０点。貴方は未だ、真実にたどり着いていない」

壱百肆拾壱～壱百肆拾参

壱百肆拾壱／

「勇者を殺す？　なんの、話ですの？」

龍郭院の問う声は無視する。対面に座っているダリアは、自慢げに言葉を続けていた。

「意外に合っているわよ。というより、貴方や、武満法行のような人類こそが私たちの望む人種である。だから、私の元にたどり着いた時点で、いくつかの答えを得ていなければならないのだけれど。そういう意味では及第点かしら？」

「お前と戦わずに会話ができるからか？」

Ｙｅｓ、と彼女は頷いた。

「私の戦闘力が、下の階層の管理者たちとは隔絶していることは理解しているでしょう？」

「だから会話をしなければならないわけか」

「まぁ、そこそこ鍛えた人類のパーティーが死力を尽くせば殺せるかもしれないから、そういう意味では別に無敵の壁というわけではないけれどね」

それでもこいつには、銀蛾の群という駒も存在している。視線と顔に出ていたのか、ダリアはそんな俺を見て呆れていた。

「銀蛾の群は貴方に対抗するためよ。だって、私を殺せるなら殺してしまうでしょう？　タカぼんは」

「ああ、否定しない。お前が、殺せる相手なら殺していたか、無力化してから拷問していただろう」
「私は痛いのすっごく嫌だし。そういうわけだから、会話の為の脅しに使ってるだけよ。貴方以外の人物がちゃんとこのフロアに来てたなら、私とペットで相手をしたわ。それに……」
「それに？」
「仕掛けもあるもの。正規戦闘の場合は、三層の四ヶ所にある、怪物倉庫（モンスターストレージ）から増援を呼んでたわ」

あのモンスターの詰まったカプセル室。思い出し、それは、と絶句する。ならば、三層を武力で突破するのは不可能なのではないだろうか。
懸念を覚えるものの、ダリアにはここを絶対に死守しようという気構えは感じられなかった。

「それでも、この都市のあちこちに点在する謎。それに対する答えも持つ人間が相手ならば、私の繰り出す物量を武力で覆し、見事、殺害してのけるでしょう。だから、」
「だから、ここが突破されるなら、どちらにせよ、お前は役割を果たしているということか？」
「そう、ただ一つの例外はあるけどね」

ならば、俺はどうなのだと視線で問うと、苦みを表情に乗せたダリアが肩を竦める。

「答えを持っていながらも、それを私が聞けないうちに突破しようとするから、対処しただけよ。銀蛾の群とか、私が本来、使う予定になかった武器スキルとか使ったけど、別に違反というわけではないし……」

じと目で睨めば、てへへ、と笑い手を振る女王モンスター。

「ま、ま。結果的に誰も死ななかったのだし、良いでしょ？　さ、もっと面白い、別の話をしましょうよ」

そうして彼女は、まるで、待ち人が来たことを喜ぶ恋女のように、俺と会話をしたがるのだ。

「ダリア、何故お前は……」

俺は、目の前の女の頬に腕を伸ばし、触れる。

美しいモンスターの肌は、まるで人間の肌のような暖かさと脈動を秘めている。

「ああ、暖かいな」

「生きているもの」

そっと、触れた手を握られる。毒の粉をまとわせた手は、俺の手を愛おしげに掴み、頬に押し当てた。

「ダリア、疑問がある。何故会話をする？」

「寂しかったから。誰にも覚えられずに死んでいくのに耐えられなかったから」

そうして、寂しげなダリアは「続きを話しましょう」と俺の手を離したのだった。

その悲しみは心底のものだろう。

それでも、俺はきっと、この女に死を求め続けるのだ。

壱百肆拾弐／

木々に囲まれた室内に、俺と龍郭院、肉人形二体は敵の一人と戦わずに、話をしている。

さて、考えろ。そもそもモンスターの目的とはなんだ？　これがわからなければ相手の求めているものを理解することはできない。

交渉として、片手落ちである。

頬に手を当ててダリアが俺を見ている。落ち着くために俺は深く龍郭院に座り直し、改めて問いを放つ。

「お前らの勝利条件について聞いて構わないか？」

「ええ、どうぞ」

あくまで優雅にダリアは俺を見る。先ほどの会話などなかったかのようだ。

頭を落ち着けるためにも、龍郭院の縦ロールを手に持ち、くるくるしながら、俺は深く考え込み、まずは状況を整理することにした。

「勇者の殺害はモンスターの勝利条件である」

「ええ、そうよ。それだけではないけれど」

「覇王の塔の攻略はモンスターの敗北条件である」

「Ｙｅｓ。私たちはこの八層からなる覇王の塔を貴方たち人類に攻略され、最上階のお方を殺されれば敗北する」

ダリアは優雅に微笑んだ。龍郭院が何かを問うように俺を見上げてくるが、無視をし、尻を揉む。龍郭院が顔を赤くして、抗議するように身体を震わせるものの。流石に重要な会話だと察しているらしく、振り落としたり、声を上げて、俺の邪魔をしようとは思わないらしい。

龍郭院の尻を揉みながら考える。

「勇者のパーティーメンバーの殺害は、モンスターの勝利条件である」

「Ｎｏ。勇者のパーティーメンバーは生きていようが死んでいようがどちらでもいい。ああ、殺してくれるならそれはそれで嬉しいのだけれど」

当然の答えだ。勇者のパーティーメンバーは勇者ではない。あくまで勇者の添え物に過ぎないのだ。

ならば、以前から感じていた違和感を口に出そうとして思いとどまる。

ずっと引っかかっていた違和感。何かの罠のようにぽっかりと口を開いていた疑問点。

そもそも勇者の殺害が、モンスターの勝利条件ならば、どうして――

「どうしたの？」

「……、いや、なんでもない」

首を振る。それは、口にするのが難しい話だった。

それでも問いは続ける。こちらはこちらで、聞いておかなければならないことだった。

内藤の精神の異常にも関係する話だ。

「お前達の勝利条件は、勇者【アーク・ソシエト】の殺害でいいんだな？」

にんまりとこれだけは間違いなく、悪意と憎悪と殺意を持って、ダリアが嗤う。

「Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！　Ｙｅｓ！！　凶悪なる機械の王子！　呪われし禁呪の悪魔！　親殺しの期待はずれ！　そして自身の生存のために他の全てを台無しにした犬畜生ッ！　勇者アーク・ソシエト！」

一変したダリアの剣幕に、言葉を失う。

正真正銘の毒蛾の女王の憎悪である。彼女は、俺へと詰め寄るように顔を寄せ、毒と言葉を吐き続ける。

それは、彼女の真実の言葉だ。

「ねぇ、タカぼん。物語は終わらせなければならないの。絶対に確実に必然として、終わらさなければならない。

だから私たちは終わりたがっているし、終わったなら速やかに絶命しなければならない。

貴方も敗者ならば、わかるでしょう？　そして、それが続くならば」

ダリアは息を吸う。吸い、吸い、吸い、呼気と共にはき出す。

「必然として殺害しなければならない！　必滅させ、必殺し、死体すらも残らぬように破砕しなければならないッ！

観測しなければならない！　私たちの死を観測させ、勝敗を決し、物語を終わらさなければならないッ！！

私たちは敗者なのだからッ、紗幕の裏側で息絶えなければならないッ。

だから、それが永遠に続くのならば――」

気づけば、ぎしりと、俺の腕を、肉と骨が潰れ、引きちぎれかけるほどの力でダリアが握っていた。

「終わらさなければならないの。終わっていなければならないの。

だから私たちはここで無様を晒し、機械帝国もここに死者を送り込み。私たちはくだらない遊戯を続けている。だから、タカぼん、貴方が終わらせなさい。ここに最速でたどり着いた貴方ならばこそ」

ダリアが、つぶれかけ、力を失った俺の手のひらにメモリをねじり込む。下の階層でも手に入った、ＩＤの入ったメモリだ。

「いいのか？　ダリア」

肉が潰れ、骨が砕ける痛みに耐え、冷静に言葉を絞りだせば、

「私は、私が思うように動くわ。
安寧が得られるなら、結末は、どちらでもいい。
それでも、願わくば勇者の殺害を」

そうして、「今日はもういいわ、去りなさい」と、ダリアは言った。
だから「また明日来る」とだけ返して、俺と、ダリアが放った殺意に、昨日のように尿を漏らした龍郭院は三層を去るのだった。

壱百肆拾参／

「龍郭院、お前の腰から下はまるで蛇口だな」

塔直下の軍基地にある駐車場。そこにある、俺の車の影で下着を取り替えている龍郭院に対し、俺は言う。腕の傷は塔内でなんとか治療したものの、不十分があるかもしれないために、持ち運びするには重すぎる、専用の機材を使って治療を行っていた。

「あ、あれは仕方在りませんわよ!!　あんな、あんな恐ろしい生き物に対して平常でいられる方がおかしいですわ」
「否定はしないがな。それでも少しは堪え性をつけろ。せめて部下の前では失態を犯さないようにな」
「わ、わかっておりますわ。わ、私だって好きで漏らしてるわけではありませんし」

衣擦れの音が聞こえ、そうしてぶつぶつと何かしら、ダリアに対する文句を言った龍郭院は、車越しに思い立ったように問いかけてきた。

「そういえば、モンスター側にも勝利条件があるとか、勇者がどうとか話してましたが、どういうことでしたの？　大分、機械帝国から与えられた情報と差がありますけど」
「言葉通りだよ。俺たちの勝利条件は機械帝国に従うことか。それとも魔王側の勝利条件を満たしてやることか。
それとも、独自に創り出すか。さまざまだがな。まぁ、お前もいろいろ考えてみろ」
「ええ、でも私はタカぼん様に従いますけれど」
「お前は、また思考を放棄して」

言えば、誇らしげに顔だけをこちらに向けた龍郭院が胸を張ってくる。

「私が私の判断でタカぼん様を支持しているのですから、何もおかしいことはありませんわ。それに、行く末でしたら、いろいろと私も考えておりますわ」
「そうかい。ああ、乳見えてるぞ。上ぐらい羽織れ」
「き、着替え途中でしたの!!」

ため息を吐く。そうしてから、ダリアから受け取ったＩＤの中身を確認、端末へと入力した。

すると出てくる出てくる、今まで開示されていなかった情報がずらずらと。

「ショップの全武具の、搭載スキルの解放か」

「ＩＤで開示される情報ですの？　っと、こっちは覗かないでくださいまし」

「俺は座ってるんだから、覗かれないように着替えろ。さて、他には、三層マップの情報や三層施設の詳細情報だな」

治療が終わったために、三号が機材を片付けていく。俺はそのまま駐車場の車止めの上に座ったままだ。

情報を確認し、三層で何が起こったかを確認し直す。

搭載スキルは、あのときダリアが振るった、二本の樹林の王剣から放たれた熱線とやらに関係するものだろう。

更にスキルを見れば、堕王の大剣や創雷ゼウスにもスキルと呼ばれるものが搭載されているようだった。

【【樹林の王剣（グローリー・オブ・ユグドラシル）】搭載スキルを閲覧します】

【栄光の聖樹】消費ＳＰ２００

剣の軌跡に合わせ、強力な聖樹属性の光線を放ち、指定した範囲への攻撃を行います。

使用後は刀身の冷却のため、二時間の間、無属性へと刀身の属性が変更されます。

バッテリー発動不可／使用者のＳＰが不足する場合は発動不可

【【堕王の大剣】搭載スキルを閲覧します】

【炎神の庭（アグニール）】消費ＳＰ２００

対象指定した範囲を円形に聖炎属性の炎で焼き尽くします。

使用後は刀身の冷却のため、二時間の間、無属性へと刀身の属性が変更されます。
バッテリー発動不可／使用者のＳＰが不足する場合は発動不可

【【創雷ゼウス】搭載スキルを閲覧します】
【召雷砲（ケラウノス・カノン）】消費ＳＰ１５０
創雷ゼウスの剣先から塵雷属性の弾丸を亜音速で撃ち出し、対象を【物理防御不可】【絶対値ダメージ３００】の概念で貫通します。
連続使用は三回までが限度です。三回目の発動を確認次第、刀身の冷却に入り、二時間の間、無属性へと刀身の属性が変更されます。
バッテリー発動不可／使用者のＳＰが不足する場合は発動不可

「……。なぁ、龍郭院」
「はい、なんでしょうか？　タカぼん様」
「聞きかじりだが、兵器というのは、自身の主砲と同じ威力の攻撃を正面から喰らっても、耐えられる装甲を持つべきらしい」
「はい？　なんの話ですの？」
「少なくとも、そう考えておくべきだろうな。仮想敵対国に核を持たせる国はいない」

着替えが終わったのか、車の影から出てくる龍郭院に対し、お手上げだというように両手を挙げた。
つまり、だ。当たり前の話だが、この武具スキルを与えられ、いずれ使いこなすであろう俺たちと、まともに戦争しながらも勝てるだけの戦力を機械帝国は所持していることになる。
また、三層でこの情報が与えられるということは、五層や六層にもなれば、モンスター側もこれだけでは攻略できない程度には強力になっていくという証拠だろう。

「なるほどなるほど」

「何がなるほどなんですの？」

後ろ手に手を組んで、地面に座る俺を見下ろしてくる龍郭院。その視線は俺の端末に向けられていた。

「俺たちの敵対する相手がどれだけ強力なのかを確認していただけだよ。さぁ、そろそろ馬場が来る頃だろう」

視線を遠くに向ければ、禿頭の馬場がトラックでこちらに向かってくるところだった。

大きく馬場たちに手を振る龍郭院を見つめ、そういえば食事を取っていなかったことを思い出す。

「龍郭院、帰りになんか食ってくか？　この前武満にレストランの割引券を貰ったんだが」

「へ、あ、は、はい！　喜んで」

「本当に嬉しそうだなお前は」

そんな龍郭院を見ながら俺は考えるのだった。

このスキル情報を≪法の剣≫に渡すか否かということを……。

壱百肆拾肆～壱百肆拾陸

壱百肆拾肆／

「原、データが手に入ったんで、武具の開発をして欲しいんだが」

龍郭院と飯を食って宿屋へ帰り、原に与えた一室へと入る。

中では、頭を抱えた原とぺこぺこと謝る男二人がいた。

「だーかーらー、そうじゃねぇって言ってるでしょうがや。あーもう、なんでこんな連中しかいないかなぁ」

「いや、僕ら小間使い程度のことしかできないって」

「シャラップ。黙れ。犯すぞ」

原の恫喝にひぃ、と黙る男二人。そうしてから、ようやく原はこちらを振り返り、ああ、いたのかというように白衣を翻す。

「連理貴久じゃないか。どうしたの？」

色黒の、眼鏡を掛けた白衣の美人。原は、傍にあった研究机に直接腰掛けると、こちらを見る。

ショートカットにした、薄い金髪の女だ。

「ショップのデータが手に入ったから武具の開発に取りかかれ」

「あ？　なんて言った？」

「ショップのデータが手に入ったから解析して武具の開発に取りかかってくれ。三日以内になんらかの結果を出すように」

「なんで詳細が地獄的に鬼なのよ！　貴久、てめぇッ！！」

「……、何故貴久と呼ぶ？」

タカぼんさぁん、総帥ぃ、元の配置に戻してくださぁいと足下にすり寄る男二人を蹴飛ばし、機材に埋もれていた椅子を取り出す。
そうしてからそれに座り、

「タカぼんか、タカぼんさん、もしくは総帥と呼べよ」
「嫌よ。連理貴久は貴久でしょう？　アタシは貴久と呼ぶ」
「……、意図があるのか？」
「名前は人間の本質よ。違う名前で呼んだら、間違えるわ」

ふふん、と嗤う原がそうしてから、黒々とした液体の入ったフラスコからカップに何かを移し、口をつける。

「コーヒー飲む？　おいしいわよ」
「……、ああ、いただこう」

結局、開発するにはまともな機材と人材を寄越せというので、仕方なく約束をしてから原の部屋を去るのだった。
俺も含むところがあったので、一名ほど、研究系の人材を用意するべきだと感じる。

壱百肆拾伍／

「そういうわけですから、文香さんはそちらに回って、倉庫の目録通りにアイテムがあるか、確かめてもらえますか？」
「はいッ。美咲お姉様」
「あの、そのお姉様というのは……」
「ダメですか？」

上目遣いに迫られてのけぞりかけた内藤が渋々と頷くと、甘利文香は喜んで倉庫へと突進していった。

「頑張ってるようだな」

「あ、タカぼんさん」

様子を見に来た俺を見て、内藤が微妙な顔をする。

「あの、会長は？」

「槍の練習だと言って、≪法の剣≫に行った。

思い出したが、あっちには武満の世界出身の連中がぞろぞろいるからな。槍の上手い奴に指導してもらえるように依頼をしておいたから、今頃上手くやってるだろう」

「今でも、槍や刀で戦争を行っているっていう、大日本帝国の人たちに、軍司令部で依頼ですか……」

「ああ、≪法の剣≫の人事の連中にアルバイトのひとつとして、回してもらえるように頼んでおいた。報酬としてそれなりにクレジットを預けてきたから。誰か、槍を使える人間が教えてるだろう」

そういう俺を、内藤は相変わらず微妙そうな顔で見ていた。

「最近、≪法の剣≫とずぶずぶですよね。タカぼんさん。相互扶助以上に付き合いが深くなってませんか？」

「そうでもない」

「えっと、断言ですか？」

そうして、俺は端末を掲げてみせる。そこにあるのは、三層での入手ＩＤだ。

「三層ＩＤの情報を、俺は≪法の剣≫に教えていない」

「ッ。もう手に入れたんですか。だって、入ってからまだ三日目じゃ」
「そうだな。まだ完全に攻略していないが、四層は、明日にでも入れるようになるだろう」

ダリアは、そのときに殺すか自害することになるだろうが、それは避けられないこと。
あれの最後をきちんと看取る決意をしていると、内藤が、唇をじっと噛んでいた。そうして最初にはき出した言葉は、

「会長は、タカぼんさんの力になれたんですか？」
「龍郭院か？　ああ、あいつな。役に立ってたな」

椅子として。

「そうですか。それは、私よりも……？」
「内藤」
「最近、タカぼんさんの役に立てている自覚がないんです私。貴方が本当に私を必要としているのか。私が私として、何をしていいのかがわからないんです。
文香さんとのことだって、結局はタカぼんさんに甘える形になってしまって」

ぼそぼそと、整理しきれていない感情を吐き出す内藤。
そんな不安定な様子を見て、俺は内藤の髪を手を伸ばした。顔を上げ、「なんでもないです。すみません、くだらないことを」と続けようとした内藤の頭を、優しく撫でてやる。
嫉妬。嫉妬かぁ。何に嫉妬してるんだろうなぁ、こいつ。
人物か、状況か、功績か、それとも、俺も含めて、誰かが塔に登り成果を出したことにか。

「タカぼんさんッ……」
「龍郭院は、お前より役に立つよ」
「ふッ……」

一瞬で顔が青くなる内藤。顔面から血液が去っていったかのように蒼白だ。
そんな様子に内心でため息を吐く。
俺はなにをやってるんだろうか、こんなところで。小娘相手に……。
それでも内藤のケアはしておかなければならない。こいつの感情が歪に育つことを俺は望まない。

「他者に依存するな。俺を行動の理由にするな。
お前はお前の仕事をしろ。お前にしかできない仕事を俺は任せているだろう？」
「新人教育、ですよね」
「ああ、≪支配の杖≫ではお前にしかできないことだ。
だからお前に任せたんだ」

くしゃり、と柔らかな髪を撫でると、内藤が赤く染まった頬で俺を見上げてくる。その様に、内藤にもわかるようにため息を吐くと、顔を俯けてしまう。

「お前は、もっと強かった筈だ。内藤という偽名だって、俺へと対抗するために吐き出した嘘だったはずだろう？」
「それは、だって……。最初は、信用ができなくて。一人でなんとかするって決めて、だけど」
「お前は、もっと毅然とあるべきだ。そうあるべきだ」

荒療治が必要だろう。一度、怒らせてみるべきだと思い。堂々と制服の上から内藤の乳を揉む。

下着越しの、年相応に、柔らかな感触が手のひらへと伝わる。そして、俺の視線は内藤の身体ではなく、表情へと向いている。

「……、あ、あの？　えっと、タカぼんさん。一体何を……」

「人物として劣化しているぞ。最初のお前なら、ここで俺へと不信を募らせたはずだ。なのに、なんだ。今の顔は」

「えっと……」

「お前、今、悦んでいただろう？」

図星を突かれた内藤が、背後へと下がりかけ、そうして、自身の胸を掴んでいる俺の手に、真っ赤になった顔で手を振り上げ、止まる。

その躊躇の原因を、取り除く。

「そ、そんなわけ。そんなわけ」

胸の突起を探り当て、捻り上げる。

「ひぅッ、ちょ、ちょっとやめ」

「悦ぶな。不信を募らせろ。お前の正義を――」

そこまで言ったところで、背後に殺意を感じ、振り返る。そこには、

「やめてください。お姉様を虐めないでください……」

倉庫にあったのだろう。内藤が最初に使っていたショートソード。その柄を握った甘利文香が、剣先を俺へ向け、俺への憎悪を瞳に浮

かべ、殺意を露わにし、立っていた。

「さぁ、どうするんだ、内藤。お前は、毅然として立ち向かうべきだ。この場合、誰を罰するのが一番正しい？」

「文香さ、ん？　あ、あの、やめて、やめてください。タカぼんさん」

快楽に震える内藤の腰を抱え、乳を思う存分こねくり回し、身体の前に置く。内藤の身体を盾にされ、甘利の動きが止まる。

これは膠着状態ではない。

内藤が決断すれば、今すぐにでも終わる茶番だった。

壱百肆拾陸／

誰もが認めるだろう美少女の乳を鷲掴みにしながら、甘利と対峙する状況だ。

殺意と憎悪を目に浮かべた甘利だがもちろん、俺の眼中にはない。

俺は奴にパラメーターアップアイテムを渡してはいないが、奴は奴自身が持つパラメーターアップアイテムを使っており、一部パラメーターは恐らく俺と拮抗、もしくは凌駕しているだろうが、そもそも、俺の視線に甘利は入っていなかった。

いくら身体能力が上がろうと、何もできない人間には、何もできない。

「連理貴久ッ。お姉様を離してください。お姉様に触らないでください」

「どうする内藤。お前の意志で決めるんだ」

懐の内藤が俺を見上げる。その目には、疑念が渦巻き、そして真

挙な感情が見え、内心ため息を吐く。こんな状況でも内藤は俺を信じていた。

（疑念を持て、俺を疑え、信じるな。自分で考えろ、内藤）

「離してください、タカぼんさん。私に、その、そういうことをしたいなら、ちゃんと、ムードのある」

「そういうことじゃないだろう？　お前は、ここで俺にするべきことがあるはずだ」

唇を噛む内藤。服の上からでは刺激が薄いか。片手で制服のボタンを外しに掛かると、

「連理貴久ッ。やめてッ、やめてくださいッ！！　お姉様に触らないでくださいッ！　触れないでッ！」

雑音が聞こえるが無視。内藤は、頬を赤くするだけだ。俺を困ったように見上げている。

「力尽くで、振り払うことを望んでいるんですか？」

「怒りを感じないのか？　お前は、今、陵辱されているんだぞ？」

「タカぼんさん」

内藤はボタンを外している俺の手に自分の手を重ねてくる。

「したいのなら、きちんと言ってください。私を好きだと言ってください。愛していると」

「俺は、お前に恋愛感情を抱いたことなど一度もないよ」

支配欲ならあるが、それは口にしない。

内藤は、俺の言葉を聞いた後に、悲しそうに言葉を続ける。

「また何か考えているんですか？　私はそれほど頼りになりませんか？」

服の裾から手を差し込み、直接肌に触れ、下着の隙間から手を差し入れても、内藤は俺へと直接的な力の行使をしない。

その目に憎悪はない。怒りもない。疑念と悲しみだけがあった。

「怒りを露わにしろ。お前の正義を見せるんだ」

「その言葉は私を見て、言っているんですよね」

「失望したか？」

「いいえ……」

むしろ、と内藤は言った。

「タカぼんさん、貴方らしくて、悲しくなるほどに、タカぼんさんはタカぼんさんです」

内藤の言葉から、内面を想像する。先ほどあった依存は大分抜けていた。こいつは今、自分で考えて自分の言葉で発言している。

そして、誰かの意志を感じることもない。その目の奥には誰かの憎悪が見えるものの。今の感情は内藤のものだった。

「私は、貴方の事が好きです」

「お姉様ッ？！」

視界の隅で、ショートソードを変わらず向けている甘利が、動揺したように剣先を揺らした。

俺は、

「そうか。だが俺は、お前に恋愛感情を向けたことはないよ」
「知ってます。それとひとついいですか」
なんだ、と問うと、内藤は苦笑して言った。
「私を怒らせたいなら、もっと私のことを考えないで触ればよかったんです。
タカぼんさんのセクハラは、私のことを真摯に見つめすぎていて、厭らしくありませんでした。
触られたことに、疑念が湧くから、殴れませんでした。どうしても貴方が何を意図したか考えてしまって」
ため息が漏れた。この娘は、他者の内面を見ることに長けているのだろうか。そんなことを思いながら制服の裾から手を引き抜かずに、直接、乳を揉み続ける。
「あの、これはただの意趣返しなんですよね？」
「女の肌を揉むのが好きなだけだよ」
「あの、今更だから言うんですけど。私が本気で殴ったら、タカぼんさん死にますよね？」
困惑した内藤が、圧倒的な膂力を誇る手で、傍にあったパイプ椅子を素手でねじ曲げる。それを見ても俺は変わらず内藤を抱き寄せたままだった。
「お前に、俺は殺せない」
「ずるいです。でもそろそろしつこいと思います」
そうして、内藤は怒りらしきものを込めて、俺の二の腕を万力のような膂力で抓るのだった。

その様子を見て、とりあえずの依存が抜けたことに満足し、俺は、俺の懐から内藤が出て行き、制服を整えるのを眺めるのだった。

ふと、

「連理貴久連理貴久連理貴久

壱百肆拾漆～壱百肆拾玖

壱百肆拾漆／

「呪われてあれ呪われてあれ呪われてあれ

ように、連理貴久に弱みを握られ、無理矢理椅子の役をさせられていたのだ。

（ああ、ここで、こいつは殺さなければ……）

男がもし操作を間違えたり、また、逆らおうと思えば殺せる位置に連理貴久はいた。いや、今、こうやって殺せると思ったように、殺せる位置に連理貴久はいる。

いや、連理貴久は殺さなければならない。男の心からの願いに、身体が反応しようとする。

そうして、レバーとハンドルを握る手に力を入れようとしたところで、

「ご苦労さん。いいよ、これでお前の家族は殺さないでいてあげよう。死体はそのままでいい。

いずれ連理の息が掛かった警察が来て、片付けてくれるから」

連理貴久が、男を見もせずに言い放ち、立ち上がる。尻の下の老人は、文句も言わずに立ち上がった連理貴久の背後に付いている。

ふと、老人の経歴を男は思い出す。年に数百億の利益をあげる企業を運営する男だ。同時に暴力団や政治家とのつながりは深く、黒い噂の絶えない人間だ。

しかし、老人の眼光は弱々しかった。傍目にも自尊心の全てが叩き折られ、そして、連理貴久の機嫌を損ねないように全力を尽くしていた。

そして男は、老人が男と同じだということに気づく。

弱みを握られ、やりたくもないことをやらされ、そして、従わざるを得ないのだ。

「……ありがとうございます。連理貴久」

屈辱に震える身から、言葉が出る。ブルドーザーのエンジンを無意識に切っていた。殺さねばならないと思いつつも、連理貴久に逆らう気概を根こそぎに奪われていた。

そうして、懐から拳銃を男は取り出した。連理貴久は男を見ない。男の唇からは懇願するように言葉が漏れていた。

「本当に家族は……」

「うん、殺さないでおいてあげよう。大丈夫。俺は、約束を破ったことはない。ただ、」

「ああ、うん。わかってます。やります今すぐ」

「ご苦労様」

ぱん、と音がした。

男は自分の頭に拳銃を押しつけ、自殺した。

連理貴久は、連理貴久の命を狙った男の家族の無事を保証した。だから男はそれ以上、彼に家族の命を脅かされないように死ななければならなかった。

連理貴久は、連理貴久が、急成長を遂げる【連理】のトップだということを知っている人間がいることを好まない。

有名な事実だった。

それでもただ家名だけで地位を保っていた連理という企業を、一流の企業へ成長させた彼の名前は闇の世界で拡散し続けている。

そして、銃弾によって破壊される脳の中で男が思い続けたことは、連理貴久はきっと男との約束を守るだろうという、意味もない妄信だった。

事実、彼の妻子は連理貴久によって殺されることはなかった。

約束は守られた。

壱百肆拾捌／

「結構、非道な事をしておったのじゃな」
「当たり前のことを当たり前にこなしただけだ」

角の生えた幼女は、毎日訪れる、この真っ白な空間で、闇色の球体をこねくり回しながら愉快そうに唇を尖らせた。
幼女の前には、俺の記憶を写したテレビらしき物体がある。

「今、主（ヌシ）がやっていることもその延長かえ？」
「延長だな。なるべくなら役に立って欲しくない保険作業だが」
「失敗すれば、同族が死ぬぞえ？　それも大量に」

角でほれほれと突つかれる。夢なのに微かなこそばゆさと、痛みを感じ、俺はその角を手で除けようとするものの、

「我は今なおもって魔王であるぞ。無礼であろ」
「一国の支配者であるというなら俺もそうだった。それに俺は礼を尽くしてくる相手に無礼は払わないよ。お前が無礼なわけだ」

二つある、捻れた角のうちの一本を握り、力を込めるとウェンディサークは平気な顔でぐぐぐ、と押し返してくる。
稚気に溢れた奴だと思いながらも俺は言葉を続けていく。

「スキルや、お前の存在について話す気にはなったか？」
「んー、話してどうするんじゃ。主、前提となる話を理解しておるか？」
「理解はしていないな。俺の視点には、機械帝国からの証言が足りない」
「あれらは頑迷だからの。しかしな、他の種族に対する蔑視は強固

だぞえ」

会話をするのは難しいじゃろ、とウェンディサークは言う。

「それに、主の性格上、スキルについてはダリアから聞き出すのが一番であろ」

「……、何故そう思う」

「死に逝く者の言葉を疑うほど、主は猜疑心の強い男の子（オノコ）ではあるまい」

どうだか、と俺は呟いた。死に際の妄言というのはある。何より俺は、奴に死を望んでいる。

それでも、だからこそ、

「わかってるよ、ウェンディサーク。お前の部下から話を聞くさ」

俺に角を握られたウェンディサークは、満足そうに微笑んだ。

壱百肆拾玖／

【【感情：配下への欲求】をレジストしています。幸村都子に対する【感情：配下への欲求】はレジストされました】

バックグラウンド処理から復帰させた端末のウィンドウは面白いように、九日目の朝食の場で≪支配の杖≫の全所属員に行われた行為を、教えてくれた。

また小山田が無駄な事をしたんだなぁ、と思いながら奴に目を向ければ、イチゴジャムの瓶を握り、中からジャムの塊を掬っていた小山田が唇を尖らせ、俺を睨んだ。

俺の世界の日本でトップアイドルだった少女は、実に不機嫌に食事を摂っている。

「どうされましたか？　タカぼん様」
「なんでもない。それより、お前」
「はい？　なんですの？」

≪支配の杖≫の幹部が集まった朝食の席の場は、下のメンバーたちが食事を摂っている場よりも低いテーブルである。
その理由でもある、椅子役の龍郭院は、キリッとした顔で、尻の下から俺を見上げた。
三日目にもなれば人間椅子のコツを掴んだのだろう。背筋は伸び、手足はしっかりと全身を支え、そこはかとなく周囲にオーラや威厳を醸し出し始めている。

「あー、お前も慣れてきたな。随分と」
「ええ、これが私の仕事と認識すれば手は抜けませんわ。さぁ、いつでも私のお尻を叩いてくださいませ」
「……会長。変わりすぎです」

自信満々にふりふりと尻を振る龍郭院。連動して男の目を引くだろう乳が揺れていた。その様に言葉が出なくなる。対面を見れば、余りの龍郭院の変わりように内藤が目頭を押さえていた。
成長した龍郭院を見た感動からではないだろう。たぶん。
とはいえ、俺も微かにした頭痛に額を抑える。流石の俺も、個人の隠された性癖についてまで詳細に把握する術はない。ついでに言えば、今も俺を見上げ、きらきらと顔を輝かせる龍郭院は変な意味で適応力が高すぎた。かつて俺に椅子にされた人間はそこそこ多いが、それでもたった三日でここまで適応した人間はいないし、もっ

と言えばここまで完璧に人間椅子を極めようとした人間もいない。
そろそろこんな龍郭院に率いらせる予定の連中の反応が心配になり、下のメンバーが食事を取っているテーブルに顔を向ける。というか、最初は戯れのようなものだったのだ。それが、龍郭院には椅子の才能もあったらしく、座り心地が抜群に良すぎたのが悪かった。
他者を屈服させることを楽しむ俺の性質もあるが、人間になどこうして連日座るようなものでもないというのに、座ってしまったのが良い証拠だ。
しかし椅子としてのオーラを放つ龍郭院をちらちらと見る新人や部門責任者の目に嫌悪の目はない。最初の頃には微かにあった変態性癖を見る目より、「龍郭院さんすげぇ」という感心の視線のようなものがその中には多かった。そして今もすげぇの視線は徐々に浸透しているように見える。
呆れているのは小山田ぐらいのものだった。

（龍郭院のスキル項目にあった【カリスマ（小）】という奴か？それが、このような行為でも極めれば他人の賞賛を得られる類のものに変化させている？）

龍郭院が見事とはいえ、余りの不自然さにスキルの効果を疑う。

「そもそもスキルとは、なんだ……」
「タカぼんさん、食事の手が止まってますが、どうかしましたか？」
「いや、なんでもない。それで山県か。仕事の調子はどうだ？」

≪支配の杖≫の制服を着こなす眼鏡の彼は、俺の言葉に得意げに頷く。

「馬場さんからの提案もあって、≪法の剣≫や機械帝国の仕事の他に、馬場さんから仕事を貰うようになりました。

あとは言われていたように全員の経歴などを書類にまとめましたが、こんなもの、どう使うんですか？」
「どうもこうも、俺は彼らを雇っているんだ。連中の詳細は把握する必要があるだろう。
それに、本人が技能を書いてくれてるんだ。お前も役割を振りやすい筈だが」

渡された書類に書いてある１０人余りの人間の住所を見れば……、

（武満の世界の連中が武満のところに行くのはおかしい話ではないが……。ああ、そうか）

小山田を見る。俺の視線に気づいたのか、十分に内藤に匹敵する美貌を持つ少女がいーっと、歯と舌を見せ、こちらに向けて威嚇をした。
子供のような反抗に苦笑を覚え、そうしてから書類に目を落とせば、住所の欄には見慣れた地名がずらりと並んでいる。
全て、俺と小山田の世界出身の者たちだった。原も含めて。
小山田のアイドルとしての知名度が、人を集めたのだ。

「そうですね。確かに各人の持ってる資格などがわかると仕事は割り振りやすいですね」
「それに、従順だろう？　奴らは」
「従順ですか？　ええまぁ、ここに来た当初、心配していたようなことはありませんでしたけど」
「あれらが自分の意志で逆らうようなことはないだろう。
こうして書類を目で見るまで確信は持てなかったが」

それでも彼らの目で理解はしていたことだった。飼い慣らされた羊の目。狼たる野心の存在しない瞳。

今日の仕事の事を語り、昼食のメニューを想像し、与えられるだろう休日を夢想している彼らは、環境を劣悪に仕立て上げてようやく、形ばかりの反抗ができる程度の人種だ。

彼らは俺を暗殺しようとは思わないし、俺を排し、トップへと上り詰めようとか考えない。

それは、彼らに、かつて俺に支配されていた過去があるからだ。

俺は、俺が日本を支配していた期間の間で、そのように彼らを仕立て上げていた。

それでも彼らの中に注意するべき人物はいる。首魁だった小山田と、次点で小山田を盲信している諏訪だ。原も飼い慣らされるような人物ではないが、野心はない。何かに結びつかない限り、彼女は害にならない。

目を通した書類を山県に返した。

「こいつは厳重に保管しておいてくれ」

書類を受け取った山県が頷く。その目には、与えられた仕事に対する熱意と、自分の中にある考えを外に出そうと努力する色が映っている。

山県は人間として、裏のない人物だった。

壱百伍拾～壱百伍拾参

壱百伍拾／

「タカぼん様。よろしいですか？」

龍郭院が車から荷物を下ろしている三号と二号を眺めながら言った。

今回の攻略には、革帯と鎖で胸を強調した赤いドレスアーマーを着せている。≪法の剣≫で作らせた、見目にだけ拘らせた品だ。胸甲部分がないという時点で防具としては欠陥でもある。美術品の類だった。

そう、今日は戦闘を行う気が俺にはなかった。ダリアと会って三日目なのだから。

そうして顔を向ければ、龍郭院は戸惑ったようにそれを口にする。

「本当にダリアさんに自殺してもらいますの？　その、ＩＤも手に入りましたし、話し合いで解決するなど……」

その言葉にため息を吐く。とはいえ、話し合いの際に同席させているのだから当然出るであろう言葉だった。

情も湧けば、選択肢として出てくるんだろう、そういったものは。

「自殺はやってもらうよ。俺もダリアも、それを望んでる」

「何故ですの？　もっと良い方法をタカぼん様なら思いつくでしょう？」

「話が通じるから、意志を持っているから、人と通じ合うことができるから、共に生きていくべきだと？」

頷きは戸惑いに満ちていた。それでも龍郭院は俺に意志を伝えようとしてきている。
内藤を同席させていたら、どんな反応をしただろうとか、ふと思い、首を振った。
恐らく、何らかの強い意志が得られただろうと想像するに任せ、俺の意志を吐く。

「ダリアには死んで貰う。それが俺とダリアにとっての最善だ。もちろん、人類側にもそれが一番都合が良い」

龍郭院は唇を噛んだ。当然、モンスターであるダリアには死んで貰うのが一番正しいのだ。それでも感情が折り合いをつけられていないらしい。

「お茶とケーキをご馳走になりましたわ」
「そうだな。俺たちは口をつけてはいなかったが」
「話すことが楽しいのだと、彼女は仰ってましたわ」
「ああ、元気な女だった」
「人と寸分違わぬ外見をして、感情を露わにしている彼女を……。寂しかったと貴方の手を取った彼女を、タカぼん様は殺すのですか？」

俺は頷いた。それがしなければならないことだったからだ。

「そうするよ。そうすることが結果的にダリアの望みに一番沿う。あいつを終わらせてやれる」
「……、それですわ」

龍郭院はよくわからないものを見る目で俺を見た。

「貴方たちは、いえ、ダリアとタカぼん様は、一体何を見ていらっしゃるの？」

そもそも、元来敵である筈のモンスターと交渉など始めなければこんな感情など抱かなかったのですわ、と龍郭院は言った。

壱百伍拾壱／

一層のエントランスにたどり着くと、≪法の剣≫の探索部隊がキャンプを張っていた。計測機材や研究者なども連れてきているようである。

「えらく大荷物だな」

声を掛けると、指揮をとっていた白背広がこちらへと顔を向けてくる。糸目の青年だ。彼の顔を見て龍郭院が、あ、と声を上げた。

「えっと、あのときの……」

「はい、どこかでお会いしましたか？」

「確か、与一だったか？　【関東八神弓】の」

「那須与一と言います。ええ、タカぼん様と一対一で話すのは初めてでしたね」

白背広の男、実にハンサムでニコニコと糸目を細めながら俺を見る。

俺もにっこりと笑みを見せてやると、おやおやと白背広が糸目の隙間から禍々しい色を見せて嘲りを浮かべる。

「相変わらずのハンサムぶりで。いい加減、武満さんもこんな男、

切ればいいのに」
「お前に言われたくはないがな。それで、研究者まで連れて、一階地下の探索か？」
「そういえば、ここ二日ばかりは≪法の剣（ウチ）≫に来ませんね。どうしたんですか？」
「猫の方からお前らに利益は入ってるはずだが」

あからさまに話を逸らされ、首を傾げる。そうして、隅の方で、白い布を顔に掛けられた、上半身だけの黒服を見つけた。
眉を顰める。≪法の剣≫に死人が出ていた。それにあの死に様は、一階層で一番危険な蛇に挑んだとしか思えない死に様だ。
那須はまずいものを見られたというように俺の視線を身体で塞ぐ。

「傷は付けられたんですよ、傷は。致命傷は難しかったですがね。それに他世界出身の黒背広が死んだところで痛くはありません」
「しかし、浅はかだな。どうだ？　俺が危険だと言った意味を理解できたのか？」

へ、と龍郭院が背後で首を傾げた。俺の視線の動きから≪法の剣≫の黒服に死者がでたことは理解できたが、それが何を意味しているのかまでは、龍郭院も察してはいない。
俺は先ほど見た、下半身がまるごと消失している黒服を思い出しながら、それを口にした。

「これは武満の意志か？　いや、あいつに限ってそれはないか。奴は組織のトップだ。確実な旨味がなければ……。
いや、そうか。武満め」
「これは私たちの独断専行ですよ。変な邪推は止めて頂きたい。そもそも、」

那須が俺の思考に口を挟もうとしたところで、三号がぬっと俺と那須の間に顔を突き出す。見れば、エレベーターの方に指を突き出していた。
首を傾げれば、二号も傍らに櫓を置き、エレベーターの前で待っている。
ふと、那須の顔を見れば、奴は糸目の中に焦燥と殺意を見せて俺を睨んでいる。

（ここで那須を追い詰めても、良い結果は出ないか）

俺は表情を軽くし、嘲るように唇を歪める。
しかし、武満め。やはり俺に全てを話してはいないな。いや、俺が訪れなかった二日の間にか？

「鹿島といい、雨宮といい、武満の前でないとお前らは本当に自由だな」
「はい、独断専行ですよ、独断専行。私たちとて木石ではないのですから、自身で考えますとも」

誤魔化し切れていないだろうに、それでも那須は一階層の蛇に挑み、敗北した事実を口にはしない。一階層で黒服をああいった手法で殺せるのは、蛇だけだというのにこいつらは。
俺に追求されても言質さえ取られなければどうとでもなるという確信があるのだろう。
それとも、俺が真意を探るまでの間に、成果を出せる心算でもあるのか。
那須に背を向け、エレベーターへと向かう。龍郭院がよくわかっていない顔をしながら話しかけてくる。

「タカぼん様。≪法の剣≫でも死人を出すみたいですわね」

「それでも、それだけの危険を冒す価値があると思っているみたいだな。あいつらは」
「それにしても」
「それにしても？」

龍郭院は理解できない表情で彼らを見た。

「タカぼん様も≪法の剣≫も、塔の攻略に、それ以外のものを見ているような気がしてなりませんわ。貴方たちは、最上層以外に何を見ていらっしゃるの？」
「さて、な。俺たちは誰もこれ以上負けたくないだけだが……。それ以外を考えている奴の考えまではわからないよ」

【関東八神弓】那須与一は俺たちがエレベーターに乗るまで、じいっと背後から視線を浴びせていた。

壱百伍拾弐／

「やっほ、待ってたわよ」

三層に着くと、またダリアが待っていた。入り口の壁に背を預け、こちらへと手を振ってくる。
しかしその傍らにカリギュルラはいない。フェアリーも、コンプトゥスも、バルヘロナもいなかった。
御伽の国のようだった樹林は、今はもう生物の気配のない、毒の森と化していた。
彼女は寂しそうに、それでも満足そうに微笑む。

「ねぇ、タカぼん」

その笑みは、死者の笑みだ。

「貴方は、連理貴久は、機械帝国を憎みますか？」

その問いは、きっと彼女へと俺がとれる最後の選択なのだと、表情で気づく。だから、俺は答えなければならず。

「ああ、憎むよ。俺は、いや、召喚された全員は、自分の世界で生きるべきだ。

意志に関係なく、連れてこられたなら、その行為を恨まなければならない。なぜなら、これは、ただの拉致に他ならないからだ。

世界の問題は、その世界の住民が解決するべきであって、部外者の手を借りるなんてズルは許されてはならない。

だから、俺は機械帝国を憎むし、恨む。そうして、このくだらない物語を終わらせる」

俺の答えを聞いたダリアが満面に笑みを浮かべた。

「よし、それが聞きたかった。私は貴方に賭けるわ。タカぼん」

頷く。それが、彼女の選択なら、俺に彼女の意志を止める事などできない。それも、彼女に死を望んでいるこの俺がだ。

「意外と繊細なのね」

「ダリア。俺は、信頼に値する人間だったか？」

「それを聞くのは野暮というものよ」

そうだな、と笑う。そうして彼女は立ち上がり、付いてくるようにと言った。

今度は、彼女が手を差し出してくることはせず。
雰囲気を悟った龍郭院と肉人形たちは静かに俺の後をついてくるのだった。

壱百伍拾参／

「まず先に渡しておくわね」

ボス部屋にたどり着いたダリアが差し出してきたのは、二つの小さな指輪だった。

「【ティンダロスの両眼】、私がウェンディサーク様に頂いた、魔王の世界に二つしかない指輪よ。
亜空間に物を納める物品収納の魔法が掛かってて、重量を無視してアイテムをほぼ無限に収納できるわ」

生物や、巨大すぎる建築物は収納できないけれどと彼女は言い、そうして小さな箱に入ったそれを俺に差し出してくる。

「端末に接続すれば中のアイテムが見られるから、中の物は貴方が好きに使ってちょうだい」
「ああ、わかった。何から何まですまんな」
「いいのよ。それに言っておくけれど、階層一つのアイテムや道具を占有しただけでは何も優越できないわ。わかっているわよね？」

指輪を三号に預け、頷く。如何に力を持っていようと、その力を発揮する場所が正しくなければ、敗者になるのがこの都市だ。

「それで、貴方が私に聞きたいことは何？」

「魔王軍の勝利条件。それを聞かせてくれ」

ダリアは、宙を見上げ、そうしてから首を振った。

「それは、タカぼんが知るにはまだ早い。貴方が自力で気づくのではなく、私が貴方に教えたとしたら、貴方はきっと機械帝国側から圧力を掛けられるでしょう」

「そういう内容か。俺が今知ることすら問題なのか」

尻の下の龍郭院が、俺の憤りに反応して微かに身じろいだが、気にせず話を続ける。

「ならば、今の俺にですらどうにかできる問題だということか？」

「いえ、今の貴方には達成することはできない。それに、それを行うには道具が必要よ。この都市には、一つしかないけれど。だからそれを奪われてはダメ。壊されてもダメ。それは魔王軍の勝利条件であるけれど、同時に、貴方が機械帝国を憎むなら、きっと必要になる道具だろうから」

「それはなんだ？　魔剣か？　聖剣か？」

俺の問いに対する返答はせず、彼女はそっと指を天井へ向け、そうしてから息を吐いた。

「勝利条件について、私が教えられるのはこれだけよ。だから貴方は、貴方ができる全力をしてちょうだい。今まで最善手を打ってきた貴方ならきっと解決できるだろうから」

「何故、そんなにも俺を信頼する？」

ダリアの信頼に満ちた言葉が不可解だった。

「他には、ああ、そうね。スキルの話があったわね」

俺の問いには何も答えず、ダリアは思い出すようにそれを言う。

俺には、頼む、としか言えなかった。

自らの死を覚悟をしている人物に、それ以上を求めるのは、如何なる人間にさえ不可能なのだ。

壱百伍拾肆～壱百伍拾陸

壱百伍拾肆／

スキルは、と話し出したダリアは俺が座る龍郭院を指さした。

「その椅子の世界には基本的に存在しない概念ね。そもそもスキルは第七世代以降の魔王や勇者が存在する世界では必要のないものだから」

「待て、俺の世界でもそんな概念はなかった。いや、今、第七世代以降と言ったか？」

「そうよ。第七世代以降の魔王や勇者が活躍する世代では、明確に魔王や勇者という概念が出ることはないし、そもそも第七世代以降は観測する内容が違う」

観測……。あの夢で魔王から聞かされた概念だ。

勇者と魔王の闘争を管理する者たち、【デバイス】と観測され続ける物語たち。勇者と魔王の闘争。

そして、考える。スキルを必要としない世界というものを、スキルを必要とする状況というものを。

「それは、第七世代魔王以降の世界では戦闘行為を必要としないということだろうか？」

「そうね。基本的にそういう考えらしいわよ。余りにスキルは即物的すぎる。戦闘以外の観察を行うなら、排除しておくに限る概念だわ」

確かにスキルという存在は、今俺たちがいるように、命を急速に消失させたい世界でなら有効な手段だが、長い時間を掛けて結果を

出すような世界の場合、害悪にしかならない。
体感して解ったが、スキルは事象や人間の思考を歪めるものだ。
龍郭院然り、小山田然り、そして内藤然り。
人々に健全な社会を営ませるには、余りに簡単にスキルは他人に干渉できてしまう。
もし、生まれついて強力なスキルが与えられる状況があるならそれは、知恵の足りない者に拳銃を持たせるような社会と同じだ。
そしてその結果、争いは簡単に起こるだろう。
誰が管理しているのかはわからないが、戦闘や戦争以外の要素の観察が目的ならばスキルなどない方が観測は容易いに違いない。

「しかし、ダリアは何故そんなことを知っている？」
「我が魔王は文明破壊者としての役割を与えられ、数々の世界を蹂躙してきた。
なら、敵対する世界についての調査は当然でしょう？」
「なら世界を渡っていく過程で、他の勇者を屠った事はあるのか？」
「いいえ、ウェンディサーク様も観測されていることに変わりはないから、この世界に来て、勇者アーク・ソシエトと戦うまではただの文明破壊者であった」
「……この世界が、ウェンディサークにとっての墓場だったわけか」

俺の感慨にダリアは唇を歪める。

「それなら余程よかったでしょうにね。それはそれとしてスキルの説明に戻るわよ。
貴方たちのように、スキルの存在しない世界から来たものは、スキルの存在する世界の法則に支配される。
そうね、貴方でもわかりやすい内容なら、ああ、異世界召喚ってのは聞いたことあるかしら？」
「娯楽の類にあったな。異世界に少年少女が連れてこられて、力に

目覚め、冒険をする。そんな内容だ」

「貴方たちの現状はそれと似たようなものね。とはいっても、そういった娯楽小説と違い、召喚された人物の中には力を持てない者もいるけれど」

ダリアは指をふり、身振りを交えながら話を続けていく。

「娯楽小説と違うのは、力は、目覚めるのではなく、その者が生まれ持った才能だという事。本来持っているスキルに掛けられた制限が、その世界に来て解かれるようなもの、と言えばわかるかしら？

その人物の仕様をその世界専用に変換（コンヴァート）する、みたいな？　ええと、そうね。わかりやすくいうなら、ほのぼの系現代ジャンルの主人公のセーブデータを、剣と魔法のＲＰＧゲームに無理矢理パラメーターを適応させて遊ぶようなものかしら」

その例えは、あまりにこの世界の現状に似すぎていた。戦闘とは無縁の世界から、人々を連れてくる。

いや、と思い直す。

「武満のところはどうなんだ？　スキルについては？」

「武満法行の世界ね。ああ、あの世界は基本的に脳筋世界だから。第三世代魔王の活動世界だけど、肉体強化のパッシブ、ああ、つまり、肉体に常に作用（パッシブ）するスキル以外は発展しなかった筈よ。

あとは個々人が持つ技能、ＳＰを消費して放つアクティブスキルが、限られた人間が持つ攻撃スキルとして認知されているぐらいかしら？」

その説明に疑問を覚える。戦闘力が目的だとしても、何故わざわざそのような制限のある世界から呼び寄せる必要がある？

わかりやすく目立たせないことで俺たちに複数世界からの召喚だ

と気づかれることを隠していた？　そんなわけがない。
ならば地名すら似通った場所から召喚すれば良いだろう。

「待て、何故スキルが制限されている世界からの召喚を行うんだ？」

ダリアは宙を見上げ、そうしてから諦めたようにため息をついた。

「勝利条件に抵触する。話すことはできないわ」
「勝利条件には出身世界も関係しているのか？」

いいえ、と首を振るダリア。

「わかっていると思うけれど、必然として集められた銀稜台世界以外の人間は、全て機械帝国の意向が働いているわ。
そこは間違えないで」
「つまり俺たちは、ゲームの勝利条件を無意識に達成させない？
それとも敗北条件に触れないから呼ばれた？
いや、ゲームの基盤を力業で壊せないから？　無意識にルールの詳細を把握できないために？　どんな可能性が他にある？」
「基本として、銀稜台世界だけでこの世界は成立する。今はそれだけでいいわ。
いずれ貴方はきちんとこの世界のルールを把握できる筈よ」

頷きを返せば、ダリアは、説明をしている間に三号が入れた紅茶に口をつけ、微笑んだ。

「あら、おいしいじゃない。毒入りじゃない紅茶も乙なものね」
「……お前は、毒を飲ませようとしたのか？」
「だから無効化の指輪を渡したでしょう。それに、知っていて？
毒っていうのは、それはそれで良い味なのよ」

「甘い甘い毒か」
「そう、甘く、淫らに誘うから毒は毒たり得る。危険色があんなにも華々しいのは好奇心に満ちた生き物を誘っているから」
だから気をつけなさい、とダリアは言う。
「危険すぎる選択肢ほど、その先に甘い報酬を用意しているわ。タカぼんが、決定的な何かを掴もうとする一瞬を、敵は逃さない」
「わかっているよ」
その為の、内藤なのだと俺は内心で呟いた。その一瞬の後の空隙を埋めるためにあれは必要だった。
手品を成立させる一手のためにこそ、内藤は必要なのだ。
もちろん、それ以外の因子としての役割を期待していないわけではないが。
「それで聞きたいが、俺の世界にもスキルという概念はなかった。第三世代、第二世代の魔王がぞろぞろ出ていたのにも関わらずに」
「それは……。なんででしょう？」
ダリアは小首を傾げた。悩んでいる様子を見れば、本当にわかっていないようだった。
「お前でもわからないのか？」
「私は世界選定に関わっていないし、そもそも同じ世界に魔王や勇者が何体もいる状況を私は知らないのよね。
基本的に、観測される物語ひとつにつき、魔王と勇者というのは対応する一体一体が普通なわけ。
だから同じ世界に何体も魔王や勇者がいたら正確な観測ができなくなる。最悪、対応していない勇者に魔王が殺される可能性すらあ

るのだし」

そもそも、俺が魔王を倒していたり、比翼心の配下として収まってしまった状況は、観測の埒外の筈だった。

誰が観測しているのかはわからないが。

「だから貴方の世界もまた何かの例外で、機械帝国にもなんらかの意図があるのでしょう。

それも貴方がこの世界を知る上でいずれ明らかになることだと思う」

「そうか」

そうして、と彼女は言った。

「スキルについて話を戻しましょう。スキルは元々、その人物が持つ才能を可視化して、鍛錬、発揮させるためのものよ。

端末に表示できるステータスで可視化できる以上、無意識、意識的にかかわらず既に何らかの効果を発揮している可能性があるわ。

あとは、そうね。幸村都子の【甲斐の人食い虎】のように元々持っていた技術がスキルとして現出する場合もあるわね。名称は元々の世界で呼ばれていた二つ名などが付く場合が多いわ。だからそのスキルの内容が知りたければその人物の経歴を知ると良いでしょう」

その説明に首を傾げた。俺の魅了の魔眼はともかく、龍郭院のカリスマは本人の努力によって発現している能力のように思う。

「……意味があるのかそれは？　それでなくても発揮はできるんだろう？　俺の下の龍郭院のカリスマのように、もともとは本人が持っているものの筈だ」

ああ、とダリアが頷いた。

「説明が足りなかったわね。基本的にスキルの効果はレジストされない限り、対象に何らかの効果を及ぼすわ。

貴方たちの世界であったように、鈍いから気づかない、頭が悪いから気づけないとかそういう事象を通り越して、必ず心や体に作用を及ぼす。

ええ、【鈍感】【馬鹿】等のスキルを持っていない限り、その椅子の持つカリスマはそれを見た人間の心に、作用し、清涼のような爽やかさと共に、威厳を伝えるでしょう」

それは、と絶句する。

同時に、内藤が常に放つ悪魔的な魅力についても今更ながらに理解を得るのだった。

壱百伍拾伍／

俺の不安を勘違いしたのか、安心しなさいとダリアは言う。

「とはいえ、【カリスマ（大）】や複合スキルである【覇者のオーラ】等のスキルでもなければオーラだけで他者を従えることは不可能よ。カリスマは貴方のレジストにも引っかかっていないでしょう？」

先ほどから首を傾げ、疑問に満ちた龍郭院の尻を揉みほぐしながら言葉を聞く、何か言いたそうな目で見られるものの気にはしない。ただの手慰みだ。

「アクティブとパッシブの違いについてはどうなんだ？」

「アクティブは任意発動。パッシブは自動発動かしら？　パッシブは本人の意志があれば止められるわね。
　ただし、そのスキルがどうやって発動しているかを認識していなければならないのだけれど」
　俺の真下の龍郭院を見る。
「龍郭院、お前は、自分がスキルを発動している自覚はあるか？」
「私ですの？　いえ、その正直、そういったものを初めて聞いたので、どうやって発動しているかはわからないのですが」
　困惑した龍郭院にダリアが答える。
「そりゃそうね。カリスマは基本的に生まれの高貴な人物が相応の教育を受けて初めて発揮されるスキルよ。
　それに、どうしても魂と心に力が必要だから、強固な精神性を持つ人間にしか持つことができない。所持条件が発動条件になっている以上は、基本的に自分でオンオフを自在に切り替えられる類のスキルではないわ」
「例外ばかりだな」
「そもそもパッシブスキルはその人間が持つ精神性や魂、それに鍛錬などで得た感覚を自動で外部に発現しているものでしかないからね。
　ああ、でも発動している感覚さえ掴んでしまえば、止めることは簡単よ。やり過ぎるとその感覚を忘れてしまってスキルが消失する可能性があるから勧めはしないし、そもそも止める意味のないスキルでもある。
　それに、パッシブスキルは基本的に有用なものよ。【鈍感】や【馬鹿】ですら、メリットとして感情操作系のスキルに耐性を持つし、まぁデメリットもその分、高いけれど。有害だけってのはそうない

わ」

そこでダリアはにやりと唇を歪める。

「【経験値非効率】とかは有害だけのスキルね」

……、額を抑えた。それは塔の攻略に際しての、俺の一番の悩みの種だった。

「解除方法は？」

「【経験値効率】のスキルを取得して相殺するか、【経験値効率】のスキルを持つアイテムを装備すればいいんじゃない？　寡聞にして、取得方法もそれを搭載するアイテムがあるかも私は聞いたことがないけれど」

「スキル自体はあるみたいな言い方だな」

ええ、とダリアは頷いた。龍郭院が不思議そうな顔で俺を見上げ、

「【経験値非効率】というのはタカぼん様のスキルですの？」

「そうよ、椅子。【経験値非効率】を付与するアイテムはたくさんあるけれど、自前で持ってる人間なんてのは初めて見たわ。

というか、それを持ちながら、貴方が話していた実績を立てたなんてのは有り得ないから、こちらに来てから発現したスキルで間違いないんでしょう。

他のスキルも同様。その人物が本来持つ才能を極端に低下させる【レベル制限】のスキルだって私の世界じゃ罪人拘束用に開発された拘束スキルだし」

いや、これは、と言い出そうとしたところで、過去の言葉を思い出した。あれは、確か心が言った言葉だ。

――暴走しないために【経験値非効率】【レベル制限】なんて馬鹿げた機能まで実装して、通常のユニットならまともに頭脳が働かないような状態でよくそこまで……

額を抑えた。あの女がそれを話した、あの光景を思い出すことは苦痛に過ぎる。

それでも、あの女が言った言葉の意味を口に乗せた。

「いや、自前のスキルらしい。……、そうか。認識する方法がないだけで、俺の世界にスキルはあったのか」

「まぁ、自分で納得できてるようならいいけれど。酷い顔よ？」

「ああ、うん。大丈夫だ」

息を吐く。ダリアは俺を心配そうに見ながらも言葉は続けていく。

「【経験値効率】は、特殊な才能を持つ人物が発現するスキルだから、それを他者に与える方法を私は知らないわ。

付与するアイテムも作られたなんて話は聞いたことはないし。ええ、それに、貴方には【レベル制限】があるから。【経験値非効率】だけを打ち消しても意味はないでしょう」

「そうか……。いや、どうにもならないことだけ理解できた。なるほど、ありがとう」

「お礼を言われるようなことでもないわよ。それじゃあ、次はアクティブスキルについてでいいかしら？」

頷き。説明を待つ。

ダリアが紅茶のカップに口を付け、口を開いた。

壱百伍拾陸／

「といってもこれらは説明する必要はないわね。パッシブと同じく技術や鍛錬で取得できるスキルよ」
「任意で発動できると聞いたな。あれは、樹林の王剣のものと同じか？」
「ええ。あれはアクティブスキルね。そうそう、装備にもスキルがあるわ。貴方たちにあげた指輪の【完全毒無効】とかパッシブスキルよ」
「私のニトロ搭載草履やシューズもですの？」

龍郭院の質問にダリアが首を振る。

「ああ、それはバッテリー駆動ね。だから、装備の持っているただの機能でしかないわ。
スキルと機構の違いは、まぁ、あんまりないんだけど。アクティブスキルっていうのは、基本的に所有者のＳＰ、精神力を消耗して発動するわ。だから使いすぎると使用者は昏倒する。気をつけてね。
あとの違いは魔法的な方法で付与されているものが多いってところかしら？」
「魔法的？　例えば、どんなものだ？」
「刻印とか、作成時に魔力が込められているとか、そんな感じだけど、まぁ基本的にＳＰを消費するって考えればいいわよ。これに関してはバッテリー駆動かＳＰ駆動かの違いでしかないし」
「できることが違うとかは？」
「”毒を無効化”と”毒に掛かった状態を常に解毒し続ける”、これの違いを問うようなものよそれ」

そうか、と息を吐く。

「いや、ありがとう。大体理解できてきた」
「そ？　それならいいんだけれど」
さて、とダリアは手を差し出してくる。
「お別れね。最後に握手しましょう」
黒い手袋に包まれた、細く、美しい手。
「ああ、そうだな」
握り返す。
人外の手は温かく、そしてどこか哀しかった。今からこいつは――
「二度は聞かないって思ったけど。聞いていい？」
「ああ、なんなりと」
「機械帝国を、憎んでる？」
その言葉に、俺は目を閉じ、そうしてからゆっくりと頷いた。
「俺はここに連れてこられた境遇を恨んでるよ。それでいいか？」
ダリアはゆっくりと頷いた。
「それでいいわ。それと、誓って貰っていい？
貴方は、けして勝利を諦めないと。敗北した貴方にそれを言うのは酷だとわかっているけれど。
誓って欲しい」
敗北者が、敗北を背負うと決めた人間が、勝利を誓うのは難しい。

それでも、目の前の人物の期待には応えなければならない。
俺は、ダリアに俺のために死んでくれることを願ったのだ。そうして、その願いを受け入れた人物の願いを無碍にするのは許されることではない。
それでも、俺は、
「それは、確約できない。
俺は敗北者だ。既に負けた人間だ。だから、安易にそれは誓うことはできない。
だが」
「だが？」
「お前が、ダリアが、託してくれたものを汚すような真似は絶対にしない。それを誓う。
そして、必ず」
勇者【アーク・ソシエト】を殺す、と俺は言葉を連ねた。
ダリアは、頷いた。そうして、砕くほどの力は込めず、それでも俺の手を強く握りしめる。
「それでいいわ。それでいい。
それさえやってくれるのなら、私はけして、恨まない」
執念と憎悪と、切実な願いが、言葉には込められていた。
強く、強く握りしめられる。
「最後に聞いていいか？」
「うん？　いいわよ。アイテムの取得方法？　施設の利用方法？
さぁ、好きに聞きなさいな」
「最後まで疑問だったんだ」

それは、俺が抱いた当然の疑問だ。
何故、ダリアは俺と交渉の席を持ってくれた。
何故最初から好意的だった。何故、これだけのことをしてくれた。
そも、ＩＤさえ渡せば十分な筈だったのに、

「何故、俺を選んだ？」

俺の言葉に、ダリアの唇が止まる。そうして、彼女は俺の手を振り払う。

「おしまいッ！」
「あ、おい」

ほんの少し頬を赤く染めたダリアは後ろを向くと、それきりだった。こちらへ振り向こうとはしない。
龍郭院の上から立ち上がり、真意を問いただそうとするも、

「タカぼん、ティンダロスの両眼と肉人形を借りていいかしら？」

ダリアの言葉で話しかける機を奪われる。
しばし、悩み。しかし、頷くしかなかった。これだけの事をした相手だ。もう、罠はないだろう。

「二号。行け」

二号に先ほど譲られた指輪を渡し、ダリアの元へと歩かせる。立ち上がった龍郭院が、何か言いたそうに俺を見て、そうして俯いた。
ああ、わかってるよ。ダリアが望んでいることなんてわかっているさ。

「そんなに時間は掛からないわ。部屋の外でお茶でも飲んでいて」

そうしてダリアは俺たちへと、退室を促し、俺たちは、そっと部屋を出るのだった。

去り際に、少しだけ声が聞こえた気がした。

『貴方に、ええ、たった数日でここまでこれた貴方だからこそ託したいと思ったのよ。

ええ、好きよ。タカぼん。命を捧げようと思う程度に愛しているわ』

振り返っても、ダリアは背後を向いたままだった。そうして、俺たちはダリアの部屋を出る。

一時間後、ティンダロスの両眼を手に、二号は部屋の中から出てきた。

指輪型の倉庫アイテムの中には、【毒蛾の女王】の肉体が、部位毎に分けられ、納められていた。

壱百伍拾漆～壱百伍拾玖

壱百伍拾漆／

「タカぼん様。ダリアさんのことですけれど」
「言うな。それより、これから四階層だからな。絶対に前に出るなよ」
「は、はい。わかっておりますわ」

エレベーター内での会話だった。見上げれば、階層表示が三から四へと変わっていくところだった。
それでも、龍郭院の装備は、変わらずに胸を強調した形のドレスアーマーだ。そもそも龍郭院では、三層ですら苦戦以上の死闘になる。故に、四層へ行く際に装備を変更しても意味がないのだ。

「見ておくだけでも見ておく。フロアの様子次第じゃ新しい装備を作っておく必要もあるからな」
「ガスマスクのようにですの？」

頷けば、階層表示が四階層へと達したことを軽い音と共に伝えてきた。
フロアについたエレベーター特有の荷重を全身に受けながら、銃を構える。入った途端に、敵の集団が待ち構えていないとも限らなかった。
俺の前方に展開した肉人形が車輪付きのバリケードを盾のように構えたところで、エレベーターの扉が開く。
果たして、四階層には――

「……、何もありませんわね」

「そう、だな」

龍郭院が拍子抜けしたように呟いた。

エレベーターの中から見る四階層は、白色の電灯に照らされた、老舗の一流ホテルのような印象が拭えない、奇妙に調度の整ったフロアだった。

闇色の床や、額縁の掛かった壁を見ながら全身で感じ取るも、生き物の気配は感じ取れない。

まるで、ダリアが殺し尽くしたために、カプセル室以外、モンスターのいなくなった三層のような雰囲気だった。

指に嵌めた、死した三層モンスターの全てが納められたティンダロスの両眼のひとつを撫でる。

「よし、二号、先行して安全を確保しろ。敵の気配はないが気をつけろよ」

「タカぼん様、私は？」

「龍郭院は橇の傍にいろ。安全を確かめながら進むから、俺の前を歩け。殿（シンガリ）は俺がやる。三号は龍郭院の盾になれ」

敵がいないのを確認し、指示を出す。そして先行しようとした二号が四層フロアの床に足をつけた瞬間。

つぷん、と水に落ちるように二号の片足が膝まで床へと沈んだ。

驚愕の声を出す前に、冷静さを発揮し、即座に脅威を確認する。

「前方、来るぞッ！！」

見えるのは、二号の足が床へ沈んだと同時に、ロビーの奥から急速に迫ってくる、鮫らしき生き物の背びれ。

胴体らしきものは見えない。闇色の床に見える水面に沈んでいるのだ。それが、高速でエレベーター内にいる俺たちへと迫ってきて

いる。
片足で身体を支える二号が即座に足を引き抜こうとするものの、二号の足は、まるで水底から誰かが掴んでいるかのように動かない。

「三号、二号の足を断ち切れ！！」

判断は一瞬だった。このままでは迫る何かに全員が喰われる、と直感したのだ。
俺の言葉に従い、二号の背の創雷ゼウスを鞘から引き抜いた三号は躊躇無く、力任せに大剣を二号の沈んだ足へと叩き付ける。
同時に俺は背の始原の長銃を龍郭院へと投げ渡し、

「鮫が出てきたら撃ち落とせ！」
「わ、わかりましたわッ」

指示を与えながらも走り、懐から小瓶を取り出すと背を屈め、黒色の床へと指を触れないように瓶を突っ込み、液体を採取する。
採取が終わると同時に、エレベーターの開閉ボタンへと腕を叩き付けた。

「タカぼん様ッ、出てきましたわッ！！」

龍郭院が叫ぶ。閉まっていく扉の隙間から目を向ければ、大口を開ける巨大な黒色の鮫の口が見える。
龍郭院の持つ【始原の長銃】が火を噴くものの堪えた様子は全く見えない。
そして、扉の隙間に二号の足が引っかかっているため、エレベーターの扉は完全に閉まることができなかった。
歯を噛みしめる。逃げられない。

「三号ッ！！」

叫びに呼応して、三号が背から始原の長銃を引き抜いた。銃で足を吹き飛ばすのかと思えば、長銃を向けた先は、大口を開けて迫る鮫だ。

【【始原の長銃】搭載スキル【我、戦を革新せり（タネガシマ・レヴォリューション）】を発動します】

端末が、三号がスキルを発動させた事を俺へと教えてくる。

機械音を立てて、始原の長銃の外装が変化した。火縄銃のような形のそれが、銃口をガチガチカチカチと広げ、まるで筒のような大口径へ大口を開けながら変化する。火縄部分が内部からせり上げてきたパーツと融合し、回転弾倉（リボルバー）へと変貌する。

二秒も掛からずに、始原の長銃は変形を終えていた。

見間違いか。存在しない目で長銃を見た三号が、能面のような顔に唯一ある、肉だけの唇を奇妙につり上げた。

「タカぼん様。ま、間に合いませんわッ」

「糞ッ！　三号ッ！！」

闇の飛沫を上げ、鮫が水中からエレベーターの中の俺たちへと跳躍。

二号の足が挟まっているために扉は閉まっていない。この勢いなら鮫の巨躯は確実に金属扉と激突するだろう。扉は破砕され、エレベーターの中身は蹂躙される。

龍郭院が迫る鮫に悲鳴を上げた。

そんな中、俺は三号から目を離せなかった。

「お前、何を……」

三号は冷静に狙いを定めたように、引き金を引いた。
大口径の銃口から、精神力（ＳＰ）を燃料に超高速で射出された何か。俺の目では視認できないそれが発射された直後に、肉を貫き、蹂躙する音がフロアで響く。振り返れば、こちらへと飛翔していた鮫の顔面に巨大な穴が開いていた。
呆気に取られていれば、続けてカチリ、カチリ、と三号が引き金を引く音が耳へと届く。
銃口から轟音、反射的に耳を抑える。同時に鮫の前面に巨大な穴が二つ増え、その巨体の背後から肉と内臓らしきものが飛び散っていく。
それでもその巨躯の半分以上は健在だった。身体の多くを消し飛ばされ、生きてるのがおかしいぐらいだが、驚異的な生命力を内包しているのか、突進の威力を大分損ないながらも、内臓の尾を引いて、扉へと飛翔してくる。

「三号、やれッ！」

事態の全てに思考は回っていなかったが、反射的に声を上げていた。
俺の声に反応してか、それとも自分で判断したのか、引き金を連続で引く音が耳に届く。
轟音。俺の目前まで迫っていた鮫の巨体が超高速の何かに連続して撃ち抜かれ、吹き飛ばされる。そして肉片と内臓をまき散らしながら、エレベーターホールの壁へとぶつかり、バウンドし、闇色の地面へと墜落していった。
大半を消し飛ばされながらも残っていた巨体はずぶずぶと闇色の水へと飲み込まれていった。

「た、助かりましたの？」

腰を落とした龍郭院が長銃を片手に呟く。

「の、ようだな。それに、あの床はあの鮫のスキルか何かだったようだ。まだ断定はできないが」

見れば、鮫の死骸を飲み込んだ闇色の床は、するすると水を引くように消えていくところだった。

そうして闇が引いた先に、大理石のような色合いの、硬質の床が現れる。試しに龍郭院へ渡した長銃を取り上げ、床を叩いてみれば硬い感触を腕に返してきた。

「二号、足は大丈夫か？」

半ばまで創雷ゼウスの埋まった二号の足を観察し、治療可能なことを確認すると、三号を振り返る。

俺の指示を無視し、独断で鮫の殺害に成功した三号は、俺の指示を待たずに治療薬の類を用意しているところだった。

「お前は、……」

救急セット片手にこちらの指示を待つ三号に対して俺は何も言わず。

ただ、治療を始めるように顎で示した。

視界の隅では搭載スキルを発動させた始原の長銃が、思い出したように元の姿へと戻っていくところだった。

壱百伍拾捌／

車の運転をしながら背後を見る。

二号と三号は、武器を抱え、口だけの能面で黙ったままだった。

「龍郭院」

「はい？　なにかありましたか？　タカぼん様」

「やりたいことはあるか？」

へ、と助手席の龍郭院が声を上げた。そんなことを聞かれるとは思わなかったという声だった。

「えっと、どのようなことですの？」

「仕事だ。お前をただ遊ばせておくわけにもいかないからな」

「えっと、私は塔の探索担当では？」

「お前が探索を行うには、パラメーターが圧倒的に足りていない」

そうですわね、と龍郭院が頷いた。きちんと理屈を含めておけば、龍郭院は余計な背伸びをしない。内藤とは違うタイプの少女だった。

「えっと、これまでと同じようにタカぼん様について歩く、というのは？」

考えるも、それは少し無理だった。少し精力的に働く理由ができていたからだ。

「いや、少し俺も忙しい。教えながらというのは無理だろうな」

この立派な椅子を武満に見せつけるのも乙なものだが、今の≪法の剣≫は機械帝国と繋がっている。

無益な筈の一階層の蛇討伐に≪法の剣≫が動いているのがその証拠だ。

恐らく、機械帝国と繋がり、有益となる何かしらの情報を手に入

れたのだろう。奴らが自力で何かしら情報を入手したという可能性もなくはないが、それなら俺との交渉に使わない理由はない。

つまり俺に言えない決定的な何かの情報なのだ。俺がダリアとのつながりや、取得した三層ＩＤを隠したのと同じように。

現に彼らは俺に一切揺さぶりを掛けて来ていない。ならば武満は、俺がその情報を掴んでいない事を教えられているのだろう。

ダリアのように都市内を監視している何かに、俺がそれを知らないことを教えられたのだ。

故に≪法の剣≫の敷地内ならばともかく、武満の腹の中ともいえる執務室に龍郭院を連れて行くのは憚られた。

≪法の剣≫と≪支配の杖≫はお互いに殺し合いをしない契約をしているが、こちらが無力すぎた場合は反故にされる可能性もあるし、何より、俺と武満はお互いを対勇者用の盾だと考えてはいるが、殺せる状況があるなら、容赦なく殺害する程度には嫌ってもいる。

幸い、武満相手なら俺の、”人間を殺せない”という縛りは働かないしな。

「そう考えれば、龍郭院たちの戦力化も急務か」

「へ？　それは、そうでしょうけれど。

あの、塔探索とは別の意味でですの？」

怪訝な顔の龍郭院に頷けば、難しい顔をされる。当然だ。この少女が持っている情報で、塔探索以外に戦闘が起こる可能性は≪法の剣≫か≪カラミティ・ブルータス≫、つまり人間対人間の状況のみだからだ。

ああ、対機械帝国という可能性もあったか。しかし、それこそ悲鳴を上げるだろうから、そこまでは考えていないに違いない。

「それはそれとして、そうだな。しばらく馬場に付き合って、街の地理を覚えろ。

あと、ついでにいいから龍村のところに遊びに行っておけ」

その言葉に、任される予定の交渉事を思い出したのだろう。龍郭院は得心したように頷いた。

壱百伍拾玖／

任務名　貴重素材の入手？
依頼者　機械軍団第二軍団長
詳細　毒蛾の女王の脳髄をお願い……。
報酬　……、直接渡す。
特記事項【連理貴久が受けて……】

強化ガラスのケースに入れられた毒蛾の女王の脳髄を、軍司令部の依頼受付所で引き渡す。

馴染みのＡＩが愉快そうに声を上げた。

『流石デスな！　ＤＥＡＴＨ！　機械帝国の科学力さえあれば貴方たちのような貧弱人類だって勝てるのデェす！！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！』

「いいから黙れ。お前の声は癇に障る」

『ジーザァス。人間の癖に貴方は生意気ＤＥＡＴＨナぁ！！』

ＡＩの金切り声に足下で俺の裾を引っ張っていた少女がビクリと身体を震わせた。

ついでに二号と三号にひっついていた少年少女が一瞬動きをとめ、直後に気にせず、肉人形たちに纏わり付いていく。

遠くを見れば、慌ててこちらに保育士役の女性が走ってくるところだった。

目を離した隙に、というところなのだろう。

『さぁて、ＴＨＩＳＴＨＩＳ（コレコレ）、そこらのＣＨＩＬＤ（コドモ）よ。連理貴久から退くがよい。この人類に、高貴なる我が母から言葉があるのである』

いーッ、と俺の足下の少女が歯を剥いてＡＩを威嚇する。肉人形に絡みついている連中はわーわー言うだけで聞いていない。

ＡＩがスピーカーの向こう側でため息を付いたような気配がした。

『連理貴久』

「はいはい。ほら、ガキども。お迎えが来たから散れ散れ」

言えば、いやだー、とやだー、と合唱される。

ため息をついて、こちらへと走ってきた美人の保育士の女を見れば、

「す、すみません。タカぼんさん！」

「いいよ。ほら、飴玉やるから、これでこいつら釣れ」

「あ、は、はい。ありがとうございます。物資はまだなかなか増えてませんからいつも助かってます」

ぺこぺこ頭を下げる女の頭をいいからと上げさせる。

「いいから、君もいつも大変だろう？　これで美味いものでも食べて、きちんと精をつけてくれ。

ああ、ちゃんと同僚の分もあるから、みんなで行ってくるといい」

手を握って、軍司令部の食券を握らせれば、女の目が喜びに輝く。

そうしてそっと手を離した瞬間に、女の腰を抱き寄せ、瞳を合わ

せ、胸ポケットにすかさず、外の雑貨店で買えるそこそこ高価な化粧品を押し込んでやった。

「ああ、こっちは君だけに特別だ」

ぽーっと頬を赤らめた女の腰をそっと離す。

足下の少年少女がわー、と、タカぼん兄ちゃんまた女の人にちょっかい掛けてるー、と叫び。女がもうッ、と真っ赤になる。

それでも悪い気はしなかったのか、また保育所に来てくださいと、子供たちを纏めながら言うのだった。

去っていく女と子供たちを監視カメラで見ていたのか、ＡＩが不思議そうに聞いた。

『女にＴＨＩＮＧ（モノ）を渡していた、アレには何のイミがあったノカね』

「女は特別扱いされるととても喜ぶんだよ。職員と仲良くなって情報収集するための一環だ」

『交尾のためではＮＯ（ナイ）のか』

「それより、お前のその出鱈目な言葉遣いはどうにかならんのか？」

『失敬ナ、ＦＩＸにＦＩＸ（ヴァージョンアップ）を重ネ、今デハ我が輩。このようにＬＡＮＧＵＡＧＥ（ゲンゴ）はバリバリＰＥＲＦＥＣＴ（カンペキ）であるのコトよな』

会話するだけの機械にこれ以上、上等な機能があってもしょうがないかと諦める。

そうして目的を告げた。

「なら、報酬を貰おうか」

『ＹＥＳ（ウム）、ホレ』

ＡＩの言葉の後に、一瞬で風景が変わる。眼前にあった軍司令部の依頼受付所のカウンターが消失し、どこか暗闇の底のような風景

へと移り変わる。
一瞬で視界が変化したことに驚愕はしない。この現象を俺は知っている。あのときは寝ていたが、この世界に来るときも同じか、似た方法をとられたはずだった。

（召喚。いや、転移か？）

気を取り直して足を進める先には、ぽっかりと、上から明るく照らされたスペースがある。
そこには真っ白なテーブルと椅子が、周囲を暗闇に囲まれた空間に、ぽつりと寂しく配置してあるのだ。

「もう少し、歓迎しようという気にはならなかったのか？」

俺の声に、テーブルに着いていた、人形のような不自然な美貌を持った少女が顔を上げた。

「……ようこそ、連理貴久。……飲む？」

掲げられたのは、ティーポットとカップ。
無感動に首を振る。

「……なら」

少女が紙切れを俺に掲げ、言った。

「選ぶ……？」

壱百陸拾～壱百陸拾参

壱百陸拾／

「……安心して。貴方との会話が終わり次第、先ほど貴方がいた場所と時間に戻す」

椅子に座り、開口一番言われる。

「いきなりな挨拶だな。隠しておくべき情報じゃないのか？」

空色の髪に白銀の目、白衣の少女は人間に酷似している。
それでも、機械の印象は抜けていない。不自然さを所々に顕した生き物らしき何かだった。

「……貴方に隠す意味はない。話したところで私に不利などない。それに……要らぬ勘繰りをされても貴方の時間を奪うだけ……」

「そうかい」

立ち上がり、少女の傍まで歩く。
ぽかん、とこちらを見上げてくる少女の身体へと手を伸ばす。

「……何？」

（硬い。皮膚の下は正真正銘の機械か？　機械文明人、連れてこられた際のモニターで見た個体は完全な機械だったが）

皮膚すらなかった喋る発条仕掛けの生物を思い出す。
そうして目の前の、精巧な少女人形の皮膚を引っ張り、薄くなった部分に親指を押しつける。薄皮の向こう側にはシャフトや歯車の

感触。やはり、人間ではない。

「……触らないで――、え……？」

少女が手で俺の手を払おうとした瞬間、おもちゃのような音がお互いの耳に届く。

自身の腹を見た少女が、呆然と、ぽっかりと開いた口を俺に見せている。そうして、何故、とその唇が声のない軌跡を描いた。

ガラス玉のような目が機械音を立てて、俺を見上げている。

ため息と共に応えてやった。

「だって、お前は人間じゃないんだろう？」

腰から引き抜いた極北銃が少女の腹に風穴を空けていた。

椅子から少女を蹴り飛ばす。そうして倒れた身体に極北銃を撃ち続ける。

一バッテリー分の銃弾を撃ち尽くしたところでバッテリーを交換し、息を吐いた。

敵が人間でないなら、俺が遠慮する必要など全くない。俺を闘争に放り込みやがった屑の内の一人を殺せた事実に溜飲を下げる。

俺の安全？　帰る方法？　そんなものは次来る奴と交渉すればいいだけだ。

そうしてテーブルの上のポットとカップ、菓子をテーブルごと蹴り飛ばし、横倒しになったテーブルに腰を掛ける。

足下には先ほど少女が差し出してきた紙が落ちていた。

拾い、文面を読み上げる。

「成績優秀者には帰還の権利。好きな同族を呼び寄せる権利。都市内部の施設使用許可。特殊ＩＤ情報。特殊な武器の使用許可。武具強化エトセトラエトセトラ、進呈と。大判振る舞いだこと」

「……その機体は気に食わなかった？　人類が好むような外見設定の筈」

闇の奥からぞろぞろと白衣を着た、先ほどの人形に似た少女人形が歩いてくる。手には武器は持たず、徒手空拳だ。

機械帝国人を仕留められなかった事実に自然と舌打ちが漏れる。

極北銃を向ければ、

「……撃ちたかったら好きなだけ撃てばいい。でも、バッテリーがもったいないのでやめた方がいいと思う」

「無線で操っているのか？　お前の本体はどこにいる？」

「現機械帝国の首都の、私の私室だけど……？」

きょとん、とした顔で１０を越える少女人形が俺へと同時に応えたのだった。

壱百陸拾壱／

舌打ちをしながら、少女人形の一体を蹴り飛ばす。

「……どうして乱暴をするの？」

「椅子が欲しかっただけだ」

倒れた少女人形を引きずり起こし、背に座ろうとしたところで、背骨の金属部分が予想以上に硬い事に気づかされる。

仕方なしに仰向けに転ばせ、まだ柔らかい腹に腰を下ろした。少女人形に抵抗はない。

そんな俺の様子を、少女人形たちは無感動に見つめている。

「……タカぼんは同族の形をしたものに座るのが好き」
「お前が俺をタカぼんと呼ぶな」

俺の言葉に、きょとんとした顔で少女人形が動きを止める。

「呼びたかったら俺の前に、お前の本体が立て。それまでは連理貴久と呼べ」
「……わかった。タカぼん」

そう言った瞬間、極北銃が俺の前に立っていた少女人形の頭を消し飛ばしていた。
顔を顰めた少女人形の一体が口を開こうとしたところでその少女人形の頭を消し飛ばす。
また倒れた少女人形の傍らに立っていた個体が前に出てくる。

「……何をするの？」
「交渉の席にすら立っていない間抜けが俺をタカぼんと呼ぶな」
「……今、この人形にきちんと私の魂を入れた。私は本体と同じもの」

極北銃でその魂が入っていると抜かした個体を撃ち抜いた。倒れたその個体の傍に立っていた少女人形が前に出てくる。

「……壊れたら魂は自動転移する。無駄」
「化け物め」
「……貴方に言われたくない。精神性の怪物。悪魔の中立者」
「何の話だ？」

私の話、と少女人形の一体が床に落ちていた紙を拾い、俺へと差し出してくる。

極北銃を向ければ、面倒そうに少女は言った。

「これ以上壊されるのはこちらも不愉快。……余りやんちゃをすると都市の人間全員を皆殺しにする」

「殺害方法を教えろ」

言葉を続けようとした少女人形の額に極北銃を押しつけ、撃ち抜く。すかさず出てきた個体が言葉を続けていく。

「都市内の人間を纏めて殺す方法は……むぐ」

銃口を口の中に突っ込み、撃つ。口蓋から消し飛ばされた少女人形がこちらを無機質な目で見返し、機能を絶つ。

その少女人形の傍に立っていた個体が困惑したように言った。

「話を聞く気はないの？」

「あるよ。続けろ」

そうして、話しかけた少女人形は腹を消し飛ばされた。

少女人形の一体が無感情に手を上げれば、更に２０体ほど同型の少女人形が転移してくる。

「バッテリーが切れるまで打ち続ければいい」

「ああ、そうさせてもらう」

腰からぞろりとバッテリーパックの束を見せると、少女人形が困った顔で俺を見返した。

かくして少女人形は頭を消し飛ばされ、会話に対して銃声を返す交渉が始まる。

壱百陸拾弐／

「……つまり、貴方の世界の言葉で言うと。レンジでチン」

俺の腰の下で仰向けになっている少女人形が結論を言った。

周囲には少女人形の残骸が１００を超えて転がっている。

立っている個体はない、少女人形は、俺が座っている少女人形しか残っていない。

極北銃で白衣の少女人形の額を撫でてやると、不愉快そうに少女人形の眉が寄った。

「……私が壊されたらもう人形は出さない。貴方に交渉の窓口はなくなる」

「愚かな人類が戯れてやってるだけだ。主催の一人なら大目に見ろ」

「何故大目に見なければならない？　……貴方が困るはず」

「何故、俺が困るんだ？」

少女人形は、「連理貴久は理解不能……」と諦めたように言葉を零す。

俺は少女から聞いた話を纏めることにした。

「さて、なるほどな。都市上空の蓋を利用して、電子レンジの原理で都市ごと人間をチン、か」

「……そう。だから連理貴久は私との穏やかな会話を望む筈」

「だが、それは使えないだろう？　塔の中身はどうなる？」

「……貴方が到達した四階層以上はその程度でどうにかなるような生き物は入っていない。死ぬのは脆弱な人類のみ」

へぇ、と言葉を返す。確かに、四階層にあの鮫の同種がごろごろ

してると考えれば、電子レンジの原理では死なない、か？

「連続して使用すればどうなんだ？　一年ぐらい続けていれば死ぬんじゃないか？」

「……何故、貴方はこちらの用意した説明に、簡単に納得されてくれないの？」

頬を極北銃で突くと少女人形は気にもしないで言葉を続ける。

「だから脅しても無駄だと言う。……都市の殲滅機能は人類処分用に用意したもの」

「そうだな。それに、相手が塔に籠もってくれてるなら処分方法はいくらでもあるだろう。なんだ？　塔を消し飛ばせない理由でもあるのか？」

「理由はない。モンスター側は今回の件の協力者」

少女人形は素直に情報を吐いている。

「……私たちは共通して観測の終了を望んでいる。終わったものを終わらせることを望んでいる」

「犠牲はモンスターと人類に押しつけて、お前らは高みの見物か？」

「私たちは勝者。モンスターは敗北者。人類はただの生け贄。話を続ける」

少女人形は罪悪感の欠片も見せず会話を続けていく。

「モンスター側の勝利条件は勇者の殺害。機械帝国側の目的は魔王の殺害。

そこまでは貴方も掴んでいる筈。しかし、それだけではない。その事も貴方は掴んでいる」

「闘争が終了していないなら、勇者も魔王も生きて、いや、観測されている。そこまでは俺でも容易にたどり着ける結論だ」
「最初から勇者ありきで考えていた貴方は、少しおかしいけれど……」
「……俺は過去に勇者と魔王の闘争を経験している。状況が始まれば察せない方がおかしい」

少女人形の目を見る。人形は無機質な目で見返してくるだけだった。
どんな感情でこいつが話しているのかがわからない。舌打ちを我慢し、会話を重ねる。
そもそもが、格下だと思われる俺にここまでされて怒らない理由がわからなかった。
人形の破壊は、交渉を打ち切られるのも覚悟での暴挙だったというのに。
少女人形の唇が、弧を描いた。言葉も聞かないのに、背筋に悪寒が走る。

「私たちの勝利条件は――」
「待て。話すな」

銃口を押しつける。引き金に指をかける。
少女人形がにやりと嗤う。
直感で理解する。これを聞いてはならない。

「それでこそ、連理貴久」
「お前、何のために。俺を」

ダリアは何故、俺が勝利条件を聞くことを渋ったのか。
俺の勝利に賭けていたあの女が、断片すら話すことを嫌がったそ

れを何故、この少女は軽々と話そうとしたのか。
指先に力を入れるか迷う。交渉を打ち切るべきか。それとも踏み込むべきか。

（こいつとの交渉を俺は――）

壱百陸拾参／

交渉は、――続ける。
銃口を下ろす。尻の下の少女人形は、楽しげに言葉を続ける。

「貴方が賢明で良かった。ああ、報酬は先に用意した方がいい？」
「お前は何を俺にさせたい？　それに、あの先を聞いていたら俺はどうなっていた？」
「……機械帝国女王に処分されていた。唆された都市内の人類の誰かによって」
「俺には武力がある」
「……如何に力があろうとも、この閉鎖された都市で、多くの刺客から永遠に逃れ続けることはできない」

そうだな、と頷いた。道理だった。

「……貴方には、当分の間、都市内の施設の攻略に当たって貰いたい」

疲れたように俺は言葉を吐き出した。機械帝国女王、この言葉によって大体の構造が見えてきたからだ。
どうやら、機械帝国も一枚岩ではないらしい。

「それはそれでやることだ。そもそも、お前に協力するとは決めていない」
「わかってる。……でも」
少女人形は唇をつり上げ、嗤う。
「貴方はきっと私の元に来る。……絶対に。
ねぇ、……タカぼん」
極北銃が少女人形の顔を消し飛ばしていた。
俺の頬に機械の破片が飛んできて、傷を作る。
「……酷い」
「酷くない。タカぼんと呼んだら壊すと言っただろう」
暗闇のどこからか声が聞こえてくる。スピーカーでも設置しているのか。
「追って、依頼内容という形で指示を出す。依頼内容から私の望むことを推察して……、タカぼん」
反射的に極北銃を音の方向に撃ち込んだ。しかし、破壊の音は聞こえてこない。
音の先には暗黒だけが続いている。
「毒蛾の女王の報酬を聞きたい」
「次の召喚時に、俺の世界で俺の部下をやっていた吉備枯渇を呼び出せ。第二世代魔王【簒奪者】だと言えばわかるか？」
「……わかった。タカぼん」
「消し飛ばすぞ？」

「……、ふふ、ふふふふふ。
ふふふふふふふふふふふふ。あははッ。うふふふふ。
……できるものならやって、ね？　タカぼんタカぼん、タカぼんさん」

銃弾は撃たず、地面に唾を吐きかけた。そうして視界は変わり、軍司令部へと俺は戻される。

（機械帝国の化け物どもめ……）

壱百陸拾肆～壱百陸拾陸

壱百陸拾肆／

任務名　塔内部機密文書回収？
依頼者　機械帝国諜報部部長
詳細　塔三階層にある命令書【三層管理日誌】の回収をお願いします。
報酬　お好きなものをどうぞ。
特記事項【連理貴久にお願いします】

端末情報に目を落とし、目の前を見る。
先ほどの少女人形に呼ばれたのと同じ、暗黒の空間。
テーブルまで進み、席に着いた。
銃は抜かない。

『やぁ、よくここまで来たねぇ』

そこにいるのは、小さなネズミ型の機械だ。
光のようなものをカリカリと一生懸命食べていて、非常に可愛らしい。

『やぁやぁ、ようこそ連理貴久君。ディノメア・レインハートには割と酷いことをしてたみたいだが。
僕にはしないでくれよ？　気弱だからね』

コーヒーは飲むかい？　と、ネズミに聞かれたので頷く。

そうして、何もない空間に突如出現したカップに口を付け、ようやく言葉を吐いた。

「ディノメア、というのは？」

チチチ、と目の前のネズミがこちらへと小首を傾げる。これも本体ではないのだろう。

ネズミの腹についた、スピーカーから音が漏れていた。

「苦いだけの泥水だな」

『まずいのかい？　ああ、悪いが人類の味覚には興味がなくてね。それで、何か欲しいものはあるかい？

なんでも用意するよ。ちなみにディノメア・レインハートは第二軍の軍団長、機械帝国南方三十三州を束ねる伯爵閣下さ』

「第二軍で伯爵……。ああ、それはそれとして、そうだな、報酬は、勇者と魔王の最後について、嘘偽りなく、聞かせて貰おうか。

一番最初に俺たちが召喚された際の説明じゃあ、話さなかっただろう？　お前」

『おや、僕だと言ったかな？　連理貴久』

癪に触る言い方だった。唇を上げ、テーブルに肘を突く。

「バレバレだぞ。諜報部部長殿。お前の物言いは、俺へこの世界の説明をした連中とそっくりだ。

声音やスピーカーの形を変えたところで隠しようはない」

『やれやれ、まぁいいさ。さて報酬だったね。

勇者と魔王についてだが』

ネズミがカリカリと音を立てる。そうして諜報部部長は言った。

『クトゥンズハヴザスにて魔王と勇者は相打ち。ついでにその場へと赴いた全ての機械帝国諸将や魔族の将もまとめて、死亡』
「それで？」
『それで、とは？』

どうなったんだ、と問えば、ネズミは小首を傾げる。

『それで最後さ。それだけ。何もない。後は残党が立てこもった覇王の塔を破砕すればおしまい。
君たちには期待しているよ』
「……お前、名前は？」
『人類に名乗ったところで意味もない。
君は、君の仕事をすればいい。万事つつがなく。それでおしまいだ』

壱百陸拾伍／

第二軍軍団長、諜報部部長。
二人の人物との遭遇に際し、思うことを胸中で述べる。

（第二軍団長の方が与しやすい……）

感情でこちらを相手にする人種ほど交渉が容易いことはない。諜報部部長は、……。嘘は言わないが本当の事は何も明かさない腹づもりだろう。
≪法の剣≫や機械帝国女王に与している可能性もあった。それとも全ての陣営に良い顔をする類の人間か……。
端末を叩く。全ての評価は、あと一人の人物に会ってからだろう。
俺は、深呼吸をしてから、ＡＩに転移を行うように要請した。

任務名　会ってやろう。
依頼者　機械軍団第一軍団長
詳細　四層に入ったと聞いた。
武を誇る我と会う機会をくれてやろう。
ガハハハハハハハハ。
報酬　直接会ってくれてやろう。直接な。
特記事項【連理貴久、お前が来い】

絢爛豪華な光が目を焼く。目を開いた先は、軍司令部の廊下ではなく、巨大かつ、豪華な誰かの私室らしき場所。
全てが巨大で、まるで自身が巨人の王国に迷い込んだ気分にさせられる。
部屋の中央にある、三メートルの執務机らしきもの。それを見ながら、使用する人物の巨大さを想像した。
腰の極北銃には、手を掛けられない。今度ばかりは銃弾での攻撃は通じないだろう。
部屋からは、所有者の格が見えるからだ。上位者の私室であることは明白だ。
そんな人物を殺すには、極北銃では無意味にすぎる。
しかし、

（これは……、この人物との交渉が一番良いか？）

ふと、思い出すのは第二軍団長の嘲笑だ。あれの言葉を信じるわけではないが、直接会う人物の方が信頼は置ける。

（待て、いや、いや、いやいや、待て俺……）

……、そこで自身の思考がまずい方に寄っていることに気づく。
俺は、自身の安全を、交渉の根拠に据えようとしていた？
惰弱な……。連日の行動に疲れているのか俺は？

『待たせたか？　うん？　連理貴久君』

そんな俺の思索を妨害するように、巨大な足音と共に、扉が開く。
現われたのは、全身金属の塊、その造作は人と同じパーツを各所に配してはいるが、何よりも大きく、何よりも金属に満ちている。
全身に肉でできたパーツ一つないというのに、あの少女人形よりも自然で、雄大な、全長五メートルにも達しようかと言う、金属の種族だった。
俺は、緊張を表に出さないように気をつけ、口を開く。

「いや、待ってはいない。それより、客を立たせたままなのか？
お前は」

相手の反応を待てば、鐘を突くような甲高く、腹に響く声で返される。
見上げれば、眼球らしき二つのカメラが興味深そうに俺を見下ろしていた。

『ガハハハハハ、君はどこでもその所作なのかね？　ああ、悪かった。さぁ、かけたまえ』

振り返れば、機械文明人用の椅子とテーブル。そして、俺に会わせたのか、人間用の椅子と机が背後に用意してあった。
そして、傍らには、俺たちのサイズに合わせた、二体の給仕用らしき人形が立っている。

席に着けば、無言で一礼され、グラスに赤色の液体を注がれた。
『食前酒だよ。さぁ、飲みたまえよ。異界の勇者よ』
「ならば遠慮なく」
ワインだろうか。グラスに口を付け、眉をしかめる。
嫌に鉄臭い味のする飲み物だった。
『ふむ？　口に合わなかったかな。ははは、さぁ、話をしようじゃないか。まずは雑談といこうか。
クトゥンズハヴザスの由来を知ってるかね？　あれは――
そうして、料理が運ばれてくる。
巨大な金属皿に掛かった、巨大な蓋が空けられ――
「あ？」
「だ、助げげでて……」
料理と目があった。
先ほど口にした、懐かしい味に口元を抑える。ワインらしきものに目を向ける。
この味は覚えている。目の前の肉には見覚えがある。
記憶と味が直結した瞬間、俺は吼えていた。
「俺に、人間の血液を飲ませたのか。貴様ッ……」
そうして、憎悪を瞳に宿し、俺はそれを見上げた。
『ＧＡＨＧＡＨＡＨＡＨＡ、自己紹介を忘れていたな。
我、機械帝国第一軍団長、エンヴェルト・ライオネオ・ファイナ

ル。
お前たち、猿の国の世界をいずれ蹂躙するものぞ?』
「く、はッ。忘れていた。忘れていたぞ俺はッ!!」
手元のフォークを放り投げ、嘲笑するように、エンヴェルトを見上げる。
ワイングラスごと、〝アルコールの混じった人間の血液〟を地面へと蹴り飛ばし、テーブルへと足を乗せる。
そうして、俺の前に出された肉料理を前に、唇を歪めながら告げるのだ。
「お前たちは全てが全て俺の敵だったなぁ。下手に交渉などしようと思うから惑うのだ」
そうして、俺の前に出された料理に対して、懐かしさをもって俺は告げる。
「よう、久しぶりだな。我が姉よ。九凪渚だったか」
両腕と両足を切断され、自身の周囲に、実に彩り鮮やかに配置されたかつての俺の姉は、
「れ、れんりだがびざぁ……。おおまえのじじわざがぁあッ……!!」
呪わしい歌声を奏でながら、俺と感動の再会を果たすのだった。
壱百陸拾陸／

エンヴェルトは実に不思議そうに俺を見下ろしていた。

『貴様の敵だろうそれは？　我が美味く処理してやったのに何を怒る。

ほら、食べるが良い。我は最近貴様ら猿を食すことに凝っておってな。美味いぞ？

魂が啜り泣くとはこのことかのぅ』

「ぐぎゃぁあああああ。嫌だぁッ。嫌だぁッ。助けて！　だずげでぇえ」

巨大なフォークに胴体を突き刺された少年が絶望の表情で俺へと、手を伸ばし、助けを求める。

ため息を吐く。あれは、かつて連理貴久が支配していた日本の国民だ。

いや、と、エンヴェルトの皿に盛りつけられた人々へと目をやった。

血液のソースに塗れ、カラフルな野菜や、香草を添えられた人間たち。彼ら全てが、俺の世界の人々だった。

フォークを手に、九凪渚の頬を突く。

「死にたいか？　悪いが俺は、お前を救う気はないぞ？」

「だ、だずげるどいっだだろぅッ！　お、お前がが。だずげるとぢがっだから私は全てを譲ったんだぁッ！！」

確かに九凪グループは全て俺に譲られたが、それは全ての勝勢が決したからだ。

だから俺は、グループを全て譲らせることで、この姉が死んだことにしてやった。

俺が責任を持つのは、グループが譲られた直後の一時だけだ。その後は知らない。

「それは、お前がグループを譲ることについてだろう。その後については知らんな。
それより選べ。今楽に死ぬか。あとで苦しんで死ぬかを」

すすり泣きが聞こえる。それは目の前の女が流す涙だけでなく、エンヴェルトのテーブルの上の人間たちも流すものだ。
先の少年を足から丁寧に食べていたエンヴェルトが俺を見下ろし、つまらなそうに言った。

『なんだ、つまらん。こちらについては一言もないのか？　助けようとは思わないのか？　我の皿のは貴様が治めていた民だろうに。
指導者ならば何か言うことはないのか？』
「俺は既に統治者ではない。それに日本は民主主義の国だ。誰か一人が責任を負うような国ではないだろう？」

動揺を微塵も見せない俺に、エンヴェルトがつまらなそうだったが、気にはしない。俺は奴を楽しませるための行動をしない。

「まぁ、そうだな。強いて言うなら、内閣総理大臣辺りじゃないか？」
『ほぅ、こやつのことか？』

エンヴェルトが突き刺したフォークの先に、流石に口元が歪む。やりたい放題やってるなぁおい。
無様に泣きわめいている禿頭の老人は、内閣府の首長だった。

「れ、連理貴久君ッ！　た、助けてくれ！　貴様をまた日本の支配者としてうがぁあああ」

引き裂かれ、巨人の口に入っていく老人。俺はため息を吐く。見れば、エンヴェルトが俺の反応に気を良くしていた。

「そういえば、俺の世界は戦争状態にあると聞いたが」

『我らが貴様を召喚したからだろう。貴様が行方不明になったと各国代表に知られた時点で、貴様の世界の最大火力の一つである核ミサイルが日本国首都に発射された。合計十五発だそうだ。

それと、貴様が住んでいた土地。別府に四十発』

「それは知っている。それで、お前は何を望む？」

『それより、食べないのかね？　料理が冷めてしまうよ？』

舌打ちをする。九凪渚は俺を見上げ、泣き言をわめいている。

「治療して返してやれ。俺は人肉食は好かない」

『過去に食べたことがあるのに？　部下の家族の肉を戯れで』

機械の目から真意を覗くことはできない。機械の手は巧みに手元の人間を突き刺し、口元に運んでいる。

俺へと助けを求める声が、恨み言に変わっていく。

「必要だから行ったまでだ」

『饗しただろう？　たかが油の商談のために。赤子をその母親に調理させ、客人に振る舞ったそうじゃないか。実に心躍る猿だな君は』

「死んではいない。死なないように行った。治療も完璧に行った。後遺症すらない。何が言いたいんだ貴様は」

『いいやぁ。さてはて、君は一体どんな人種か。我は実に心が躍るなぁ。

よし、ならばその女の帰還と、ひとつ比べてみようじゃないか。連理貴久』

そう言って、巨人が指を鳴らし、一人の女が連れてこられた。
黒髪の、鋭い目の女。怜悧な雰囲気を宿した年若い全裸の女性。
無感情な光を宿し、俺たちの禍々しいディナーを見る彼女は、諦めたように「ようやく私の番ですか。物の怪」と言った。
俺へは顔すら向けない。憎悪を目に浮かべ、女性は機械文明人だけを見ている。

『お前の目の前の女の帰還か。こちらの五体満足な方か、選び給え。なぁ、連理貴久』

その少女を見て、俺は、目の前の九凪渚を見比べて、天を仰ぎ、
「悪い、九凪渚」と言った。
即断即決に姉の顔が、絶望に歪む。

「ま、まで。までぇ。やめろ、やめろ貴久ぁッ！！」
「俺の負けだ。報酬は、その女を貰い受けたい」
『理解した。連理貴久。我は貴様という人間を理解した。ＧＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ。よろしい、持って行き給え。貴様という人間の底が見えたぞ連理貴久』

エンヴェルト・ライオネオ・ファイナルは、確信した口調で言うのだ。

『貴様では武満法行にも勇者にも勝てないだろう。これは確定した事実である』

と。

壱百陸拾漆～壱百陸拾捌

壱百陸拾漆／

「約束ですよ。もう、誰も殺さないって。貴方はもう、そんなことをしなくても大丈夫です。だから、お願いします」

「それが、お前の頼み事なのか。蜜美、そんなことでいいのか？」

少年時代の連理貴久が、全ての敵を倒したのは、彼が中学を卒業しようとする年のことだった。

最も強大な兄との闘争を開始した彼は、数年を掛けて、強大な兄に抗いながら、弱い兄や姉を殺害し、力を蓄え、そうして、重工業や、兵器の生産を手がけていた兄、産学玲人（サンガクレイジ）の殺害に成功したのだ。

そうして、最後に姉である九凪渚を降伏させ、死亡した事にした。

一人だけ殺さなかったのは、九凪渚が助命を求めてきた以上に、黒霧蜜美が連理貴久に頼み込んだからに他ならない。

「自由になってもいいんだぞ？　お前を拾ったのは、その才が貴重だったからだ。

そして、俺は、もうお前がいなくても一人でなんとかできる力が手に入った。だったら」

「それ以上は言わないでください。私は貴久様の力になりたくて、全てを学んできたんです。だから、私の生き甲斐を取らないでください」

貴久はため息をついた。そうして、小さく苦笑を浮かべ、美しく育った少女の手を取った。

「お前は、変わらないな」

「変わりようがありません。私は貴方に全てを与えられた時から、貴方に全てを捧げる事を望んだのです。

だから、お願いします。もうご自身を傷つけるような真似はしないでください。貴方が悲しむ姿は見たくありません。

人を殺さなくても、貴方にはもう、何もかもができるんです。この国は、貴方のものです」

「お前は、本当に、愚かだ」

蜜美の頬を撫でながら、貴久は吐き捨てるように言った。

「お前が思う以上に俺は鬼畜外道の類だ。敵を殺して、悲しんだことなど一度もない」

「それでも、貴久様は心で泣いていました。だから、私はその涙を止めたい」

「俺はそんなに優しくないんだがな。それで、殺すな、か」

蜜美は、呟いた貴久を熱心に見ていた。その熱意に負けたように貴久は言った。

「わかった。お前の望みを叶えてやる。誰も死なない世界を作ってやるよ」

「はい？　誰も、死なない……。まさか、でも、あれは」

「そうだ。お前も知っての通り、連理の技術部門から、面白い理論が上がってきてたんだ。世界を革新させるだろう新しいエネルギー理論だったが、前に言ったとおり、あれはまだ人類には早すぎる玩具だ。

だからそれを使って面白い手品を見せてやろう。晴れてこの国の支配者になるだろう俺にならできる手品だ」

そうして、言葉の出ない黒霧蜜美の手を取りながら連理貴久は約束するのだ。

「約束しよう。これから俺は、一人たりとも殺さないと。
そして、お前が人死にが嫌いだと言うなら、誰も死なない世界を作ってやる。
日本限定でな」

そうして、その日より、連理貴久が日本の支配者を辞めるその時まで。

病死、事故、殺人、老衰、自殺、あらゆる死因が停止した。
それが彼の世界で『無死年間』と呼ばれる歪な日々だ。日本という土地で、あらゆる人間の死が観測されなくなった四年間である。

壱百陸拾捌／

ＮＡＭＥ：譲原九十九

ＨＰ　１０００／１０００
ＳＰ　１０００／１０００
腕力　２２０
硬度　２２０
俊敏　２２０
知能　２２０
運勢　２００

寄生【全解放】
武天【大黒天】を【支配】している。
【武天】全能力値を＋２００。
【六魔将】ＨＰ、ＳＰのパラメーターを増大させます。
【武天の能】全ての戦闘技能に関して、技能補正を最大限に付与します。

【武天の理】アクティブスキル使用時のＳＰ消費を半減させ、効果範囲を拡大させます。

能力

【千年に一人の天賦の才】：人類最高の資質を持っています。何者にもなれる人間。

【龍の血筋】：歴史を経た血筋に発現するスキルです。生まれつきの支配者です。

支配系スキルに対して極大の抵抗値を持ち、更にカリスマ（大）を持ちます。

【武の化身】：天才が努力を行った結末。あらゆる戦闘技能に補正（大）。

【戦場の華】：存在するだけで味方の士気を上げ、敵の士気を挫きます。

【蛮億殺人者】：あらゆる者を殺害することができます。殺害を目的とする戦闘時、戦闘力増大。

【純白の魂】：この者の魂を汚すことはできません。寄生者を支配します。

「おはようございます。連理貴久、でしたか？」

「タカぼんで良い」

譲原九十九（ユズハラツクモ）と名乗った美しい女が俺の部屋の前に立っていた。

衣服には無地だが、仕立ての良い着物を与えた。それが長い黒髪に映え、実によく似合っている。

実に造作の良い顔をしていた。

「うん、流石に猫と同じ世界出身の事はある。似合ってるぞ」

「世辞は要りませんよ。それで、お前に伝えたいことがあるのです

が」
「うん、なんだ？」
問えば譲原は形の良い眉を寄せ、心苦しそうに言う。
「服も貰い、食事と屋根の世話もしていただいたが、私はお前が好かない。
とはいえ、”あの”武満法行の元に降るのも性に合いません」
「ここを出て、一人で何をする？」
「外に見える塔。あれの最上階まで行けばいいのでしょう。
行って、攻略し、この都市に捕らえられた民衆を解放します。その後は機械帝国と戦います」
端末で改めて確認したが、それができる能力値ではある。あるが、一度は捕まっていたことを忘れているのだろうかこれは。
馬鹿ではないが、自信のある口調。そしてまっすぐな目。
内藤のように、異なる二重の魅力を感じない以上は、主要人物ではない。これが如何なる心算なのかはわからないが、
「やめておけ、お前では敗れるだけだ」
「はい。知っていますよ。その程度は」
「自殺する気か？」
「いいえ、私の目的は、あの食人鬼だけですので。
あれの首さえ取れれば私の命は必要ありません」
……、なるほど。と頷いた。
それなら可能だろう。難しくはあるが、この人間が己の生存を度外視すれば可能な程度には容易い事柄だ。
「それでお前は何を得る？」

「私程度の力でも死力を尽くせば高官の一人を殺せると知れば、大日本帝国の将も後に続くでしょう。
そうなれば何も問題ありません。大日本帝国が勝利し終わります」
「なんだ、ただの夢想か……」
呟きに対し、剣呑な殺意が向けられる。確かに、俺を１０００回殺して余りある能力を持つ人間だが、所詮、それは個の武の消費の仕方だ。
「確かに、お前は一人で一個軍程度の働きはできるだろうが、その程度だ。
だが、俺が扱えばお前は全ての人間を救えるぞ。機械帝国も滅ぼさせてやろう。
その才覚を俺の元で使え、譲原九十九」
「賢しいな。ああ、お前は賢しいな連理貴久」
「馬鹿か。タカぼんと呼べ、と言っただろう」
吐き捨てるような視線で見られる。譲原九十九の瞳にあるのは軽蔑の視線だ。
「あの機械帝国の将の言うとおり、お前の底が私にも見えるぞ。連理貴久。
お前は私の才覚だけで私を選んだ。お前は情よりも才覚で人を選ぶ。
それではお前の元に人は残らない。この組織、≪支配の杖≫も、いずれお前の非情さで瓦解する」
「阿呆。その程度の状況、俺が経験していないとでも思ったか」
「む……」
「能力主義での無能の淘汰。その結末程度、俺が経験していないと思ったか？

反逆者が無能と徒党を組んで俺を殺そうとしたことが何度あったと思ってる？

譲原九十九、お前は、お前の優秀さとその潔癖とも言える情で生き残ってきたんだろうがな。

憎悪の中で生き残ってきた俺を甘く見るんじゃない」

じりじりと譲原九十九は俺を睨み付ける。その両眼から照射されるのは、常人が血を吐いて、死亡する程の殺意の眼差しだった。

だが、その程度、死者が残す恨み言に比べれば痛痒にも感じない。

譲原九十九は息を吐いた。

「連理貴久、お前は覇者の類でしたか、失礼しました。

しかし、私の案を夢想と仰ったが、それは撤回して頂きたい。我らには、その程度の力はあるのです。

ええ、私の力を把握しているお前にはそれは否定できない筈だ」

「どこでパラメーターの事を知った？」

「ぱらめーたー？　いいえ、才に溢れる者を集める覇者の類ならば、人物の器量を見ただけで見抜くことなど容易いだけかと」

なんだ、と思った。それに、なるほど、と思う。武満の世界にもそういったスキルか何かを持つ人物はいるらしい。

というか、猫や武満の話を聞けば、大日本帝国と言いつつ、あちこちの県が独自の軍を持っている状況。

武満の世界の無節操さに呆れながらも、言葉を続ける。

「ああ、お前は、この世界では身体の調子が良いと、いや、何倍もの能力を手にしたと思っているだろう」

「ええ、環境の変化でしょうか。いやに力が強大になった気はしますが。この世界の特徴でしょう。ならば、我が世界の勇士たちが集まれば」

戸惑っている譲原に俺は真実を告げる。

「それはお前の才能であって、他の人間には起きない変化だ。だから、お前ができることが他の人間にできる保証はない。お前に続く人間はいるだろうが、その全てが無駄死にするだろう。根性や気力の類では不可能な現実があることは、お前にも理解できるはずだ」

息を飲む譲原。しかし事実を知って意気消沈するかと思えばそんなことはなく、

「……なるほど。しかし、賢しらに生きる人間は好きません。人を束ねる才をお前は持っているでしょうが、仁と情がお前にはない。仕える理由がありません。いいえ、敢えて言いましょう。お前でなくても、機械帝国の打倒を達成できる人材はいる」

「お前では無理だろう」

いいえ、と彼女は首を振った。確信のある口調で言う。

「方針を変えました。暗殺が無理ならば人材を集めましょう。軍師たる人物を集め、兵を集め、物資を集め、軍事行動を行います。その上で機械帝国へと宣戦布告し、正面から打倒しましょう。それは、無理ではないはずです。お前ならわかるはずだ。連理貴久」

「……、お前はどこまで理解してる？」

「お前が、昨夜私に教え込んだ通りです。私たちは”ぱらめーたー”とやらを上げ、武器を集め、機械帝国と一時は互角に戦った魔王軍とやらを打倒する。

そして、魔王軍を打倒できるならば、機械帝国を打倒できる戦力

が集まるはずだ。その上で技術者たちに技術を解析させ、その結果を人類軍全軍に与えればいい」

「……勝てない。機械帝国は万全の準備を整えている。俺ならそうするし、そもそもそんな状況は作らない」

そうして、それを言う俺に対して、譲原九十九は鼻で嗤いながら言うのだ。

「だからお前は賢しいというのです。連理貴久」

「ああ、糞、……俺は、お前みたいな人間が割と好きだよ」

「そうですか。私は大嫌いですが。

ええ、お前は私の軍師になりなさい。そして≪支配の杖≫を私に譲りなさい。

私が正面から戦える戦力に仕立て上げましょう。最後には全てを終わらせてあげます。

なぁに、敵が化け物な分、西洋連合より戦いやすいですよ。機械帝国は、何しろ人間ではないのですから」

壱百陸拾玖～壱百漆拾

壱百陸拾玖／

覇者にも種類はある。
圧倒的な力によって全てを蹂躙する者、法（システム）と経済によって全てを支配する者、情と仁によって人々を掌握する者。
そして、俺の目の前の女は、

「私だけでは足りない。お前はきっとそう思っている筈です。
私には妖しさがない。他者を蹂躙し、戦場を強姦し、人々を率いる事はできても狸や狐と向き合い、それらを暴く力がない、とお前ならわかっているはずです。
然り！　然りですよ連理貴久。ならば我が未熟、賢しきお前が補いなさい。
そして、共に機械帝国から弱き世界を救いましょう」

語る言葉には力がある。それは彼女が産まれたときからの王者だからだ。
立ち居振る舞いに色がある。それは彼女に他者を魅了する容姿と武力が与えられたからだ。
俺は、呆れながらも口を開く。

「まるで王のように語るんだなお前は」
「血筋で言えば、玉座にあっても可笑しくはないですよ？　まぁ、私は戦場に赴くのが好きなので、そちらには力を入れませんでしたが。
何より、弑逆するには、今の帝（ミカド）は善良すぎます」

くすくす、と彼女は笑い、そうして俺へと手を伸ばす。

「選びなさい。お前がここで力を貸すなら今すぐにでも私は動けます。

だから賢しいお前が考えていることを全て明かしなさい。その上で私が方針を考えます。

ええ、悪くない筈ですよ？　武満法行がいる以上、お前では、全ての人民に方向性を与えることはできない。しかし私ならできる。

私の言っていることは間違っていますか？」

「間違っていない。ああ、お前ならばきっと、何も間違わずに、間違いを犯せるんだろうさ。

そして、そうか。最初の獲物は≪法の剣≫か……」

「ええ、≪法の剣≫を破壊します。私が人の意志を統一します。

それに、お前の言う間違いとは、強者が当たり前にこなす日課のようなものです。さぁ、言葉を正しなさい連理貴久。その言い方では他者に誤解を招きます」

「強者の責務、間違っていても間違っていないと主張することが間違いでなくてなんだ？　正義や善良さ、そして大義の名で犠牲やリスクを隠す行為、お前が正しいと言い張ろうとも、結末として、間違いは記述されるぞ。

お前が主張するものは、ただ強く、正しいだけだ」

綺麗な、本当に綺麗な目で譲原九十九は俺を見返す。とても不思議そうな目だった。

「ならば、誰も死なない方法をお前は持っているとでも？　誰も死なずに果実だけを皆に分配できるとでも？

それにお前の言い方は、私の傷だけを攻め、結果を評価しない、愚人の言葉だ。私にこれ以上、お前を嫌いにさせる気ですか？」

「お前の才能と性質は好きだがな。お前の存在は強すぎる。全ての

謀略や失敗を才覚と力だけで破砕してきた者よ。
お前では、……、ああ、ダメだ。駄目だ駄目だ駄目だ」

発する言葉を止め、頭をかきむしる。
この女を言葉で支配するには材料が足りない。威圧と感情では対抗できない。
正直な所を告げるしかなかった。
譲原はそんな俺を憮然として見ていた。俺の言葉など予想している女の表情だった。

「早く言えばいいじゃないですか？　お前では結果として失敗する、とでも言いたかったんでしょうがね」
「言えない。お前を前にそれは言えない。
お前のような人間に対して、俺は、失敗するなどとは口が裂けても言えない。
俺は、何も見えてない道化の真似だけは耐えられない」

ふて腐れたように俺は床にどっかりと、座る。
そうして、膝に肘を突き、譲原九十九を見上げた。

「お前なら全部が全部を成功させるだろう。誰も彼もの思惑を破砕して、ただお前だけの勝利を打ち立てるだろう。
その上で、お前は死者と戦場の上で、人類の勝利を掴むはずだ。
あらゆる勇者や魔王すら敵わない、至上の武をお前は持っている」

立ち居振る舞いや、その思考でわかる。生まれつきの勝者たる譲原九十九にできないことは何もないだろう。
こいつを俺に寄越した機械帝国の思惑を、ふと察することができた。
こいつを投入することで人類同士に抗争を起こさせようとしたの

だ。あいつらとて、この膠着した状況が好みなわけではない、ということだろう。だが、最終的に、彼らの思惑すらも譲原九十九は超えられる。

死者は生み出すだろう。しかし、それ以上に譲原九十九は勝利を手に入れる。

それは、譲原九十九を一度は捕らえながらも俺に差し出してしまった機械帝国にはわからないものだ。

俺ですら、ある種、圧倒される彼女の才を、機械帝国は、人類を見下すが故に認められなかったのだ。

「なら、手伝いなさい。お前の才を私は欲しています」

「嫌だ」

即答に譲原は鼻白む。

「金ですか？　名誉ですか？　女ですか？　欲しいものを全て与えても構いませんよ。お前になら」

「そうではなく、だな」

俺は譲原九十九に頭を下げた。

「お前のやり方で機械帝国へ反抗することを諦めろ。

これは、俺たち敗北者の戦いだ。お前が情を理解できるなら、お前のような生まれつきの勝者が関わるべきではない戦いだ。

その上で、この物語に関わるなら」

俺は、告げる。

「俺の下で、戦え。譲原九十九。

敗北者の下で、ただただ全てを終わらせるためだけに戦え。

その上で誓うよ。機械帝国を滅ぼす、と」

譲原九十九は――、

壱百漆拾／

譲原九十九は何も言わなかった。
ただ俺を見るだけだ。

「敗北者の戦争と、言いましたね？」
「ああ、そうだ。これは俺たちの戦争だ。勝利しか生み出せないお前は、参加するべきではない戦争だ」
「……嫌な物言いだ。確かにそれが本当なら、私が参加するべきではないですね。
私とて、名誉ある戦のために命は賭けても良いが、他者の誇りを汚してまで勝利を得ようとは思わない。そこに自国の民がいるならなおさらだ。
ええ、敗北者の戦争。その言葉の本質は解りませんが、つまり、貴方は”部外者は関わるな”と言いたいのでしょう」
「いや、お前が機械帝国に捕らわれた時点で、当事者の資格はある。
しかし、お前の強さはこの戦いには無用だ。ただ強いだけの強さは、敗者の想いすら、風化させる」
「意外にロマンティストなんですね。貴方は」

譲原九十九が驚いた顔で俺を見る。俺はそれにただ返すだけだ。

「情はあるよ。誰にでも。
何より、俺は俺の約束を果たすだけだ。その上で言う。
お前が戦争を始めると、俺が人殺しに熱心にならなければならな

くなる。
部下との約束を破り、お前を殺すために全力を掛けなくてはならなくなる。
それは、俺の本意じゃない」

そうして、俺は、それを口にする。譲原九十九を俺の下に留まらせる言葉を放つ。

「加えて、お前は俺に借りがあるはずだ」

嫌そうな顔で見られた。しかし、それを覆す気はない様子だった。
言葉通り、仁義に深い人物ならば、深い理由がない限り、他者の戦争の主役になろうとは考えない。
それが自らの世界の危機であろうと、だ。
何しろ、目の前の女は既に自ら言っている。連理貴久でなくてもいい、と。
それなら勝者が譲原九十九でなければいけない道理もない。
つまるところ、勝利の為に相応しい人物がいるなら誰でも構わないのだ、この女は。
先ほどは俺を説得するために強めの言葉を重ねたんだろうが、こいつが生粋の勝利者である以上、大規模な戦争が起きる手自体は好みではない筈だった。
古来より、戦争行為は下策中の下策。本当の勝者はそもそも戦闘をせずに勝つ。故に、譲原九十九とは論理の上で妥協する余地がある。

「確かに、命の借りはありますがね」
「だから、従え、とは言わない。お前の武力や人脈を頼りにはしない」
「では、何をしろと？　言いなさい、聞いてあげます」

「俺の下に留まり、人を守れ」

ぽかん、とした顔をされる。重ねて言う。

「俺の策で死ぬかもしれない人間を守れ。
お前の武力はこの戦争には無用だが、人を守る力にはなるだろう。
その為に全力を尽くせ」

「……それは、計略ですか？　人を守ることでお前に何か得があるとでも？」

「俺に得はない。得はないが」

蜜美の顔を思い出す。あれの顔が、悲しみで歪むのは俺の本意ではない。

「部下が、俺の部下が。人が死ぬのを嫌がった。
そいつの唯一の、俺への願いが、〝俺が人を殺さない〟ことだった。
だから、俺は、必要でない人死にを出したくないだけだ」

「へぇ……」

なんだ、と怪訝な顔をすると、譲原九十九は口元を抑え、にやりと笑う。

「貴方でも、そのような優しい顔もできるのですね。
妻か兄弟だったんですか？　その人は」

黒霧蜜美との関係は、そのような簡単なものではなく。

「いや、俺が拾い、俺が育み（ハグク）、俺と共に戦った。そうだな、あいつは愛すべき家畜（ペット）だよ」

誇らしげに言えば、譲原九十九が額を抑え、俺を呆れた顔で見る。

「少しでも感心した私が馬鹿みたいですね。
とはいえ、私の武力を当てにしないなら、了解しました。その上で命の借りは返しましょう」

そうして譲原九十九は俺へ真実を告げるのだ。

「実のところ機械帝国との闘争には乗り気ではありませんでした。
今の大日本帝国には西洋連合との大規模戦争が控えてますので。
だから、お前が機械帝国を討ってくれるなら、好都合なのです」

しかし、と譲原九十九は言う。

「お前が失敗したなら、私は動きますよ。
その程度には、脅威に感じています。機械帝国については」

「そうか、感謝する」

いえ、と譲原九十九は首を振った。
お互いが納得したところで、遠くから足音が聞こえてくる。誰かと思えば、猫だった。

「お兄さん、朝ですよっと。って、げ、譲原の御姫」

「何かと思えば八魔無師の田舎武将じゃないですか。昨日ぶりですね」

「ブルジョワめぇ……。お兄さん。私、こいつ嫌い……」

「有産家（ブルジョワ）とは失礼ですね。土地も金も地位も名誉も血統も人気も所持している私をそのような誤解と偏見に満ちた言葉で表現しないでください。無知を疑われますよ。

それに、饗の都がそんなにうらやましいですか？　幸村都子」
「徽の生えた権威主義なんか知るかぁ！！」

暴れようとする猫の額を抑える。

「仲良くしろ」
「うわぁ、こいつ嫌い嫌い嫌い！　威厳があって、顔がよくて血筋が良くて戦場で私より人ぶっ殺しまくってるくせに、傷ひとつ負ってないところとかすっげー嫌いだぁ！！　リアルで戦略系遊戯でいうところの全能力値魅力含めて最大値（カンスト）上限突破してるとことか特に気にくわねー！！」
「ちょっと、ちょっと、何やってるんですの！　都子さん！　あ、タカぼん様、九十九さん、おはようございます」

ぞろぞろと内藤や龍郭院がやってきて、がやがやと騒がしくなっていく。
騒々しい気配に、俺はため息を吐き、譲原九十九はそれらを楽しそうに見るのだった。

壱百漆拾壱～壱百漆拾肆

壱百漆拾壱／

「武力を貸しはしないとはいいましたが……。なんですか？　この服装は」
「似合ってるじゃないか」
「何故、女中服なのですか。それも西洋の」

くるりと、メイド服のロングスカートをひらりと一回転させた譲原が俺を呆れた顔で見た。
ここは俺の部屋だ。いるのは俺と譲原と、肉人形が二体。
そうして、黒髪の、未だ少女の面影を残す美しい女はスカートの端を摘みながら不機嫌そうに俺を見る。

「格調高くメイド服と呼べ。防御効果は全くないが、なかなか良い姿じゃないか」
「脱いでいいですか？　私はお前の部下や何かではないんですよ？」
「ガーターやシルクの手袋、それにホワイトブリムまでしっかりとつけた者の台詞ではないぞ？」

完全なメイド状態の譲原に指摘すると、頬を赤く染め、

「い、いいではないですか。興味はあったのです。興味は。とはいえ、お前の部下になるつもりはないのですから、この服装はいただけません」

胸元のエプロンを引っ張り、譲原は口を尖らせた。
可愛げのある仕草に苦笑を浮かべながら、適当に理屈をひねり出

すべく頭を捻る。
黒髪美人にメイド服とか、実にいいじゃない。

「……ふむ」
「なんですか？　その目は、一度だけ着たのですから良いではないですか」
「うーーむ」
「……、ろくでもないことを考えていませんか？」
「ううむ」
「連理貴久？」

頷く。無理だな。こいつは俺に心酔してるわけでも、説得に応じるような性分でもない。
何より、本来はメイド服など着るような身分ではないのだ。
全員の前で、俺に傅（カシズ）くような真似はしないだろう。ファッションなどと言えば誤魔化せるかもしれないが、後が怖い。
何より、最近、戦闘や説得で俺の脳や身体は疲れ切っている。
ここで頭を悩ませるのは少し、論外に過ぎた。

「三号」

用意していた譲原の衣服を三号の手から受け取ると譲原へと放る。

「……、素直すぎて逆に警戒心が湧くのですが」
「少し疲れた。それを持って、部屋に戻って良いぞ。それとも街の見学でもするか？」
「そうですね。ええ、いくらか街の様子でも見てこようと思います」
「お前についての責任は≪支配の杖≫が持っている。下手な問題はなるべく犯すな」

頷いた譲原は部屋の外へと歩いて行った。
入れ替わりに幸村都子が入ってくる。

「なんであいつ、メイド服なんて着てるの？」
「ああ、着せたら着たが、もう二度と着ないだろう」
「ふぅん、ま、それより報告なんだけどさ――」

壱百漆拾弐／

「【聖天極母の箱舟】？」
「そ、ＭＡＰにもあったでしょ。なんか重要位置っぽく」
「入れたのか？」

いつの間にやら自主的に改造した制服を着た猫は、肩や肘につけた鎧片を撫でながら「ま、入れたけどさ。あー、ごめん」と何故か謝罪の言葉を吐いた。
額を抑える。これは、恐らく、とても嫌な台詞だ。

「……言ってみろ」
「死人出しちゃった。ごめんごめん。ほんと気をつけてたんだけどさ。
無理だわ。【聖天極母の箱舟】」
「いつの話だ？」
「んー、昨日かな。入れたはいいんだけど、なんかごっつい機械がごろごろ出てくるわで」
「機械なら、他の場所でも出ただろう？　あとこっち来い」

いやいや、と猫は顔の前で手を振った。

「おにーさん怒るでしょ？」
「怒るよ。そりゃ怒る。武満にさっさと謝罪に行かないといけないしな」
「武満にねぇ。おにーさんが謝るの？」
「お前の責任は俺にあるからな」
言えば、きょとんと目を丸くする猫。
「へぇ……。珍しい人だねおにーさん。どうしたの？　なんか悪いものでも食べて育った？」
「何が言いたい？」
「いや、私が責任取らされるのかと思ってたからさ。腹切れとか、首切れとか」
ため息を吐いた。
「たかが≪法の剣≫の雑兵とお前の首は等価にはならん。が、人が死んだんだ。それなりの慰謝料を払いに行く。お前、後で付いてこい」
「うぅ。わかった」
「あとこっち来い」
うー、と恐る恐る寄ってくる茶髪の美少女を膝の上に載せる。髪をガシガシと撫でながら、顎の下をごろごろと弄る。
「それで、【聖天極母の箱舟】内部はどうだった？」
「いや、マジほんと有り得ないんだけどさ。
硬度が１００以上で、現在入手できる最高の防具つけた黒服が一撃で消し飛んだんだけど……」
「……、死んだのは一人か？」

ぴたり、と俺の猫を弄る手が止まる。
動揺を感じたのか、猫が慌てて言葉を付け足した。
「一人！　一人だってば！　いや、なんかそいつ門番みたいな奴で一体だけだったし。私、元々深入りする気はなくて、ちゃんと撤退させたし」
「ならいい」
息を吐く。幸村も安心したように息を吐いた。
「それで、他に何かあるか？　【聖剣の丘】や【魔王陵墓】についてはどうだ？」
「あー、いや、そっちは見てないや。とりあえず失点の挽回しなきゃいけなかったし」
「挽回？　何か発見したのか？」
うつぶせの姿勢だった猫がくるりと膝の上で回転し、仰向けになりながらピースサインを送ってくる。
「へっへっへ、なんと工場施設の攻略とゲットに成功したのでしたー！！　褒めてよ！　すごいっしょ！」
「へぇ、強引な手は使ってないのか？」
「いや、その辺はちゃんとしたって、武満の兵が死んだのは確かだからそれ以上怒らせたくなかったし」
死人が出た際に、怒るで済む辺りが武満のところの兵らしい。
「なら、とりあえず武満のところに行くぞ。
そろそろアイツとも話をしておくべきだと思うしな」

「あ、アイサー！！」

膝から猫を下ろし、肉人形を連れ、≪法の剣≫へと向かうのだった。

壱百漆拾参／

いろいろと指示や準備、手土産を用意してたらそこそこの時間になり、車で着く頃にはちょうど昼時だった。

「あら？　連理貴久。お前もここに用ですか？」

≪法の剣≫の出入り口で門番と押し問答していた和服の譲原を見つけ、お互いに首を傾げる。

「タカぼんさん、おはよう御座いますッ！」

「おう、ご苦労。どうしたんだコイツ？」

とりあえず譲原を完全に無視し、門番の黒服に話しかけると、

「あ、いえ、先ほどから武満法行に会わせろ、との一点張りでして」

「へぇ……」

「あ、タカぼんさんのお知り合いの方なら――」

「いや、仕事をこなしてくれ」

む、と譲原はこちらを睨む。そうして俺は内心の笑みを隠して、猫に話しかけた。

「そういえばな。この前お前にメイド服を見せただろう？」

「へ？　メイド服？　えっと……？」

肩で突けば、猫はあーあー、と得心したように頷いた。

もちろん、メイド服なぞ、猫には見せていない。だが、この会話を聞いていれば何のことだかわかる人物が一人、この場にはいる。

「あー、うん。見た。見たね。で、それがどうしたの？」

「あれな。実は≪支配の杖≫のエンブレムがついてるから、着てれば≪法の剣≫とか割と顔パスで入れるんだわ。なぁ？　黒服の、岸本君」

門番黒服の岸本何某くんに話を向ければ、

「え、ええ。≪支配の杖≫のエンブレムが付いてるなら止めませんが。

メイド服、着せるんですか？　幸村さんに」

「うん、いや。誰とは言ってないが」

と、譲原に視線を向けると、奴は、ぐぐぐ、と下を向いていた。

確かに、渡したメイド服を着れば軍司令部をいつでも通る事ができるようになる。

しかし、それだと俺に頭を下げるようなものだと気づいたのだろう。

「これは独り言だが、俺に貸しを作ってもいいなら、今だけ付いてきてもいいぞ？」

「割と卑怯者ですね。お前は」

「大人しいうちに貸しを作っておきたいだけだ」

譲原はため息を吐き、そうしてから口を開いた。

「いえ、そこで待ってなさい。メイド服とやらを着てきましょう。その上で、一緒に武満と会って貰います」

そうして、譲原は言うのだ。

「私が、お前の背後で女中服を着る意味がわかりますか？
いえ、そちらの幸村ならわかるでしょう。譲原九十九が、武満法行の前で連理貴久の背後に付く意味が」
「あー、そりゃ、まぁ。なんだかんだで饗徒のお姫様だし」

何がなんだかわかっていない、銀稜台出身者の黒服。
そして大体、会話で理解した俺と、そして複雑ながらもその効果を完全に理解している幸村。
譲原は俺をじろりと睨み付けながら言った。

「連理貴久。私から貸し一つです。それに、お前の格があがるなら私にとっても都合はいい。
ふふ、交渉行為と割り切れば心も躍るものです」

壱百漆拾肆／

「は？　譲原九十九だと。饗徒の姫将軍が何故ここに……」

通された≪法の剣≫の執務室に入れば、武満法行が初めて俺の前でその冷静な顔を崩していた。
対する俺も屈辱に歯を食いしばる。

「えぇ、武満。随分と良い身分じゃないか？」

即座に動揺から復帰した武満が眼鏡をくぃ、と上げる。
幸村はつまらなそうな顔で武満の背後を見ていた。メイド服の譲原はその光景を見ながらも、わかっていたように無表情だった。
二人とも、武満ならその程度はしてもおかしくないと知っていたらしい。

「やぁ、タカぼん。
私にも少し思うところがあってね。何、単純になんだ。機械軍団総司令とやらと手を組んでみただけさ。
なぁ？　機械人形よ」

武満は自身の背後で白背広を着させた機械人形に声を掛けた。

『機械人形とは、面倒な言い方をなされマスな。
そちらの人間よ、私はコプス・A・ゼロゼロ？。機械軍団総司令付の秘書をやってオリます』

機械帝国に連日受ける屈辱を想い、反射的に懐から銃を抜こうとすれば、武満の視線が俺の動きを縫い止める。
こちらも鋭い視線で睨み付けながら言葉だけを与える。

「約束は忘れていないだろうな？　お前も俺も敗北者だ。
そして、さらなる敗北は望んでいない」
「当然だよ。タカぼん。
しかし、私にも思惑はある。何より、君ばかり最近はアドバンテージを握っているだろう。
こちらとしても独自にアプローチはしてるのさ」
「わかった」

舌打ちしながら、ソファーに腰を掛ける。そうして、

「猫、俺の足下で膝を付け」

「う……、わかってるよ」

そうして、猫の小さな背に足を乗せる。テーブルの上に三階層ＩＤを書き込んだ紙を滑らせる。

「うちの家畜（ペット）が失礼をした」

「まぁ、妥当だな。しかし、謝罪が遅れたことはどう説明する？私はタカぼんを信頼して兵を預けたはずだが」

「悪かったな、武満法行。連理貴久は私が拘束していた。そこの田舎猫（キムラ）からの報告が遅れたのはその為だ」

思わぬフォローが出たが、動揺せずに大仰に頷いておく。

「ああ、そちらの姫さんの手綱を取るのが面倒でな。何せ、≪法の剣≫に単独で戦争を仕掛けるから、兵を寄越せと脅されていた」

「何を言いますか。結果的に私を説得し返したのはお前でしょう。連理貴久」

内心で、少しだけ驚きが生まれる。確かに、譲原九十九が武満法行に戦争を仕掛けるという話をした瞬間、確かに武満法行が冷や汗を掻いたのだ。

今、奴は確かに、助かった、という表情をした。

なるほど、と、ソファーに背を預け、譲原を見る。

肉人形を左右に置いた形になる女は、自慢げに口元を歪めた。

「そういえば、前の大陸での私の戦果を覚えていますか？　【軍神】

武満」
「……貴女の鬼神の如き働きなら、しかと覚えていますよ。【鬼姫】九十九」
「ならば良いです。そして忘れぬことです。
今、私は連理貴久に力を貸している。この服がその証明ですよ。
武満」

その物言いに、少しだけ俺はまずいと感じた。
俺と武満の力関係が少しだけ、俺の側に傾いていた。これは非常に良くない状態だった。

「”九十九”」

じろり、と下の名前を呼んだことで譲原が俺を鬼神の形相で見る。
そうして俺は武満に両腕を広げて見せた。
俺ですら、この女は完全に制御していない。そう武満に見せつける為だ。

「なるほど。タカぼん、私と君はまだ友達なようだ」

こちらの必死を、正確に理解してくれた武満がこちらに手を伸ばしてくる。

「お互い、いつまでも友達でいたいものだ」

俺は、武満の手を握り返した。
譲原の殺意によって、じっとりと濡れた俺の手汗は、言葉に信憑性を持たせただろう。

壱百漆拾伍～壱百漆拾漆

壱百漆拾伍／

厄介な譲原は自主的に黙り、賢い猫は俺の足の下。
そして、兵器としての信頼が最近、急降下気味な三号は黙って立ち、二号は剣を背に佇んでいる。

「さて、武満。何故、一階層の蛇を攻めた？　それについて俺は説明を受けていないが」
「話そうと思ったが、君が私の所を訪れなかった。それだけだよ」
「ほぅ、なら話してもらえるのかな？」

うん？　と強めの口調で言えば、鼻で嗤われる。

「ああ、話そう。私は、何一つ、それについての利点を知らない」
「……、正気で言ってるのか？」

不敵な顔で眼鏡を輝かせる武満。しかし、何も知らない状態でこいつが動くわけはない。部下の命を失ってまでだ。

「ッ……。武満――、」
「黙ってくれ」

武満の態度に苛立ちを覚えた背後の譲原が口を開こうとするのを声を上げ、制する。
譲原の力を使って武満の口を割らせれば、俺と武満は完全に決別することになる。
ああ、背後の譲原（コイツ）は、現時点で武満や俺を含めて全てを蹴散らし、

その後の≪法の剣≫と≪支配の杖≫の世話を自ら引き受けられるだけの武力も器も展望も持っている傑物だ。

そもそも俺とて武満を心底恐ろしいとは思っていないし、現時点で本気で武満を殺そうと思えば、それを達成し、≪法の剣≫を傘下に収める程度はできる。武満が俺を排除し、≪支配の杖≫を取り込む程度の勝率で、だ。

そう。お互い殺すことはできるが、それは行わない。これは武満と俺との間にある、暗黙の了解だった。

俺も武満も、本気で戦えば、お互いがお互いを排除できるが、それではいけないのだ。それでは、勇者に対する盾が存在しなくなる。お互いが殺し合い、結果として、勇者にどちらかが敗れたら本当に負けてしまう。

だから、目の前の武満と全面戦争を俺たちは起こしたくないのだ。お互いが、本気で邪魔になるまでは。

「これは、俺たちの戦争だ。お前はまだ関わる時間じゃない」

「ええ、わかってますよ。連理貴久」

（どうだか……）

しかし、譲原は、生まれつきの勝利者だった。そもそもが、勇者や魔王などというものに負ける要素を持っていない。

こいつを殺せるのは、こいつ以上の才能と、武力だけなのだ。だから、奇策や鬼謀では殺すことはできない。

故に、たかが勇者と正面からぶつかっても、１００回に１００回勝つ。そういう人物だった。

この都市でこいつだけは何をしても許されるのだ。本人の誇りに沿う限り。

「武満。本当に何も知らされていないのか？　何故、それで動ける」

「動けなくとも、報酬はある。ほら、言ってみろ。機械人形」

武満に促された機械人形が前に出てくる。
ぺこり、とお辞儀をしたそれはべらべらと音を発しだした。

『人のサガとは実に物欲に長けたモノでありマスな。
サテ、我ら、骨を吐く蛇の討伐報酬として、五階層のＩＤ解放相当の、武具や道具の提供を考エテおりマス』

「それは……」

「やるしかないだろう？　タカぼん。
何、白背広を集めればできない狩りではないからな」

内心で舌打ちをする。確かに、それは非常に旨味のある提案だった。
俺とて、そういった報酬があるなら蛇退治としゃれ込んだだろう。
ただし、それが本当だったならばだ。

「……本当なのか？　それ以外にも何か情報が入っているんじゃないのか？」

「疑い深いな君は。私たちとてこの程度だよ。なぁ、機械人形」

『エエ、そうデスよ。連理貴久。
我ラは、とても貴方たちに感謝してオルのデス。
貴方たちガ頑張れば頑張ルほど、彼の方は楽ができマス」

じろり、と武満を見る。彼の方とは、十中八九勇者【アーク・ソシエト】だろう。

「ま、そういうわけだタカぼん。
君も探ってみたらどうだ？　機械帝国について。興味深い事がいろいろとわかるぞ？」

「……、考えているさ。そして、好きにはなれないと思っている」

吐き捨てる俺に、そうか、と嗤い、武満は立ち上がる。

「さて、これ以上はお互いに報告しあう情報はないだろう。悪いが、私も忙しい。先に失礼させてもらうよ」

「ああ、そもそも、こんな状態になってまで俺たちは馴合う必要はなかった」

必要なのは、お互いが生存して、都市での武名や悪名を高めている状態だったからだ。

「では、なタカぼん。ほら、行くぞ鹿島」

去りゆく武満と、白背広たちを見ながら、譲原が呟いた。

「だからお前たちは賢しいというのです。敵同士馴れ合って楽しいですか？　連理貴久」

「まぁ、楽しくはないさ。愉快な気分にはなるがな」

壱百漆拾陸／

車を運転して帰ろうと思ったのだが……。

「ふむ、人数が多いな。小型のバスでも借りてくるか」

「バスってーと、でっかい車？　ああ、そういえば探索のとき、≪法の剣≫の人間に運転させたけどさ、運転できるの？　いつも小さい車ばっかだけど」

「ああ、大型や中型の免許は持ってないな」

猫の質問に簡潔に応えると、猫が顔を青くさせる。

「……その、えっと、運転したことは？」

「ないよ。未経験だ。ああ、未経験だな。だが安心しろ」

「何故二回言うのですか？　連理貴久」

「あ、そういえば」

思い出したように声を上げる。

猫と譲原がこちらを注視するので、なるべく真面目な顔で問いを放ってみた。

「お前らは貫通済みか？　下の膜の話だが」

譲原と猫が蔑んだ目で、俺を見た。

「これ、殴り殺してもいいのかしら？」

「いいんじゃないかな？　譲原の姫」

女二人から放たれる殺意の渦に苦笑する。ただの冗句だというのに。

すかさず三号が盾になるため、俺の前へと出てきた。律儀なそれにふむ、と頷きながらその場に腰を下ろす。

「そういえば猫、何故武満とお前は譲原九十九を恐れる」

あん？　と睨まれるものの、俺の口調から真面目な話題だと察したのだろう。

渋々と猫が口を開いた。

譲原の方は三号が前に出た時点で、殺意を収めている。奴とてこんなくだらない話で俺を殺すことは……、あるかもしれないが、と

はいえ、三号と二号がいるなら、最低限、殺されることだけはあるまい。

（あ、無理か）

そこまで考えて、やっぱ譲原が本気なら無理かなぁ、とパラメーターとスキルを思い出しながら会話を続けていく。

「いや、何故怯える？　そこまで恐ろしいものでもあるまい？」
「いや、恐ろしいっていうかさ。私ら、こいつに勝てねーもん。大日本帝国最強の剣士にして、最強の将軍だよ。勝てるわけねーって」
「そもそも勝負になりませんから、当然ですよ」

猫が勝てないと言い切ったことに少しだけ驚く。もう少し強かな奴だと思っていたからだ。

いや、と思う。素直に負けを認められる部分は、確かに強かだろう。

「武満でも勝てないのか？」
「ああ、武満ね。あいつは一度負けてるからさー。割と非公式だけど」

猫の言葉に譲原が頷いた。

「あれの妹と私は知り合いなのですよ。彼女に呼ばれ、私は武満を諫めるために、金我和の田舎くんだりまで行きました」
「田舎って、花の闘卿ですよ？　お姫様」
「たかが、４００年程度首都だっただけでしょう？　饗徒の歴史から比べれば田舎が金を持った程度です」
「いや、歴史だって、関東のころから積み重ねてるしさ。徳川公の

お膝元だし……」
「田舎は田舎です」
「闘卿は五輪だって開いたじゃん！」
「敵である西洋連合を招いて”すぽーつ”の祭典など、鼻で嗤いますよ」
既に鼻で嗤っている譲原に猫が頬を膨らませた。
「ちぇー、どうせ徽びた権威だけの存在じゃん。お姫いなかったら昔みたいにガッタガタに崩れるだけのくせにさー」
「幸村都子、それ以上言えば斬りますよ？」
手刀を猫に向ける譲原。うぐ、と猫がその仕草だけで黙ってしまう。
「なんだ叩かれるぐらいで悪態をやめるのか？」
「叩かれるって、あ、そうか。おにーさん、知らないもんね」
「うん？」
俺が首を傾げると、猫は俺の後ろにこそこそと隠れながらそれを言った。
「いや、譲原のお姫さ。手刀で空間切断して、鎧ごと敵をぶった斬る程度には人間やめてんのよ」
「いえ、幸村都子程度にそこまで本気は出しません。せいぜい、空気（ソニックブーム）を撫でて、剣圧で斬るだけですね」
すっと、譲原が、目に見えない程度の速度で腕を振り下ろせば、すぱん、と俺の前髪が断ち切られる。
ついで、柔らかな風が俺の頬を通り抜け、頬に浅く切り傷が作ら

れた。

「なるほど……」

「うにゃぁあああ」

俺の背後に隠れた猫を前に引きずり出し、膝に乗せる。

そうしてから、深く頷いた。

「やはり、敵に回すべきではないな」

「ええ、私も今は敵に回る気はないですよ。連理貴久」

結局、運転スキルを搭載させた三号に、小型のバスを運転させて帰ったのだった。

壱百漆拾漆／

一度≪支配の杖≫に帰還した俺は、猫が手に入れた工場とやらに、原と共にやってきた。

猫は探索に戻し、譲原はまた自由行動だ。肉人形は二体とも付いてきている。

手に入った工場はラインや工作機械が埃も積もっていない状態で綺麗に放置されていた。猫が守ったのだろう、≪法の剣≫の手も入っていない。

そうして、下僕のように≪支配の杖≫の構成員である二人の男を従えた原に工場全体のチェックをさせつつ、俺はコーヒーを飲みながら、武器開発などが行える部屋でマニュアルらしきものを読んでいた。

「連理貴久、工場動かしてみたけど、特に問題はないわ。で、素材

はどうすんのよ？」
「三層の魔物の皮や骨を保存している倉庫が一軒ある。そこから持って行け」
それらはダリアから受け取ったものの一部だ。堕王の大剣や創雷ゼウスとまではいかないが、それなりの武器や防具を作るには調度良い素材だ。
「スキルの組み込み方はわかったか？」
「いや、まぁＩＤだったっけ？　それに登録してあるのはできるみたいだけどさ。
ぶっちゃけアタシいらなくない？　素材突っ込んで選択すりゃ、全自動よこれ？」
「ああ、お前の仕事な。とりあえずこの工場の機械を解析しろ。そんで登録してあるスキル以外のものを突っ込めるようにしろ」
「……はぁ？」
「やれないのか？」
「やれないわよ。無茶言わないでくれる？　そもそもそれってスキルの構造について知らないと話にならないじゃない」
「その辺りは、時間はかかるだろうが、資料をこちらで用意しよう。なに、既にこの工場には、装備にスキルを組み込める装置があるんだろう？　それに自作したスキルを突っ込める機能を付与するだけだ。それに、機能が拡張できるならやっておきたい」
原が額を抑える。
「いや、アタシ、まだアンタに言われた仕事全然できてないんだけどさ」
「無能め」
「あん？　無能も何も昨日今日の命令をすぐできるわけねぇだろう

が！　つーか、どっちにしろここ使えばアンタの依頼は達成できるじゃん」
「ああ、だから追加で命令だ。施設機能の拡張、それとスキル自体をこちらで作成できるようにしろ」
「あー、はいはい。やるだけやってみるわよ。パトロンの命令だしさ」

気怠げな原がその辺りに転がっていた加工装置に持ってきた素材を突っ込み、機械を動かす。
数分もしない内にできたのは一本のナイフだ。

「ほら、とりあえずスキル付き武器の【原スペシャル一号】。投げれば当たる、【必中効果】付きよ？　一回ＳＰ１０ぐらい使うけど」
「三号、使ってみろ。そうだな、俺が適当に物を投げるから当ててみろ」

ナイフを肉人形に渡し、読み終わったマニュアルを適当に投げた。
直後に、空中でばさばさとページをばたつかせた一冊の本は、放たれたナイフによって、すこん、と壁へ突き刺さる。
あー、とその結果に、不満げな声が俺から漏れた。原が眉を顰める。

「何よ？　何か不備あった？　刺さってんじゃない」
「いや、これじゃ、三号が上手くやったから刺さったのか。スキルのおかげで刺さったのかわからんな」
「次は素人にやらせるわよ。めんどくさいわね……」

壱百漆拾捌～壱百捌拾

壱百漆拾捌／

「魔浄【極灰の涙】……。燃えて燃えて、消えて消えて、私の憎悪が世界を満たす。
世界、人類、全てなおかつ夢のように消えて去りなさい」

炎のような女が、京都市内を跳ねるように飛び回っている。

「超能力部隊！　奴を全力で止めろぉおおお！！」

自衛隊の制服を着た男が、宙を疾走する女に対し、空を見上げ困惑することしかできない少年少女の一群に向かって叫ぶ。

「私は、【アグル・ティアコラス】。世界は燃えて尽きるのよ？」

女が零す涙、魔王に与えられた涙の形をした魔剣が巨大な高層ビルを真っ二つに切り裂いていく。断面から炎が溢れ、炎はビルや家や商店へと燃え移っていく。

『ききゃききゃききゃききゃききゃききゃききゃききゃ』

涙が人の形をとり、嗤い声を上げる。魔剣は人格を持った武器だ。
元々は魔王と同じ世界に住む人間だった彼もしくは彼女は、魔王に出会ったことで武器へと変わり、正気を失った。

『ききゃきゃ！　きゃききゃきゃきゃきゃきゃッ！！』

火勢が勢いを増していく。魔王を追っていた人々は燃える火に対し、腕や、盾を掲げ、炎の赤を眩しげに、見るだけしかなかった。

「さぁ、連理をまずは燃やしましょう。この日本という国を象徴する企業。それを燃やして、私の悪意をこの世界に――」

激痛に魔王は、胸元を見下ろした。

巨大な、奇妙な金属でできた矢がその胸元を貫いていた。

自身へと襲いかかる攻撃の概念を、炎の身体で”燃やし”てきた魔王は、自身の心臓へと突き刺さった巨大な金属の矢を不思議そうに撫でた。

そして魔王の目が、捉える。それは矢が飛んできた方向だ。

そこには二人の男と一人の女がいる。

「貴久ちゃんよぉ、どうよ？　能力【簒奪者】は？」

「聖弓【融解の水】の奪取ご苦労。上出来だぞ、吉備枯渇」

「恐悦至極」

恭しく腰を曲げる男。そうして、貴久と呼ばれた男は手を振り下ろした。

「よし、蜜美やれ」

「はい、貴久様」

魔王の聴覚が彼らの会話を捉える。八本の機械腕を背負った女中服姿の女は、男の指示に頷きを返し。

ぎりぎりと、八本の機械の腕が、弓に番えられた、四本の魔王殺しの能力を持った矢を高速で放ったのだった。

そうして、魔王【アグル・ティアコラス】は殺害され、京都の町は炎に沈む。

壱百漆拾玖／

「……、懐かしい夢か」

魔王討伐の夢を見た。吉備枯渇と黒霧蜜美の夢だ。

二号や三号が俺の支度を調えていくのに任せ、ベッドから起き上がる。

前回、武満と出会ってから数日が経った。今日は十四日目だ。二回目の召喚がある。

「山県の勧誘は上手くいくだろうか？」

「……」

独り言には無言だけが帰ってくる。

口だけがある肉人形たちは言葉を吐くことはない。声帯をつけようとは思わなかったが、そろそろ、外見だけでも整えておくべきだろうか？

いや、と首を振る。他に力を入れるべき部分はいくらでもある。

「そもそも、お前たちの外見を整えたところで誰も喜びはしない」

肉人形は無言だ。俺もまた、無言を返す。

「まぁいい。今日は久しぶりに武満と話し合いを持つ。警護には力を入れろよ」

それに、吉備枯渇が来るなら、あれにいくらかの事情を聞ける。
それに、吉備枯渇が来るなら、俺が利用すべき機械文明人も決まるだろう。
俺に吉備枯渇を与える事の意味を理解しての行為ならば、一考には値したからだ。
そして、来ないならば。それはそれで考えなければいけないことが増える。
二号が開いた扉。そこから廊下に出れば、

「タカぼんさん。おはようございます」
「タカぼん様。おはようございますわ」

龍郭院と内藤、金と銀の少女が俺を待っていた。
ここ最近の朝の光景だ。

壱百捌拾／

ぞろぞろと軍司令部の入り口からは、人々が溢れてくる。
一部の人々は、まるで戦火に煽られたかのように、ぼろぼろの衣服を着ていたり、ガリガリに痩せていたりしていた。

「戦争か……」

俺の世界の出身者の話を聞けば、一週間前の状態で既に各国の統治下にあり、一部では日本人を奴隷のように売買している地域もあったのだそうだ。
たった一週間で酷い変わりようだった。
それに、と目を配れば、手足に鎖をつけた人間も何人か見える。
そうして、話しかけてくる≪法の剣≫の黒服や、邪魔に見てくる

白服の視線を躱しつつ、召喚された者たちが肉人形を奇異の視線で見てくるのを涼しい気分で流し、そうして、俺は奴と再会を――

「……あ？」

「やぁ、連理。お久しぶり」

――反射的に、腰の銃を抜いていた。

ざわり、と周囲の人間がざわめきを起こす。軍司令部内で武器を抜いた俺に対し、白背広たちが殺意の混じった視線を向けてくる。

走ってくる鹿島が遠くに見えたが、かまわず声を上げる。

「何故、貴様がここにいる！　食人公！！」

「へひゃ！　へひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

アラブの王族のような衣装を着た男が、馬鹿みたいな嗤い声を上げる。そうしてべろり、と長い舌で唇を舐めた。

「いいのかぁい？　約束は、なぁ、連理ぃいいい！　いっひっひひひひ。妾（オレ）は人間だぜぇ！！」

極北銃を顎に突きつけ、引き金に指をかける。奴の言葉が俺の脳裏を犯していく。食人公、この男が、俺と蜜美の約束を知っている筈がない。

知っているのは、蜜美以外にあと一人……。

「吉備、枯渇……か？」

「あっはははははは！　正解正解大正解！！　ははは、衰えたなあ連理貴久。落ちぶれたなぁ連理貴久。

最盛期のお前相手なら、妾はこんな変装をした時点で死んでたはずだぞ！　ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」

そうして、人の皮でできたマスクをべろんと剥がした、吉備枯渇の顔が現われる。
男とも女とも表現できそうな中性的な顔をした、誰にでも見えるようでいて、誰にも見えない男だ。もちろんこれすらも素顔ではないが。
奴は懐に人の皮で作られたマスクを仕舞うと、適当なマスクを懐から取り出し、顔に装着していく。
俺の知っている皮だ。俺が金で圧殺した勇者の皮。小さな企業の主だった男の顔だ。
精悍な男臭い顔の男は俺の肩へと腕を回すと、いっひっひ、と下品に嗤う。

「あー、やっぱり勇者の皮はよく馴染むなぁ。で、貴久ちゃん、元気だったかい？」
「……お前は、食人公を殺したのか？」
「殺したよ？　や、貴久ちゃんの敵だったじゃない。現役時代、すっげー殺したがってたじゃない。
んで、まぁ、貴久ちゃんいなくなった途端に、連理に核撃ち込んだ馬鹿が安心したところを後ろからずぱーん、っと」
「……、そう、か。殺せたのか」
「や、だって、お前いなくなった途端、妾にとっちゃ、イージーモードだし。あの世界」

「何しろ、貴久ちゃんの縛りもなく全力で魔王能力使いまくりだしさぁ。うひひひひひひ」と勇者の顔で下品に笑う枯渇。
こいつは、【簒奪者】と呼ばれる能力（スキル）を用いることで、殺した相手や奪った人面を被り、その人物に擬態することができる。
もちろん、それ以上のこともできる能力だが、俺が止めなければ、元の世界を一人で破壊することのできる戦闘力と能力の持ち主だっ

た。

「うへへへへ。いやぁ、で、なんなのよココ？　あ、別の人間の皮の方がいい？　女の皮にしようか？

女の人間椅子とか好きだったモンな貴久ちゃん。ひっひひひひ、ここがどこだか知らねぇけどさ。ここに貴久ちゃんがいるってことは、またお前さんの元で無茶苦茶できるんだろう？　うっひひひひ」

「自重はして貰うぞ。あと、女の皮はいい。適当に擬態してろ」

「了解了解。いっひひひひひ」

そうして、吉備枯渇を山県達がいるスペースへ案内する途中で奴に問いかけた。

「そういえば、何故蜜美がいながら核など落とさせた？　あいつは、俺がいない程度で、各国が核を落とすような状況にはしないだろう？」

「ああ、黒霧蜜美か？」

吉備枯渇は、なんでもないように言うのだった。

「妾、黒霧蜜美から教えるなって言われてたから黙ってたけどな」

吉備枯渇は、つまらなそうに言うのだった。

「貴久ちゃんが消える一週間前にあいつ、自殺してたんだわ」

「……は？」

口をぽっかりと開き、俺は、吉備枯渇へとアホな顔を向けるしかできなかった。

蜜美が、自殺、だと……？

壱百捌拾壱～壱百捌拾参

壱百捌拾壱／

「馬鹿……な」

言葉が軽い。いや、思考が鈍くなっているのだ。考えが、脳から抜けていく……。

蜜美が自殺しただと、そんな馬鹿な話があるものか。あってはならないことだ。

枯渇が、蔑んだ目で俺を見ていることに気づかず、俺は阿呆のように口を開いていた。

「嘘だろう……？」

「妾（オレ）は貴久ちゃんを試しても、下手な嘘はつかないさ。黒霧蜜美は死んだ。

妾はアイツの死体からちゃんと皮を剥いだぜぇ」

どくん、と奇妙な衝撃が身体を襲った。

枯渇が愉悦の表情で俺を見る。

気づけば、肩を誰かに掴まれていた。

「タカぼんさん、何やってんですかい？！」

「あ？」

瞬間、風切り音が耳に届く。その音が、鹿島が腰の刀を抜いた音だと気づけたのは、首筋に触れるか触れないかの位置で枯渇の指が鹿島の刃を止めたからだ。

鉄の刃の冷たい温度が、首へと届く。俺は今、殺されるところだ

ったらしい。

「おいおい、貴久ちゃんに何してんだい君ぃ？」

「あ、アタシは、そ、そんなつもりはなくって？　え、あ、ほ、本当にタカぼんさんかアンタ？」

「おいおい、連理貴久ぁ、どうしたい？　そんな不気味な目でこのおっさんを見るんじゃないよぉ。殺気びんびんじゃないか。貴久ちゃぁん。

ひひひ。まるで死の淵のような目をしてるぜぇぃ。いっひひひひひ」

言われ、ぺたり、と自身の顔に触れる。冷たくも、柔らかくもない。まるで石像のような感触だ。

ふと人の皮膚とはどんなものか、気になって、鹿島へと指を伸ばす。

「ひッ……。あ、や、やめろ……。あ、アタシに……。ち、近づく……」

ぺたりと、皮膚に触れる。

何故か蒼白な顔の鹿島の皮膚も石像のような感触だった。

そこで、感覚が狂うほどに、俺は、心に衝撃を受けていることに気づく。

絞り出すようにして言葉を放った。

「……、枯渇……。お前、蜜美の皮を剥いだのか？」

「怖い怖い。ひっひっひひひ。いや、奴が死んだのは本当だけど、剥いじゃいないよ。嘘さ。ひひひひ」

「何の為の嘘だ？　答えようによっては……」

手を枯渇の首へと伸ばす。ひょぃ、と枯渇は鹿島が手放した刀を放ると、俺から距離を取った。

「おいおい。そっちのおっさんが反射でアンタを殺そうとするほどに殺気なんぞ振りまいちゃって。本当に劣化してるなアンタ。しっかし、蜜美に本当に執心だったくせに、なんで奴を突き放したぃ？　アレはお前の為にしか生きられない筈だろう？」

「あれには後事を頼んであった。連理の全権を譲ったのもその為だ。蜜美には、全てを頼んでいた」

「黒霧蜜美の望みに反してもかい？　そんなに連理が大事だったのかい？」

「比翼心に敗北した俺は、連理の主である資格を……。いや、支配者という地位に居てはならない」

「ありゃりゃ。おいおい、連理貴久。そういやこのおっさんにタカぼんなんて呼ばせてたなアンタ……」

吉備枯渇が顎に手を当て、首を傾げる。そうして合点したように頷き、軽蔑の表情で俺を見下ろした。

その視線の意味に気づきながらも、俺は動くことができない。

蜜美の死が、俺の心から動きを奪っていた。

「ちッ。本当に腑抜けてやがるなお前。タカぼんっておい、それは比翼心がお前を呼んだ名前だろう」

「タカぼんさんッ、どうしたんですか？」

走ってきたのは内藤だ。遅れて龍郭院の姿も見える。

硬直した心のままに内藤達へと目を向ければ、龍郭院が何故か地面へとへたり込み、内藤が俺へと、驚愕と動揺の混じった目を向ける。

「た、タカぼんさん？」

内藤の言葉に、吉備枯渇が顔を歪め、唾を地面へと吐く。

「不快だ。不快だよそこのメスガキ共。貴久ちゃんをその穢れた名前で呼ぶな」

「枯渇……」

俺を見る枯渇の目は、失望と憎悪の混じった目だった。

「貴久ちゃん、さっきから本当に殺意に塗れた目だなぁ。見て楽しかったけど、感情だけだよ、その目は。

誰に怒りを感じてる？　自殺した黒霧蜜美かい？　それを止められなかった君自身かい？　どうも、わかってないようだけれどね」

「蜜美の死は……」

「アンタの責任だろう。貴久ちゃん」

枯渇は奪った勇者の顔でため息を吐き、

「さてはて、あれらを潰せば君は貴久ちゃんにもどってくれるかな？　どうせまた妙な事を企んでたんだろ？

全部ご破算にしてやれば、思考も戻るでしょ」

地面から鹿島の刀を奪った枯渇が内藤や龍郭院へと歩いて行く。

俺の心は、魂は凍ったままだ。

「やめろ枯渇」

「いっひひひ。興奮するなぁ。興奮するなぁおい。貴久ちゃんの命令無視してるんだぜ妾ぁ。

いっひひひ、妾の雄と雌が同時に絶頂しそうだなぁ。ひひひひ

ひひひ」

第二世代魔王【簒奪者】吉備枯渇は、懐から炎の魔王【アグル・ティアコラス】の顔を取り出し、顔へと嵌める。

勇壮なる容貌の勇者から麗しき魔王へと変貌した枯渇が全身から炎を噴き上げた。

軍司令部の中央から、憎悪の炎が溢れ出す。

「やめろ……。枯渇……」

だが、言葉では止めていても、心が、思考が伴っていない。

それでは枯渇は止まらない。

（何故死んだ……。蜜美……）

疑問だけが内心に溢れている。

壱百捌拾弐／

おじさんの顔だった男が目の前で一瞬にして、禍々しい気配を纏った女性へと変貌する。

「妾（ワタシ）の魔剣は便利でな。一度喰っちまえば、その魔剣へと変貌することができるんだぜぇ。

ひっひひひひ。変貌せよ、世界を騙せ、魔欺瞞【嘲弄杯（ダミー・ザ・フォレス）】」

アラブ風の衣装を纏った女性が懐から取り出した杯から何かがしたたり落ちる。それはじわじわと女性の身体へと染み込み、涙の意匠となって美貌を飾る。

女性の身体へと纏わり付く炎が更に勢いを増す。

（私は、どうすればいい？　それに、なんで三号も二号も動かないの……）

炎を纏った女性の背後には、タカぼんさんがいる。しかし、彼は何も指示を出してくれない。硬直したように止まったままだ。

しかし、瞳だけがジクジクと爛れた殺意を垂れ流していた。

見ていると、頭がおかしくなりそうになり、視線を逸らす。

「タカぼんさんッ！　指示を出してくださいッ！」

「妾の貴久ちゃんをその穢れた名前で呼ぶんじゃねぇよ。雌餓鬼」

（懐に潜り込まれたッ。早いッ？！）

「吹き散らせ、【炎王】」懐で聞こえた声に反射で返す。ステップを踏み、くるりとターンを決める。直後にお腹を女性の拳が擦るものの、つい先日、新しく支給された制服を破壊するには至らない。

私のお腹に拳を突き出した形の女性の拳から、巨大な炎が吹き上がるのが視界の端に見える。同時に腰に吊していた、タカぼんさんからの新しい支給武器である【女剣ヴィシュヌ】を鞘から抜き出す。

「お、構えたな。ひっひひ、しかし、早いな。そいつが全速力かい？」

「いえ、もう少し上げられますよ」

返事を返しながら、周囲を見る。女性の炎を恐れてか、周りに人は寄ってこない。それは、それでいい。私がこの人を止めている間に、≪法の剣≫なりから援軍が来るだろう。

「止められるか、わからないけど」

剣を構え、女性へと向ける。

「来るかい？　ひっひひひ、さぁ燃やしてやろうじゃないか！！」

前傾姿勢になり、こちらへと走ってくる彼女に私は、

【【女剣ヴィシュヌ】搭載スキル【創氷壁（アイス・コフィン）】を発動します】

ぞるり、と私の意志に反応して、身体から精神力が奪われる。

――相手は魔王です。気をつけなさい。

体内のどこかから聞こえてきた声を無視し、前方を見る。

そこには、前傾姿勢のまま氷の牢獄に閉じ込められた女性が、時が凍ったかのように停止している。

「砕かれなければ死にませんので、効果時間が尽きるまでそこで大人しく――」

説明する私の前で、どろり、と第三層モンスターですら三日は閉じ込める氷が、溶け始めていた。

「ひぃッ！　ひっっひぃひひひ！！　炎の魔王をこの程度の氷で閉じ込めるたぁ嗤わせてくれる！！
はぁっはっはははははははは！！　世界を呪う炎を鎮めるにゃ！
世界を祝う水でないとなぁ！！」

身体を覆う溶けた氷を砕き、疾走してくる女性を前に、スキル発動直後で疲労している私は動けない。

炎を纏った拳が私へと伸ばされる。

「燃えて溶けて、灰になれッ！　雌餓鬼ぃいいい！！」

そうして、私の心臓へと伸ばされた拳は、

「なんの馬鹿騒ぎですか。連理貴久」

すぱん、と。私と女性の間へと叩き込まれた拳線（ライン）によって、届く直前で停止させられる。

「ッ……、空間切断だと？！」

ラインを警戒し、女性は急停止する。そして、背後へとバックステップで下がり、私の背後へと視線を向ける。

私と女性を隔てていたラインが、パリィィン、と音を立て、叩き割れた。

「助かりました。九十九さん」

「つまらない相手と戦っていますね。美咲」

振り向いた先にいるのは、メイド服を着た譲原九十九だ。

数メートル後方から拳を振り抜いた形の彼女は、無表情で、私たちを見ていたのだった。

壱百捌拾参／

連理貴久が大学から帰るとメイド服を着た女が、貴久の部屋の前に立っていた。

「蜜美……、お前」

途方に暮れた表情の女は小さく口を動かし、そうして、縋るような目で貴久を見つめ、視線を地面に落とす。

「何故ここに来た」

「私は……、その、貴久様」

「もう、そう呼ぶな。これからは、心が呼んだ、タカぼんの名で呼べ」

「嫌です……」

面倒そうに頭を掻いた貴久は、アパートの壁に背を預け、そうして冷たい目で蜜美を見る。

「お前との接触は、もうしない筈だ。あのとき、俺はお前に全てを託した。

お前も了承した筈だと思ったが。違うのか、蜜美」

「……、そうでもしないと貴方が、自ら命を絶とうとするからです」

「支配者が、敗北したなら潔く命を絶つべきだ」

「でも、私がその座に座るなら貴方はただの、一市民で終わる。死ぬ必要はなくなる」

「そうだ。お前が奪ったなら、お前が奪うなら俺も、屈辱に震えずに済む。

例え、それが懇願されたに等しい所行でもな」

そうして、貴久は鼻で嗤い、そうして蜜美を睨み付けた。

「それで、何故ここにいる。お前は支配者の筈だ。

そのお前が何故ここにいる？　俺を殺しに来たか？」

貴久の指摘に、蜜美が視線を逸らし、黙り込む。
貴久が彼女の腕を見れば、紙袋に入った食材が見えた。

「なんだそれは？」
「貴方に、食事を、作りたくて……」
「帰れ。お前はもう俺に傅く存在じゃない。
俺は、ただの三流大学生で、お前は、この国の支配者だ」
「連理はいつでも解体できるように――
「やめろ」

やめてくれ、と連理貴久は言った。

「俺をこれ以上、惨めな気分にさせるな。蜜美」
「すみません。でも……、貴方が、貴久様が、私にとっての……」
「帰れ。もう来るな」
「嫌です……。嫌、なんです。
貴方がいない世界は、貴方の言葉を聞けない場所は……。
お願いします。貴方の傍に私を置いて……」
「お前が懇願するから生きた。お前が約束するから誰も殺さずにいた。
唯一、俺を裏切らなかったお前だから、俺はお前を尊重した。
だが、これ以上、俺へ無茶を望むなら……。お前は――

俺の敵だ、と貴久は言った。
その日の翌日、黒霧蜜美は自殺した。

壱百捌拾肆～壱百捌拾伍

壱百捌拾肆／

地面に腰を下ろし、ぺたりと自身の頬に触れる。
温度のない皮膚。感覚はない。まるで温度のない石像に触れたような感触だけが返ってくる。

「俺は……、俺が蜜美を殺したのか……」

枯渇の言うとおりだった。俺が黒霧蜜美を死に追いやったのだろう。
まずは、それを認めよう。その上で、俺がどうすべきなのかを考える。
眼前で魔王の皮を剥ぎ、勇者の皮を被り直した枯渇が、聖なる弓を構えるのが見えた。
しかし、気にせずに自身へと意識を埋没させる。

（俺は、今、何を願っている？　考えている……？）

まさか、蜜美が死んで今更、俺が俺の命を永らえる必要などない。奴の願いは、生きた俺が生きたあいつの上に立つことだ。だから奴は自殺した。そうに決まっていた。
そして、蜜美が死んだ以上、この生に意味はない。
そもそも、尾張重三の殺害が為った時点で、俺の人生は完成していた。連理での支配はその延長線上に過ぎない。その後の俺は、自らの実力を試すために日本を支配し、そして比翼心に敗れ、全て終わっておくべきだったのだ。俺という人間の人生に蛇足は不要だ。
絶望を孕み、母が命を絶った時点で、俺の成長の方向は決定して

いたのだから。尾張を滅ぼし、父を殺し、俺の人生は完結した。
それでも生きたのは、蜜美が願ったからだ。

（心残りが、ないわけでもないが）

それでも、ひとつだけ、心残りがないわけでもないが、あれは、俺が生存していては哀れな宿命を背負わせることになる。
その未来を見ることもなど、望むべくもない。

（よし、死ぬか……）

ならば俺に残された選択肢は、自殺だけだ。
ようやく気づく、俺が放っていた殺意は、己に向けたものだったのだ。

「これもまた結末だ」
「……」

肉人形だけが、俺に注目していた。誰も俺を見ていない。周囲の人間は、魔王（コカツ）と覇王（ツクモ）の争いを見ている。
誰も俺を見ていない。止めるものはいない。極北銃を腰から抜き、額へと向ける。

「長い、敗北だった。これで、俺はやっと終われる」

引き金は、躊躇なく引けた。
おもちゃのような銃声が、軍司令部に響いた。

壱百捌拾伍／

貫いたのは、俺の脳ではなかった。
極北銃の弾丸を素手で弾いた為だろう、手のひらを消失させた内藤が座り込む俺を見下ろしていた。
遠く離れた位置から俺のいる場所へと一息に駆けて来たのだろう。呼吸は荒く、額には玉の汗を浮かべていた。

「何を――、何をやっているんですか貴方は！！」

手のひらの消失した手首だけで俺の手のひらから銃を弾き飛ばし、平手を振り上げた内藤が、俺の頬を打った。
絶大な腕力パラメーターに支えられた、手加減なしの一撃が俺の頬に炸裂する。
いや、俺の頭が首の上にあることからわかるとおり、最低限の手加減はなされたのだろう。
それでも、痛みは走っている。

「痛いな……」
「なんで、こんな、こんな真似をッ」
「俺が、もう終わっていいのだと、気づかされたからだ」
「わかりません。貴方が何を考えているか、私にはわかりません」

大粒の涙を零しながら、内藤は、内藤の意志で俺へと言葉を放つ。
その瞳の中に妖しげな気配はない。今は、抑えられているのだろう。

「すまなかったな。内藤。今まで迷惑をかけた」
「……、タカぼんさん？」

立ち上がる。≪支配の杖≫の総帥服を脱ぎ捨て、内藤の肩に掛け

た。総帥服に搭載されているスキルのひとつ、【自動回復】の効果で内藤の傷が止血されていく。手首からの再生はエリクサーを使えば適うだろう。

「肉人形、お前たちはついてくるな。内藤、お前もだ」

「タカぼんさん！　待ってくださいッ！！」

内藤の言葉を最後まで聞かずに、歩を進め始める。行き先は、どこでもいいだろう。

思えば、ここは元の世界から非常に遠い場所だ。一度ぐらい、街の中を見て回るのもいい。その後は、静かな場所を探し、死のう。

ああ、と嘆息した。この世界の全ては中途だが、俺の役割は譲原九十九を救出したことによって終わっている。あれなら、ダリアの最後の願いも果たしてくれるだろう。機械帝国は滅ぶ。物語は強制的に、譲原九十九の物語に切り替わる。

俺は、驚愕するほどに、清清しい気分に襲われていた。俺は、終わっていいのだ。

「タカぼんさんッ！　どこに行くんですかッ？！」

「……どこに、行くんだろうな」

かつかつと、軍司令部の外へ向けて歩いていく。心中には確信など何もない。ただ、終われるという感覚だけがある。

枯渇や、譲原が軍司令部から出て行く俺を見ていた。その目に何が映っているのかはわからない。

遠くから山県や、馬場たちがこちらを見ているのがわかる。

歩いた先で、金色の少女が俺を見上げてきた。

龍郭院は相変わらず、地面に膝をついている。苦笑が漏れた。

「タカぼん様？」

「立ち上がれ。お前はもう少し胆力をつけた方がいいな」

しかし、何度挫けても立ち上がることのできる資質は、得難い才能だろう。

ぽん、と龍郭院の頭を撫で、そうして俺は出口へと脚を向け、

「タカぼんさんッ！！」

振り返れば、内藤が俺を見ていた。強い、強い意思ある目だ。

「戻ってください。私には、貴方が必要です」

その目に、ふと、強い感慨を覚える。

踏み出そうとした足が、地面に吸い付いたように動かない。

あの目は、俺をまっすぐに見る目は、覚えがある。

あれは、そうだ。俺が蜜美と最後に出会ったあの日の最後に、

『貴久様。私は、絶対に貴久様を取り戻します』

あいつは……、だから、自殺などという真似をするような人間では……。

あ、と急に呼吸が苦しくなる。酷い、思い違いをしていたことに、今更ながらに気づいたのだ。

何も終わってなどいないことに。そして、俺がこのまま自殺を選べば、俺を裏切らなかった蜜美を、俺が裏切ることになることになることに。

枯渇が、見るものを不快にさせる笑みを浮かべていた。

「ひひ、いひひひひッ。貴久ちゃん。

妾は読んだぜぇ。ひっひひひひ。黒霧蜜美の遺書にはな。『連理

貴久を取り返す』って一文が書かれてたんだ」

その言葉で、足が完全に地面に固定される。死への憧憬が心の内より消失していく。

気づけば、九十九が俺を呆れた視線で見ていた。

「残念でしたね、連理貴久。勘違いとはいえ、あらゆる重荷から開放された状態は清々しかったでしょう」

そうして、くすりと笑みを浮かべると、何もかもわかっている、優しげな表情で告げるのだ。

「自分の体を見てみたらどうです？　体中に、怨嗟や恨みが纏わりつき始めていますよ」

言われて、自覚する。体中から、まるで腐臭のように、俺が今まで殺してきた人間やモンスターの、最後の言葉や憎しみの顔を幻視する。

これは、今まで自然と俺が纏っていたものだ。俺の脳に鮮明に記憶された彼らの最後だ。

そこには、つい先日見捨てた姉である九凪渚の顔もあった。

だが、それだけではない。俺が纏っているのは恨みだけではない。恨みの奥の奥、認識の深い場所。そこで彼らは俺を見ていた。内藤、龍郭院、馬場、山県、保育士に、子供、中には黒服の顔もある。

全員の名前も顔も俺は覚えている。無条件に俺を信じている者がいる。無垢に俺を見ている者がいる。俺を疑い、それでも信じている者がいる。

彼らは、俺へと期待と、希望と、救いを寄せていた。

この重みは、期待は、俺が今までやってきたことの証だった。

少なくとも、俺が勝手に終わらせていいものではなかった。譲原

九十九にだけは、任せてはいけない類の信頼だった。
息を吐く、内藤の名を呼べば、こちらへとすたすたと彼女は歩いてくる。

「タカぼんさん……」
「傷の治療をしてやる。来い」

俺の雰囲気が変わったことに気づいたのだろう。はい、と内藤は笑顔で頷いた。今更痛みを感じたのか、手首の先を押さえ、激痛に顔を歪ませながらも、明るい顔で内藤は俺の隣に立った。
俺は、隣の内藤に呼びかける。こちらへと顔を向けた内藤へと正直な気持ちを語った。

「ありがとう、お前がいなければ、俺は蜜美の願いを、踏みにじるところだった」
「え、あ、はい。その、蜜美さんっていうのは……」
「俺の大事な家畜（ペット）だ。誰を裏切ろうとも、あれだけは、裏切れない」

今も思い出せる。未だ連理がとてつもなく小さかったころに、全てが敵に回った状況でさえ、俺のために尽くした女を。
だが、と思い直す。終わりへの誘惑は、俺でさえ、酷く耐え難いものがあった。
敗北を重ねないため、このような決意ではこの誘惑を完全に断つ事はできない。
しかし、と内心で首を振り、背後へ声を掛けた。

「枯渇！　俺が戻るまでに、この荒れた場を丁寧に整えておけ！
龍郭院、枯渇を手伝え！！」

は、はい、と龍郭院が頷いた。枯渇がにやにやと俺を見る。

「ひひ、了解だ。貴久ちゃん。妾はもうちぃっと、殺伐さが欲しいけどなぁ」
「今は、これが俺だ。受け入れられないならいつでも滅ぼしてやる。そうでないなら働け」
枯渇は、肩をすくめ、「了解了解、ひっひひっひ」と無邪気に嗤うのだった。
その後ろ姿を眺めながら、俺は内心へと問いかけるのだった。
（蜜美、何がお前にあった……？）
疑問だけが深く、深く俺に中に残る。

壱百捌拾陸

壱百捌拾陸／

「おお、怖い怖い。連理は嫌だ。あのまま、死んでしまえばよかったのに」

連理貴久……、自分で作った自分の組織の連中と茶番劇を演じている残念なイケメン野郎を軍司令部の影になっている場所から眺めていると、俺の隣にいつのまにか立っていたおっさんが妙な事を呟いていた。

しかし、あいつを見ていると鹿島の白服野郎にやられた顔が疼く。がりがりと包帯の上からも痒みを発する治りかけの傷跡をひっかくと、じわりと血が滲んできたような感覚がし、慌てて手を引っ込めた。

「ちッ……、またやっちまった」

「おや、酷い傷だね。これ使うかい？」

「傷薬……、なんでアンタそんなもん持ってんだ？　あ、支給品袋ってことは」

「そう、さっき召喚されたばっかりでね。ふふ、使うかい？　どうせ≪法の剣≫に提出してしまうんだ。

これぐらい君にあげても私は構わないよ」

「う……」

怪しい、と感じたが、封も開けていない品だった上に、一週間前、鹿島の野郎に土下座させられた際に、コンクリートに叩き付けられた顔の傷は治っていない。

入ってから気づかされたが、≪法の剣≫に所属していると、嗜好

品はともかく傷薬などは個人では手に入らない。
仕事の際に怪我をした時に治療はしてもらえるが、一週間前に、連理の野郎の悪評をばらまいちまった俺の顔はその対象外だしな。
悔しさに涙が滲みそうになる。≪法の剣≫の下っ端連中に尊敬されているあいつのことを、比翼心をレイプしただの、殺しただのと大声で叫んだ俺は、≪法の剣≫の中で弾かれて過ごすしかなくなっていた。
しまいには、いろんな連中に陰口まで叩かれるしよ……。

「も、貰うぜ……。後で返せとか言うなよ」

にやついているそいつから奪うように傷薬を手に入れると、ばりばりと激痛に震えながら包帯を剥がし、傷薬の封を開けると、たっぷりと指につけて顔面になすりつける。
ここに来てからたまに見る超科学が作用し、肉がすさまじい速度で再生し、皮膚が顔面を覆っていく。
懐から手鏡を取り出して顔を見ると、すっかり傷は治り、傷跡もなくなっていた。

「へ、へへ。っしゃ！　っっしゃーーー！！　おっさんサンキュな！！　ひひ、おお治った、治ったぞ！！　俺の顔が治ったぜ！！」
「ふむ、よかった。ついでにこれも食べてしまうかい？」
「パラメーターアップアイテム、って、い、いいのかよ？」
「どうせ初期数はランダムでの支給だ。私たちで消費したって問題はないのだよ。ふふふ。
私だけでは消費できないしね」

嫌に親切なおっさんだった。だが、断る理由はない。パラメーターアップアイテムを使えば、日々の雑用が楽になるのだ。
塔の探索を専門としてる黒服連中の超人的な身体能力は、毎日パ

ラメーターアップアイテムを食ってるからって聞く。俺が何人掛かろうとも運べない資材を肩に担ぎ、軽々と歩く連中を思い出し、喉が鳴る。

とはいえ、流石に周りの連中に見られると怖いので、建物のもっと奥におっさんを連れ込むように引っ張り込む。

「か、隠れて食おうぜ。流石にばれたら袋だたきだ」

「ふむ、野蛮な組織のようだね」

「そ、そういや、おっさんの顔どっかで見たことがあるような」

「おや、私の事を知ってるのかね。いや、知らない方がおかしいな。うむ」

「アンタ、同じ世界出身か？　芸能人か何か、だったか？」

「有名人ではあるよ。ふふ。

それで、同じ世界出身というのは？」

「あ、ああ、俺も噂で聞いただけなんだが――」

渡されたいやに腹に溜まる果実を食べながらおっさんにこの世界に呼ばれた三つの世界の人間のことなんかを伝えていく。

この辺りは≪法の剣≫の一般人なら皆、知っている情報だ。たまに黒服連中がここがどういう状況なのかを大勢に向けて説明してくれるので、この程度なら俺でも教えられる。

おっさんはふむふむと頷くと、そういえば、と言った。

「君は、連理貴久を知っているのかね？　憎悪の目で見ていたが」

「ぞ、憎悪って。いや、高校の時のクラスメートだっただけで、……、まぁあいつのせいであんな目にあっちまったし、どうにかしてぇけどよ……」

「そうだな、吉備枯渇と合流してしまってはな」

「あ？　ああ、吉備枯渇。吉備枯渇か！　そういやいたな、あの超有名人。つーか、生きてたのか。あの戦争で死んだと思ってた」

「力のある金持ちは生きてるのさ。そういう術を持っている」

吉備枯渇、世界ランクの長者番付トップ3に入るほどの金持ちで、テレビに出まくっていた超有名人だ。つーか、俺でも知ってる国内、国外含めていくつもの企業の会長や社長を務めていて、【超獣】と呼ばれる程の企業乗っ取りの達人だ。曰く、身震いするだけで中小企業が潰れる男。

「手品できたのか……？　女の真似してたけどよ」

「うん？　あれは連理配下の超能力者だろう。あそこはそういった者たちの研究もしていた。非公式だがな」

「超能力って京都焼失事件のときの、か？　ネットで噂になってたけどよ」

「連理は連続殺人者（シリアルキラー）の蒐集や、独自の兵器開発も行っていた。そういう部門も存在するのさ」

「嫌に確信的に話すよな。おっさん、何者だ。あんた……え？」

ふと、気づく。そういえば、この男の顔を俺は見たことがあった。そう、テレビや新聞で一時期すげぇ騒ぎになって、でもいつか忘れ去られた――

「あ、あああ、アンタ……。ハンレンの……」

連理という企業に、日本全体が依存していたころ、テロやデモを行っていた連中、反連理主義者（ハンレン）。三日と持たず、一瞬にして揉み消されたが、確かにそれは存在していた。

「そう、あの男の支配には抗えなかったが、私は確かに、連理貴久に反抗したのだ。

そして、また機会が訪れた。この新しい世界で、この私に……！

！　ははは、ハンレンの火は消えないさ」
「あ、連理貴久。連理？　じゃ、じゃあ、一週間前のアレは連理の奴のホラじゃなくて」
「うん？　連理貴久の事を知らないのか。そりゃそうだな。あれはな、日本を支配した巨大な企業、連理をたった数年で築き上げた怪物なのだよ。信じられないだろうがな」
「信じるよ……。あれは、こっちに来てから異常な動きばっかしてやがる。今だって、今だってそうだ」

元連理中東部門の責任者にして、反連理主義者達をまとめあげたリーダー。百海坊出雲（ドウカイボウ　イズモ）。
禿頭の、ガタイの良いおっさんは、俺の答えに愉快そうに嗤うと、俺へと手を差し出してきた。

「連理に向ける憎悪は心地よいぞ。少年。何よりアレに苦渋を飲ませる快感はたまらん！
さぁ、巨人殺し（ジャイアントキリング）を始めよう。ハンレンの狼煙を静かに焚こうじゃないか」

出雲のおっさんが差し出してくる手は、確かな自信に満ちている。

（……、そうだ。どうせ、ただ≪法の剣≫に所属して、いびられるよりは）

それでもその手を握るなら、聞いておかなければならないことがあった……。

「勝算は、あるのか？」

にかりと嗤われる。それはそれは魅力的な、一度はこの男がハン

レンという組織のリーダーになったことを信じられる、力のある人間の嗤いだった。

「少年、君は実に初心者だな。いいか、教えてやろう。抗いとは、勝つために行うのではないのだ」

がっしりと俺の手を握ってきた男は、確かな口調で告げる。

「抗うために抗うのだ。耐えられないから抗うのだ。そうして世に疑問の種を振りまくことができるなら、それは確かに、私たちの勝利なのだよ。勝つ、負けるでは若いぞ？　ふはははははは。思想とは人の心に咲かせる花だ」

なにより、と彼は言った。

「連理貴久相手に、勝つ負けるの土俵こそ愚かしい。あれこそは、この世で唯一、盤外に立つ男だぞ。ただ殴りつけるだけでは届かんよ」

さぁ、と出雲のおっさんが問うてくる。

「君の名前を聞かせて貰おうか、同志。これより君は私の仲間だ」

躊躇しながらも抗えないものを感じ、俺は小さく、自身の名前を告げた。

「岩村だ……。その、よろしく頼むよ。おっさん」

うむ、と頷いた出雲のおっさんは、そうして背後を振り向いた。
建物の影になっているここは余り人の寄りつかない場所の筈だが、そこには確かに人がいた。
さぁ、っと頭が冷える。なんて危険な会話をしちまったんだという、恐怖感が襲ってくる。
しかし、その人物は、嫌に魅力的なその女は、超有名な、国民的アイドルのその人は――

「おもしろそーな会話してるじゃん。私にもちっと噛ませなよ。巨人殺し（ジャイアントキリング）、いや、連理殺しをさ」
「小山田、麗子」
「ＲＥＩＫＯ、って呼びなよ。どーてい少年。ははッ」
「ど、童貞じゃねぇよ」

日本を熱狂させたアイドルの登場に、心を掴まれながら、ふとおっさんに目を向ければ、

「初手から、すさまじい手が来たものだ。く、ははは、連理殺し。いいですな。連理殺し、ははははは」

確かに、狂喜していたのだ。
それこそが、ハンレンの源泉とも思われるような歓喜の表情で――

「思想の花、大輪に咲かせましょうか。はっはははは」

【都市に【大賢者】【剣聖】が出現しました】
【【剣聖】が宿主の魂の鎮圧に成功しました】
【【大賢者】が性向一致を経ています。寄生段階が進行しています】
【大賢者の【情報隠蔽】が発動しました。【大賢者】【剣聖】【聖

女】【勇者】【戦乙女】【魔皇将軍】の情報隠蔽を開始します】
【【暴君の目】が発動しています。判定に失敗しました。【戦乙女】の情報のみ以後も開示されます】

壱百捌拾漆～壱百捌拾捌

壱百捌拾漆／

「そういうわけだ。苦労を掛けると思うが、頼む」

そうして、この世界での俺の目的と、それをどうやって行うかについての説明を終えた。

「それはわかったが、貴久ちゃん。どうすんだい？」
「貴久ちゃんはやめろ。タカぼんと呼べ」
「断る。で、どうすんだい？　妾（オレ）は何をやればいい？」

私室には、≪支配の杖≫の幹部用制服を着た、吉備枯渇がいる。顔は、【吉備枯渇】という名前が一番浸透している、中年男性の勇者の顔だ。髭を弄りながら、宿屋備え付けのソファーに腰掛け、手元の資料をにやにやと笑いながら眺めている。

昨日の召喚で≪支配の杖≫は人員の強化に成功した。山県が頑張った結果だろう。とはいえ、未だ総勢３０名程度だ。

過去に提出させた分と、新規の人員の履歴書を枯渇は見ているのだ。

「だからさ、とりあえず勇者の殺害を貴久ちゃんは狙ってるってことでいいんだろ？」
「ああ、負けない為にもそれが重要だ」
「この催しの主催である機械帝国をどうにかするつもりはないと？」
「それは、後の話だろう。どちらにせよ、この茶番は終わらせる。その為の勇者殺害だ。
ああ、違うか。この物語の主役である勇者が潰せるなら、その後

ろは大した敵ではないという意味だ。
ただの組織や国相手に、俺が負ける道理はないからな」
「相変わらずの凄まじい自信だな。ま、おーけーおーけー。それを大目的に話を進めようぜ」

両手を広げた枯渇がゆっくりと頷きを返す。
ばらばらと資料がテーブルに散らばる。それらには視線を向けず、枯渇は言葉を続けた。

「貴久ちゃんのやり方はわかったが、こいつはあの技術を使うってことでいいのかい？　失敗はしないのか？」
「その為の内藤だ。それに、どちらに傾いてもあれは俺を欲するだろう。
失敗はしない。それだけは確実だ。どちらに傾くかはわからないが」
「ご愁傷様だな、あの小娘。ま、それはどうでもいいけどさ。確実に成功するならこっちは何も言わないさ。それで本当に妾が≪支配の杖≫を差配していいんだな？　後で文句は言わないよな？」
「今のうちにお前の方で使える人員を仕分けておけ。俺は適当に過ごさせて貰う。
四層の攻略も装備が整わないことにはできないしな。猫に技術を仕込みつつ、この都市に眠る施設や資産の回収を熱心にやらせてもらおう」

都市内に眠る施設。それは焼却炉や大型の冷凍施設、使われていない倉庫や、巨大なホテルなどだ。どれもが周囲に膨大に建設されている空のビルと同じ外装で存在している。故に、中を見るまではその中身が何かはわからない。
有用な施設の中には、武器や防具の素材となる鉱物や生物の素材、また、武具に組み込むための、スキルデータの入った情報端末や、

大量の食料などが眠っている。
中にはアイテムを回収してしまえば使い物にならない施設もあるが、武具工場のような有用すぎるものも中には存在するのだ。
偽装を看破し、防衛用の機械を排除できればそれらは完全に俺たちの物になる。

「それと、だ」
「それと？」
「機械帝国第二軍団長、あれと接触をする」

あの無数の少女人形たちの主。挑発的な女の台詞を思い出し、思い通りになることに抵抗を覚えるが、それも含めての決断だった。

「おや、決めちゃうのかい？　他の人物はいいのかい、貴久ちゃん」
「いいも何も、あれが一番与しやすい。俺の精神的な健康の上でもな。
軍団長の一人は、我慢する気になれん程の食人嗜好の外道。もう一人の諜報部とやらは、ダメだな。こちらと交渉する気が全く感じられなかった。
それならばあの少女人形のような、与しやすい方がいい。あれはこちらに、何か含みもあったようだしな」

あれが寄越した言葉は、直感として何かがある。そう感じられるものだった。最終的な判断は、それを暴いてからでも遅くはない。
執務机の上に肘をつき、ため息を吐く。

「まぁ、なんにせよ。お前が来てくれて助かった。
俺ひとりではこれからの作業もきつくなるからな。≪支配の杖≫の運営をこれからはよろしく頼む」
「ひひッ、ま、任せなよ。貴久ちゃんの期待に沿うように頑張らせ

てもらうからさ」
「なんだよ。気持ち悪いな」
いひひ、と笑った中年の男は、機嫌の良さを隠さずに言葉を続けた。
「いやいや、覇気のあるなしはともかくさ。君が再び、そういった位置に立っていることが妾には嬉しいのさ。いひひひひッ」
俺が返すのは嘆息だ。そうして、立ち上がった枯渇に告げる。
「猫を呼んできてくれ。今日から技術を仕込む」
はいはい、と手をひらひらと振った枯渇は、入り口の扉からすっと出て行った。

壱百捌拾捌／

技術というものの取得には個人差がある。
特にそれが個人の資質や才能に技量を依存させられるようなものである場合、その取得には膨大な時間や手間、技術的な問題だけでなく、資金や特殊な器具の用意も必要だった。
しかし、目の前の少女に限っては、それらの心配を全くしないで済んだようだったが。
「できたか？」
「あ、うん、おにーさん。できたけど……」
「けど？」

「意外にすんなりいくものだね、これって。驚いたよ」

俺の私室にある、俺が座る執務室から離れた位置のソファーに座る猫は、テーブルの上の、空のグラスの手を翳す。

猫は一息に息を吸い込み、吐く。気合いの声を上げた先にあるものは、水で満たされたグラスだった。そうして猫は再び息を吐く。

猫が手を下ろす。そこにあるのは、中身の消失した、空になったカップだった。

「できてるな」

「あ、うん。でも、なんでこんなこと覚えさせようと思ったの？」

「知覚できてる人間が、いるのといないのとでは、俺の計画の成功率は大きく変わる。雲泥の差という奴だな。

ああ、うかつに死ねなくなった以上はサポートがいる。それだけの話だ」

「死ねなくって、いや、譲原の姫に、枯渇とかいう人がいりゃ死にはしないでしょ？

肉人形だっているみたいだし……。つーかさ」

何かを思い出すように顔を歪めた幸村は、そうして再びカップの上で俺が教えている技術の練習を始める。

水を満たし、水を消失させる。それだけの行為を延々と。

「譲原の姫と互角に戦える人間がいるとは思わなかったよ。ねぇ、私も、この技術を習得すれば……」

「譲原はどうにかできるかもしれないが、枯渇は無理だろうな。戦闘能力の有無とは別に、この技術は対象に相性が存在する」

「吉備枯渇、ね。急に現われた新人の人に、指示とか全部任せて良いの？」

「資料は読み込ませてある。俺と同等の働きをする。あれは、元の

世界で俺の部下をしていた人間だ」
「さいですか」
諦めたように言う猫は、コップを逆さにし、くるくると縁に指を滑らせながらカップを回していた。
指を避け、水が床へと垂れていく。その水量は尽きることがないように見えた。
「この技術が効かない相手って誰なのさ？　一応、聞いておきたいんだけど。
誰にでも効くわけじゃないの？　あ、同じ技が使えるおにーさんは別としてさ」
「前提として」
「前提として？」
感覚として、引き出す。検証はしていないが、この技術については完全に理解している。
だから確証のある話として話していく。
「運のパラメーターがあるだろう。それが２００以上ある物体に対しては、直接的な操作はできない。
それと運の要素とは別に特定の人物だな」
「運のパラメーター……。いや、でも１００以上は上げてる人っていないよね。お兄さん以外」
「いや、譲原九十九は超越している。しかし、直接的な操作はできなくても間接手段が使えるならそれほど手間ではない。
とはいえ、本気での殺し合いになればその結果はわからないがな。殺害が可能である、と現実に可能ってのはまた別だ」
「あー、うん、まぁ、わかるよ」

生身で空間を切断できる化け物である譲原九十九について思い出したのだろう、冷や汗を垂らしながら猫は小さく呟いた。

「で、特定の人物ってのは？」

「勇者および魔王、あとはその関係者。

こちらの操作の片方を恣意的に選ぶことができる物語上の重要な要素だ。

お前には、わからないだろうが」

「魔王、勇者、物語ねぇ。わからないなぁ。それって具体的にどういう人の事を言うの？」

「運命に選ばれている人間だ。運が良いとかそういうことではなく、連続した何かの為に必要な物を、必要な時機に入手できる人間。

失敗したとしても、結果として必要なものを手に入れる人物だ。

勝敗にかかわらず、たどり着いてしまう人物のことだ」

ぽかん、と猫は俺を見て、そうしてわからないというように手を広げた。カップはくるくると空中で回転し、水を床に注ぎ続けている。

その床は水に浸ることもなく、落ちた水は中途で全て消え去っていた。

その様子を見て、感覚と理論だけで使いこなせていることに満足する。

「わっかんねっす。で、その運命がどうしてこの技術を無効化できるのさ？　運のパラメーターってのもよくわからないしさ」

「猫、どちらも意味は同じだ」

検証も実験も必要はない。これについては俺が知っている事柄だからだ。既に、知っている情報だからだ。

これについては、過去に魔王や勇者と敵対している俺は、知るこ

とのできる立場にあった。

「彼らの目は、物語上の真実しか選び取れない。だから、その登場人物である彼らは、運命に干渉するものに対して、抵抗力を得ることができる。

演出上としての効果でない以上は、稚拙な妨害としてなかったことにされる。もしくは恣意的に結果を選り分けられる。

無駄ではないが、相手を利することにもなりかねない。諸刃の刃なんだ」

もう一つの質問についても一息に言ってしまう。こちらは、推測でしかないが、間違ってはいないはずだった。

「運のパラメーターについては、運命の略称だろう。運を上げているのではなく、運命に干渉するために必要なパラメーター、登場人物の権能を再現するための手段だな。

まぁ、運が良くなるのに違いはない。悪運か機運かはまた別だが。

それと運命のパラメーターの設置理由については、俺たちのような存在に対する抵抗手段だろう」

「あー、まぁ、これについてはわかるよ。学んでみてわかったけど、こりゃ、ほんと反則だもん」

「そうでもないんだがな。

ああ、それと余り無茶をするなよ。制約はないが、やり過ぎると”外れて”いくぞ」

「外れってのは？」

「物事が要素としかとれなくなる。人間が人間として見れなくなる。何事も取り返しがつく要素と勘違いするようになる。そもそも、自分さえもなくなっていく」

「……、ああ、それもわかるよ」

ため息を吐くように猫はその水の発生を止め、周囲を見る。
その目は、きょろきょろとこの執務室を興味深そうに眺めていた。
まるで、初めて見る光景を眺める子供のような目だった。

「おにーさんが見てる世界。全てに干渉可能な世界。
そりゃあ、そこまで化け物じみてるわけだよ……」

それは、要素のひとつひとつを選び取り、玩び（モテアソ）、転がす生意気な子猫の目だ。
彼女は彼女の前に漂う、分子一つ一つの構造を戯れに変え、にひひ、と笑った。
力を手に入れ、はしゃぐ猫に対し、忠告をしておくことにする。

「ひとつだけ言っておこう。
俺は、この世界で、この技術の使用は、手品程度にしか使っていない。
お前も、時期が来るまでは使用を控えておけ。所詮は、選り分けられる運命だ」

うん、と猫は頷いた。わかっているのかわかっていないのか、とはいえ、いずれ知るようになるだろう。

壱百捌拾玖～壱百玖拾

壱百捌拾玖／

猫に改めて探索を任せ、俺は軍司令部へと訪れていた。
遠くに、先日の戦闘行為で破壊されたコンクリートを直している≪支配の杖≫の人員が見える。後で肉人形に言付けて、飲み物を用意させておこう。
彼らには声を掛けるだけに留め、軍司令部の中へと進んでいく。
そうして、首を傾げた。
奇妙に空気がざわついていた。稚拙だが争いの臭いと音がする。
周囲を見れば、俺へと声を掛けようか掛けまいかと迷っている中年の女性が一人だけ見えた。
その顔は、止めなくてはならないとわかっているのに、止めて良いものか迷っている人間のものだ。

「どうした？」
「た、タカぼんさん。いえ、その」

首を傾げれば、彼女の視線の先には、入り口からでは死角になっている場所で、複数の少年少女に囲まれている少女が見える。十三か、十四歳程の少女だ。
純粋な西洋人の顔をした、金色の髪の少女。その少女を囲うようにして、少年や少女が殺意と憎悪の混じった拳や蹴りを加えていた。
少し呆然とする。堂々と≪法の剣≫の内部でリンチが行われていたからだ。

「三号、止めさせてこい。なんだ、これは」

中年女に顔を向ければ、女はさっと顔を背けてしまった。後ろめたさの籠もった仕草だ。

俺の前で舐めた真似をしてくれる。こいつでは埒が明かない。

「武満は何をしているッ！　白服を呼んでこいッ！！」

「あ、あ、あの、せ、説明しますのでそれだけはどうかッ！　武満さんに、タカぼんさんに知られたことを知られたら」

「あ？　今、お前は顔を背けただろう？　お前から聞いても無駄だ」

俺の大声に反応して遠くから誰かが駆けてくる。黒服の一人だ。

「た、タカぼんさん。どうしたんですか、大声を上げて」

「説明しろ」

びっと、三号に取り押さえられた少年や少女を指指す。肉人形に庇われるようにして、身体や顔に痣を作った少女が見える。

黒服は困ったように俺を見た。

「ただの西洋人ですね。どうしたんですか？」

何も疑問に思っていない顔だった。

ふと、気づく。あの少女をリンチに掛けていたのは、武満と同じ世界出身の子供達だった。そして、目の前の黒服も同じ世界出身だ。

対して、中年の女性は、銀稜台の出身者だ。

困惑の意味や、目の前の男の疑問にも思っていない仕草に合点がいく。

「ひとつ聞いて良いか？」

「はい、なんでしょうか？」

「お前らの世界で西洋の人間はどう扱われてる？」

ははは、と彼は笑った。なんでそんなことを聞くかという無邪気な顔で答えた。

「殺すべき敵ですね。はい。
ここに召喚されたことは少し困りましたが、たまに西洋連合の人間が召喚されるのはとてもとても嬉しいことです」

そうか、と俺はため息をついた。

「わかった。あとで武満のところに行くと伝えておいてくれ。一緒に昼食を食おう、と」

壱百玖拾／

黒服が去った後に、壁際で肉人形に寄りかかるようにしてこちらを見上げる少女の傍まで歩いて行く。

「生きてるか？」

傷だらけの少女は、俺を見上げ、警戒心に満ちた表情を向けた。
ふむ、と全身を見る。打撲と裂傷が見え、服には血も滲んでいた。

「貴方も……」

少女の口元が微かに動く。「私を叩くの」と言ったように見えた。
ただ、すぐに顔を俯けてしまったが。
とはいえ、特にこの少女から信頼を得る必要は認められないので、下手な言葉は掛けず、三号から受け取った傷薬の蓋を開ける。

「日本語が喋れるんだな」
「……そういう教育を受けてきてるから」
敵対国家の言語を扱えるということは、元の世界ではそこそこに身分が高いのだろうか？
しかし、疑問は中で留め、指に軟膏をべったりと付ける。
「傷を見せてみろ。治療をしてやる」
「私に優しくするってことは、そういう趣味の人なの？」
「は？」
嫌悪に滲んだ目を向けられる。言葉を返せないでいると、少女は嗚咽と共に泣き出してしまった。そういう、趣味？　どういうことだ？
どういう意味かわからず、それでも時間を無駄にするわけにもいかないので、とりあえず少女の手を取り治療を始めようとした瞬間。
ぱしり、と頬を叩かれていた。
「触らないでッ！！」
「あ、おい」
ざっと、肉人形の傍へと後ずさる金髪少女。まいったな、と思いつつ、仕方ないので少女が隠れている二号へと軟膏を放り投げた。
「二号、治療してやれ」
「あ、ちょ、これ、アンタの？！」
「そうだよ。俺はお前には何も含みを持っちゃいないよ。大人しく治療されなさい」

諭すように言葉を掛ける。自分でもできてるかわからない笑顔を浮かべるが、少女にはぷい、と顔を背けれる。しかし、二号につかまれると少女は渋々と抵抗を辞め、二号の治療を受け入れていく。二号の化け物のような姿形と膂力には勝てないと思ったのだろう。

「アンタ、さっきの笑顔っぽいの、変な顔だったわよ」

「そうか、変な、顔だったか？」

ぺたり、と自分の顔に触れる。実のところ、子供に対して、俺はうまく接することができているかわかっていない。

素直な彼らの目というより、彼らに対して、俺が何かをしてやれるのかという気分に襲われるからだ。

それはきっと、――

「そうね。それに子供に甘いのね。アンタのそんな顔、私初めて……え？」

「俺とお前は初対面だ、ろ？」

少女の奇妙な発言。金髪碧眼の少女は、自身の頭を抱え、何事かを呟き続けている。

「なに、これ、私、こんな記憶知らない……。タカぼん、連理貴久……。機械帝国？

わからないわからない。こんな記憶知らない私じゃない私は生きたまま解体されてなんかいないッ？！」

そうして、自身の身体に触れ、治療を行っている二号の顔を見た少女の表情が止まる。「や、やめて、私に触らないで私を生きたまま殺さないで、やめてやめて触らないで殺さないでバラバラにしないでいや、いやぁあああああああああああああ」ぐるんと眼

球が回り、少女が絶叫を上げた。
俺を見ていた中年女が何事かと俺を見るが、この光景に俺は何も言えない。
しかし、少女の背が盛り上がり、めきめきと音を立てているのを見て、俺は口元を押さえる。
少女から感じられる気配は、二つ？　いや、違う、俺や内藤のように、中に何かがいる……ッ。

「ちッ、二号！　押さえてろ！！」

跳ねる少女の身体を二号に抑えさせ、少女の眼球をのぞき込む。
これでどうにかなるとは思えないが、ないよりはマシだ。

【スキル【魅了の魔眼：抗えぬ瞳】が発動しました。レジストされました】

スキルを使ったことにより、眼球に酷い痛みが走る。≪支配の杖≫のメンバーならば、これで抑えられるだろうが、この少女はそうではない。≪支配の杖≫の構成員ではないため、寄生スキルに対する抵抗を与えられない。
目を目を合わせ、更に発動を重ねる

【スキル【魅了の魔眼：抗えぬ瞳】が発動しました。レジストされました】
【スキル【魅了の魔眼：抗えぬ瞳】が発動しました。レジストされました】
【スキル【魅了の魔眼：抗えぬ瞳】が発動しました。レジストされました】

叩き込むようにして、魅了の魔眼を連続使用する。三号が俺に寄

越したＳＰ回復剤を即座に服用する。スキルの負荷で激痛に襲われる眼球は無視をする。少女は俺に対する寄生スキルを何も使っていないらしく、スキルに損傷は起こらない。続けて、何度も魅了の魔眼を叩き込んでいく。

俺の魔眼スキルをレジストさせることにより、少女が抵抗する余地を作ってはいるが、少女の意識は戻らない。ガクガクと震え『機械帝国に呪いあれ。機械帝国に呪いあれ。機械帝国に呪いあれ。機械帝国に呪いあれ』と母国語らしき英語で呟き続けるだけだ。恐らく、知能のパラメーターが低すぎて寄生スキルに対して全く抵抗を行えていないのだ。

端末を懐から取り出し、アナライズモードを作動させる。感覚でも何が起きているかは理解できているが、やはり正確な情報は端末に頼るしかない。

ＮＡＭＥ：アリス・ナイングラシス

ＨＰ　１０／１０
ＳＰ　１０／１０
腕力　４
硬度　４
俊敏　４
知能　４
運勢　０

能力【非開放】
毒蛾の女王【ダリア】　に【寄生】を受けている。

能力
【言語習得者】：複数の国の言語を扱えます。

【薔薇の血筋】：西欧連合の高貴な家の出です。
同国人に対するカリスマ（中）の能力を得ますが、大日本帝国民に憎悪判定があります。

【アリス・ナイングラシスが状態：【寄生】に対するレジストに失敗しました。自我消失の危険があります。知能の値を上げ、抵抗値を上昇させてください。】

「ダリアだとッ！　三号ッ！！」

寄生スキルの元に、驚く暇も与えられない。少女の背からはめきめきと何かが現われようとしている。既に少女に、意識や生命があるのかも怪しい状態だ。
しかし、三号から受け取った知能パラメーター１０ＵＰアイテム、【深遠の紙片】を少女の口に三枚含ませる。これは即座にパラメーターが上がるわけではない。多少のラグがある。
その間に俺ができることは、と考え、覚悟を決める。この少女には、まだ未来があった。俺に助けを求めてきたわけではないが、助けたのならば、助け切らなくてはならない。
少女のだらしなく下がった手を握る。

「助けたんだから、最後まで助ける。当たり前のことだ」

少女の消失した意識には届いていないだろうが、届く事を祈り、言葉を掛ける。ぴくりと、指が動いたような気がした。
強く握り返す。そうして俺は、少女ではなく、少女の中のダリアを意識し、自発的に己のスキルを使用した。

【【支配者の杖】を発動します】

抑えていた力の解放に、ぞくり、と全身が震える、両腕に全能感が発生する。軍司令部全体が、まるで俺の身体の延長のように感じられる。

感覚が脳全体に押し寄せてくる。しかし、知覚範囲（ソレ）を抑える。限界まで抑える。俺のかつての支配を模した、力の具現たるスキルは、限定的に力を制限されているとはいえ、下手に扱えば、俺と同じ世界の出身者の意識を全て刈り取ることもできる異形の力に変貌している。

もう支配者でない俺がこのスキルを使うことの矛盾。心の悲鳴を押さえつけ、知覚を西洋少女の内部だけに向ける。

そこに胎動するのは、死んだはずのダリアの姿だ。記憶も精神も、魂さえもがダリアのものだった。

他の魔族ならいざ知らず、ダリアからは、肉も心も受け取っている。そうして、彼女は俺に全てを譲り渡し、故にこそ、彼女は、今では俺の支配下にある。

だから、俺は、彼女との約定に従い、再び彼女を終わらせる。

【【絶対殺害権限（オーヴァー・デッド）／血と心臓（ブラッドハート）】を発動します。領内の【毒蛾の女王】を殺害しました】

命を構成する大事な何かを握りつぶした感覚が両腕に発生し、確実にダリアをもう一度殺せたと俺は確信を覚える。

後味の悪さを感じるが、俺に何かを感じる権利はない。吐き気にも似た何かを心の奥に嚥下し、結果に目を向けた。

【魅了の魔眼】と【支配者の杖】のスキルを停止させる俺の目の前で、金髪少女の背が、内側から小さくなっていた。少女の肉を用い、内側から巨大に成長しようとしていた力の塊は、無事少女の中に再び収まったのだ。

「うぅ……殺さないで……殺さないで」

金髪少女が、握り続けていた俺の手を小さく握ってくる。子供の小さな手だ。俺だけに助けを求めてくる、子供の手だった。

それにどうすれば良いかわからなくなって、俺は、小さく握り返すしかできなかった。

壱百玖拾壱～壱百玖拾弐

壱百玖拾壱／

ダリアの肉体だけを殺害したために、未だに寄生の解けていない西洋少女を二号に預け、俺は、軍司令部内の依頼端末の前で、相変わらず言葉遣いのおかしいＡＩに頼み、あの少女人形の場所へと転移した。

奴の思惑通りになることは癪だが、予定通りなことに変わりはない、何より聞かなければならないことがあった。

「相変わらず、殺風景な部屋だな」

暗闇の部屋。テーブルと椅子、そして天井から降り注ぐ光だけの空間。

テーブルにつき、紅茶を飲んでいる少女人形の前には、俺へ向けてだろう、あらかじめ這い蹲った少女人形が用意されている。

ぴくり、と頬がつり上がる。つかつかと少女人形に近づく。

即座に腰から引き抜いた極北銃を、這い蹲った少女人形の額に当て、撃ち貫いた。

テーブルの対面に座っていた少女人形――中身は機械帝国第二軍団長、ディノメア・レインハート――の身体がびくりと驚愕に震える。

「え、と……気に食わなかった？」

「お前は俺を、餌を与えられて喜ぶ家畜だと思っているのか？」

テーブルを回り、少女人形を蹴り飛ばす。そうして、その背に腰を下ろした。途端、俺の口元が屈辱に歪む。

嫌に座り心地が良かった。

「……背中の部分を重点的に改造してみた」

自慢げに言われ、思考パターンを読まれていることに苛立ちが起きる。が、ここで癇癪を起こしても話は始まらない。

深いため息を吐く、だが、極北銃を少女人形の後頭部に当てた途端、脳裏にあの少女の苦悶の表情が浮かぶ。

舌打ちと共に、極北銃を腰に収め、少女人形の背に座りながら言葉を続ける。

敵の前とはいえ、冷静にならねばならなかった。

「質問、いいか？」

「……どうして私の元に来たの？」

「お前が一番与しやすいと踏んだからだ。業腹だがな」

悪意を込めて、ぐりぐりと少女人形の頭に拳を当てる。それに対してくすくすと人形が声を上げた。喜ばすだけだったために、舌打ちと共に行為を止める。

それで？　と少女人形が俺を見上げた。人形そのものの美を持った顔が、俺に対して向けられる。

「……寄生とは、なんだ？　あれは――」

「ストップ。考え事をこの部屋で出してはいけない。女王が聞いている」

「ああ、了解だ。それで聞きたいことがある」

「……なんなりと」

あの表示を思い出す。毒蛾の女王ダリア。その表示を……。

寄生スキル、その寄生とはどういう意味だったのか。いや、まず

は現実的な話だ。

「寄生を解く方法はあるのか？」

「……回数制限があるけれど……ある」

どういうことだ、と考え、首を振る。素直に聞くのが一番早い。

率直に問うた。

「どうすればいい？」

「肉人形を使えばいい。〝寄生対象〟とコンタクトを取り、了解を得、適切な施設と道具を用い、寄生を移せば寄生は解ける」

「それは……」

その答えに、絶望のような感情が心を覆う。

それは、それだけは、俺がやってはならない行為だった。

俺が、勝利の為にではなく、ただ私心の為に、誰か一人を特別扱いすることは許されない。

肉人形の数は、俺が知る限り、三体。俺が持っているのは二体だが、しかし、あの少女を肉人形で救ってはならない。

それでも、一抹の願いを込めて、質問を続ける。

「寄生は、俺が見た、あの少女一人なのか？　内藤や、敷条のような、〝アレ〟の一味ではない寄生は、彼女一人なのか？」

少女人形は、いいえ、と言った。そうして、彼女は、

「寄生対象者は、現時点で二百五十はいる。

ついでに言うなら、≪法の剣≫の地下施設で、五人程、寄生解放された」

「……寄生、解放？」

「寄生対象者が、過度の精神的重圧に晒されると、中身が出てくる」

中身が、出てくる……？

それは、あの少女のような状態を言う筈で……。

何故、という疑問が俺へと届く。それに対して、少女はにやりと口元を歪め、

「我々は【大日本帝国】世界の住民が生来の憎悪対象としている、西洋連合の人間を何人か、こちらに召喚した。

彼らは≪法の剣≫に所属し、保護を訴えたが、≪法の剣≫は彼らに人権を与えなかった。タカぼんにさえ隠している罪人用とは違う、地下牢獄に閉じ込め、日々責め苦を与えていた」

「……、あ？」

それは、タカぼんと呼ばれた事を無視させる程度には衝撃的な事実だった。

やはり、武満は俺にわんさかと重要な事を隠していた。重大な裏切りだった。しかし、と思考を落ち着かせる。

俺とて、奴に隠してることなど山ほどある。お互い様だ。ここで責めるべきは、塔の攻略にかまけ、武満を自由にさせ続けた俺自身だ。

内心で俺が俺を責める間にも少女の話は続いていく。

「結果として、【銀王≪フェデルク≫】【肉王≪ラン・パーン≫】【雷機≪ガルダフ≫】の二体の王と一体の守護機械、魔銃【鉛色の銃】、幻想器【枯れた花】が解放された。寄生対象の人間は五人とも、寄生体に、肉体を復活の材料にされ、死んだ」

つまり、解放とはそういうことなのか？　あの西洋少女に起きたことが、他の人間にも起きていた？　結果として、虐待された人間

の腹の中から、何かが溢れ、食い破った、という事か？

「それは、どうなった……？」

「憎悪のままに破壊行動をしようとした王と守護機械は≪法の剣≫が破壊した。魔銃と幻想器は≪法の剣≫が所有している。ちなみに魔銃も幻想器も、強力な武装。≪法の剣≫と敵対するなら気をつけた方が良い」

「……、もう一つ聞いて良いか？」

なんなりと、と少女人形は俺の尻の下で、澄ました顔をしている。

俺は、恐る恐る、それを口にする。

「寄生スキルの持ち主が、いや、もう言ってしまおう。俺たちに寄生している”魂”とやらは、宿主や肉体が滅んだら、どうなる？」

あえて、心や精神とは言わなかった。そうではなく、魂という言い方が適切なように思えたのだ。

それは俺が、ダリアの肉と心を預かり、受け継いだからに他ならない。俺が受け継がなかったのは、終わらせたと思ったのは、彼女の魂だけだ。

果たして、彼女は言うのだ。

「……わかっていると思うけれど、この事実から導き出される結論を、貴方は口にしてはならない。

召喚された人間に寄生した、かつての機械帝国の王や高位魔族、神器や、高位武具に宿った魂は――」

ディノメア・レインハートは、言った。

それは俺が、勇者を殺せば、俺が終わるのだと告げる、一つの真

実だった。

「死ねば、都市を覆う蓋によって都市内に留められる。そして新たに召喚された、寄生できる対象に寄生し、潜伏するようになる。なお、一度殺された寄生体は、記憶が継続しているため、ほんの小さなショックで宿主を食い破り、解放されるようになる」

言葉が出ない。

いや、事前にディノメアに止められなければ、感情のままに、それは勇者にも適応されるのかと、聞かなくてもわかることを口に出すところだった。

勇者が、俺に殺されたことを記憶し、なおかつ即座に寄生から解放されるならそれは……。

いや、誰かが勇者を殺した時点で勇者の解放が確定されるなら。

そして、この物語が勇者の物語である以上は……。

（俺では、勝利できない……？）

かつての疑問が蘇る。

そもそもモンスター側の勝利条件が勇者の殺害であるならば、全力で召喚された人間を殺し尽くせば良いだけの話であるのだと。

俺は、ダリアに会った時点で気づいていたのだ。

この物語は、単に、殺すことが難しい勇者を殺すのではなく。

殺しても殺しても蘇る勇者を、どうにかする物語なのだという事に、俺は今更ながらに、気づかされるのだった。

壱百玖拾弐／

呆然とする俺に、労るように少女が声を掛ける。

「……大丈夫？」
「……、俺に情けを掛けるな」

この程度の苦境、何度も俺は……。と考え、絶望の吐息を吐く。
最強の財と力と兵器を持った兄を死に至らしめる事に成功した際にいた部下のうち、吉備枯渇は手元にいる。
しかし、俺が、唯一絶対に信頼する腹心の蜜美は、自ら命を絶っていた。

（蜜美なしで、俺がこの苦境を乗り越えなければならないのか……？）

弱音を吐きそうになる心を制する。奴を突き放したのは俺だ。だから、俺が、俺だけで、やらなければならない。
全身から力が抜けそうになる感覚を、気力で支え、呟く。

「また、最初に戻っただけだ。この程度、乗り越えたことのある苦境に過ぎん」
「……そう。よかった」
「は、慰めているつもりか？」
「貴方にはやってもらわなくてはならないことがある。……潰れられては、私の計画に支障が出る」

唾棄すべき言葉だった。嘲りを口元に浮かべ、俺はどっかりと腰を下ろす。
体重を掛けられても少女人形は、涼しい顔で俺を見上げてくる。

「貴方に折れられては困る。だから、教える」

なんだ、と顔を向ければ、

「寄生に腹から食い破られないために必要なものを教える。鍵を出して」

「鍵ってと、これか」

懐からじゃらりと鍵束を取り出す。未だにエレベーター使用以外に、用途のわからない鍵の群だ。

「これらは基本的に、魂の封じられた機関や施設を動かし、魂の秘められた武具の真の力を発動させる鍵だけれど。

鍵名に対応する寄生を制御するための手段としても存在している。

それに、都市内の段階がある程度進んだ状態ならば、後発者が、即座に力を得る為の手段でもある」

その言葉に一人の人物が思い浮かんだ。譲原九十九。あの女は寄生スキルを自在に操っていた。

俺の思考に気づいたのだろう。少女人形は頷きながら言葉を続けていく。

「そう。譲原九十九のような存在。とはいえ、１５日目現在で使うようなものではない。今は、他者に気づかれずに鍵を集めることに終始すべき」

「≪法の剣≫はこのことを知っているのか？　奴らは何をしている？」

「……魂の蒐集。そちらを優先している」

「それを話して良いのか？」

「……私は、貴方に賭け金を積み上げている。≪法の剣≫については、それほど期待していない」

ふん、と俺は鼻を鳴らした。少女人形は無表情だ。感情は全く読み取れない。

何をさせようとしているかはわからないが、随分と親切なことだった。

「魂の蒐集で、何ができる？　いや、そもそもどうやって蒐集している？」

「魂は寄生対象の心臓に宿る。だから、心臓を抉り取り、特殊な容器で保存することでできるけれど、まだそこまではしていない。

今は、都市内の稼働状態の施設や、特殊な条件―ショップの限定販売や、都市内の捜索―で手に入る特殊な武具の動力を抜き出して、それに秘められた魂を抽出している」

「魂……。蒐集した寄生体を使って何をするんだ？」

「寄生対象に寄生している寄生体のコントロール。とはいえ、対応する鍵とはまた別になるけれど、寄生体の魂を加工することで寄生している魂の制御装置が作成できる。

寄生体の性能を完全に引き出すことはできないけれど、それなり以上の力になる。

それに……」

少女は続けて言う。「≪法の剣≫も鍵を持っていないわけではない。あれは都市内にも配置している」と。

頭の痛い話題だった。

「……とにかく、今は鍵を集めることに終始して」

「俺に指図するな、と言いたいが。

わかった。なるべくそちらにも力を入れよう」

「……そちらにも？」

「こちらとて、牙は研いでいる。好き勝手はさせんよ」

そうして、少女の寄生を抑える手段を知った俺は、手の中にある鍵に視線を見下ろした。

三階層の攻略で手に入れた、【毒蛾の女王】の鍵だ。奴を本当に眠らせる為に必要なもの。

ぐっと、握りしめ、そういえば、と俺は、気になったことを問いかけた。

「そういえば、西洋連合からしか、外国の人間は呼び寄せていないと言ったな？」

「……そうだけど、何？」

「いや、≪法の剣≫でまだ監禁は続いているのか？　ならば何故、あれは外で迫害を受けていた？」

それは、と少女は口ごもり、

「……軍司令部に戻ればわかる」

そう言ったのだった。

壱百玖拾参

壱百玖拾参／

『鍵の使用方法は、寄生対象に、寄生体と一致する鍵を使用すれば良い、対象に突き刺し、捻る。それで寄生を制御できるようになる。……それと、これは忠告。”一部”の人間は、心臓を取り出し、鍵に加工しようとしても、けして加工できない事を覚えておいて。ちなみに、”一部”については、……言わなくてもわかると思う』

ありがたくも主要人物について釘を刺されたことを思い出し、口を歪めながら懐の鍵を、二号に抱えられたままの少女の胸に挿した。瞬間、どくりと少女の身体が脈打つ。突き刺した鍵は吸い込まれ、消える。

【【毒蛾の女王≪ダリア≫】の寄生が解放されました。能力が解放されます。【毒蛾の女王≪ダリア≫】は以後、アリス・ナイングラシスの制御下に置かれます。】

ＮＡＭＥ：アリス・ナイングラシス

ＨＰ	６１０／６１０
ＳＰ	６７０／６７０
腕力	１０４
硬度	１０４
俊敏	１０４
知能	１３４
運勢	２００

能力【全解放】
毒蛾の女王【ダリア】を【制御】している。
【毒吸収】毒ダメージをＨＰに変換することができます。
【毒蛾の女王】長剣と毒に関して、技能補正を受けます。全パラメーター＋１００、運に更に＋１００。
【高位魔族】ＨＰとＳＰに強大な補正が掛かります。
【毒の庭園（ヴェノム・ガーデン）】死毒の園へようこそ。

能力
【言語習得者】：複数の国の言語を扱えます。
【薔薇の血筋】：西欧連合の高貴な家の出です。
同国人に対するカリスマ（中）の能力を得ますが、大日本帝国民に憎悪判定があります。

端末に表示されたパラメーターに目を剥く。これは≪法の剣≫に置いておくわけにはいかない。無理をしてでも武満と交渉するしかないか、と嘆息する。
しかし、と少女を見ながら思う。
黄金の髪の少女は、寄生が制御可能になった瞬間に落ち着いた寝息を立て始めていた。その様子に少しだけ、安堵を吐いた。
む、と顔を歪める。このような姿を誰かに見られていないだろうな、と思い、辺りを見回せば、流石に遠巻きに俺を見つめる人間が多い。
しかし、その視線は、奇妙に落ち着きのない、俺を案じるような視線が多かった。
どういうことだと、近い位置の中年男に近づこうとすれば、彼は慌てて逃げ出してしまう。
顔見知りの保母らしき女性が悼ましそうに俺を見、そうして逃げ

るように去っていった。

（……、どういうことだ？）

流石にこの反応はおかしい。俺が、いつもと違うところなど、この西洋少女だけだ。

いや、と思い直す。そういえば、軍司令部内の人員との交流を、最近は疎かにしていた。それがこの差だというのだろうか？

しかし、日本人でないものに優しくして、ここまで隔意を抱かれるのか？

考えながら突っ立っていると、武満が奥の通路からこちらに歩いてくる。その背後には鹿島らしき人物が付いてきていた。

落ち着いた色の≪法の剣≫総帥服を来た男は、鋭い目で俺を見、そうして少女を見、馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

眼鏡の弦を手で弄りながら奴は言う。

「手を患わせて悪かったな。今、処分するからそれを貸してくれないか？」

「……、そういう方針なのか。お前は」

おや、と武満が目を上げる。そうしてくく、と腰を折るようにして嗤う。腹からの嗤いだった。

「どうした？　君にしては珍しい物言いだな。いや、考え方といった方がよかったか。

それより、タカぼん。少し、踏み込みすぎているぞ？　≪法の剣≫内部の問題だこれは」

言葉に滲んだ殺意が全身に染み込む。武満は、珍しく苛立っているように見えた。

「そういうお前こそ、苛立っているな。どうした？　これの何がお前を苛立たせている？　ただの無害なガキだろう？」
「無害？　無害と言ったのか君は？　タカぼんはその薔薇の血筋に連なるゴミが、西洋連合に戻り、騎士と番（ツガイ）になり、騎士の子を孕み、それが成長し、日本帝国の兵にどれだけの損害を与え――、いや、君に言っても詮無いことだったか。
いや、いい。とりあえず渡したまえ。まさか、タカぼんの目に留まるとは思わなかった」
「それより、まだ誰か監禁しているのか？」
「いいから渡せ。我らが争ったところで誰の得にもならないだろう？」

歯が軋る。確かにその通りだった。損得で考えるなら、俺と武満が争うことには何の益もない。むしろ亀裂は争いを呼び、勇者の覚醒を助長するだろう。
しかし、と俺は西洋少女を見る。
俺は、彼女になんと言った？　助ける、と言ったのではないのか。今は支配者でなくとも、かつて支配者であった男が、助けると口にしたのだ。
ならば、俺ができることは全て行わなければならなかった。
舌打ちが漏れる。たかが少女一人助けるのに、こんな覚悟をするなど、俺ではない。

「タカぼん、君は誰も彼も助けるのか？
私たちの世界の価値観ではそれは、家畜以下だ。敵でしかない」
「これは何の判断もできない子供だ。自ら危険地帯に入る無能なら俺は助けない。だが、これは、まだ何も判断できてない子供だ。まだ、何も為していない子供にすぎない。未だ何者にもなっていない」

俺と武満の間で言葉の刃が飛び交う。故郷の事があるからだろう。彼の言葉には珍しく純粋な憎悪と殺意が混じっていた。騎士とやらと戦っているからだろう。実感の籠もった殺意だ。それは、俺が尾張の兄姉に向けていた殺意と同じものだった。

しかし、それにしては苛立ちが大きすぎる。疑問に思いつつも言葉を重ねようとし、武満の視線が俺の背後に向いていることに気づく。

気づけば、少女が目を覚ましていた。武満と鹿島に恐怖の目を向けている。

「ひッ……」

「ゴミ、早くその肉人形から降りて私の元へ戻ってきなさい。タカぼんは私の大事な同盟相手だ。些細な事で煩わせてはいけないよ？」

いっそ優しい言葉で武満は少女へと手を差し出した。紳士然とした態度と言葉だが、その中には隠しきれない殺意が混じっている。武満の視線を遮るように少女の前に立つ。安心させるように、そっと少女の頭を撫で、背に隠す。

武満の目に、初めて本当の敵意が浮かんだ。

彼は故郷に並々ならぬ忠誠心を抱いている。子供一人とはいえ、将来の禍根となる者を生かしては置かないだろう。

「君は、子供には甘いんだな」

「さっきも言われた言葉だ。

そうだな。俺は、子供の目に見つめられると、どうすればいいかわからなくなる。

それが助けを求めていたら、どうにもできなくなる」

いっそ、苦笑を浮かべて俺は武満に頭を下げた。

己を捨て、プライドを捨て、争うための刃を捨てる。
ため息が上から聞こえてくる。

「……いっそ拳を振り上げてくれれば楽なのだがな」

声には、つまらないものを見たような色が混じっていた。

「とはいえ私も、組織の長として感情的になりすぎていたようだ。
今ここで、この程度の事で、タカぼんと本気で争っても得はない」
「ああ、俺もお前とはまだ争いたくない」

顔を上げれば、武満がしょうがないとでも言うように手を振った。

「ふん、君にそのような面があると知れただけでも収穫だ。
が、価値はないとはいえ、それは≪法の剣≫の資源だ。タダで渡すわけにはいかない」

後半は、鋭い言葉だった。武満にもメンツはある。
俺は交渉は諦め、言った。ここで武満の機嫌を損ねても面白くない。

「何でもくれてやる。貸しにしてもいいぞ」
「では、肉人形を……っと、冗談だ。流石に戦力になるものを引き抜くような真似はしないよ」

そうして次に武満が告げた物の名に俺は、諦めと共に、それを差し出す。
ここでゴネたなら、肉人形を交渉材料に出されてもおかしくなかったからだ。
俺が懐の鍵束から取り出した鍵を受け取り、武満はにやりと笑う。

どうして俺がこれを持っているのを知ったのか、と思えば、こいつは機械帝国と繋がっている。知っていてもおかしくはなかった。

「一層エレベーターの鍵、【永久不変の水桶の鍵】、確かに頂いた」
「ガキ一人にずいぶんな値段だな」
「それを渡してでも君は欲しがったんだろう。そのガキを。せいぜい、玩具にして遊ぶが良いさ」
「そんな悪趣味な真似するかよ」

頭上で何が起こっている事がわからないのだろう。金髪少女はわけもわからず俺たちを眺めていた。
ぽん、と頭に手を乗せ、撫でてやる。

「今日からお前はうちの子だ。何、安心しろ。誰にももう手出しさせないからな」

ぽかーんとした顔が愉快だった。武満はそんな俺たちの様子をつまらなさそうに眺め、

「ああ、そうだ。ソレの話題とは別に私の方から話が――

焦りの混じった、足音。耳に心地よくすら聞こえるリズムのそれ。だが、それを聞いた途端、奴の顔が、瞬時にして、敵意と苛立ちに満ちたものに変わる。
あまりの変化に、俺も足音の方に顔を向け、

「アリス！　武満ッ！　お前、アリスに何をして」
「ヒデヒト！！」

頭を撫でられていた少女が喜色を顔に浮かべ、〝それ〟を見た。

走ってくる、一人の少年。背後には精悍な顔をした青年男性を連れている。

（……あ、あぁ……）

それは、幼さの中に精悍さを顕した少年だった。≪法の剣≫の構成員であるバッジを付けている。歳は内藤と同い年か、下辺り。

彼は正義感と善良さ、非道を正す良識を一目で持っていると確信させる表情をしていた。

そして振る舞いから、理不尽や不条理と戦うだけの胆力を備え、そして、才気と実行力に満ちた男だという事を俺に知らしめる。

また、武満を呼び捨てで呼ぶことから、彼が、武満と、≪法の剣≫の中で敵対していることは明らかだった。

「神崎秀人か。今、その少女をこの男に譲ったところだ。もう君の出番はない。その少女は≪支配の杖≫で保護される。君の幼い戦いは終わりだ。仕事に戻りたまえ」

「あ？　どういうこと、だ？」

「ヒデヒト！　そこの彼がアタシを救ってくれたの！」

疑念に満ちた少年に、金髪の少女が、俺を指差す。

俺は、彼と目を合わせた。内藤と同じ、しかし、内藤より弱々しいが常人よりも圧倒的に他者を魅惑する二重の魅了が俺へと襲いかかる。

それらを自然にレジストしながら、俺はソレを見た。

俺の敵たる”勇者”。

神崎秀人と呼ばれた少年。

【勇者】アーク・ソシエトをその身に寄生させた少年は、背後に彼に魅了された信奉者らしき青年を連れ、俺を睨むように見るのだった。

俺は、きっと武満と同じ表情をしていると思う。
敵を目の前にして殺せないことが、こんなに歯がゆいことだなんて、初めて知る。
こんな弱々しい存在が、俺の敵だなんて、信じたくなかった。

壱百玖拾肆

壱百玖拾肆／

数日前の事だ。夢の中で魔王は勇者を評し、こう言った。
曰く、魔王殺しに於いては無数の世界でもトップに入る勇者の一人だと。
奴の能力は、魔族の王たるウェンディサークに対応した魔王殺し【明王光】。能力名のわかり難い妙な名前の魔王殺しだが、触れた魔族全てを滅する能力の持ち主らしい。
だが、この能力を増幅する【聖剣】グラールカリベルが勇者の手に渡ったならば、魔族含め、悪心を持つ生物に敵う者はいなくなるらしい。

「アリス、大丈夫だったか？」
「うん、大丈夫だったわ。それより、これから≪法の剣≫を出てもいいらしいの、アタシ」
「どういうことであるか！　アリス！」
「ケイン、あのね！」

少女アリスは、神崎少年と、その背後の、西洋人らしき男に説明を始める。
……西洋人は全て監禁しているのではなかったのか？　疑念の目で武満に問えば、奴は肩を竦め、勇者をじろりと視線で示す。
アリスの説明を聞いた神崎がにやりと快活な笑みを浮かべる。いやらしさの欠片もない、青空の笑みだ。

「へぇ、なんだ。武満とべったりくっついてると思ったらそんなこたねぇんだな。アンタ」

「連理貴久だ。好きに呼べ」
「なら、連理で。へへ、よろしくな。
俺は神崎秀人。≪法の剣≫内部で反武満派のリーダーを務めさせて貰ってるんだ」

差し出された手を握る。勇者は、平常の状態でも能力を使えるらしいが、今は俺への攻撃意志を持っては居ないらしい。
そもそも魔族専用能力であるなら俺を殺すことはできない筈だが、内心で首を振る。何が起こってもおかしくないのが、勇者のスキルだ。
かつて相対した二人の勇者を思い出し、気を引き締める。
思えば、俺は奴の殺戮圏内に入っているのだ。今更ながらに心臓に冷や汗が浮かんだような気がした。

「そこに武満がいるのに、そんな事を言っていいのか？」
「こそこそすんのは性にあってねぇんだよ。何より、表明しねぇとこいつら、情報が欲しいとか言って、関係ない奴を拷問するだろうからな」
「そうなのか？　その辺り、俺は詳しくなくてな」
「へ、アンタに知られると都合が悪いんだろ。なぁ、武満さん？」
「神崎秀人、その幼い遊びをいつになったら君は止めてくれるんだね？」
「お前が不当にみんなを迫害するのをやめたらだ」

本気で弱っている声で武満は言っていた。と思うがそれも演技だろう。神崎の行動が≪法の剣≫にダメージを与えられても、それが武満法行という男にダメージを与えているかと言えば、否だからだ。
ただ、内心苦々しく思ってはいるはずだった。何しろ敵が目の前にいながら殺すことができないのだ。
俺も腰の極北銃を今すぐ抜いて、神崎の額にぶち込みたい衝動を

抑えながら、くつくつと武満を嗤うふりをする。

「まぁ、なんだ。罪のない連中の監禁なんて真似はやめておけ。で、まだいるのか？　捕まえてる連中は」

「いや、俺が全部開放したからな。もう捕まってる連中はいない筈だ。

牢番の黒服も、説得させてもらったぜ」

「少々手荒な説得でしたケド」

ケインという男がやれやれと大仰に首を振った。驚くべき事に黒服を暴力で打ち倒されても、武満はこいつらを放置しているらしい。

それに、神崎には武力を持った人間まで配下にいるようだった。

殺意の籠もった目で神崎を見る鹿島に目を向ければ、奴は渋々と説明してくれる。

「そっちの人物は、西洋連合、英国派の【円卓の騎士】ケイン・≪ガウェイン≫・アイランド。

太陽剣の異名で知られる、強い部類に入る騎士です」

「ドウモ、よろしく。タカヒサさん」

「ああ、よろしく」

差し出された力強い手を握る。快活な笑顔を浮かべた青年は神崎少年の背を叩き、威勢良く言った。

「≪法の剣≫に監禁されたときは、ワタシ焦りましたけど、神崎クンのおかげで助かりました。

ハハハ、軍神タケミツもこれで大人しくナルでしょう。タカヒサさんがワタシたちとも友好な関係を作るコト、ワタシたち望みます」

「俺と同盟か？　はは、そっちが何を示せるかによるな」

「……、連理は」

「うん？」
「利益で同盟相手を選ぶのか？」
純粋な目だった。いや、と思う。その深い深い目の奥から覗く者。それと目を合わせ、……背筋が寒くなる。
内藤よりも寄生状況が進んでいた。ぎょろぎょろと、常人には見れぬ深い闇。神崎の目の奥から俺を覗いてくるものは、俺の目の奥を覗き込んできて――
【寄生スキル【天上世界の英傑】が発動しています。【第二世代勇者】【第十一世代勇者】複合スキル、【勇者のみぞ知る世界（ステータス・オールクリア）】が発動しています。連理貴久のステータスが暴かれます。【いつか見た景色】が発動しました。機械式八十八層封印は正常に発動しています。スキル【欺瞞・黒幕は玉座に座らず（フェイク・シヴィライゼーション）】が発動しています。連理貴久の能力値、出身世界、寄生、スキル構成を領内市民の内、最も脅威度の少ない個体に偽装します】
【大賢者のスキル【情報隠蔽】が発動しています。勇者側の行動ログを抹消します】
くらり、と体内を精査される感覚に耐え、そうして神崎少年を見返す。
今、何かをされたことを理解したが、端末には黒字で何かが隠蔽された跡が残っているだけだ。どうにも最近、勇者側の行動が大賢者のスキルによってこちらから視認できないようになっている。
内心の歯がゆさを無視し、神崎少年にも理解できるように俺のスタンスを説明することにする。
「ああ、そうだな。こんな状況だ。
道徳や理念より、アイテムや情報を稼いでくる人間を俺は信用するよ」

舌打ちをする神崎少年に苦笑を内心だけで浮かべる。青い反応だが、こちらに侮りを抱かせるだけの仕草でしかないことに、流石勇者の名を持つだけはあると理解させられる。

恐ろしいことに、これだけの真似を目の前でやられても、彼の少年は、俺に怒りや侮辱されたという感情を抱かせないのだ。

容姿と性格、それと魅了スキルのせいだろう。俺の基本スキルは強制的な支配や魅了をレジストはするが、印象までは操作しない。それは心根や容姿に直結するものだからだ。俺の眼は相手の価値を見るため、それらまで減じるようでは、相手の価値を見誤ることになってしまう。

故に、俺に好感を抱かせる事が勇者には可能なのである。

とはいえ、好感を抱いた相手でも状況に応じて犠牲にできる、俺のような人種には無意味な行為だが。

「まぁ、神崎君も俺と同盟を組みたいなら、武力と情報収集に勤めるんだな。

塔にはまだ入ってないんだろう？」

「それは……、探索班の任務だ。流石に、そこまでこっちの人間も多くはないから」

「大きい口を叩くのは、まずは塔に入れるようになってからだ。

何、君ならすぐできるようになるだろう。頑張れ頑張れ」

苦々しさを内心に押し隠し、笑顔で神崎少年に激励を掛ける。

まぁ、当分は塔の探索まで行うことはできないだろう。≪法の剣≫の武闘派は鹿島や、他の白服の部下だ。それを籠絡するには、相当な時間がかかる。

何より、武闘派の離脱に対しては武満も本気で相手をすることになる。

地下に居たらしい黒服を打ち倒したなんてことを許している今な

ら奴も手緩く相手をするだろうが、そこまで侵攻されたなら、実力行使に出ざるを得ないだろう。
例え、勇者の覚醒が起ころうとも。
いい加減、神崎の態度に苛立ったんだろう。鹿島が口を出す。

「それより、神崎、アイランド。貴様ら、地下を強引に突破したようだな」
「そうでなきゃアリスが殺されたからな」

苛立ちと敵意を込めた舌打ちをしながら鹿島は告げる。

「謹慎一週間だ。罪人用の牢に入っておけ」
「……、へ、わかってますよ」
「神崎君、君が抵抗すれば、≪法の剣≫の秩序は有って無きが如しだ。
短慮を起こさないことを祈ってるよ」

神崎が暴れないようにだろう。武満が釘を刺すと、神崎は渋々と頷いた。そこまで馬鹿ではないらしい。
しかし、彼はにやりと笑う。

「なぁに、すぐ出てみせるさ。合法にな」
「ハハハ、ワタシもヒデヒトさんと同じ牢に入れてクダサイ」

笑顔で地下へと向かっていく二人を見送る。
「アタシの為に、ありがとう、ヒデヒト！」とアリスが言っていたが、俺や武満の耳には入らず。二人で顔を見合わせるしかなかった。
流石に、苦々しさを隠せずに、俺は武満に言うのだった。

「見事に嵌ってるな。お前。序盤の敵っぽいぞ」
「言うな。自分でも自覚してる……」
そうして、視線だけで語ってくるのだ。
『殺せないのだから、仕方有るまい』と。
『そりゃそうだ』と俺も視線を返し、トップ2人で深いため息を吐くのだった。

壱百玖拾伍～壱百玖拾陸

壱百玖拾伍／

さて、遅くなったが昼食に行こう、と武満と鹿島に声を掛けようとした瞬間だった。

ぞくり、と背筋が寒くなる。武満も鹿島も、俺の背後を見て、同時に顔を苦々しく歪めていた。

「……勇者様……」

振り向く。肉人形の背後に敷条（ソレ）は立っていた。

【【聖女】が降臨しています。寄生対象の自我消失を確認しました。スキル【機械油の刻印】が発動しています。軍司令部内の人間は照準を受けています。防御行動を行ってください】

「ッ……」

防御行動?!　驚く暇も与えられない。即座に極北銃を引き抜き、肉人形に敷条を無力化するように指示を出す――前に、武満が動いていた。

「神崎少年なら罪人用の牢獄に、”自分から”入っていった。敷条、指示を受けるなりなんなり好きにしたまえ」

「……そう、武満法行、貴方を殺したいけれど先に勇者様を出してさしあげなければ……。勇者様の期待に添うように、署名と抗議の人員を……」

【対炭素基生物用抹殺スキル【山賊殺しの鉈（ヴァンデット・キラー）】の発動が停止しました】

すたすたと、以前の奴が絶対にしなかった、絶対の意志を持った足取りで敷条は俺たちの前から去っていった。

「ああ、安心しろ。タカぼんは最近、総帥服に即死防御スキルを付与しただろう。私や、白服も付与したしな。死ぬのは一般職員だけだ。あれが発動しても私たちに害はない。不気味ではあるがな」

【大賢者の【情報隠蔽】が発動しています。アナライズをレジストされました】

端末は役に立たない。武満の言葉を無視し、自身に備わったスキルを発動させる。

【【暴君の目】機械式五十三層封印は正常に働いています。】
【スキル【暴き、転がす。屍を晒すように（ワールド）（アナライズ）【過剰劣化版】】を任意発動します】

ギリギリと、去っていく敷条を見る両眼が痛む。だが、歯を食いしばり、敷条を見続け、しかし、【情報隠蔽】を破れない。廊下の角を曲がり、奴が視界から消えかける。糞、あの弱々しい勇者よりも危険度の高いアレを今、逃すわけにはいかなかった。駄目か、と力を抜きそうになる一瞬、武満が動いた。

「どれ、何をしてるかわからんが、力を貸してやろう。まぁ、大体、予想は付くから結果だけ教えてくれ」

【武満法行の【関東八将】【軍神】【偉大なる指導者】が発動します。成功率上昇系スキルの三重発動を確認しました。連理貴久のスキルを成功させます。【情報隠蔽】を突破しました。】
【スキル【暴き、転がす。屍を晒すように（ワールド）（アナライズ）【過剰劣化版】】が成功しました。聖女のステータスを開示します】

ＮＡＭＥ：【聖女】ノエル・ウィンターランド

ＨＰ　４０２／４０２
ＳＰ　３０００／３０００
腕力　１００
硬度　２００
俊敏　２００
知能　９９９
運勢　９９９

存在【聖女】です。
能力
【存在のすり替え】：物語の主役存在のみに許された寄生方法。
彼らは宿主を食い破ることはない。
寄生存在として対象を優越した場合、対象の魂を取り込むことによって、力を十全に発揮できる。
物語の都合上、代替不可能（ユニーク）な彼らには寄生を制御するための鍵が存在しない。
【レベルカンスト】：困難を乗り越え、魔王の眼前にたどり着いた者の証。限界まで心身を鍛え上げている。
【冬の国の王女】：冬の概念を持っています。生命を根絶する能力を保持しています。
【廃女神の烙印】：善なる生命を司る神から祝福を受けています。

あらゆる生命に癒しの術を与えられます。
【ヒロイン】：物語のヒロインです。運命の祝福を受けています。
【アーク・ソシエト専用】

【敷条茜】から強奪しました。
能力
【ヒロイン】：物語のヒロインです。運命の祝福を受けています。
【神崎秀人専用】
【機転】：チャンスを掴みやすい。
【秀才】：秀才です。技能取得判定時にボーナス。
【学園の華】：他者を魅了する美貌。種族：人間限定。

「あ……ぐ、うぐ」

両眼から血が漏れる。俺の様子を見ていたアリスが怯えているようだったが気にしない。即座に紙に書き留め、武満の手の中に突っ込む。
対価は、あの助力で十分だ。荒く呼吸をしながら、壁にへたり込む。

（なんだ……これは……）

「タカヒサ？　大丈夫」

膝をついたアリスが俺をおろおろと手を伸ばしてくる。にやり、と強引に笑みを浮かべる。

「ああ、大丈夫だ。すまんな、驚いただろう」
「お、驚いたけど。その、タカヒサはアタシを助けてくれたから、

その、辛かったら言ってね？
　でもなにか病気なの？　急に目から血を流して……。アカネをじっと見てたみたいだけど」
「わからないならいいんだ。それと――」
　そこで言葉に詰まる。この少女に言っていいのかわからなかった。敷条茜に近づくな、などということは、アレと知り合いなら、今、俺がこんな言葉を囁いて、この少女に不信感を持たれるわけにはいかなかった。
　少女の信頼を失い、むざむざと危険に近づけるような真似は、慎まなければならない。
　そもそも、なんであんなものが、軍司令部内を闊歩している……ッ。
　武満を睨み付けるように見ると、奴はため息を吐き、言った。
「君がこちらに来なかった間に、こちらの状況も変わったのだ。来い、治療ついでに食事を取ろう。君（ゴミ）はここを出る用意でもしていろ。鹿島、それに適当な白服を付かせて、身辺を整理させておけ」
　へい、と鹿島が頷き、端末の通信機能で誰かに連絡を付けている。白服を付けさせるのは、軍司令部内部を歩かせて、害されたら困る判断だろう。
　とはいえ、今ならアリスは逆襲可能だ。そういう意味でも、アリスが誰かを害さないように、彼女を守れる存在は必要だった。
　三号に俺の目の治療を施させつつ、立つのを手伝わせ、俺は立ち上がった。

壱百玖拾陸／

武満と俺は、厚い牛肉のステーキを切り分けながら、会話をしていく。
組織も落ち着いているからか、武満はワインを口にしていた。いや、荒んだ精神を酒で沈めたかったからなのかもしれない。
「ワインは西欧産だがいいのか？」
奴が西洋人を虐待してることを暗に指摘し、話しかけると。
「彼の信長公もワインは嗜んだ。ならば、私が飲んでも罰は当たるまい。
そもそも私は敵として西欧連合が嫌いなだけであって、奴らの文化が嫌いなわけではないからな」
「そんなものか。それでは、そろそろ本題に入ろうか。何故、こうなった？」
何故、あんなものが闊歩している、という質問に武満は俺を見ながら頷いた。
「予兆すら無かった。いや、神崎自体についてはこちらに職員への昇進の話が来ていたから直接会い、その時点で勇者だと確信できた。
しかし、敷条については本当にわからないのだ。そもそも、君が教えてくれた、寄生スキルの件だが……」
お互い、黙り込む。
あまりに残酷なスキルだった。敷条茜の可能性が、死すらもなく、消失していた。
「感情的な話はなしにして、どうする？」
「どうもできない。一階層の【魂喰らい】を≪法の剣≫は排除した

が……。聖女は無理だ」

何より、殺したところで聖女は復活する。際限がない。無駄だった。

それと、蛇を殺せたことにほぅっと、感嘆の吐息を付く。殺せたのか。現時点の≪法の剣≫の戦力で。

いや、数の暴力だろう。パラメーターアップで成長させた黒服と白服があれだけそろっていれば、不可能ではなかった。

「武力のアドバンテージは、≪法の剣≫の方が優秀になってしまったな」

「そうでもないさ」

「うん？　そうか？」

武満の言葉に、俺は肉を咀嚼し、飲み込んでから聞き返す。

驚く俺に、奴は真顔で言った。

「業腹だが、譲原九十九に、我々は勝てない。この世界で、あの方を殺すには大義がないからな。我々には」

「へぇ……、そんなもの、どうとでもするとでも思ってたが」

「元の世界ならいざ知らず、この世界で、我々が譲原九十九に逆らうことなどできはしないさ。

なにより、ここで同じ世界の人間が血を流し合う必要などない」

理性的な言葉に思わず苦笑が浮かぶ。常に俺の命を狙ってる小山田や、隙があれば戯れるように俺を殺そうと画策する幸村辺りに言って欲しい台詞だった。

そう考えれば、必死で俺への殺意を止めようとしている内藤はとても愛おしく思えてくる。

「さて、方針については私の方は放置すると判断してるが、君はどうするかね？　一戦交えてみるか？
譲原九十九なら苦もなく聖女を殺せるぞ？」
「馬鹿な。俺とてあれに喧嘩など売れない。それに……」
「それに？」
引きずり出さなければならない存在がいた。
忌々しい【情報隠蔽】を行っている大賢者だ。

「なんでもない。どちらにせよ、以前から進めていた計画の方に力を込めよう。そちらの進捗はどうだ？」
「さりげなく君の所の馬場とやらに仕込んでるよ。それと幸村を使った計画も順調だ」
「ああ、こちらもそろそろ次の段階に移りたいが……」
お互い、外を眺める。そこに見えるのは、高く屹立する覇王の塔だ。

「第四層……、どうする？」
「君に任せよう。私はそろそろ次の階層の【魂喰らい】を狩る。こちらにも塔探索は少し問題が出ているからな。
そういえば、前々から聞きたかったんだが……。いや、これは聞いて良いものか？」
「なんだ？　言うだけ言ってみろよ」
なら、と武満がワインをくいっと煽る。とん、と飲み干されたグラスが机に置かれ、銀細工の施されたガラスの器が軽く音を立てる。

「どうやって、覇王の塔のトラップを突破している？
二階層や、三階層攻略部隊に怪我人が続出してな。私たちに隠

れて探索している≪カラミティ・ブルータス≫の連中も罠には閉口していたぞ？」

はて、と首を傾げた。

罠……、罠と脳内を検索し、ああ、と頷いた。

「生まれた頃から日本の支配者になるまでに、百を超える毒殺だの暗殺だの反乱だの謀反だの襲撃だのを回避してるうちにトラップに対するスキルが発生してたらしくてな、俺。

ちなみに、スキルなどなくても身についた経験と知識があるから罠程度なら見破れるがな」

かからねぇんだ、罠の類には一切、と言えば。

武満は呆れた顔で、そうか、と呟いた。

そうしてお互い、肉を無言で咀嚼し、昼食会を終えるのだった。

Ｅｘ．壱～弐

Ｅｘ．壱【そういえば？】

そういえば、と聖女の話をした直後の会話である。

ステーキに添えてあるポテトを摘みながらオレンジジュースを飲み干し、鹿島にお代わりを要求し、そうして一息ついてから。正面でワインを飲みつつ、書類を処理している武満に問うた。

「そういえば、武満。攻撃を受けた際、端末も持ってないのに、よく攻撃を受けてるってわかったな」

「端末。ああ、君のはアナライズ機能付きだったな」

言われて頷く。俺のアナライズ付きの携帯端末。他のアナライズより高性能なのだが、なんだかんだでワンアクション掛かるから面倒なのだ。

「最近見つけた肉体改造施設を使えば、脳味噌に端末を埋め込めるらしいぞ？　研究途中だから頭蓋に穴を空けて直接、端末を脳と接続するらしいが」

にやにや嗤われながら想像する。頭蓋を飛び出る携帯端末……。その上からカツラのように髪の毛が被さっている。

全くもって不気味だった。

「身体に物を埋め込むなんてゾッとしないな。せいぜい使って、パラメーターＵＰアイテム程度だよ。俺は」

「ああ、私も同じ主義だ。というわけで端末は埋め込んでいないが、簡易アナライズができるアイテムを最近は装備はしている。

君の端末より性能は下がるな。だが、ログはすぐに目に入るし、簡単なステータスと名前程度はわかる」

へぇ、と武満の上半身を見る。いつもの総帥服に眼鏡。それとワイングラスと書類を持った姿だ。

「うん？　眼鏡、か？」

「そう、簡易アナライズと通信機能がついていてな。割と便利だぞ。活動写真も見られるしな」

「映画と言え、映画と。わざと古臭く言いやがって」

「古いとは何だ。古いとは。うちの世界じゃこういう言い方なのだよ。それよりこいつを見てくれ」

武満が珍しくうきうきした表情で眼鏡の蔓を押えた。

と、そこで追加のオレンジジュースを持ってきた鹿島がやってきて、慌てて叫ぶ。

「た、大将！　こんなところでそんなもの使っちゃ――」

「目からビーーーーーーーム！！！！！」

【【眼鏡風端末Z（デスアナライザー）】搭載スキル【拡散波動硝子・非殺傷モード（メカラビーム）】を発動します】

カッ、と視界は真っ白に染まる。俺の頭上を駆け抜けていった破壊光線は、軍司令部の天井を粉々に破砕し、頭上にあった女子更衣室らしき場所を丸見えにしていた。

きゃー、と悲鳴が聞こえる。こちらを恐る恐る見下ろした秘書共が見える。何故か怪我人は出ていない。

ついでにその中に、超然と立っている半裸の【聖女】らしき姿も見えた。

「……、な、何をしているのですか？　貴方たちは」

失礼。動揺はしているらしい。一応。

『食事兼作戦会議だ』

俺と武満が異口同音に言い放つ。そうして真面目な顔で語り出した。

「どうだ？　この追加スキル、三層ＩＤ解放後のショップで売っていたのだが」

「パネェな、武満。おいちょっと俺にも貸してくれよ」

「駄目だ駄目だ。羨ましいならタカぼんも肉人形に【螺旋掘削腕（ドリルアーム）】装備させた奴を私に貸すんだ。そうしたら貸してやる」

「おい待ててめぇ。【螺旋掘削腕（ドリルアーム）】はこの前、見せるだけ見せただろう。

つーか、お前が持ってる【英雄超人服（レインボーヒーロースーツ）】寄越せよ。無駄に七色に光り輝いて、殴ると接触面が爆発する夢装備。山県に着せて、塔に突撃させて遊ぶから。

ショップ見つけたのは幸村なのに、こっちが金用意してる隙に部下に買わせやがって……」

ははははは、悔しかろう悔しかろうとお互い言い合う俺達を見ながら聖女は頭上でため息を吐く。

そうして、「人間というものが理解できない……」と呟くと、さっさと服を着て、去っていくのだった。

後には、瓦礫を片付ける鹿島と、お互いのネタ装備自慢を始める俺達が残るばかりであった。

Ｅｘ．弐【各人の蓄財状況】

うららかなある日の午後の事ですわ。
吉備枯渇さんに命令されたので、私（ワタクシ）、龍郭院桐葉は、≪支配の杖≫の各部署を回ってますの。

「おや、龍郭院さん。どうしたんだい、こんなところで。
新人教育じゃなかったのかい？」

まず向かったのは人事部ですわ。中で書類を書いている山県さんがいたので頭を下げておきます。
ちなみに、人事部は宿屋の一室を借り上げて、事務机や書類棚を運び込み、それらしく仕立て上げてますの。
大きなホワイトボードには今すぐ行けそうな求人情報などが貼ってありますわ。

（また増えてますわね……）

一枚ほど手にとって見てみると、そこには【急募】倉庫整理【腕力パラメーター募集】などと書いてありました。
最近は≪支配の杖≫が新しく確保した倉庫や施設から連絡が届くと、こちらで求人が作成されますので今では≪法の剣≫の手を借りなくても、自前で仕事が用意できる状況ですわね。
とはいえ一般の職員には、仕事の選択の自由がありませんから、これは私のように人を預かってるチームリーダー向けの情報ですわ。ここから選んで、人を動かすのです。
まぁ本当に緊急の依頼の場合はタカぼん様が肉人形を連れて処理に行ってしまいますし。だからこれは私たちに選択の自由を与え、かつ優先度の低い案件を自主的に処理させるための仕組みですわね。

どうもあまりタカぼん様がこちらには熱心じゃないのが気になりますが、きっと塔の中での会話のように深い事を考えていらっしゃるのでしょう。

私たちの役割は、タカぼん様にそちらの方に専念していただくこと、ですわね。それと余裕があるときにこちらでも情報等を調べ、助けになること。

未だに全く重要な情報一つ手に入りはしませんが。

（早く塔に入れるように新人の方々を鍛え上げねば……）

とりあえず、吉備さんが今は指導をしてくださってるそうです。正直、私も戦闘などはまだまだ未熟なので指導して欲しかったのですが……。

「龍郭院さん？　龍郭院さん？」

「は、はいッ？！」

「どうしたの？　ぼーっとしちゃって」

い、いえ、なんでもありませんわ。と答え、山県さんとその隣の事務員の男の方に軽く頭を下げる。

そうして落ち着く為に息を吐き、はて、と首を傾げる。

（どう切り出しましょうか……？）

山県さん、給料どう使ってますの？　と素直に聞いても答えてくれるか。

うーん、と首を傾げる。これは、戻って吉備さんに「どう聞いたら良いですの？」なんて言ったら絶対無能扱いされて以後適当な役割しか振られませんわよね。

ちなみに、≪支配の杖≫の給与状況ですが、状況が状況なので日

給ですわ。
　役職事にパラメーターＵＰアイテムが相応に（私は戦闘職リーダーに抜擢されてますので、１０ＵＰアイテムが三つ。それと１ＵＰアイテムが三つですわね。一般職は１ＵＰアイテムが３つ。それと功績に応じて適当に１０ＵＰが支給される場合もありますわ）、それとクレジットが役職者は３００００ほど。一般職員が功績次第ですわね。一応、最低でも３０００程度は出てますわ。この都市なら十分、高給取りですわね。
　そもそも……、ただの召喚されたうちの一人だったころからこんな感じに、山県さんや美咲に給与を与えてたタカぼん様は流石としか言いようがありませんわ。
　現在の３０人状況になってからも、一日も給与の支払いが滞ったことなどありませんし。

「龍郭院さん？　龍郭院さん？　ちょっと、大丈夫かな、この子……」
「はッ。あ、いえいえ、なんでもありませんわ。
　それでえっと、単刀直入に聞きますけど、毎日の給与の使用用途を聞きたいのですわ」
「使用用途、かい？」
「蓄財の詳しい状況でもよろしいですわ。枯渇さんから調べて来いと言われてますの」

　難しい顔をした山県さん。とはいえ、私もここですごすごと帰るわけにもいかないので胸を張り、威圧するように山県さんを見ます。
　そもそも、そういう指示なのですから、そう答えればいいのですわ。下手に言葉を弄しても隠すべき輩は隠しますし。
　やがて、私の態度にやれやれと山県さんは息を吐くと、ＰＣを起動させた。

「それじゃあ、どんな情報が欲しいか言ってもらえるかい？　その様子じゃまともな書類も用意して来なかったんだろう？」
「あ、えー、紙は作ってきてますけれど」
「その枠線スカスカの紙がかい？」
鼻で嗤われる。隣の事務員が苦笑して、私が作成したアンケート用紙を取りあげると、没収してしまった。
「それと、この情報、あとで僕たちにもくれるかい？　内偵なんて真似、余計な恨みを買うからやりたくなかったけど、君がやってくれるならちょうどいい」
「う、な、内偵……。ですわよね、これ」
そういうことは、なるべく考えたくはなかったのですけれど……。というか、吉備さんは私に何をさせたいんですの？
そう考える間にも山県さんは隣の事務員の方に指示を出していく。
「あ、石田君。各人の資産状況調査用の紙作って貰える？　調査のテンプレートはＰＣ内のファイルに入ってるから参考にして。僕はこっちのお嬢さんに質問して、応答用の書類作成するから。一時間もあればできるよね？」
「三十分で十分ですよ」
自信満々の事務員の方に、任せた、と爽やかな笑顔で言うと山県さんは眼鏡をくぃっとあげて私に向き合う。
「あ、えっと……」
「銀稜台の会長さんは生徒会の優秀な書記任せにしてきたから書類の作り方とかは知らないだろう？　学生にしてはよくできてたけどね。うん」

「ば、馬鹿にしてますの？」
「いやいや、褒めてるのさ。というかね、君、僕はこれでも銀稜台生徒会のＯＢなんだぜ？　わからないことは先輩に聞きなさいな」
生徒会ＯＢ？　えっと、山県さんのフルネームは山県義純。そういえば、昔、そんな名前を議事録や、歴代生徒会名簿で見た覚えがありましたわ。
役職は、書記……でしたわね。事実が脳に浸透すると共に、私は観念する。
大きくため息を吐き、そうしてゆっくりと頭を下げた。
「ご指導ご鞭撻のほど、お願いしますわ。先輩」
「はいはい、それじゃそこの椅子座ってくれるかい。今、コーヒーでも淹れるからさ」
利尿作用のある飲み物の名前を挙げられ、少しだけ躊躇するものの、にこりと笑顔を作ると好意に甘えるのだった。

ちなみに、調査の結果ですが。

龍郭院（私）：基本貯蓄。あとは細々としたインテリアとか購入してますわね。
山県さん：貯蓄。余ったパラメーターＵＰアイテムの一部はクレジットに交換しているらしいですわ。
美咲（通称：内藤）：パラメーターＵＰアイテムを貰えない甘利さんに与えている。
馬場さん：財テクで稼いでますわ。タカぼんさんを除いて、≪支配の杖≫幹部内での資産トップですわね。

原さん：自分の研究用の素材や器具の購入に使ってる。
都子さん：美味しいもの食べたり、無駄な趣味の品を買ってましたわ。

あとついでに役職なしですが
小山田さん：高給なレストランで毎食使ったり、一般職員に高価なアイテムを貢がせている。
甘利さん：個人的に武器を買った。護身用の域を出ていませんでしたが。そもそも甘利さんの給与は半額以下ですし、目立った功績もないので当然ですが。
一般職員：小山田さんに貢いだり、趣味の品に使ったり、美味しいもの食べたり。
譲原さん：たまに人事部で適当な仕事を受けて、小金を得ている。ちなみに職員としての給与は出ていませんわ。タカぼんさんが個人的にパラメーターＵＰアイテムを与えてるらしいのですけれど。

こんな感じでしたわ。
それで、山県さんが結果を見て「人事部の方でまた何か頼むよ」なんて言ってきたり、吉備さんに「よくやった。うんうん、ひゃひゃひゃ」なんて言われたりしましたわ。
≪支配の杖≫もいろいろと始まってるんですわね、と調査をして思うのでした。

壱百玖拾漆～壱百玖拾捌

壱百玖拾漆／

「ようやく、敵を見つけたのぅ」
「ウェンディサークか……」

目が覚める。夢の中で目が覚めるという表現はおかしいものだったが、目を開いたときには、いつもの白い空間に、豪華なテーブルと豪華な椅子があり、そうして、対面に座る幼女魔王ウェンディサークがいる。
彼女はずるずると紅茶を啜り、つまらなそうな顔で俺を見る。

「さて、主（ヌシ）は、こちら側から打てる次の一手が解っていると思うのじゃが、何故言い出さぬ」

それは、その方法はまさにこの状況を覆す一手だろう。しかし、それで起こる変化は急激すぎて、俺以外の皆が対応できるかわからなかった。

「へたれ。聖女は既に表に出てきておるのじゃぞ？」

俺の内心を読んだように、彼女は言う。いや、ここは俺の心象世界の一部だ。俺の魂にくっついているこの魔王様は、俺の世界にしか存在できていない。故に、この白い世界に住む彼女は俺の考えを読んでいる。
ただ純白の世界。その中で俺は言う。

「まだ準備が足りない。それに知るべき事を知っていない」

「何についてじゃ？　我が答えられるようなら答えてやるぞ」
「お前から得ても仕方のない情報だ。例え、お前が真実を語ったとしても、な」

ふん、と彼女は鼻を鳴らした。その上で、問うてくる。

「ここなら忌々しい監視はないぞ。存分に腹の内をぶちまけてみよ。というかだな、この一手を打たずして、何を打つというのじゃ？　我は早ぅ――」
「俺は、勇者側の理屈を聞いていない」
「……なんじゃ、その事か。ならば我が」
「勇者側から聞いていない」

……じと目で見られ、苦笑を返す。手元にコーヒーを現出させ、カップに口を付ける。

「どうにも、今の俺は不安定だ。だから、敵の事情を聞いてみたくなった。
それはおかしなことか？」
「おかしいもなにも、何故そんなことを知る必要がある？　何を考えておる？」

それは即答できる。考える間もなく、口を開く。

「負けない方法。二度と俺が崩れない方法だ」
「それが何故勇者の理屈を聞くことと一致する？　主の口で答えてみよ」
「魔族の理屈、俺や武満の理屈、そして、機械帝国の理屈。俺は、ダリアやお前、武満にこの都市で生きる人々、そして、機械帝国の憎むべき者たちと会ってきた。

ならば、主要人物の一人にも会い。腹の内を聞き出さねばならない。不公平だからだ。かつての支配者として、俺は敵と出会い、その理屈を聞き、その上で、打倒しなければならない」

「お前、散々、殺すだの潰すだの喚いておったろうが」

魔王の呆れた顔に、俺は頷きを返す。それはそれでやるべきことだった。だが、これだけは、理屈ではないのだ。

「敵の事を何も知らない上で殺すなら、それではただの殺人者だ。いや、敵が人間でない以上はそれでも良いんだが。

やはり、あそこまで手強い敵だ。奴らの考えを聞いておかないと俺は失敗するだろう。それに……」

「不公平か？」

「仲間はずれは可哀想だろう？　元々、俺は勇者側とは直接会って話すと決めていた。そして、相手は聖女ではなく……」

「あの様子では勇者でもないか。いや、主の計画ならそれは……。誰かもわからぬが……」

「一番、楽しい奴だろうな」

笑みを隠さずに言う。そのときに俺と出会うのは、一番元気な奴だ。

だからそのために、ずっと布石を撒いてきていた。

そうして、出会い、話すことで俺の準備は完成する。その先で、内藤に決めさせるのだ。

それは、やらなければならないことだった。何より、ただ負けないために。

「破壊者のお前では理解できないか？」

「理解できぬわけではないがの。我とて敵と話をすることもある。しかし、それは敵の死に際じゃ。その上でその思考を否定し、文化

を破壊し、種族を絶滅させて我の偉業は完成してきた。
故に、主のように、殺す前に、敵から言葉を聞くことなどは考えない」
「俺は、敵と認識したら、そいつを良く知ることに努めたよ。それは、勝利するためではなく。必要だから行ってきたことだ」
そうでないと、彼らがしたかったことを理解できないから。その言葉を飲み込む。
別に、代わりに行ってやるつもりなどないが、潰した願いを、潰した理想を知ることは俺には必要だった。
そもそも敵と認識する前に潰したり、出会った瞬間に殺してしまった者がいる以上は、それはそれで守れている信念というわけでもないのだが、それでもできるならやってきたことだった。
とはいえ、今の俺にとって、敵を知ることは必要なことだ。
今では何故か、それが蜜美の意志に適うような気もしている。
蜜美が言うような、かつての俺に戻る気はないが、奴の真意を知るためにも、今は気のせいと思われることでもできる限り突き詰める必要はあった。
「ならば、実に有効的な一手は、まだ行わないんじゃな」
「そうだな。今は、まだ必要はない」
そうして俺は魔王に対して、断りを告げた。
「肉人形にお前を寄生させるのは、少し待て。
今は、撒いた種が成長し、俺の前に出てくるのを待つ時間だ。ついでにお前の能力。その時に利用させてもらうぞ?」
「これでよくも、吉備枯渇とやらも納得したものじゃな。その方法。そも、全てを奴に話してもいなかったというのに……」

はは、と鼻で嗤う。吉備枯渇は、あれはあれで可愛い奴だ。そもそも、男でも女でも、人間ですらないがな。

「あれはな。散々負けた今でも俺と成り代わりたがっている馬鹿者だ。

とはいえ、枯渇は枯渇以外に俺が負けるのも想像したがらない。だから俺が勝つと思って、俺の指示が全て正しいと思って従っている。

俺が奴を従えて、比翼心以外に負けたことがないから疑わないしな」

そうして、嘆息するように、哀れな魔王の願いを吐露する。

「いずれ俺と奴が殺し合う時も来るが、それはこの物語の上ではない。奴が、奴の物語を自分で作った時だろう」

「……、主も哀れで残酷な男だと思うよ。我は」

用意された舞台ではなく、自ら用意した舞台で俺を討ち取るのが枯渇の夢だ。

しかし、俺は、その期待には応えられない。俺に敗北し続けた魔王の夢想を想いながら俺はウェンディサークに一時の別れを告げた。

「俺は、それでいいんだ。では、また会おう」

「うむ、ではまた今夜な。主よ」

壱百玖拾捌／

ふと昔、修学旅行に行ったときの事を思い出した。高校の時の話だ。あの時、豆腐屋の友人がどうしても一緒に修学旅行に行きたい

というので、当時の首相との会食を土壇場でキャンセルし、札幌旅行に出かけたのだった。グァムという案もあったが、無死年間最中だったために、日本国外に出ると死亡するなんて話も出ていたから海外案は却下されていた。実の所、そんなことはなかったのだが、まぁ、何がどうして起こっているのかわからない人間には理解できないので、その辺りはどうでもいい。

重要なのは、俺と豆腐屋の友人と、蜜美がわざわざ編入させた護衛代わりの、連理に所属する社員の息子や娘ども（文武両道）に、そして、俺の高校に転校してきた比翼心がいたことだ。

修学旅行中、豆腐屋の友人と楽しもうとしたところに、俺へと無駄に絡んできた比翼心。その無邪気さと、侮れなさと、輝くような人物としての魅力。

その全ては、今はもう感じることのできない物だ。

「懐かしい、な……」

「おいこらおにーさん。そういう台詞は、私を膝の上に乗せてぐりぐり顎やら頭やら撫でながら言うものなんですかねぇ？」

うん？　と膝の上に目を向ければ剣呑な目で見てくる幸村都子がいた。頬を赤くしているのは、都市内を移動する、この探索用バスの中に探索部隊に回された黒服共がいるからだろう。

監視代わりらしい白服の男がこちらを見て、小さく頭を下げていた。

「いいからお前は仕事をしろ、人間レーダー。お前の目に今、この都市はどう映っている？」

幸村については、別にやっておくべきこともあるのだが、今それをしてもこの猫の性能を損なうだけだろう。

むしろ、外れてしまい過ぎるのも問題だった。俺に弄られてまだ

恥辱を感じているなら、与えた技術による感情の喪失はまだ考えなくてよい。

「レーダーって、まぁ、技術のおかげで、割とわかりやすくなってるけどね。

……つーかさ。お兄さんにも見えてるんだよね？　お兄さんがやれば一発なんじゃないの？」

「俺とお前では認識してる方法が違う。そうだな。お前の有効範囲が感覚の続く限りとするなら、俺の有効範囲は……」

スキルなしで技術を発動させる。【支配者の杖】や【暴君の目】を発動させれば射程も増えるだろうが、それでは意味がない。スキルを使うのは、どうしてもそれを行わなければならない時だけだ。あれは、封印が掛かっているだけに、身体への負担も大きい。

手のひらを猫の額に当てた。に、と片目を瞑る猫が眩しそうに俺を見上げる。艶のある茶髪を撫で、ふむ、と頷く。

ぺしん、と猫の額を叩くとにゃ、と軽い悲鳴が上がる。

「この車内なら、お前のこの、狭い額程度だろう。車内は≪法の剣≫の人員で詰まっているしな」

「へ？　そんなもん？」

正確には、俺の手のひらの範囲だ。猫が【超直感】スキルを利用して技術を使用しているのと違い、俺は、使用はともかく認識の方法が違う。このような空間では酷く狭い世界にしか効果を及ぼせない。

「そういうわけで、探索はお前に頼んだ」

「あー、うん。まぁいいけどさ。ちぇー、楽できると思ったのに」

ぶらぶらと俺の膝の上でごろごろにゃー、と言いながら猫は手すりに顎を乗せて、外を指差した。

「ま、この技術身につけてから、ちっと探索楽になったしね。ほら、運転手ー、正面の壁に突っ込んでよ。早速発見したからさ」

へ？　とこちらを振り向いて、T字路を左折も右折もすることなく突っ込めと言う猫に、驚いたように運転手役の黒服がこちらを振り返る。

にやり、と嗤って言ってやる。

「突っ込め。何かあったらこの猫の責任だ。なぁに、即死しなければ傷薬で復活させてやる」

「だってさー。まぁ、早く突っ込みなよ。そこの壁、恐らく、幻術みたいなもんで道が隠されてるからさ。ちゃぁんと道あるぜぇ。つーかおら、てめぇ、元の世界じゃ大日本帝国の兵隊だろうが、上司の命令聞けやぁ！　私がお兄さんに部下を監督できてないと思われるじゃねぇか！！」

おらおらぁ、と膝の上で文句を言う猫を手のひらで黙らせ、顎で運転手に突っ込めと示すと、黒服は渋々頷き、アクセルを思い切り踏み込んだ。

かくして、ビルの壁面に真正面から突っ込んだバスは、車体に衝撃すら感じることなく、その内部を通過し、続いていた道路の奥に隠された施設を発見したのだった。

【隠し施設を発見しました。都市領域が機械帝国から魔族側へ移行します。施設名は【下限冷却の森林地帯】。階層は五層。敵の属性は氷・木です。危険度は【塔四層】レベルです】

【施設情報を表示します。情報：魔界で食される凍土果実の栽培施

設。現在稼働中。魂の寄生した動力機関が存在します】

端末ログに目をやる。俺が魂の情報を入手してから、アナライズもログの表示方法を変えたのか、魂のある空間に入ると、寄生があるか否かを表示するようになっていた。

これもなんらかの操作を受けているのだろう。

魔族の領域や機械帝国という言葉も気になる。後で機械少女のディノメアに聞いておくべきだろう。

とはいえ、正面のビルを模した施設を見ながら心が躍るのを止める事はできなかった。

「二号、三号。準備をしろ。それと、今回は≪法の剣≫の戦闘要員がいるからな。楽ができるぞ？

くく、久しぶりに俺も大人数指揮をやってやろうじゃないか」

両腕を広げ、背後の黒服共へと歓喜を示す。支配者をやめた、なんて言ってるが、それはそれとして、こういうのは大好きなのだ。

人を動かし、武力で事を運ぶことってのはな。

幸村が、まるで俺の心がわかっているかのように、にやりと嗤っていた。

壱百玖拾玖～弐百

壱百玖拾玖／

うわぁ、と言葉が自然と零れた。目の前の光景はそれだけのものだったからだ。

「あいつらずっけくね？　サボってたんかなぁ」

「ずるいだのサボるだの適当を言うな。貴様の指揮が悪かっただけだろう？　というかむしろ……」

≪法の剣≫の白服、【戦塵眼下】の豪徳寺は私に嫌みを言いながら、隣でごつい顔を愉快そうに歪めていた。

私たちの目の前では、普通なら目を疑う光景が起きていた。しかし、それを起こしたのがあの連理貴久なら、驚くには値しない。むしろ呆れるというものだ。一体、どれだけのものを未だ隠しているのか、と。

「二号！　左のフォローに回れ。三号！　お前は連射してろ。アルファ、ブラボーは突っ込め！　チャーリーはその援護。デルタは背後を警戒しておけ、エコー、お前はそこで待機だ」

簡易的な呼び名を与えられた黒服たちが、もう獅子奮迅というか、まるで今までの彼らとは別人のようにガンガン動いていく。そりゃ私より全体見えてる人が指示してるのだから当たり前なんだろうけど、なんというか、”違う”のだ。

いつもより、二倍ぐらい早く動いてるのじゃないだろうか？　絶対に変なスキルが発動していた。

凍った木のモンスター【氷結した妖樹】が蜂の巣にされ、背後に

控えていた、人魂のような【氷精霊】が黒服の持った火炎を纏った刀で串刺しにされる。
直後に天井から襲ってきた、氷のカタツムリ【コールドマイマイ】がチャーリーによって射貫かれ、動きを止めたところで三号に蜂の巣にされた。そうして最後にこちらへと攻め込んできていた【アイスゴーレム】を中心として、二号の持つ、巨大な炎の大剣のスキルが発動し、焼却された。
あっという間に戦闘が終了し、ふぅ、と額の汗を拭ったお兄さんがこちらを向いた。
１０体以上いた、未知のモンスターたちは接触から一分も経たずに殲滅されていた。

「よぉし、片付いたぞ。二号、素材を回収しておけ。待機してた黒服共、フォックストロット以下は部屋内を探索しとけ。豪徳寺、お前、ついて行って指揮してろ」
「うっす、わかりました。タカぼんさん」
「猫、お前適当に俺の世話しとけ」

適当って、と呆れながらタオルとドリンク片手にお兄さんに歩いて行く。既に三号が用意していたのだろう。折り畳み式の椅子に座ったお兄さんはだらっと背もたれに腰かけると目を閉じた。
ここは【下限冷却の森林地帯】と呼ばれる敵側の施設だ。隠された入り口から侵入した私たちは、色のない通路を通り、倉庫らしき小部屋を見つけ、中に入ったところだった。
そして何故か倉庫内にわらわらと入っていたモンスターの大群に黒服や私たちが慌てる前に、お兄さんがさっさと黒服を立て直して、あっという間に鎮圧してしまった。
小部屋に嵌っている巨大な強化硝子の向こう側に並ぶ氷結した木々から目線を逸らし、ざくざくと巨大な蝸牛を解体している二号を見ながら私は問う。

「あのー、なんか攻略順調すぎません？　さっくさっく進みすぎというか。
　罠にも掛からないし、アイテムとか情報とか入った部屋ばっか見つかるし」

　私の【超直感】は基本的に危険や成功か失敗が、すごくわかる程度の代物だ。だから判断自体は私がしなければならないのでトライ&エラーは必須とも言える。痛い目に遭いにくいというだけで、外れを引くことも珍しくない。
　しかし、私が今、丁寧に汗を拭いているこの人は、適当に移動指示してるように見せかけて、その実、大当たりか超大当たりの部屋しか見つけていなかった。無駄な探索を一切していないのだ。
　現に黒服たちは忙しそうに室内にある、価値のあるものを櫃や台車に乗せている。コンピューター担当などは人数が足りないと叫んでいた。
　実はこの人、この施設の地図でも持ってるんじゃないだろうか？
　と疑いつつ聞いてみると、彼はどうでもよさそうな顔で私を見上げた。

「この世界に限らず、数多くの敵の拠点をそれなりに攻略してれば、大体の構造がわかるからな。大事なものを隠している場所ぐらい俺にもわかる。
　それよりＰＣ担当！　地図は見つけたか？」

　遠くからうっす、と叫び声が帰ってくる。人数が足りないと言っていた男だ。銀稜台学園コンピューター部出身とやらの彼は、女にもてない顔をしているが、電脳関連にすごく強いらしく、私も探索では重宝している。
　まぁ、その分、戦闘は苦手だが、俊敏や知能、硬度を強化してい

るらしく逃げ足と耐久力だけは高い。
お兄さんは立ち上がると、彼の所まで歩き、背後からＰＣの画面をのぞき込むとにやにやと嗤い、なるほどなるほどと言った。

「地図データを全員の端末に回しとけ。それと、休憩中のアルファからエコーまでの黒服連中は付いてこい。二号、三号、お前らもだ。この施設の中枢がわかったから、さっさと行って潰してくる。猫、白服と連携して調査と回収を続行しておけ」
「へ？　でもこんなお宝の山、いいの？　まだまだこういう部屋ありそうだけど」
「時間の無駄だ。ほどほどにしておけ。今日は後四つか五つ程度、こういった施設を回るからな。気になるなら後でまた来たらいい」

えー、もったいない、と内心で愚痴りながら部屋を見た。
棚の中には、なんか明らかに高価そうで貴重そうで、この施設にしかないようなアイテムがずらりと並んでいる。黒服が一生懸命回収しているが、まだまだいっぱい残っていた。
何日も施設の探索をしてる身としては、こういう部屋が隠し施設にそこそこあることを知っている。この規模の施設なら後３つか４つは存在するはずだった。
でもまぁ、放っておけと言われたらしょうがないので残った黒服どもに指示を出す。

「もったいないのでさっさと働け者どもぉおおおお！　おにーさんが戻ってくる前に、回収作業を終わらせるように！！」

というか正直、こういうモンスターがいっぱいいる施設を保持しておける気はしないので、たぶんここに来るのは今日が最後だと思うのだ。

弐百／

巨大な樹木に絡みつかれた豚頭の巨人。それがこの施設の最奥に居るモンスターだった。

【氷の冠を被った豚&妖樹氷菓（アイスキング・オーク　アイスキャンディー・クライシス）】

端末がモンスター名を表示する。先ほど部屋の前で倒したアイスゴーレムより巨大な敵の出現に黒服たちが足踏みをする。

「所詮敵は二体だ！　臆することはない。せいぜい気合い入れてけよ、お前ら」

俺が率先して、声を張り上げ、足を踏み出していく。黒服たちはそれだけで意気を戻し、各々武器を握る。

頷き、手を振り下ろした。

戦闘開始、と。

『ブモォオオオォオオオオオ！！』

豚巨人が叫びを上げながら氷の大剣を振り下ろし、巨人に絡みついた巨大な樹木が木々を伸ばしながら豚巨人の身体を鎧状に包んでいく。

「三号、スキル一発やっとけ！！」

【火炎銃ドラゴンブレス】、巨大な火炎放射器を構えた三号が武器を掲げ、突撃しようとする黒服たちの前に立ち。巨大な敵二体を射程に収める。

【【火炎銃ドラゴンブレス】搭載スキル【滅びの炎（エンド・オブ・デイズ）】を発動します】

ごぅっと小規模な破壊の炎が氷の敵を蹂躙した。
以前、ダリアにやられた俺たちと同じだった。武器搭載スキルは圧倒的だ。そして、対抗するには、盾なり鎧なり、防御スキルを持つしかない。
炎に焼かれながら、巨木の身体の一部が不可思議な力に光り輝く。
【【永遠の氷】搭載スキル【結晶の鎧（グラス・アーマー）】を発動します】
ピキパキと巨木と豚巨人の身体を氷の鎧が覆い、炎のスキルから身を守っていく。そして、豚巨人の方も氷の巨剣を振り上げ、
【【氷河≪オリエンタル≫】搭載スキル【永遠の鏡面（エターナル・フォース・ブリザード）】を発動します】
即死スキル特有の不快な感覚が全身を覆うが、探索部隊や俺、二号、三号は装備に即死耐性がついている。
だから、なにも効果を発揮しない。豚巨人が剣を振り下ろした際に、凄まじい冷気の風が発生し、その効果でＨＰが多少減少するだけだ。
相手がスキルを使ったことに驚きながらも、それならば、と俺は声を張り上げた。
「よぉし、≪法の剣≫武具開発部の成果を見せてみろ！！　お前ら、武具にスキルを搭載したんだってな！！」
「はい！」「うっす！」「わかりました！」「許可降りるの待ってました！！」
次々と声が返ってくることに満足しながら、俺は黒服たちに対して腕を振り下ろす。パラメーターＵＰを常に１０ＵＰで行っている

彼らには、ＳＰを大量に使用する武具搭載スキルを発動できるのだ。

「武具搭載スキル発動！　やれ！！」

大量の炎を纏った武具が、絶望に全身を染めた巨大なモンスターの身体へと破壊の嵐をぶちまけた。

弐拾壱～弐百弐

弐拾壱／

【【氷の冠を被った豚（アイスキング・オーク）＆妖樹氷菓（アイスキャンディー・クライシス）】を撃破しました。【下限冷却の森林地帯】は魔族の支配下から、中立地帯へと変更されます】

黒服たちが勝ち鬨を上げる。一瞬で終了した戦闘だが、ＳＰ１０消費クラスの武具搭載スキルを、直撃で七連続も喰らえば当然の結果だ。

あれだけの攻勢は塔の第四層フロアボス程度では耐えられないだろう。

しかし、と唇を歪める。搭載スキルの情報がなければ、こちらに重傷者が大量発生する程度には手強そうな敵だったことは確かだった。

強力な創氷属性を操る、大量のＨＰと腕力ステータスを持った巨大な敵。

それが二体も居たのだ、ここには。

上半身を消し飛ばされた豚と、根本から焼かれた巨木の解体に二号や黒服が走って行く。

俺は足下に転がってきていた氷の王冠を手に取り、眺めた。あの攻性スキルの渦の中でも破壊されないとは、なかなか特別そうなアイテムだが。

「こいつは……」

端末に登録したアイテム図鑑が早速、この王冠についての情報を吐き出してくる。

【ＮＡＭＥ：【氷竜王の冠】
説明：魔王世界古王期に討伐された氷竜の王の素材で作られた王冠。北方を治める王の元で代々受け継がれていたが、後の魔王戦争時代に散逸した。
付与スキル：【カリスマ（中）】【統率（中）】【創氷属性ダメージ無効】【氷属性ダメージ無効】【即死無効化】【凍結無効化】【ＳＰ小回復】【氷竜の刻印】【北方王の伝説】【フィールド（氷）のダメージ無効】
寄生情報：なし
搭載スキル：力強き凍土の王（配下に、五分間、硬度＋３００、ＨＰ＋６００のボーナス付与。スキル【創氷・氷属性耐性】付与。ＳＰ２００消費）
レアリティー：伝説級（売買不可）】

「なんだ、ゴミか」

ぽい、と投げ捨てると三号が大事そうに拾い、持ってきた櫃に積み込んだ。あんなもの後で黒服に拾わせれば良いものを、と思いつつも声には出さない。
さて、と辺りを見渡す。木と豚が居た辺りを見ると、樹林の管理用コンピューターを発見する。これでこの部屋や外の廊下にある硝子窓から見える、木々を管理していたのだろう。
近づき、小型の亜人用のキーボードを発見したので触ってみると、パスワードもＩＤも必要がないようで、俺でも操作できるようだった。もちろん魔物の言語だが、俺はきちんと理解できる。
カタカタと適当に触りながら、施設に蓄えられた情報を発見、情報端末に移しつつ、目的のものを発見した。
わざわざ俺が猫の探索についてきたのは、これを目的としていた。

【【下限冷却の森林地帯】の機能が停止しますが、よろしいです

か？】

ＹＥＳ、と躊躇なくキーボードを押す。ぷしゅん、と空気の抜ける音と共に、管理用コンピューターが沈黙する。

【予備電源に切り替わります。施設内の扉を全て開放します。樹林の管理が放棄されました。中核機関が露出します】

振動と共に、この広間の中央から何かがせり上がってくる。周囲の黒服がどよめきながら、作業を停止していた。

「いいから働け。武満とて承知していることだ」

というか、奴は奴で同じことをしているのだから問題あるまい。それに、きちんと分け前はくれてやるさ。

広間の中央からせり上がってきたのは、二メートルほどの大きさの透明なカプセルだ。その中に、銀色の筒が浮いている。これがこの施設の動力、【中核機関】とやらだろう。

念のために、端末でアナライズすれば、

【魂名【氷結地帯】です。【水銀フラスコ】に保存されています。現在開放状態です。【氷結地帯の鍵】を使用するか、種族：人間に寄生させることで、肉と魂を原料にして、神器【氷結地帯】を作成できます】

「……人間限定、なのか？」

「……」

三号が俺を見ているような気がした。それになんでもないと手を振ると、カプセルを開放し、フラスコを取り出すと三号に手渡す。

「大事に保管しておけ、後で武満と所有権を決めるからな」

こくりと口だけの肉の顔で三号が頷き、それを見送りながら俺は呻(ウナ)る。

何かがわかりそうな気がしたのだ。しかし、情報が足りない。やはり勇者側から話を聞くか、それとも機械帝国側から話を聞くか。

俺は首を振りながら、解体途中の豚へと歩いて行った。

ちなみに豚が持っていた大剣と妖樹の身体に埋まっていた装飾指輪のどちらもが、そこそこ貴重なアイテムだったが、魂を燃料とする武具ではなかった。

それと、豚と妖樹の肉や部位は、フロアボス補正があったのか、塔五層クラスの素材との事だった。これも後で武満と分け合うことになるだろう。

弐百弐／

「……そろそろさぁ、なんか異常を通り越して、笑えるようになってきたんだけど」

「よかったな。次、俺が付いてくるときはトラック三台追加しとけ。いや、コンテナ車の方が良いか。

荷物持ち用の人員を追加……、ああ、解体要員も欲しいな」

「いやいやいや、嫌味だってわかれよぅ……」

途中の施設で手に入れた、度が入っていない眼鏡を掛けたお兄さんは、手に入ったアイテムの目録（即座に黒服に作らせたのだ）を捲りながらペンでチェックを入れていく。

バスの中、通路を挟んだ隣の席で、入手した情報を打ち出した紙を眺めていた豪徳寺が意外につぶらな瞳を細めながら、ごつい顔で言った。

「はっはっは。まぁタカぼんさんのやることですからな。うちの大将相手に渡り合っている人です。これぐらい当たり前でしょう。むしろ、儂らより探索効率が悪かったら、情けなくなるとこでしたな。はっはっは」

ほれ、幸村、ヌシもさっさと仕事せぇ、と言われて私は納得できない気持ちで、豪徳寺が寄越してきた書類を捲り、乱雑にプリントされた情報を分類分けしていく。

「つーか、今日だけで大型の施設七個もっすか……。ぱねぇっすよ。おにーさん」

黒服だけ連れてボスを倒し、施設の動力を停止させたとはいえ、大量の収入があった。背後に連なるトラックに積み込まれたモンスターの素材や、施設で入手できた大量のアイテムや装備品の山。あれも途中で呼び出した車だ。何度も往復させている。それに攻略の終わった施設には、今頃、武満に忠実な黒服が詰め込み、アイテムを回収している頃だろう。

というか絶対にそういったアイテムはこちらに回ってこない気がするのだが、この人はいいのだろうか？

しかし時折、三号が手元に抱えている銀色の筒や、施設のボスが持っていた何やら強力な力を秘めてるっぽい指輪を眺めながら彼はにやにやと満足そうな笑みを浮かべるだけだ。

「そういえばさー、おにーさん」

「なんだ？」

「いや、今日の施設だけどいくつか、なんかおかしくなかった？」
「おかしいも何も、俺が探索に参加するのは初めてだろう？」
「あー、うん」

隣の豪徳寺に顔を向けると、奴はお前が言えと言ってくる。まぁ、そりゃそうだけどさ。あいつが聞いたら≪法の剣≫が貸しを作ることになる。

とはいえ、今すぐ聞いておかないと聞くチャンスはなかなかないので私は問いを発した。

どうせ駄目なら駄目で答えないだろうし。

「いや、魔物とか普通でるわけないと思うんだけど。なんでモンスター出てくるわけ？　いつも私たちが相手にしてたのって、機械とかだったんだけど」
「あ？　そうなのか？」

豪徳寺がこくりと肯定する。タカぼんさんは顎に手を当てると、なるほどと頷いた。

「お前に与えた技術のせいで、今まで侵入できなかった施設に入れるようになったわけか」
「へ？　技術？」
「技術を使用して探索したのは今日が初めてだろう？」

あ、うん、と頷く。それは、そうだ。でも技術？　超直感を使用したときより、わかりやすくはあるけれど。というか、確かに、幻術っぽいのを見破ったのは今回が初めてだった。普段ならもっと物理的に、執拗に入り口が隠された場所ばかり探索していたし。何よりそれらは、きちんと、探せば見つかるような施設ばかりだ。

どうでもよさそうにタカぼんさんは私を見ると、ふむ、と頷いた。

「ならこいつらは、猫じゃないと今のところは見つからない訳か……」

手元のアイテム欄を見て呟く彼は、おい、と三号に声を掛ける。

すかさず三号がおにいさんに手渡したのは、管理が放棄され、数日中に朽ちるだろうと思われる、【下限冷却の森林地帯】でしかとれない、氷結りんごとやらだった。

しゃくしゃくとそれを口にする彼は、うまいな、と一言言うと、白背広の豪徳寺を見ながら言った。

「その辺り、お前らはどう思う？」

「う……。しかし、人員はこちらが出してますんで」

「そうだな。そうだなぁ。お前らを俺はクレジット出して借りてるが、確かにお前らがいなきゃ効率的な探索はできないわけだ。

しかし、クレジット出して借りてるくせに探索物の半分はお前らにもわけてやっている。

この辺り、俺達って、持ちつ持たれつだよなぁ？　俺はそう思ってるが、お前らはそう思ってないのか？」

「……何が言いたいんですかい？」

彼は飾りに過ぎない眼鏡を指であげながら、呟いた。

「さっきの施設跡で入手したアイテムは６：４で許してやるよ。こちらが６、お前らが４だ」

「いや、儂らが労力掛けて探索してるわけですし……」

「そろそろ≪支配の杖≫の連中も、育ってきてるぞ？」

むぐぐ、と豪徳寺が呻る。呻るが、いや、別にお兄さん、育ってるならうちらはうちらで勝手にやればいいじゃないの、と口にはし

ない。
　邪魔すると後で怒られそうだったからだ。
　豪徳寺は、タカぼんさんの無言の威圧に、怯えながらも、巨大な図体をこちらに寄せて、言う。
　その言葉には、多くの困惑が含まれていた。

「なぁ、タカぼんさん。あんたも大将も一体、何を考えているんですかい？　最近のあんたらは、少し、わけがわからない……。
　勇者だの、魔王だのとわけのわからない会話もそうだが、お互いがお互いの領分や縄張りを侵しつつも、争い合うことだけは本気で回避しようとしてる。
　そのくせ、こういうときに変ないちゃもんはつけてくる。それでも、こちらも相手も損にならない、いや、タカぼんさん、アンタ、一方的に引いてないか？　もっと奪えるはずなのに、アンタだけでも公平にしようと動いてないか？
　別に、≪支配の杖≫の連中で勝手に探索しても、儂らは儂らで探索は行える。なのに、なんで利点を生かそうとしない？
　正直、そこの幸村ほどうちらは探索に長けちゃいないんだ。日に、隠れた施設を三つも見つけられればこっちは良い方だ。
　それなのに、アンタは、まるで一人で資源を占領することを拒否してるような……」

　お兄さんはどうでも良さそうに白服の話を聞いていた。目が、興味を持っていない。この人はこの人で考えがあり、だから白服の言葉を無視するような態度で聞いている。
　でも、と思う。
　確かにこの人は、本当に≪法の剣≫を出し抜ける場所で出し抜こうとしていない。
　武満は裏でいろいろやっているというのに、組織としての活動をタカぼんさんは全てオープンにしている。現に、武満との報告会で、

≪支配の杖≫としての活動は正直に語っていた。この人が個人的に隠していることは除いてだが。

そう、この人はいつも、武満に対して、フェアだった。

ふと、気づく。……、連理貴久という人間は、本当の所……。

（この人って、もしかして、誰かと争うことは得意でも……、もしかして、誰かと友好的な同盟を組んだことがない？）

動きに遠慮が見えた。動きに戸惑いが見える。そして、武満に対して、いつも一歩引いたような態度が物語っていた。

こういう人を私は知っていた。武満法行や、譲原九十九のような……。

……急に、タカぼんさんが可哀想な人に見えてきて、私は呟いてしまう。

「おにーさんってさ、敵は多かったけど。友達、いなかったでしょ？」

あ？　と間の抜けた顔で彼は私を見た。

弐百参

弐百参／

「何故、幸村は尻を押さえているのだ、タカぼん」

軍司令部の一室。いつもの武満の執務室での会談だ。肉人形を背後に置き、ソファーに座っている俺の隣で、俺に躾けられたために、小さな尻を手で擦っている幸村がソファーに座れずに立っていた。

「うぅ、言うんじゃなかった」と涙目で呟いている。

「知らん。後でお前の部下にでも聞いておけ。

で、だ。俺達の探索後にお前らが持って行ったアイテムの配分だが」

「等分にわけてあげよう。なぁ、タカぼん」

……、沈黙が軍司令部に降りる。鹿島は何も言わない。武満の腹心であるあいつは状況を理解している。

しかし、隣の幸村や壁に並ぶ白服連中は目をぱちくりさせていた。

「だから、次からも、そこの猫（ユキムラ）にうちの連中を使わせてやるんだな。タカぼん。

くれぐれも、≪支配の杖≫が一人で資源を抱え込まないように頼むよ」

「わかってるさ。こっちも黒服の戦闘力と人数は魅力的だからな。

それより――」

探索における人数や、装備について話が移っていく中で幸村が俺を見ながら、何故、という顔をしていた。

武満がこちらに譲ったように見えたのか。それとも俺がごねて、つり上げなかったことを驚いているのか。

まさか、あいつ視点では友人を持っていない俺達が、お互いを不器用にも尊重していると思っているのか。

――答えは、そのどれでもない。

俺達はお互いがお互いを勇者に対する防壁として機能するように仕立て上げているが、都市内のリソースを独占し、自らだけが肥え太ることを考えてはいない。

それは、それだけは行ってはいけない。盾は、頑強でなければいけない。なおかつ自らも力を持ち、敵を撃退できるだけの力を持たなければならない。

故に、十分な資源が手に入る状況ならば、お互いに分け与えて良いと考えている。

俺達は飢えた獣ではない。アイテムや素材を独占しようとは考えていなかった。

俺は、武満法行には、なるべく盤石の体制を築いて欲しいのだ。

そして、武満も連理貴久の勢力が肥え太りつつも、自らを凌駕しないことを望んでいた。

だから武満の申し出を特に疑いもせずに俺は受け、武満は武満で俺の刺した釘である、アイテムを独占するな、という言葉に真摯に対応したのだった。

もちろん俺から言い出さなければ、武満は資源を渡すことを考えもしなかったろう。

相手が差し出してくれると考えているなら、差し出さないのが俺達でもある。

「――さて、と。それじゃあ、本題に入るか」

三号が、机の上に魂の入った水銀フラスコを並べる。その数は五つ。攻略した施設の数と一致しない。

魂を動力としていない施設が二つあったために、その施設では手に入らなかったのだ。

しかし、続けて三号が並べたのは、指輪、小刀、盾の三つの武具。そのどれもが、性能的には【氷竜王の冠】には劣るだろう。だが、どれもが魂の寄生した、貴重なアイテムだ。

今、この都市ではあのようなものとは比べようもない価値がある。

「さて、取り分はどうする？　というか、あの機械帝国人はどうしたんだ？　最近見ないが」

「ん？　ああ、あれは軍司令部を歩き回っている。聖女の魅了スキルにやられたんだろう。ついて回っているよ」

「よく平気でいられるものだな……」

「まぁ、魅了耐性が付くか、正常な個体が補充されるのを待つことにするさ。あれの上司は、どちら側だかはわからないが」

ふと気づく。そういえば武満は、配下への魅了耐性付与スキルはなかったはずだ。そう考えれば、もう≪法の剣≫という組織自体は……。

「お察しの通りさ、タカぼん。割と下位層の職員が今、魅了スキルで食い散らかされている。

幹部には魅了耐性装備を配布しているし、重要な職員はなるべく守っているから持っているが。というか、君の所の内藤、いるだろう？」

ああ、と頷けば武満は馬鹿らしそうに鼻を鳴らした。

「あれの後援会、いや、ファンクラブとやらか。それが≪法の剣≫

内部にできている。
なぁ、タカぼん。私の堪忍袋は、割と広いと思わないか？」
「……魂の取り分は、こちらが三でいい。五つは持って行け」
魂の入った容器を俺が指で指し示すと、遠慮無く武満はフラスコを四つ、そして小刀を手に取り、鹿島へと渡した。
残ったのは、盾と指輪と、フラスコが一つだ。俺は手に取り、三号へと渡す。
内藤の件について、すまん、とは言わなかった。ただ態度で示すことにする。思えば、アリスの件でも武満には譲って貰っていた。
感謝と謝罪を込めて、そこそこの性能のある、【氷竜王の冠】を投げ渡す。俺には無用だが、部下が多い武満ならば有用だろう。そこそこには。
「ついでに持ってけ。俺には必要ないからな」
アイテム鑑定を即座にした武満が眉を顰めた。
「なんとも限定的なアイテムだな……。まぁ、装備の足しにはなるだろうし。ありがたくおまけとして頂いておこう」
そういえば、とアイテム情報を眺めていた武満が口を開いた。
「アイテムの等級といえば、あれがいただろう？」
「あれ、というと？」
「開発部でタカぼんに纏わり付いていた研究員だ。確か名前は――」
言われてそういえば、と頷きを返した。≪法の剣≫の開発部には一時期、龍郭院や内藤のコスプレの件で世話になっていた。
今は原に開発をやらせているが、あいつはスキル付与や性能の向

上ばかりを求めていて、デザインの方には見向きもしていない。
組織には必要だが、つまらない奴だった。

「名前は確か、古田と言ったな。そいつがどうしたんだ武満？」
「そいつが、伝説級だの、神話級だのといったアイテムの蒐集を懇願していてな。
正直、うちとしてはそれほど重視していないんだが」
「俺もだな。大体」

と、俺は【氷竜王の冠】を指差した。

「等級が、確か、神話級、伝説級、英雄級、武勇級、一般級だったか。その中で、英雄級以上のアイテムが備える固有（ユニーク）スキルの解析と複製は不可能だったはずだ。
武具自体の複製も、素材が特殊すぎて、不可能だしな。技術的には、できそうなんだが」
「ああ、古代竜（エンシェントドラゴン）の骨だの、吸血鬼（ヴァンパイア・ロード）の王の牙だの用意できる気がしない。
それならまだ、複製できる一般アイテムや高価な売買可能アイテムの方が数を揃えられて役に立つ。私やタカぼんの趣味の品ならともかく、部下の装備は統一してやりたい。各人が自前で武具を揃えるなら勝手にもさせるが。不公平はしてやりたくないな」
「そうだな。で、古田がどうしたんだ？　それだけじゃあるまい？」
「古田がな、≪法の剣≫から独立して、武具開発を独自でやると言い出してるんだが。どう思う？」

武満の言葉に、俺は静かに首を振った。

「必要だと思うか？」
「正直、思わない。だが、な。私たちの趣味にはちょうどよさそう

なんだ。
　タカぼん、古田を引き受けないか？　君の所は、ちょうど武具のデザイナーがいなかっただろう？
　独立は私も流石にどうかと思うが、君ならきっと好き勝手やらせるはずだ」
　おいおい、と思いつつ、俺は唇をつり上げた。
「古田か。趣味はあれだが、腕は良い。だがいいのか？　あいつ、腕だけはいいぞ？」
「古田は協調性がなさすぎる。それにこの前、開発部の予算を使い込んだんだよな。あいつ。
　しかし腕だけは良いからな。≪支配の杖≫に放逐するという名分で、処分はなくしたい」
「固有種（ユニークモンスター）、施設ボス関連の骨やら皮膚やらの素材を全部貰っていくがいいか？　うちなら人員も少ないし、行き渡るとはいかないが、不公平は出ないはずだ」
「ああ、構わない。こちらで特別なアイテムを作成してもあまり意味はないしな。その変わり、消耗品を大目に貰おう」
　そうして、武満はくるくると【氷竜王の冠】を指の間で回すとこちらに放ってきた。
「古田に渡してやってくれ。良い品を創れ、とな」
　俺は両手を掲げ、それを受け入れた。
　そうか、古田が来るか……。それは、実に素晴らしい。

弐百肆

弐百肆／

「ミサキ、こっちにいるって」
「ありがとう、アリスちゃん。でも、こっちは開発部でしたよね。なにか用があるのかしら？」

タカぼんさんが帰ってきていると報告があったのでアリスちゃんを連れて宿屋の中を回っていたところ、開発部にいるとのことで向かっていた。
甘利さんは、外で荷物運びの仕事。あの娘はあの娘で頑張ってるし、そろそろ何かできる事をタカぼんさんに示さなくちゃならないんだけど……。
良い所として、頑張り屋なところ、素直に私の言うことを聞くところ。ちょっと忘れっぽいけど最近はメモを取るようになったし、不器用なところも一生懸命なところがカバーしている。
パラメーターを上げてるから、たぶんそのうち人並みには働けるように……。

「ミサキー？　どうしたの？」
「あ、うん。なんでもないですよ。
とりあえずタカぼんさんに、貴方のいろいろを聞かなくちゃ。働きたいんですよね？　アリスちゃん」
「うん。書類仕事なら実家でやったことがあるから、教えて貰えればそういうのできるし」

金髪碧眼の、白い肌の少女は、てくてくと軽快に歩いて行く。その歩き方は自信に満ち、≪法の剣≫でリンチに遭っていたとは思え

ないほどの輝きに満ちていた……。
いいえ、と首を振る。その仕草はきっと、ここが安全だと思っているからだろう。
タカぼんさんがアリスちゃんを私に任せてくれたなら、その信頼に応えなければならない。変な真似をする人がいたら、護ってあげないと。
うん、と頷き、開発部へと歩を進め、そうして私は扉を開き、

「タカぼんさん！　マジぱねぇっす！　洋ロリ！　洋ロリ！　アリスちゃん！！　銀稜台の天使たる銀髪美少女、南雲副会長！　銀稜台生徒会長、≪支配の杖≫の人間椅子！　龍郭院会長！！　いやぁ、すっばらしいですなー。秘書モード敷条殿も素晴らしかったですがここもなかなかです。
ああ、タカぼんさんもイケメンすぎて素敵ですよ。アッシはなんだかんだと男も女もいけますからね！　洋ロリ！　アリスちゃん！
ひゃはッ」

ガリガリの白衣青年を唖然と見るアリスちゃん。私も思考停止しそうになったが慌てて己を取り戻すと。
とりあえず腰の剣、女剣ヴィシュヌに手を掛け、タカぼんさんに目線で問う。

――斬って良いですか？　というか、斬りますね。

「まぁ、待て。内藤」
「ありゃ、南雲副会長。お久しぶりです。銀稜台学園高等部萌え電脳研究会会長の古田です。
いやぁ、奇遇ですなぁ。というか、会長も副会長も召喚されて銀稜台ガッタガタですな。アッシはすっげぇ嬉しいですが、異世界召喚ですよ。異世界召喚！　ついでにＳＦ！　ファンタジー！　魔族

だの機械文明だの心躍る展開です。素晴らしい！　マーヴェラス！！」

「古田……。ああ、あの怪しい活動をしていた……」

「怪しいって酷いですね。富士樹海の封印を解く研究とか、古い神の電脳化とかいろいろやってたんですけどね。

まぁ、そのへん、アッシ理解して貰おうとは思ってなかったんで、っつぅかタカぼんさんも武満さんもマジ理解者ぱねぇっす！

いひひひひ、ネタ装備！　実用品を超えるネタ装備！　いやぁ、楽しいなぁ嬉しいなぁ！」

富士、樹海？　と言われて思い出す。ああ、伝承学部とか、天文部とかと組んで怪しいこともやってたんだ、この人。両部の部費使ったり、学園祭でえっちな漫画の本を売ったりしてお金稼いだりして……。

銀稜台の品位を一人で落とした奇人、古田野兎（フルタ　ヤト）君。

「タカぼんさん、なんでこの人、ここに……？」

「ん、ああ。≪法の剣≫武具開発部の研究費を使い込んだのがバレてな。うちに放逐されてきたんだ。割と使えるぞ」

「なにせ、アッシ。見ただけで婦女子のスリーサイズがわかりますからな」

バカですか？！　と叫ぶ前に、古田君に興味津々のアリスちゃんを背に隠し、私自身も腕で身体の線を隠す。

古田君は、見えますぞー見えますぞー、そんなことをしなくてもアッシには丸見えですぞー、と丸眼鏡を爛々と輝かせて、私たちの身体をなめ回すように、というところでタカぼんさんに後頭部を叩かれていた。

「そこまでにしておけ。それで依頼の品はできてるんだろうな？」

「ああ、あれですか。タカぼんさんも退屈な仕事を回してきますね。まぁできてますが」

と、そこで奥から白衣を着た色黒の女性がやってくる。原さんだ。

「なんだい？　アタシ以外にもいろいろ任せられる奴が来たっていうけど、もうなんかやらせてたのかい？

つーか作業やらせる奴が増えて、楽になっていいけどさー。アタシの仕事場荒らすんじゃないよ。えっと、古田だっけか？」

「美人の同僚ですねぇ。いっひひひ。

まぁ、そっちもアッシの機材に触れないでくださいね」

「っと、こいつが頼まれたものです」と古田君はタカぼんさんに何かを渡していた。

それを受け取ったタカぼんさんが総帥服の内ポケットにある何かの機械に差し込み、端末を弄り、何かを確認すると満足そうに頷いた。

「早速、幹部服に搭載してくれ。良い出来だ」

「お褒めにあずかり光栄です。んで、アッシはこれから何をすればいいんで？」

「固有（ユニーク）スキルの解析をしたいとか聞いたが？」

「ああ、あれっすか。あれは――」

「なんだいなんだい、面白そうな話じゃないか――」

話し込む二人に話に加わる原さん。

三人を見ながら手持ちぶさたな私は、制服の裾を引っ張られ、背後を見ると。

「楽しそうだね。タカヒサたち」

「楽し……？」

ガンガン意見を言い合っている三人を見ながら首を傾げた。

まぁ、楽しそうだけれど、原さんと古田君は仲が良さそうには見えなかった。

（……？）

ふと、視線を感じ、開発部の奥を見ると、黒髪の少年が見える。

白衣を着ているが、原さんのように≪支配の杖≫のエンブレムの入った、シャツを下には来ていない。

「原さん」

「ん？　なんだい？」

「彼は？」

指を差すと、開発部の奥へと消えてしまう少年。彼を見た原さんはめんどくさそうに表情を歪めた。

「ああ、宿屋の前でゴミ漁ってたから、使えるかなぁと思って拾ったんだけどねぇ。

つか、手先は器用なんだけど、ちっと頭の方が鈍い。捨てるか迷ってるとこさ。名前は……、なんだったか」

頭をガリガリと掻く原さんに、ＰＣを触っていた研究員の人が「関です。原さん」、と助け船を出す。

それに、ああ、と頷いた原さんが「関だってさ」と言い、また古田君との会話に戻っていく。

タカぼんさんを見れば、関少年を見て、唇を愉快そうに歪めると、

「正社員待遇で開発部で使ってやれ。二号、制服と部屋の鍵、それと給料だのを持ってきてやれ。おい、お前」

二号が開発部から出て行く。それを見ながら「今日の業務が終わったら渡してやれ」とタカぼんさんがさっきの研究員の人に言う。

私は「甘利さんには厳しい癖に……」と自然と呟いていた。なんとなく最近は理由がわかっているのだけれど、それを私が認めると甘利さんちょっとどころじゃなく、可哀想なことになりそうだった。

「甘利か。あれは奇跡的までに何もできない要素が揃っているからな」

「……そこがよくわかりません」

「わからないから、いいんだ。わかってなお構ってやるなら、お前は致命的な馬鹿だからな」

む、と頬を膨らませかけ、仕方なしにため息を吐いた。いずれこの人には甘利さんの凄さを……。うーん、と首を傾げ、凄いところをまず私が探す方が先だということに気づき、がっくりする。

そんな私を尻目にアリスちゃんが白いドレスを揺らしながらタカぼんさんに話し掛けた。

「タカヒサ！」

「ああ、アリスか。どうした？　うん？　不自由があるならなんでも言えよ。内藤に用意させるからな」

珍しく純粋な笑顔でアリスちゃんの頭を撫でるタカぼんさんを見て、子供には甘い人だなぁ、と感心する。というか、この人にも甘い部分があるということに驚きながらも、話を邪魔せず、黙っていると。

「不満はないわね。ミサキは優しいわ。あ、そういえばさっきの機械はなんだったの？　カード？　チップ？」
「ん、ああ。機械が気になるのか？」
そういってタカぼんさんが総帥服の内側から取り出したのは、二枚ほどカードを入れるスロットのある、薄い機械だった。
「まだ実験段階だが、これを装備した人間のスキルを一部封印するシステムを構築していてな」
「封印？　スキルって自分に有利なものじゃないんですか？」
驚いた私は思わず口を挟んでいた。タカぼんさんは、私とアリスちゃんを見ながら唇を歪め、「いいや」と言った。
「お前にはいずれ話すが、今は時機じゃない。とはいえ、今の状態じゃ、焼け石に水だしな。もう少し改良をしたら、必要な人間に配ることにする。そのときに話そう」
タカぼんさんは、そう言いながら、機械を手に持ち、言った。
「これの存在をお前はいずれ自分で求めてくるだろう。なぁ、内藤。まだお前は、夜に夢を見ていられるのか？」
深い、深い目で私を見るタカぼんさんに、私は何も言えず。
――南雲・アーリアライト・美咲。この距離なら連理貴久を殺れますよ？
夢から抜け出し、ついに自分で自覚できるようになった声が、耳元で囁くことを無視し、無理矢理に笑顔を作った。

以前から聞こえ、私の身体を、感情を、意志を、乗っ取ろうとする何者かが、私の中にいる事実を、無視し。

「夢は、もう見なくなりました。眠るときはぐっすりです」

「そうか」

タカぼんさんは笑顔でそう言い。私の頭を愛おしそうに撫でるのだった。

この人に言えば、この声をなんとかしてくれるのだろうか……。

しかし、……。タカぼんさんの命を狙っている者が私の中にいる、などという話をこの人に言って良いのだろうか……。

拒絶は、しないと思う。

だけれど、拒絶されることを思うと怖くて、私は口を閉じるしかなかった。

この人に限って、それはないと思いながらも、その可能性を考えるだけで、口が重くなる。

何より、私は未だこの人に、私の口から私の本名を告げては居ないのだ……。

信頼を勝ち取るには、私には隠し事が多すぎた……。

「ミサキ、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。アリスちゃん」

そんな私を、何かを見透かしたような目で、金髪の少女が見ていた。

弐百伍

弐百伍／

【ＮＡＭＥ：【≪法の剣≫幹部服】
説明：≪法の剣≫幹部専用の白背広。定期的に性能の向上が試され、今では販売されている最上級の防具に近い性能になっている。
　未だ神話級や伝説級には劣るものの、≪法の剣≫武具開発部によって、いずれ同程度の性能にまで向上される（予定）。
付与スキル：【魅了耐性】【即死耐性】【ダメージ軽減（中）】【出血防止】
寄生情報：なし
搭載スキル：【リンク】≪法の剣≫幹部服を着ている人間との通信を常時行える。
レアリティー：【一般級】】

【ＮＡＭＥ：【≪支配の杖≫幹部服】
説明：≪支配の杖≫幹部専用の青い制服。≪法の剣≫武具開発部がつい先日まで連理貴久に依頼され、作成していた。≪支配の杖≫のエンブレムが刺繍されている。
付与スキル：【魅了耐性】【即死耐性】【ダメージ軽減（小）】【出血防止】【継続ダメージ値１０軽減】
寄生情報：なし
搭載スキル：【統制されし集団】仲間との連帯感が向上し、指示に対する反応が早くなる。
レアリティー：【一般級】】

「と、まぁ。現在こんなところっすね。副会長は何か質問ありますか？」

並べられたアイテム情報。それは現在、私が着ている制服と、≪法の剣≫で使われている白服の物だ。搭載スキルがついたのは随分最近のことだから、これは最新の情報だろう。

今、私、タカぼんさん、肉人形二体、古田君、アリスちゃんの四人と二体は、古田君用に用意されたデスクで、武具の作り方について聞いていた。

アリスちゃんがどういう風に武具を作るのか聞きたがったのだ。

アリスちゃんが強請（ネダ）ったためか、タカぼんさんも古田君も特に反対もしなかった。だから、みんなで何故か古田君の講義を聞いている。

古田君はリズミカルにＰＣを操作しながら、言葉を続けていく。

「両組織の幹部服は、今んとこ、カリギュルラの皮が基本素材ですねー。それに、コンプトゥスの羽毛とバルヘロナの旗を使ってます。あとは、フェアリーの魔力袋って奴ですか。魔法スキルを使うときに必要なエネルギー源ですね。それ使ってスキル発生のエネルギー担当をやってもらってます」

「モンスターの素材だけで作ってるんですか？」

首を傾げ聞くと、彼はいいえー、と言いながら私の制服を指差し、

「機械部品も結構使ってますね。というか、魔力袋はナマモノなんで、機械使って鮮度保ってるんよね。なんで、品質落ちる前に整備とかしてやってくださいな。魔力袋は消耗品になってますけど、ちゃんと説明書読んでます？」

「ええ、読んでます。整備もしてますよ」

ならいいです、アッシ安心しましたわ、と言いながら古田くんはまた説明に戻っていく。

「まぁ、服なんで防御力というか、そっちの方は金属鎧に劣りますね。
タカぼんさんの使ってる肉人形二号さん。あれの金属鎧なんかは、素材の方で受けるダメージ押さえてます。かなり優秀ですよ。
んで、まぁ、幹部服の方は服なんで防御力ないですからね。そういうわけで、魔力袋のエネルギー使って力場発生させて、ダメージ抑える形にしてます。これは≪法の剣≫の方と理論は同じですね。あっちと違ってこっちの制服の減少量が少ないのは、タカぼんさんに継続ダメージ……。
あー、具体的に怪鳥コンプトゥスの悲鳴ですね。あれについてはダメージ発生原理について、直接ダメージとはまた違う呪いのようなものなのでそれの軽減スキルの搭載を――」
「フルタ」
「なんだい？　洋ロリアリスちゃん」
「長いわ」

つまらなそうに椅子に座りながら、ぶらぶらと足を揺らすアリスちゃんを見ながら古田君は、「了解。三行だね！　アッシ頑張っちゃうよ！」なんて言っている。
それをタカぼんさんはコーヒーを飲みながら、興味もなさそうに聞いていた。
この人は今、何を考えているのだろうか。
古田君が「フェアリーマジすごい。優秀。エネルギー源」と適当に三行で説明した後、

「で、話戻るけど。つまり、性能としてはどっちが良いとか悪いとかじゃないってことだね。
同じ素材使ってるんだから当たり前なんだけど、スキルの搭載ってのもまた面倒で、えー、爪だの皮膚だの機械部品だのとの兼ね合

いと、素材で発生できるスキルやプログラムの方で搭載させられるスキルなんてのもまた理論値と設計の方の計算が必要で――」
「古田」
「あ、はい。なんですかい？　タカぼんさん」
タカぼんさんが彼に差し出したのは、一対の指輪だった。
「わーぉ」と古田君が目を見開く。

「うっわー、すっげー。ティンダロスの両眼じゃないっすか。うわぁ、神話級アイテム！　実質これだけにしか入ってないと言われる亜空間スキルによって大量のアイテムを重さを感じることなく運べる超絶アクセサリー！
タカぼんさんが持ってるとか聞いてないッスよ！　僕！！」
「量産できるように、解析はできるか？　こいつのは、素材由来のユニークスキルらしいが」
あー、と古田君はそれを手に持ちながら、ぽりぽりと頭を掻いた。
「ムリっすね。アッシはショップで売ってた分厚い武具辞典の方でこいつの詳細は把握してるんですが。
完全にスキルの発生を素材の性能に頼っちまってます。現在手に入る機械部品じゃ亜空間を発生・干渉・維持できませんし。
ぶっちゃけ空間作用系は制御難しいんで、どうにかして発生させても、同じ空間を維持する、さらにそこをいつでも干渉可能にするとか、マジ人類の科学力だのなんだのを魔法ＳＵＧＥＥＥって感じで超越してるっつぅ感じっすね。
一応、攻撃スキルの最上位に、空間切断なんてものがあるらしいですが、っていうかこの前生身でやってませんでした？　ここの人」
「譲原は規格外だから気にするな。
で、空間に作用する魔法だのなんだのはないのか？　スキル情報

だの、魔法情報だの。
　魔法を扱うための、魔導書なんてのも≪法の剣≫は手に入れた、なんて情報がこっちには入ってるぞ？」
「んー、魔導書っても、攻撃魔法だけですよ？　サンダーだのアイスだのファイアーだの。しょぼい奴だけで。
　ぶっちゃけ、搭載スキルで攻撃（ブッパ）した方が破壊現象起こせます」
　タカぼんさんは、首を傾げた。
「攻撃スキルだけ？　回復魔法だのなんだの、ＲＰＧゲームで出てくるようなものはなかったのか？」
「ありましたけどねー」
　古田くんはどうでもよさそうに言った。
「アイテムで十分代替可能なレベルの代物です。どうしても術者の技量と才能によるものですね。
　そもそも、アッシが欲しい蘇生魔法（ザ○リク）や移動魔法（○ーラ）なんかは影も形もありませんでした。
　というか、結界魔法とか解呪魔法とか、そういうのの情報がこの都市ってないんですよね。呪いの概念は有る癖に」
　首を傾げながら古田君が言う内容に、タカぼんさんが天井を見ながら、いえ、窓の外の、偽物の空を見ながら言った。
「……、なるほど道理で。これが戦闘力はあるのに、魔法の概念がない世界の人間が呼び出されるわけか……」
「タカぼんさん？」
「古田。確認するが、攻撃魔法と簡単な回復魔法しか、この都市では発見できなかったんだな？」

「あ、はい。そんな感じです。まぁ、搭載スキル使えば破壊に限った、限定的な現象は起こせますが、こちらから干渉するにも、素材だの制御だのが独特すぎて、理論の解析には一年以上時間掛かりそうな奴ばっかですね。

まぁ、理論がわかっても干渉させるための機械部品だの魔物素材は存在しませんから、解析するだけ時間の無駄でしょうが」

「ああ、わかった。ありがとう」

私やアリスちゃんが首を傾げる中、タカぼんさんは古田君からティンダロスの両眼を返して貰うと懐にしまい、次にずるりと、空間に空いた穴に腕を突っ込んで、剣とドレスを取り出した。

「……、えっと、目が悪くなったかな……」

私がぱちくりとタカぼんさんの行動を見ていると、タカぼんさんがどうでもよさそうに説明してくれる。

「ん？　ああ、ティンダロスの両眼はこうやってアイテムを収納してるんだよ」

「タカヒサ……？　これって」

「ん、ああ。ダリアの装備だ。アリスには、記憶は残っているか？」

「……、うっすらとね。でも私の中には記憶しかない。意志や、心はもう、ない」

アリスちゃんが哀しそうに語る言葉を私は理解できなかった。古田君も同様らしく首を傾げ、しかしその目はタカぼんさんが取り出した武具の方に向いている。

タカぼんさんは、アリスちゃんの頭を優しく撫で、そうして古田君に手に持ったドレスと剣を渡した。

「【毒剣≪ヴェノム≫】と【漆黒のドレス】、どちらも強力な武装だ。アリスの身体に合わせてもらっていいか？　古田」
「へ、いいっすけど。アリスちゃん武装させるんですか？　こんな強力なアイテムで？
　目録に載ってたから性能わかりますけど、ぶっちゃけ今の幹部服より強力ですよ。武器だってタカぼんさんが現在使ってる品と大差ありませんし」
「いいんだ。俺が持っているより、相応しい」

　複雑な顔でアリスちゃんがタカぼんさんを見て、そうしてため息をつくと、ぴょん、と傍の椅子の上に器用に立ち、

「……え」

　タカぼんさんの頭を抱きしめ、愛おしそうに撫でるのだった。
　そうして、アリスちゃんはタカぼんさんに言葉を掛けていく。

「ダリアは、気にしてなかったよ。むしろ、託したことを誇りに思ってた。
　だから、タカヒサ……。タカぼんは、私にもうちょっと厳しくてもいいんだよ？」
「俺は、ダリアをお前に重ねてはいないよ。アリス」

　タカぼんさんは、アリスちゃんに撫でられたまま、だけれど決意した顔でまた空間に穴を空け、魔物の素材らしきものを取り出す。
　それは、密閉された袋に入った、毒々しい素材だ。

「その剣とドレスの持ち主の、素材だ。
　これで武器の強化ができるなら、使ってやってくれ」

そう言ったタカぼんさんの頭を、アリスちゃんは優しそうな、年相応に見えない、大人の表情で撫でるのだった。

弐百陸

弐百陸／

北海道、修学旅行時の自由行動で訪れた、一件の料亭で、【節制（テンペラン）の青（ス・ブルー）】と彼女は言った。

連理貴久が、ただの豆腐屋の倅（セガレ）でしかない田辺少年と、北の大地で海の幸を堪能しているときに、彼女はその言葉でスキルを発動させた。

「へ？　えっと……、比翼さん？」

「シャーラップ！　田辺君。

友情かぁ。すっぱらしいんだけどなぁ。タカぼんさぁー。田辺君ばっか構い過ぎじゃね？」

「比翼心、お前は何をしたいのだ？　俺と田辺君は、今、食事中……お、煮えてきたな」

「学生らしく、タカぼんとデートをしたいのです！　って、無視すんな！！　私は蟹より重要じゃないってか！！　糞ぅッ」

節制の青ぅううぅぅ！　と腰に手を当て、腕を上げ、人差し指をぐっと天井に向ける心。

ぽかん、と蟹の足を片手に彼女を見る田辺。そうして無視して、ばきん、と蟹の足を折り、鍋に入れていく貴久。

「ほら、田辺君。蟹、食べ頃だぞ？　食べないと」

「へ、あ、ああ。うん。でも、いいの？　彼女。他のお客さんの迷惑になってない？」

「そもそも田辺君が比翼心も連れて行こう、なんて言わなきゃ迷惑なんか発生しなかった」

「い、いや。むくれないでよ。可哀想だったじゃない。貴久に無視されると彼女なんか哀しそうな目でじーっと、見てくるんだし。ほ、ほら、それに比翼さんほど美人の女の子がいれば華やかかなーって」

料理店の座敷の一室でこそこそと田辺と貴久が話合う中、心は腰に手を当て、天井へと指を向けたまま、止まっている。

皿に並べられた無数の蟹の無機質な目だけがそんな彼女を見ており、心は何も起きないのがわかると、こほんと、咳をし、すごすごと座布団に腰を下ろした。

「流石タカぼんね。私がデートしたがるのを見越して、本当の友情で結ばれた友人を連れているなんて！！

ちなみに【節制の青】はタカぼんの支配を一発で解除する対連理用のデヴァイススキルなんだけど適当に今、名前つけたわ！」

「デヴァイススキル？　また妙な事をごちゃごちゃと。

つーか、何をしたいのだ己は！！　俺は今、田辺君と蟹食ってんだよ！！　黙ってお前も蟹食え蟹！　最高級品だぞ！」

「デートを！　したいのです！　タカぼんといちゃいちゃしたいの！　しーたーいーのー！！

赤煉瓦とかでいちゃいちゃしたーい！　手を繋ぎたーい！　腕組みたーい！！　あと蟹は私も食べる！」

こ、こいつは、と額を抑えながら貴久が額を抑え、蟹の足を手に取った彼女に呆れの視線を送った。

最強の魔王と勇者を傍らに、連理本社ビルへと襲撃を掛けてきた比翼心は、貴久の在籍する高校に転校し、その後は何をするでもなく、貴久と学生らしいことをしたがっていた。

田辺はそんな彼女を見ながら、蟹の足をほむ、っと食べ、首を傾げた。

「貴久、行ってくれば？　僕はもう午前中、貴久と遊んだし。ああ、でもちゃんと夕方の集合時間までにホテルに戻ってこないと先生心配するからね。比翼さんが美人だからって変なとこ行っちゃダメだぞ？」

「い、いや。俺は田辺君と今から硝子作りに行くはずじゃ？！」

「田辺君！　流石田辺君！　豆腐屋の息子！　空気読んでる発言してるわよ！

さぁ、タカぼん。デートしましょう！　一緒に遊びましょう！！　こんな超絶美人な私とデートできるんだからすっごい運いいわよ！」

「比翼さんは確かに、美人だけど。なんか貴久のイケメンと同じ臭いがするなぁ。残念イケメンと残念美人だよね。二人とも」

田辺が鍋に手を伸ばし、蟹の足を取りながら言う。

比翼心に手を取られた貴久は、慌てて心の手をふりほどきながら、

「だから俺をタカぼんと呼ぶな！　くっそ、蜜美との約束がなきゃお前なんぞ……」

「あら？　私なんぞ……？」

いつでも、殺せる。そんな台詞を口にしようとした貴久が、少しだけ躊躇した。

……きっと、殺せない。この生き物を殺すには、いくら戦力を並べても無駄だ。それは、彼女が貴久の支配を打ち破れる能力を持っているからではなく――

「なんでもない。それより、田辺君と一緒ならお前と一緒に遊ぶことも吝かでは」

「いーやー、ロマンチックに二人っきりで遊びたーい！　ほら、蟹

の中身、タカぼんが食べやすいようにしてあげるからさ！！」

さかさかと器用に蟹の身を小皿に出していく比翼心を見ながら、貴久は、先ほどの感覚を反芻するように確かめていた。

殺すには、足りないものがある。殺意だけでは無駄。意志の強弱も関係なく、比翼心を殺害するならば、必要な物は――

（この女が、自ら死にたいと思うこと、か……？　いや、そうだ。観測外の場所で自殺させれば蜜美の約束とは関係なく……）

それは、それをさせることは、当時の連理貴久にとっては難しいことでもなんでもなかった。

だからこそ、必然的に、貴久は比翼心と共にいることを許し、彼女との関係性を深めてしまい。故に、連理貴久は、全てを失うことになったのだ。

かつての出来事である。

弐百漆／

「比翼心か、何者だったのじゃ？」

「管理用デヴァイス、比翼心。魔王や勇者よりも上位の存在。世界監視用の端末の中でも上位存在……。そして、」

かつての俺の敵だ、と俺は続けた。

白い空間に、俺と魔王ウェンディサークはいた。懐かしい記憶だ、と思いながら、ウェンディサークに言う。

「俺をここまで弱体化させた女だよ」

手のひらを握る。俺は、かつてのように、誰彼かまわず殺せる人

間ではなくなってしまっていた。
命の感触。そして、人間の持つ感情というものに対して敏感になっていた。
いや、それは本来人間が持つ物だ。それを自覚させられてしまったのだ。
敵を殺すことに躊躇はない。しかし、かつてのように、熱心に行うことなどできなくなった。
支配者としての俺が終わらされてしまったのだから。

「だが、気分は悪くない。
こんなことに巻き込まれていなかったらな」

屈辱だが、それでもよかった。そう思わせられる程度にはあれは魅力的な敵だった。

「理解しがたい、とは言えんが。ああ、主（ヌシ）の記憶。これを探り、進めていけば、主のその感情の根幹にたどり着けようしのぅ」
「まだ見るのか？　お前、少しは遠慮しようって気はないのか？」

テーブルに身を乗り出し、角を握ると、ウェンディサークが「いいじゃろ、暇なんじゃよ。寄生もできておらんしな。主を屈服させる楽しみもない」と言い、頬を膨らませる。
仕方なしに俺を手を離し、テーブルの上のコーヒーを啜った。

「わかってるさ。それより、聞きたいことがある」
「なんじゃ？　なんでも聞けば良い。知ってることなら教えるぞぇ」
「なら、四層ＩＤについてだが」
「うん？　あれかえ？　ＩＤ番号そのものを教えて欲しいわけかの？」
「ああ、いい。俺が知ってると不自然だ。そういうズルはよくない。

なにより、不正規手段で入手するなら、敵の背後が殺しに来るだろう。それは面倒だ。だから、内容の確認だけでいい」

頷いたウェンディサークに俺は問う。

「四層のＩＤは、寄生対象の開放手段を取得できるＩＤでいいのか？　俺は機会帝国から聞いているが、塔にそういうものがあってもおかしくないと思うんだが」

「それは五層じゃの。四層は、結界、解呪以外のユニークスキルの解析を可能にするＩＤじゃな。五層攻略程度なら、魂の寄生を開放しなくても装備スキルだけで十分だしのぅ。何より、覚醒した勇者なら鼻歌交じりで歩いて行ける。

で、こんなこと聞いてどうするのじゃ？　さっさと八層までたどり着かんと、負けるぞ？」

「ん、ああ、塔か。あれな。俺」

俺は呟くように、攻略は≪カラミティ・ブルータス≫に任せる、と言った。

ぽかん、とウェンディサークが俺に問い返す。へ、という顔だった。

「あれに、あれらに任せるというのか？　あのちっぽけな裏切り者に率いられた連中に？」

「あれが一番熱心だ。俺や武満は勇者の殺害という目的があるしな。だから塔は≪カラミティ・ブルータス≫に任せる。

どちらにせよ、四層から先はうちも人員が揃ってからじゃないと面倒だ。ダリアのように、自殺してくれる奴がフロアボスとは限らない。まだ、攻略できない。

だったら、≪カラミティ・ブルータス≫に任せてもいいような気もしてくる」

装備やステータスUPアイテムが揃っていない≪カラミティ・ブルータス≫には情報交換でアイテムを渡しているが、それでも奴らでは、今、この時期では上に行けない。

時間が必要だろう。それに、もうすぐこの都市の連中は、塔などに構っていられなくなる。自身の保身すら捨てて塔の天辺を目指している≪カラミティ・ブルータス≫以外。

魔王が何故、という顔で見ていた。

「これも、勝利のため、かの？」

「盤外に立たないとダメなんだよな。その為には、一度、盤上から消える必要がある。

その為の、内藤と猫だ。出るだけなら簡単だが、戻ってくるのが難しい。その為に、俺はわざわざ面倒な手順を踏んでいる。

運命を覆し、物語の中からただひたすらに強い者を殺すのは、恐らく、不可能だろう。比翼心に俺が負けたように、だ。

故に、運命を覆せるのは、盤外からの一手」

かつて、俺が殺してきた魔王と勇者たち。

彼らに勝利できたのは、俺が優秀だったからではなく、やはり、あの世界が、奴らのために用意された舞台ではなかったからだ。

故に、奴らとは違う物語を歩んでいた俺が、俺の物語で殺害できた。

運命に対抗するには、一度、この物語から脱出しなければならない。

故にこそ、だ。嗚呼、俺は一度この都市を地獄に叩き落とす必要がある。

手の震えを誤魔化す。蜜美との約束を、破ることになるかもしれない。手は打っておくが。これぱかりは俺でも予測がつかない。

「なるべく、できる限りのことはするさ。
その上で≪カラミティ・ブルータス≫には、塔攻略を担って貰う。
あれを生かしてきたのは、まさにこのためだった。
いろいろ理由はつけてたがな」

とはいえ、援助をするつもりはない。
奴らには、奴らの意志だけで昇って貰わなくてはならない。
天辺へ。天上の舞台へと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5348v/

大人になれない英傑殺し - The repetition of the wand of the ruler 4 -

2011年10月2日15時06分発行